

# 【完結】魔法少女、クビ になりました

守次 奏

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

【一行でわかるあらすじ】

一度世界を救って心を病んだ最強の魔法少女が記憶喪失の少女と出会って、もう一度鬱ゲーみたいな世界を救うお話。

【真面目なあらすじ】

新星暦75年、地球連邦政府は飛来した未知の侵略体、通称「敵星体」に既存の兵器で太刀打ちする術を持たず、内宇宙にまで進出した人類の時代は突如として終わりを迎える。奇しくも同時期に「星の悲鳴」に応えるかの様に出現した、人智を越える力を行使できる「魔法少女」と呼ばれる存在、その中でも最強の力を持つ少女、小日向結衣の

奮戦により、呼称「赫星一号」は地球への落下を免れるが、払った犠牲は決して少ないものではなかった。

それから3年後、新星暦78年。人類は束の間の安穩を手にした中で、「赫星一号」の破片及び戦った七人の魔法少女——「原初の七人」から得られたデータを元に「魔法」の絡繰を一定レベルまで解析、「呪術回路」として科学の領域にまで落とし込み、量産化することに成功する。3年前とは比べ物にならない軍備、戦力——そして、「赫星一号」の破壊により、不倶戴天の敵である「敵星体」の襲撃もまばらになった世界に、過ぎたる力である魔法少女の居場所はなかった。ほとんど一方的に除隊を通告された結衣は、その帰り道で払われた犠牲に想いを寄せつつも、街中で行き倒れていた記憶喪失の少女、スティアと出会う。金色とも銀色ともつかない髪の毛と、覗く角度で色が変わる不思議な瞳を持つスティアとの生活は、戦いに乾いた結衣の日々に彩を与える。

しかし、それこそが新たな破滅の嚆矢であるとは、誰一人として予期していなかった。

ドレスの仕立てを覚えたことで、私たちが哀れんでくれた魔法使いはいなくなった。残されたのは、偽のドレスとガラスの靴だけ。十二時の鐘が鳴るのが先か、奴らの全てを滅ぼすのが先か。誰も、何も、知ることはなく、少女たちはただ、再び地獄を戦い続けるのだった。

※小説家になろうにも「魔法少女、クビになりました」世界を救った最強の魔法少女ですが、代わりの兵器ができたとかで休暇を言い渡されたのもう好きにやっつけていこうと思います」というタイトルで投稿しています。

# 目次

## 第一章「魔法少女、クビになる」

- |     |                  |     |
|-----|------------------|-----|
| 1.  | 魔法少女、クビになる       | 1   |
| 2.  | 魔法少女、謎の少女を拾う     | 8   |
| 3.  | 魔法少女、謎の少女と言葉を交わす | 16  |
| 4.  | 魔法少女、回想する（上）     | 23  |
| 5.  | 魔法少女、回想する（下）     | 30  |
| 6.  | 魔法少女、打ち明ける       | 40  |
| 7.  | 魔法少女、観艦式を見る      | 47  |
| 8.  | 魔法少女、服を買いに行く     | 53  |
| 9.  | 魔法少女、戦鐘を聞く       | 60  |
| 10. | 魔法少女、その代替兵器      | 67  |
| 11. | 魔法少女、舞い降りる       | 74  |
| 12. | 魔法少女、無双する        | 81  |
| 13. | 魔法少女、その事後処理      | 89  |
| 14. | 魔法少女、涙を零す        | 96  |
| 15. | 魔法少女、来訪者         | 104 |
| 16. | 魔法少女とマジカル・ユニット   | 112 |

185	2 5.	魔法少女と変容する世界	
	2 4.	魔法少女、復隊の条件	176
168	2 3.	魔法少女、その願いの在り処	
160	2 2.	魔法少女、閃光の果てに	
	2 1.	魔法少女、再び	152
	2 0.	魔法少女、立ち向かう	144
	1 9.	魔法少女、立ち上がる	135
128	1 8.	魔法少女と佐渡ヶ島奪還戦	
	1 7.	魔法少女と蠢く思惑	120

233	3 1.	魔法少女と持ち帰った戦果	
	226	3 0.	魔法少女と物言わぬ帰還
	217	2 9.	魔法少女と「第三世代」
		ク	209
		2 8.	魔法少女とダンジョン・アタック
		201	
		2 7.	魔法少女、束の間の安らぎ
		ク	
		第二章「魔法少女とダンジョン・アタック	
		2 6.	魔法少女、軍に戻る
			193

3 2.	魔法少女、再始動	—	241
3 3.	魔法少女と作戦会議	—	249
3 4.	魔法少女、出撃する	—	257
3 5.	魔法少女と迷宮探索	—	265
3 6.	魔法少女と迷宮攻略	—	272
3 7.	魔法少女と迷宮仮説	—	280
3 8.	魔法少女と迷宮決戦（上）		
287			
3 9.	魔法少女と迷宮決戦（下）		
295			
4 0.	魔法少女と迷宮踏破	—	304
4 1.	魔法少女、帰還する	—	311
4 2.	魔法少女と「研究室」の主		
5 0.	魔法少女と対策会議	—	386
4 9.	魔法少女、結ぶ絆	—	378
4 8.	魔法少女、歌唄う	—	369
4 7.	魔法少女、休暇中	—	361
353			
4 6.	魔法少女と取り戻した日常		
344			
4 5.	魔法少女と不可思議な夢		
第三章「魔法少女、その敵は」			
335			
4 4.	魔法少女、安らぎのひとつき		
4 3.	魔法少女と移ろう世界	—	328
320			





	6 8.	魔法少女と調査結果	—	529
	第四章 「魔法少女アポカリプス」			
	6 9.	魔法少女と背負うもの	—	537
	7 0.	魔法少女と悪夢の胎動	—	545
	7 1.	魔法少女、食卓を共に	—	553
	7 2.	魔法少女、月明かりの下で		
561	7 3.	魔法少女と隠された秘密		
569	7 4.	魔法少女と厄災の日	—	577
	7 5.	魔法少女、戦火に立つ	—	585
593	7 6.	「魔法少女クラウディア」		
	7 7.	魔法少女と人理の堡壘	—	602
	7 8.	「魔法少女アナスタシア」		
	610			
	7 9.	魔法少女と一つの勝利	—	619
	8 0.	魔法少女、暁に出撃す	—	627
	8 1.	魔法少女と暁の戦い	—	636
	8 2.	魔法少女の定められた滅び		
644	8 3.	魔法少女とエリュシオンの使徒		
	8 4.	魔法少女と劫火の竜	—	651
	8 5.	魔法少女、死線を超えて	—	659
667				

9 3.	魔法少女、一つの決別	—	728
9 2.	魔法少女、逃げ場なし	—	721
			713
9 1.	魔法少女と突きつけられた宣告		
第五章 「魔法少女、朝を呼ぶ」			
9 0.	「さよなら魔法少女」	—	706
698	8 9.	魔法少女と束の間の勝利	
690	8 8.	「魔法少女アポカリプス」	
681	8 7.	「魔法少女アンジェリカ」	
	8 6.	魔法少女と紫電の龍	—
			674

	9 4.	魔法少女と轟砲一閃	—
			735
	9 5.	魔法少女と新たななる危機	
743	9 6.	「魔法少女三上美柑」	
	9 7.	「魔法少女アリス」	
	9 8.	魔法少女、朝を呼ぶ	—
			769
	9 9.	魔法少女と明日への約束	
777	1 0 0	「魔法少女、クビになりました」	
			786

# 第一章 「魔法少女、クビになる」

## 1. 魔法少女、クビになる

「……除隊、ですか」

「平たく言えばそうなるな」

地球連邦軍極東管区総司令部、その一部屋として割り当てられた無機質な空間に佇んで、小日向結衣は椅子に腰掛けていた青年へと、放たれた言葉を確かめるように復唱する。

新星暦78年。かつて地球に訪れた危機は去り、かつての安穩を取り戻しつつある時代において、結衣のような存在は不要だ、という一方的な通告だった。

かつて、魔法少女と呼ばれる存在がいた。

豪華で絢爛なドレスに身を包み、人類が有する通常兵器では太刀打ちできなかつた「敵星体」と呼ばれる存在を華麗に、可憐に屠っていく人類の英雄。

少なくとも、表向きはそう喧伝されている。

ならばどうして表向きだということを結衣が知っているのかと問われれば、その答えは自明であり、彼女こそが3年前——新星暦75年に勃発した「赫星一号」と呼ばれる

敵星体の親玉を撃ち落とした、「原初の七人」と呼ばれる魔法少女の一人であるからに他ならない。

別に、連邦軍をクビになること自体は結衣にとって何か感慨があるわけでもなかった。

地球に安穩が戻ってからというもの、大気圏で破砕した「赫星一号」の破片から生み出される敵星体の襲撃は依然として続いていた。

だが、その規模は本丸が健在だった時、地球へと降下してきた数とは比べものにならず、一時期国土の一割まで生息圏を狭めさせられた人類は、この3年で実に三割以上の国土を奪還、狭苦しい地下都市ではなく地上で暮らす者も出始めている程に、地球は平和を敵星体の手から取り返しつつある。

その絡繰がなんであるかについて、結衣は全くといいほど知らされていない。

あの忌まわしき星が撃ち落とされた日から、魔法少女は英雄から実験動物モルモットへと身を窺すこととなり、一日の大半を「ラボラトリー」と呼ばれる区画で過ごし続けていたのだから、この3年で何があったのか、そしていかなる経緯で自分がクビになったのかなど、想像もつかないのだ。

「まあ、悪いものじゃない。君たちは本当に……本当によく戦ってくれた。だからそういう意味での休暇も兼ねている」

司令部の一室に腰掛ける、少佐の階級章をその肩と胸に抱く青年、諏訪部進は、曖昧な笑みを浮かべて、結衣へとその理由を説明した。

少なくとも用済みになったから捨てるだとか、そういう理由でないことは確かであったものの、結衣たちに与えられる休暇に政治的な理由が絡んでいることは確かであったし、それを伏せて伝えることが、諏訪部の口から語れる限界であったこともまた確かなのだ。

およそ少佐という階級には見合わない年頃——二十代の中頃、といった外見の諏訪部がその椅子に座っているのもまた、ひいては忌まわしき「赫星一号」のせいだということに尽きる。

「休暇、ですか」

「そう、休暇だ。君たちを……振り回してしまったのは本当に悪いと思っている。おれ一人が軍全てを代表できはしないが、せめて一人の軍人として、あの戦いに関わった者として、頭を下げさせてくれ」

諏訪部は軍帽を脱いで結衣へと頭を下げるが、その行為に結衣が何か関心を持つたとか、感情を露わにするだとかいったリアクションは期待していない。

魔法少女は、取り分け「原初の七人」の生き残りは擦り切れすぎていた。

3年前の「赫星戦役」と呼ばれるようになったあの戦いは人から、人間を人間たらし

める心を奪い取るのに十分なものであったし、現に結衣だけではなく、生き残った軍人たちの中にも、消えない心の傷を負ったまま除隊を願い出たものは大勢いる。

「休暇……」

結衣は与えられた猶予を反芻するようにもう一度その言葉を唇の端に乗せて静かに呟く。

事実上、クビになること自体はどうでもよかった。少なくとも、ここでモルモット紛いの、魔力放出試験だけで一日を潰すという退屈極まるルーティーンから解き放たれるのならば、それは幸いなことだ。

ただ困ることといえば、食事のランクが一等落ちることだろうか。

3年前の悪夢から解き放たれたことで、合成食の質にもようやく人類は気を遣える程度の余力は取り戻していたが、質の高い合成食や旧世紀の遺物として死蔵されていたレーションが優先的に割り当てられるのは今も昔も変わらず軍人の特権のようなものだった。

結衣は、食べることについては人並み程度の関心がある。

殺伐としていない、本物の小麦に近い食感を残した揚げパンが食べられなくなるのは名残惜しいものの、国土奪還作戦が自分たちを抜きにしても上手くいくなら、上層部の意向に従うというのも悪い選択ではないように、結衣には思えた。

それでも懸念があるとすれば、あの日散っていった「原初の七人」——その内四人の死が脳裏をちらつくことだろう。

衝動的に込み上げてきた吐き気を堪えて、結衣は反射的に口元を押さえる。

「……君たちは本当に、本当に……よく戦ってくれたよ。だからもう、いいんだ。戦わなくて……」

諏訪部の懺悔は甘言のように優しく結衣の耳朶に触れるが、脳裏に染み付いた幻影までも消し去ることなどできはしない。

ならば、ここを去れば少しは変わるのだろうか？

冷静な思考を脳が出力するのに追いつかず、結衣は指の隙間から吐瀉物をぶちまけて、熱病に喘ぐかのように肩で息をしていた。

誰がどう見ても、小日向結衣という少女は、最早限界が近いということとは明白だった。「……ごめんなさい、部屋を汚してしまって」

「いや……いいんだ。ともかく、除隊届にサインをしてくれば、それで全ての手続きが終わる」

必要なことはこちらで処理しておくからな、と諏訪部は付け加えると、まだ顔を蒼白に染め上げている結衣へ、書類とペンを手渡して除隊届にサインを促す。

そこに裏はない。そこに打算や妥協はない。ただ、連邦政府の思惑があるという事実

に同じような吐き気を覚えながら、震える手で署名欄に「小日向結衣」と記された除隊届を諏訪部手にすると、やり切れないとばかりに一つ、溜息をついた。

救国の英雄、救世の乙女だと噂されていたところで、結局のところ小日向結衣も、彼女のお仲間である生き残りも、年端もいかない少女たちであるということに変わりはない。

それを戦場へと送り出してきて、今も新たに生まれ続ける「魔法少女」を戦術単位に組み込んで、国土の奪還に奔走している連邦軍の何と情けないことだろうか。

だが——その時代はもうすぐ終わる。

一つの核心と共に諏訪部は、その瞳に強い意志を宿しながら、結衣が胃の中身を吐き出し終わるまでその背中をそつとさすり続ける。

あつてはならないのだ、こんなことは。

繰り返されてはならないのだ、こんなことは。

だからこそ——連邦には、今の地球には、なりふり構わない「力」が必要なのだ。

例え誰かから後ろ指を刺されようと、石を投げつけられようと、断固として敵星体から地球を奪還できるだけの力が。

諏訪部の瞳には、最後の実験体である結衣が退去したことで空になったはずの「ラボラトリイ」に轡を並べた「かの兵器」の姿が、闘志の炎と共に爛々と輝いていた。



かくして、魔法少女小日向結衣は、あつけなく青春を過ごした地球連邦軍極東管区司令部を後にすることが決定された。

住居も地上に確保され、食料の配給も優先的に受け取れるという特権を手にしても尚、結衣の胸の内にはぼつかりと穴が穿たれたようだったものの、それは時が癒してくれることだろう。

そう自分に言い聞かせていなければやっていられなかったし、言い聞かせていても、耳鳴りや吐き気が治ってくれる様子はない。

結衣は、3年前と比べてすっかり厳めしい見た目になった司令部を一瞥し、いつの間にかスーツケースに詰められていた私物を引きずりながら、無感情にその敷地を後にするのだった。

## 2. 魔法少女、謎の少女を拾う

地球連邦軍極東管区総司令部を後にした結衣は、指定された住所に向けてスーツケースを引きずっていた。

用意された一軒家は、主である結衣以外を待つてはいない。

両親は自分が「星の悲鳴」を聞いて魔法少女となる前、「敵星体」に食い尽くされて無惨な死を遂げていれば、「星の悲鳴」を同じく聞いたはずの妹は、魔法少女になりながらも慢心が、油断が元であっさり死を遂げた。

タイプ・クツキー以上の個体が有する「爪」を飛ばしてくる攻撃は、魔力障壁を集中させていなければ防ぐことはままならない。

妹は、芽衣は勝利に浮かれて、両親の仇を討つことに浮き足立って、結果として、トドメを差し切っていないかった敵星体の攻撃で呆気なく命を落としてしまったのだ。

それからだった。結衣が戦場においてある種の冷徹さと諦観を持って臨むようになったのは。

ともすれば、今の今まで生き残れたのはそういう「幸運」があつたからかもしれないと考えて、結衣は自らの思考に吐き気を催す。

両親が、妹が死んだことのどこが幸運なのか。

(……ダメ、だよ……結衣……ちや……私、たち……地球を……パパ……マ、マ……)

かつて親友だった少女の末期の声は、今も雷のような耳鳴りとなつて鼓膜の裏に染み付いていた。

むしろ自分も、生き残るべきではなかったのではないかとさえ、結衣はそう思っている。

赫星戦役の折、瓦礫に埋め尽くされていたはずの東京は3年という月日を経ることで見事な復興を遂げていたものの、結衣にはそれが何か感慨を帯びるというよりも、どこか空々しく感じられてならなかった。

摩天楼のように空へと伸びるビルやマンションに住むことができるのは、軍人や官僚、そして一部の特権が認められた上流階級だけで、下層市民は未だにあの狭苦しい地下都市で、息を潜めて暮らすことしか許されていない。

守り通した3年間でこれか、と、吐き捨てたくなる気持ちを堪えてコンクリートで覆われた地面を歩いていけば、陰鬱な気持ちは紛れるどころか、むしろ余計に重々しく感じられる。

上を向いて歩こうと誰かが歌っていたが、空を見上げても思い起こされるのは天から降り注いだ災厄の記憶ばかりで、涙はどこを向いていようと零れ落ちるばかりだ。

表向きの復興を遂げた地上都市、それも東京一帯のみを辛うじて存続させることが一杯なものにもかかわらず、上流階級の連中と来れば、戦争が終わったかのように車を走らせ、呑気に談笑を交わしているのだからどうしようもない。

世界を救った英雄だと讃えられても、救世の乙女だと人々から呼ばれても、結衣の心にあるのは荒れた東京と燃える火の手、そして目の前で命を落としていった愛しい人々の幻影ばかりで、今こうして青空の下を歩いていることさえ、どこか他人事のように思えて仕方がなかった。

いっそ、あの車の前に躍り出てみればいいのだろうか、結衣は諦めじみた考えを抱いたが、そうしたところで死ぬのは車の方だ。

魔法少女には自決が許されていない。

あの時間いた「星の悲鳴」は魔法少女を生かすために、この地球を生かすために最善の選択を取り続ける。

それは即ち、変身できるものに害を及ぼそうとした者がいた時、自動で魔力障壁を展開して「ドレス・アップ」を行うというシステムが構築されているということであり、例えば結衣が生身で車の前に躍り出れば、展開された魔力障壁によって吹き飛ばされるのは自分ではなく車の方だ、ということだ。

もちろん、拳銃で自決を凶れば銃弾は弾き飛ばされるし、刃物でそうすることを選べ

ば刃は折れて、首を括ろうとすればロープが千切れる。

どこまでも合理的に、地球という星に従属させるシステムとして、魔法少女という機構は実によくできていた。

もつとも、この魔力障壁——変身の解号が守り通してくれるのは精々タイプ・クッキーまでであり、それ以上の個体に遭遇すれば、生身の時点で死を迎えるのだが、現状の地球において、タイプ・シヨコロータに匹敵する個体は確認されていない。

それがどうしてなのかを気にできるほど、結衣の心に安穩の二文字は残されていないかった。

擦り切れ、傷付き、ただ無気力に体を引きずった先に、とりあえずは帰る家がある。

ただ、それだけの話だ。

携帯端末が示す住所に向けて、結衣が肩を落としたまま歩き続けていたその時だった。

「わ……………つ……………!?!」

「……………つ……………!?!」

何かに引つかかったような感覚と共に、結衣は前へとつんのめり、転びかけたところを無理やりに踏ん張って、結衣は転倒を免れたものの、足を引っかけってしまった相手はそうもいかなかったようだ。

「痛い……………」

「すみません、大丈夫ですか？」

「大丈夫……………」 うん、痛い……………」でも、身体を動かすのに支障はない……………」だから、大丈夫……………」

自分の状態を機械的に把握するかのようになり、しかしながら、唇から何か歌を紡ぎ出すような透明な響きをもって、結衣が足を引つ掛けてしまった相手——白いワンピースを身に纏っている少女は、きよとんと小首を傾げながらゆつくりと身を起こした。

ふわり、と、銀色とも金色ともつかない不思議な色合いをした髪の毛から、粒子が舞ったように、結衣には捉えられたが、それが錯覚なのか現実なのかは判然としない。

だが、ただ一つわかるのは、この不思議な髪と、覗き込む角度によって色を変える瞳を持つ少女は、何故か地上区画で行き倒れていた、ということだけだ。

「貴女、名前は？」

「名前……………」人を見分けるもの？ そう……………」なら、わたしは、ステイア……………」ステイアは、ステイア。多分、そう……………」

結衣からの質問に、きよとんとした表情を浮かべたまま、ステイアと名乗った少女は相変わらず、風が吹き抜ける音を伴奏にして歌声を紡ぎあげるかのような口調でそう答える。

多分そう、というのがどういう意味なのかは結衣には図りかねることだったし、スティアの言葉は自分の発言を逐一検証しながら発せられているようで、そこに奇妙な違和感を覚えてもいた。

この特権階級しか住むことが許されていない地上区画で行き倒れていたのもどういう経緯なのか、まるでわかったものではない。

ただ、足を引っかけたままのものが結衣にはあって、尚且つ行き倒れを放っておくというのも気が咎める。

「スティアだったっけ、貴女、どこに住んでいるの？」

「住んでいる……？　わからない、スティアにはスティアって名前しか、わからない……」

「……記憶喪失？」

自分の名前以外覚えていない、という言葉は素直に信頼できるほど、結衣の心は無垢なものではなかったが、どうしてかスティアの言葉にはそういう無垢なるものが、人が人として生きることには抜け落ちていくものが感じられて、結衣は思わず反射的に問いかけていた。

戦傷やトラウマによって記憶喪失を患ったり、幼児退行を起こす人間は珍しいものの、存在しないわけではない。

それにしてもスティアの身なりは小綺麗で、およそ戦いという気配からは無縁そうなものであったが、どうしてかその言葉を素直に信じてしまうのは、存在が持つ力とでもいうものがそこにあるからなのだろうか。

本来であれば、自分がすべきことは連邦政府に彼女の身柄を差し出して、保護者を探すべきなのだろうが、結衣はもう軍属ではない。

「帰る場所がないの？」

「帰る場所……ない、スティアには……なにも、ない……」

「……なら、私と来る？」

おかしくなったのかと、結衣は一瞬そう思った。

言葉だけが先に走って、神経を張り詰めさせたような気分が、結衣の胸を満たして脊髄を指先でなぞられたかのように、ぞわりと背筋が粟立つ。

それは背徳であり、背信のようなものであったとしても、自らもまた特権階級なのだからと自嘲して、結衣はスティアと名乗る少女が困惑と共に差し出した手を取った。

「来る……どこ……？」

「……私の家。私、クビになったから」

「クビ……？」

「そう、でも家はある。貴女には家がない。合理的な選択だと思うけど」



「そう……ステイアは、クビがわからない……でも、家が、おうちが、帰りたい場所なのはわかる……だから……」

「結衣。小日向結衣。好きに呼んでくれていいよ」

「わかった……結衣、よろしく、ね？」

これで合ってるのかを確かめるように、辿々しく言葉を紡ぎながら、ステイアは気まぐれに差し伸べられた結衣の手を取って、ふたりぼっちの家路を歩むのだった。

### 3. 魔法少女、謎の少女と言葉を交わす

結衣のために用意された一戸建ての住宅は、官僚の子息であるとか高官のそれ、あるいは政治家の、ともかくにも上流階級でなければ与えられないほどのものだった。

あの忌まわしき「赫星一号」が飛来するまでは、東京という土地でなければ比較的質素な部類に入るような住宅であっても、今やそれも特権階級に割り当てられるものにカテゴライズされるほど、人類は疲弊している。

それにもかかわらず、連邦軍の上層部は軍備拡張にその予算の大半を割いているのは、感情的な批判こそ浮かんできても、ある種仕方ないと容認せざるを得ない事情があつたからだ。

人類は未だ、地球という星の国土、その三割しか奪還できていない。

確かに結衣は「原初の七人」の中でも最強の魔法少女として、「赫星一号」の破砕に成功しているが、その破片の大半は大気圏で燃え尽きることなく地球へと降り注ぎ、甚大な被害をもたらした——わけではなかった。

元々死に体だった地球の大地に、およそ人口と呼べるような人口は残されていないかつたからだ。

荒野と化した東京に、北京に、モスクワに、ロンドンに、ニューヨークに……「赫星一号」の破片は降り注ぎ、突き刺さったが、当時の人々が暮らしていた、そして今も下層階級の市民が暮らしている地下都市に被害が及ぶことはなかったのは、不幸中の幸いだったといえよう。

諏訪部から受け取っていた鍵を鍵穴に差し込んで、結衣はきよとんと首を傾げている。ステイアを、開いた玄関の中に手招く。

「どうぞ、何があるかわからない部屋だけど」

「わからない……？　結衣、このお家の人なのに、わからない……？　ステイアは、それがわからない……」

「今日引越してきたばかりなのよ」

ステイアの受け答えは、年の頃が自分と変わらないのにもかかわらず、やや感性に幼いところがあるな、と感じるのが結衣の正直なところだった。

とはいえ相手は記憶の大半を失っているのだ。

一概に記憶喪失といっても、あらゆるものを失うのか部分的に失うのか、脳機能的なものまで失うのかで大分事情が異なってくるとは、医療班で勤務していたかつての回復担当の魔法少女が口にしてのことだったが、結衣にとってその理解は曖昧なものではない。

ただ何となく、スティアは自分の名前と生活に必要な機能以外の全てを失っているの  
だろう、ということだけを辛うじて察しているだけだ。

本来であれば尚更、彼女は連邦軍に突き出すべきなのだろうが、それを勝手に拾って  
きて自分の家に招いているというのが、どういうことであるかぐらひは、いかに除隊し  
た身分であるとはいえ、自分にもわかつている。

不思議そうに小首を傾げるスティアが、壁を指先でなぞると、そこからさらさらと光  
る粒子が零れ落ちていくような錯覚を、結衣は感じていた。

「帰る家……お家……不思議、スティアは、あたたかい……」  
「そう、気に入ってくれて何よりよ」

軍から支給されたものだけどね、と付け加えると、当然のように家具が取り揃えられ  
ているリビングルームに足を踏み入れて、結衣はスーツケースを三人がけのソファへと  
放り投げる。

このご時世、誰が住むのを想定していたのかと問いかけたくなるほど、支給された邸  
宅は結衣一人にとっては広すぎて、スティアを招き入れたのは結果として正解ではな  
かったのかと、思わずそう信じたくなってしまうほどに、広い空間に一人で放り出され  
るというのは孤独なことだった。

軍を事実上クビになった理由はわからない。

ソファの左側に放り投げたスーツケースの隣に腰掛けて、結衣は目頭を覆いながら天井を仰ぐ。

事実上、初めて触れるものだからかステイアは家の中に配置されている支給品の家具を興味津々といった様子で観察していて、なんだか小動物を拾ってきたみたいだな、とそれを横目に見ながら、他人事のように結衣は考える。

事実上クビになったことに対して、怒りであるとか悲しみであるとか、あるいは困惑であるとか、そういった感情が自分の内から湧き起こってこないことは、不思議なものだった。

奇妙なほどに心の内は凜いでいて、スーツケース1個分しかない私物をどうしたものかと考えている自分の薄情さに、結衣はどこか他人事めいた驚きを感じていた。

だが、かといって軍に残りたかったかと問われれば、その答えが否であることもまた確かだ。

3年前の「赫星戦役」以降、前線を退いた結衣のお仕事は専ら、無数のケーブルに繋がれて装置の中で魔力を放出し続けるということだけだった。

それは穴を掘って埋め戻す作業のようなもので、役目があるだけマシだといわれても、未だ残党のように地球での活動が確認されている敵星体との戦いに駆り出されるよりは遥かに良いといわれても、退屈がもたらす苦痛は拭い難い。

犠牲は十分に払われたはずだった。

資本主義がもたらす汚濁と腐敗に塗れながらも、内宇宙にまで手を伸ばし、とうとう最後のフロンティアとして残された外宇宙へと人類が進出しようとしていた最中に現れたのがあの「赫星一号」であり、その道中にある文明の火を全て踏み消してきたのがその、恐怖の象徴たる彗星だ。

テラフォーミングが施された火星と、そこに駐留する太陽系軌道防衛艦隊は僅か一週間も経たず敵星体に蹂躪されて、しばらく留まった火星を拠点として地球への敵星体派遣を行ってきたのが、「赫星一号」の所業だった。

そこには声明も何も無い。

意図もわからないまま、理由もわからないままに人類は突如として侵略を始めた敵性生命体……かどうかも不明であるそれらに対抗すべく、地球という星が悲鳴を上げた結果生まれたのが、結衣たちのような「魔法少女」と呼ばれる存在なのだ。

地獄という言葉すら生温い地球上での戦いと、そして遣された者たちだけによる特攻作戦にも等しい地球圏絶対防衛線へと侵攻してきた「赫星一号」の突破作戦。

それら全てを括るのに、地獄では足りず、奈落では浅く、生き残ってしまった結衣に刻まれた心の傷、その深さは計り知れない。

だからこそ、無垢に振る舞うステイアの姿には、3年前に失ってしまった妹が、芽衣

がオーバーラップするようで、癒しと同時に傷口が腐っていくような感覚を、結衣に与えていた。

「結衣……泣いてる？ スティアは、何か……結衣に悪いこと、した？」

「……泣いてる？ そっか、私、泣いてたんだ」

「泣いてるの、結衣はわからない……？」

「鈍くなっちゃったんだよ」

涙なんて、とつくに涸れたと思っていたから。

スティアの無垢な言葉に返した結衣の声音は震えていて、まだ自分にも流せる涙が残っていたのだなあというどこか実感を伴わない感慨と、そして今になって瘡蓋の下から這い出してくる過去の犠牲が、結衣の両眼から色のない、透明な血液を滴らせる。

「……結衣、何があったの？ スティアにはわからない……でも、スティアは……結衣に拾われたから……結衣に、オンガエシ？ をしてあげたい」

「……ありがとう、スティア」

会ったばかりで、名前しか知らないような相手に話すようなことでもないような話なのは、結衣にもよくわかつている。

カウンセラーには幾度も話してきたことで、その度に答えが出ることもなく、医療班から支給された精神安定剤で誤魔化して前線に立ち続けてきたのが小日向結衣という

魔法少女だった。

世間に喧伝されるような、屈強な英雄などでは断じてない。最後まで絶望の中でも誇りを失わずに戦い続けたなど、真っ赤な嘘だ。

それは、軍の上層部に口酸つぱく言われたように、墓の下まで持っていき、永遠に黙っていないければいけないことなのかもしれない。

「……あのね、スティア」

そのはずなのに、結衣の唇はどうしてか言葉を先走らせ、舌先は孤独に耐えかねたかのように、過去を紡ぎ出していくのだった。



## 4. 魔法少女、回想する（上）

英雄は死んだ。勇者は斃れ、地に伏すこともなく漆黒の宇宙を漂う塵と化していく。

『怯むな、撃てーッ！』

『撃てえっ！』

轡を並べた地球連邦軍本星防衛艦隊が有する宇宙戦艦、その前衛艦隊が、主砲である陽電子砲を、眼前に瞬く赫き星から溢れ出てくる無数の「敵星体」——御伽噺か、そうでなければ遙か昔のアニメに出てくる怪物とよく似たそれらに向けて放ち続ける。

だが、星の法則を塗り替えて、内宇宙にまで手を伸ばした人類の指をへし折った彼らへと、その牙が届くことはない。

新星暦75年。人類がその生活圏を宇宙に拡大してから幾星霜の月日が流れ、その安寧を太陽系の外にも見出そうと目論んでいた風の時代に、「敵星体」は突如として現れた。

最初は誰も取り合わなかった。冥王星、忘れられた星の裏側から出現した彗星など、惑星軌道を通していつもの通り何処へと消えていくものだとタカを括っていたからだ。

人類という種はかつて神を崇めていながらも、自らを造物主と位を同じくする存在だと定義して、閉塞した時代の行き先を宇宙という未知のフロンティアとする形で、神の時代との決別を果たした。

古き神の暦から塗り替えられた新星暦は、かといって人々に劇的な変化をもたらすでもなく、統一の名の下に蔓延る官僚主義の汚濁に足を囚われたまま、辛うじて内宇宙に生活圏を拡大するのに精一杯な時代でもあったのだ。

それでも、僅か一世紀足らずで航宙艦とスペースコロニーの建造と移民、火星のテラフォーミングという偉業が成し遂げられたのは、連邦の旗の元に地球の働き手を徴発してきたからだろう。

人は神と袂を分かった。にも関わらず、民主主義は死に瀕し、官僚と資産家、弱者を搾取する上流階級の専横が止まることはなかった。

新星暦が半世紀を迎えた時に外宇宙航行船について盛んに研究が行われたのも、夢を見る先が外宇宙しか残されていないからだといえれば納得もいくというものだ。

しかし、人類のそんな栄光と苦渋を共にする歴史の価値を「敵星体」は汲み取りはしない。

『タイプ・キャンディ！ 取り付かれました！』

『速度で振り払え！』

『無理です、隊長——嫌だ、死にたくない！ うわあああつー！』

無数に、それこそ、この宇宙に散りばめられた星屑の如く周囲を埋め尽くす、「タイプ・キャンディ」と呼ばれる小型の敵星体に取り付かれた戦闘機のパイロットが、自らの愛機を棺桶としてキャノピーごと全身を食い破られる。

撒き散らされる鮮血と臓腑の数は最早数えることすら意味もなく、ただただこの戦場が地獄でしかないことを物語っていた。

あの赫く輝く彗星が、「人類の敵」であるとかわかるのに時間はそう掛からなかった。

冥王星沖から木星を経由して火星沖まで、ワープアウトとしか表現できない速さで着弾したその嚆矢は全ての対話を拒絶して、火星防衛艦隊と「ユートピア・コロニー」の全てを喰らい尽くし今、地球近海に赫々と瞬いている。

地球圏絶対防衛線。この地獄に名付けられたそれは、死に向かう兵士たち、屈強な大人人の背にもあまりに重いものだったが、結果論的に、一足先に自由になれた彼らはまだ幸せな方だったといえよう。

そしてこの、彼方より飛来した未知の侵略に、悲鳴を上げたのは人類だけではない。

駆逐航宙艦「雪風」のカタパルト、本来であれば艦載機一機しか積むことのできないスペースに集められた、年端もいかなない少女たちは、血と臓物が漂う宇宙から目を逸らし、吐き気を堪えるので精一杯だった。

死と生が交錯する、戦場という血生臭く悪趣味なカクテルは、大人ですら慣れるのに時間がかかるというのに、まだ十五にも満たない少女たちがそれを飲み干せというのは酷な話だ。

ならば何故、彼女たちが駆逐艦に積み込まれているのかと問われれば、その答えは一つしかない。

彼女たちこそ、「星の悲鳴」——地球が発するSOSをキャッチして、あらゆる物理法則に抗い、奇跡をその細腕に運ぶ「魔法少女」と呼ばれる存在だからに他ならないからだ。

「……わたしたち、これからどうなるんだろう」

「……この船が、行けるところまでは案内してくれる。そしたら……」

「うん、砲撃を合図に、敵に……あの赫い星に突っ込むんだね」

魔法少女。それは「星の悲鳴」をケーブルに、魂を高次元に接続することで、あらゆる奇跡をもたらすことができるようになった革命の乙女の総称だった。

だが、駆逐艦のカタパルトに並ぶ七人の少女たちの表情はそんな肩書きの凛々しさからは程遠く、年相応に死の恐怖に怯え、かちかちと歯を鳴らし、眦に涙を滲ませている者しかない。

当たり前だ。いかに「星の悲鳴」が絶対的な力を彼女たちに授けたところで、その心

の在り様までは塗り替えられないのだから。

「……ねえ、結衣ちゃん」

「何、桃華」

「この戦いが終わったら、わたしたち——」

「うん、また学校に通える。お祭り会も、花火大会も……きつと全部できる、だから」

——だから、なんだというのか。

結衣は、その言葉の無力と、この作戦がいかに無謀なものであるかを理解していた。

それはきつと、今話しかけてきた八代桃華も変わらない。

わたしたちは、死に行くのだ。

たった一隻の駆逐艦を護衛するために大量の戦艦や巡洋艦を、戦闘機のパイロットを犠牲にして、最後はこの「雪風」も人類勝利というお題目の炉に焚べられて、決死隊の自分たちも似たような末路を辿る。

もう、給食の揚げパンを食べることはできない。

地球にも「敵星体」が降り注ぐ様になってからというもの、食事は質を著しく欠いた合成食になっていったものの、それでも結衣は、あの殺伐とした合成揚げパンの味を、今になって脳裏に浮かべてしまうのだ。

『「雪風」、メインエンジン被弾！……これ以上の接近は——』

『旗艦に伝えろ！ 本艦をビーコンにして、タキオン粒子砲であの彗星の中心核をぶち抜くんだ！ 聞こえるか、魔法少女諸君！ 出撃の時間だ、この作戦には人類の未来がかかっている……諸君らの奮戦に期待する！』

駆逐艦「雪風」の艦長を務める年若い青年が、その死を覚悟した上で腹の底から叫びをあげる。

それでも結衣の心にあるものは、明日の地球のことなどではなく。

「……また食べたいな、揚げパン」

人類救済の栄光も、英雄の称号も、何もかもいらぬ。できることなら、ただこの戦いに背を向けて、揚げパンを齧りながら安穩と死ぬことができたなら、どれだけ幸せだっただろう。

『ドレス・アップ！』

だがそれは、叶うことのないもの話、お伽話でしかない。

少女たちは一様に、眺へと滲んでいた涙を拭って、それぞれの想いを心の底に押し込めると、高次元とのルートパスを開く「解号」を唱えて、見る見るうちにその装いを無骨な宇宙服から、およそ戦場に相応しくない、フリルがふんだんにあしらわれたドレスへと、己を包む光の繭の中で変換していく。

これでもう、自分たちにこの宇宙を縛る法則は通用しない。真空の中で凍りつくこと

もなく、宇宙線に怯えることもなく、ただ——「敵星体」と戦うためだけに、星の求めに応じた救世主として、屍山血河を築き上げる戦場へと降り立つ。

それが、それこそが、「魔法少女」に求められた在り方であり、十五にも満たない彼女たちが背負わされた十字架に他ならなかった。

## 5. 魔法少女、回想する（下）

駆逐航空艦「雪風」からの伝言を受け取った、地球連邦防衛軍艦隊総旗艦「山城」はその旨を了解すると、メインエンジンの出力を全て艦首に備えられた砲口へと集中させる。

その間にも無数のタイプ・キャンディやそれらを統率する大型の個体——タイプ・クツキーによる襲撃は止まず、航空戦艦「山城」一隻と、「雪風」を飛び出した七人の魔法少女たちを守り抜くために、ありとあらゆる犠牲が、それを良しとして堆く積み上げられていく。

狂っている。

結衣の言葉は誰に向けられたものでもなかったが、この戦場は、この惨状はそうしか形容しようがない。

『タキオン粒子砲、エネルギー充填完了！』

『目標、巨大敵星体中心核！ セット20、誤差修正マイナス1コンマ3！』

『タキオン粒子砲、撃てえッ！』

一分ほどの時間をかけて、その間にも多数の艦艇と艦載機のパイロットを犠牲にして



——放たれた閃光は果たして宇宙を引き裂くかのようにけたたましく轟き渡り、「赫星一号」の中心核を射抜くことに成功していた。

巨大な赤色のガス帯に覆われていた「それ」は、虚飾のヴェールを剥ぎ取られてみれば、巨大な女神像にもよく似た姿を曝け出している。

女神。「赫星一号」の中から現れたそれがなぜ人の形をしているのか、背中から一對の翼が伸びているのか、その理由を知る者は誰もいない。

ただわかるのは、あれが人類にとつては不倶戴天の敵であり、ここから先は「魔法少女」のお仕事だということだけだ。

連邦軍艦隊は既に、回収船として用意された駆逐航空艦を残して撤退の構えに入っていたし、唯一、地球が保有する兵器の中で「敵星体」にも通じるタキオン粒子砲は連射がきくような兵器ではない。

航空巡洋艦「高雄」「愛宕」に牽引される形で、エネルギーを使い果たした「山城」は戦線から離脱を始めた。

それを合図に、結衣たちは無数の敵星体を従える女神像——「赫星一号」へと呐喊していく。

「魔力障壁はそんなに持たない！ わたしがあの女神像を破壊するから、皆は——」  
「嫌、いや、いやああああっ!!」

「詩織ー！」

作戦は、手筈通りに決まっていたはずだった。

魔法少女の中でも火力と殲滅力に優れた砲撃型である結衣が「赫星一号」の本体を攻撃する時間を、残りの六人が支援して稼ぐ。

だがそれはあくまで机の上で交わされた議論の結果であり、プロとしての軍人ならいざ知らず、十五に満たない少女たちに忠実な実行を求めるのは酷な話でしかなかった。

とうとう錯乱した詩織、と呼ばれた少女、支倉詩織は隊列飛行を外れて、戦場からの逃亡を図った。

だが、それを嘲笑うかのようにタイプ・クツキーの上位種たるタイプ・シヨコラータが指示を下すと、無数のタイプ・キャンディが、タイプ・クツキーが詩織を取り囲み、彼女を護る「星の悲鳴」が齎す力を打ち破らんと牙を立てる。

残酷なようだが、詩織一人を助けるために割ける戦力の余裕などというものはどこにもなかった。

「やだ、助けて！ 食べられて死ぬなんてやだ！ お母さん、おかあさああんっ!!!」

ばりばりと、己の内側に秘められた「星の悲鳴」が齎す力——「魔力」が尽きるまで牙を立てた敵性体たちは、真空の宇宙に投げ出されることになった詩織の肉体を、凍りつく前にばりばりと、無残にも蚕食していく。

せめて、魔力が尽きた時に即死していたことを祈ることぐらいしか、結衣にも、残り六人となった魔法少女たちにもできることなどありはしなかった。

その最中、死の覚悟を決めて、両手に魔力が具現化したアサルトライフルを手に特攻を図る少女がいた。

前島亜美。「救世の七人」と大層なコードネームがつけられた、部隊とも呼べない部隊の中では最年長で、いつも明るく場を取り持つてくれていた彼女はその瞳に死への恐怖を隠しきれず、涙を滲ませながら宇宙を埋め尽くす「敵星体」に抗い続けていた。

「来るなら来い……来るなら来いッ！ どうせ帰れないんだ、どうせ戻れないんだ、だつたら——！」

「亜美ちゃん、援護しますー！」

そんな無謀な突撃に付き従う少女がいた。

翠川美琴。常に心穏やかで、戦場に立つような性格では断じてない、慎ましくピアノを弾いているのが似合うような少女が、亜美が撃ち漏らした敵を、魔力から生成した薙刀で切り裂いていく。

天衣無縫な三上美柑。臆病で泣き虫ながらも仲間を癒す力を持った水瀬絵理。彼女らを合わせて部隊「救世の七人」、人類最後の希望にして大人たちからの勝手な期待を一身に背負わされた少女たちは、活動限界寸前までその地球そのものが与える力でもつ

て、「敵星体」を塵殺していた。

だが、それらは全て「赫星一号」から湧き出る端末のようなものであり、全てはあの女神像を破壊しないことには始まらない。

順調に地球圏への落下軌道に向かう「赫星一号」を視界に収め、結衣は己が持てる魔力の大半を杖の先に収束させて、狙いを定める。

「こいつを倒せば……こいつを殺せば……」

全てが終わる。家に帰れる。

その一心であつたからこそ、結衣は複雑な術式を短時間で組み上げることができていたのだし、その狙いが女神像の核となる額に埋め込まれた紅い宝石からブレることはなかったのだ。

だが——だからこそ、全てに身構えていなかったからこそ、死神は訪れる。

配下であるタイプ・クツキーとタイプ・キャンディを喪失したことにより、前線に引き摺り出されたタイプ・シヨコラータは無機質にその両腕を結衣に向けると、鋭く尖った爪を射出した。

宙を切り裂くその一撃は、結衣が全く想定していないものだ。

だからこそ、そこに結衣は必然としての死を感じ取る。

「——っ!？」

作戦失敗。その四文字が脳裏を閃く内に、一秒がどこまでも引き延ばされ、永遠にも似た感覚の中で結衣は、走馬灯のように過ぎてきた時間のことを垣間見ている。

思えば、短い人生だった。

あの時「星の悲鳴」を聞いていなければ。

あの時、「魔法少女」であることを隠していれば。

こんな冷たい宇宙で藻屑となつて死ぬことはなかったのかだろうか、と、意味を持たない、意味をなさないもしもという不協和音が結衣の脳裏に鳴り響く。

——だが。

「結衣ちゃんっ!!!」

「……ッ、桃華……!?!」

放たれた「爪」が魔力障壁を突き破り、結衣の眼前に躍り出た少女、八代桃華の五体を引き裂いて、物言わぬ血肉の塊へと塗り替える。

しかし、幸運だったのか不幸だったのか、桃華の魔法少女としての資質は詩織を上回っており、胴体が泣き別れたような状態になってもまだ、息が残っていた。

「桃華……どうして……」

「……ダメ、だよ……結衣……ちゃ……私、たち……地球を……」

「桃華……」

「……パパ、マ、マ……」

最後の力を振り絞るかのように、己を包んでいた魔力障壁を全て攻撃に転化して、タ  
イプ・シヨコロータを押し潰すと、そのまま瞳から光を失って、桃華は息絶えた。

なにも、できなかった。

桃華は死んだのではない。自分の不注意が、否、小日向結衣という人間が殺したのだ。  
今にも叫び出したい衝動を堪え、こぼれ落ちる涙を拭って見上げれば、「赫星一号」は  
既に目と鼻の先と呼べるキリングレンジの中にいる。

桃華は、自分が引き金を引くために守ってくれたのだ。

結衣は魔法の杖を構えると、その死に報いるかのように、未だこの宙域を埋め尽くす  
無数の死者たちに、その屍に祈りを捧げるが如く、己の内に接続された「星の悲鳴」を  
絞り出す。

「メタモルブースト……！ テスタメントプラスター、セット！」

メタモルブースト、という解号は第二の扉を開くためのものだ。それは自分自身の魂  
を介して接続した高次元から更なる力を引き出すための手段であり、そして。

「へっ……しくじるなよ、慌てるなよ、だけど急いで正確にな、結衣！ メタモルバーン  
！」

それは己自身を星の炉に焚べて、燃やすのと同じ行いでもあった。

既に規定回数以上の「メタモルブースト」を使い果たしていた前島亜美は皮肉な笑みを口元に浮かべて結衣へと告げると、未だに「赫星一号」から生み出され続ける敵星体を一身に引き付けて、その両手に携えたアサルトライフルで駆逐し続ける。

メタモルブーン。三段階めの解号は魔法少女に定められた終焉であり、蠟燭の火が消える瞬間に瞬く光のようなものだ。

一瞬、閃光のように——本来では人の身に余る行いを、高次元へと接続していた代償として、魂の全てを燃やし尽くし、魔法少女は最大限の力を発揮する。

だが、その対価はわかりきったことだ。

ぼろぼろと、灰がこぼれ落ちるように、命が剥がれ落ちるように亜美の身体は剥離して、その存在から感じられる魔力は次第に薄れていくのが、結衣には、そして生き残った魔法少女たちにはわかっていた。

そういうものなのだ。連邦軍が無謀な反攻作戦に打って出たのも、自分たちが駆逐航宙艦に詰められて最前線に放り出されたのも。

全ては、もう、時間がないから。

亜美の覚悟を悟り、彼女に付き従っていた美琴もまた「メタモルブーン」の解号を叫ぶと、結衣の射線上にいる敵星体を、それこそ流星のような軌道を描いて駆逐していく。

「撃ってください、結衣さん！」

「……今撃てば……!!」

「同じです！ 美琴は……!!ここで死ぬしかないのです、なら、せめて人の手で……っ！」  
「っ、あああああああッ!!!」

畜生。クソツタレ。誰が、一体こんな運命を仕組んだのだ。

心の中であらん限りの罵倒を、それこそ今眼前に聳える「女神」へとぶつけながら、結衣はそれを声にならない叫びに変えて、チャージしていた、テストメントブラスターと名付けた砲撃魔法を撃ち放つ。

タキオン粒子砲の一斉射撃に匹敵するその威力は、結衣よりも遥かに巨大な、惑星にも匹敵する「赫星一号」の巨体を包み込み、その中心核である紅い宝石のようなものを、確かに撃ち貫いていた。

阻止が僅かに遅れたことで、四散した「赫星一号」の破片は限界点を超えて地球へと落下していったものの、概ね作戦目的は達成されたといってもいい。

上位存在を失ったことでか、残存する敵星体は全てが自壊し、地球沖における海戦は、初めて敵星体に対して人類が、地球連邦が勝利を手にする結果となったこと自体は、喜ばしいといえよう。

だが、払った犠牲は決して小さなものではなかった。

結衣たちを回収するために待機していた航空駆逐艦「村雨」に生き残った魔法少女た



ちは乗り込むと、一様に肩を落として嗚咽を漏らす。

「ごめんね、詩織……ごめんね、桃華……ごめんね、亜美さん、美琴さん……」

それは恐怖からの解放故なのか、或いは一足先に自由になった仲間たちへの哀悼なのか——それが祈りであったとして、何に祈るのかもわからないまま、残された魔法少女たちはただ、涙を零し続けるのだった。

## 6. 魔法少女、打ち明ける

「……そんな出来事があった。それだけだよ」

それだけ、と、切って捨てるのに、「赫星戦役」で払った犠牲は、あまりにも大きすぎた。

時間的猶予が残されていなかったが故に博打同然で挑んだ「救世の七人」作戦も、スティアに打ち明けた通り、結衣たちを送り出すためだけに何人が犠牲になったのかわからないし、数えたくもなかった。

人の命は断じて并勘定でできるような代物ではない。例え一人が病に倒れようと、百人が敵星体の犠牲となって宇宙に散ろうと、その命の価値は等価であり、生き残ってしまつた結衣たちや、地球に暮らす市民たちは意識しているかいにかかわらず、等しくその十字架を背負っている。

だが、そのような十字架を四六時中、年端もいかない少女が背負い続けられるだろうか。

答えは否だ。だからこそ、結衣は「救世の七人」作戦に成功した後は何も考えなくて済むモルモットに、「人類の新たな希望を紡ぐ」というお題目で研究されていた実験に志

願していたところがあった。

それも要件が済んでしまえば、お払い箱なのだが。

だからこそ、用済みになった自分は除隊扱いで連邦軍から追い出されて、何の因果かこうして行き倒れていた少女と一つ屋根の下で暮らそうとしている。

それは逃避だ。今も耳鳴りのように意識を苛む悲鳴の残響が、低くくぐもった響きをもつて結衣の脳裏を打ち据えた。

逃げて、逃げて。戦場にいた時は何よりも欲しくてたまらなかつたはずの「自由」をこの手に得たはずなのに、心はいつまでも渴いたままだ。

半ば懺悔をするように、スティアへとそう打ち明ける結衣の横顔は、英雄のそれとは程遠く、憔悴しきつて限の浮き上がった瞳と、愛想笑いを浮かべようとした出来損ないの、引きつった口元が、今も内側から湧き起こる自責の念が、心を蝕んでいることを何よりも雄弁に物語っていた。

「結衣……悲しい？」

スティアは、そんな結衣に対して半ば自分の胸の内を確かめるかのようにそう問いかける。

スティアには記憶がない。

それはこの、誰もが等しく十字架を背負わされた時代においてある種幸いなことなの

かもしれない。

悲惨な、という言葉ですら届かない「赫星戦役」において、家族を敵星体に殺された記憶、敵星体に為す術もなく追い詰められてとうとう地下の穴蔵、有事のためにと建造されていた地下都市へと押し込められ、いつ終わるともしれない戦いの終結を、死の影に怯えながら祈っていた記憶。

他にも例を挙げるなら枚挙にいとまがないが、あの戦いにまつわる記憶がないというのはそれだけで幸運に思えるほど凄惨で、絶望的な戦いを人類は強いられてきたのだ。

記憶がなければいい、それだけでつらいこともある。

ステイアは困ったように小首を傾げて、不可思議な色合いの髪を窓から差し込むその風に靡かせ、ふわりと光る粒子を漂わせながら、すっかり憔悴した結衣へと、恐る恐るその右手を差し伸べて、涸れ果てたと思っていた涙が伝う頬にそつと触れた。

そして、涙は再び流れ出す。

なんとということもなく、少しひんやりとした温度と柔らかな感触が伝わってくるだけで、生きている誰かに触れたというだけで、結衣は随分と救われたような気がしてならなかったのだ。

「……ステイア、ごめんね……ごめんね、私……」

「結衣は、悲しい……戦いで、いっぱい死を背負ったから……ステイアは、ただいるこ

としか、できない……でも、スティアは、ここにいるよ、結衣」

「……ありがとう……」

自分の行いは間違いじゃなかったと、心のどこかではそう思ったがつっていたのかもしれない。

その卑しさに、その厚顔無恥な気持ちに目を背けていたからこそ、結衣は背負い続けてきた死に潰されそうになっていたのだ。

逃げることは、恥じることではない。

少なくとも精神安定剤を友にして、眠れない夜を睡眠導入剤で無理やり誤魔化すような崖っぷちに立っているのであれば、そこからは逃げ出した方がいいはずだ。

そうでなければいつしか死神に足元を掴まれて、崖の下へと引き摺り下ろされていくのだから。

だから、身構えていなければならなかった。

結衣は連邦政府からの受勲を受けた時に、「英雄は英雄たれ」という半ば呪いのような願いを同時に託されてもいた。

それでも、戦いが終わって空虚に穴が穿たれた心の隙間を埋めるのに、その言葉はぴたりと符合したのである。

英雄は英雄らしく、全ての死を背負って、人類のために尽くして生きなければならな

い。

そうでなければ散っていった兵士やお仲間の魔法少女たちに、結衣が自身のミスで殺してしまったのにも等しい桃華に顔向けできないから。

だから、泣くのはやめにしようと、そう思っていたはずなのに、スティアのあたたかさはその脆い部分に走ったヒビを埋めるかのように染み渡って、はらはらと涙を零させるのだ。

ここにいます。スティアという少女が、記憶こそ失っても生きていてくれる。

その言葉と事実は、戦後にあつて尚、専横を繰り返す特権階級たちの振る舞いに密かな失望を抱いていた結衣にとって、紛れもない希望だった。

落涙する結衣はスティアの胸に預けていた顔を上げると、少し照れ臭そうに頬を染めて、ごしごしと涙を拭いながら、とりあえずはとばかりにソファへと掛け直すと、空いていた右側へとスティアを手招いた。

「ぐすつ……ありがとう、スティア。とりあえず、やることもないから、一緒にぼーっとしてようか」

「ぼーっとする……？ スティアは、何もしないをする……それでいいの、結衣？」

「うん、少なくとも私は……救われるかな」

本当ならば、少ないとはいえ私物をクローゼットにしまい込んだり、家の中にあるも

のを確認したりと、やるべきことは残っているのだが、しばしそこから目を背けて、結衣はスティアを手招く。

不思議そうに小首を傾げたことで揺れるスティアの髪の毛からは粒子としか形容できないものが零れ落ち、重力に惹かれて落下していくものの、それが床や壁になんらかのシミを作ることはない。

よくよく見れば、否、見なくともそれはおかしなことであると結衣の感性はそう告げていたが、金とも銀ともつかない不思議な色をした髪の毛に、覗き込む角度によって色が変わって見える万華鏡のような瞳を持つ人間がこの世のどこかにいると仮定した方が、説明はつく。

一瞬、スティアは宇宙人なのではないかと、その不可思議な髪と瞳を見た時に結衣はそう感じていたものの、宇宙から飛来したものは人などではなく、滅びをもたらす星だった。

そして未知との遭遇が二度も起こりうる確率よりは、そういう人間がいる——そもそも、古い時代のアニメーションにしか出てこなかった、魔法少女なるものが現実には侵食している以上、今更だ——と考えた方が、精神衛生には良い。

忘却と思考停止は、神が人間に与えた最後の恩寵であると人はいう。

それはスティアを見る限り、昨日までの自分の在り方を見つめ直す限り、きつと正解

なのではないかと、結衣はそんなことを思考の片隅に浮かべながら、戸惑い気味にソファの右に腰掛けたスティアへと、そつと肩を寄せたのだった。

「結衣……どうしたの……？ スティアには、わからない……」

「……ごめんね、もう少しだけこうさせていて。勝手なのはわかってるけど……スティアといると、安心するの」

「安心……わからないけど……結衣は、安心がしたい？ そのため、スティアは役に立つ……？」

「うん……役に立つ、って言い方は少し角が立つけどね」

「角が立つ……よくないこと……スティアは、反省する……」

しよぼくれた様子で眉を八の字に歪めるスティアの様子がなんだかおかしくて、気付けば結衣は小さく嘖き出していた。

何かが滑稽なわけではない。スティアだって必死に考えて、そして辿々しくも言葉を紡いでいるのだから、それを馬鹿にする意図もなければ権利も結衣は持つていない。

ただ、久しぶりに触れたそういう人間らしさというものに、心が癒されていくような、渴き続けていた喉が潤っていくような感じを覚えるのだ。



## 7. 魔法少女、観艦式を見る

ステイアに胸の内を打ち明けた翌日、結衣は朝食を終えると、なんとなく手持ち無沙汰な感覚を埋め合わせるために、テレビをつけていた。

幸いかどうかはわからないが、復興が進んでいる東京周辺は「赫星戦役」以前の様相を取り戻しており、上流階級にも、未だ地下都市での暮らしを余儀なくされている下層階級にも迅速に、今日の出来事を伝えるメディアが息を吹き返している。

旧時代においては腐敗と権力への癒着が疑われて石を投げられていたメディアであつても、少なくともこのご時世でそういったことをする余裕が残されていない以上、報道されるものは恣意的なものではないと、結衣は信じたかった。

ただ、そこに何か中身を望んでいるわけでもないのに注文をつけるのも本来は筋違いなのだろうか、と自嘲しつつも、結衣は今日の天気予報などでも構わないから、とにかく、ステイアが記憶を取り戻すきっかけとなる何か情報があればと、リモコンのスイッチを押したのだ。

だが、そこに映し出されたものは天気予報でもニュースの報道でもなく、大々的にピックアップされた軍港と、そこに据え付けられたカタパルトの存在だった。

荘厳な吹奏楽を奏でながら、マーチングバンドが屈強な、しかし年若い軍人たちを先導してパレードを行う様子が、やはり一人暮らしには似合わない、大画面に躍る。

『我々は三年前まで、苦渋を舐めながらも、あらゆる艱難辛苦を耐え抜いてまいりました』

地球連邦防衛軍極東管区軍務局長という長い肩書きがテロップに映された男へと力メラがズームして、その演説をぶちまける様子が、一秒の漏れもなく公共の電波へと乗せて発信されていく。

結衣はそこに何か思うところがあるわけではない。

軍務局長が声高に叫ぶ言葉を聞き届けていたステイアは、これは何だとしても言いたげな様子で小首を傾げるが、結衣としても今日、このような式典が行われるとは知らされていないなかったために、寝耳に水だった。

思想、信条としてそこに思うところこそないものの、魔法少女たちの奮戦や前線で一方的に犠牲になることを強いられてきた兵士たちではなく、必要であったとはいえ地下に潜って後方で指示を下していた男がまるで「赫星戦役」の代表者であるがごとく振る舞うというのは、結衣にとってはどこか眉を顰めたくなるのもまた確かだった。

『ですが全国民の皆さん、ご覧ください！ 我々が国土はこの三年で飛躍的な復興を遂げ、また残存する敵星体を討ち払うために、我々はただ手をこまねいていたわけではあ

りません!」

軍務局長が拳を握りしめ、大仰な仕草でパレードを続けている軍人たちを指し示すと、カメラはその仕草をトレースして、学生たちのマーチングバンドに率いられている、軍帽にコートという、かつて結衣が見た船乗りの出で立ちをしている彼らを追いかける。

「結衣……これは、何？ ステイアには、わからない……」

「あー……多分、観艦式じゃないかな」

「カンカンシキ……?」

「簡単にいえば、宇宙戦艦を並べて自慢する会」

結衣は食器をスポンジで擦りながら、どこか興味深そうにテレビの画面に食らいついていたステイアからの質問にそう答える。

曲がりなりにも軍属だった人間の発言とは思えないほどそれは適当で、大雑把で、それこそあの軍務局長のような人間が聞けば修正は免れないであろう雑な要約でこそあったが、本質的には一部符号するところがあるのもまた確かではあった。

新型の宇宙戦艦が建造されているという噂は、「赫星戦役」の折にも結衣は耳に触れていたし、結局その竣工が「赫星一号」との決戦には間に合わない、ということと記憶からは抜け落ちていたものの、どうやらその後秘密裏に建造は続けられていたようだ。

艦首に唯一敵星体に通じる兵器であるタキオン粒子砲を備える扶桑型航宙戦艦や金剛型航宙戦艦といった主力艦隊は、「赫星戦役」の折に「山城」一隻を残して壊滅状態になつていたため、新たなフラッグシップや更なる戦力を求める、という軍部の考えが理解できないというわけではない。

だが、何を根拠にしてあの軍務局長はそこまで自信満々に観艦式を開けるのか、にはまだ考えが及ばないのが正直なところだった。

『オケアノス級航宙戦艦……三隻の建造には多大な時間を要してきましたが、今やこの空飛ぶ要塞が完成した以上、地球から敵星体の残党を叩き出すのは、最早時間の問題であるといえるでしょう！』

カイゼル髭を撫でつけながら、軍務局長はマーチングバンドに先導されていった三列の軍人たちがそれぞれ乗り込んでいった巨大な鉄の塊——「赫星戦役」で最後の旗艦を務めた「山城」よりも一回り以上大きなそのオケアノス級航宙戦艦を指し示して、鼻息荒くそう宣言する。

オケアノス級航宙戦艦。テレビに映し出されたそれは、一目見るだけでわかるほどの異形でありながら、どこか洗練され、整然とした宇宙戦艦のフォルムをしていた。

艦首に設けられたタキオン粒子砲は一門から二門に増設され、主砲である、恐らく陽電子砲の口径も「山城」と比べて大型化されている。

だが、正直なところ、結衣がそれを見て真っ先に抱いた感想は「何と戦うのか」といったところだった。

地球に残されている敵星体の数は決して多いものではなく、自慢のタキオン粒子砲も地上で放てばその被害は甚大なものとなることから、基本的には宇宙空間でしか使えない。

それにもかかわらず、まさか前時代的な大艦巨砲主義を拗らせて軍務局長はあれのロールアウトを急いでいたのだろうか、結衣はやけに自信満々なカイゼル髭の男をじとりと一瞥するが、もしも自分と彼の考えが同じであるのなら、あれは。

「船……？　空を飛ぶ。でも、なんで……？　ステイアには、わからない……」

「多分、復興のシンボルとかそういう建前なんですよ」

「復興……船を作ることは、復興？」

「船を作る元気もなかった地球が、あれだけ大きなものを作れるまでになりました、つてアピールしたいんだよ、多分だし、誰に向けてかは知らないけどね」

政治のことについて結衣は、ステイアが小首を傾げているように正直なところよくわからない。

と、いうよりも、魔法少女たちは意図的に政治から切り離されてきたといってもいい。年端もいかない少女たちであるという理由を建前にして、その甚大な力を持つ存在が

いずれ自分たちの上に立つことがないように首輪をつけておく、と、呑気にも滅びかけている最中にも戦後のことを考えていた政治屋たちに呆れ半分感心半分といった感情を抱きながら、結衣はカタパルトから滑り出して、宇宙空間へと飛び出していく。「オケアノス級」三隻の姿を茫洋と見送っていた。

敵星体の勢力下に収められた火星は、タキオン粒子砲の集中投射という、星を犠牲にした戦術で敵星体を根絶している今、オケアノス級——遙か遠い昔の言葉で、「最果ての海」を意味する彼らと、そして彼らを生み出したこの星と、その指導者たちがどこに向かおうとしているのか、それは結衣にもスティアにもわからない。

結衣の胸中は複雑だった。

地球は着実に息を吹き返しているのは事実であり、それでも地球からは取り除き難い汚濁が残されていることもまた、事実であるのだから。

そこから目を背けるようにチャンネルを変えれば、何事もなかったかのようにテレビは今日の天気予報を映し出し、快晴が続くということ、調子外れなテンションで気象予報士が伝えているのだった。

## 8. 魔法少女、服を買いに行く

天気予報を告げ終えたテレビは、地球連邦防衛軍が未だ「赫星一号」の破片が残っている佐渡ヶ島の奪還に向けて動き出したと語っていたが、結衣にとってそこに何か感慨が湧くことはない。

恐らくは自分が協力していた「実験」とやらの成果が出たのだろうし、宇宙に向けて進水式を執り行ったオケアノス級航空戦艦と併せて、魔法少女に代わる、地球復興のシンボルとなるものがほしいと、上層部はそう思っているのかもしれない、と邪推する程度だった。

ただ、結衣にとって当面の問題となるのは、身元がわかるか記憶を取り戻すまでは同居することになるスティアの存在、というより彼女の私物に関してのことだ。

私物に関しては、結衣も決して多い方だとはいえない。

何せスーツケース一個に全てが収まる程度の物しか持ち合わせていないのだし、その中でも当面深刻になると予想されるのは、スティアの私物についてだった。

「……軍で過ごしてた時のツケね」

「ツケ……人が一時的に保留するもの……？ 結衣、何かを保留している？」

「服よ、軍にいた時は制服が支給されてたし、それに——」

魔法少女に変身するときは、例えば下着姿だろうが上から何重にもコートを着込んでいようが十二単を纏っていようが、決まった形のドレスに変換されるのだから、服には頓着してこなかった。

そこまで口を開きかけて、結衣はもぞもぞと後半へと行くにつれ、歯切れを悪くして、言葉を濁す。

自分が魔法少女であったことについては、もう既にスティアには打ち明けている。

ただ、年頃の女子として服に頓着しない、悪くいえば関心がないと自白することが単純に恥ずかしくなかっただけだ。

地下都市に人類が押し込められていた3年前まで、服や食糧といったものは全て政府からの支給品であり、お洒落をする楽しみも知らず、戦いに明け暮れてきた自分の半生を鑑みれば、それも仕方のないことだと他人ならば納得がいきそうなものだが、それはそれ、これはこれとして恥ずかしいものは恥ずかしいのだ。

「それに、どうしたの？ 結衣？」

「……隠すようなことでもないんだけど、私、その……服のセンスとか自信ないから」

まだ「敵星体」が地球に飛来するより前の時代、結衣は今よりも子供で、服というのは両親が買ってくれるものだったし、「赫星一号」が火星近海までワープアウトする以前



にはそれなりの年頃になっていたものの、もっぱらやっていたのはマネキン買いだった。

「服……着るもの。ステイアも持つてる……これだけだと、足りない?」

結衣がそう思い悩む様子は、ステイアにとつては理解がかなかつたものであつたらしく、相も変わらず小首を傾げて、鈴を鳴らしたような声で問いを投げかける。

「流石にワンピース一着だけ、つていうのは厳しいんじゃないかな……」

ステイアは記憶を失っているから仕方ないとはいえ、その言葉からは彼女が服飾の類にこだわりの類を持たず、その必要性も希薄だと思つていことが、結衣にはどこか本質的に感じ取れた。

別にステイアが何を着ていようと、結衣にその事実が何か影響を及ぼすわけではないが、着の身着のままで行き倒れていた時から変わらない、一張羅のワンピースだけで日々を送るといふのは、洗濯のことを考えれば不可能であると断言してもいい。

だからこそ、結衣もまた思った通りのことを口に出したのだが、彼女にとつてそれは合点が行くものではなかつたらしく、まだステイアは可愛らしく小首を傾げたままだ。

「服……いっばい必要なもの?」

「いっばいは……どうだろ、人による」

「人による……不思議。ステイアにはわからない……でも、結衣が必要つて言つてるか

ら、きつとスティアにも、必要……」

スティアがその薄い唇から紡ぎ出す言葉は、常に自己定義の確認を行っているように、どこか機械的に聞こえるものの、そこにある熱のような何かは、心そのものに嘯きかけられているような感覚は、機械には模倣できないものだ。

結衣はそれを不思議だと思う。

小首を傾げ、髪の毛が揺れる度にふわりと舞う不可思議な色合いをした粒子のことといい、街で行き倒れていたことといい、真正面から解釈しようと思えば、不都合で自然なことがいくらかでも浮かんできそうなものだったが、無垢なスティアの振る舞いは、心を擦り切れさせた結衣にとつては、渴きを癒すに値する。

軍のカウンセラーに打ち明けられなかったような戦傷のことを、心に、魂に深く突き立てられた爪痕のことをぶち撒けていたのも、きつと彼女が何も知らないからだ。

そう考えると、自分はどこかスティアを、その無垢なることを利用しているのだという罪悪感にきりきりと胸の奥と胃袋が締め付けられるような感覚に結衣は襲われるものの、過ぎたことを悔やんだところで、出力されるものは涙と溜息ぐらいだ。

記憶には留めておこうと、スティアを利用してしまった件について今は考えないことを決め込んで、結衣は擦り切れ、複雑骨折を起こした心を無理矢理前に進ませるかのよう、何事もなかったかのように小さく微笑んで、スティアへと一つの提案を持ちかけ

る。

「ねえ、スティア。服を買いに行かない？」

「服……必要。結衣が、教えてくれた……だからスティアは、問題ない……」

「ありがと、それじゃ行こっか」

その言葉が聞きたかった、と、どこかの闇医者が放ったような言葉を心に押し留め、結衣もまた出来損ないの笑顔を形作りながら、スティアの手を取って歩き出す。

彼女は相変わらず納得はできなくとも理解はできた、といった風情の表情を浮かべてきよんとしているものの、それでも服が必要だとわかってくれただけ上出来だ。

「あ、でもセンスとか、その……期待しないでね、私、そういうのダメだから」

結衣は喜び勇んでシヨツピングモールへと向けて歩き出した足を止めて、少しばつが悪そうな表情でそう告げる。

スティアの容姿は飛び抜けて美しいものだが、それを引き立てるために結衣ができることといえば、マネキン買いぐらいしかない。

無論、結衣もそこに愛想こそ足りないものの、スティアに匹敵する美貌を持っていたが、彼女を彩っていたのは常に親が買ってきた子供服か支給品の服か軍服ないし、魔法少女に変身した時、自動で身に纏うドレスだけだ。

そんな風情で気まずそうに縮こまる結衣のことを、相変わらずスティアは不思議そう

に見つめていた。

「センス……美的感覚。ステイアは、気にしない……結衣が選んでくれたものなら、ステイアのためにしてあげることがあるなら、それが嬉しい」

窓を吹き抜ける春風のように柔らかくはにかむと、ステイアは結衣の責任に震える手を取って、心からの言葉を口に出す。

本当であれば自分のような記憶もなければ身元もわからないような存在が、結衣と一緒にいること自体が望ましくないことは、ステイアもまた臆気にはあるが察していた。

軍や政府、この世界の仕組みについて詳しいわけではないものの、結衣のような人間は確かな記憶を、自分を定義するためのものを持っているが、ステイアはそれを持ち合わせていない。

それは異端であり、集団の中では排斥されるものであるということでは、欠落した記憶の中でもどこか本能的に悟っていたからこそ、そんな自分に結衣が尽くしてくれるというのは、嬉しいという感情を心の中に呼び起こすのには十分すぎた。

無邪気に微笑むステイアの笑顔に、結衣もまた柔らかなもので胸をそつと締め付けられるような、名前のわからない感覚を微かに抱く。

そうして、二人は惹かれ合うように繋いだ手を握り合わせると、ショッピングモール

へと向けて歩き出すのだった。

## 9. 魔法少女、戦鐘を聞く

復興の象徴として池袋駅周辺に建てられたシヨップングモールは、未だ地上への居住権を獲得した特権階級や上流層しか利用できていないのが現状であった。

それでも、焼け野原になった都心にこれだけの建物や、ここまで結衣たちを運んできた鉄道というインフラを復興させられたのは、一つの成果だといっても過言ではないだろう。

特権階級や上流層が優先して地上への居住権を獲得するという、貧しい者や弱者が排斥されるような構図に結衣もまた、一抹の憤りを覚えてこそいたものの、自分もまた一軒家付きで地上への居住を許されているその一部なのだと思えば説得力もなくなるし、声高に糾弾するのも後ろめたくなるというものだ。

地下鉄、かつて地下に張り巡らされていたインフラより更に下、地下都市へと繋がる駅であり、地上に棲まう市民の緊急避難口となったものを一瞥しながら、結衣はそこに分断を感じながらも、そこから目を逸らしてシヨップングモールへと向かっていった。

「シヨップングモール……お店がいっぱい……ステイアは、わくわくしてる……？」

「あはは、無理もないよ。とりあえずは服屋さんに行こっか」

ショッピングモールには、結衣たちが目指している服屋だけではなく、本屋からレストランまで多様な店舗が、いくつも軒を連ねている。

あの「赫星一号」が襲来するより前は東京にこういった複合施設が存在するは珍しいことだったらしいが、3年という長いようで短い期間では、そういう形に街を造ることが精一杯だったのだろう。

かつて、ここに輝いていた都心の栄光を完全に蘇らせるには、まだ時間が足りない。

このショッピングモールの存在はある種、壊すのは一瞬であったとしても、作り上げるには多大な時間とコストを要するというのは、いつの時代も変わらないという真理として、結衣たちの前に突きつけられているようなものだった。

とはいえ、勝手に辛気臭くなっていったのではせっかく出かけているのにも台無しで、無垢に微笑んでいるスティアの喜びにも水を差すことになる。

それをわからないほど、小日向結衣という人間は愚鈍ではなかった。

微笑み返す仮面の下になんともいえないやるせなさを押し込めながら辿り着いたファストファッションの有名店舗で、結衣はスティアが再び不思議そうに周囲を見渡している姿に視線を向けつつ、マネキンが着用しているのと同じコーディネートのもと、その色違いをいくつも見繕って籠の中に放り込んでいく。

「不思議……服、身に纏うもの……スティアは、悩んでる……? 困ってる……?」

「まあ、これだけ種類があればね」

「うん……種類は豊富、でも、結衣は選んでくれた」

ありがとう。スティアは、感謝してる。

相変わらずどこかぶつきらぼうで機械的に聞こえる彼女の言葉は無垢なものであり、そこに冷たさや必要最低限の妥協といったものは微塵も存在しない。

こんな風に、誰かに頼られるというのは悪くない。

そう思えたのは一体いつ以来のことだったか。

擦り切れ、涸れ果てた結衣の心にその無垢なる言葉は、ある種祈りにも似た厳かささえ感じる純粋な感情は染み渡り、少しずつ瘡蓋の下に押し込められた膿を取り除いていくようだった。

思えば、他人に感謝されたくて、何かの見返りが欲しくて、魔法少女となる道を選んだのではない。

ただ、敵星体の襲撃から生き延びるので精一杯だっただけで、その結果として結衣は、初陣で家族を、そして同じ魔法少女となった妹を喪っている。

だから、期待を寄せられるというのは結衣にとっては重荷でしかなかったことだった、少なくとも今まではそのはずだった。

やれ最強の魔法少女だと、「原初の七人」、「救世の七人」だと持て囃されようと、それ



はあくまで結果論でしかない。

結衣は幸運だった。生き残ったことが幸せかどうかはわからなくとも、最低限あの地獄のような「赫星戦役」を生き抜いたことは確かで、他の魔法少女たちはその九割以上が死に絶えたとき、そういうだけの話だ。

風の噂では、戦いが終わっても魔法少女の発生は止まらず、軍が目覚めた少女たちを管轄しているらしいが、最早そこに居場所をなくした結衣にとっては、何の関係もない話だった。

アウターを買った後、結衣はマネキンを不思議そうに眺めているステイアを視界から外さない範囲で下着や靴下といった必需品を無造作に買い物籠へと放り込む。

ステイアのスリーサイズは聞いていなかったが、少なくとも昨日風呂に入った時に貸し出した自分の下着、特に上のスペアが問題なく彼女の胸に収まっているのだから、同じものを買えばいいだろうという考えだ。

お洒落にも気を使えるような大人になりたいと願って背伸びをしていた幼い日からは程遠い自分の買い物に苦笑しつつ、結衣が会計を済ませたその時だった。

「結衣、来る……!」

「来るって、何?! ステイア?!」

「わからない、でも、何かが来る……ステイアには、わかる……!」

先ほどまでマネキンをしげしげと眺めていたはずのスティアが突如としてしゃがみ込んだかと思えば、何かに怯えるかのように突如として声を張り上げる。

来る。その言葉が意味しているものは、彼女の深刻な表情や叫びを鑑みれば、吉兆や福音の類でないことぐらひは想像がつく。

だが、脳がそれを拒みたくなっているのは、結衣が最悪の答えを瞬時に導き出していったからだ。

来るといわれて来たものは、この星においては一つしかない。

その予感が確信へと変わるのと同時に、シヨツピングモールに内線で流れていた陽気で呑気な音楽が裏返ったかのように、スピーカーがけたたましい警報音を歌い出す。

『緊急事態宣言発令、繰り返しします、緊急事態宣言発令。都心に敵星体の出現を確認、地上にいる皆様は速やかに地下都市区画へと避難してください』

スティアとは違って無機質な印象を与える合成音声警報音と共にそう告げたかと思えば、どすん、と低い横揺れがシヨツピングモールを襲う。

パニックを起こした民衆が、怒号と悲鳴を上げながら我先にと店舗から地下都市へと通じる緊急非常口へと殺到する中で、結衣はただ一人茫洋と立ち尽くしていた。

——確かに、東京の敵星体は全て駆逐したはずだ。

あの日「赫星一号」を撃ち落としただけで、戦いは終わらなかった。

その後待ち受けていたのは地上を埋め尽くす敵星体を駆逐するための戦後の戦争であり、その戦いに勝利したからこそ、今の東京があるのではなかったのか。

結衣は当惑しながらも、魔法少女としての本能が身体を突き動かしていた。

「スティア、走れる!？」

「あ、ああ……っ……スティア、怖い……足、動かない……」

「……ならっ!」

腰を抜かして地面にへたり込んでいるスティアを、レジ袋と共に抱きかかえて結衣は周囲を一望するが、地下都市への避難口は逃げ惑う客でごった返していて、我先に助かろうと押し合い、へし合っている。

ならば、と結衣が駆け出したのはその反対方向である、店舗の出口だった。

逃げられそうにないのなら、戦う方が生き残れる確率は上がる。

——何故なら、自分は魔法少女だから。

スティアを抱きかかえたまま、結衣は敵星体が現れていると思しき街中へと駆け出していく。

軍をクビになった自分が何を今更、と省みる心はある。スティアを犠牲にしてしまうかもしれないという不安もまた同じだ。

だが、今最も生き残る道に近いものがあるとすれば、それは逃げるのではなく戦

うことだと、魔法少女として戦って来た結衣の本能がそう告げる。

「スティア、悪いけど……」

「……結衣は、戦うの……?」

「……うん、絶対に守ってみせる……スティアは死なせないから、ここで待つてて！ ドレス・アップ！」

自らの内側で蠕動し続けていた衝動を解き放つかのように、燻っていた火種を煽り立てるように、結衣はその解号を高らかに謳い上げた。

刹那、結衣の全身が光の繭に包まれて、一秒も経たない内に着ていた服を戦いという名の舞踏会へと参加するためのドレスに変換し、小日向結衣は魔法少女へと、「原初の七人」の中でも最強と謳われたその姿へと、蛹から蝶が羽化するように身を変えるのだった。

# 10. 魔法少女、その代替兵器

結衣がシヨツピンググモールを飛び出す少し前、地球連邦軍極東管区総司令部でも敵星体の出現はキャッチしていた。

すぐさま緊急事態宣言を発令し、市民に避難を促せたのも全ては3年前、「赫星戦役」からの教訓を生かした最新の装備が揃っているからであり、またこういった非常事態を想定して、というお題目で今の東京という都市は形作られている。

とはいえ、根絶したはずの敵星体が何の前触れもなく現れたという事実に対しては司令部も困惑を抱いていたらしく、現場の指揮は混乱しているのが実情だった。

「何が起きている!?!」

「敵星体です! 都心……池袋近辺に出現!」

「数はいくつだ! 情報は正確に報告しろ!」

司令部の一室——都内対敵星体対策本部と名前がつけられていた事実上の島流し部署から晴れて本部への転属と、異例の二階級特進を果たした諏訪部が、混乱に目を白黒させているオペレーターの女性を叱咤する。

この状況で動転するなのというのも酷なものだが、3年の平和は人々から危機感を薄れ

させるのには十分なものであったし、矢面に立つ諏訪部もまた、敵星体の出現に少なからず動揺を覚えていた。

東京という都市はこの3年間で、徹底的に敵星体を叩き出す方向に舵を切っている。

無論、それは東京だけに限らず、敵星体から奪還して復興が進んでいる都市全般にいえることなのだが、基本的には、設計段階で敵星体がそもそも内側に入ってこられないように作られているのだ。

その絡繰こそが諏訪部の主導で進められていた結衣を実験体とした研究でありその成果である「呪術回路」、魔法を神秘の領域から科学の領域に引き摺り下ろして再定義した代物だった。

名付けや定義づけというのは、存在を固定する呪いに等しい。

それは集団に浸透すれば時に大義や革命、暴力行使の引き金となり、それは個人に浸透すれば可能性を狭め、切り捨てる頑迷な意志になるか、あるいはろくでもないことになるかの二択だ。

諏訪部たちは魔力という、高次元からもたらされる恩寵に対して、小日向結衣というバイパスを通して出力された「結果」だけを切り取り、未知の次元から取り出されたエネルギーとして再定義したのである。

その成果として結実した呪術回路を都市基盤に組み込むことでいわば「結界」を張り

巡らせているのが、今の東京に限らず、人口を有する全ての都市に共通する設計のはずなのだ。

「敵星体、タイプ・キャンディ多数！ タイプ・クッキー……これは……?!? 敵星反応大きいですが、二体のタイプ・クッキーを多数のタイプ・キャンディが取り巻いています！」  
「こいつは……厄介だな」

だからこそ、こんな事態はあり得ない。

あり得てはならないのだ。

諏訪部はレーザーに映っている敵星体の反応を一瞥して、ふむ、と顎に指を遣りながらも、内心では奥歯を噛みしめたい衝動に駆られていた。

「確認するが、呪術結界が破られた形跡はないんだな？ 南少尉」

「はい、敵星体は突如として出現しました」

「ふむ……」

そうしたくなるのを堪えて、諏訪部はオペレーター席に座っている南と呼ばれた歳若い女性、南優里亜に問いを投げかける。

もしも呪術結界が破られてしまったのであれば、それは最悪の事態に違いない。

霊脈から得られる高次元エネルギーと電力基盤のほとんどを注ぎ込むことで補強された呪術回路による結界は、高層ビルに匹敵する体躯を持つタイプ・シヨコラータで

あったとしても破ることは不可能だというシミュレーション結果が算出されている。

それを破れるようなものが本土に押し寄せて来たのであれば、地球は二度目の滅びに瀕することを示すからだ。

だが、南優里亜の観測とリーダーが機械的に捉えた結果から導き出せる答えは、「敵星体が突如として結界内部に出現した」というものだった。

それが何を示しているのかは、諏訪部にはまだわからなかったものの、少なくとも彼は司令部において愚鈍な存在などではなかった。

「南少尉、あれは下ろせるか？」

「あれですか？　しかし……」

「何を言っているのだね、諏訪部大佐！」

先ほどまで目を見開いて押し黙っていたはずの軍務局長が、諏訪部のやろうとしていることを察してか、突如として椅子の肘掛を拳で叩きながら立ち上がる。

あれ、とはある種、地球連邦防衛軍が抱えている切り札のようなものだ。

本来であれば佐渡ヶ島奪還戦でその華々しい戦果を飾る予定だったそれらの調整はまだ半ばであり、加えて敵地となっている佐渡ヶ島ならばともかく、市民がいる東京に投入するとなればその制約は大きくかかることになるだろう。

しかし、それを承知で諏訪部は軍務局長——更科鉄雄中将へと、臆することなく進言



した。

「あれを出さなければ、市民の犠牲は大きくなります。加えてタイプ・クツキーも従来の反応を逸脱しているとなれば尚更です。軍人たちの命を守るためにも、出撃許可を」

「うむ、しかし……」

「へっ、その言葉を待つてましたぜ、大佐殿！」

軍務局長の沈黙を肯定と捉えたかの如く突如として通信ウィンドウが開いたかと思えば、そこには筋骨隆々とした体躯の大男が映し出されており、諏訪部の手筈通りに整備が急ピッチで進められていた「それ」へと、彼は、内藤勲曹長は今にも乗り込まんとしていた。

「何をしておる！ 許可はまだ降りて……」

「市民を見殺しにするおつもりですか、局長殿」

「……ぐ、ぬぬ……わかった、許可しよう！ ただし敗北は許されん、必ず戦果を挙げて戻ってくるのだぞ！」

「了解いたしました、中将閣下ア！ 野郎共出撃だ！ 甲冑に乗り込んで池袋まですっ飛ばぞー！」

内藤が意気揚々と乗り込んだそれを一言で評するのであれば、「人型兵器」の四文字が適切になるのだろう。

およそ五メートル前後の体躯をしたそれは、正確には「乗る」というより「着込む」のに近いため、呪術甲冑という名が与えられている。

新しく再編された連邦防衛軍の切り札として、兵士たちが敵星体に対抗するために呪術回路を搭載して作られたそれは、敵星体との戦いにおいて、魔法少女頼みだった戦術ドクトリンを大転換するための、いわば更科軍務局長たち、タカ派の切り札であるといつてもよかつた。

その切り札、「78式呪術甲冑」に身を包んだ内藤たちは道路に偽装されていた地下カタパルトから意気揚々と出撃していくが、現状での完成度は良くて七割、鼻根目抜きに見積もつて五割が精々といったところだ。

それでも、いたずらに歩兵を出撃させて無駄に戦死させたり、貴重な存在である魔法少女を失うよりは遥かにマシンな選択ではあつた。

戦後に誕生した魔法少女は、「星の悲鳴」が弱まっていることもあつて、基本的には「原初の七人」から引くこと四人——赫星戦役を生き残ることができた三名に及ぶ実力者は極めて少ない。

だからこそ、数でそれをカバーしなければならないのだが、魔法少女の発生がランダムで、訓練期間のことも考えれば現状の歩兵隊に戦える装備を支給して戦力になつてもらうのは、連邦防衛軍にとって急務だったのだ。

そんな軍部の淡い期待を一身に背負って出撃した呪術甲冑陸戦隊であったが、地下カタパルトから地上へと飛び出した内藤がまず見たものは、従来のタイプ・クツキーを遙かに上回り、タイプ・シヨコロータに匹敵するほどの体躯を持った存在だった。

そして、無数のタイプ・キャンデイがアステロイドリングのようにその周囲を泳ぎ回りながら、逃げ惑う市民を喰い殺していく凄惨な光景に、内藤の怒りは、そのボルテージは急速に跳ね上がっていく。

「てめえらア！ 人様の庭に入ってきて、好き勝手やってんじゃねえぞ！ 野郎共、いいか！ 都市に被害を出すんじゃねえぞ！」

『了解！』

この星から一匹残らず敵星体という名の害虫を叩き出す。そんな強い意志を瞳に爛々と滾らせて、内藤は呪術礼装として再定義されたアサルトライフルを呪術甲冑の両手に構え、タイプ・クツキーを取り巻くタイプ・キャンデイへと、その銃口を向けるのだった。

## 11. 魔法少女、舞い降りる

呪術甲冑は魔法少女の代替として機能するか否か、その問いについて、個の力で測るのはナンセンスだといえよう。

結衣は高次元からの「悲鳴」を頼りに敵を察知し、ビルの屋根を飛び回りながら戦地へと急行していた。

幸いなのは、シヨツピングモールから比較的遠い場所に敵星体が現れてくれたことだろうか。

だが、それはスティアという個人の命について考えた時の話であって、場所が違えば彼女やシヨツピングモールの客たちに代わって、別な人間が犠牲になるかもしれない。

その焦燥が結衣の足を動かし、戦場へと駆り立てていた。

だが、その戦場へと真っ先に到着したのは結衣ではなく、内藤曹長率いる呪術甲冑陸戦隊だ。

アサルトライフルの銃口から放たれる洗礼弾、呪術回路を通して抽出された魔力を封入した弾丸が、敵星体の障壁を食い破って、宙を泳ぎ回る魚のようなタイプ・キャンディを死滅させる。

鉛玉と魚を足して二で割ったような見た目をしているそれは、メルヘンチックな外見に反して極めて凶悪で、その小ささと持ち前の鋭い牙を活かして容易に、そして極めて残酷に、捕食という形で人を殺めるのだ。

呪術甲冑陸戦隊が挙げている戦果は、今のところ上々だといっても良い。

大型のタイプ・クツキーには牽制だけを行うことで街への被害に関しては多少目を瞑りつつ、多くの人を殺しうる可能性が高いタイプ・キャンデイの処理を優先するというのは間違っていないかったが、逆にいえば今の内藤たちにできることはそれしかなかったという証左でもある。

「せめて、徹甲弾が使えればよ……！」

「隊長、泣き言言っても始まりませんぜ！」

「知ってらあ！ クソツタレが、とにかくあの魚もどきを潰せ！ 一人でも多く市民を避難させるんだ！」

『了解！』

現状で出撃できる呪術甲冑は五機が限界であり、先行量産が済まされている78式のほとんどは佐渡ヶ島奪還戦に向けて、テスト航行からの帰路についているオケアノス級へと積み込まれている。

単体の力で測るのはナンセンスではあるのだが、呪術甲冑が魔法少女の完全なる代替

にならないことは、開発段階からプロジェクトに関わってきた内藤が誰よりも理解していた。

呪術回路の発明は確かに革命的で、今までは臆で不確かだった「魔法」という概念とその神秘を受け継いだ年端もいかなない少女たちに頼らざるを得なかつた戦いの構図を塗り替えて、兵士たちをいたずらに死地へと送り出す、あの「救世の七人」作戦で行われた航空隊を囿にするような真似をしなくて済むというのは、これ以上ないほどの朗報だといえるだろう。

だが、呪術回路は弱点としてその可変性を持つことはない。

魔法とは、魔力とは本来可変的なものであり、行使する者の定義によつて様々に形を変えて発現する奇跡なのだが、呪術回路はそこから出力された「結果」だけを切り取つてエネルギーに還元しただけの代物である。

つまり、結衣が実験室で出力していた魔力以上の出力を發揮することもなければ、呪術甲冑を着込むことで、内藤のような兵士たちは魔法を使えるようになるわけでもない、ということだ。

加えて、エネルギーに還元したということは、その出力が呪術回路自体の大きさにも左右されるということでもある。

オケアノス級航空戦艦に積み込まれたようなものならばいざ知らず、歩兵に支給され

るような78式呪術甲冑に組み込まれた回路では、それ単騎だけで戦局を覆すなど不可能に等しい。

つまりはそういう話で、裏ではおそらく諏訪部がバックアップ要員として出撃させる魔法少女の選定を行っていることだろう。

「おおらあああッ!!!」

そこに歯痒さを感じながらも、内藤はそれをかき消すように咆哮して、両手に持つているアサルトライフルの引き金を引く。

巨大な羽虫が羽ばたくような音を立てて吐き出される呪術礼装の心核たる、魔力によつてコーティングがなされた弾丸が、無数のタイプ・キャンディを貫いて四散させる。

だが、HUDに投影される敵影が減った様子は微塵も感じられない。

それも無理もないことだ。何せ、突如として現れた敵星体の数は凄まじく、いかに呪術甲冑が強力な兵器であったとしても、5機しか揃っていないのであれば、対処できる範疇を大きく超えているからだ。

加えて、タイプ・クツキーの特異個体と思しき大型までいる。

そうなれば自分たちは死ぬただけに飛び出してきたのかと悪態の一つもつきたくなるが、内藤たち陸戦隊が出撃したのは断じて無駄に命を散らすためではなく、一人でも多くの市民を生かすため、その盾となるためだ。

極論、そこに内藤たちの生命の安全は全くといっていいほど考慮されていない。

装弾数を拡張したはずのアサルトライフルも瞬く間に弾切れを起こし、弾倉を交換している隙を見計らって、特異個体——否、変異体とも呼ぶべき大型のタイプ・クッキーがその鉤爪を振り下ろした。

「ぐわあああッ!!!」

「永藤イ！ クソッ、こいつあどうにもならんぞ！」

永藤と呼ばれた隊員が着込んでいた呪術甲冑が展開する擬似魔力障壁はあつさりと変異体の爪に切り裂かれ、縦に真っ二つにされる形でその骸がずり落ち、血液と臓腑をアスファルトにぶちまける。

やってくれたな、と、内藤は頭に血が上っていくのを感じていたが、弾が尽きているのはこちらと同じで、加えて苦し紛れに、最後の駄賃だと全弾ぶちまけたアサルトライフルの弾は、あの変異体が展開する障壁に全て弾き返されている。

万事休すか、と、内藤が覚悟を決めて、タイプ・キャンディの猛攻を掻い潜りながら、変異体の暴威をすり抜けながら弾倉を交換していたその時だった。

「思考誘導弾セット、ファイア」

「な、なんだア!?!」

眼前に集ってきたタイプ・キャンディの群れが一匹残らず爆発したかと思えばそれは



連鎖して、HUDに映る敵星体を示す赤い点は見ると見る内に、わずか数秒で変異体であるタイプ・クッキーの二体を除き、全てが消滅していた。

こんなことができるのなら、それは。

内藤が思わず宙を仰げば、そこにはおよそ戦場に似つかわしくない、フリルがふんだんにあしらわれたドレスを身に纏う、桃色の髪をした少女が、小日向結衣が佇んでいる。

魔法少女は、原則としてこの世の法則を書き換えることで不可能を可能としている。

例えばそれは宙にふわふわと佇むことであつたり、高次元から引き出した魔力を思考による誘導弾として、無数のタイプ・キャンディを爆発四散せしめることであつたり、ありとあらゆる奇跡が、その存在の元には容認されるのだ。

「魔法、少女……」

内藤は命拾いした、という気持ちと、またこの年端も行かない少女に頼らなければならぬのかという軍人としての屈辱に臍を噛むが、それでも助けられたのは事実であることに違いない。

だが、諏訪部が裏で手を回しているにしても、到着が早すぎる。それに、あの顔は。

ありとあらゆる感情が擦り切れて、光を失った瞳を茫洋と変異体へと向けている結衣を一瞥して、内藤は思わず原初の七人、と、そう呟いていた。

——原初の七人。

聞こえてきた呟きに結衣は少しだけ不快感を覚えて眉を吊り上げるが、優先すべきは軍人の小言よりも、目の前で今暴れている、タイプ・クツキーにしてはやたらと大柄な個体をどう処理するかだ。

なるべくなら街に被害を出さない形で処理するのが望ましいのだろうが、今の結衣は軍人ではない。

もちろん、好き好んで街を壊すような戦術を取るような真似はしないものの、交戦規定が定められていないということは、自由に動けるといってもある。

タイプ・クツキー、その変異体が、とうとう取り巻きを消し飛ばされたことで結衣を恐怖に値する対象と認めたのか、鋭い爪を振り下ろすが、その一撃が始動する頃には既に、結衣は変異体の背後に回り込んで、鳩尾へと回し蹴りを叩き込んでいた。

「……戦いを始めるわ、来なさい」

そして、変異体を挑発するように手招きをして、結衣は自身へとその狙いを集中させようと、すつ、と微かに伏せた瞳の奥でそう目論むのだった。

## 12. 魔法少女、無双する

大型化を遂げている理由はわからないものの、基本的にタイプ・クッキーもまたその名前の響きの可愛らしさとは異なつて、チョコチップクッキーのようにゴツゴツとした岩塊のような腕を振り回し、時には爪を射出する化け物であることに違いはない。

基本的な特性はそのまま、サイズだけが大型化している場合の多くは弊害として機敏性の低下などの弱点を抱えていることが多いが、この変異体に関してそういったことは特にならなかつた。

結衣にとっては見慣れない、というより初めて目の当たりにした兵器——78式呪術甲冑を縦に二機積み上げたのと概ね等しい大きさをしている変異体を、これ以上放置しなければせつかくの復興を遂げた街への被害も馬鹿にならない。

かつて、本当に滅びの淵に立たされていた時代にこの地球そのものが高次元の窓を通して上げた、純度の高い「悲鳴」をキャッチできた結衣は、人間としてはともかく、魔法少女としては幸運であるといえた。

タイプ・クッキー、その変異体が無造作に振り下ろす巨腕を最低限の動きで回避すると、障壁を貫手で突き破り、結衣はそのまま流れるように変異体の腕を捻じ切っていた。

『……！』

発声器官を持たないタイプ・クツキーであったとしても、腕が無理やりねじ切られる痛みには堪えるものがあつたのか、びくんとその身を痙攣させると、膝からコンクリートの地面に頽れていく。

それでも、変異体にとつての脅威は完全に結衣だと確定したのでらう。

もう一体の敵が躊躇することなくその巨大な腕に生えている三本の爪を突き出すような構えを取つたかと思えば、刹那の内に爪が抜け落ちるように「射出」される。

敵星体を構成する体組織を文字通り射出したその「爪」は、徹甲弾を遙かに上回る貫通性を付加されており、駆け出しの、魔力障壁を上手く扱えない魔法少女の数々が串刺しになって死んでいった光景が、結衣の脳裏には焼き付いていた。

ねじ切り、投げ飛ばした敵星体の背後に回ると、結衣は躊躇うことなくそれを蹴り起こして、その巨体でもって「爪」から自らを守る盾とする。

『……！』

『……！！』

敵星体同士にも仲間意識というものがあるのかどうかは定かではないものの、味方を撃ち貫いてしまった変異体は僅かに後ずさって、まるで自らの行いを悔やむかのような反応を見せる。

「…………どういふこと？ ……いつら、感情があるの…………？」

少なくとも、3年前の戦いで、結衣は敵星体が感情の類を読み取れるような仕草を見せたことはないと言憶していた。

今も結衣がそう思い込んでいるだけで、あの変異体は感情の類など持ち合わせてなどいないのかもしれない。

だが、例外規則的にその体躯が通常を上回るといふ変異を確実に遂げている以上、ここに何らかの変化が他にも伴っている、と考えた方が自然ではある。

それが人為的なものなのか自然的なもののかは、考えたくもないことだし、どちらであつても望ましくないのだが。

結衣は「爪」を射出した変異体が硬直している隙を狙つて、強烈なボディブローをその鳩尾へと叩き込んだ。

魔法少女といえれば派手で豪華絢爛な効果音がつくような魔法が戦いの主役になると、かつてアニメを見ていた幼い頃の自分や一般市民はそう信じて疑わないのだろうが、実際のところそういう戦い方は、できなくはないものの、魔力消費的に極めて効率が悪い。先程魔力を込めた思考誘導弾で全てのタイプ・キャンディを塵殺してみせたのはその数が膨大だったからで、基本的には魔力によつて強化された身体能力で殴つたり蹴つたりしている方が、魔力の消耗——高次元へと接続している魂への負担が少ないことを、

結衣は3年前の戦いを通して嫌というほど理解していた。

だが、殴る蹴るだけで倒れてくれたのでは変異体も自らの役割を、東京という街の破壊を、そこに生きる市民の抹殺という役割を果たせないと必死なのだろう。

結衣のボディブローを受けた個体はよろめき、倒れかけていたところを踏ん張って、意地とでも呼ぶべきものを見せつけるが、少なくともそれもまた結衣の記憶にはない行動パターンだった。

「どういうこと……？ 敵星体の何かが変わっている……？」

はつきりいってしまふのであれば、この程度の変異を遂げたところで、タイプ・クツキーが二体程度では、最強の魔法少女たる小日向結衣を止めることは不可能だ。

結衣からしてもあの絶望的な「救世の七人」作戦と比べればこの程度の相手は兎戯にも等しいものだったし、やろうと思えば、街への被害を鑑みなければ、すぐにでも地上から消し飛ばすこともまた可能である。

だが、この街は3年という時間をかけて人類が着実に前へ、前へと進んできたことの証のようなものなのだ。

懐から取り出した魔法の杖「サンライズブルーム」で比較的街への被害が少ない、魔力による思考誘導弾を形成すると、結衣はそれを刹那の内に構えて、断続的に射出していく。

「これで、倒れる……!」

『…………!』

もう一方の敵星体は最早虫の息だ。

悪あがきで動いたとしても、思考誘導弾は結衣という本体の制御下にこそ置かれていても、独立して敵を追尾し、炸裂するために、戦闘行動の継続には支障がない。

絶え間なく、四方を囲まれた変異体に時間差で直撃してはその岩塊のような体組織をいとも容易く破壊していく。

「なんだ、ありやあ……あれが、魔法少女だったのか……!」

内藤は、結衣がまさしく無双と呼ぶのに相応しい、八面六臂の活躍をみせる姿を、他の隊員たちと同様にただ呆然と眺める他にできることがなかった。

敵かに舞い降りたかと思えば、純然たる暴力によつて暴力を制するその戦いはどこか自棄を起こしているようで危うさを感じさせるものの、少なくとも市街戦装備ともいえない軽装の呪術甲冑では対処が不可能な変異体を一方的に圧倒しているその姿は、自分たちの面子や鼻っ柱をへし折っているのにもかかわらず、これ以上ない頼もしさを内藤たちに感じさせていた。

「隊長……!」

「ああ、お前ら……よく見ておけ、あれが魔法少女だ、人類を救った……『原初の七人』

の生き残りだ」

原初の七人、という響きだけは立派で空虚な呼ばれ方を、結衣は好んでいない。

原初のことと呼ばれこそしているが、「救世の七人」作戦に参加した魔法少女たちは、その始祖などでは断じてない。

たまたま生き残っていたのが七人だっただけで、その中でも生き残れたのが三人、それだけの話なのだ。

プロパガンダによって清廉潔白、勇気ある者として讃えられている結衣たちだが、実際は死の恐怖に押しつぶされそうで逃亡を図り、敵星体に喰われて死んだ支倉詩織がいる。

自分の不注意のために、不手際のためにその命を散らしてしまった八代桃華がいる。もう自分には時間が残されていないことを知りながら敵へと特攻していった前島亜美と、翠川美琴がいる。

その犠牲は、名前と共に覚えて背負わなければいけないことなのに、国威発揚の道具として使われていることは結衣にとって許せないことの、割り切れないことの一つであったし、生き残った他の二人がどうしているのかも今は知らない。

あの戦いで、決定的に結衣の心はひび割れ、砕け、踏みにじられたといってもいい。だから何かをなす権利がある、と思ひ込むほど思い上がったはいないものの、変身し



て戦いを勝手に始めたのには、そうやって自棄を起こしている部分があることは確かだった。

それでも理性の側に結衣を踏みとどまらせている存在があるとすれば、それは。

思考誘導弾、その全弾による直撃を受けたことで破壊し尽くされた変異体を一瞥すると、結衣は最早のたうち回ることも叶わず、虫の息といった様相を呈しているもう一方の変異体へと、魔法の杖を向ける。

「光線だと街への被害が出る……結局こうなっちゃうか。でも、まあ」

——スティアを怖がらせるのなら、消えてしまえ。

言葉にこそ出さなかったものの、そこに確かな殺意を乗せて、結衣は再び思考誘導弾を展開すると、地に倒れ伏した巨体を蚕食するのではなく、一撃の元に破壊するように、その全てを一斉に射出する。

けたたましい爆発音が鳴り響くも、それは一瞬のことで、巨大な敵星体は二体とも、最初からそこにいなかったかのように消え去っていた。

魔法少女。その存在を過ぎたる力だと軍の上層部が警戒するのも、内藤には領けてならないような気分だった。

良くも悪くも、彼女たちは世界の命運を左右する、それだけの力を個人の身に宿しているのだから。

戦いが終わった後は、何事もなかったかのようにピルの屋根を伝ってシヨツピングモールへと引き返していく結衣の背中を見送りながら、その贗作である四機の甲冑を身に纏う兵士たちは、感謝と、そして微かな恐れと共に、敬礼を捧げるのだった。

### 13. 魔法少女、その事後処理

「つまり、突然現れた魔法少女が敵星体のほとんどを殲滅した、ということになるのか」  
「はっ、大佐殿！」

「そうか……報告に感謝する」

内藤からの救援要請を受けて現場に到着した諏訪部は、文字通り巨大な敵星体が跡形もなく消え去っている現場を見て、静かに嘆息する。

魔法少女は人智を超えた力を行使できる存在だということは承知していたつもりで、あの「救世の七人」作戦では航宙駆逐艦「村雨」の艦長を務めていたのが諏訪部進という男であった。

だからこそ彼は戦後に魔法少女たちの統括を束ねるポストに収まることとなったのだが、それはともかくとしても彼女たちが文字通りに世界を救うだけの力を行使できる存在であるということこそ諏訪部は誰より理解し、承知している。

だからこそ、内藤から報告された現場の異様さもすんなりと呑み込むことができたのだが、そんな彼が密かに溜息をついている理由は別なところにあるということだった。

「やってくれたな……」

軍属の魔法少女は、戦後、その力を警戒して、平時における出撃に際しては色々と面倒な手順を踏まなければならないという制約が課されている。

例えば防衛大臣の認可であったり軍務局長の認可であったりと、いくつもの承認を経なければ出撃できないのが、諏訪部たちの救援が遅れた原因であり、今現在、怪我人の治療に当たっている魔法少女——赫星戦役を生き抜いた英雄たる「原初の七人」の一人である水瀬絵理の出撃に時間を要した理由だった。

「……………これで、大丈夫です……………」

「あ、ああ……………ありがとう……………」

片手を食いちぎられるという重傷を負っていたはずの市民が、長い黒髪を靡かせる少女の掌にぼうつと灯る光に触れたかと思えば、失われたはずの腕が再生していくという奇跡を目の当たりにして、感謝より先に当惑する。

だが、それも無理はないことだった。

可変性を持つ高次元からのエネルギーである魔力を、自在に行使できるのが魔法少女というものだったが、中でも回復魔法というのは極めて希少なものであり、絵理が用いているそれは、治癒もさながら「限定的な時間の巻き戻し」も概念に内包している強力な魔法だ。

だが、その理屈を知っていようがいるまいが、タイプ・キャンディに食いちぎられた

はずの腕が何事もなかったかのように元通りになっていくのは市民にとって不気味なことだというのは、無理もない話だった。

絵理はどこか化け物を見るような目で自分を見て、日常に戻っていく市民をその碧眼で一瞥すると、しよぼくれたように小さく俯く。

感謝が欲しくて魔法少女をやっているわけではない。

それでも、善意でやっていることに対して化け物を見るような目で見られるのはいつだって堪えるものがある。

気弱で引つ込み思案で泣き虫で、魔法少女になる前は学校でひどいいじめを受けていたのが水瀬絵理という少女の半生だった。

それ故に彼女の心は脆く、傷つきやすい。

だとしても、絵理がああ、赫星戦役を生き抜いた魔法少女の一人であることには変わりなく、芯の部分では折れないとわかっているからこそ、諏訪部は戦後にこうした後方任務を絵理に任せていたのだ。

「怪我人の治療は一段落したか？」

「……は、はい……その……一応……」

「すまないな。苦勞をかける」

弱々しい絵理の返事を汲み取って、よくやったとばかりに軍帽を被り直すと、諏訪部

は恐らくこの事態を引き起こした張本人であろう存在に、現在唯一軍属ではないからこそ最も自由に動ける魔法少女、小日向結衣に想いを馳せる。

結衣に除隊扱いでの休暇を言い渡したのは、決して彼女を邪険に扱うためではなく、その擦り切れた心を癒すのには時間が必要だという合理的な判断に基づくものであったし、彼女もそれは承知していると諏訪部は受け取っていたのだが、こうして恐らく現場に舞い戻ってきたとなれば、結衣にとつての戦いは終わってなかつたのではないのと、寂寥たる気分を抱くなどいわれても、到底無理な話だつた。

3年前の、あの戦いをもたらした傷痕はあまりにも深い。

それは生き残つた魔法少女たちにとつてもさながら、日々を生きる市民にとつても、連邦防衛軍にとつても等しく背負わされた十字架であり、「赫星一号」が破壊されたところで、それがすぐさま癒えてくれるということはないのだ。

忘却は人間に神が与えたもうた唯一の権利であり贈り物であると、どこかの誰かが言っていたが、背負い切るのも辛いところであれば忘れてしまえるのは確かに一つの権利だともいえる。

だが、それが組織となれば、一つに寄り集まつた政体となれば忘却することは許されず、ひび割れた舵を無理やりにも取つて、戦後の戦争という荒波を乗り切つていかなければならない。

それがただでさえ諏訪部のような現場上がりにとっては心労の種であったというのに、加えて呪術結界の中に敵星体が現れたとなれば、溜息の一つや二つ、零れるのも仕方なからうと言いつつ、諷刺をするように諏訪部は再び小さく、長く息を吐き出す。

「……………、(´)めんなさい……………」

「なぜ君が謝る、水瀬絵理？」

「あ、あの……………心の傷とか、ストレスとかは、わたしの魔法で……………癒せないの……………」

「……………君が責任を感じる必要はないよ、これは俺の問題だからな」

万能ともいえる治癒魔法が人の精神状態までも癒すことができないのは、心というものがどうも魂に直結しているかららしいと諏訪部は研究結果や結衣の証言から仮説を立てているが、細かな理屈どうこうよりは、まあそうだろうな、という軍人らしからぬ直感的な理解でもって、そう納得している。

「小日向結衣……………休暇を与えたのは失敗だったか？」

敵星体及びその変異体を残さず殲滅できたという結果だけ見れば、それは成功に近いのだが、魔法少女を一人野放しにしておくという決断とその代償として潰れた連邦防衛軍の面目については、今度の会議でひどく糾弾されることだろうな、と諏訪部は軍帽を脱いで胸元を仰ぎながら、どこか他人事のように考えを巡らせる。

特に、佐渡ヶ島奪還作戦で華々しいデビューを飾る予定だった呪術甲冑が踏み台のよ

うになってしまった件については、あの軍務局長がお冠になることが目に見えていた。「…………えつと…………その、すみません…………結衣さんは、元気なんですか…………？」

こつてりとあのカイゼル髭に絞られる自身の様子を思い浮かべてげんなりとしていた諏訪部に、恐る恐るといった様子で控えめに手を挙げて、絵理はそう問いかける。

あの戦いを生き残った「原初の七人」から引くこと四人、これといった呼び名はないものの、三名の生存者の中でも絵理は、特に結衣へ懐いている節があった。

そうなればやはり、慕っている相手の様子というのは気になるものだろう。

「そりゃあ元気だろうさ、……まで派手に暴れてくれたんだ」

街への被害を最小限に抑えている都合上、表立った文句をいうこともできない完膚なきまでのその仕事は、小日向結衣という少女の性格を物語っているようなものであったし、敵星体を塵一つ残さず消し飛ばしているその御業は、現役時代、常に先陣に立っていた彼女の戦い方そのものだと、絵理はどこか恍惚として頬を赤らめる。

絵理にとって、結衣は救世主のようなものだった。

眼の色が理由で虐められていた自分を救い出してくれた、それだけで自分の命を差し出してもいいと思えるほどに絵理は結衣に入れ込んでいたし、それは無理もない話なのだろうと、諏訪部は事前に受け取っていた調査資料からの記述を思い返して、肩を竦める。



「何にせよ、小日向結衣からは話を聞かなきやならないんだ、同席するか、水瀬絵理？」

「……は、はい……お願い、します……！」

か細く弱々しい声でありながらも即座にレスポンスを返してみせる辺りは流石だと、絵理には悟られないように苦笑を浮かべ、諏訪部は警察への引き継ぎ手続きを簡略的に済ませて検証の現場を後にするのだった。

## 14. 魔法少女、涙を零す

シヨッピングモールで敵星体出現の報せを聞いてから数日、結衣の日常は概ね変わりなく、そして滞りなく進んでいた。

諏訪部が用意した手筈通りに学校に編入して勉強をこなす傍ら、家に帰れば待っていてくれるスティアと他愛もない会話に興じたりする生活は、戦いに渴ききつた結衣を潤すのには寄与していたといえる。

だが、まだそれも完全ではない。

マネキン買ってきてきたコーディネットに身を包んでくるとその場で回って、無垢な笑顔を浮かべたるスティアを一瞥して、その無邪気な振る舞いに口角を吊り上げながらも、それがまだまだ引きつっていることは結衣自身がわかっていた。

「どう、結衣……? スティアには、この服装が似合ってるか、わからない……結衣なら、わかる……?」

「うん、似合ってるよ。スティア」

ファストファッションのブランドであったとしても、スティアという一流の素材があれば引き立てられるのは服の方だ。

要するに彼女が概ねどんな服を着ても似合う容姿を持つて生まれてきたということは確かで、くるりと回る度にふわりと舞う粒子が漂うの見送りながら、結衣は茫洋とそんなことを考える。

ステイア、という名前から察するに、彼女は海外で生まれたのだろう。透き通るような、陶磁器のように白い肌は、かなり色白な部類に入る結衣よりも尚純白に近く、目鼻立ちがくつきりとしているのも、日本人的な特徴からは大分離れている。

学校で渡された課題にがりがりとしやうペンシルで答えを書き込む傍らで、結衣はステイアがどこから来たのか、そして自分たちがどこに行くのかをただ、考えていた。

ステイアを守るためであったとはいえ、自分が不本意に魔法少女としての力を振るつたことは、知りたがりのマスメディアにとっては格好の特ダネだったらしく、ワイドショーでは「原初の七人」の一人が再び東京を救ってくれたと喧伝して回っている。

今もテレビをつければそのニュースをやっていて、ニュースキャスターが魔法少女という絶対の希望が存在することを囁し立てる傍らで、コメンテーターは突如として街中に敵星体が現れたのは何かの前触れではないかと危惧するような姿勢を見せていた。

それは一種の政治闘争のようなものだと言葉は理解していたが、どちらかに肩入れするのならばやはり自分はコメンテーターの側に立つのだろうな、と、茫洋と画面を見送りながら、課題をこなす傍らで結衣は考える。

何故、東京に再び敵星体が現れたのか。

いくら考えてもその理由はわからない。ならば、当面は出てきたら潰していく他に手段はないだろう。

軍属でなくなった自分が魔法少女としての力を振るうのが危ういことであると理解していながらも、無垢に微笑み、世界についての問いを投げかけてくるステイアが敵星体の犠牲になるよりは何百倍も、何千倍も、何万倍もマシだと、結衣はそう思っていた。かつてのご同輩たちの、魔法少女や兵士たちの断末魔は耳鳴りのように今も脳裏に刻み込まれて離れることはない。

その一部にステイアが加わったら、と考えるとそれはぞつとする他にないことだ。

無論、ステイアだけではない。

3年。多くの問題を未だ内外に孕んでいるものの、人類はそれでも地獄の底から這いずり上がって、ここまでの復興を遂げてきた。

その生活が、その命の営みが再びあの敵星体によって破壊されるとするのは、あつてはならないことなのだ。

ぐしやり、と音を立てて、結衣が無意識に握り締めていたシャープペンシルが砕け散る。

「結衣……？」 結衣はペンを壊している、ステイアは、わからない……推測する、怒って

る。」

「……怒ってるんじゃないわ」

「怒り……それ以外のことだが、スティアには見つからない、でも、結衣はそれに触れてほしくない？」

文字通り粉々になったその代わりに鉛筆を取り出して再び課題のプリントへと答えを書き込んでいく形で、スティアから目を逸らしながら、結衣は自分の中に幼さが残っていると突きつけられたような面持ちで、微かに唇を噛んだ。

「……悔しいの」

「悔しい、後悔……それは、どうして？」

「……魔法少女になっても、昔テレビで見てたアニメみたいに、皆を守るわけじゃない……守れなかったものがいっぱいあって、それはもしかしたら私が判断を間違えなければ、助けられた命だったんじゃないかって、そう思うの」

それがいかに傲慢で浅はかな考えであるか、結衣は嫌というほど知らされてきた。

確かに魔法少女という存在は人智を超えた、戦略級兵器にも匹敵するような存在だといわれている。

それでも、自分たちが人間であることに変わりはなく、人間一人に守り通せるものには限界があつて。

わかっていたとしても、実感を伴って理解していたとしても、掲げた理想と突きつけられた現実とのギャップに、結衣はただ心の中で悶え、苦しみ、のたうち回ることしかできない。

小日向結衣はかつて世界を救ったと讃えられる最強の魔法少女である、という事実にも異論を唱える者は、市民はおろか軍人にも少ないのは確かなことで、事実、結衣はあの「赫星一号」を破壊して、地球への到着を防ぐことには成功している。

だが、それまでに払ってきた犠牲と、助けられてきた人間を数で数えて秤に載せれば、結衣だけの問題ではなく、人類全体の問題として、犠牲の側に天秤が大きく傾くのは必然だといえた。

その犠牲に報いる何かをしなければならぬ。

命を数で勘定するのではなく、一人一人を助けられるような魔法少女であらなければならぬ。

あの地獄を生き抜いて、そういう固定観念が結衣の中に植え付けられたのは確かなこととで、それが再び魔法少女として力を振るったことで沸騰している——なんということはなく、感情に振り回されると理解しているからこそ、結衣は自嘲するのだ。

「ごめんなさい、結衣……ステイアには、わからない……ステイアには、力になれない……？」

記憶を失っているステイアにそんなことを話したところで、重荷を押し付けるようなものだとかわかっていても、彼女の無垢な問いかけに強がりではなく本音を零してしまうのは、きっと何も知らないからだ。

何も知らないから、ステイアにはありのままの本音を打ち明けられる。

何かを知っている人間に打ち明ければきつと平手打ちが飛んでくることを承知しているから、心の傷から漏れ出す血液を拭うためにその無垢を利用して考えるのと、結衣は途端に自分が最低な人間であるように思えてならなかった。

「……………めんね、ステイアにこんな話して。ステイアだって、記憶を失って……………辛いはずなのに」

赫星戦役の被害者は自分だけではない。

なのに自分のことばかりを喋ってしまう己を恥じて、臆に涙を滲ませながら、結衣は宿題に答えを書き込んでいた手を止めて、静かにそう懺悔する。

「ううん、ステイアは大丈夫……………話を聞いてあげることしか、ステイアにはできない……………でも、結衣の役に立てるなら、ステイアは嬉しい」

落ち込んだ時、辛くて苦しくて仕方がない時、どうしようもなく行き場をなくした感情を受け止めてくれるというだけで、それは十分すぎるほどの救いだった。

だからこそ、ステイアの行いは善だ。

無垢なるが故に、何も知らないが故に、結衣の傷を、もはや自分では抱えていくことすら困難になったその痛みを受け止めてくれる器として自らを規定しているのに等しい危うさを持ち合わせていることはわかっていても、結衣には差し伸べられた手に縋る他に選択肢は残されていないのだから。

はらはらと涙を零す結衣をそっと抱きしめるスティアの柔らかな感触と体温に溺れながら、結衣は少しずつ、失っていったものを、道を歩く過程で取り落としてしまったものを拾い集めるかのように、その温もりへとしがみつく。

「ふふ……結衣は、可愛い。スティアは……熱を帯びている？ とつても、顔が赤い……」

「……それは、恥じらってるのよ」

「そっか、恥ずかしい……スティアはちよつと、格好つけすぎていたから……？」

「……ふふ」

「結衣？」

「……スティアにも、そういうところがあるんだって思うと、何だか嬉しいような、ほつとするような……そんな感じがするの」

理由はわからないけど、と付け加えて、自らの行いを省みて微かに頬を赤らめているスティアを見遣り、結衣は小さく笑う。



それはきつと、ステイアが人間に他ならない証拠だから、そして何より、それこそが、自分があの戦いで傷付きながらも守り通したものに、違いないから。

平和や自由、そして正しきよりも、そんな不合理に縋りたくなくなる時もある。

それがきつと、結衣にとつては今だったという、それだけの話だ。

だからこそ、結衣は今度こそ出来損ないの引きつったそれではなく、花卉が蕾から綻ぶような笑顔を、口元にそつと浮かべるのだった。

## 15. 魔法少女、来訪者

インターフォンが鳴らされる音を聞いたのは、結衣がステイアとの他愛もない会話を終えて、一頻り微笑んだ後だった。

「音……お客さんが来る、結衣？ ステイアはそう理解してる……」  
「うん、合ってる」

ステイアが言った通りに、インターフォンが押される状況は小学生の悪戯とかでもなければ来客があったという証である。

結衣にはその心当たりはなかったものの、魔法少女として暴れ回った都合上、軍だとか政府だとかそういう連中が関わってくるという懸念はあった。

微かな後悔が今更、胸中をよぎるものの、ステイアを守るという選択肢を取ったことについては何一つ悔やむようなことはない。

ならば、堂々と来客に応じればいいだけの話だ。

覚悟を決めると結衣は、いつでも変身できるように、最悪事を構えるのを想定しながら玄関口へと気配を殺して歩いていく。

魔法少女のお仕事は、敵星体と戦うことだけではなかった。

悪夢のような「赫星戦役」が終わった後に残された「戦後の戦争」で結衣たちが矢面に立たされることは少なかったものの、人間と人間の闘争というものは確かに存在し、地上がある程度の復興を遂げるまでは連邦政府の官僚を狙ったテロが地下都市内で横行したこともあり、そういったとき、鎮圧に駆り出されたのが魔法少女だった、という事実はある。

資源も何もかもが不足している中での逼迫は、人心を荒廃させるのには十分すぎたし、今でも地下都市で暮らさざるをえない人々がいるのに、魔法少女もまた特権階級だとなじられれば、それを否定することは結衣にはできなかった。

いくら結衣が戦いの矢面に立って心に癒えない傷を負おうが、「赫星一号」を破壊して世界を救おうが、戦いによる痛みは前線に立つ者もそうでない者も等しく負っているものだ。

絶滅戦争とは、種の生き残りを懸けての戦いというのは、生き残った後にもそんな虚しさしか生み出すことはない。

ぬるりと影の中から這い出てきた過去の亡霊に足を掴まれたような感覚に陥りながらも、結衣は重い足取りで玄関先に向かうと、果たしてモニターに映っていた来客のシルエットは、見覚えがあるものだった。

「……………諏訪部少佐？ 絵理？」

『残念ながら今は大佐だよ、小日向結衣』

『……………、こんにちは……………っ……………！ お久しぶり、です……………っ……………結衣、さん……………！』

その内一人は先日結衣に除隊を言い渡した張本人である諏訪部であったし、その隣には何故かあの戦いを生き抜いた「原初の七人」の一人である水瀬絵理が控えめに佇んでいる。

どうでもいいが、二階級特進を果たしたらしい諏訪部はともかくとして、絵理まで同席しているというのはどういう風の吹き回しなのかと結衣は困惑するが、もしも事を構えるような事態になれば厄介だな、というのが正直なところだった。

諏訪部が単に先日暴れ回っていた件を咎めにきたのであれば、そのお説教は甘んじて受け入れるつもりだったが、もしも身元不明のステイアを連邦政府に引き渡せと言われれば、それについては全力で断るつもりだ。

結衣は今の連邦政府を覆したいと思っているわけではないが、心の底から信頼しているわけでもない。

彼らの腐敗の象徴として、特権階級の専横が起きていることは事実であり、政治家や官僚、軍人の家族から優先的に地上への移住が進められているのはその極致だろう。

だが、この壊れた世界の舵を取るには巨大な権力が必要で、その航路から逸脱しないために、地球連邦政府という深い仕組みが必要であることもまた確かなのだ。

最悪、政府と魔法少女——その中でも結衣が最も手強いと感じている、絵理と事を構えなければならぬと想像して、胃の辺りがきりきりと締め付けられるような痛みを感じながらも、結衣は平静を装ってドアのロックを解除する。

「開けました、何もありませんけど、とりあえずどうぞ」

「生活に必要なものは一式揃えているはずだが……」

「……謙遜ですよ」

妙に生真面目な諏訪部が首を傾げて、ズレた言葉を返してくるのに肩を竦めながら、結衣は彼と絵理を、支給された自宅の中へと招き入れた。

リビングルームにはまだステイアがいるが、ここで下手に隠れていて、と指示を出してしまえば、後々面倒なことになると考えて、彼女には何も伝えていない。

その決断が吉と出るか凶と出るかはまだ結衣にはわからなかったものの、少なくとも諏訪部進という男が信頼できるかできないかで分類するのであれば、できる方に入るといふ直感を持ち合わせていたし、身構えていれば死神がその鎌を不意に首元へと突きつけてくることはない——戦場でまことしやかに囁かれる摂理に従って、結衣はその選択肢を取ったのである。

「……………」が……結衣さんのお家、なんですね……」

「……………変に緊張しなくてもいいよ、絵理」

「……いい、いえ……その、大丈夫……です……！」

結衣と諏訪部の間へと密かに張り詰めていた糸を断ち切るかのように、絵理はきよろきよろと頻りに家の中を見つめて、どこか呑気に聞こえるような言葉を控えめな声で出力していた。

緊張するような場所でもない、今のところの家主である結衣自身もそう思っているのに、こうもわかりやすく緊張しているのは絵理らしいといえれば絵理らしい。

気弱で、控えめで、あがり症で——しかし、「原初の七人」の中では誰よりも心優しく繊細だった彼女にとって、自分が持っている特別な意味など理解しないままに、結衣は小さく口元を引きつらせる。

どうしてか、上手く笑えない。愛想笑いであつたとしても、それが苦笑であつたとしても。

そんな彼女を密かに一瞥していた諏訪部は、戦傷から癒えるには時間が必要だという己の判断がそう間違つたものではないという確信を抱くが、それでも結衣は魔法少女として力を振るつた——その心がどうあれ、戦場に戻ってきたという事実は覆しがたい。「おいおい、水瀬絵理。彼女の言う通りだ。なんなら軍からの支給品なんだし、自宅だと思つてくつろいでくれてもいいんだぜ？」

「二応、名義上は私の家なんですけど」

「まあ、そいつはそうだがな」

そんな剣呑な雰囲気や冗談と愛想笑いの仮面の下に押し込めると、諏訪部と絵理は結衣に招かれるまま、案内されたりビングルームのソファへと腰を下ろした。

お茶の一つも本来ならば用意すべきなのだろうが、記憶を失ったステイアに給仕を頼むのは気が引けたし、何よりも諏訪部が訪ねてきたということは喫緊の案件だろうと判断して、結衣は話を切り出すことを決める。

「それで、私はどんな件で咎められるんですか」

「手厳しいな。そう警戒してくれなくてもいいもんだが……まあ、そうだな。咎められることについては少なくとも俺の仕事だよ。呪術甲冑……あの時パワードスーツのよいうなものを見ただろう？ あれが華々しく活躍できなかったってんで、軍務局長殿はお冠なのさ」

最悪はこうだな、と、まずは緊張をほぐすことから始めようとばかりに、諏訪部は自重するような身の上話を切り出して、自らの首を平手で跳ねるようなジェスチャーをとってみせる。

「……じゃあ」

「結衣？」

隠し通せるとも思っていなかったし、最初から隠すつもりもまたなかったものの、ど

こか神経を逆立てているような結衣へと駆け寄って、ステイアは小さく首を傾げた。

少なくとも、ステイアの件で何かを言われるのであれば相応の用意があるとはかりに、体内で魔力を練り上げながら、結衣は諏訪部の瞳を真っ直ぐに見据えて身構える。

「……そうだな、君に同居人がいるという事実は俺も知らなかったし、それなりに問題だが……まあ、ここに来た件かと言われればそうでもない。水瀬絵理」

「……は、はい……っ……」

諏訪部は絵理が豊かな胸元に抱えていた資料を取るように促すと、受け取ったそれをテーブルの上に並べて、軍人としての厳しい目つきを一旦、少しだけ緩めた。

「まずは感謝状だな、君がいなければあの時陸戦隊は全滅だったし、貴重な呪術甲冑も失われていた。そのことに関しては礼を言う」

「……あれは……無我夢中でやったことです」

「だとしても、だよ。魔法少女に俺たちは何度も助けられて、今度もそうだった。そういう話なのさ」

「……なら、本題は？」

社交辞令のように感謝状を受け取った結衣は、結論を急かすかのように諏訪部と、おどおどとステイアを見つめながら佇んでいる絵理へと交互に視線を向けた。

「マジカル・ユニット」



諏訪部もまた、隠し事は無意味だと悟ったのかそうでないのか、結衣の問いかけに対して、ここに来た本来の要件を躊躇いなく口にする。

マジカル・ユニット。その言葉が何を意味するのかは、結衣も理解しているとわかっている——そういう確信を持って、再び諏訪部の目つきは軍人としての鋭さを取り戻していくのだった。

## 16. 魔法少女とマジカル・ユニット

マジカル・ユニット。

諏訪部の切り出したそれは耳に馴染みがない言葉などでは断じてなく、戦時中に結衣が所属していた魔法少女隊の通称であった。

だが、戦後に東京地上の敵星体を駆逐して、復興を遂げた後は三人だけになってしまったマジカル・ユニットは解散、その後は生き残りである結衣、絵理、そしてもう一人の少女、三上美柑もそれぞれの道を歩むことになったはずだと記憶している。

それが今、諏訪部の口から飛び出してきたということは、恐らく彼のやろうとしていることと結衣の考えていることは概ね一致しているという証左であったといつてもいい。

「……今になって、ですか」

「今だからだよ、小日向結衣。俺はどうもまどろっこしい話が苦手だね、単刀直入に言わせてもらうが——地球はまた崖っぷちに立たされるんじゃないかと、そう思っている」

杞憂であるならそれでいいんだがね、と諏訪部はおどけたように言葉を付け加えてみ

せたが、その眼差しは刃のように研ぎ澄まされた冷たさを保ったままであり、彼の言葉はどうやら本気らしいというのは、この場にいる全員が窺えることだった。

地球は再び崖っぷちに立たされることになる。

結衣からしてみれば冗談ではない話だが、その予兆とでもいうべき出来事は他でもない自分が体験してきたことだ。

現れるはずのない敵星体が、呪術結界を敷いているはずの東京に再び現れる。

加えて以前戦ったものとは大きく様相を異にした変異体の存在も含めて、今、どこかで何かが起きようとしている予感結衣の中にも確かに存在していたのだ。

だが、同時に、そうであってほしくはないと望んでいる自分がいる。

3年前——必死に戦って、戦って、戦い抜いた。

何人もの軍人が、市民が、魔法少女が犠牲になってようやく、地球は安穩を取り戻したのかもしれないのだ。

それがまた破られようとしているのなら、自分たちの戦いはなんだったのか。何のために死ぬ思いで、涙と鼻水と血潮に塗れながら、あの「赫星一号」を破壊したのか。

鳴り響く雷のように、遠い耳鳴りが、犠牲になった人々の断末魔やその末期に託された遺言がいくつも絡まりあつたノイズとなつて、結衣の脳裏に鳴り響き続ける。

その言葉はもう意味を果たしたはずだった。もう鳴ることはない、あの忌々しい赤い

記憶の中に置いてきたはずのことだった。

それなのに今、現実には人類に再び刃を向けようとしている——その事実とトラウマに強い吐き気が込み上げてきて、結衣は慌てて口元を押さえる。

「っ、はあ……はーっ……」

「……やはりその様子だと、休暇を言い渡したのは正解だったか」

魔法少女として戦う道を選んでくれたのなら、その可能性は、と、楽観的な考えを抱いていたことを恥じながら、諏訪部はばつが悪そうに頭を掻いて、眉を八の字に曲げた。

できることならば、マジカル・ユニットの再編という目標に対して、最強の魔法少女たる小日向結衣の戦線復帰というのはプロパガンダ的にも、戦力的にも望ましい展開だったが、あの3年間で心がすっかり擦り切れてボロボロになった結衣を無理やり戦場に引っぱり出すほど、諏訪部もまた鬼ではない。

無論、現状ではその必要がないから、という前提がつく話ではあるが。

彼は人類生存という目的を何より第一に考える、そういう人間でもあった。

「結衣、さん……！ 大丈夫、ですか……？」

「……ありがとう、絵理。大丈夫……ちよつと吐きそうになっただけだから……」

絵理は結衣が丸めた背中をそつとさすりながら、その眦に涙を滲ませる。

心というのは可変性を持っていながらも不可逆的なものだ。

絵理の治癒魔法は限定的な時間の巻き戻しもその「治癒」という概念の中に内包しているものの、ストレスであるとかトラウマであるとか、そういった、いわば魂が負った傷までは再生することができない。

それを歯痒く思うところは幾度もあった。

損傷した肉体を治療しても、悪夢に苛まれる傷病人はいくらでもいたし、感謝どころか罵倒されたり、恐怖を抱かれるといったことも、絵理の日常には珍しくないことだった。

それでも、こうして自分が魔法少女として立っているのは、後方任務であるとはいえまだ連邦軍を離れていないのは、絶望の底で沈んでいた自分を救ってくれた結衣がいたからに他ならないのだ。

だからこそ、些細なことでもいいから結衣の力になりたいと、その一身で絵理は結衣の背中をさすり続ける。

戦うことが怖いわけではない。

結衣は絵理から差し伸べられる温もりに縋りながら、無我夢中で飛び出していった先日のことを思い返す。

それは死なないという絶対の自信があるからなどでは断じてなく、ただ戦いの中で生

きてきた中でそう感じる心が鈍麻しているからに他ならないのだが、より正確に言葉で表すとするのなら、戦って自分が死ぬことよりも、背負っている命が失われることが怖いからだった。

戦えば人は死ぬかもしれない。戦わなければもつと死ぬ確率が跳ね上がるかもしれない。

だから自分が矢面に立って、少しでも多くの命を救いたいというのが魔法少女として結衣が願っていたことだったが、その願いを背負うのに、結衣の背骨は脆すぎて、その掌はあまりにも小さすぎた。

「……結衣、泣いてる……結衣は、悲しい。ステイアにもわかる……でもどうして？ お客さんは、どうして結衣を泣かせたの？」

それまで部屋の片隅に立って、結衣たちのやり取りに黙って耳を傾けていたはずのステイアが、諏訪部をどこか非難するような目で見据えて、そう問いかける。

その、覗き込む角度によって何色にも見える不可思議な瞳を訝りながらも、諏訪部は真っ直ぐに突きつけられた無垢な疑問に、ばつを悪くした。

その感性の鋭さと、現実に対する冷徹さを買われて軍部での昇進を果たした諏訪部にとって、無垢な疑問や感情が先走った問いかけというのはどうにも苦手なもので、だからこそ、それ故に薬指から指輪を外すような事態になったのだと自嘲する。

「泣かせるつもりはなかったんだ、ええと」

「ステイアは、ステイア……それ以上は、ステイアにもわからない……」

「ステイアでいいのかな、知つての通り今の地球は崖っぷちでね、藁にも縋りたい気持ちだったし、小日向結衣が戦いに戻ってくれるならと、勝手な期待を抱いていたところがあった。それは謝るよ。すまなかつた」

すまなかつた、と、軍帽を外す仕草を交えて諏訪部はステイアと結衣に頭を下げ。それは彼にとつてもまた、浮き足立つて子供じみた期待を抱いてしまっていたことに對する内省であつたし、自罰のようなものであつた。

軍部はどうにも呪術甲冑やオケアノス級、そして呪術回路を組み込んで生まれ変わった航宙艦を当てにしている節があるもの、もし、自身が想定しているような最悪の事態があつた場合、頼りになるのは魔法少女をおいて他にない。

だからこそ、諏訪部にとつてのマジカル・ユニットの再編は急務であるといえ、水面下では着々とその動きは進んでいる。

元より一回でどうにかなるとは考えていない。自身が結衣の元を訪れたのはいわば楔を打つためだ。

一方で頭を下げながらも、マジカル・ユニットについての資料を差し出すという官僚的な芸当を見せる諏訪部を、ステイアは本能的に好きではないと、そう感じていた。

「どちらにしても君たちをどうしようという話ではない、礼を言いに来たのと、話を持ちかけたいただけだ。君の傷が癒えてからでいいから、検討してくれるとありがたい」  
「……考えておきます」

「感謝するよ、小日向結衣。それじゃ俺は、上層部に絞られに帰るとするか……水瀬絵理、君はどうする？」

おどけて両肩を上げてみせながら、諏訪部はおもむろに立ち上がると、同行していた絵理へとそう問いかける。

絵理としては結衣の近くにいてあげたい、できることならその生活の何もかもを支えてあげたいと願っていたものの、生憎後方任務から外れていない都合上、それは叶わないことだ。

「わたしは……戻ります、まだ……任務がありますから……」

「そうか、感謝するよ」

いつの間にか現れていた同居人であるスティアに、ふるふるすると震える小動物のように威嚇の視線を送りながら、絵理もまた諏訪部と共に本部へと戻ることを選択した。

吐き気を堪えながら立ち上がって、結衣は玄関先から絵理と諏訪部の背中を見送っていたが、その胸中は決して穏やかなものではない。

絵理ともう一度会えたという嬉しさはある。諏訪部の言っていることが、現実を見据



えた堅実な選択肢であることもわかつている。

マジカル・ユニット。また再び地獄に赴くための、その時が来たときに必要な切符を手にしたまま、心配そうに頬を寄せるスティアの温もりと、髪から散りばめられる粒子に身を委ねるように、結衣は微かな溜息をつくのだった。

## 17. 魔法少女と蠢く思惑

「虎の子の呪術甲冑を一機、パイロットを一人失って除隊した魔法少女に助けられる……これが何を意味しているか、わからないはずもあるまい！」

握った拳で机を叩き、そのカイゼル髭が目立つ厳しい顔つきをより険しいものに変えて、軍務局長は諏訪部を詰問していた。

魔法少女に世論の支持が集まるということ自体は、3年前なら問題はなかったものの、今現在、地球が復興を遂げているのだという事実を喧伝するためにはその旗振り役は連邦政府であらねばならず、また、属人化した力というのは制御が難しく、局地的なものではない以上、より大きなものを振り所にしたいという軍務局長の思惑が間違っているわけではない。

小日向結衣の行いが間違っていないなかつたことは世間に周知されているが、諏訪部が早めに手を回してマスコミに呪術甲冑の存在を伏せて報道するように圧力をかけていたため、軍務局長の懸念は、今のところ表沙汰にはなっていないなかつた。

あくまで、今のところ、と前置きがつく話なのだが。

それをわかっているからこそ、彼はこうして、顔を真っ赤に染め上げ、頭から湯気で

も噴き出しそうな勢いで自分に怒りをぶつけているのだろうか——諏訪部は直立不動で軍務局長からの叱責を受け止めつつ、思考の片隅でそんなことを思っていた。

あくまでもマスコミに圧力をかけただけで、生存者たちが呪術甲冑を目撃している以上、人の口には戸が立てられないということわざに倣って、彼が懸念している通り「魔法少女に匹敵する兵器」として鳴り物入りで開発された呪術甲冑への不信任は、必然的に高まることになるだろう。

とはいえそれは、遅かれ早かれ表沙汰になる問題なのだということは軍務局長も、諏訪部も理解はしている。

呪術回路が生み出す魔力が可変性を持たない都合上、そして市街地から局地戦まで、残存する敵星体の大きさを考慮して、五メートル程度に押さえ込まれたその体躯から生み出される出力には限界があり、だからこそバックアップとして、佐渡ヶ島奪還作戦にも魔法少女が何人か投入されているのだ。

「お言葉ですが局長、あそこで呪術甲冑を出撃させていなければ市民への被害は更に甚大なものとなっておりました。懸念される事項についても蓋はさせてもらっています、ですから」

「そんなことはわかってる！　だがな、これは人類の威信をかけた問題なのだよ！」  
軍務局長は聞く耳すら持たないといった様子で再び机を殴り付けるが、彼を支えてい

るものが保身や野心ではなく、あくまでも秩序の安寧という課せられた己の職務に忠実であるからこそ、否、忠実すぎるからこそ、自身が叱責を受けているのだということは諏訪部もまた理解していたが、納得はいかないものだった。

人類の秩序と安寧を取り戻すというのは、間違はなく義侠心や正義に従つての行動なのだろうが、それが行きすぎてしまえばろくなことにならないのは、人がいつの時代も繰り返してきた愚行であるのは周知の事実だ。

事実、軍務局長が口にして言っている言葉はそのような意図がなかったとしても、あの場で呪術甲冑を出撃させずに市民を犠牲にしろと、やたらと長いプロセスを踏む必要がある魔法少女の出撃まで待てと言っているようなものだった。

とんだ失言だな、と諏訪部は内心でそう感じていたが、ポストの頭に収まっているタカ派の筆頭である彼を引き摺り下ろすための対向勢力が連邦政府内にいない以上、カメラの向いていないところで多少過激な言動をしたところで、誰かが何かを咎めるわけではない。

「小官もそれは理解しております、ですから、魔法少女の出撃プロセスを再び簡略化する必要があると、マジカル・ユニットの再編が必要であると具申させていただいているのです」

「む……」

「呪術甲冑とオケアノス級航空戦艦は連邦の、復興のシンボルとして相応しい存在です、数が揃えば地球上に残った敵星体を叩き出すことも十分に可能でしょう、ですが、魔法少女という戦力を遊ばせておくのは勿体ない」

あくまで自然に、魔法少女ではなく、連邦防衛軍の戦果だけを喧伝すればいいのだと、諏訪部がそう進言したことで、軍務局長の額に浮かぶ青筋が引いてくれたことは幸いな話だった。

反面、こんなプロパガンダに加担している自分が、あの日世界を救ってくれた魔法少女たちを邪険にしているのと同じ行いをしている嫌悪が諏訪部の脊髄を伝って、ぬかるんだ泥に塗れた手でぬるりと脳髓をなぞる。

阿漕なことをしている。冷徹に現実を見据えようとしても、そんな自分への嫌悪が捨てきれない辺り、どこまでも自分は甘い男なのだ、自嘲することしか諏訪部にはできなかった。

(政治だな、こういうのは)

上の顔色を伺って、そのお題目を否定するのではなくその隙間に自らの要求を少しずつ差し込んでいく。

それが仕組みや悪癖そのものの破壊に至らずとも、今自分にできる最善の手だと確信しているからこそ、諏訪部はそういうことに向いていないと、平然とした顔で阿漕なこ

とをやり切れない器だと自覚していながらも、魔法少女を統括する部署の責任者であることを選んだのだ。

ならばそれが地獄であろうと、やりきる他にないのだろう。

そんな彼の覚悟はいざ知らず、軍務局長は彼からの提案である魔法少女出撃プロセスの簡略化という提案と、マジカル・ユニットの再編という提案の二つを持って帰っていた。

それは幸いなことだったと、敬礼をしながらも内心で諏訪部は、しめたものだと言わすにほくそ笑むのだった。



学校に再び通えるというのは結衣にとって喜ばしいことであるはずなのに、受けている授業も、食べている給食も、全てがどこか他人事のように思えてならない。

上流階級の子息たちが集う学校を背にしながら、今日も一人で結衣はステイアが待つている家への道をぽつりと歩んでいた。

もしステイアと出会っていないければ、自分とはとくに限界を迎えていたのではないかと、時折夕焼けを眺めて涙もなく涙が出そうになる度に、結衣はそう思うのだ。

あの家は、一人で暮らすのには広すぎる。

世界を救った魔法少女という肩書きは、一般社会で暮らしていくのにはどうにも大きく、重すぎるもので、クラスメイトからどこか遠巻きにされていることを、結衣は自覚していた。

結局のところ、守るべき者を守るために必要だと思っていた力は安寧の中では排斥されるべきもので、自分の居場所はその戦いの魔境、その中にしかないのかと思えば悲しみの一つも零れ落ちてくる。

世界を救った英雄。最強の魔法少女。

その肩書きに偽りはなくとも、その肩書を背負って生きるために、結衣の心はあまりにも脆く、危ういものだったのだ。

訳もなく溢れてきた涙を拭いながら、交差点の向こう側に見える街頭ビジョンへと目を向ければ、そこには地球連邦防衛軍が佐渡ヶ島奪還作戦に打って出た、というニュースと、その華々しい戦果が映し出されていた。

あのオケアノス級航宙戦艦に搭載された呪術回路搭載式の主砲による火力支援と、結衣が変身した時に見たものよりも重武装化している新型兵器——78式呪術甲冑に身を包んだ兵士たちが、次々と敵星体を打ち倒していく映像が流れる度に、足を止めた通行人たちが歓喜の声を上げる。

この分なら、国土の奪還は近いのではないか。

人類の勝利は間違いない。

熱狂する人々の波を避けるように歩きながら、結衣は熱病に浮かされたような人々からは遠く距離を離すように、大回りで家路へとつく。

このまま彼らが敵星体を地球から叩き出してくれるのなら、それでも結衣は構わなかった。

だが、普通に考えれば戦線に投入されているはずの魔法少女の活躍が喧伝されていないのは、そういうことだろう。

自分たちは捨てられたのだ、とやるせない思いを抱きながらとぼとぼと歩く中で、結衣の胸中に、突如として昨日諏訪部から持ちかけられた提案が零れて落ちる。

——マジカル・ユニットの再編。

それは今の軍部の主導的な意見とは相反するものだと、今の映像を見れば理解はできた。

ならば、潮流に逆らっても再編が必要になる根拠とはなんなのかと、それを考えれば背筋が粟立つのも無理はない。

「……私は、どうしたいの？」

スティアなら、なんと答えてくれるだろうか。



過去から這い出てくる恐怖と、今、そこにしかきつと居場所はないのだろうかという確信の間で板挟みになりながら、結衣はぽつりと、枯れ葉のように頼りない言葉を呟くのだった。

## 18. 魔法少女と佐渡ヶ島奪還戦

## 魔法少女と佐渡ヶ島奪還戦

佐渡ヶ島に到着していた「赫星一号」の破片は、オケアノス級航宙戦艦「オケアノス」「オールト」「オラシオン」の三隻による火力投射で完膚なきまでに破壊され、地上に蔓延っていた敵星体も、概ね呪術甲冑を身に纏った陸戦隊の活躍によつて排除されつつあった。

包み紙に抱かれた飴玉と魚を融合させたようなタイプ・キャンデイの群れを、呪術礼装として再定義されたアサルトライフルの一斉射撃が葬つて、先日は苦渋を舐めさせられたタイプ・クツキーの変異体には、背中に装備しているロングレンジキャノンから放たれる徹甲弾が、これでもかとはかりにご馳走される。

「へっ、どうだ星屑ども！ 装備が揃えばなあ、てめえらなんざ地球から叩き出してやれんだよ！」

陸戦隊の一番槍、最前線を務めている内藤が咆哮と共に引き金を引くと、HUDと連動したカメラアイが搭載されているバイザー型の頭部が、鬨志の炎を宿したかのように勇ましく煌めく。

最早この戦場に魔法少女の出番などないと、そこまで驕った考えを抱いているわけではないにしろ、3年前はただ囿になることしかできなかった兵士たちにとつて、まともな反撃ができるというのは、士気の向上へと大いに貢献していた。

呪術回路だの魔力だの、当てにならないようなオカルトを無理やり人類の法則に当て嵌めさせたそれは、名付けという呪いを根幹にしているものだったが、前線に立つ内藤たちのような人間からすれば、それがオカルトだろうが理路整然とした科学の産物だろうが、あの憎い敵星体を叩き出せるということだけで十分だった。

十分な数と装備を揃えた呪術甲冑は、魔法少女の代替を名乗るのに相応しい活躍を見せているが、それでも餅は餅屋だという場面は戦局においては往々にして存在する。

『警告！…この反応は……タイプ・シヨコラータです！』

「なんだと!? 話が違っちゃねえか!」

内藤に届けられたその報せはまさしく、戦場における不確定要素を体現するものであり、そしてフル装備の呪術甲冑をもつても敵うかどうか、まともに戦えば相応の犠牲を覚悟しなければならぬという凶報だった。

地平線を埋め尽くすタイプ・キャンディとそれらを従えるタイプ・クッキー、そして彼らを統括する変異体をその腹から吐き出しながら、シヨコラータという可愛らしい名前に見合わないその「蟲」は二匹、ビルにも匹敵する体躯を唸らせて、戦場に地響きを

起こす。

「畜生、奴ら『母艦』型か！ 破片しか残ってねえってのに、よくもまあこんなもんを守ろうと……！ おい、マジカル・ユニットの支援はどうなってる!？」

通信を飛ばしてきた「オケアノス」のオペレーターに向けて、内藤は戦闘行動を継続しつつラインを下げながらそう問いかける。

佐渡ヶ島攻略作戦にも、マジカル・ユニットが投入されるというのは諏訪部の手回しで周知されていたことだった。

悔しいが、今の78式呪術甲冑が一機で戦うために想定している相手は精々タイプ・クツキーが限界であり、それを超えるとなれば、犠牲覚悟の特攻戦か、そうでなければちようど今のように餅は餅屋として魔法少女への救援を頼む他に道は残されていない。

しかし、事前に偵察衛星から送られてきた情報では佐渡ヶ島に到着した「赫星一号」周辺には最大でもタイプ・クツキーしか確認されておらず、そもそも変異体がいること自体がイレギュラーであったというのに、その上で「母艦」型のタイプ・シヨコラータまで出てくるとなればこの数日で佐渡ヶ島は敵星体のテーパークにでも改装されたということになる。

ふざけた話だと思いながらも、長い承認を経なければ出撃できない魔法少女たちに再び頼らざるを得ないという忸怩たる思いを抱きながらも、内藤たちのような前線の陸戦

隊は菌を食いしばって、敵星体の進撃を食い止めていた。

『各省庁及び連邦政府からの承認を確認、マジカル・ユニット、戦線に投入します！』  
「やっとか！ お姫さんたち、悪いがああ、蟲野郎共は任せませ！ それまでは雑魚どもを食い止めるのが俺たちの仕事だ！ いくぜ野郎共お！」

『応！』

内藤の呼びかけに応じて、後方で待機している「オケアノス」のカタパルトから、今回の戦線に投入された魔法少女が到着するのを待つ傍で、激励の声を上げた彼の言葉に従って、陸戦隊はあくまで波濤のように押し寄せてくるタイプ・キャンデイやタイプ・クッキーへと手持ちの兵器による一斉射撃を放つ。

呪術回路による魔力のオーバーコートが施された弾頭は容易く敵星体の障壁を貫き、四散させるが、佐渡ヶ島に投入された78式呪術甲冑の数をもつてしても、戦局が押し返されつつある辺り、あの「母艦」級の存在は相当厄介だ。

そろそろ弾切れが見え始めてきたという、HUDに表示される警告を一瞥して、内藤が舌打ちをしたその時だった。

「よっしや！ そんじゃいっちょ始めますか！」

「わたくしの初陣を飾るのがタイプ・シヨコラータ……相手にとって不足はありませんわ！」

「来たかー！」

前線へと猛スピードで合流してきた、フリルがふんだんにあしらわれている、いわゆるゴシッククロリータと呼ばれるような衣装に身を包んだ二人の少女は、内藤の言葉通り押し寄せてくる敵星体の群れに見向きもせず、最低限立ちほだかる変異体だけをそれぞれの得物で処理しながら、「母艦」級の前に立ちほだかる。

一人の少女が持つ装備は、誰が見ても異様なものだった。

オレンジ色に近い色合いの髪の毛に、似たような色を持つ瞳をした少女、三上美柑がその得物としているのは、歪なまでに弾倉とバレルが肥大化しているリボルバー拳銃——もはやそれは拳銃ではなくキャノン砲と呼ぶべきものだ——と、一振りの直刀というレンジがちぐはぐな武装、魔法少女たちにそれぞれ星から分け与えられた魔法星装だ。対して、その隣に並び立つ、金髪に青い瞳と赤い瞳のオッドアイという出で立ちの魔法少女、「原初の七人」ではなく、戦後に生まれた「第二代魔法少女」の第一号たるアンジエリカ・A・西園寺の魔法星装は、ハサミのような形状をした、というよりも巨大なハサミそのものと言いつけるようなものだった。

「行きがけの駄賃だよ、アタシからのサービスだから取つといてね、つとー！」

美柑はリボルバーカノンに魔力を込めると、陸戦隊に襲い掛かろうとしている敵星体の中心に魔力を込めた炸裂弾の一撃を発射して、その全てを殲滅すると、それを合図に

して、右手に保持した直刀で、今も敵星体を生み出し続けているタイプ・シヨコラータ、「母艦」級へと果敢に切り掛かっていく。

相も変わらず「原初の七人」が持つ魔力は桁外れだと、同じ魔法少女であるはずのアンジェリカもまたどこかで呆れたような想いを抱きつつも、今まで受けてきた訓練を思い返し、気を引き締めて「母艦」級へと果敢に切り掛かる。

最大クラスの敵星体であるタイプ・シヨコラータ、その中でも「母艦」級とエンカウントしたことは不幸かもしれないが、同時に幸いでもあった。

何故なら、「母艦」級は敵星体を生み出すことだけに特化していて、単体の戦闘能力は、魔法少女から見れば大したことはないからだ。

「よっしゃ、行くよ！ 魔力解放！ これがアタシの……『シユテルンナイト』だっ！」  
「魔力解放！ わたくしに力を示さない、『ズヴェズダユーズ』！」

二人の魔法少女が同時に叫びを上げて己の得物、魔法星装を振りかざしたかと思えば、そこに顕現するのは純然たる「力」の発露であり、「星の悲鳴」を聞き届けた者にか出力することができない、魂をバイパスとして現世に出力された高次元からのエネルギーが、ビルにも匹敵する巨体を持つ敵星体をいとも容易く灰燼に帰せしめる。

「なんだあ、ありゃあ……」

魔法少女は戦略級兵器に匹敵する存在であると聞いていて、3年前の戦場でも、数日

前の池袋でもその実力を目の当たりにしてきた内藤だったが、そんな彼でも未だに不条理だと思えるほど、魔法少女の持つ力は凄まじい。

結果として、佐渡ヶ島奪還戦を人類の勝利へと導いたのは、連邦が威信をかけて開発した新兵器ではなく、遅れて戦線に投入された魔法少女だったということだ。

それをどこまで諏訪部が見抜いていたかはわからない。もしかすれば、本当にお守り程度の意味で再編されたマジカル・ユニットは投入されたのかもしれない。

だが——結果が示すものは、無慈悲な救済であり、メデイアの報道に反して、人類がまだまだ、魔法少女という属人化した戦力に頼らざるを得ない現実であることに、他ならないのだった。



## 19. 魔法少女、立ち上がる

街頭ビジョンで華々しく宣伝されていた佐渡ヶ島奪還戦の様子を見送って、結衣はスティアが待っている自宅へと帰っていった。

帰った時に誰かが待っていてくれるというのは、どんな形であれ久しぶりで、ひび割れた心が癒されていくような感覚と、同時に思い出す過去の幻影に足を掴まれるような感覚が同居する複雑な思いが、結衣に吐き気を覚えさせる。

忘れていない。忘れはしない。

両親のこと、同僚として戦線に立った魔法少女のこと、そして、自分のせいで失わせてしまった命のこと。

全てを背負って生きていかなければいけないという覚悟が、結衣を雁字搦めに縛り付けて、離すことをしないのだ。

本当ならば、背負わなくてもいいことまで背負い続けるその律儀さは美德だといえるのかもしれないが、それは同時に自壊の引き金でもある。

わかっている。わかっている。どうしようもなければ、結衣にはそれ以上の最善など見つけれないから、こうして今も泥沼の中でもがき続けているのだ。

そんな吐き気を堪えながら鍵穴に差し込んだ鍵を回して、家の扉を開けば、自動で点灯してくれた照明が、待っていてくれたスティアに結衣の帰宅を告げる。

「結衣……！」

スティアはぱあつと、光の花が綻ぶような笑顔を浮かべて、揺れる髪の毛から粒子を零しながら、顔を青くしている結衣に抱きついた。

その三十六度の温もりは、壊れかけて凍えている心にはあまりにもあたたかくて、つい涙を零してしまいそうになるが、ただでさえ記憶を失っている彼女にこれ以上負担をかけるのは良くないだろうと、結衣は涙を堪えて、スティア細い背中に手を回す。

抱き合う温もりというのも久しく忘れていたことだ。

伝説の英雄であることを、戦後に上映されたプロパガンダ映画の中の「魔法少女小日向結衣」であることをどこかで期待されている学校よりも、何も知らずにいてくれる、今の擦り切れて壊れかけている自分を肯定してくれるスティアの隣の方が、やはり居心地がいい。

そんな衝動をぶちまけたくなる気持ちを堪えて、結衣はスティアとしばらく抱き合っていた。

「結衣……結衣は、悲しい？」

「……どうして、スティア？」

「だって結衣は……泣きそうな顔をしてる、何か嫌なこと、あった？」

覗き込む角度によつて色を変える不可思議な瞳は、自分の底までも覗き込んでいるように、結衣はスティアのそんな底知れなさに少しばかり背筋が粟立つのを感じながらも、同時にどこか救われたような気持ちを抱く。

こうでもしなければ自分は多分、負った傷のことや背負っているものについて語ることはしないだろう。

諏訪部のように打算や妥協の垣間見える大人たちを心の底まで信頼することができないのなら、スティアがいなければ結衣はそれを墓まで一人で持つていったことだろう。

そんな無邪気で無垢な問いかけにどんな言葉で返そうかと思索するが、浅い言葉で返したところでスティアの星に、その光に照らされてしまうだけだとはわかっていた。

それでも、記憶を失った彼女に余計な心配はかけさせまいと、引きつった笑顔の出来損ないを口元に浮かべながら、結衣はそこに真実を端折った事実を述べる。

「ん……学校より家の方がいいなって、そう思っただけ。だって、安心できるから」

大人のやり口だな、と、諏訪部のことを思い返しながら結衣はスティアへとそう言った。

本音を話しながらもその全てを打ち明けることはしないという小狡さは、自覚こそし

ていても少しだけの罪悪感をもたらすものだ。

ただ、ステイアはそれをわかつているのかわかっていないのか、大して気にした様子もなく、小首を傾げて結衣へと問いを返していた。

「学校……色んな人が勉強をする場所……ステイアには、わからない……でも、ステイアは結衣がいないと、寂しい……」

「……そっか、ごめんね」

待っている側にも待っている側の辛さがある。それをよく知っているはずなのに、結衣はステイアを待たせてしまっていることに何の疑問も抱かなかった自分を恥じて、小さく頭を下げながら耳元で謝罪の言葉を囁く。

今も軍に身を置いていたなら、ステイアを学校に送り込むことぐらいはなんとでもなりそうなものだったが、生憎今の結衣は除隊した民間人にすぎない。

そんな民間人、ただ魔法少女としての力を持っているだけの少女が、記憶もなければ戸籍もないという状態のステイアを学校に連れていくのは、到底無理な話だった。

「……ステイアは、どう？ 学校に行ってみたい？」

「学校……ステイアには、わからない……だけど、結衣がいるなら、行ってみたい……」  
「そっか、ありがとう」

どんな形であれ、自分が必要とされているという事実は結衣にとっては嬉しいもの

だったし、それがスティアから向けられるとなれば、胸の中があたたかい綿で優しく締め付けられているような感覚を抱いてしまうのも、また道理だ。

自分はこの少女に相当入れ込んでいるのだと、そんな情けなさや危うさを自覚してこそいても、スティアの無邪気に輝く笑顔や、親を求めて縋り付いてくるような雛鳥にも似た仕草には、渴いた心が潤っていくのを感じずにはいられない。

きつとそれは、彼女がスティアだからなのだろう。

結衣はその不可思議な髪と瞳をかき抱くように、しかし、壊してしまわないようにと優しく背中を回した腕に力を込めて、粒子を纏った、金色とも銀色ともつかない色合いの髪に顔を埋めた。

使っているのは同じシャンプーとリンスのはずなのに、まるで別物のようにふわりと立ち上った微かな香りが、結衣の鼻先を柔らかくくすぐって、すうっと消えていく。

「結衣、くすぐりたい……スティアは、むずむずする……」

「あ、ごめん……なんだかスティアと一緒にいると、安心できる気がして」

「ううん、大丈夫……スティアは、ちよつとくすぐったかっただけ……結衣は、こうしていたい？」

俯いていた視線を上げて、どことなく悪戯っぽい笑みを浮かべたスティアがそう問いかける。

いつまでもこうしていたいし、なんならそのまま眠りに落ちてしまいたいというのが結衣の本音ではあったものの、家に帰ってきた以上、夕飯の支度や風呂掃除など、やらなければならないことは色々あった。

流石にそこから目を逸らすのは年頃の女子としてどうなのだと思ふ苦笑を浮かべながら、結衣が抱擁を解いたその瞬間だった。

結衣はきいん、と、耳鳴りのような甲高い音が鼓膜の裏で反響したような錯覚を抱く。

最初はそれこそ耳鳴りかと思つて夕食——と、いつても配給品の缶飯やレーシヨンの類を温めに行こうかと思つたが、ステイアが蹲つているのを見て、その考えは即座に棄却された。

シヨツピングモールでの一件が走馬灯のように結衣の脳裏をよぎる。

まさか、またなのか。

ステイアが震える唇から言葉を紡いだのは、恐る恐るといった調子で結衣が手を差し伸べながら屈み込んだ時だった。

「来る……！ ステイアは、怖い……とても大きな……大きな何か、来る……！」

「大きな、何か……」

ステイアの直感とでもいうべきものに間違いないというのは、先日の一件から理解

しているつもりだった。

そんなステイアがショッピングモールの時以上に怯えを抱くような何か来る、というのを取りも直さず、この前よりも遥かに強力な危険が迫っているということだろう。

どうして、彼女がそんな直感を持ち合わせているのかはわからない。

リビングルームの机に置きっぱなしのまま放置しているマジカル・ユニットへの編入のために必要な書類を思い返ししながら、結衣は怯えるステイアを抱き締めて、考えを巡らせる。

自分は最早ただの民間人で、それだけ大きな脅威が迫っているということは連邦防衛軍が動かざるを得ないということだ。

ステイアを怯えさせる敵星体がどこから来ているかについては、己の内側に宿っている「星の悲鳴」を辿ればすぐにわかる。

そして何食わぬ顔で地下都市への避難を果たせば、事態はそれで済むのかもしれない。

佐渡ヶ島奪還戦の後、オケアノス級航宙戦艦をはじめとする連邦防衛軍の精鋭部隊が何をしているのかはわからないが、これだけの危機を無視することなどできないはずだと、結衣はどこか現実逃避のようにそんなことを考えてしまっていた。

だが。

気付けば結衣は立ち上がり、その手には魔力が具現化させた魔法星装——「ロンゴミニアスタ」が握られている。

「……結衣、行くの……？」

ステイアが向けてきた問いかけに対して、すぐさま明確な返事ができるほど結衣の心は癒えておらず、今もまだ迷いの中で反射的に身体が動いていたといった方が状況的には近かった。

確かに連邦防衛軍が動くのを待てば、それで済むかもしれない。

だが、軍が動くまでの時間でどれだけの市民が犠牲になるのかを考えれば、今最も自由に関ける最大戦力は自分だという事実から目を背けるわけにはいかなくなる。

そんな怯えを感じ取ったのか、自身の手を握りしめてくるステイアのそれも微かに震えていて、やはり怖いものは怖いのだと、内側から滲み、這い出てくる恐怖に足元を掴まれながらも、それを振り払うように結衣は一步を踏み出す。

「ごめん、ステイア……私は」

「ううん、いいの……でも、ステイアは、心配……結衣は、戻ってくる……？」

「……ええ、絶対。絶対に、戻ってくるわ」

誰かがそれをやらなければいけないのなら、期待の人が自分でなかったとしても、目の前に迫る脅威をなんとかできるだけの力があるのなら、やるしかないのだ。



「ドレス・アップ！」

解号を唱えれば、すぐさま結衣の身体は光の繭に包まれて、その服装は指定の制服から、フリルがふんだんにあしらわれたゴシックローリータのドレスへと変わっていく。

この3年間に守ってきたものに価値があると示すためにも、人々の命をこれ以上敵星体に奪わせないためにも、結衣は擦り切れた心を引きずりながら、ステイアと抱擁を交わすと、脇目も振らずに家から飛び出していくのだった。

## 20. 魔法少女、立ち向かう

「お台場近郊に敵星体反応！ これは……タイプ・シヨコラータ……？ いえ、もつと大きな反応です！」

結衣が家を飛び出したその時、地球連邦防衛軍極東管区総司令部では、突如として現れた巨大な敵星体反応にオペレーターたちが慌てふためき、それを眺める軍人たちの間にも動揺が走っていた。

「またもか、と、誰かが零したのを皮切りに、呪術結界への不信を呟く声上がり始めたのも、無理はないといえるだろう。」

外部からの侵入に関してはタイプ・シヨコラータクラスの相手であっても防ぎ得る大きさの呪術回路に核融合炉と地脈からのエネルギーを注ぎ込むことで、東京に張り巡らされた呪術結界は相当な強度を確保しているはずだったが、内部に直接侵入されたのであつては、その守りが意味を成すことはない。

しかし、どんな絡繰でこれほどの質量を結界内部に転移させてきたのか、あるいは――考え込む諏訪部の意識を現実へと引き戻すように、軍務局長の叱咤が司令部へと響き渡る。

「ええい、何を惚けている！ オケアノス級を向かわせられんのか!」

「オケアノス級をはじめとした主力部隊は現在佐渡ヶ島の掃討戦と実地調査に入っています、呼び戻すとしても時間が……!」

「くっ……こうも裏目に出るか!」

オペレーターの必死な返答に、無理にでも呼び戻せと答えない辺りはまだ、タカ派の筆頭である彼にも善性が残っている証左であったのかもしれない。

だが、事実として今、佐渡ヶ島に派遣されているオケアノス級を一隻呼び戻すにしても、それまでの時間で東京湾からゆつくりと歩を進める、化け物じみた巨体を持つ、怪獣としか表現できないような敵星体が本土に上陸するのは避けられないだろう。

本土防衛のために残している呪術甲冑の数は、数が心許ない。

その装備は一応試験を終えた、対星装備と呼ばれる、佐渡ヶ島に投入されたものと同じアーマメントも施されているが、何せ残された数と、乗り手が戦闘機からの機種転換訓練を受けている最中のパイロットしかいないのだ。

そんな状況である巨大な敵星体を、街への被害を出すことなく軍の力だけをもって押さえ込むのは、無理難題を通り越して事実上不可能だといえた。

「軍務局長、ここはマジカル・ユニットの投入を進言します」

「う、む……だが、今からでは……」

「今からでもやるんです、端折れる手続きは端折って、一人でも多くの市民を救うことが軍人としての責務であると、小官は存じております」

諏訪部はすぐさまマジカル・ユニットの緊急投入を軍務局長へと宣言するが、それでも多少の犠牲を容認するのには変わらない。

平和に慣れきった代償として、魔法少女を過ぎたる力だと首輪をつけていたツケが回ってきたといわれればそれまでの話なのだろう。

だが、それを鑑みても現状は異常な状況であることに変わりはない。

諏訪部は軍務局長を真つ直ぐに見据えながら、彼がその上司である防衛長官へと指示を仰ぐのを催促するかのようにつきを鋭くする。

ここまで来れば、面子がどうのこうのといっている暇などない。

人類に課された至上命題は、3年前から何一つ変わってないなかつたのだ。

ただ、生き残れ。どんな代償を支払うことになったとしても、多くの命を守り、救い通し、種としての人類を存続させろ。

突如として発生した巨大敵星体の襲撃は、喉元を通り過ぎたことで忘れ去っていた人類の危機感を喚起するのには十分であった。

「マジカル・ユニットの出撃要請議決に入る、それまでは——」

「はっ！ 呪術甲冑を向かわせませす、何としてでも時間を稼ぎ、タイプ・シヨコラータ、

その変異体の東京湾上陸をなんとしても阻止いたします！」

こんな時にも書類とハンコが必要になるのか、と、防衛長官が返してきた紋切り型の回答に忸怩たる思いを抱きながらも、諏訪部はそれを表に出すことなく、現状で打てる最善の策を提案する。

最悪は、退役艦扱いになっている「山城」を引っ張り出して、地上におけるタキオン粒子砲の発射という禁忌を犯す覚悟で、彼は東京に残されているマジカル・ユニット、その中でも最強である「原初の七人」の一人たる水瀬絵理及び、第二世代魔法少女たちの出撃要請議決案を、手元のコンソールを操作する形で提出した。

オケアノス級三番艦「オラシオン」にも東京へと反転するように軍務局長は指示を下しているため、「山城」を引っ張り出すような事態にはならないだろうと考えつつも、常に最悪を考えて動くのが諏訪部という男だった。

マジカル・ユニットによる殲滅も不可能であったのなら、「オラシオン」の艦首に搭載されている二連装タキオン粒子砲をあゝの怪物にぶち込む以外に、勝利の道は残されていない。

例えばそれが地上で二発ものタキオン粒子砲を同時発射するという禁忌を超えた禁忌を犯すことになったとしてもだ。

人類は生き残らねばならない。

それは諏訪部に限らず、連邦防衛軍全体が共有している認識であったし、そのために動いてくれているというのは幸いであったが、染み付いた官僚主義的な悪癖から来る枷が外れないのは、どうにももどかしい。

だが、今が平時であればその判断は間違っていないのだから、どうにもならないものだ。と諏訪部は俯きながら、静かに唇を噛み、固く握った拳を震わせた。

「待つてください、魔力反応が一つ、お台場まで向かっています！」

「衛星からの映像を出せ！」

「は、はい！」

だが、この絶望的な状況でもただ一人動ける存在がいる。それを諏訪部は忘れていたわけではない。

オペレーターへの報告を聞くなり、すぐさまその様子を映し出すように伝えた彼の視界に映ったものは、ノイズ状に揺らいでいる映像を補正することでくつきりと浮かび上がった、そのただ一人——今は除隊したことで民間人となっている「原初の七人」が一人、小日向結衣の姿に間違いはなかった。

だが、戦えるのか。

あのスティアという謎の少女との同居生活は結衣の心に良い影響をもたらしているのは確かなようだったが、未だに結衣の心は擦り切れ、傷つき果てた状態であることに

変わりはないのだから。

「長官、これは……」

「うむ……議決の採択までは時間がかかる、彼女が誰かはわからないが、時間を稼いで貰う他になかろう」

「ええ、全くです。正体不明の存在に我々の命運を託すことになるのは屈辱ですが——死に絶えるよりは万倍良い」

要は、誰かわからないが協力者がいてくれたものの、その仔細について調べることはしないという話だ。

すつとぼけた、官僚的なやり取りを交わす形で、防衛長官は結衣の単独先行を黙認する。

この状況においては、連邦政府に国民の信頼の全てを寄せたいと目論んでいる軍務局長も言葉を挟む余地もなく、ただ聞かなかつたフリをして、マジカル・ユニット出撃までの議決を眺めているようなポーズをとっていた。

諏訪部はそんな彼へと少しばかりの皮肉がこもった視線を向けると、瞬く間にお台場へと急行していく結衣の姿へ望みを託すかのように、ゆつくりと目を伏せるのだった。



戦いは終わってなどいかなかった。

魔力によつて音速を超えたフライトを敢行しながら、結衣は改めて突きつけられたその事実吐き気を堪える。

どんな理由で、何が原因で全ての敵星体を殲滅したはずの東京にあれだけの質量を持った敵星体が突如として現れたのかはわからない。

仮に考えるのが結衣ではなく専門の研究者であつたとしても、その問いに対して正確な答えを出せる者はいないと断言できるだろう。

ならば、重要なのは事実の方だ。

高層ビルにも匹敵する巨体を持った敵星体が、東京湾から本土を目指して侵攻している。

それを食い止めなければ、多大な犠牲を払うことになるのは目に見えている。ならば、結衣が今為すべきことは一つしかない。

幸いなのは敵がこの前のように陸地ではなく海に現れてくれたことだ。

海上であれば、多少大掛かりな魔法を使つても、市街地に影響が及ぶ心配はない。

逆にいえばあの敵星体——タイプ・シヨコラータの変異体が地上に上陸してしまえば、それだけで一巻の終わりであるということだ。



自分の魔力量であれば、どうにかなる、どうにでもできるはずだと鼓舞するように、衣は己にそう言い聞かせながら、思考誘導弾を周囲に展開して、巨大敵星体が待ち受ける東京湾へと到達するのだった。

## 21. 魔法少女、再び

地下カタパルトを利用して、周辺に連邦防衛軍が有する78式呪術甲冑は何機か展開し、以前見かけた時とは違う重装備で巨大変異体への攻撃を加えていたが、五メートルクラスの呪術回路に込められた魔力では、例え魔導徹甲弾であったとしてもその装甲を貫くには至らない。

加えて、結衣が上空で観察する限り、現在あの怪獣としか表現できないような変異体の迎撃に当たっている部隊は、以前に池袋で遭遇した部隊と比較して、全体の動きがどうにも鈍いように感じられた。

巨体を有する敵星体は、その質量に反して動きは機敏だというのが相場だったが、流石に高層ビルにも匹敵する質量を機敏に動かす技術なのか、あるいは別な何かなのか――どちらでもいいが、そういった類のものを敵は持っていないらしい。

『怯むな、火力投射！』

『しかし新堂隊長、奴さん倒れる気配がありませんぜ！』

『馬鹿野郎！ 効かなかろうがなんだろうが一秒でも長くここであいつの足を止めて、マジカル・ユニットの到着を待つのが俺たちの仕事だろうが！』

新堂と呼ばれた、頭部からブレードアンテナを生やしている呪術甲冑、その指揮官機に搭乗している男は弱気になった部下を叱咤するが、本音をぶち撒けてしまうのであれば、自分もこんなところからはさっさと撤退したいというのが正直なところだった。

あの地獄、航空隊の生還率が一割を切った「救世の七人」作戦と比べても遜色ないほど、連邦防衛軍側にできることは何もない。

呪術甲冑が完成すれば、敵星体と兵士がまともに渡り合うことができる——魔法少女になつてしまったがために、犠牲の羊として最前線に送り込まれる存在を減らせると信じていたからこそ、新堂は戦闘機から呪術甲冑への機種転換を申し出たのだ。

だが、そのお題目に反して、現状はあの地獄と何も変わっていないのだから、馬鹿野郎と罵声の一つも飛ばしたくなるのは道理だといえよう。

新堂の一人娘もまた、名もなき英霊となった魔法少女だった。

3年前の「赫星戦役」、その戦端が開かれてからというもの、生まれ出た魔法少女の損耗率は実に九割以上に達している。

戦時中に誕生した、結衣のような魔法少女——「第一世代魔法少女」と呼ばれる存在は、戦間期に誕生した「第二世代魔法少女」、戦後に誕生した「第三世代魔法少女」と比べて極めて強い力を持つていたらしいが、それでも人というのは死ぬ時は死ぬ。

軍人であったからこそ、新堂にはそれが実感を伴って理解できていたし、だからこそ

娘が「魔法少女として戦う」と言い出した時は反対もしたものだ。た。

「3年の……3年の結果がこれかよ！ クソがあッ!!」

だが、娘は死んだ。

華々しい戦果を挙げたわけでもなく、ただ当たり前のように、戦場の摂理に従うかのように、油断していたところをタイプ・クッキーの「爪」に貫かれ、タイプ・キャンディに食いちぎられ、その遺骸は無惨なものに成り果てていた。

親として何もしてやれなかった無力を呪うかのように、死に場所を求めて新堂は最前線に志願し続けたことを覚えている。

だが、その度にどういうわけか生き残ってしまった。

あの「救世の七人」作戦でも、東京奪還戦でも、四同然である航空隊として志願して、生き残り続けてしまったのだ。

それならば一匹でも多くの敵星体を殺し尽くして、この星から叩き出して死のうと、そう選択した彼を嘲笑うかのように、現実として無力が突きつけられるのだから、叫びたくもなるというものだ。

「なあ、真穂……俺もそっちに行つていいのか？」

回線を全て切つて、狭苦しいコックピットの中で新堂は一人、ぼつりと呟く。

結局のところ何を目論んでも、何を考えても運命の女神はそれを嘲笑い続け、無様に

生き恥を晒し続けた結果がこれだ。

ならば、もう運命に身を委ねて死を受け入れることが正解なのではないか。

新堂が乾いた笑いと共に、突きつけられた絶望へ落涙した、その瞬間だった。

大量の魔力反応が、どれだけ魔力を帯びた徹甲弾や通常弾頭をぶち込んでも身動き一つしなかった巨大な変異体、その巨体を揺らがせる。

「誰も死なせない……もう、誰も……！」

HUDに投影されているその姿は、およそ鉄風雷火が吹き荒ぶ戦場には相応しくないゴシックロリータ調のドレスを身に纏う、長い薄桃色の髪を爆風に靡かせる少女のものだった。

悲壮な覚悟をその背に負った顔は既に少女のあどけなさを奪い取っており、彼女の赤い瞳からは光と呼べるものを感じ取ることができない。

その顔に、新堂は奇しくも見覚えがあった。

確か、「救世の七人」作戦を成功させた立役者である「原初の七人」、その一人である小日向結衣という名前だったはずだ。

結衣の方は生憎、新堂のことを覚えていなかったものの、その悲壮な顔つきは、抱えている絶望は、彼が命を手放そうとした時に抱いたものと同じであるように思えた。

「なんて目え、してやがる……！」

己の写し鏡のような表情で、しかし力だけがまるで赤子と大人のように違う少女を見上げて、新堂は静かにそう呟いた。

虚ろな結衣の瞳は、生者のそれというよりも死者のそれに近く、纏うドレスも舞踏会に赴くのではなく葬礼に向くかのような雰囲気を与える。

だが、そんな新堂たちのことも、自分がいかに悲壮な顔をして戦っているのかも、結衣の頭の中からは抜け落ちていた。

「魔力誘導弾は効いた……でも、殺しきれない」

あの変異体は、怪獣映画から抜け出てきたような外見をしているものの、今のところその手の特撮で定番である熱線の類を吐いてくる様子はない。

質量の構築で何らかのリソースを使い果たしたのか、あるいは質量そのものでゆつくりと人類を押し潰すことが目的なのかはわからないが、遠距離への攻撃手段を持っていないのならば、結衣の前には木偶の坊に等しい。

魔力誘導弾の一点集中射撃を喰らったことで危機を感じたのか、変異体は海中から足を出して侵攻する速度を早めようと試みるものの、結衣が断続的に放ち続けている魔力誘導弾の前には無力であり、大きく体勢を崩して海中に転倒する結果を晒す。

「そのまま殺しきる、殺しきる、殺し、きる……」

耳鳴りのように脳裏を打ち付ける死者たちの言葉に引き摺られ、吐き気を覚えながら

も結衣は自身の魔法星装である魔法の杖、「ロンゴミアスタ」を構えて術式を構築する。

しかし、結衣の行いは変異体にとっては相当な屈辱を与えたいらしい。

ゆつくりと巨体を起こしながら、耳をつんざく咆哮を上げる敵星体は、とうとう結衣が恐れていた唯一の手段を解禁することを選んだようだった。

ぼろぼろと、全身から体組織を剥離させながらも、大きく開けた口に、エネルギーが集中していくのを結衣は術式の構築中に感知する。

タイプ・シヨコロータ、加えてその変異体である規格外の巨体を持つ個体が、その質量の全てを熱量へと変換すればどうなるか。

呪術結界の外側からならばいざ知らず、ここは内側だ。

ならば答えは自明であり、それだけは絶対に避けなければいけない。

自分にどれくらい「猶予」が残されているのかはわからないが、あの「赫星一号」を迎撃した時と同じように、魂と高次元の接続をより強固にした一撃を放つことも考慮しながら、結衣は構築していた術式を完成させる。

「魔力解放、術式展開！ サクラメント……」

『G a a h h h h h h h!!』

「バスターー！」

巨体を崩壊させながら放たれた敵星体が吐き出した熱線と、結衣の魔法星装から放たれた光条がぶつかり合い、凄絶な火花を散らす。

その余波だけでも埠頭の施設がめきめきと音を立てて吹き飛んでいく熱量と熱量の激突は、筆舌に尽くしがたい暴威を持って、周囲へと巻き散らされていく。

新堂たちは幸い、結衣のキリングレンジから撤退していたものの、それでもびりびりと呪術甲冑を震わせる凄まじい衝撃に、いかにあの魔法少女と呼ばれる存在が規格外のものであるかを理解させられる。

反面、そこに立つのが何故自分の娘では、真穂ではなかったのかという理不尽な憤慨が、再び舞い降りた「救世主」へと向けられていることに、その当人は気付かないし、これからも気付くことはないのだろう。

だが、世界を守るために、人々を守るために、最強の魔法少女が立ち上がってくれたというのには、悔しいが、心強いものであることは新堂も認めるところだった。

「頑張れよ……魔法少女！」

「……………！」

「お前は世界を救ったんだろ!? だったら……だったら死んだ俺の娘の分まで戦ってくれよ! お前が負けたら、地獄まで追いかけてぶん殴ってやる!」

気付けば、通信回線を開き、新堂は結衣に向けてそう叫んでいた。



死者と生者。その両方に報いるために、死者の犠牲を無駄にしないために、生者の祈りを無下にしないために、結衣は術式に込めた魔力を増大させていく。

「……………私は……………私は！　魔法少女……………小日向結衣なんだ……………つ、あああああッ!!」  
向けられた呪いと祈りを魔力の炉に焼べて、結衣はありつたけを出し尽くすかのよう  
に叫びをあげる。

自壊していく変異体もまた、熱線の出力を引き上げるが、それが自らの崩壊を加速させていることに気付いているかはわからない。

そして、戦場に今、極光が爆ぜる。

祈りと呪いを背負った結衣の魔法が、破壊の意思を具現化したような変異体の熱線が。

夕暮れ時の戦場に日の出をもたらしたかのように、ぶつかり合い、白く爆ぜるのだっ  
た。

## 2.2. 魔法少女、閃光の果てに

ぶつかり合った閃光が白く視界を染め上げた果て、新堂の機体が映し出したものは、あの巨大な敵星体が跡形もなく消し飛んでいるという、尋常ならざる光景だった。

最強の魔法少女と名高い、人類の英雄にして救世の乙女、小日向結衣。

その力は彼女が「赫星一号」を破壊したあの作戦で十分に理解したつもりだったが、こうして改めて目の当たりにしてみれば、魔法少女が行使する「魔法」というのはこの世の理を外れたものなのだとも再び実感させられる。

だが、そんな力を持った存在ですら時に死の淵へと追いやる敵星体という人類にとつての憎むべき仇敵の力もそうだ。

敵星体と魔法少女、そこに違いがあるとすれば、それは人類に与しているかそうでないかなのではないかと、不安を煽り立てるような言説を、専門家を名乗る男が公共の電波でぶちまけていたことを思い返ししながら、新堂は硝煙の中に佇む結衣を仰ぎ見る。

拡大してその表情を見れば、華々しい勝利を飾ったのにもかかわらず、彼女は沈痛な面持ちで、これまで散っていった死者へと祈りを捧げるようにしばし、佇んでいた。

結衣にとってその行いに、これといった意味はない。

ただ、倒すべき敵を倒した、その事実が今日も一つ積み重なっただけで、そこに抱けるような感慨や、人類を守り通したのだという誇りは戦いの中で傷付き、擦り切れ果てた心に何かを生み出すことはない。

死者が、犠牲者が出なかったのは本当に幸いなことだ。

結衣にはまだそれを喜ぶだけの心が残されていた幸運に感謝しながら、熱線の反動で自壊していたところにサクラメントバスターでトドメを刺された敵星体が先ほどまで鎮座していた空間を茫洋と見つめる。

あの忌まわしい「赫星一号」を破壊したことで、全ての戦いには幕が下され、戦いは終わったのだとばかり思っていたが、現実はそうではない。

地上に残存する敵星体も、連邦防衛軍がその内自分たちのような魔法少女の手を借りずに叩き出せるようになるだろうと、そのための研究だと、諏訪部の実験に付き合っていたが、それを嘲笑うかのように無慈悲な現実が今、結衣の喉元には突きつけられている。

「……やったよ、ステイア」

震える声で唇に乗せた強がりは、夕暮れの埠頭に霧散して、溜息のように空へと還って消えていく。

「……今度もまた、倒したよ。私は……スティアを守ったよ……」

そうとでも自分に言い聞かせていなければ、正気ではいられなくなるとばかりに、どこまでも沈痛な面持ちで涙を零しながら、結衣は後どれだけでも戦いを繰り返すのかと、強がりでも補強した少しの誇らしさを飲み込む恐れに震え、慄いていた。

敵星体との間に対話が通じない以上、人類に突きつけられている選択肢は二つに一つだ。

奴らを殺し尽くすか、奴らに殺し尽くされるか。

この戦いは正義や大義で塗り固められているものの、その本質はどこまでも残酷で無慈悲な生存競争ではない。

かつて見たアニメに出てきた、お伽話だった頃の魔法少女のように巨大な敵を閃光で撃ち貫けば、エンドロールが流れて世界が終わるなどということはない。

下手をすれば地球が回り続ける限り、太陽が燃え続ける限り、自分たちの戦いに終わりはしないのかもしれないと、結衣はその絶望に、そして背負っている死者の声と生者の祈りの重さに押し潰されそうになるのを堪えて唇を噛んだ。

その声が耳朶を震わせたのは、拳を震わせながらしばらく空中に佇んで、結衣が戦いの終わりについて想いを馳せていた時のことだった。

「……結衣さん、無事、だったんですね……!」

「……絵理」

簡略化され、省略されたところもありながら、長い決議を経て出撃の許可が下りた、日本で唯一、諏訪部麾下のマジカル・ユニットに所属している魔法少女——水瀬絵理が、その碧眼を潤ませながら、戦場跡に佇んでいた結衣の元へと飛んできたのだ。

戦友との再会は存外に早いものだった。それ自体は嬉しいし、喜ばしいことだというのもわかっている。

だが、ここまで彼女が駆けつけてくるまでの時間で街に被害が及んでいたかもしれないと考えれば、やはり連邦防衛軍の官僚的な手続きは有事の即応に際しては欠陥を抱えていると、結衣はぐちゃぐちゃになっている思考回路の片隅にそんな言葉を浮かべあげた。

英雄だなんだと祭り上げておきながら、結局のところ軍部も政府も自分たちのような存在は腫物のように思っているのだろう。

それを考えれば少しばかり悲しくなるが、反面、自身の、魔法少女の力が及ぼす影響について考えればやむを得ないと考える自分がいることも確かだった。

強すぎる力には大いなる責任が伴う。力を振るう者は力に振り回されてはならない。脳裏に思い返したそのフレーズは、魔法少女隊の合言葉のようなものだったが、それを知っている人間はもう、絵理と美柑の二人だけだ。

「……軍は来るの?」

「……は、はい……事後処理とか、色々ありますから……」

「そう……教えてくれてありがとう」

今回の事件で結衣が活躍できたのは、いつてしまえばただ、いくつもの偶然が積み重なったからに過ぎない。

たまたま敵星体が海から侵攻してきたこと、熱線攻撃を温存しようとしていたこと、結衣が軍に所属していなかったからフリーに動けたこと——だが、何よりも運が良かったといえるのは、敵が結衣の対処可能な範囲で現れてくれたことだろう。

自分一人で守れるものには、限界がある。

それが今回の戦いを経て、結衣が痛感させられた戦訓のようなものだった。

もしもあの敵星体が、単体ではなく二体、三体と現れて同時に熱線攻撃を浴びせかけてきたり、大量のお供を伴っていたのならば、結衣は守りに徹することしかできず、上陸を許してしまっていたかもしれない。

軍をクビになったことで自棄を起こしていた部分があるかないかで問われれば、ないと答えれば嘘になるだろう。

だが、魔法少女がどれだけ単体で強力な力を持つとしても、何かを守る、という目的においてその「何か」が大きければ大きいほど、個人の力が寄与できる範囲は狭まって

いく。

スティアを守る、という目的のためだけに結衣は無我夢中で魔法少女へと変身して敵星体と戦っていたが、これから先も同じやり方で通用するかどうかはわからない、というより通用しないと見た方が堅実だろう。

「……絵理は、何か気づいたこととかない？」

「……わたし、ですか……？」

結衣は最悪の事態を脳裏に描いて、絵理へとそう問いかけた。

恐らく彼女も気付いているのだろう。

細い顎に拳を当てて、絵理は小首を傾げると、おずおずと小さく手を挙げながら、結衣の問いへと答えを返す。

「……敵星体が、進化している」

「やっぱり、気付いてるよね」

「……はい……」

東京に張り巡らされた呪術結界内で発生した、断続的な変異体の出現は、偶然の一言で片付けられる範囲を逸脱している。

これで二例目だということを鑑みれば、結衣たちが導き出した結論は、そう決め付けるのに時期尚早なのかもしれないが、3年前に敵星体と戦い続けていた二人にとって

は、確証こそないものの、肌感覚での確信があった。

呪術甲冑は確かに画期的な発明だが、仮想敵が従来までの敵星体であると考えれば、このタイミングで敵星体の進化が疑われるような事態が起きたのは不運であるとしてもいいようがない。

もちろんそれは、結衣たちのような魔法少女にとつても無関係ではないことだ。

魔法少女は、連邦政府の思惑とは違って、きつとこれからも地獄の前線に駆り出されるだろう。

「……戦いは終わってなかった、私は……どこかで戦いが終わってほしいって、ずっとそう思って、現実から目を逸らし続けてたのかもかもしれない」

「……そんなこと、ありません……だって、結衣さんは……誰より頑張つて、誰より戦ってきたから……」

「……ありがとう、絵理。でもね、私……逃げてたのは多分、本当だから」

どれだけ心が擦り切れても、どれだけ傷つき果てていたとしても、それは言い訳になどならないと、結衣は自分に言い聞かせる。

スティアと触れ合う中で、その平穩がいつまでも続くことを、心から願っていたのは確かなのだ。

だが、勝ち取らなければ、この星から敵星体の全てを叩き出さなければ、本当の平穩



が戻ってこないのならば。

「……絵理、私……軍に戻るよ」

結衣は一つの決意を言葉に込めて、絵理のサファイアにも似た青い瞳を覗き込みながら静かに、しかし、力強くそう呟くのだった。

## 23. 魔法少女、その願いの在り処

ステイアには記憶がない。

それは自分を証明するための手段、ステイアがステイアとしての存在を確立するために必要な前提条件が抜け落ちているということであり、行動や単語、意味を持つ言葉がその欠落を埋めてくれることもまた、ないのだ。

だからこそ、唯一ステイアが保持している、自分に関わる記憶——あの日、理由もわからず行き倒れていたところを結衣に拾ってもらったというのは、大事という言葉でも足りない宝物のようなものだった。

ステイアにとって、結衣は一つの世界だ。

意味のある言葉を運んできてくれるのも、話し相手として今の「ステイア」の存在を補強してくれているのも、返しきれない恩だと思っている。

そんな結衣が東京湾で巨大敵星体を撃破して、家に帰ってくるなり切り出した話は、ステイアにとっては唐突すぎることであったし、理解が及ばないことだった。

「結衣……軍に、戻る？ ステイアには、わからない……結衣は、クビになったからお家があるのに……？」

「……うん。でも、前にお客さんが来たでしょ？ あの時、あの人が……諏訪部大佐が残  
していった資料は、まだ軍が必要としてくれてるってことだから」

結衣にとっては悩み抜いて決めたことであつたとしても、それは自分の中で完結して  
いる決断に過ぎない。

ステイアが困惑しているのは、クビを切られたはずの結衣がどうして軍に戻れるの  
か、という純粋な疑問に加えて、どうして軍に戻る必要があるのか、という理由への問  
いかけが混線しているからなのだろう。

小首を傾げ、肩に乗った髪からふわりと粒子を漂わせながら、ステイアは眉を八の字  
に曲げて、すっかり困った様子をみせる。

本当ならば、ステイアに相談してから決めるのが最善だったのかもしれない、と、今  
になって結衣は後悔するが、あの時はああでも言わなければ、罪悪感に押し潰されてし  
まいそうだったし、何よりも、絵理に言質を取られているのだ。

諏訪部という男はどこまでも現実主義的で、隙のないような人物だというのが、3年  
間彼と接していて結衣が感じたことではあつたが、切れる手札がないわけではない。

軍に戻るといふ選択は、自分の力に対して責任を負うということでもあつた。

だが、なによりもまず、これからのステイアにとつても必要なことだと、結衣はそう  
確信している。

ただ、それをスティアに納得してもらえるかどうかは別な話だった。

「……軍、戦うために集まった組織……結衣は、戦いたい……う。」

真つ直ぐに無垢な瞳を向けて、スティアは結衣へとそう問いかける。

彼女の認識は全て正しいというわけではなかったが、軍隊の存在意義だとか発足の理由だとか、そういう話をしていてのではないことぐらいは結衣にもわかる。

要は結衣自身がどう願っているか、どう思っているかについて、その本音を打ち明けてほしいからこそ、尋ねているのだ。

本音を嘘偽りなく答えてしまうのであれば、その答えはノーになるのだろう。

鉄火場で命のやり取りをするのは、3年前の地獄で嫌というほど、それこそ一生分味わわされたし、かといって戦いそのものを好めるほど、結衣の心は振り切れていない。

「……それは、結衣の本当の願い？ スティアは……軍のこと、結衣のこと、スティアのこと、何もわからない……でも、結衣が今、辛くて苦しい顔をしているのは、わかる……」

「……そうかな」

「……うん、結衣は……そういう顔、してる」

覗き込む角度によってその色彩を変える不可思議なスティアの瞳には、人の心を覗き込む力でも備わっているのだろうか。

すっかりお手上げだといった様子で、結衣は満身創痍の心を庇い立てるように引き

つった、愛想笑いの出来損ないを浮かべてみせるが、そういう表情が既に、無理をしていることの証なのだろう。

戦わないという選択肢を、今までと同じように、スティアに危害が及びそうになった時だけ、魔法少女としての力を振るうという選択を取ることも、不可能ではない。

だが、それは全て、現れる敵が結衣一人に対処できる範囲である、という前提条件がつく。

その上、敵星体が本当に進化を遂げているなら、自分が思いもよらない敵が現れることも想定できる。

つまり、どこまでも都合のいい偶然が連鎖してくれない限り、今までのような日々を慎ましく送っていくのは難しいのだ。

それに、戦う力のある自分が戦わなければ、その分だけ犠牲は積み重なっていく。結衣は、世界中の人々を自分一人で助けられると思っただけの傲慢ではない。

だが、どうしても、目の前で救えなかった命のことが、自分が手を下さないことで失われていく命の断末魔が、雷にも似た耳鳴りのように鼓膜の裏に張り付いて離れないのだ。

辛くて、苦しい顔をしている。

スティアの言葉を脳裏で反芻しながら、結衣はぐにぐにと自分の頬を捏ね回した。

薄く乗せた化粧以外は普段と変わらない、愛想というものが抜け落ちた顔。

スティアの瞳に映る自分は、ひどくげっそりとしているのだろう。

「スティアは、心配してる……戦うのは、怖い……結衣が戦うのも、怖い……戦って、帰ってこれなくなったら、人はいなくなっちゃう……結衣も、いなくなる……？」

スティアが心配する通り、戦うという道を選んでも、そこに待ち受けているのは鉄風雷火が吹き荒ぶ地獄でしかない。

その恐ろしさを、振り返る前は命として形を持っていたものが跡形もなく、無惨に引き裂かれていくことの恐怖を、結衣は魂に刻み込まれたかのようによく知っている。

自分を贄にして誰かが助かるのであれば、スティアが助かるのであればそれでいい。スティアにとって、結衣の主張はそう言っているようにしか聞こえないのだ。

命を并勘定することを嫌いなながらも、自分の命だけはその例外として扱う結衣の危うさは、記憶をなくして何もかもわからないスティアにさえ伝わってくる。

それがもし、本心から結衣の望むことであつたのなら、スティアは何も言うことはなかっただろう。

だが、今の結衣は、仕方なくその道を選んでいるようにしか見えないのだ。

死者たちに駆り立てられて、生者たちに押し潰されて、小日向結衣という一人の少女の心は破綻する寸前にまで追い込まれている。

記憶はなくともわかるその残酷さにステイアは一粒の涙を零す。

原初の魔法少女がどうだと、英雄だなんだと持て囃されても、結衣はまだ年端もいかない少女でしかない。

そんな彼女が背負うのに、その二択はあまりにも酷だった。

「……私は、いなくならないよ」

「結衣……？」

「私ね、ステイアと会って……救われた気がするんだ」

だが、その残酷さも全て己の中に取り込むように、その全ての責任が自分にあるとばかりに結衣は一瞬悲壮な笑みを浮かべたが、それを逆る一つの感情で覆して、口元を綻ばせる。

「ステイアと……？ ステイアは、何もしてない……よ……う！」

「ううん、なんていうか……ステイアがいてくれるだけで、話し相手になってくれただけで、自分が戦うために生まれてきたんじゃないやなくて、ちゃんと人間なんだって、そう思えるようになったから。だから……私は、ステイアに救われたんだよ」

だから、何を差し置いてでも、ステイアには生き残ってほしい。

綿毛を宿した花のように、儂く崩れ去りそうな笑顔で、結衣は自分の中に探り当てた答えを噛み締めるように、ステイアへと言葉を送っていた。

戦うのは怖いし、本当なら戦いたくなくてないけれど、もしも自分の中に「本当の願い」があるとしたら、それはその一言に尽きるのかもしれない。

結衣は、そんな自分の青臭さに少し辟易しながらも、見つけ出した答えには嘘偽りはないと胸を張る。

それがたとえ虚勢であつても、強がりであつても、誰かに急ぎ立てられたものだとし、導き出した答えは他でもない、結衣だけのものだ。

「だから、これが私の本当の願い。スティアの居場所を保証してもらつて、スティアに生きてほしいから……私は戦う。軍に戻る。でも、いなくならない」

そんな保証はどこにもないと知つていながら、結衣は神にでも誓うかのようにはつきりと、スティアの瞳を真つ直ぐに見据えてそう宣言する。

「それが……結衣の願い？　結衣は、いなくならない……？」

「約束する。スティアがいてくれるなら……私は絶対に、いなくならないよ」

それは言葉のようなものでもあつた。

はつきりと口に出すことで、その言葉には力が宿るといふ古い考えで、オカルトじみているが、魔法が存在する世の中なのだから言霊の一つや二つ、あつておかしくはないはずだと、結衣は開き直つて断言する。

「そっか……なら、スティアは……スティアは、結衣を応援する……結衣は、スティアに



とつて、大切……だから、帰ってこれるように、応援する」  
「……ありがとう、ステイア」

——私は、それだけで頑張れるよ。

結衣はそう呟くと、ソファの隣に腰掛けていたステイアの存在を確かめるように、しかし、壊してしまわないようにその細い身体を抱きしめた。

数秒の間を置いて、控えめに返されてきた抱擁からはステイアの熱と願いが伝わってくるようで、結衣の瞳から一筋の涙が零れ落ちる。

きつとそれは、幸せなことなのだろう。

帰る場所がある。帰りを待っていてくれる誰かがいる。

久しく忘れていた感覚を手放してしまわないようにと、結衣はしっかりとステイアをその細腕に抱いて、流れるままに涙を零し続けるのだった。

## 24. 魔法少女、復隊の条件

ステイアに事のあらましを打ち明けた翌日、結衣は書類に混ざっていたメモ書きに記された電話番号を呼び出して、諏訪部とのコンタクトを取っていた。

待ち合わせ場所として訪れたのは以前にステイアと服を買いに行った池袋のショッピングモールであり、そこに併設されている喫茶店だったが、これといった理由があるわけではない。

単に駅から行ける範囲で真っ先に思い当たったのがそこだったというだけで、諏訪部の側から新宿がいいだとか渋谷がいいだとか指定されたら、それに合わせるつもりではいたものの、意外にもすんなりと結衣の要求は通されて、こうして待ち合わせを行っているのだった。

到着までしばらく時間がかかる、という連絡を、諏訪部がショートメッセージを通じて送ってきたのを確認すると、結衣は、行儀が悪いことを自覚しつつも二人席の向かい側に自分の荷物を置くことで席を確保する。

そして、しばらく頼んだアイスコーヒーにコーヒーフレッシユと大量のガムシロップを投入しながら、マドラーで茫洋とコップをかき混ぜていた。

苦いものが苦手なのに、わざわざアイスコーヒーを頼んだ理由なんてものは一つしかない。

この喫茶がなんてことはないチェーン店であったとしても、客層が地上で暮らせる上流階級に絞られている限り、一番安いアイスコーヒーが一杯でも千円札一枚を対価として要求してくる始末だからだ。

結衣は別段、金銭に困っているわけではない。

むしろ、第一世代魔法少女、「原初の七人」として赫星戦役を戦い抜いてきた分の給料であつたり手当てであつたりは相応の額が口座に突っ込まれているぐらいだ。

それでも何故一番安いアイスコーヒーを頼んでいるのかといえば、生来の気質がそうさせるとしか答えることはできない。

自分は上流階級なのだと思き直つて散財ができるほど、結衣の精神は強靱なものでもなければ、飲食といった行為にも以前より関心が薄れているという切迫した事情も抱えている。

その結果が、溢れそうになるまでガムシロップが注がれている、最早アイスコーヒーとも呼べない何かだった。

結衣は無感情にストローの包み紙を破つてグラスにそつと突き立てて嚙ると、やはりとてもいすべきか、案の定コーヒーとしての風味が多少残った甘ったるい砂糖水とても

いふべき味が舌先に乗って、その味わいに眉をひそめる。

こんなことなら高いとわかっていてもアイスココアでも頼んでおくべきだったかと、それでも流石に飲み物へ千円以上の金を払うのはどうなのかと、湧き起こる二つの感情の間で板挟みになりながら、結衣は小さく溜息をついた。

ただ、こんな砂糖水であつても、そのまま飲むよりはマシだな、と思うところはあつた。

なんということはない。ただ、結衣はこだわりのほとんどを失っていないながらも、苦いものが苦手なのだ。

子供じみた味覚であることは自覚しているし、実際ちよつと前までは支給品のレーションで生活をしてきたのだから、贅沢などいってられないご時世なのは確かだが、それでも苦手なものは苦手なのだから仕方ない。

諏訪部が店を訪れたのは、あとで店員には謝っておくべきだろうかと思いつつ、そのアイスコーヒーなんだか砂糖水なんだか区別がつかない物体を、しかめっ面でしばらく啜っていた時だった。

「すまない、待たせたな」

「……大丈夫です、席は取ってありますから」

「助かるよ」

遅れてきて、座る席がないでは格好がつかないからね、と相変わらずどこまでが本気でどこまでが冗談なのか、区別がつかない言葉を口ずさみながら、諏訪部は結衣が撤去した荷物の置いてあった席に腰かける。

そして、電子化されたメニュー表から結衣と同じく一番安いアイスコーヒーをタップして注文すると、三分ほどで店員が運んできたそれを、ガムシロップやコーヒーフレッシュの一つも入れることなく一息に煽った。

「すまないね、品がなかったか」

「喉、渴いてたんですか？」

「ん……それなりにな？ 割と走ってきた」

それでも言い訳としてはいいものではないと、品に欠ける仕草でコーヒーを煽ったことを結衣にわざわざ詫びる辺り、変なところで諏訪部は律儀な男だった。

仮にこれが軍の偉い人や、政治家の前であったなら諏訪部の昇進は絶望的になるのだろうが、目の前にいるのは復隊しようと目論んでいるとはいえ、一度は除隊扱いで事実上クビになった、何の権力もない魔法少女でしかない。

前線から遠ざかると身体が鈍るものだな、と冗談交じりに肩を竦める諏訪部の仕草はどこまでが本気で、どこまでが冗談なのか、相も変わらず結衣にはわからないが、そうでもしなければ海千山千の古狸たちを相手に、戦時の都合もあるいは、若くして頂

くことになった大佐という階級を維持することは難しいのだろう。

「……本題に入っても?」

「ああ、こちらとしては構わんさ」

そんな怪物と今から腹芸をやり合おうというのだ、という事実には少しばかり胃袋が締め上げられたような痛みを覚えるが、結衣はそれを誤魔化すようにコーヒー風の砂糖水で舌先と喉を湿らせて、単刀直入に話を切り出す。

こういう手合いに対して、結衣のような素朴な人間は、周りくどいことをするよりも直球で話をぶつけた方が効果的なのだ。

せめてそう信じるくらいはしておきたいと願いつつ、結衣は鞆の中からマジカル・ユニットへの復隊を願い出るために書類を一式取り出して、諏訪部へと提示してみせる。

「ん……その様子だと、マジカル・ユニットに参加してくれると考えていいのか?」

「……ええ、基本的には」

「基本的には?」

書類に直筆の署名と印鑑が捺印されていることを確認しながら、諏訪部は訝るようには首を傾げて、結衣が呟いた言葉を復唱した。

なんらかの取引を持ちかけようとしている意図を察せないほど、諏訪部という男は鈍感ではなかったものの、果たして何を交換条件にしてくるのかについては心当たりがな

い。

僅かに表情を強張らせた諏訪部の目を真っ直ぐに見据えながら、結衣もまた強かな光をその瞳に宿して、言葉が続ける。

「大佐、私と取引をしてくれませんか？」

「取引、ね……それこそ、基本的には構わないが、事と次第によるぞ？」

軍に戻ったら、毎日スウィート・クラスを用意してくれなんて言われた日には、おれの首が飛びかねないからな、と冗談を交えて諏訪部は肩を竦めるが、それは、裏を返してみればいかに相手が人類の英雄である結衣であつても容赦しない、ということでもあつた。

「……私が復隊する条件として、ステイアの身柄を保証してほしい。それが私から出す条件です」

「……ステイア、ねえ。君の同居人だったか」

あの後、諏訪部は抜かることなくステイアについての身辺調査を行っていたが、身元不明で戸籍もない人間だということしかわからないのは、いかにこの3年間で連邦が混乱しているとはいえ、疑わしいことに違いはない。

とはいえ、身元不明人の存在は「赫星戦役」以降珍しいものではなく、ステイアもその一部だと考えれば、辻褄は合う。

結衣が一体何を考えているのか、と、測りかねた様子で諏訪部が首を傾げると、結衣はその間隙を突くかのように、続く言葉を舌先に乗せて紡ぎ出す。

「……無茶を言ってるのはわかってます、でも……スティアがいなければ、私は二度も敵星体の出現に立ち会うことができませんでした」

「ほう……？」

「スティアには奇妙な直感があります、敵星体の襲来を言い当てられる……それだけで軍に置いてくれ、というのは無茶だとわかっています、でも……！」

結衣は必死に頭を下げて、なんとかスティアの身柄を軍に、特に信頼のおける男である諏訪部に保護してもらおうと試みるが、その直感が根拠としては無謀なものであるとわかっている。

だからこそ、交換条件として、天秤の皿へと自身の復隊を乗せたのだ。

自分には、まだ利用価値がある。

結衣はそう確信していた。

そうでもなければ、わざわざあの時諏訪部はマジカル・ユニットへの編入に必要な資料を届けに来なかったのだろうし、それは逆説的に結衣という人物が軍部においてまだ価値を持っていることの証明でもある。

「なるほど、そういうことか……しかし小日向結衣、君は戦えるのか？ おれがああ資料



を持って行ったのは、上から持たされたただだからかもしれないぜ？」

「……戦います。ステイアの身柄を保証していただけるなら。私の力じゃ、マジカル・ユニットには不足ですか」

諏訪部から目を逸らすことなく、結衣はそう断言した。退路を断ち、逃げ場を塞ぐ背水の陣であることはわかっていたものの、ステイアの安全を保証するのなら、結局のところ連邦防衛軍という大きな後ろ盾と、信頼できる権力者の存在は不可欠なのだ。

その代償として捧げるものが、あの地獄に舞い戻ることであったとしても構わないと、結衣は言葉ではなくその瞳に燃え盛る意志を宿して、諏訪部を真っ直ぐに見据えていた。

「……はは、まあ……そうだな。今回はおれの負けだ。だがな、小日向結衣？ ステイアの身辺調査はさせてもらうし、おれの力ではどうにもならないことだってある。それだけは覚えていてほしい」

「……ありがとうございます」

その時は自分が何を差し置いてでもなんとかする、とでも言いたげな結衣の眼差しに込められた危うさと紙一重の情熱に、諏訪部は若さと、そして彼女の中に占めるステイアという存在の大きさを感じ取る。

どの道、マジカル・ユニットを能動的に運用するのならば結衣には復隊を願うことに

なっていただろうし、その代償が身元不明人一人の引き受けであれば、安いものだ。

その上眉唾物とはいえ、敵の襲来を予知できる直感をスティアが持ち合わせているなら、それは利用できる価値になる。

無論、全てが都合よく行くわけではないことはお互いにわかっているけど、この取引は結衣にとっても諏訪部にとっても、双方に利益があるものには違いない。

契約成立だ、とばかりに差し伸べられた諏訪部の手を結衣は強く握り締めるのだった。

## 25. 魔法少女と変容する世界

「……以上のことから、敵星体は現状においてもなんらかの進化を果たしている、と考えるのが妥当だと思われまます」

結衣が復隊のための「取引」を交わした翌日、諏訪部は佐渡ヶ島から帰還してきた連邦防衛軍のもたらした調査結果を、会議室に集まった閣僚や防衛長官、そして有識者たちに提示していた。

結論からいってしまえば、敵星体が何らかの変化を、それも進化を遂げているのは確実であり、この3年間で連邦はおよそ国土の三割を奪還することに成功しているものの、未だに「赫星一号」の破片が落下した不毛地帯となっている場所は地球上で枚挙にいとまがない。

佐渡ヶ島奪還作戦が立案されたのは、連邦防衛軍が誇る新兵器のお披露目としての意味合いが強かった。

だが、諏訪部たちのような慎重派からすれば、この3年間で敵星体がどのような動きを見せているのかという、実地調査こそが目的だった。

最前線を務めることになった、陸戦隊を率いる内藤勲曹長からの報告によれば、オケ

アノス級三隻の主砲により、佐渡ヶ島に到着していた「赫星一号」の破片は跡形もなく消し飛ばされていったものの、その跡地にはなんらかの構造的な階層が形成される過程のような痕跡が残されていたという。

敵星体が何を目論んでいるのかについては、彼らとの対話が不可能である以上わからない。

しかし、地球に到着した「赫星一号」の破片を用いてなんらかの構造物を作り上げようとしているのではないか、というのが諏訪部らの推測であり、今までは観測されていなかった変異体が生まれたのも、この3年間で敵星体が沈黙していたわけではない、ということの証明なのだろう。

諏訪部が提示した事実とそこから導き出される推測に、有識者たちの中には賛同を示す者もいれば沈黙したまま首を傾げる者もあり、それどころか冗談ではないとばかりに怒りの形相を浮かべている者まで悲喜交々だ。

中でも、軍務局長たちタカ派の人間にとつて、敵星体が進化しているかもしれない、という推測は極めて都合の悪いものだった。

彼らが主導して開発を推し進めていた78式呪術甲冑は、その仮想敵を地球上に残存している敵星体の中でも最高戦力をタイプ・クツキーに規定しているため、それ以上の敵や変異体が現れたとなれば分が悪い。

事実として、諏訪部らが用意していた副案であるマジカル・ユニットの再結成はなされていただけでなく、魔法少女隊の前線投入はもう時間の問題だ。

そうなれば、魔法少女という属人化している存在ではなく連邦政府とその軍に市民からの信頼を集めたいと画策している軍務局長たちからすれば都合が悪い。

「ありえない……何かの間違いではないのか、大佐殿？」

にわかに参加者たちがざわめき出した中で、真つ先に挙手をしてそう言ったのは、瘦身の老人——敵星体に関する研究者として招かれた、地球連邦北歐管区所属の、ポール・マクレガン教授だった。

北欧での戦線は概ね人類が優勢であり、極東管区が主導して生産された78式呪術甲冑は既に各地域へと輸出されていることも手伝って、国土回復は時間の問題だというのが、彼らの認識だった。

「我々も第二世代魔法少女<sup>ワルキューレ</sup>を戦線に投入している向きはあるが、あくまでそれは保険としてだ。国土回復は連邦防衛軍の力のみで成し遂げられよう」

「しかし教授、我々は事実として敵星体が謎の構造物を建造しようとしていることを、そして従来は確認されていなかった変異体をこの目で見ているのです。幸いにも『最初の七人』が一人の活躍によって破滅は免れましたが、その脅威はいずれ広がっていくと見て間違いないでしょう」

「それは君の推測ではないかね? 極東管区に変異体が現れたというのは確かかもしれないが、少なくとも北欧管区では今のところ観測されていないのだよ」

ならばこのまま、魔法少女に頼ることなく、人類優勢のまま国土回復を一気に成し遂げることが望ましいのではないか。

マクレガン教授は口角泡を飛ばしてそう語る。

彼は熱心な反魔法少女派であり、それは幼い少女を軍隊に徴発して前線に出すのは憚られる、という人道的な観点に基づいての意見だったが、確かにそれは正しくとも、魔法少女たちの力をまた借りなければ、国土回復はおろか、国民すら守れないという諏訪部の意見とは真つ向から食い違うものだった。

「それはどうかな、えーっと、ナントカ教授」

「マクレガンだ! 無礼な、君は……」

「あたしか? あたしはアリス・ヴィクトリカ。北米管区の出席者として連れてこられた、あんたの大嫌いな魔法少女だよ」

蜂蜜色の金髪をサイドテールにまとめた少女は、マクレガン教授を挑発するように粗野な物言いですら告げた。

顔を真っ赤にしているマクレガン教授の様子がおかしかったのかそうでないのか、アリスと名乗った少女——戦間期に生まれた二世魔法少女にして、地球連邦防衛軍北

米管区最強の魔法少女は、につ、と口角を吊り上げて皮肉な笑いを浮かべる。

「北欧管区の事情と、構造物については知らねーけど、その変異体とやらについては北米でも目撃されてる。つっても所詮タイプ・クッキー程度だけだな」

あたしの敵じゃねえ、と権力者や有識者を前にしても大胆不敵にそう発言できるのは、ひとえに彼女が「エースオブエース」の称号を北米方面軍から与えられた、アメリカ最強の魔法少女である故だ。

その魔力量は第一世代魔法少女——今や結衣、絵理、美柑の三人しか残っていない「最初の七人」にも匹敵するほどであり、だからこそ物言いこそ過激でも、アリスはこの場に連れてこられたのである。

トリガーハッピーというもう一つの二つ名を持つアリスは、魔法少女にしては異端の銃火器使いであり、「強化」の魔法とそしてアサルトカービンの魔法星装——魔法少女がこの星から力を授かった証明にして、その力の権化を持つ少女だ。

そして、アリスの意見に追従するように各管区における変異体の目撃状況や犠牲者などが口々に叫ばれて議論は紛糾したものの、概ねこの場にいる人間の意見は諏訪部の敵星体脅威論への賛同に傾きつつあったといっている。

それは、諏訪部にとつては望ましいことではあったが、朗報などでは断じてなかった。敵星体との戦いは終わっていない。

それどころか、この3年間で奴らが沈黙していたのではなく、力を蓄え続けてきたのであれば、これからの舵取り次第では何人もの犠牲を積み上げてようやく成功させた「赫星一号」の破砕作戦だって、無意味なものに貶めかねないのだ。

魔法少女を前線に立たせ、その犠牲でもって人類の多くを救済するという時代の終焉が来てくれたというお題目について、それが本当であれば諏訪部は一も二もなく喜んでいたのであろう。

だが、実態としては再びマジカル・ユニットを稼働させ、多くの魔法少女を戦線に投入しなければならぬ可能性が芽生えてきたのだから、とてもやり切れるものではない。

しかし、人類は何を差し置いてでも、どのような手段を使っても、生き残らねばならない——地球連邦政府が表立って口にすることはないものの、それに関しては派閥を問うことなく口を揃える至上命題は、果たされなければならないものだ。

それこそ、どんな手段を使っても、何を差し置いてでも。

結衣に除隊を命じたとき、「もう戦わなくていい」などと嘯いていた自分の楽観に、あるいはそこに込められた祈りを踏みにじられたことに対する怒りを込めて、諏訪部は静かに、指輪の跡がうつすらと残る左の拳を固める。

「あんたも大変だな、大佐殿」



「アリス・ヴィクトリカ。それはどういう」

「言葉通りさ、こっからどう転がつてくのかはあたしにもわかんねえ、だが、天国だと思つてた場所は地獄の一丁目だったってことには、違いないだろ？」

あたしは戦えれば、飯を食えればそれで構わないけど、あんたらにとつちやそうじゃないんだらう、などと口ずさむアリスの物言いは、粗暴でこそあつても、無教養なものではなかった。

アリス・ヴィクトリカ。連邦防衛軍がいずれ大規模反攻作戦に打つて出ることになれば、マジカル・ユニットも彼女と轡を並べることになるのかもしれない。

それこそ阿鼻叫喚といった様子で派閥を問わず、多くの動揺が走つた会議は定刻通りに終了し、ある者は恐怖を、ある者は不信を、またある者は剛毅にも樂觀を胸に抱きながら、それぞれに会議室から帰っていく。

極東管区の発言力は「救世の七人」作戦を成功させたこともあつて連邦政府の中でも非常に高いものとなっているが、もしこれで分断が進んで過去のイデオロギー闘争が再発したら、堪つたものではない。

諏訪部は周囲に誰もいないことを確認してから、左手で顔を覆つて深く溜め息を吐き出した。

その間にも世界は、変容を続けている。

人類がこの3年間でようやく築き上げた平和を嘲笑うかのように、あの忌々しい赫き星が再び天に昇らんとするかのようになり、星屑たちは、人の意思など問うことはなく、得体の知れない蠕動を続けるのだった。

## 26. 魔法少女、軍に戻る

結局のところ、支給された家に住んでいた時間は極めて短いものとなってしまったが、それでも別れを告げるというのは名残惜しいことだ。

結衣は来た時と同様にスーツケースに自分の荷物をまとめ、追加で購入したそれにはステイアの荷物を詰め込んで、慣れ親しんだとまではいかなくとも、そこそこ愛着が湧いた家を後にする。

マネキン買いたしたファストファッションのブランド品ではなく、地球連邦防衛軍から正式に支給された制服へと身を包んだ結衣は、同じ格好をしているステイアを一瞥する。

普段より少しだけ窮屈な着心地のそれに違和感があるのか、くるりとその場でステイアが回れば、ふわりと光の粒子が漂い、空に溶けて消えていく。

「ステイア、大丈夫？ サイズとか、合ってる？」

「……サイズ……合ってる。でも、ステイアが着てた服より、ちよつとだけ窮屈……」  
「ごめんね、でも軍で過ごすのには必要なものだから」

上半身をタイトなシャツとネクタイで飾り、履いているのは遊びがないタイトスカ―

トとなれば、その着心地はワンピースや、普段着と比べて明らかに狭苦しいものだ。

ステイアには悪いとは思いながらも、最低限その服を着ていなければ軍部内での身分が保証されない、という事実を伝えて、結衣は小さく頭を下げる。

「……制服……所属を表すもの。結衣は、軍の人……？ ステイアも、軍の人……？」  
「……そうなるかな。これからは」

諏訪部が一体どんなカバーストリーリを用意して、戸籍もなければ身元も不明なステイアをマジカル・ユニットの構成員として連邦防衛軍に編入させたのかはわからない。

だが、相当な無茶と苦勞をさせてしまったのであろうという自覚はある。

駅で菓子折でも買って行こうかと、結衣は財布の中身を数えながらスーツケースを引きずって、とりあえずは連邦防衛軍の総司令部へと向けて歩き出した。

軍に戻ったからといって、これから天国が待っているとは限らない。

むしろ、地獄に舞い戻っていくのだということとは自覚しつつも、寄らば大樹の陰、ということもまた結衣は自覚している。

ステイアという、身元も戸籍もわからない少女を守り通すのであれば、唯一自分が利用できる諏訪部とのコネを使って、後方要員として軍籍を確保することくらいしか、自分にできそうなことはなかった。

最強の魔法少女などと大層な呼ばれ方をしていても、結局結衣は一人の人間でしかない。

いくら結衣が魔法少女たちのなかで最も強い力を持っていたとしても、それは局地的なものだ。

その才能の多寡を問わず、一人にできることには限界がある。

だからこそ、再び魂を炉に焼べて戦う道を天秤の反対側に乗せてでも、結衣はステイアという少女を守り通す道を選んだのだ。

「軍……戦う人の集まり。ステイアには、わからない……何ができるのか、わからない……」

「それについては大佐が教えてくれるはずだから、大丈夫」

「……大佐……あの人は、あんまり好きじゃない……でも、結衣がそう言ってくれるなら、ステイアは信じる」

諏訪部という男は、理想に燃える心と氷のように現実を認める冷徹さを兼ね備えている。

本人の振る舞いや人柄が胡散臭いところはあるが、それは道化を演じているだけで、ステイアが嫌悪しているのはその現実主義的な部分を指しているのだろう。

ほとんど一方的に除隊を勧告されて、「もう戦わなくていい」と言ってくれたその口

で、「もう一度君の力が必要になる」と告げることになった心境は彼にしかわからないだろう。

ただ、外から見ればそれは掌を返しているようなものだ、というだけの話で。

そこまでステイアが考えているかはともかく、自分たちがこれから所属することになる部隊の司令官である男についてあれこれ考えを巡らせて、結衣は小さく苦笑した。

「……結衣、笑ってる……？ ステイアは、おかしいこと……言った？」

「ううん、諏訪部大佐も何だか気の毒だなって」

「……気の毒。結衣は、優しい？」

「ステイアって、本当に大佐のこと、苦手なんだね」

「……うん……ステイアは、大佐、苦手……」

どうしてかはわからないけど、と、ステイアはそう付け加えるが、人の好き嫌いなんてそんなものだといえればそんなものだ。

理由があつて明確に嫌うということもあれば、理由もなくただ嫌悪が湧くということもある。

その逆として、理由があつて好きだという想いを寄せることもあれば、理由もなく好意を抱いてしまうようなこともあつて、それは諏訪部とステイアで対照的だ。

結衣はどこか妹を見るような目で頬を膨らませるステイアを見つめながら、そんなこ

とを考えていた。

ステイアのことは好きだ。

好き、嫌いという感情を細分化すれば言葉の数は星屑のように増えていくのだろうが、それをどこまでも単純化して考えるのであれば、少なくとも今はそう断言できる。

彼女がいなければ、自分は恐らく人間らしい感情を抱くことなく、燃え尽きたような日々を送っていたのであろう。

それは容易に想像できるし、そうでなくとも無垢なステイアの振る舞いは、守ってあげたいという気持ちを掻き立てられる。

その対価として支払ったものが地獄行きの片道切符だとしても、今の結衣に後悔はない。

「その内……慣れると思う、きつと」

「慣れる……関係性は、変わる？ ステイアと、結衣も？」

「……私はステイアを嫌いになんてならないよ。今までも、これからも、ずっと」

軽く返したつもりの言葉にどこか恐れを抱いた様子を見せて、ステイアはそう問い返した。

関係性というものは、良くも悪くも流動的で、可塑性を持っている。

それは奇しくも魔力とよく似ていて、違うところがあるとするのなら、自分が望む結

果を定義して出力できる法則——術式のようなものがそこには存在しないことだ。

だから、人は願いを込めて約束を交わすのかもしれない。

そういう意味で、怯えるスティアに結衣が返した答えは、遠く、不確定に揺らぎ続ける未来に対しての宣誓でもあった。

「うん……結衣、一緒。スティアと、ずっと一緒……だから、嬉しい。スティアは、喜んで……」

頬を擦り寄せて甘えてくるスティアの体温やすべすべとした肌の感触が自分のそれと重なり合っていく錯覚に陥っていく。

結衣は、なんだかそれを猫みたいだ、と感じていた。

スティアの無邪気な振る舞いと、無垢な中に鋭い感性を隠しているところも含めて、彼女は猫に似ていると、この世で最も自由で孤高な生き物と相似を描いていると、そう思うのだ。

そんな彼女が頬を寄せてきたことで肩にさらりと流れた、金色とも銀色ともつかない不可思議な色合いの髪束を指先でそつと掬った。

そして結衣は、スティアにバレないように、同じシャンプーとリンスを使っているにもかかわらず、粒子に乗せて自分の髪よりも強く漂う芳香を、春とよく似た匂いを小さく吸い込んで、微かな罪悪感と、あたたかな感触を同時にその胸へと抱く。



「結衣は……スティアの髪の毛、好き？」

だが、そんな少しだけ邪な行いはしつかりバレていたようだった。

「……う……す、好き。ごめん、スティア」

「ううん、いいよ……スティアも、結衣の匂い、好きだから……」

首筋に形の良い鼻を近づけてその香りを嗅がれるというのは、清潔さに気を遣っているにも関わらず緊張する。

それでもスティアが好きだと言ってくれたのは何だか誇らしく、嬉しく、二人は初々しい恋人のように、しばらく頬を寄せ合って、駅への道を歩いていた。

ここから待っているものは、きっと今までの平穩を踏みにじり、砕くような地獄ではないのかもしれない。

だからこそ、だ。

小さな思い出の欠片を、思い返して「良かった」と思えることを拾い集めて、守りたいもののことを思い続ける。

それが焼け石に水であつたとしても、そうすることで、「帰りたい」という思いを忘れずにいられるから。

地球連邦防衛軍極東管区総司令部、その最寄駅まで電車に乗る道中もスティアと頬を寄せ合いながら、結衣はこれから赴く地獄への覚悟を、そして何としてでも生き残ると

いう決意を、心の内に固めるのだった。

## 第二章 「魔法少女とダンジョン・アタック」

### 27. 魔法少女、束の間の安らぎ

結衣が連邦防衛軍への復讐を果たしてから一ヶ月。

果たして諏訪部たちの危惧した通り、世界の構造は大きく変貌を遂げていたといつてもいい。

佐渡ヶ島奪還戦において、連邦防衛軍は呪術甲冑とオケアノス級という新兵器を配備したことで敵星体に勝利を収め、その勢いは止まることなく続いている、というのが政府の公式発表だった。

しかし、大本営発表と現実が乖離するのはままたある歴史の悪癖であり、新星暦という時代に古き衣を脱ぎ捨てても尚、人類はその旧弊を捨てきれずにいるのは、いつそ滑稽でさえある。

だが、あるがままの事実を全て曝け出せば市民の不安を煽るだけだと主張するタカ派の意見にも理があるように見えてしまうのは、地上で暮らす上流階級と未だ地下都市で暮らす下層市民との間で分断が進んでいるからだろう。

加えて、駆逐しきったと思われるいた東京にも敵星体が現れるようになったのだから

ら、軍としては悲鳴の一つも上げたくなるものだ。

プラカードを掲げて真実の開示を求める仮想市民たちがデモを起こすことも珍しくない中で、結衣たち魔法少女は敵星体という存在から人類を守るシンボルとして、公の場に姿を見せることも珍しくなかった。

私たちがついていているから、どうか武器を収めてください、と、時には暴力に訴えかけようとしてくる下層市民の説得であつたり、敵星体の襲来に怯える上流階級へ安全だ、と訴えかけることであつたり、再編されたマジカル・ユニットの任務は、もっぱらそんなものばかりだった。

今日もデモ隊の一部勢力が、新たに生まれた第三世代魔法少女を担ぎ上げたことで、暴徒化する寸前での説得を担っていたのだが、そういう任務は、戦いの鉄火場に立つのとはまた別な意味で疲労が濃い。

食堂の机に突っ伏して、あたためた缶飯の鳥飯を開封しながら、中身をもそもそと咀嚼する結衣のげつそりとした表情に、オレンジに近いライトブラウンの髪をした同僚の魔法少女——三上美柑は悪戯っぽい笑みを口元に浮かべる。

「帰ってくるなり何て顔してんのさ、結衣」

「……美柑。ごめん、人間同士で争ってる、って、こんなにづらいことなんだって……」

3年前の戦いで取り戻した平和は偽りの衣を剥ぎ取られて、今もまだ人類は戦いの最

中にあるという事実を突きつけられれば、あの戦いで散っていった仲間たちにどんな顔をすればいいのが、結衣にはわからなかった。

敵星体との戦いが終わっていないのであれば、人類同士で争っている暇も理由もないはずなのに、中途半端に取り戻した平和が分断を深刻化させる。

そうなれば、とてもやり切れるものではないと、結衣は溜息を一つ吐き出すと、食事というより、ただ食べ物の栄養を摂取しているだけ、といった具合の表情でもそもそと缶飯を食べ進めていく。

「ま、そこはアタシも同意するけどさ。食事の時ぐらい笑ってないと、損だよ損。特権とはいえレーションの中でも上等な缶飯食べられるんだから、少しぐらい笑わないとご飯が美味しくなくなるよ?」

「……美柑は、元気なのね」

「ん、いや? 元気にしてないと元気じゃなくなるからね、皆が皆そんなもんだと思うよ?」

いつの間にか結衣の向かいに腰掛けていた美柑は笑顔を浮かべながらそう言い放つ。結局のところ、擦り切れているのは誰も彼も変わらなくて、戦いに血道を上げているのは安全圏で命令を下すだけの上層部だけだということだ。

表向き元気そうに見えるだけで、美柑も美柑で何かしら釈然としないものであった

り、或いは怒りであったり、そういうものを抱えているのだろう。

感情を表に出してしまう自分の幼さを恥じ入りながら、結衣は美味しいはずなのにまるで味を感じない缶飯を黙々と口に運ぶ。

少なくとも極東管区に在る限り食事の質が保証される、といったのはかつて戦場で嚮を並べた魔法少女の一人だったか、それとも違う誰かだったか。

彼女が彼かは知らないが、その誰かが言った通り、極東管区で軍人に支給される戦闘糧食は、さすがに「赫星戦役」の只中ではその質を維持しきれなかったものの、ある程度の復興を果たした今では再生食や合成食のクオリティも向上している。

もつとも、味のクオリティに言及できるものには、それが何からできているかを知ろうと思わない限り、と枕詞がつくのだが。

「結衣は……缶飯、好き……？」

そして、結衣の隣に腰掛けて美柑との会話に耳を傾けていたスティアが、黙々と食べ進めていたことで既に半分以上中身を減らした缶飯を指して問いかけた。

缶飯はこの時代においても珍しい天然食であり、連邦防衛軍が所有する大規模農業プラントから収穫されたものを使用しているため、食事としては間違いなく上等な部類に入る。

「ん、スティア。結衣って缶飯好きなの？」

「……わ、わたしも……気になり、ます……」

だから、好きとか嫌いとかより先にありがたいという思いの方が先に来るのだが、軍を離れていた時も家では廃棄品として市場に流されている缶飯を結衣が食べていたのは確かだった。

そんな事情を知らない美柑と、そしていつの間にか結衣の左隣に席を取っていた絵理がずいつ、とステイアへと顔を寄せて問いかける。

自分の食事情はそこまで重要なものなのだろうか、と結衣は困惑するが、そんなどこか牧歌的な雰囲気さえ感じるこの時間は、嫌いではない。

「うん……ステイアは、知ってる。結衣は……お家でも缶飯を食べてた……だから、結衣は缶飯が、好き？」

「……どうだろ、好きというよりは、食べれてありがたいって方が先に来るから。量も多  
いっ」

そもそも自分の好物は揚げパンだ。

結衣はそれを公言したことこそなかったものの、ビュツフエ形式をとっている食堂の日替わりメニューに揚げパンが出た日は、缶飯ではなくそちらを優先して食べている。

だから、何となくわかりそうなものだと思っていたものだが、言葉にしない限り、情報というのは案外伝わらないものなのだろう。

「あー、確かに量多いよねこれ。ま、お腹いっぱい食べれるからアタシも嫌いじゃないんだけど」

「……わ、わたしはちよつと……少ない方が、いいかな、つて……」

「……絵理は小食だからね」

ただ、食べられる時に食べておくというのは重要なことだ。

無理にでも腹に詰め込めとは言わないものの、このご時世で大つぴらに食べ物を残すというのは憚られる。

だからこそ、絵理がどうしても食べきれずに残した食事は隊の皆で分け合うというのが、かつての魔法少女隊における暗黙の掟だったことを思い返し、結衣はそこに一抹の懐かしさと哀しみを抱く。

「絵理は、小食……美柑は、元気……ステイアは、覚えた」

「あつはは！ そつかー、絵理は小食でアタシは元気かー、うん、間違つてないよ。ステイア」

ステイアも早く記憶が戻るといいね、と言葉を付け加えたのは、美柑なりの優しさというもののだろう。

少なくとも再編されたマジカル・ユニットに、敵星体の襲来を感知する「勘」があるとはいえ、魔法少女としての力を持たない一般人である彼女が編入されたことについ



て、多かれ少なかれ疑問はあるのだろう。

だが、そこに対して表立った嫌悪であったり対立を持ち込む人間がいなのは、結衣にとつてはありがたいことだった。

「そーいや、軍が次に奪還に挑むとこつて知ってる?」

赤飯の詰まった缶飯を開封しながら、まるで夜の猷立を問いかけるかのような調子で美柑はこの場に集まっている全員を一望してそう尋ねた。

連邦防衛軍の前線部隊が領土奪還に向けて動いている、ということ自体は事実であり、極東管区もこの一ヶ月で慌ただしい動きを見せていたのは、何らかの作戦の前兆であるともことしやかに囁かれていたことを結衣は思い出す。

「……わ、わたしは……ごめんなさい、わからないです……」

「スティアは、絵理に同意する……不明、わからないこと……」

「……同じくそうね」

三人が一樣に声を揃えて、不明である旨を伝えられた瞬間、それを待つていましたとばかりに美柑は口角を吊り上げて、不敵な笑みと共にその正解を口に出す。

「四国だつてさ。アタシも理由は風の噂で聞いたんだけど、なんか、あの『赫星一号』の破片の中でも大きめのが突き刺さってるらしいから」

四国。美柑が口ずさんだ答えを、最後の一口と共に嚙下しながら、グラスに注いだ水

をぐいっと煽った。

何故大きな破片がある場所へと軍を差し向けるかについて、まだ結衣は思い当たる節が見当たらなかつたものの、動き出した歯車はいずれ自分たちをそこに運んでいくのだろうという、予感めいたものは胸の内に芽生えていた。

変貌した世界の全てを、結衣たちはまだ知っているわけではない。

しかし、魔法少女である以上、嫌といつてもその矢面に立たされるのなら、今という、東の間の平穏を噛みしめるのも悪くはない。

あえて言葉にこそ出さないものの、同じ考えだったのか、絵理たちが控えめな笑みを口元に浮かべたのにつられて、結衣もまた口元を無理やり引きつらせたような、笑顔の出来損ないを形作るのだった。

## 28. 魔法少女とダンジョン・アタック

先行調査という名目でオケアノス級二番艦「オールト」を中心とした艦隊が四国に差し向けられたのは、差し当たり佐渡ヶ島奪還戦における陸戦隊の報告の中にあつたものを、諏訪部が危惧していたからだつた。

オケアノス級を動かすのには上層部との折衝が必要で、そこには相応の苦勞が伴つていたものの、果たして艦隊を率いて飛び込んだ四国の地は、魔境と呼ぶのが相応しい地獄に変わつていた。

結果論ではあるものの、諏訪部が危惧していた通り、大艦隊を率いての実地調査となつたのは正解だつたといえる。

蔓延る敵星体を、呪術回路によつて魔力的な補強がなされた陽電子衝撃砲塔で撃ち落としながら、陸戦隊と、その随伴として編成された魔法少女隊——主に第三世代魔法少女からなる三人一組のユニットを乗せた艦隊は、旧松山市に突き刺さつていたその物体に向けて運んでいく。

「……いつは……なんだ？　塔か？」

オケアノス級航空戦艦二番艦「オールト」のカタパルトに、78式呪術甲冑を装備し

て待機していた内藤は、佐渡ヶ島で見たものとよく似ていながらも、まだ「欠片」としての面影があったそれとは異なり、螺旋を描くその構造は彼が呟いた通り、一つの塔にも見える。

「そいつを今から調査しにいくんですよ、隊長」

「んなこたあ知つてらあ！ いいかお前ら、ここから先は多数の敵星体との遭遇が予想される、特に魔法少女隊！ お前らは絶対に生き残ることを考えて、教えられた通りに動け！ それでもダメそうなら、俺らのところまで逃げてこい！」

部下から突つ込まれたことを切つて捨てると、内藤はこの調査任務において最前衛を務めることになる三人の少女たち——いずれも戦後に生まれた第三世代魔法少女である——へと、そう言い聞かせた。

呪術甲冑は魔法少女の代替兵器であり、その力は対星装備が完全であるのなら第二世代魔法少女にも匹敵するとされている。

ならば、第二世代魔法少女と比較して魔力量で劣っているところが目立つ第三世代魔法少女は、どう運用すべきなのか。

それを考えて、答えに行き着いた時、内藤はあまりの怒りに打ち震えて殴りつけたロツカーを一つダメにしたが、連邦防衛軍に戦力を遊ばせておく余裕もなく、かつ第三世代魔法少女であっても最低限、タイプ・キャンディと渡り合えるのなら、その戦力を

活用しないという手は人類に残されていない。

その結果としてもたらされたのが、この未知の構造物調査における最前衛、という役割であつたなら、それは大人として、軍人としてともやり切れるものではない。

自分たちは年端もいかない少女たちに死んでこいといっているようなものなのだ。

そして、上層部に巢食っているタカ派はその現実を容認しようとせず、美辞麗句で飾り立てて、第三世代魔法少女たちを前線へと駆り立てているのだから、度し難いという話では済まされない。

これでは本末転倒だと嘆きをぶつたくなるのは内藤だけではなく、部下たちも同じであり、三人一組で最前衛を務める魔法少女たち——「トライアングル・ユニット」には、哀れみや悲しみが入り混じった視線が向けられている。

それは相手の戦士としての誇りを損なうことだとわかっている、誇りで飯は食べられない上に、相手は年端もいかない少女たちなのだ。

悲しむなという方が無理筋だと、呪術甲冑のパイロットたちは沈痛な面持ちで、発進の時を待ち続けていた。

「ありがとうございます、内藤曹長。私たち、絶対に前衛としての戦果を挙げて、この調査を成功させてみせます」

しかし、健気にもその、ミディアムロングの栗毛を二つ結びに括った少女——「オー

ルト」に配属された「トライアングル・ユニット」の代表者である、霧崎希美はぴしつとした敬礼を内藤へと捧げて、自らの内側に芽生えた恐怖を踏み倒すかのようにそう言い切ってみせる。

健気な子だ、とは、思っても口には出せなかった。

内藤はその頭を撫でてやりたくなつたのを堪えて奥歯を噛み、「健闘を祈る」と、紋切り型の答えを返すことしかできなかつた。

それがどれだけ無力であるとしても、無意味なものになると予想できても。

それだけが、戦地へと赴く者の誇りへと捧げられる祈りに他ならないのだから。



塔のように聳え立つ構造物については周辺空域に駐留する「オールト」率いる連邦艦隊が観測し、調査しているものの、その下にあるものについては、呪術甲冑陸戦隊と魔法少女隊が直接赴いて調査する他にない。

文字通りに湧き出てくるタイプ・キャンディを「オールト」の魔力補強が施されたパルスレーザーが撃ち抜いていく中で、討ち漏らした個体を呪術甲冑隊が降下しながら殲滅する形で、幸いにもその「孔」へと降り立つ時に、欠員は発生しなかつた。

だが、そこからが地獄であることを内藤たちは、立ち込める瘴気とも呼ぶべき、忌避する戦場の香りと熟練の勘から悟っている。

恐らく敵星体は自らの生産プラントを作り上げているのではないだろうか。

それがこの一ヶ月、「ラボラトリイ」が佐渡ヶ島から持ち帰った調査結果を検討した結果、導き出された仮説だった。

残存する敵星体は従来、「赫星一号」の欠片から何らかのプロセスを経て発生しているというのが一般的な認識だった。

だが、そのプロセスが変化して、「欠片」を内包した「巣」とでも呼ぶべきものを地下に構築しようとしたが、何らかのリソースが不足していたか中断された結果が、あの佐渡ヶ島の出来損ないのような「孔」だったのではないだろうか、というのが現状における「ラボラトリイ」の見解だ。

連邦政府はこの仮説を公には発表してはいないものの、その可能性は大いに考えられる、という立場は取っている。

だからこそ、内藤たちが実地調査のためにこうして、今や敵地と化した四国へと派遣されたのだ。

78式呪術甲冑の探照灯に照らされて、希美を筆頭にする第三世代魔法少女三人組が先頭を務める形で、「巣」の中を歩いていく。

複数の通路や小部屋など、地下に作られたものとしては極めて頑強かつ、複雑な作りをしている辺り、巢というよりは迷宮、ダンジョンと呼ぶ方が相応しいのではないか。

内藤は湧き出てくるタイプ・キャンディを撃ち落としながら、そんなことを考える。彼は粗暴な人間でこそあったが、無教養ではなかった。

だが、呪術甲冑のそれをダウンサイジングしたアサルトライフルやシールドといった呪術礼装を支給されていても、どこか落ち着き払っている内藤たちと違って、希美たちの足は疎み、引き金にかけた指先もかたかたと怯えも露わに震えている。

「嫌な時代になったもんだぜ……いや、元に戻っただけか」

それでも、呪術甲冑という、魔法少女に頼ることなく敵星体と渡り合える手段が支給されているだけある程度は進歩しているといえるのかもしれないが、身一つで戦わなければいけない魔法少女たちにはほとんど関係のない話だ。

内藤のHUDを警告が埋め尽くしたのは、小部屋に集っていたタイプ・キャンディを制圧して、更なる地下へと続く穴に通じると考えられる開けた部屋へと出たその時だった。

「隊長！」

「タイプ・クッキーが6つ、キャンディは相変わらず数えるのがめんどくせえぐらいるってか……こいつは骨だな！」



地下へと繋がっているともしきその穴を守るかのように、這い出てきた敵星体、特にタイプ・クツキーの見た目は異形としか形容できない変異を遂げている。

地球上の生き物で近いものを挙げるならば、カマキリがそれに近いだろうか。

本来持っているはずの「爪」を鎌の形に変えて、背中から昆虫のそれとよく似た羽を生やした異形は、わずか六匹という数にもかかわらず、生理的な嫌悪感と絶望を内藤たちにさえ感じさせていた。

「わ、私……どうすれば……」

「落ち着けお嬢ちゃんたち！ いいか、三人一組だ！ 防御担当は呪術礼装の盾で敵の攻撃を受け止めて、アタッカーが敵を倒せ！ 遊撃手は俺らと一緒に敵の攪乱だ！ 支援は惜しむつもりはねえ、死ぬんじゃねえぞ！」

敵の前に足が竦んでしまった希美を叱咤するように内藤は言い放つと、同じように盾を構えて固まっている魔法少女と、鈍のような魔法星装を手に震えている魔法少女へと喝を入れて、弾丸をばら撒きながら突撃していく。

タイプ・クツキー、その変異体も極めて厄介なことに違いはないが、敵星体の中で最弱にして、最も侮れないのは物量で押してくるタイプ・キャンディだ。

呪術甲冑に支給されているアサルトライフルは、あの忌々しい飴玉と深海魚のキメラを撃ち落とすために最適化されている。

ならば、回路自体は小さくなっても、呪術礼装ならやれるようにできているはずだ。  
「っ、あああああッ!!!」

希美は恐怖に滴る涙を堪えて自らにそう言い聞かせ、アサルトライフルを構えると、  
役割である遊撃と攪乱を果たすべく、敵星体へと突撃していくのだった。

## 29. 魔法少女と「第三世代」

あの日、地球を救ってくれた魔法少女のように、いつか自分も立派で強くて格好いい魔法少女になりたい。

結衣が「赫星一号」を破壊したその瞬間、霧崎希美はそんなことを願っていたことを覚えてる。

無数のタイプ・キャンディが呪術甲冑陸戦隊による援護射撃で撃ち落とされていく中、希美はあくまでも冷静に、自らの照星に収まった個体のみを狙って、三点射を叩き込みながら、変異体へと接近していく。

無垢な願いを抱いていた希美が「星の悲鳴」を聞いたのは、新星暦77年末という、着々と人類が復興に向かっていく時代だったものの、それでも魔法少女になれるという現実は、彼女を舞い上げらせるに足りるものだった。

充足。長年の夢が叶ったその瞬間に、柄にもなく小躍りしていたことだって、希美ははつきりと覚えている。

だが、現実というものはそこまで単純なものではなく、事実というものは時に酷薄にして冷淡だ。

連邦防衛軍の施設で魔力量と適性を測る検査を受けた希美に下された判定は、要求された項目のどれも平均値を下回るという結果だった。

何かの間違いだと、そう思ったかったが、同期として軍に入隊した魔法少女たちの中には、希美たちと同じような「第三代魔法少女」でありながら、「第二世代魔法少女」——戦間期に生まれた存在に匹敵する存在がいて、その実力を遺憾なく見せつけられれば、現実というものを否応なく理解させられる。

とはいえ、第三代魔法少女の中でそこまで傑出した存在が現れるのは極めて稀なことだった。

多くの第三代代たちは、希美と同じように平均値を下回る能力と脆弱な魔法星装しか持たず、辛うじてタイプ・キャンデイと渡り合うのが精一杯というのも珍しくはない。

それ故に、軍が選んだのは魔法少女を今までのように個人単位で運用するのではなく、三人一組のユニットとしてそれぞれ攻撃、防御、遊撃を担当するように決定された。

更には魔法星装の弱さを補うためにそれぞれ呪術礼装として、呪術回路が組み込まれた銃火器や大槌が支給されることで、貧弱な第三代魔法少女の戦力は嵩上げされたかのように思えたが、それもほとんど焼け石に水であることは明白だ。

しかし、連邦としては敵星体と戦える存在を遊ばせておくわけにはいかないという切迫した事情がある。

そんな大人の都合と弱まった「星の悲鳴」という運命の間で板挟みになった希美たちのような存在は、「トライアングル・ユニット」はそんな現実に翻弄された結果生まれたものだった。

しかし、何よりも残酷なのは、理想と遙かに乖離した戦場という地獄の摂理だ。

タイプ・キャンデーの群れを抜けて、希美はその鎌を研ぎ澄ませていた変異体へと対峙するが、白状してしまふのであれば、今すぐ背を向けて逃げ出したいところだった。

「こんなのが六体もいるなんて……」

泣き言を口にしたところで何も始まらないと、自分を鼓舞しながら希美は不意打ちに備えて周囲を警戒しつつ、左手から自身の魔法星装であるリボンを展開し、カマキリのようなタイプ・クツキーの左腕を絡めとる。

「これで、これで、これでえっ！」

そして、三点バーストではなく弾丸のセレクターをフルオートに設定すると、希美は拘束した変異体へと魔力によるコーティングが施された弾丸の雨霰を、変異体へと浴びせかけた。

しかし、変異体が纏う障壁は極めて強固であり、ダウンサイジングされた、つまりところ引き出せる魔力の上限値が低いアサルトライフルでは、その壁を破るのは極めて困難だといえる。

それを本能で理解していたからこそ希美は、リボンで拘束していた左腕へ、自らの魔力を変換した電撃を流し込む。

『!?!』

狙い通り、電流により焼き殺すことはできなかったものの、変異体が悶えたところを見逃さず、希美は背後の陸戦隊へと呼びかけた。

「曹長、お願いします!」

「よし、よくやった! 後は任せられたぜ!」

対星装備が施された78式呪術甲冑の背部に接続されたキャノン砲から徹甲弾が吐き出され、苦しみ、悶えていたカマキリのような変異体を魔力によるコーティングが施された弾頭が撃ち貫く。

——これで、ようやく一体だ。

敵星体の沈黙を確認した希美は、肩で息をしながら周囲にタイプ・キャンディが潜んでいないかを全力で警戒する。

死神は、決まってこういう時にやってくるものだからだ。

勝利の余韻に浸っていた魔法少女が背後からあの牙に食いちぎられた光景は、今でも脳裏に焼き付いて離れない。

噂によればあの「第一世代魔法少女」——原初の七人と呼ばれる存在の生き残りは、タ

イブ・クツキーが束になってかかってくるでも鼻歌まじりに蹴散らせるほど強大な存在らしいが、陸戦隊の協力がなければタイプ・キャンディを仕留めるので精一杯な自分たちからすれば羨ましいどころの話ではない。

羨望を超え、嫌悪や憎しみに心が染まる前に、希美は言われた通りにただ、留まることなくひた走る。

生き残れるかどうかを決めるのは、究極的には、理不尽だが天運だといえるのかもしれない。

どんなに屈強な兵士であっても、どれだけ戦果を挙げてきた魔法少女であっても、死ぬ時は一瞬であるように、持って生まれた運命というものはどうしようもないものだ。

だが、多少は悪あがきをすることぐらいならばできるのもまた確かなことに違いはない。

それが、戦場で足を止めないことだった。

希美は教え通りに走り回ってタイプ・キャンディを牽制しつつ、呪術甲冑陸戦隊が狙いやすいようにタイプ・クツキーの変異体を誘導するという任務を忠実にこなしていた。

たとえそれがどんな任務であったとしても愚直なほど忠実に実行できるのは、能力こそ低くとも霧崎希美という少女の美点だったし、軍もそれを買って、彼女を遊撃担当に

配置したのだ。

だが、誰しもがそうであるとは限らない。

戦場において一握りの勇気を胸に、恐れを心の奥底に押し込めて走れるのは、ごく一部でしかないということを希美は、そして隊を率いる内藤はよく知っている。

魔力によって引き出せる事象である「拒絶」の表出——呪術結界と同じような効果を持つた大楯を構える第三代魔法少女、松原千佳はその眦に涙を湛えながら、ほとんど錯乱した状態で敵に盾を向けていた。

「やだ、やだあ！ 来ないでよ！ お父さん、お母さああん!!!」

いるはずのない、来るはずのない父母への助けを求めながらも盾を構えていられるのは、魔法少女として積んできた訓練がそうさせるのだろう。

だが、いずれにしてもターゲットを引きつける役に徹している千佳の元には未だ多くの数を残しているタイプ・キャンディや、果ては希美たちの連携によって一体を撃破されたことで脅威であると認定したのか、変異体もまた、その盾へと引き寄せられるように群がっていく。

その殺到が意味するものは一つだった。

呪術回路はその魔力に可変性を持たず、大きさによって出力が異なっている。

つまり、防ぎ切れる攻撃には限度があるということだ。



「総員、松原を援護しろ！ 早くしないとどうなるかわからんぞ！」  
『了解！』

内藤はまだ、この状況下でも冷静さを保っている方だった。

だが、それにしてもこの状況は奇妙であると、彼の直感と、変化した戦況ははそう告げていた。

敵星体は、意図的に希美をターゲットから外している。

脅威度を優先するのであれば変異体を撃破した希美から狙ってもおかしくはないところを、盾を構えた千佳から優先的に潰そうとしているのは、前者に傾倒していた今までの敵星体における行動パターンとは明らかに異なっていた。

「千佳から離れろ！ このっ、このおっ！」

アタッカー担当である魔法少女、弦巻紬が自身の魔法星装である鉈を構えて、タイプ・クツキーの変異体であるカマキリの首を狙って振り下ろすが、その障壁を突破するのは容易ではない。

ばちばちと火花を散らしながら、刃が押し返されていく感触に紬は焦りを感じながらも、自らの魔力を全力で鉈へと注ぎ込む。

これがもし第一世代魔法少女や第二世代であったなら、きつとバターでも切るような調子で変異体の首を落としていたのだろうが、自分たちではそうもいかない。

第三世代。貧弱にして最弱の魔法少女たちは、ほとんど捨て駒同然で戦場に放り込まれているのが現実なのだから。

紬は自らの非力に齒噛みし、涙を流しながらも魔法星装にありつたけの魔力を注ぎ込んで、自分の方を見ようともしない変異体の首へと、とうとうその刃を食い込ませていた。

「これで……倒れろおおおッ!!!」

ざくり、と体組織を裂いて鉋が食い込む感触を手に覚えた紬は、咆哮と共にタイプ・クツキー、その変異体の首を無理やり叩き落とす。

「やった……やった！ あたしでも、タイプ・クツキーを……！」

「紬……」

「弦巻イ……」

「えっ……」

紬は確かに第三世代魔法少女として、榮譽を手にしたのかもしれない。

だが、その代償はあまりにも大きかった。

魔力を全て攻撃に注ぎ込んでいた代償として、出力の低下していた魔力障壁をいとも容易く、残存していた変異体の鎌が引き裂いて、紬の胴体と首を泣き別れさせるのには、一秒もかからなかった。

「細い細いっ!!!」

希美は咆哮し、アサルトライフルを構えて変異体へと放ったが、その障壁の前に、魔力でコーティングされているとはいえ、呪術回路の容量が少ない銃から放たれる弾丸はあまりにも無力だ。

弔い合戦を挑むことすらできないその残酷さに打ちひしがれたくなるのを堪えて、内藤もまた千佳の救出を第一目標へ切り替えると、呪術甲冑が持てる武装を、変異体と残存するタイプ・キャンデーへと一斉に放つのだった。

## 30. 魔法少女と物言わぬ帰還

結論から述べてしまおうのであれば、四国奪還戦に向けた構造物——ダンジョンの調査という目的自体は、陸戦隊が突入した時点である程度果たされていたといってもいい。

紫水晶で作ったような質感を持つ、螺旋の「塔」が何であるのかについても、突入部隊が戦っている間に、オケアノス級二番艦「オールト」がある程度解析していた。

それだけでなく、そもそも人や呪術甲冑が通り抜けられる「孔」があったこと自体、そこに敵星体が巢食っていたこと自体、佐渡ヶ島で立てられた予測が正しいという証明であり、そういう意味で、敵地の調査という名目で持ち帰れた情報は非常に大きい。

だが、そこには大いなる犠牲が伴っていた。

内藤は不機嫌な表情を隠そうともせず、兵員のために当てがわれた部屋、その二段ベッドの下側で一人静かに黙り込む。

あのための戦いは、ほとんど一方的なものだった。

希美がアサルトライフルを放って注意を引いたところに、呪術甲冑隊が火力支援を行うという作戦は理にかなってこそいたが、それは誰かしらがターゲットをとってくれている、という条件がつく話だ。

盾持ちの千佳に狙いが殺到したのは、戦闘時間を遅延させて結果的に自分たちの数を減らしてくる、と敵星体が判断したからなのか、あるいは何か違う要因があるのかはわからない。

だが、確実にいえることとしては、紬を失ったことでトライアングル・ユニットは著しくその戦闘力を欠き、そして千佳もまた、更なる下層へと通じているのである。穴から湧き出てきたタイプ・キャンデイの増援に押され、大楯の呪術回路が焼き切れたことで、あえなくその犠牲となったということだ。

（嫌、こんなところで死にたくない！ やだ！ 助けて、希美！ 紬！ お父さん、おかあさああん!!!）

千佳の最期は見るに堪えないものだった。

新兵が錯乱して既に戦死した戦友や両親の名を呼ぶ光景など日常茶飯事であるはずなのに、いつまで経っても慣れることはない。

本当ならば千佳も紬も、戦場などに立つような存在ではなかったのだ。

星の悲鳴がどうのこうのと、地球の守護者がどうのこうのとお題目を並べたところで、その役目選ばれたのが年端もいかない少女たちであることは覆せない。

そして、そのお題目を盾にして、そうするしかないとはいえ、少女たちを戦線に送り込んでいるのは、情けないことに自分たち大人の側なのだ。

きつとやりたいことがたくさんあっただろう。やりきれなかったことがいくつもあっただろう。

遺体すら残さず敵星体に喰いちぎられた少女たちのことを思い返し、内藤は一人その拳をきつく握りしめる。

盾役を失ったことでターゲットが分散したことも手伝って、極東管区では初めての「<sup>ダンジョン</sup>巢」攻略は失敗に終わった。

まだ、第一層とでも呼ぶべき浅層で攻略を中断せざるを得なかったのは、「オールト」からも魔法少女や陸戦隊各員のバイタルを計測していたからであり、二人の魔法少女、とりわけ千佳を失った状態でのダンジョンアタックは危険だという判断が下されたからだ。

呪術甲冑の残弾には余裕があったにもかかわらず、そのような決定がなされたのはやはり、まだ十分に数が出揃っているとはいえない呪術甲冑もまた、魔法少女同様に貴重な戦力だとみなされているからに他ならない。

そして、退き口でしんがりを務めることになったのは、案の定、希美だった。

第三世代魔法少女——とりわけトライアングル・ユニットに割り振られるような人間と、78式呪術甲冑ではどちらの方が戦術的な価値が高いのか。

つまりは、そういうことだ。

他人の命で井勘定をすることを生業にしている上層部らしい判断だ、と、内藤はこめかみに青筋を立てて、私室の壁を思い切り殴りつけた。

本来であれば自分たちがしんがりを引き受けて、魔法少女の生還を最優先させるといいうのが従来のシナリオだったが、呪術甲冑の登場は良くも悪くもそのパワーバランスを打ち崩してしまったのだ。

自分たちのような兵士がああ敵星体と戦えるような力を願って、それが叶った時に代償として払わなければいけないのが若い命である、というのは、残酷という言葉で済まされていいようなものではない。

もつと、おぞましい何かだ。

しんがりを引き受けた希美は文句一つ言わずに、訓練で教わった通りに足を止めることなくアサルトライフルを撃ち続け、見事に呪術甲冑隊の生還に貢献してくれた。

鬼気迫る、といった表情で、アサルトライフルの弾がなくなれば魔法星装であるリボンに電撃を纏わせて即席の電磁鞭として仕立て上げ、その賢さを余すところなく使いこなし、希美はその任務を果たしたのだ。

だが、生還し、「オールド」が回収した人員の中に希美の存在はなかった。

しんがりというのは、そういう役目だ。

事実上、犠牲になって他の仲間が逃げるための道を作れ、という——否、美辞麗句を

取り払うのなら、死んでこい、という命令こそが彼女に課せられた任務の本質だった。

当然、内藤たちも希美が生還を果たせるように離脱しながら最大限の火力支援は行っていたものの、それでもダンジョンから湧き出てくる敵星体の数は、尋常ではない。

それを第三世代魔法少女がたった一人で、火力支援もあるとはいえ真つ向から防ぎ切ったことは勲章ものの栄誉であるといってもよかった。

だが、死んだ後にぶら下げられる勲章のどこに価値があるのか。

空の棺を見送ることになる今後と、物言わぬ帰還を果たした彼女たちの両親や家族、その心境を考えて、内藤は己の無力と、横暴に振りかざされる大人の事情を呪った。

「畜生、何が呪術甲冑だ、何が陸戦隊だ！ 俺たちは……たった三人の女の子すら守れなかったんだぞ！」

「隊長……」

「上の奴らはいいい、俺たちが持ち帰ったデータを見てああでもないこうでもないとか言つてりやあいなんだ、だが、そこで死人が出てることを数でしか見ちゃいねえ！」

「……」

「なら……俺たちは何のためにあの鎧を着てるんだ!? 一人でも多くの人間を助けるためじゃなかったのか、魔法少女をこれ以上戦場に送り出さないためじゃあなかったのか

よ!!!」



荒れ狂う内藤の怒りを受け止められる者は、この場にはいなかった。

彼と同じ部屋に割り当てられた部下である鶴見もまた、感じていることは同じだったからだ。

あわよくばこの調査で四国を奪還できればいいと考えていたのは上層部だけではなく、新たな誇りに身を包んだ前線の兵士たちもまた同じだった。

しかし、いつでも現実というものは空転して、悪い方向へと倒れ込んでいくものなのだ。

そうわかっているとしても、そこに期待を抱くことや夢を抱くことをやめられないのは人間の性でも呼べるもので、それが現実と食い違っていた時に涙を零すのもまた、人の行いとして不自然ではない。

そんな冷笑的な見方をしたところで、穿ったところから物を見て、わかったような気になったところで、それはただ空虚なだけだ。

ならば、目の前にある犠牲や死に涙を流すことができる方がよほど人間らしい。

内藤が涙に暮れて漢泣きをするのにつられて、鶴見もまた、本当であれば明日の予定を話し合ったり、ウインドウショッピングをしながらああでもないこうでもない、他愛もない言葉を交わすのが似合っていた三人の魔法少女のために涙を零す。

遺体どころか、ドッグタグや遺品の回収すら、自分たちはしてやれなかった。

何が大人だと、そう嘆き続ける内藤は拳の跡がつくほどに強く壁を殴りつけて、怒声と共にそう吐き捨てる。

「すまねえ……すまねえ、霧崎、松原、弦巻……俺らが情けねえあまりよ、こんなことになっちまって……!」

だが、生者にできることは死者に訪れるはずだった明日を生きることだけだ。

死に急ぐのではなく、生き残ることが、生き続けることが何よりの弔いであるからこそ、自分たちはこのダンジョンについてのデータを持って帰るのだと、そう言い聞かせなければ、とてもやっていけないものではない。

漢泣きに暮れる内藤と、密やかに涙を流す鶴見の声が、棺を送り出す聖歌となって、戦場から離れていく「オールト」の一室に響き渡る。

歌のように、天国へと託された祈りのように、一足先に自由になった魔法少女たちのため、内藤たちはその涙を捧げ続けるのだった。

### 31. 魔法少女と持ち帰った戦果

「これが今回持ち帰れたデータですぜ、大佐殿」

大きな犠牲を払ったダンジョン・アタックから数日、その後は無事に敵地と化した四国からの帰還を果たした内藤は、「オールト」の艦長から受け取ったデータと自分たちの呪術甲冑に記録されていたそれが収められているデバイスを、諏訪部へと手渡した。

だが、その表情は決して穏当なものではない。

平静を装ってこそのいるものの、内藤の額には青筋が浮かんでいて、もしも今何か余計なことを言おうものなら、諏訪部を殴り倒してしまうのではないかと、彼の背後に控える陸戦隊の部下たちは戦々恐々としていた。

だが、抱いている心境は彼らも全くと違っていいほど同じであり、どこか恨みのこもった視線が内藤と対峙する諏訪部には向けられている。

これでは針の筵だと、諏訪部はデータを受け取りながら表情には出すことなく、内心で溜息をつく。

だが、四国奪還戦に向けた事前調査という任務を命じてきたのは、そして第三世代魔法少女の命と78式呪術甲冑を天秤にかけて、失うリスクが大きいと判断したのは諏訪

部だけの意向ではない。

しかし、彼が責任者である以上、そこにある責任を問われることは必然であり、内藤が抱いている怒りにも、諏訪部は理解できるところも共感できるところもあつた。

それでも、人類は生き残らねばならない。

怒りも悲しみも理解した上でそういう命令を発することにゴーサインを出したのは、間違いなく自分という人間の責任であり、背負つていかなければならない十字架だ。

諏訪部はそう自覚していたが、それがどれほどの償いになるのかについて考えれば、焼け石に水であることもまた理解していた。

「内藤曹長」

「何でありますか、大佐殿」

あからさまに仏頂面で、クビになろうが牢屋にぶち込まれようがこいつを殴らなければ気が済まない、とばかりに呼吸を荒らげている内藤を見据えて、諏訪部は静かに言葉を紡ぐ。

「気に入らないのなら、おれを殴れ。責任は不問だ……この調査作戦の責任者は、おれだからな」

覚悟を決めた者が宿す、研ぎ澄まされた刃の閃きにも似た鋭い色を帯びた視線が、内藤の義憤に燃える瞳へと真つ直ぐに突き立てられる。

それが綺麗事の類であることもまたわかってはいたが、これ以上の償い——否、そうとも呼べない、彼の鬱憤を晴らす方法は、諏訪部には思い当たらなかったのだ。

もしも自分に世界が救えたら、と思う心は内藤たちとも、魔法少女とも同じものだが、時に冷徹な手段を選ばなければ、人類は敵星体との絶滅戦争を、生存競争を生き残ることなど、到底できはしない。

そう考える諏訪部は、諦観に足を掴まれ、現実という泥沼の中に引き摺り込まれているのだろう。

内藤にも、その指示を下す側の責任やその重さというものに理解や同情を示す余地があることは理解できていたが、それであるの三人が、一人では使い物にならないからと一組でようやく一人前とみなされた魔法少女たちが帰ってくることはない。

「おおらあッ!!」

「ぐっ……………」

咆哮し、その巖のような巨体から内藤は迷うことなく、再確認を求めることなく諏訪部へと握り締めた拳を振り下ろしていたが、その目には涙が滲んでいた。

「……………すまねえ、大佐殿……………こうしたところであいつらが、霧崎が、松原が、弦巻が帰ってこねえなんてことは承知の上なんだ……………だがよ……………」

「……………わかっている、だが、第一世代魔法少女や強力な第二世代魔法少女を、調査任務で

失うわけにはいかないのもまた確かなことだ」

「……………わかつてらあ……………わかつてるんだよ、んなことは！ クソツ……………畜生ツ……………！」

波濤のように押し寄せてきた虚しさに、内藤の肩ががくり、と落ちる。

第三代魔法少女の中でも、タイプ・キャンディと渡り合うのがやつとな魔法少女は、三人一組でようやく一人前の戦力だとみなされるものであり、トライアングル・ユニット——夏の大三角に擬えて名付けられたその部隊は、事実上の特殊攻撃隊であることは、軍部にいる人間ならば誰もがわかりきっていることだった。

トライアングル・ユニットに配属された魔法少女たちが生還してきた事例はゼロではない。

戦力の効率的な運用という意味では、非力な第三代魔法少女をそれぞれの役割に分担させて、連携により敵星体を排除するという運用は理にかなっている。

だからこそ、スタンドアローンでの運用に堪えられない魔法少女であっても、戦果を挙げられるという宣伝文句は、決して嘘ではないのだ。

ただ、帰還率に対して未帰還率の方が圧倒的に上回っているという、それだけの話で。命を并勘定するのが趣味な上層部の事情など、内藤にはわからないしわかりたくもなかった。

例えトライアングル・ユニットの中でも、生き残ることができた魔法少女が今もどこ

かで活躍していても、霧崎希美は、松原千佳は、弦巻紬はもうこの基地に帰ってくることもなければ、事実上、遺影の代わりに桜の下で撮影される、入隊記念の写真に収められた笑顔で、時が止まってしまったのだ。

どこかかと足音を立てて司令室を去っていく内藤の背中を見送りながら、諏訪部は殴られたことで腫れ上がった頬を押さえて、おもむろに立ち上がる。

兵士が死んでいくのは、仕方ないという言葉で割り切つてはいけないことだ。

それは魔法少女も同じであり、書面上では第三世代の落ちこぼれで一括りにされるような魔法少女であったとしても、彼女たちには一人一人名前があつて、歩んできた人生があつた。

「霧崎希美、松原千佳、弦巻紬、か……」

ならば、その名前ぐらひは覚えておくのが、魔法少女を統括する司令部にいる自分の責務というものなのだろう。

それがただの偽善にすぎなくとも、独善にすぎなくとも、そうでなければ、命を使い潰しているという事実潰れてしまいそうになるのは諏訪部もまた同じなのだ。

「派手に殴られたね、大佐」

腫れた頬を押さえながら、眉根に深いシワを刻んで、諏訪部は内藤から手渡されたデバイスを司令部の機器にインストールして、「オールト」による「塔」の解析結果と、そ

して内藤たちが持ち帰ってきた「巢」の第一層、その構造データをスクリーンに映し出す。

そんな彼の様子に、軍服の上から白衣を羽織った赤毛の女性がやれやれとばかりに肩を竦めて、慰め半分の言葉をかける。

「彼らの気持ちはよくわかる。おれも……この立場でなければ同じことをしてたかもしれないよ、宮路少佐」

「でも、彼女たちの戦いは決して無駄なものじゃなかったよ」

そう呼ばれた女性——研究部門である「ラボラトリー」を統括する責任者である宮路真宵は、スクリーン上に次々と表示されていくデータを眺めながら、どこか祈りを捧げるようにそんな言葉を紡ぎあげた。

そして、「塔」における外部からの観測結果と、「巢」の内部構造のデータへと、分析するデータを絞り込んでいく。

少なくとも構造上、巨大な紫水晶が螺旋を描いている「塔」の方については、それ自体は敵星体の体組織とよく似た構造の物質で作られていること以外は、ほとんど不明だといって差し支えない。

しかし、そこに「ラボラトリー」が、真宵が立てていた予測とは、奇妙な符号があることは確かだった。



「各管区から送られてきたデータと照らし合わせると、この『塔』の大きさが、『巢』の規模と比例してるみたいだねえ」

「それは、確かなのか？」

「断言してもいいと思うよ、今回の部隊と似たような編成でダンジョン・アタックを成功させたところは、大体あの『塔』は小さいし、『巢』の規模もそれに比例したものだっただけ」

各管区から、次の国土奪還に向けた調査隊は「オールト」が四国へと派遣されたのと同様に、同期に送り込まれていて、中には同じトライアングル・ユニットと呪術甲冑陸戦隊数名だけのパーティーで、あの忌まわしき敵星体の「巢」を、ダンジョンを攻略した部隊も存在している。

攻略を完了した部隊が持ち帰った戦果はまだ「ラボラトリイ」が各管区と協力して解析中であるものの、少なくとも「塔」の高さがダンジョンの規模に比例しているという真宵の見立ては、彼女が追加で表示したデータを見る限り、正しいものであるといえた。

「ならば、このデータを元に脅威度を策定することは可能、か……よし、取りかかれ！」

「全く、大佐も随分と張り切ってることだし、あたしもなんとかしますかね」

魔法少女たちの死を無駄にしないためにも、その戦いに報いるためにも、より適正な部隊編成の規模を探る指標として、攻略難度の決定は行われなければならない。

諏訪部は部下たちに指示を下すと、各管区へと連絡をとって、ダンジョン・アタック

の結果を共有するように要求するのだった。

## 32. 魔法少女、再始動

結衣たちがブリーフィングルームに呼び出されたのは、四国に派遣されていた調査隊が帰還して一週間後のことだった。

急な召集に結衣たちが戸惑っていたかといえばそんなことは全くない。

何故ならその間、マジカル・ユニットに与えられていた任務はいつもと変わらず地上の警備と治安維持、そして何も無い日は社会奉仕活動という名の掃除であったりと、連邦防衛軍における最大の戦力に与えられるには相応しくないものばかりだったからだ。

「召集……ってことは本格的に始まるのかな、四国奪還戦」

「……あ、あれは……噂だ……」

「んー、でも調査隊は帰還したっしょ？　それで、アタシらに白羽の矢が立ったってことはそれだけの案件ってことっしょ？　絵理」

美柑と絵理はあくまで噂の段階でしかなかった四国奪還戦について、互いに半信半疑といった様子だったが、結衣はそこに戦いの気配を感じ取って一人、神経を逆立てていた。

敵星体は一秒でも早く地球から全て叩き出すべきだ、というのが結衣のトラウマから

来る持論だったが、軍に身を寄せるといふことは、組織の規律に従って動かねばならないということであり、よほどのことがない限りは、有事即応などというのは夢のような話でしかない。

マジカル・ユニットは全ての部隊から独立した権限を有してこそいるものの、司令官である諏訪部がそれを行使することはなく、四国奪還戦の調査隊にしても、彼は結衣たちの温存という選択肢を取っているのだ。

しかしそれも、無理のない話である。

結衣は理想と乖離した現実に歯噛みして、小さく固めた拳を震わせた。

そんな彼女の様子に気づいたのか、ふわりと粒子を散らしながら小首を傾げて、スティアは結衣の瞳を覗き込む。

「結衣……怒ってる？ 結衣は、強い……でも、調査隊？ に呼ばれなかったから、怒ってる……？」

「……スティアは、なんでもわかっちゃうんだね」

覗き込む角度によって色を変える、スティアの不可思議な瞳は自らの心を映し出す鏡のようで、結衣はその移ろう水鏡に、自分の中で捨てきれない青臭さと理想論を見透かされたように感じていた。

調査の段階でマジカル・ユニットが投入されていれば、犠牲を出すことなく制圧でき

たと考えるのは傲慢なのかもしれない。

それに結衣は何よりもよく知っている。

第一世代の強力な魔法少女であろうと、第三世代の非力な魔法少女であろうと、プロの軍人であろうと、何の力もない市民であろうと、戦場という地獄では分け隔てなく、死ぬ時は死んでいくのだ。

初めて魔法少女に変身して敵星体を仕留めた日に、妹の芽衣は油断していたから、トドメを刺し切れていなかった敵星体に食いちぎられて命を落とした。

結局のところ死ぬ時は死ぬ、生き延びる時は生き延びる。

例え最善を尽くしたとしても、天に運を任せる他にないという状況はいくらでも起こりうることで、それは自分たちも、「原初の七人」と呼ばれた第一世代最後の生き残りであつたとしても例外ではない。

結衣の耳にも、調査隊の先遣隊として選ばれた魔法少女たちが犠牲になつたというニュースは入ってきており、彼女たちを天国へと送り出す空の棺を弔いもしていた。

遺品の回収すらできなかつたほど、先遣隊が挑んだダンジョンは過酷なものだつたらしい。

呪術甲冑陸戦隊を率いている内藤という大男が、恨みのこもつた視線で自分たちを一瞥してきたことを、結衣は今でも覚えてる。

自分だって、行けるなら行きたかった。

そう反駁することはできたとしても、現実としてそうはならず、呪術結界に守られた東京で概ね安穩とした日々を過ごしていたのは事実なのだから、彼を非難することなど、結衣にはとてもできそうにない。

「……私は、一人でも多く敵星体から人々を救いたい」

「……結衣さん……」

「……軍に戻らないと、ステイア一人だって守れないのはわかってる……でも、歯痒いの」

結局、結衣がいくら強力な力を持っていたとしても、それは敵星体を殲滅するだけのもので、誰かの生存を保証するとまではいかなくとも、その確率を高めたいのであれば、より多くのプロフェッショナルが必要になってくる。

局地戦に勝利したとして、背後にある本拠地が焦土になっていたら意味はない。

それ故に、結衣は軍に戻る道を選んだのだが、戻れば戻ったでこういつた組織のしがらみが足枷を嵌めてくるのだから、ままならない。

かつかつと踵でリノリウムの床を打ちつけながら、結衣は眉根に深くシワを刻んだまま、ブリーフィングルームへと歩いていく。

「……結衣、ホントに大丈夫なん？」

「……大丈夫よ、美柑」

「結衣が言つて聞かない性格なのはわかつてる。それに、結衣が望んで戻つてきたのもね。絵理だつて……ステイアちゃんだつてきつと同じだよ。だから、生き急ぐような真似はやめて」

美柑は、彼女にしては珍しく強い口調で唇を尖らせると、虚を宿す結衣の、光が消えた瞳を真つ直ぐに見据え、聞き分けの悪い子供にお説教をするかのように人差し指を立てて言った。

「……ステイアも、結衣がいなくなるのは、怖い……だから、望まない……結衣」  
「……わ、わたしも、です……!」

結衣に信頼を寄せている絵理とステイアは、どこか死に急ごうとしている結衣の両手を引いて胸に抱きながら、その温もりで空になった心を満たそうと試みる。

そんな仲間同士の絆とでもいうべきものを、どこか冷めた瞳で見つめていたのが、マジカル・ユニットの中で唯一の第二世代である魔法少女こと、アンジェリカ・A・西園寺だった。

ふわふわとウェーブがかかった焦茶の長髪を揺らしながら、アンジェリカは死に急ごうとしている結衣にも、そしてそれを引き留めようとしているステイアと絵理にも関心を示した様子を見せず、しずしずとその後ろを歩いている。

「アンジェリカは、何か言わないの？」

「ええ、当人がそう望むのならば好きにさせてあげるのが一番幸せかと存じますので」

美柑からの問いかけにそう返すアンジェリカの瞳に滾っているものは、奇しくも結衣と同じく敵星体への憎悪と、そして。

左目が青、右目が赤というオッドアイを持って生まれてきたアンジェリカにとって、極東管区における第二世代最強の魔法少女という肩書きは特別な意味合いを持っている。  
た。

力こそが、屠ってきた敵星体の数こそが己を証明する手段であるのなら、自分はやり  
たいように敵星体を塵殺する。

だから、最強の魔法少女だろうが、類稀なる直感を持つ人間だろうが、「原初の七人」  
の生き残りであろうが、各々のやりたいようにやればいいというのが、アンジェリカに  
とつての考えだった。

死にたければ死ねばいい。生きたければ、全力を尽くしてその天運を掴み取ればい  
い。

——死力を尽くせば、いつだって結果はそこに伴う。

そんなアンジェリカにとつての哲学は、強者にとつてのみ都合のいい、歪んだもの  
だった。



だが、歪んでいない魔法少女などいるだろうか。

戦いを生き残った中で擦り切れていない魔法少女など、存在するだろうか。

その答えは否である。

気さくに打ち解けているように見える美柑だつて少なからずこの絶望的な戦況に対する諦念を抱いているし、絵理も後方勤務で、治癒魔法の特異性を目の当たりにした市民から化け物を見るような目で見られたこともある。

その度に脆い彼女の心は傷つき続けていたし、今も悪夢に苛まれることもあった。

だが、結衣という支えがあるから生きていける絵理と違って、今の結衣にはステイアの存在以外支えがない。

「戦いになって同じこと言ったら、怒るかんね」

「無論、戦うとなれば全員での生還が第一目標ですわ。わたくしたちは、地球のためにも倒れるわけにはいきませんもの」

明日の地球についてすら考える余裕を失った世界で、アンジェリカのようにその未来を見据えている人間は稀だ。

しかしそれは、裏を返せば何かしら彼女には明日の地球を、未来を見なければならぬということもあるからということでもある。

美柑は、あえて深く問いかけることはしなかった。

その会話を小耳に挟んでいた結衣もまた同じだった。

抱えている哲学が嘯み合わなくても、戦いに支障をきたさなければそれでいい。

少なくとも、それだけはマジカル・ユニットの魔法少女たちに共通した考えだった。

そして、ぷしゅう、と空気が抜ける音を立てて、いつの間にか辿り着いていたブリーディングルームのドアが開く。

指定の部屋に集結したマジカル・ユニットの面々は、モニターの前に立つ諏訪部へと敬礼をすると、それぞれに思惑を抱えたまま、来るべき戦いに備えて、席に着くのだった。

### 33. 魔法少女と作戦会議

「さて、君たちに集まってもらった理由は他でもない。四国奪還に向けて、先遣隊が得られた情報の共有と作戦の立案を行うためだ」

諏訪部はぼしん、と右手に持った指示棒で左の掌を叩くと、ブリーフィンググループのモニターにここ一週間で各所を駆けずり回って、「ラボラトリー」に分析を依頼したデータを表示する。

よく見れば彼の目元にはうっすらと隈が浮かんでいて、それはこの一週間で諏訪部はほとんど寝ていないことの証明でもあった。

極東管区も連携している「ラボラトリー」は各管区において共通の権限を持つために、ある程度独立した権限を有する他の管区からの情報が集まりやすい。

しかし、一足先にダンジョンアタックを成功させた部隊が持ち帰った極秘情報については解析が進んでいないため、諏訪部の手元にはまだ渡ってきていないが、作戦の遂行に支障があるものではないと判断して、彼は問題の推移を真宵へと一任していた。

「今回、先遣隊が持ち帰ってくれた情報は極めて貴重なものだった。敵星体が巢食っている『巢』——これからはダンジョンと呼称することになるものについて、指標を定め

ることに大きく貢献してくれたからな」

そう口にする、諏訪部は画面に表示していたデータを切り替えて、オケアノス級二番艦「オールト」が外部から観測していた結晶塔のデータと、各管区において成功、失敗を問わず得られたダンジョンアタックの結果、そして「ラボラトリイ」が分析した独自の見解を表示してみせる。

専門用語や戦闘データの記録が目まぐるしく切り替わっていくものの、何が何やら、ということはなく、そこに示されている指標は極めてシンプルなものだ。

ダンジョンと呼称されることが決まった、恐らく敵性体の巣であろう建造物の攻略難度を、段階的に切り分けて視覚的にわかりやすくしたものだ。

それが、諏訪部の示した指標であり、EからA、そしてSの等級で区切られた攻略難度は、話を聞いている結衣たちにとっても直感的でわかりやすい。

「呪術甲冑隊のみ、もしくは第三世代魔法少女隊で突破できるダンジョンがE、第一世代魔法少女——つまり君たちを投入しても攻略が厳しいと予想されるものをSとしている。これらの根拠は、紫水晶のような建造物の大きさに比例して、迷宮の深度が決定されるからだ」

その紫水晶が螺旋を描く「塔」が他に何の役割を果たしているかについては目下研究中であるものの、集積した記録を鑑みれば、「塔」の大きさがダンジョンの規模と比例し

ているというのは間違いない、というのが「ラボラトリイ」の出した見解だ。

ダンジョン。いよいよ非現実感を帯びてきたその呼称に結衣はどこか毒気を抜かれたような気分になった。

しかし、スクリーンに浮かび上がる調査隊の記録に映る「巢」は確かに迷宮のように複雑化した構造をしていて、直感的にはわかりやすいものなのだろう、と自分に言い聞かせる。

その呼称に怪訝な表情を浮かべているのは結衣だけではなく、美柑も、そして絵理とアンジェリカもどこか呆れたような表情をしていた。

そんな中で感心したように瞳を輝かせているのはステイアだけだったが、諏訪部は特に気にした様子もなく、北米管区から「ラボラトリイ」を經由して送られてきたデータを再生する。

そこに映し出されていたのは、アリの巢にも似た構造の小部屋がいくつも並ぶ通路の壁から、「塔」とよく似た紫水晶が生えている光景だった。

——侵食されている。

映像を見た瞬間、直感的に、結衣はそう理解していた。

ジュブナイル小説に出てくるような異世界が、この世界のテクスチャを上書きして、その世界の法則を適用しているようにも見えるその光景は、無機質な敵星体の所業にし

ては随分と人間的な、手が込んだものだ。

「大佐、なんですか？ これは」

そんな現実離れた光景に疑問を抱き、真つ先に手を挙げたのはアンジェリカだった。

土壁から水晶が生えているというのまさながら、敵星体がわざわざ迷宮のような構造物を作り上げていることも、理解を超えている。

彼らは基本的に、無機質な殺戮機械だった。

それは3年前の戦いで結衣たちは嫌というほど理解させられていたことであり、「赫星一号」が破壊された直後に誕生した第二代魔法少女であるアンジェリカにしても同じことだ。

だが、そんな敵星体がわざわざ巣を作り、迷宮のように複雑化した構造物として仕立て上げているのは、スティアを除く魔法少女たちには、不可解極まりないことだった。

「それについては研究中だということ以外の回答は差し控える。重要なのはこれから君たちには攻略難度A級と認定された、四国のダンジョンへと向かってもらうことになる、ということだ」

諏訪部は俺も知りたいぐらいだ、とばかりに小さく眉根にシワを寄せると、いつも通り冷徹に研ぎ澄まされた声音を崩すことなく、結衣たちへとそう告げる。

旧松山市に突き刺さっている、紫水晶で出来た螺旋の尖塔は既に天まで届かんばかりにその威容を誇っており、「ラボラトリー」の推測に基づくのであればマジカル・ユニットを投入するのは妥当な判断だ。

当然、その判断に行き着くまでには魔法少女や兵士たちの屍が積み重ねられているのだろうが——結衣は脳裏をよぎった想像に嫌悪を覚えて、こみ上げてくる吐き気に口元を押さえた。

「前線担当の攻略班が二名、後方で『オケアノス』と共闘し、周囲の敵星体を駆逐するバックアップが二名。前線担当の攻略班には陸戦隊の支援がつくことになるが——」

「やります、私が……前線をやります」

危険な任務になる、と忠告を送ろうとした諏訪部の言葉を遮る形で、結衣はぎらぎらと義憤をその赤い瞳に滾らせて、地獄行きの片道切符を買う宣言とする。

この攻略難度の指標が策定されるまでに、積み上がった犠牲がある。

ならば、自分はそれを背負って、一人でも同じ任務で犠牲になる人間を減らすために、動かなければならない。

その擦り切れた心を炉に焼べてでも、結衣はそう決意していた。

それが自己犠牲と紙一重である危ういものであることは諏訪部にも理解できていた。

だが、結衣の戦力はマジカル・ユニットの中でも随一であり、特に広域殲滅と定点攻

撃の両方をこなすことができるバランス型であるというのは、この迷宮攻略には打ってつけだ。

「死に急ぐおつもりなら、ご辞退した方がよろしいのではなくて？」

どうしたものか、と諏訪部が顎に指をやって考え込んでいるうちに口火を切ったのは、アンジェリカだった。

その言葉には怒りだけではなく、少なからず失望が込められていて、それは他でもなく小日向結衣という最強の魔法少女にして救世の英雄という、当人にとっては呪いにも似た理想を、彼女が抱いていることの証でもあった。

「……私は生き残るよ、アンジェリカ。敵星体の全部を地球から叩き出すまで」

「なら、いいのですけれど。とにかく死に急ぐような真似だけはごめんですわ」「肝に銘じておくわ」

情動に突き動かされていたことを諫めつつ、アンジェリカはそんな、死に急ぐような姿を見せた結衣に少しの失望を抱きながらも、それ以上を追求することはせずに口を閉じた。

結衣もまた、感情が先走っていたことは自覚していた。だからこそ、憎まれ役を買って出ても自分を諫めてくれたことに感謝しつつ、再び諏訪部の瞳を見つめる。

「ふむ……そうなるアタッカーとして、アンジェリカ・A・西園寺と組んでもらうのが



ちようど良さそうだな」

「……大佐、本気で言ってますの?」

「三上美柑と小日向結衣では戦闘の傾向が似ているから戦力が偏る。それに万一、地上に以前のような巨大変異体が現れるとも限らない。そして水瀬絵理の『治癒』を『毒』に反転させる広域殲滅能力も、降下支援に回したい。理由としては不足か?」

アンジェリカと結衣を組ませることに關して、諏訪部の中に不安がないというわけではない。

何より、当人であるアンジェリカと、結衣も困惑しているものの、スティアとはまた違った形で結衣の助けになるだろうと判断しての決定だったが、それが吉と出るか凶と出るかは天に運を任せる他にないだろう。

だが、諏訪部は軍人としての自分の直感に、信頼を寄せることに決めていた。

身構えている時には、悪い予兆は訪れない——そんな保証はなくとも、最低限、受け止める覚悟ぐらいはできるからだ。

結衣はアンジェリカと視線を合わせ、その左右で色が違う瞳を覗き込むが、そこに決定的な断絶があるわけではない、と予測していた。

無論、アンジェリカが何を考えているかについては結衣の推測でしかないものの、あくまで彼女が問いかけているのは冷静に戦えるかどうかでしかない。

——ならば、やれる。

3年前に魔法少女として戦ってきたその自信と誇りを胸に、結衣は力強く頷くと、心配そうな視線を向けるスティアと絵理に、大丈夫だよ、と、言葉ではなく瞳で語りかけて、ダンジョンアタックの先鋒へと志願するのだった。

### 34. 魔法少女、出撃する

四国奪還戦に向けて立案された作戦が正式に認可を得たことで、マジカル・ユニットはそのデビュー戦として旧松山市に聳え立つ結晶塔、敵星体の巣である「ダンジョン」へと向かっていた。

道中、マジカル・ユニットの五人が揺られていたのはあの狭苦しい駆逐航宙艦の簡易カタパルトではなく、それぞれ乗員に二人一組での個室が与えられるという待遇までついている、オケアノス級一番艦「オケアノス」の一室で、戦地へと向かうにしては随分と豪華な待遇だと、苦笑の出来損ないを浮かべていたことを、結衣は覚えている。

一番艦のネームシップということもあって、貴賓艦としての役目も帯びている「オケアノス」の居住性は、最新の航宙艦らしく、かつての総旗艦を務めた「山城」と比べても圧倒的に快適なものだった。

これで向かう先が諸国漫遊のクルージングであるのならば、乗っている側は夢心地なのだろうが、残念ながらこの艦の行き先は地獄の一丁目だ。

四国圏内に突入したことで、偵察の真似事をしているのか、ダンジョンの周囲からはぐれていた、タイプ・キャンデイが「オケアノス」の艦体を喰い破ろうと襲撃をかけて

くるが、その全てが魔力によるオーバークォートが施された主砲とパルスレーザーに叩き落とされて、塵へと還っていく光景もまた、3年前からすれば信じがたいほどの躍進だった。

流石は人類勝利の象徴として、その威信をかけて建造されただけはある、と、結衣は最大戦速でダンジョン付近の空域へと突入していく「オケアノス」の艦底部カタパルトで嘆息する。

「結衣……行くの？」

「……うん、ステイア」

「ステイアは……怖い。あの場所には、怖いものが、いっぱいある……だから、ステイアは結衣を心配してる……」

空挺降下の準備、といってもただハッチが開くのに合わせて「ドレス・アップ」の解号を唱えればいいだけなのだが、それを済ませると結衣は、不安げに眉を八の字に歪めて表情を曇らせるステイアの手を取って、半ば自分に言い聞かせるように約束を誓う。

「……大丈夫。私は必ず帰ってくる。ステイアの前からいなくなるなんて、約束したから」

「結衣……」

「信じて、ステイア」

結衣から言えることには何の保証もなければ保証もない、気休めの言葉でしかないのかもしれない。

だが、約束を立てることは、言葉を口にするとということはその事象に魂を吹き込むことだと見る向きもあるように、気持ちをはつきりと声に出すことに何かしらの意味があると、結衣はそう思っていた。そう思いたかった。

そんな切実な祈りにも似た結衣の覚悟を邪魔するのは無粋なのだと、そこに何の力も持たない自分が挟まる余地はないのだと理解したステイアは出撃の余波が及ばない安全圏まで身を引くと、儂い笑顔を浮かべて戦地へと赴く結衣の背中に激励を送る。

「ステイアは……信じる。結衣は結衣だから、ステイアは、信じられる……だから、結衣……頑張つて」

「……ありがとう、ステイア。行こう、アンジェリカ」

「言われずとも準備はできていますわ」

律儀に結衣たちの会話が終わるのを待っていたアンジェリカは、どこか青臭い彼女たちの会話に少し辟易しつつも、それを咎めることはせず、徐々に開いていくハッチへと歩を進める。

今日会って、当たり前のように言葉を交わした人間だって、明日にはいなくなっているかもしれない。

それぐらいのことは、アンジェリカにもわかっていたし、一人の戦士として弁えてもいることだった。

『ドレス・アツプ!』

聳え立つ結晶塔にギリギリまで接近したところで開かれたハッチを前にして、結衣とアンジェリカは解号を唱え、魔法少女に姿を変える。

幸いにも「オケアノス」が撃ち漏らした敵星体はいなかったため、先に発進した結衣たちに続いて呪術甲冑陸戦隊もまた、カタパルトから射出される形でダンジョンの入り口である、地上に穿たれた「穴」へと向けて、次々と出撃していく。

そのバックアツプとしてカタパルトから降下した美柑と絵理が、「オケアノス」や呪術甲冑陸戦隊を狙った敵星体を殲滅し、結衣たちは欠員を一人も出すことなく、ダンジョンの第一層へと突入していた。

「気を付けろよ、ここまでは地図があるが、ここから先は何もねえ」

陸戦隊を率いる内藤は結衣たちにそう忠告を送ると、いつでも背後からの攻撃に対応できるように陣形を組んで、まだ「侵食」の面影がない土壁に塗り固められた第一層を進んでいく。

撤退を余儀なくされた第一層から第二層へと通じているはずの穴からは、侵入者を撃退すべく無数の敵星体が湧き出していて、中にはあのカマキリのような変異を遂げた敵の

姿もあつた。

内藤にとつては因縁浅からぬ相手ではあるが、今回のダンジョンアタックで前衛を務めているのは第一世代最強と名高い結衣と、第二世代最強と呼ばれる、アンジェリカのタッグだ。

さも当然のように結衣は無数の思考誘導弾を周囲に展開すると、内藤たちが出る幕はないとばかりに、無数のタイプ・キャンディを塵へと還していく。

「流石は原初の七人ですわね……けれど！」

そして、瞬く間に孤立することになったタイプ・クツキーの変異体——「蠟螂級」と名付けられたそれに、ハサミのような魔法星装を携えたアンジェリカが果敢に斬りかか

る。目にも止まらぬ速さで振り抜かれたその一撃は、バターを熱したナイフで溶かすかのように、蠟螂級の首を跳ね飛ばしていた。

「まだ戦いは終わってない、油断しないで！」

そして、アンジェリカの後隙に付け入るかのように鎌を振り上げた「蠟螂級」を複数巻き込んで、結衣の魔法星装から展開された光の刃がその首を、鎌を、何もかもを飲み込んで瞬く間に塵へと帰せしめる。

「油断をしていたつもりありませんわ。ですが……救援には感謝いたします、小日

向結衣」

「……こつちこそ、どうも。変異体の気を引いてくれたから、やり易かった」

結衣の、典型的な魔法の杖といった見た目である魔法星装「ロンゴミアスタ」から発せられる光の刃を構築する術式の展開には、少しだけ時間がかかる。

と、いうのも、魔力を一度「光」として放出してそれを「刃」と再定義する二つの工程が必要になってくるからだ。

しかし、それすら内藤たちから見れば、一瞬の出来事に過ぎなかつた。

弾薬を装填し、HUDに浮かび上がる敵影を見据えたその瞬間に、敵星体の全ては、二人の魔法少女によって壊滅させられていたのだ。

あくまでも調査のためだったとはいえ、リスクの兼ね合いがあつたとはいえ、あの時、トライアングル・ユニットではなく最初からマジカル・ユニットが投入されていたら。

それが筋違いな怒りであることは、内藤にもわかつている。

しかし、そう思わずにはいられないほどに、かつて苦戦を強いられた敵はあっさりと退けられたのだから、やるせないどころの話ではない。

魔法少女というのは、元来そうした、人智を超えた、理解を踏み倒したような超越存在だった。

だが、どういう事情か「星の悲鳴」が弱まってしまったことで、「トライアングル・ユ



ニット」のように、呪術甲冑と変わらないどころかそれを下回る魔法少女が生まれてしまっている現状が異常なのか、それとも最初期に生まれてきた結衣たちが異常なのかは、陸戦隊の面々の知るところではない。

そして、それは結衣たちも同じことだ。

過程がどうあれ、結果が伴えばそれが全てなのだから。

あくまでも敵星体を殲滅するため、魔法少女としての本懐を果たすために、通路のクリアリングを行って、結衣たちは第二層へと続く縦穴へと飛び込んでいく。

「……それにしても、わからない」

「何がですか?」

「……敵星体が、わざわざこんな凝った建造物を作る理由」

巢穴というのであれば、他の敵星体のキャリアーとなるタイプ・シヨコラータ、「母艦」級が収まるだけの空間があればそれで済む話だが、わざわざ侵入者を拒むような迷宮のように巢を作り上げる理由が見当たらなければ、そこまでの知性を敵が持ち合わせているかどうか、また同じだった。

ただ、池袋での変異体との戦いを経て、結衣の脳裏にはあくまで直感的な予測にすぎないものの、敵星体は何らかの変化を、進化と呼ぶべきものを遂げているのではないかという仮説が時折ちらついて離れないのだ。

「そうですわね、わたくしもそれは存じ上げませんわ。ですが……」

「……ええ」

「答えは案外、最奥に転がっているのかもしれないわ。迷宮とは、得てしてそういうものなのです」

アンジェリカは最初と比べれば幾分か柔らかい笑みを口元に浮かべて、壁面から水晶のような構造体が出し始める第二層の壁を指してそう言った。

案外、真実というものは彼女の言うように、現場に転がっているのかもしれない。

結衣は石ころを弄ぶかのように床に落ちていた紫水晶の破片を爪先で蹴飛ばすと、静かにそう、息をつくのだった。

## 35. 魔法少女と迷宮探索

張り巡らされた敵星体の巢は、生き物が作るそれのように機能的な面を持ち合わせているながらも、それらが活用されている様子はない。

それこそ、旧世紀のゲームに出てくるような、探索者を惑わせるためだけにいくつもの小部屋と通路が配置された、ダンジョンと呼ぶのに相応しい構造は、しかして結衣たちを疲弊させるのに足りるものではなかった。

魔法少女は己の魂と接続された「星の悲鳴」を通じて、敵星体の存在を感知することができる。

つまり、この手の迷宮が、正しくダンジョンとして作られているのなら、より強い敵星体の気配を辿っていけば最短ルートで下層へと繋がる穴を見つけることが可能である、ということだ。

ただし、この任務に含まれるものは迷宮の完全踏破——敵性体の殲滅がその条件の一つである都合上、最短ルートだけを進めばいいというものではない。

78式呪術甲冑の探照灯に照らされながら、結衣は対峙していた変異体、「蠟螂級」の腕を強引に引きちぎり、至近距離からの思考誘導弾を叩き込むことで塵へと還してい

く。

複数体が群れを成しているならまだしも、こういう「はぐれ」の個体だけであれば、変異体といえども対処そのものは楽な方だった。

その隣では通常のタイプ・クツキーを自前の魔法星装で斬り捨てていたアンジェリカは、噂通りに苛烈な結衣の実力と戦い方に感心したように、ふん、と小さく鼻を鳴らす。

「随分と荒っぽい戦い方をなさるのですね」

「この方が消耗を抑えられて楽だから」

「それはそうですね、できるかどうかとはまた別の問題ですわ」

アンジェリカが魔法星装を主軸に置いた戦い方をしてるのは、彼女がインファイターであるから、という理由もある。

だが、純粹に魔法少女としてブーストアップされた身体能力が、第二世代最強といえども第一世代に、「原初の七人」に及ばないから、というのもまた同じだった。

第二層の各部屋に配置されていた敵星体の全てを殲滅したことを、「星の悲鳴」を通して確認した結衣とアンジェリカは、そんな短い言葉を交わすと、陸戦隊を誘導して「穴」のあるフロアへと歩いていく。

先導される内藤たちからすれば、相変わらず結衣もアンジェリカも訳の分からない戦闘力を誇っていると嘆息する他にないのだが、魔力よりも消耗が早い弾薬の消費が抑え

られ、犠牲が出ていないというのは幸いなことだ。

だからこそ、余計に考えてしまうのだ。

どうして調査段階からマジカル・ユニットを動かそうとしなかったのかと——理屈は理解していても、納得が出来ないと言った風情で、内藤はコックピットの中で無然とした表情を浮かべていた。

「いやあ、魔法少女様々つてやつですね、隊長」

「馬鹿野郎、死んでる奴もいるんだ」

「……すみません」

「まあ、気持ちにはわからんでもないがな、こっからが地獄だぞ」

下層へと通じている「穴」の周囲には、第一層がそうであったように無数の敵星体がガーディアンとして配置されている。

しかし、それは明らかに「巢」を守るのであれば非効率的で、非合理的だ。

次のフロアに侵入された時点で総力をかけて挑みかかってくれればいいものを、わざわざ「穴」の周辺に守りを固め、フロアを数体の「はぐれ」に巡回させているのは、何か理由でもあるのだろうかかと内藤は訝るが、言葉が通じない敵の考えなどわかるはずもない。

結衣も、今考えていることは彼と概ね同じようなものだった。

まるで自分たちのような侵入者を試しているような布陣を敵星体が敷いていることに、何か意味はあるのかと疑いたくもなるものだが、やはり対話ができない時点でそれを考えることに意味はない。

「……だったら、出たとこ勝負で殲滅するしかないよね」

「何のことかはわかりませんが、仰る通りですわ」

第三層へと通じている「穴」の周囲を警護しているタイプ・キャンデイの群れを、陸戦隊が両手に携えた、呪術礼装であるアサルトライフルから放たれる弾丸と、結衣が放つ思考誘導弾が七面鳥撃ちのように壊滅させていく。

考えることはもうやめた。

この全てを殲滅する。

スティアが怯えることのない世界が訪れるまで、敵星体を地球から叩き出す。

思考を戦闘に切り替えた結衣の行動は早く、タイプ・クツキーの岩石にも似た体組織を拳で砕き、踵落としてどめを刺す一連の動きに、無駄と呼べるものは一切なかった。

変異体の、蠅螂級が振り下ろす鎌を魔法星装で受け止めつつ、アンジェリカは結衣のその苛烈な戦いに思わずごくり、と息を呑む。

「……あれが、第一世代の最強なのですわね」

誰もがそうあるわけではない。

誰もがそうなれるわけではない。

憧れというのは残酷なものであり、手を伸ばせば伸ばすほど遠ざかり、足を動かせば動かすほどその道からは遠ざかっていくのが常というものだ。

アンジェリカ・A・西園寺という人間は、そういう意味では常に「小日向結衣」という存在に憧れを抱いていたのかもしれない。

蠅螂級の一撃を押し除けて、その胴体を魔法星装たるハサミで両断しながら、荒い呼吸の中でアンジェリカは考える。

最強であらねばならない。有用な、魔法少女でなければならぬ。

今も尚彼女の心を縛り付けているその考えは、変異体相手に一対一のぶつかり合いではそれなりに手こずらされている現状とは程遠いものだった。

油断をしなければ、あの蠅螂級ぐらいは問題なく処理することができる。

だが、それでは足りない。圧倒しなければならぬのだ。

結衣が容易く、杖から展開した光の刃でタイプ・クツキーの通常体と変異体の区別なく両断していく光景を横目に、アンジェリカは一人、ぎり、と歯を食いしばる。

左右で色が違う瞳に微かな羨望と嫉妬を宿しながらも、アンジェリカの闘志が横道に逸れることはない。

変異体を両断し、自身の特性である強化魔法を展開すると、背面飛びの要領で背後か

ら振り下ろされた鎌を回避し、アンジェリカは魔法星装を振るって蠅螂級の首を跳ね飛ばす。

そして、アンジェリカへとターゲットを向けた個体に結衣が思考誘導弾による攻撃を浴びせかけることで、第三層へと続いている「穴」を守護していた敵星体はその全てが大した時間をかけることもなく駆逐されていた。

「感謝いたしますわ、わたくしに合わせてくださって」

「ううん、こつちこそありがとう。さつきも言ったけど、敵の気を引いてくれて」

「お互い様ですわ、下に参るといたしましたしよう」

相変わらず、交わされるのはどこかぶつきらぼうで短い言葉だったが、結衣もアンジェリカも、この短い時間で互いが背中を預けるのに十分だと、確信を抱く。

結衣がいかに最強の魔法少女であるとしても、一人にできることには限界がある。

この程度の群れであれば、確かに結衣一人でも壊滅させることは理論上可能なものかもしれないが、それは全ての不確定要素を排除した、机上の空論でしかない。

だからこそ、互いに補い、庇い合う。

部隊とはそういうものだ、幼い頃に教えられたことを思い出しながら、結衣はどこか懐かしい気分になりつつ、下からの攻撃を警戒しながら、より「侵食」の趣きが強い第三層へと降下していく。



敵星体については、考えれば考えるほど、不合理でわからないことばかりだ。

特にここ最近戦ってきた個体は全てそうだと、結衣は微かに眉根へとシワを寄せながら、その顔つきを厳しいものとする。

だが——不合理で、不条理で、わからないことだらけのものがこの世にあるとするならそれは、人間もそうなのではないだろうか。

一瞬、脳裏をよぎったそんな考えを否定するように結衣は微かに頭を左右に振る。

「……何を考えていても、敵は敵よ」

それは自分に言い聞かせるための、戒めるための言葉だった。

視界というスコープに敵を捉えて、呼吸を整え、その全てを、あらゆる手段で殲滅する。

敵星体を相手にするのなら、それ以上の理屈は何もいらぬ。

戦いから離れていたことで薄れていた「魔法少女」へと自らを引き戻すべく、結衣は何度もその言葉を、声には出さず繰り返すのだった。

## 36. 魔法少女と迷宮攻略

到達した第三層では、土壁から生える紫水晶のような物体が第二層とは比べ物にならないほどその数を増やしていた。

そのぼんやりとした薄明かりは、呪術甲冑陸戦隊の探照灯を切っても探索に支障をきたさない程度には連続して続いており、自分の内側から聞こえてくる「星の悲鳴」もまたその強度を増していくのが、結衣にははつきりと感じ取れる。

敵星体の存在がなければ、どこか幻想的でさえある紫水晶の照らす侵食空間は、「はぐれ」の個体である敵星体の数もまた増えているのかと、結衣は一瞬身構えた。

だが、「星の悲鳴」を辿ってみればそのようなことはなく、相も変わらずただ「穴」があると思しき空間の近くに彼らは寄り集まって、その一点だけを防衛していた。

「しかしよ、敵さんは何のためにこんな迷路を作りやがったんだ？」

第一層、第二層と続いてきたその構造にいい加減うんざりしていたのか、内藤は溜息混じりに呟く。

これが呼称通りに敵星体の「巢」であるならば、通路から侵入できる「部屋」には意味があらねばならない。

だが、ダンジョンの名の通り、今のところその部屋が果たしている意味は「穴」へと通じる「当たり」の部屋に辿り着くまでに探索者の体力や気力を浪費させるためのものでしかない。

これがかもしも旧世代に流行ったゲームであるのなら、ドロップアイテムである資金や装備、食料などが調達できるのだろうが、床に落ちているのは今のところ、何の価値も持たない紫水晶の破片だけだ。

「……私たちを消耗させるため」

結衣は彼の呟きに、今考えられる最大の理由をそのまま包み隠さず言葉として返したが、内藤は気を悪くした様子もなく、だろうなあ、と、呪術甲冑が担いでいるアサルトライフルで両肩を軽く叩きながら溜息をつく。

「あのねじれた『塔』のデカさでダンジョンの規模は変わるらしいが……あとどれぐらいなんだ？」

「……わからない。でも、まだまだ敵星体の気配が強いのは確か」

「長丁場、つてことか……こいつは携帯糧食も持つてきて正解だったな」

「……なるべく、最短で踏破するようには意識してるけど、ごめんなさい」

「あんたが謝ることあねえよ、これは俺たちに与えられた任務だからな」

恨むんなら、今頃クーラーの効いた部屋で椅子に腰掛けているお上を恨んだ方がよっ

ぼどいい、と内藤が飛ばした軽口に、陸戦隊の面々が苦笑するのにつられて、結衣は引きつった、出来損ないの笑みを口元に浮かべる。

アンジェリカは一人、そんなジョークに呆れて肩を竦めていたものの、それでもこの光景がそろそろ見飽きてきた、というのには確かなことだった。

これは戦いであってゲームではない。

ダンジョンに潜ったことで何かの戦利品も得られるわけではなければ、死んだらそこまでの話で、地上に戻ってもう一度やり直すこともできない。

そんな実入りのない任務であつたとしても、敵星体を一匹残らず駆逐して、この迷宮を踏破してこいと命じられたのであれば、それがアンジェリカたちにとつては何をおいても達成しなければいけない至上命題だ。

目を伏せ、己の内側から感じられる「星の悲鳴」をアンジェリカが辿りながら通路を進んでいた、その時だった。

「……強い気配がありますわね」

「……うん、近づいてきてる」

結衣もまたその「気配」を感じて、魔法星装を構え直す。

恐らく、反応からしてタイプ・シヨコラータではなくタイプ・クツキーの変異体なのだろうが、「星の悲鳴」が伝えてくれる怯えの強さは、前者に匹敵するほどだ。

順当に通路を辿っていけば、次の小部屋にその反応は待ち構えていることになる。会敵は近い。恐らくあの蠅螂級よりも強力なものがそこにいるのだろう。

結衣とアンジェリカは、覚悟と共に魔法星装を携えて、一際強い反応が待つ小部屋へと慎重に足を踏み入れた。

そして、呪術甲冑の探照灯が照らし出したものは、そうして結衣たちの視界に浮かび上がってきたのは、ファンタジーの世界から抜け出してきたような、二足歩行の蠅螂——リザードマンと形容されるような見た目の変異体だった。

タイプ・クツキーが携える「爪」の代わりに、紫水晶でできた盾とハルバードを構えている蠅螂人は、明らかに今まで戦ってきた敵星体から考えれば、異様な存在だ。

タイプ・クツキー故なのか、敵星体がそこまでのリソースをこの変異体に割くことをしなかったのかはわからないものの、相変わらず発声器官を持たない変異体は二体、じりじりと結衣とアンジェリカへとにじり寄っていく。

両手両足がある亜人としてしか形容できない姿形を、なぜ敵星体がつけているのか——不合理で、不条理な変化、あるいは進化を遂げているのかはわからないものの、このリザードマンは明らかに蠅螂級よりも強い。

魔法少女としての本能在、結衣たちにそう告げる。

「呪術甲冑陸戦隊は背後からの襲撃を警戒してくださいまし！ 参りますわよ、結衣さ

んー！」

「……うん、アンジェリカ」

幸いなのはこの二体が「はぐれ」であったことだろうか。

一対一での戦闘力を高める方向に進化を遂げていたのか、武器を携えるという選択肢をとった変異体に向けて、結衣とアンジェリカは疾駆する。

いつも通りに展開した思考誘導弾で結衣は先制攻撃と牽制を兼ねた一撃を放つものの、蜥蜴人級とでも呼ぶべき変異体が構えている紫水晶の盾はそれら全てを防ぎ切つて、尚消耗した様子を見せていない。

ならば、とばかりに結衣は身体能力を強化する術式を展開して、ブーストアップを施した回し蹴りを盾へと叩き込むことで、変異体が構えたそれを粉碎する。

効いていないように見えただけで、一点に出力を集中させた先程の誘導弾による牽制は、確かな効果を表していたのだろう。

蜥蜴人級が振り下ろすハルバードによる一撃を回避しつつ、結衣は戦場となった小部屋を俯瞰して、周囲の状況を把握する。

アンジェリカもまた変異体と対峙していたものの、あの紫水晶の盾が誇る防御力の前には少々分が悪いのか、渡り合ってはいるものの、押され気味だ、というのが正直なところだった。

しかし、彼女もそれを理解していないほど愚かではない。

「内藤隊長、徹甲弾を！」

「よし、任せられたあッ！」

結衣から向けられた視線に、大丈夫だと瞳で答えを返すと、その身体を宙に翻して、アンジェリカは呪術甲冑隊へと支援を要請する。

78式呪術甲冑が背負っているバックパックに装備されているキャノン砲から、魔力によるオーバーコートが施された徹甲弾が、蜥蜴人級の盾が構えている紫水晶の盾へと直撃し、ぼちぼちと火花を散らす。

あの盾はどうやら簡易的ながらもそこそこ強力な障壁を纏っているらしく、今起きている現象はさしずめ呪術礼装として再定義された徹甲弾と、紫水晶の盾が発する障壁同士の干渉といったところだった。

アンジェリカはそれを認めると、身体強化の術式を展開する。

そして、魔法によってブーストアップされたアンジェリカが放つ飛び蹴りが、徹甲弾を後押しするかのよう炸裂し、無理やり障壁を突き破った。

「ものは……使いようですわ！」

「アンジェリカも問題ない、なら……！」

紫水晶のハルバードによる一撃を回避した結衣は、蜥蜴人級がアンジェリカにも対処

可能であるということを確認すると、そのまま目の前にいる個体の処理を優先することを決める。

魔法の杖から放たれる「光」を「刃」として再定義して、結衣は光の剣を作り上げ、思い切り横薙ぎに振り抜いた。

迷いのない一撃は蜥蜴人級の胴体を両断し、そのまま塵へと還していく。

一対一で挑むのであれば、蜥蜴人級の能力は、結衣には遠く及ばない。

だが、もしもだ。

もしも、これらが地上に解き放たれて連邦軍と大々的に事を構えることになったら。

徹甲弾による対処は可能であるとはいえ、盾を持った存在が前衛を務めて、その後ろを「爪」を持つ個体が固めていたら。

——少なからず犠牲が払われるのは、必然だといえよう。

そんな想像に、思わず結衣は背筋を震わせる。

この変異体が敵星体の中にどれだけ広がっているかは、そして敵星体のデータベースとでも呼ぶべきものが存在し、そこに登録されているかどうかはわからない。

だが、今この場において全てを駆逐しなければならぬのは、容易に想像がつく。

アンジェリカが魔法星装によって蜥蜴人級の首を断ち切るのを視界に認めて、結衣はほっと胸を撫で下ろす。



この迷宮に、宝と呼ぶべきものはない。  
ただし、倒すべき敵がいる。

そういった意味では、先鋒に志願したことは間違いではなかったといえるのかもしれない。

結衣は「オケアノス」の艦内で待っているステイアのことを脳裏に浮かべて、敵星体への憎悪を燃やしながら、静かに次のフロアへと、大量の敵が待ち構える「穴」へと、歩を進めるのだった。

### 37. 魔法少女と迷宮仮説

深部に至るほど、迷宮に根差す紫水晶はその「侵食」を深めて、結衣たちが最下層と見られる敵星体の反応が一際大きな階層へと辿り着いた頃には、既に78式呪術甲冑の探照灯を必要としないほどにその明かりははつきりとしたものになっていた。

水晶の巣窟でも呼ぶべきこの階層は、それが人類にとつて不倶戴天の敵である連中の巢でなければ観光スポットにでもなりそうなものだったが、現実とは違っている。

敵の変化についても、階層を追えば追うごとに多様化が見られた、というのは恐らく「ラボラトリイ」の研究員たちとつてはいいデータになるのだろう。

複数のタイプ・キャンディが寄り集まってできたキメラのような、三つ首の個体がフロアを徘徊していたこともある。

かと思えば、タイプ・クツキーの有するパワーをスピードに振ったような猟犬にも似た個体——「猟犬級」と呼称するのが適当な個体とも遭遇して、結衣にはここが迷宮というより、敵星体の実験場なのではないかとさえ感じられた。

「……何を実験してるかは知らないけど」

「実験、ですの?」

ふと口をついて出た独り言を、アンジェリカは聞き逃していなかったらしい。

それは結衣が何の根拠も持たずに呟いたことではあったが、いい加減敵星体と水晶だらけの光景にも飽きてきたのであろう彼女にとっては、気を引くいい話題だったのだから。

「なんていうか……変異体の数が多すぎるから。ここだけで変異体の新種が何個発見されてるか分からないし、それこそ何か実験でもしてるんじゃないかって」

敵対する存在を排除すること以外の知性を持たないとされる敵星体が、地球を根城にして何かの実験に血道を上げているなど、他人に話せば笑い飛ばされそうなものだった。

だが、アンジェリカも、密かにその会話に聞き耳を立てていた内藤も、結衣の言葉を楽しむ飛ばすような真似はせず、むしろ肯定するかのように顎へと指を這わせて一様に首を傾げる。

それを何故「実験」と感じたのかについて、結衣はあまり考えを巡らせることはなかった、いつてしまえば口をついて出てきた言葉に過ぎなかったのだが、アンジェリカはそれを言い得て妙だと思っていた。

人類を絶滅させることが敵星体の目的であるのなら、従来の形から変化を遂げる必要性はさほど感じられない。

ただしそれは、3年前までの話だ。

敵星体と戦えるのは魔法少女というごく限られた戦力だけで、正規軍はそのバックアップに徹することしかできないという歪な戦力バランスの下で結衣たちは戦い続けてきたが、今は違う。

「つてえと、俺たちか？」

内藤は狭苦しいコックピットの中で首を傾げながら、結衣の立てた仮説に対して、根拠となりそうな考えを一つ、口に出していた。

3年前と今の決定的な違いがあるとすれば、それは正規軍の兵士であっても通常のタイプ・クツキーと一対一でも互角に渡り合うことができる人型機動兵器、78式呪術甲冑の配備がそれに当たるのは確かなことだ。

その配備が敵星体に知れ渡ったからこそ、危機感を強めた彼らが自らの種を分化させることで、人類の殺戮という目的に最適な形を探っている——荒唐無稽な話ではあるが、ありえないと断言できないわけではない。

だが、その仮説を真実とするのには、いくつもの穴がある。

例えば、何故佐渡ヶ島奪還戦の段階で、軍内部でもごく少数の人間しか呪術甲冑の配備状況を知らない時点でダンジョンの痕跡らしきものが生まれようとしていたのかということがそうだ。

可能性としては敵星体の内通者が軍の内部に潜んでいる、ということが考えられる。だが、対話もできない相手がどうやって内通者を送り込むのか、また、送り込んだとしても呪術甲冑の配備を知ることができると重要なポストに配置されるのかという点を立証するのがほぼ不可能である辺り、その説の信憑性は皆無に等しい。

「……可能性はあると思うけど、わからない」

「だろうな、何せ言葉が通じねえんだ、通じたとしたって律儀に教えてくれるとは限らな  
がな」

ただ、何の目的もなく敵星体が進化とも呼べる種の分化を遂げているとは考えづら  
い。

恐らくはこの奥に答えがあるのかと、フロアを徘徊する敵性体の反応がなく、ただ一  
点に防備が集中された「気配」を辿りながら、結衣は茫洋と頭の中でそんなことを考え  
る。

もしもここが敵星体の実験場で、そして、変異体のほとんどは非現実的な存在でこそ  
あるものの、従来型のような異形ではなく、わかりやすく地球の生物を模していること  
に意味があるとすれば。

——それは、ひどくおぞましいことなのではないだろうか。

結衣は自らが導き出した仮説が伝える悪寒に思わず背筋をぞくりと震わせるが、そん

なものは現状、証明する手段がない以上は杞憂に過ぎない。

しかし、常に最悪を想定して行動しろ、と、3年前に魔法少女として教え込まれたその固定観念が、本能に警告として訴えかける。

迷宮のような構造から、この「巢」はダンジョンと名付けられていたが、侵入者を惑わせる迷路は時間稼ぎのためで、本来は何か違う目的があるとするとするのなら。

現状、答えは不明だが、その仮定が全て正しかったのなら、自分たちは敵星体という存在について大きく思い違いをしていることになる。

そうでないことを祈りながら、結衣と、そしてアンジェリカも慎重に、敵の大群が待ち構えているフロアへと歩を進めていく。

踏み砕いた紫水晶の欠片が立てるばかり、という音は何かの前触れであるかのように不気味な響きを持ってフロアの中に反響するが、そのことに反応した敵星体が出てくる様子は今のところない。

そうなれば、今までの階層とは違って、この深層に配置された敵はあくまでも何かを守るため、一塊になっているのだろう。

最悪は、メタモルブーストを切らされることになるだろうか。

歩みを進めるごとに強まっていく「星の悲鳴」がけたたましく脳裏で響き渡るのに煩わしさを感じながらも、結衣は歩くのをやめることはない。

自分の魂にどれだけの「猶予」が残っているのか——前島亜美や翠川美琴のように、その魂を極限まで燃焼させ尽くした魔法少女は、高次元に接続していた代償として、流星のように燃え尽きて灰になる運命を辿る。

それがわかるのは、本人の感覚だけだという魔法少女という名のシステム、その不便さに結衣は歯噛みしながらも覚悟を決めて決戦へと臨もうとしていた。

アンジェリカもまた、それは同じだった。

むしろ、第二世代である分、自分の方がメタモルブーストを切らされるリスクは高い。一度燃え尽きてしまえば、魂は治癒魔法をかけたとしても、元に戻ることはない。

その不可逆性故に、常に揺らぎ続ける不確定性故に、魂はあらゆる可能性を内包した高次元へと繋がる扉としての役割を持つものだから。

魔法少女に定められた滅びのことを頭から振り払って、結衣は思考誘導弾を展開、フロアに突入した瞬間、狙いも付けずに、今までの部屋よりも一際巨大な空間へと陣取っている敵星体へと撃ち放つ。

「援護いたしますわ！」

結衣が放った思考誘導弾を、アンジェリカの強化魔法がブーストアップすることに よって、粗雑に撃ち放たれた一撃は、範囲で多くの敵を巻き込む爆撃へと姿を変える。

「ありがとう、アンジェリカ！」

「魔法少女の嬢ちゃんたちが派手にやつてるんだ、野郎共、俺たちも乗り遅れんじやねえぞー！」

『了解！』

「おおらあああッ!!!」

先陣を切る結衣の勇氣に応えるかのように、内藤は部下たちへと櫓を飛ばして咆哮した。

そして、広範囲爆撃へと姿を変えた結衣の一撃が撃ち漏らした敵を、扇状に陣形を展開した呪術甲冑隊の構えるアサルトライフルが撃ち落としていく。

敵の大半を占めるタイプ・キャンデイの中には三つ首の変異体も混ざっていた。

だが、飽和爆撃と呪術回路が生み出す魔力に裏打ちされた弾幕砲火の前には無力であり、七面鳥撃ちのように星屑たちは撃ち落とされる。

「……やつとお出ましてわけね」

杖から展開した光の刃で変異体も、通常個体の区別もなくタイプ・クツキーを薙ぎ払いながら進んでいた結衣が、空間全体を激しく揺らす地響きに、唇を湿らせながらそう呟く。

そして、一際強い「星の悲鳴」が怯えていた正体——その胎に大量の敵星体を格納するワーム、タイプ・シヨコラータの母艦級が、結衣たちの前にその姿を現すのだった。



## 38. 魔法少女と迷宮決戦（上）

「野郎共、ここが地獄の一丁目だぞ！ 魔法少女の援護は期待できねえ、となれば俺たちだけでこいつらは何とかしろってことだ！」

地中から水晶を食い破って蠕動する、タイプ・シヨコロータ、母艦級と呼ばれる巨大なミミズか、そうでなければ幼虫といった風情の見た目をしている敵星体に結衣がかかりきりで、その露払いとしてアンジェリカがタイプ・クツキーの処理を引き受けている都合、彼女が討ち漏らした敵は自分たちで何とかするしかない。

濃厚になってきた「死」の気配に顔をしかめながら、内藤はアサルトライフルと徹甲弾、そしてミサイルランチャーと、78式呪術甲冑が持てる対星装備の全てをここで使い果たす覚悟でばら撒いていく。

厄介な変異体は幸いなことにアンジェリカが引き受けてくれている。

そうなれば、自分たちの敵は、見慣れた、岩のような躯体を持つ通常体だけだ。

放たれた徹甲弾がタイプ・クツキーの障壁を貫いて、炸裂したミサイルが未だしぶとく残存しているタイプ・キャンデイの群れを焼き払う。

3年前、敵星体との戦いを、ただ指を啜えて見ていることしかできなかった自分たち

はもういない。

内藤と部下たちは佐渡ヶ島を生き延びた通りの連携で、アンジェリカが討ち漏らした敵星体を撃破していた。

「ジャツジメント……！」

結衣はそう名付けることで己の持てる魔力を再定義した、「光」を「刃」に変える術式——魔法を展開し、羽のように広がる光の刃を、何かに苦しむかのようにのたうち回るタイプ・シヨコロータへとぶつけて切り刻む。

魔法少女の力の源泉である魔力は、高次元へと接続された魂を通じて絶え間なく供給されるため、術式の展開を言葉にする必要性はあまりない。

だが、言葉というのは、その中でも名付けというのは最大限の呪いとしての言霊を宿している。

故にこそ、その言葉を引き金とすることによって魔法は「そういうものだ」と定められている結果をより強固な概念として、現世に力として出力されるのだ。

その過程を人は、詠唱と呼ぶ。

詠唱によって強化された光の刃は、狙いも付けずにただその巨体を蠢かせるタイプ・シヨコロータを瞬く間に切り刻んでいくが、結衣はそこに一抹の違和感を覚えていた。

——手応えがなさすぎる。

通常、脳裏に響き渡る「星の悲鳴」が強烈なものであればあるほど、対峙する敵星体は強力なものとなっていくはずだ。

しかし、今、対峙しているタイプ・シヨコロータが先ほど聞こえた「悲鳴」に見合う存在かと問われれば、その答えは間違いなく否であるといえるほど、戦いが順調すぎる。

このままの調子を維持するのなら、タイプ・シヨコロータが、直接の戦闘能力を持たない「母艦級」であつても、解体されるまで最大限に見積もつて一分とかならないだろう。

それにもかかわらず、結衣の中で響き渡っている「星の悲鳴」は衰えることを知らず、それどころか、あの母艦級が切り刻まれる度に、のたうちまわる度にその鋭さを増していくのだ。

「なんですの、この違和感……!?!」

「……アンジェリカも、気付いてた?」

「ええ、手応えの割に、『悲鳴』が大きすぎましてよ……!」

第二世代魔法少女であるアンジェリカであつても、その違和感は覚えているらしく、蠅螂級の首を撥ね飛ばしながら、脳裏に響き渡る「星の悲鳴」を抑えるかのようにアンジェリカは左手を側頭部にそつと這わせる。

単純に考えるのなら、あの母艦級がその胎に大量の敵星体を宿している可能性が挙

げられるが、単純な数だけであれば、結衣たちの前には風前の灯火に等しい。

ならば、この「悲鳴」はなんなのか。

その答えは、結衣が展開した中で最後の一枚である光の刃が、母艦級を縦一文字に切り裂いたその瞬間に、曝け出されることとなる。

『Oooooooooohhhhh!!!』

それは、生まれるのを待っていた。

耐えがたい変異の中で、この地球において幾億もの時間を費やして分枝してきた変化を圧縮して、その可能性を注ぎ込まれた苦痛は、並大抵のものではない。

だが、今この瞬間に、「それ」を生み出すためだけにこの迷宮の奥深くに眠っていた母胎を破って、あり得ざる可能性、人が空想と呼ぶものの中にしか産まれ得ない見た目をした敵星体は、その産声であり咆哮を上げたのだった。

大きさから推察するのであれば、「それ」はタイプ・シヨコロータに分類されるのだろう。

巨大な翼を広げ、紫水晶の鱗に覆われた身体を羽ばたかせるその姿は、遥か昔のお伽話から抜け出てきたようなもの——ワイバーンと呼ばれる飛竜に酷似していた。

タイプ・シヨコロータ、「飛竜級」。

そう名付けるのが適当なのであろう存在は、己に込められたリソースを消費して、お

伽話の怪物同様、その口から紫色の炎を吐き出す。

「う、うわああああッ！」

「矢萩いッ！」

咄嗟に魔力障壁と強化魔法を展開していた結衣とアンジェリカは何とか、直撃を受けながらも焼き焦がされることはなかった。

しかし、結衣の障壁が守り切れる範囲の外にいた呪術甲冑——矢萩と呼ばれたパイロットが搭乗していた機体は簡易的な魔力障壁を搭載していながらもどろりと、バタ——を炙るかのように溶け落ちていく。

そして、息つく間もなく、飛竜級の翼から放たれた紫水晶の矢が結衣たちへと襲いかかる。

奇しくも敵星体が有する「爪」と似たような性質を持つその鏃は、炎から逃れた呪術甲冑の魔力障壁を貫いて、胴体の中心から串刺しにする。

「田城、前原ア！ クソッ、なんなんだ、ありやあ！」

多くの部下の命を一瞬にして奪われた内藤は、煮えたぎる怒りを装填した徹甲弾へと込めて撃ち放つが、飛竜級——タイプ・シヨコラータが有する障壁を貫くには至らない。

またか、と、結衣は膝から崩れ落ちそうになる絶望が、両肩へとのしかかってくるのを感じていた。

「またも、命が失われる。またも、自分が守れなかったせいで。」

「内藤隊長、貴方がたは残存兵力をまとめ退避の準備を進めてくださいまし！　ここはわたくしと結衣さんが引き受けますわ！」

愕然と絶望を表情に滲ませる結衣に対して、アンジェリカは冷静だった。

「その小日向結衣はやれんのか!？」

「やらせるんですよ！　無理にでも戦わなければ、結果としてわたくしたちも死ぬ！　そうなれば、先に逝った方々が浮かばれない！」

飛竜級が飛ばし続ける紫水晶の矢を回避しながら、アンジェリカは空中で静止していた結衣を回収して、ランダムに動き回ること自らを囮としつつもその雨霰から巧みに逃げさせる。

そして、彼女がとった選択は些か乱暴なものだった。

ぱしんと、小脇に抱えていた結衣の頬を思い切り平手で打って、アンジェリカは眉根にシワを寄せながら、怒りを込めて言い放つ。

「何を呆けていますの、小日向結衣！」

「……あ、あ……アンジェリカ……私……」

「……守れなかった命があるのは確かですわ、ですが！　ここで貴女が呆けていれば、死ぬのは貴女だけじゃなくわたくしたちもなのですわ！」

小日向結衣は戦線に出られるような心理状態ではない、という懸念はアンジェリカにも、送り出した諏訪部の中にもあった。

だが、結果としてそれを承諾したのは、過酷でこそあるが、ともすれば人の道を踏み外した行いかもしれないが、結衣の中にある義憤に期待してのことだ。

多くの命を守りたい。

一人でも多く犠牲を減らしたい。

それは魔法少女であれば誰もが願っていることだが、結衣の願いは戦傷によって極端化しているのだ。

すなわち、一人の犠牲も出すことなく、多くの命を守り通す。

あのスティアという少女との出会いの中で何があったのかをアンジェリカは知らなければ、結衣の人柄についても、共に過ごしたここ一ヶ月で知ったことしか知らない。

だが、一人の命のために戦うと同時に、皆の命のために戦うという行いは、どこかで割り切らなければいつか破綻を迎えることになる。

犠牲は避けられないもの、という謳い文句の元に犠牲を正当化するつもりなど、アンジェリカには更々ない。

だが、戦場における命の全てを守り通すというのは、例え最強の魔法少女であったとしても、相応の代償を支払わない限り、不可能に近いことなのだ。

まして、今回は不確定要素である変異体の出現が絡んでいるのだから——それが理想から目を背けた行いであることを自覚しながらも、アンジェリカは結衣を叱咤する。

そうだ。スティアのために、自分は生きて帰らなければならぬ。

頬にじん、と滲む痛みと共に、混乱し、揺れていた結衣の心が落ち着きを取り戻していく。

そして、散っていった命に報いなければならない。

呪術甲冑隊だけではない。桃華に、亜美に、美琴に、詩織に——いくつも積み重ねた犠牲があつて今があるのなら、その今を守り通すことこそ、魔法少女として自分に求められている願いなのだから。

「……ありがとう、アンジェリカ」

「世話を焼かせないでくださいまし」

「……ごめんね、でも、大丈夫だから」

込み上げてくる吐き気を堪えて、結衣はアンジェリカへと礼を告げると、魔法星装を構え直す。

そして、その願いのために——スティアのためと、皆のためという願いと呪い、表裏一体の想いを心火の炉に焼べて、結衣は光の刃を杖の先から展開するのだった。



### 39. 魔法少女と迷宮決戦（下）

#### 魔法少女と迷宮決戦（下）

飛竜級とも呼ぶべき変異体は、間違いなく今まで敵星体が作り上げてきた分岐の中でも系統樹の頂点に近い位置に座している存在だ。

例外があるとするのなら、先日東京湾に來襲した超巨大敵星体なのだろうが、あれは自壊を前提として人類を滅ぼすための欠陥品だ。

生命とは、完全でなくてはならない。

呪詛のように刻まれた生命の歴史と分化が、種の繁栄という概念が際限なく荒れ狂う紫水晶の飛竜に力を与え、確定した結果の一つでしかなかった、事象の抜け殻に過ぎないそれは現実に暴威をもたらし、結衣とアンジェリカへと襲いかかる。

結衣たちに、あの変異体についてわかることは少ない。

ただ、少なくともあの飛竜が暴れ回るだけの広さと強度をこの空間が持ち合わせている、という事実は確かなことだった。

もしもこのダンジョンが、単純に地面に穴を掘っただけの代物であったのなら、あのタイプ・シヨコロータが、飛竜が放ったブレスによって崩壊を起こしているはずだか

らだ。

「どうすれば、と……弱音を吐いてはいられないのですわね」

「うん、戦わなきゃ」

紫水晶の飛竜もまた、確定した事象の抜け殻に過ぎない以上、リソースを薪にし、燃焼させることで稼働している個体であるならば、その力は無限ではない。

だが、生憎どちらかがその力を使い果たすまでの我慢比べ、消耗戦に耐えうるほど結衣たちの方には余裕が残されていなかった。

「結衣さん、斬れますの？」

「……わからない、でも、やってみる」

「それならば……援護は任せてくださいまし！」

結衣が杖の先から展開している「光の刃」へとアンジェリカは強化魔法を付与すると、自身の魔法星装を携えて、飛ばしてはすぐ補充される紫水晶の鍔を掻い潜っていく。

竜と戦った経験など、アンジェリカにはない。それは結衣も同じことだ。

だが、人は想像により未知に対しての補完を行うことが可能な生き物だ。

翼を持つ蜥蜴は現実には存在しない。

そのような進化を遂げた種と近いものは太古に滅び、そして、ワイバーンと名付けられた生き物は、空想の中にしか棲まうことはない。

しかし、あれが人が恐れを形にした竜種という名の幻想ではなく、ただ空を飛んで炎を吐き、翼爪を撒き散らすだけの蜥蜴であるのなら、それを恐れる必要はどこにもないのだ。

「……ズヴェズダユーズ！」

アンジェリカは自分に強く言い聞かせ、魔法星装である「ズヴェズダユーズ」の名前を詠唱として世界に解き放つ。

その名を与えられた魔法星装は、より強固な事象の具現化として、魔力を高次元からより多く抽出して、結衣が今振り下ろしたのとよく似た魔力の光を刃と変える。

「うろちよろと飛び回ったところで！ 羽がなければ……竜なんてトカゲと変わらないのでしてよ！」

「……そうね、まずはその翼を斬り落とす……！」

自らを鼓舞するようなアンジェリカの言葉に同意を示して、結衣は彼女の強化魔法によつてその出力を引き上げられた光の刃を、紫水晶の鱗に覆われた変異体の翼へと叩きつける。

その一撃は詠唱による魔力解放がなくとも、アンジェリカが同時に振り抜いた「ズヴェズダユーズ」と同格の威力を示すかのように、その鱗に引つかかることなく飛竜の翼を斬り落としていた。

羽を失い、地面に叩き落とされた敵は苦悶の叫びを上げてのたうち回るが、厄介なあの翼爪による攻撃手段を失った今、警戒すべき攻撃は呪術甲冑陸戦隊を壊滅に追い込んだあのブレスだけだ。

結衣とアンジェリカという二人の魔法少女によって、敵星体が生み出した仮想に棲まうその種は着実に追い込まれていた。

だが、結衣はそこに一つ、喉に小骨が刺さったかのような違和感を覚えてしまうのだ。池袋でタイプ・クッキーの変異体と戦った時もそうだったが、あの飛竜級は、まるで屈辱に打ち震えるかのように耳をつんざく咆哮を上げて、無軌道に転がり、暴れ続けている。

それが示すものは単純だ。

怒り。

本来、人類に対してどこまでも機械的だった敵星体が持ち得るはずがないものを、あの羽を斬り落とされた飛竜は一目でわかるほどに曝け出していた。

変異体が生まれたこと、そして無数の変異体が生まれているこの迷宮、その結実であるかのように振る舞うあの飛竜級。

今はまだ、それらは連続した事象ではない。

臃な繋がりを持っているかもしれない、個別の不確定要素が宙に浮かんでいるだけ

だ。

だが、それらが全て確定した時、明確な繋がりを得た時に、何か恐ろしいことが起こるのではないか。

光の刃を携える結衣の脳裏に、一瞬そんな想像が閃いて、消えていく。

だが、今は未来のことを考えている場合ではない。

「魔力解放……ロンゴミニアスター！」

ブレスを吐き出すべく、大きく息を吸い込んだ飛竜級の蛮行を阻止するために、結衣もまた呼吸を整えて、己が携える魔法星装の名前を、そこに込めた願いと呪いを世界に解き放った。

アンジェリカの「ズヴェズダユーズ」が纏う「光」と、結衣がその特性として持ち合わせている「光」は、似ているようでその性質は大きく異なる。

全てを浄化し、何よりも疾く駆け抜けていくそれは、第一世代最強と称された魔法少女、小日向結衣のみ与えられた固有の魔法だ。

魔力を単純に光として放出するのではなく、通常ならばあり得ない、高次元の中を漂う可能性の一つである「光によって形成された刃」という結果を引き出して出力する結衣の魔法は、単純な魔力解放を凌駕する威力をもって、吐き出された紫色の炎を両断、そのまま真つ二つに、飛竜級本体をも縦に断ち切っていた。

「なんとかなるものですね」

敵星体が完全に沈黙したことを確認して、アンジェリカは足元に転がっていた紫水晶の破片を踏み砕きながら、額に浮かんだ汗を拭う。

「うん……ありがとう、アンジェリカ」

「お礼を言われるようなことはしていませんことよ?」

「ううん、あの時アンジェリカが私を正気に戻してくれなかったら、きつとこいつにやられてたから」

結果だけ見れば、結衣とアンジェリカは確かに飛竜級を仕留めたといえるのかもしれない。

だが、それはどこまでも綱渡りであつて、一つボタンを掛け違えていれば全滅していたのであろうことは、結衣が一番よくわかつていた。

誰かを守りたい。誰の命も失わせたくない。

その理想を捨てることは、いつしか心を捨てることと同義なのかもしれないが、それを抱き続けるには、人間の心はあまりにも脆過ぎる。

どこかで折り合いをつけなければならぬとわかつていても、今日に至るまでに積み重ねてきた犠牲が、救えなかった命が今も結衣の背中にのしかかっているというのは、3年前、彼女に救われた側であるアンジェリカには理解できても、それを分かち合うこ

とはままならないのかもしれない。

だからこそ、あえて憎まれ役を買って出たに過ぎないと、そう思っていたのだが、妙に律儀な結衣の仕草に、少しばかり面食らった様子でアンジェリカは目を見開いていた。

「その件ですの……でしたら、私から言えることは全て言いましたわ。むしろこちらこそお礼を言うべきですわね。ありがとうございますわ、結衣さん」

あの飛竜級は、自分一人では確実に倒し切れないか、虎の子であるメタモルブーストを切らされていただろう。

いかにアンジェリカが第二世代最強の魔法少女と呼ばれていても、「原初の七人」の中でその名をほしいままにしていた結衣との間では、悔しいが、実力に大きな開きがあることは認めざるを得なかった。

だが、そこで意固地になったところで何かがあるわけでもない。

アンジェリカにはアンジェリカの、魔法少女として戦い続ける理由がある。そして結衣には結衣の理由がある。

それらは共存こそしても、決して対立するものではないのだから。

優雅にスカート裾を摘み上げて一礼するアンジェリカも、妙に律儀だと結衣も引きつった苦笑を浮かべながら、戦いから解き放たれたことでどっと押し寄せてきた疲れに

身を委ねる。

「えつと……どういたしまして？ アンジェリカ」

どことなくぎこちない、コミュニケーションに困って小首を傾げている結衣の姿は、勝手に対抗意識を抱いていた「第一世代最強にして原初の七人の生き残り」である英雄のものではなく、どこまでも等身大な、自身と同じ少女のそれであることを認めて、アンジェリカも苦笑を浮かべる。

ここに、幻想の最強種は討ち果たされた。

だが、もしもダンジョンの中で徘徊していた変異体が地上に解き放たれることになれば、今回のようにはいかないであろうことは想像がつく。

この迷宮を制圧したところで、それがどれほど敵星体に対して打撃を与えられたのかはわからない。

だが、少なからず意味はあったと、そう思っていないければ、やっていけるものではないだろう。

だから今は、一つのことが終わったと、そう思うしかない。

「おうい、終わったか!？」

安全圏まで退避していた内藤たち、陸戦隊の生き残りが、探照灯を照らしながらやってくるのを見つめて、結衣とアンジェリカは力強く頷き、塵へと還った飛竜級がいた場



所を指差しながら、その答えとするのだった。

## 40. 魔法少女と迷宮踏破

変異体、飛竜級との戦いを終えた結衣たちは、最後の部屋であるつい先ほどまで決戦場だった空間の調査を行っていた。

しかし、壁や床に侵食している紫水晶以外には何も無い、ここまで来ると綺麗だといふよりは殺風景にしか感じない部屋には、これといってめぼしいものは見当たらない。

結衣は戯れに壁面から生える紫水晶を砕いてみたが、それで何かが起こるわけでもなく、無駄に広々とした空間は主を失えば、寒々しささえ感じるほどに空っぽだった。

「とりあえず、敵星体の気配は感じませんわね」

「……うん、でも何かがあるような気はしてる」

ただ、結衣の中で声を上げている「星の悲鳴」は鳴り止んだわけではない。

それはアンジェリカも同じだったらしく、小首を傾げて飛竜級の敵星体が暴れまわっても問題ない程度に押し広げられ、固められた空間を、その微弱な気配を頼りに歩き続ける。

「お姫さんたちがそう言うんなら、そうなんだろうな」

結衣とアンジェリカは何かの気配を感じているらしいが、内藤たちが乗り込んでい

78式呪術甲冑の計器は沈黙を保ったままだった。

敵星体の反応がないだけマシだと思ふべきか、水晶をかき分けながら光を反射する探照灯を切つて、内藤たち陸戦隊は目視での確認を淡々と遂行する。

迷宮の奥には宝物が眠っている、というのは冒険のお約束かもしれないが、生憎今自分たちがやっているのは生きるか死ぬかの絶滅戦争であつて、華々しさに飾られた英雄譚をなぞっているわけではない。

言葉も通じず、何を考えているのかもわからない「敵」が何をしようとしているのかを、その活動の断片から推測しようとしている「ラボラトリイ」は苦勞を強いられるというものではないだろう。

頭を使うのが苦手だと自負している内藤や、血の気の多い陸戦隊の兵士たちにとって、考えただけで寒気がする仕事だ。

彼らが溜息をつく一方で、結衣はその微弱な「星の悲鳴」を辿りながら、戦いの犠牲となつた呪術甲冑が溶け落ちていく痕跡を一瞥して、じわり、と毗に涙を滲ませていた。何もかも守り通そうと思ふのは不可能だと、そうわかつたからこそ軍に戻つてステイア一人を保護してもらおうと考えていたのに、それを諦め切れない自分がいる。

アンジェリカに叱咤されても尚、行動を共にしていた仲間の、ともがらの命が失われたという事実は結衣の胸を締め付けて離さない。

それは自分の力に対する過信や、行きすぎた期待から来る、傲慢と隣り合わせな感情であることは結衣もまたわかっていた。

それでも悲しいものは悲しくて、涸れ果てたはずの涙はこぼれ落ちてくる。

しかし、それを今、アンジェリカが咎めることはしなかった。

と、いうよりも、できなかつたというべきなのかもしれない。

結衣が背負ってきた犠牲と期待は、自分のそれとは比べものにならないほど大きく、重たく、今も尚「救世の英雄」として見られている彼女には、それだけの祈りがのしかかり続けているのだ。

もしもそれを癒せる存在があるなら、それこそがあのステイアという不可思議な少女だったのかもしれないと、「英雄」からはかけ離れた結衣の姿に、アンジェリカは以前と違い、失望ではなく悲しみを寄せる。

自分もまた、西園寺という家名を背負って戦っているのと同じで、きつと結衣は全人類の祈りを背負う器であろうとしているのだから。

それがどれほど過酷でも、どれほど苦痛に溢れていても、そういう生き方しか選べない不器用さが、結衣を結衣としてこの世界に留めている。

投げ出せばいい、逃げ出せばいいとわかっていても立ち向かわずにはいられない、その宿命は他人の目から見れば勇氣ある行いに見えるのだろうか。

だが、実態的にそれは緩慢な自殺だ。

結衣も、それは心のどこかではわかっているのだろう。

だからきつと、どこかで踏みとどまってくれる。結衣が道を踏み外しても、ステイアが、絵理が、美柑が——その手を取って引き止めてくれると、今は、そう信じることにできない。

アンジェリカは自分の無力に小さく溜息をつきながら、足元の紫水晶を踏み砕く。

そうして歩き出した結衣とアンジェリカは、同じ気配に導かれ、開かれた空間の中心で足を止めていた。

「これって……」

「ええ、赤いですわね」

その空間に落ちていたものは、弱々しい明かりを放ちながら赤く脈打つ、球体のようなものだった。

周囲の紫水晶が抜け殻とするならば、微弱ながらも何かの活動を続けているように見えるその球体は、この迷宮を作り出した元凶であると認めるのが妥当なのだろう。

結衣とアンジェリカの中で「星の悲鳴」が未だに鳴り止まないことから、赤い球体が敵星体に関連したものであることは想像がつく。

「何か見つけたのか？」

「一応。敵星体の反応はあるけど……」

「うん……？ 78式のリーダーにや反応しねえな、どうするお姫さんたち、こいつはここでぶち壊していくか？」

正体不明の球体が何であるかはわからないが、敵星体に関連するものであるならば早めに処分した方が良く、内藤はそう提言するが、あくまでも今回命じられたのは敵の殲滅だけではなく迷宮の探索もなのだ。

その成果としてこの物体を持ち帰り、「ラボラトリイ」に解析してもらうというのが筋なのだろうが、彼がいう通り、敵に関連するものであるならば、何か悪いことが起きる前に破壊してしまうのも一つの手だ。

「何を仰りますの、内藤隊長。これはあくまで調査任務、この物体から感じる危険性がほとんどないに等しいなら、持ち帰って『ラボラトリイ』に任せるべきですわ」

「……私も、そう思う」

アンジェリカが呆れたように肩を竦めて口にした言葉に追従して、結衣もまた小さく頷く。

危険がないとは言いつても切れないものの、わからないものをわからないまま放っておくよりは少しでも可能性のある方に賭けてみる、というのは博打なのだろうが、選択肢として悪いものでは決していない。

万が一何かが起こった時は、また対処するのが自分たちになるのかもしれないが、同時に「ラボラトリー」が研究を進めることで、より敵星体に対して抗う手段の開発にも繋がるかもしれないのだ。

「ま、そりやそうか……そんなじゃあそいつを持って、さっさと帰ると意気込むとするか」結衣たちの視線に気圧されて、内藤はバツが悪そうに担いでいたアサルトライフルで肩を叩くと、彼女たちの判断を優先して、念のために敵星体の気配を警戒しながらも帰路についていく。

その間にも結衣の掌の上で微かに明滅を続ける赤い球体は、さながら血液を送り出す心臓にも似ていて、その身体に当たる迷宮が踏破され、そこから切り離されたことで活動が弱まっているようにも見えた。

確かに、内藤が口にした通りここでこれを破壊してしまいたいという気持ちはある。

あの忌まわしい飛竜級や数々の悍しい変異体を作り出した物体なのだ。

しかし、任務は任務であって、それを忠実に遂行するからこそ、結衣たちは軍という巨大な組織の中に椅子を用意してもらっている。

それを考えれば、一時の感情に身を任せるべきではない。

一足先に自由になった、戦いのための犠牲となった兵士たちに敬礼と、零れ落ちてくる涙をを捧げて、結衣は、決戦場だった水晶空間に踵を返して引き返す。

そして、恐らくは迷宮を作り出した元凶であろう物体を抱えて、結衣たちは下つてきた道を「穴」へと繋がる最短ルートで引き返し、地上へと上つていくのだった。その手に確かな成果を携えながら、迷宮を踏破した証を抱きながら。



## 41. 魔法少女、帰還する

ダンジョンの地上に聳える紫水晶の塔を守る敵星体は、美柑と絵理という第一世代魔法少女とオケアノス級の過剰なまでに強化された防空能力の活躍によって、その全てが壊滅に追い込まれていた。

特に、絵理が操る回復魔法を概念的に反転させることで敵星体への「毒」とする攻撃は、魔力の及ぶ限り有効射程が極めて広く、敵が一塊になっていなければ炎の魔法を得意とする美柑よりも殲滅能力が高い。

とはいえ、それが適材適所であることは絵理も美柑も理解している。

仕込んだ「毒」が及ぶのに時間がかかる大型の個体——タイプ・シヨコラータの中でも攻撃性能に特化したものは美柑の射撃と斬撃、そしてオケアノス級の主砲による攻撃が仕留め、その代わりに数が溢れるタイプ・キャンデイやタイプ・クツキーを絵理が屠る、という構図が地上ではできあがっていた。

「とりあえずこれで全部かな？ おっつかれー」

「……あ、ありがとう、ございます……」

「何にしてもあとには中に入ってた結衣たちが帰ってくるのを待つだけだね」

オケアノス級による火力支援もあったとはいえ、たった二人でこれだけの戦線を維持できるというのは、第一世代魔法少女の特権のようなものであると同時に、彼女たちが戦略兵器に匹敵する存在であるということを裏付ける証拠だと、オケアノス級一番艦「オケアノス」の艦長席に座する壮年の男性——東山秀、階級は大佐である——は感嘆する。

「勲章もんだねえ、こりゃあ」

「彼女たちに一々勲章を与えていたら、制服が着られなくなりますよ」

「それもそうだがね。我々大人が魔法少女に頼らざるを得ない以上、誠意つてもんは形にしなきゃあいかんだろうに」

副艦長を務める青年からの冗談とも取れる諫言に、東山は苦笑混じりにそう返すも、その目は全くといっていいほど笑っていない。

連邦政府が地球人類の存続を第一目標に掲げるのは結構なことで、それ自体を咎めるわけではないが、誰も彼も魔法少女の力に頼ることを前提としていて、彼女たちに対する信賞必罰さえできていないのではあまりにお粗末ではないか、というのが、表立って言えたことではないものの、遠山の立場だった。

故にこそ、人類が魔法少女だけに頼らず敵星体を撃破できる手段である呪術回路の開発に、彼も一枚噛んでいたのだ。

だが、どうも政府はその目的を履き違えていて、虎の子の78式呪術甲冑にも運用上の課題は見えてきていると、現状は決して楽観視できるものではない。

「いや何……この艦にできることは上等な食事と部屋の提供だ。内藤曹長から通信があったが、ダンジョンアタックは成功したらしい。彼らを、生きて帰った者を今は労おうじゃないか」

「はっ、大佐殿」

生き残ることをおいて他に至上命題がないのなら、生きて帰った命は宝であり、同時に生きて帰れなかった命もまた、人類にとっては堪え難い損失である。

若くして自身と同じ階級に収まった諏訪部は些か勇み足なのではないか、と懸念と心配を抱きつつも、研究対象としてデータを取得していた結晶塔を東山は一瞥して、小さく溜息をつく。

「絶滅しなかっただけマシとはいえ、嫌な時代になったもんだ……お偉いさんに聞かれたら、俺の首が飛びかねんがね」

「私は何も聞いていませんよ」

「素直な部下を持つて俺は嬉しいよ」

東山と副艦長がそんな軽口を叩き合う内に程なくして、結衣たちが第一層まで帰還してきた、という通信が内藤の呪術甲冑を通じて「オケアノス」へと届けられ、敵星体が

いなくなった四国の空で、新たな連邦軍の威信と力の象徴は、今日という日を生き残った魔法少女たちと戦士たちを迎える準備のために、後部ハッチを静かに開くのだった。



魔法少女とは、基本的に穢れの類とは無縁の存在である。

ダンジョンから「オケアノス」への帰還を果たすなり、必要な報告を終えて、データの提出を内藤に一任した結衣は、真っ先にシャワールームへと足を運んでいた。

穢れとは無縁、というのは程度によるものの、毒や呪いの類を受け付けないことであつたり、物理的な汚れが内部から発生すること——その生理活動に割かれるリソースと余剰物すらも魔力に変換されるという特性上、極論をいえば屍山血河で一日中戦い続けていても、内側からの汚れは発生しないということになる。

だが、戦いを終えて一風呂浴びたいというのは年頃の女子としては真つ当な欲求であつたし、シャワールームに集つていたのはそういう意味では、結衣だけではなかった。ざあざあと雨のようにお湯が身体を打ち付ける感覚に身を任せながら、結衣は今日という日を生き残れた幸運への感謝と、助けられなかった命との罪悪感の間で板挟みにな

る。

間仕切りがされているものの、隣では絵理とステイアがシャワーを浴びているのが臍気に見て取れて、二人が生きていてくれたことに、結衣は心の底から安堵を覚えながらも、同時に失われてしまった命に顔向けできないという感情に足元を掬われていた。

「……私が世界を救えたら」

小さい頃に見ていたアニメの中の魔法少女——まだ魔法が空想であった時代代——は、誰一人として犠牲にすることなく、完璧に命を助け、人類を襲う脅威を退けていたことを覚えている。

魔法少女になりたいと、幼い頃は何も考えずにそんなことを口にしていたが、今思えば画面の中にいる彼女たちにだって、できないことの二つや三つ、あったのかもしれない。

「あ、あの……っ……」

声が出したのは、込み上げてくる憂鬱に、結衣が深い溜息を吐き出したその時だった。

「ん……どうしたの、絵理」

「え、えつと……その、嫌じゃなければ、なんですけど……」

「うん、嫌じゃない」

「……よ、良かった……です……その、背中を、流そうかと、思ってた……」

耳まで真っ赤になりながら、絵理はボディタオルで自分の身体、取り分け一際目立つ胸を隠しながら、間仕切りを出て結衣がシャワーを浴びていたところに足を踏み出す。

結衣は自分の容姿に無頓着で無関心な方だったものの、それでも絵理のトランジスタグラマーとしか形容できないスタイルに、羨望のようなものを覚えることはある。

「……ありがとう、絵理」

「い、いえ……どう、いたしまして……」

それとこれとは別の話で、今絵理がそんな提案をしてくれたのは、自分を氣遣つてくれたのであろうということとは結衣にもわかっていた。

だからこそ、おずおずと手を控えめに震わせながらボディタオルに液体石鹸を含ませ、泡を立てる絵理が、自分の背中へと一枚の布越しに触れる感触に結衣は身を任せることを選んだのだ。

絵理は、繊細な女の子だ。

それは小さい頃、青い瞳の色が理由で迫害を受けていたからだとは聞いていたが、その傷はきつと今も癒えきっていないのだろう。

しかしその繊細さは、他人に気を回せる優しさの証明でもある。

「……ごめんなさい、結衣さん……」

「……えっと、何が？」

「……わたしの魔法は、その……心までは、癒せませんから……」

治癒魔法は限定的に時間を巻き戻すことをその概念の中に内包しているが、心もまた魂と同じく実在を証明できず、不可逆な代物である。

魔法と呼ばれる奇跡を行使できたとしても、自分たちにできないことはいくらでもあつて、確かに夢見た魔法少女にはなれたのかもしれないが、その現実は無情なものだという事実には、結衣も、絵理も打ちひしがれる。

それでも、渴いてひび割れた心に一掬いの水を注ぎ続けるような絵理の献身は、結衣の心に確かな潤いを与えていた。

「結衣、絵理……一人は、仲良し?」

遠慮がちに、というよりも最早ロボットのようになががちに緊張しながら前を洗っていた絵理と、そのくすぐったさに少しだけ身を振った結衣を、パーティションの上からステイアが覗き込んで小首を傾げる。

その声は、すらりと伸びた足に、絵理ほどではないにしろ、大きく膨らんだ胸という恵まれたプロポーションをしている結衣に触れることに緊張していた絵理をフリーズさせるには十分なものであった。

「は、はい……っ……!?!」

「ステイア、間仕切りから覗くのは行儀が悪いよ」

「覗く……お風呂場で様子を観察するのは、行儀が悪い……ステイアは、覚えた。ごめんなさい、結衣」

「ううん、次から気を付けてくれればいいよ。それとさっきの質問だっけ、うん。仲良しだよ」

自分への無関心が極まっているのか、結衣はステイアに覗かれても大して気にした様子は見せず、平然とその質問を肯定する。

絵理は昔からずっと戦ってきた戦友であるといえるし、彼女が緊張しがちな性格なだけで、仲だつて悪くないと、少なくとも結衣はそう思っている。

「仲がいい……それは、いいこと。結衣にいいことがある……ステイアは、嬉しい」

「……ありがとう、ステイア」

きつとステイアも、誰かの幸せを心から願うことができる優しさを持っているのだろう。

殺伐とした時代の中で、その心が擦りきれずにいつまでも残ってくれることを願いながら、結衣は無意識に込み上げていた涙を一雫、その両目から零していた。

優しさが生きるような、そんな答えを選べる世界ならばいいのに、と遙か昔にどこかの誰かが歌ったように、いつだってこんな平穏が続けばいい。

それが叶わない願いであると知っていながらも、結衣は、寄せられる二つの優しさに



身を任せ、願いを託すかのように、そつと涙が溢れる目を伏せるのだった。

## 4.2. 魔法少女と「研究室」の主

四国奪還戦は成功に終わり、結衣たちは「オケアノス」に揺られながら東京への帰還を果たしていた。

短い間ではあったものの、貴賓艦としての役割も帯びている「オケアノス」に常備されているレトルトの食品類は質の高いものばかりで、艦長である東山の歓待も、結衣たちの荒んだ心を癒すのに一役買っていたところもある。

贅沢をいってしまうのであれば、揚げパンが食べたかったところはあるのだが、流石に各管区の要人をもてなすのにそんなジャンクフードは出せないだろうというのはいわかり切ったことで、缶飯の白米とレトルトのビーフシチューを別れの晩餐として、結衣たちは地球連邦軍極東管区総司令部に戻っていた。

「そっぴやダンジョンの中ってどうなってたん？」

ひとまずはマジカル・ユニットを統括している諏訪部の元に報告を届けるべく、廊下を歩いていた中で、軍服をラフに着こなした美柑が小首を傾げながら、結衣へとそう問いかける。

「どうって……まあ、凄かったよ、色んな意味で」

「嫌というほど現れる新種の変異体に、極め付けはワイバーン……お伽話の世界に迷い込んだかと思いましたわ」

「……わ、ワイバーン……その……大変だった、んですね……」

実物を見ていないから、美柑と絵理は確かなことは言えなかったが、外と比べればそれだけで、相当な混沌があのだんジョンには広がっていたのであろうことは推測がつく。

考えないようにはしていたものの、敵星体がこれだけの短期間であれだけの変異体を生み出す、つまりは多様性を獲得するというのは明らかに異常なことだ。

その原因は、今は容器の中で嚴重に密封されている、迷宮の最奥部で発見した弱々しくも赤く輝く物体にあるのかもしれないが、「ラボラトリー」に回して解析結果を待たない限りはそれも不確かな推測でしかない。

「ワイバーン……お伽話の世界に出てくる、竜」

「……ステイアは、何か知ってるの？」

「わからない……でも、きつと怖いことは、わかる……」

古に歌われた唄を諳んじるかのように呟いたステイアの口振りには、何かを知っているような含みを持つて結衣には聞こえたものの、本人は小首を傾げてそう語るだけだった。

記憶喪失というのはそういうもので、ふとしたきっかけで記憶が戻ることもあれば、

戻らないままのこともあるという。

ならば、ふわりとその髪から粒子を漂わせて、頭上にクエスチョンマークを浮かべている彼女に、これ以上を問いかけても仕方がない。

そんな結衣とスティアを見つめる絵理の視線がどことなくじとつとした湿気を帯びているように思えたのも、きつと気のせいだろう。

そういうことに決めて結衣は、他愛もない言葉を美柑たちと交わしている内に、いつしか諏訪部が待っている司令室へと辿り着いていた。

オートロックの扉は開かれていて、結衣たちがセンサーの視認できる範囲に立つと、ぷしゅう、と空気が抜ける音を立てて、自動ドアが両開きになる。

そうして露わになった司令室の椅子にはいつも通りに諏訪部が腰掛けていたものの、その隣には、絵理たちにとっては見慣れない——結衣はよく知っている赤毛の女性、宮路真宵が何やら意味ありげな笑みを浮かべて控えていた。

「今回の任務、ご苦労だった。細かいことは東山大佐から聞いているが……四国が敵星体から解放されたとなれば、それは人類にとって大きな一歩だ。君たちの敢闘に感謝する」

敬礼をして司令室へと足を踏み入れた結衣たちに諏訪部は立ち上がり、頭を下げてそう語ると、収まりが悪そうに再び高そうな椅子へと腰を落ち着ける。

厳密には敵星体の巣になっているダンジョンを潰しただけで、「はぐれ」の個体はまだ四国に徘徊しているのかもしれないが、そうした残り物の掃討戦だけならば結衣たちがわざわざ出向く必要もないのだろう。

人類がその生存圏を拡大するのはある種の悲願であり、今も地下都市で暮らすことを強いられている下層市民たちが、地上に一日でも早く戻ってこれるように願うところは諏訪部も、結衣たちも同じことだった。

それでも、そのために犠牲となった死者には勲章と二階級特進が与えられるだけで、空の棺を飾るそれに何の意味があるのかと、結衣はまた暗く沈んだ表情を浮かべる。

だが、それについて諏訪部を責めたところでどうにかなるわけではないというのもまた、わかりきったことだった。

「今回の件については概ね把握しているが、宮路少佐に仔細を伝えてもらいたい。『ラボラトリー』はデータを欲しがってるんでな」

「ま、そういうことになるのかな。結衣ちゃんが抱えてるそれについてもある程度わかってきたし、こつから先は僭越ながら不肖あたし、宮路真宵が引き継ぐつてことで」

諏訪部から背後に配置されているスクリーンのコントローラーを受け取ると、真宵は結衣たちの抱えている疑問を解決すべく、まずは「ラボラトリー」が手段を問わずに集めた情報、その中でも似たような物体がフレームに収められている写真を画面に浮かべ

てみせる。

「わたくしたちが持ち帰ったものと似ていますわね、少佐。何ですの、これは？」

「んー、それについてはキミたちの推測通りだと思うよ、あのダンジョンの核になつていた存在……『星遺物』ってあたしたちは呼んでるけど、まあ簡単に言っちゃえば、『赫星一号』の破片が変質した存在だね」

アンジェリカの問いに、真宵はすらすらとそう答えた。

従来、地球に残存する敵星体は落下してきた「赫星一号」の破片から生み出されてい  
る、というのが定説だったが、この「星遺物」の存在はそれを裏付ける証拠といつても  
過言ではないだろう。

何故それが迷宮を生み出したのかについては目下調査中であるものの、少なくともダ  
ンジョンアタックに成功した部隊が皆あの赤くほのかに輝く物体を持ち帰っているこ  
とから考えれば、ダンジョンを生み出しているのが「星遺物」であるということは断定  
できる。

研究室——「ラボラトリー」の主である真宵は知的好奇心が抑えきれないといった笑  
みを浮かべながら、今度は内藤を経由して東山へと渡り、そして諏訪部の元に届けられ  
た結衣たちの交戦記録をスクリーンに浮かべてみせる。

そこに記録されていた変異体のデータは、真宵にとつては非常に魅力的で興味深いも

のだった。

同時に他の各管区から合法非合法を問わずに入手したダンジョンアタックの記録と、遭遇した敵星体、その中でも変異体のデータを強調して、真宵は少し興奮したように息を荒らげ、結衣へと質問を投げかける。

「結衣ちゃん、ぶつちやけファイリングでいいんだけど、ダンジョンに潜って変異体と戦ってた時、何か思ったことはなかった？」

それは事実上、真宵が考えていることと、結衣が考えていることの符号を意味している問いかけだった。

死者への想いや死線を潜った戦いについてではなく、あくまでも直感的に状況を俯瞰して思ったこと——それは、敵星体の多様化と呼べる変異体の出現についてだろう。

「……実験室みたいだ、って」

「んふふ、ありがとね結衣ちゃん。そう、あくまでまだ仮説だから断定はできないけど、敵星体が多様化とも取れる変異体を生み出してる、あの迷宮は迷宮というより実験室なんじゃないかって結衣ちゃんの直感は、そう間違っただけのものじゃないってあたしも考えてるよ」

何のためにそんなことをしてるのかについては目下研究中だけどね、と付け加えて両肩を竦めると、真宵は各管区から集められた変異体のデータを次々とスクリーンに表示

してみせる。

その変異は管区ごとに異なるものもあれば、結衣たちが見てきたのと同じものも存在していて、最早敵星体の分類が、今までのそれには収まらないことを示していた。

「だが、おかげでダンジョンアタックについての有益なデータを集められたことは確かだ。君たちには勲章の授与も検討されている」

しかし、あくまでも人類の目的は変わらない。敵星体をこの地球から叩き出して国土を取り戻す、という意味で考えれば、敵星体の実験とやらもあのフラスコのような迷宮ごとく破算にしまえばいいだけの話だ。

諏訪部は仮説が脳裏を駆け巡って興奮を抑えきれない真宵を宥めるように話を取り継ぐと、今回の任務にあたっての実益を結衣たちへと率直に伝えた。

正直にいつてしまえば、今更勲章といわれても、というのが結衣たちの本音だったが、あの東山大佐から何か働きかけがあったのかもしれない。

「勲章かあ、結衣たちはともかくアタシたち、いつも通りにやってただけで大したことはしてないんだけどね」

「外に陣取っていた敵星体を殲滅したというのとは大きな戦果さ、三上美柑。むしろ今まで勲章もほとんど出せなかったおれたちが不甲斐ないだけの話でね、これは」

78式呪術甲冑が完成したとはいえ、運用した中でその課題は浮き彫りとなり、未だ



に人類が魔法少女に戦力としての働きを依存しているのは、間違いない事実だった。

苦笑する美柑に苦笑で返しながら、諏訪部はその政治的な事情で動いている自分たちを嘲るかのようにそう答える。

しかし、死んだ時に貰えるその価値と、生きている時に貰えるその価値はどこに違いがあるのだろうか。

東山大佐からの推薦があつた手前、叙勲を辞退するわけにはいかないと結衣たちは渋々その旨を受諾すると、踵を返して、未だに真宵が目を輝かせている司令部を後にするのだった。

## 4.3. 魔法少女と移ろう世界

「……彼女たちは行ったか」

「行きましたねえ」

いまだに興奮が冷めなれないといった様子の真宵は、諏訪部の言葉に応じながらもスクリーンに投影されていた無数の変異体の情報や、各地に出現したダンジョンの情報をスクリーンに投影していた。

その目は滾る好奇心にきらきらと、子供のように輝いていたものの、その奥に映し出されるものは、諏訪部と同じ憂いだった。

敵星体の変化や進化が何故起こっているのか、という事象に対してはいかに「ラボラトリイ」が管区の枠を超えた組織であったとしても分析には至らず、だからこそそれを興味深いと思う研究者としての真宵と、この星に住む個人としての真宵が、背反する感情を抱えているのだ。

「さて……率直に聞こう、宮路少佐。君はこの事態に、何を感じていた？」

「研究者がフイーリングで答えちゃっていいものなんです？」

「構わないよ、ここは公の場でもなければ、直感的な方が案外真実に辿り着いたりする

ものだからな」

ただ、あくまでそれは確証がないというだけで、真宵は何かの確信を抱いているのではないか、というのが諏訪部の立てた予想であった。

興奮しながらもデータを冷静に俯瞰する彼女の瞳には、見立てた通りの芯とでも呼ぶべきものが一つ、真っ直ぐに通されている。

正直に、好き勝手に言ってしまうてもいいという許可を得てはいるものの、真宵としては頭の中に閃いたその仮説を果たして口にして良いものなのかと、一瞬悩んで小首を傾げた。

だが、諏訪部はそれがどんなものであれ、確かだろうが不確かだろうが、自分の直感に賭けて、今この、後手後手に回されている事態を脱するヒントを得ようとしているのだろう。

「んー……わつかりました、ただ、これオフィシャルじゃないですからね？」

「それでいいさ」

あくまでもそれが「ラボラトリ」の公式見解ではない、と前置きしつつ、こほん、と小さく咳払いをしながら真宵は自らの脳裏をよぎったその仮説を舌先に乗せて、言葉に紡ぎ上げる。

「多分ですけど、敵星体……人間から学習してるんじゃないかって思うんですよねえ、あ

たしは」

「人間から?」

「……と、いうよりこの星からって言った方が多分わかりやすいというかわかりづらいというか……まあ、あたしの予想ですけど、奴らは人間が恐れるものを形にして、それを生み出そうとしてるんじゃないかって思うんですよ」

ダンジョンは、そのために生まれた実験室であり、同時に奴らが戦力を蓄えるための「巢」である。

そう考えれば、最早タイプだけの括りに収まらない変異体の出現も説明がつくし、敵星体が侵攻ではなく「巢」を作ったの停滞を選んでいるのも、その生産を行っているから、ということになってわかりやすい。

だが、この仮説には一つ、致命的な欠陥があった。

「多分大佐もおわかりでしょうけど、この仮説……『どうやって』がまるっと抜けちゃってるんですよえ」

「ふむ……?」

「仮に敵星体が人類から学習してるっていうなら、何かの観測と研究が必要になるわけ……それをどうやってるのがわからない」

早い話が、敵星体はどうやって人類を観察しているのか、という観点がこの仮説から

は欠落している。

真宵もそれがわかっていいるからこそ、言葉にするのを躊躇っていたのだが、起きていいる結果から逆算して考えれば、どう考えてもそういう結論に達せざるを得ない、というのもまた確かなことだったために、頭を悩ませているのだ。

その仮説を聞くなり、どこかに人類を観察する端末でも派遣しているのか、と、諏訪部は眼光を鋭くして手元の資料をばらばらとめくり始めたが、見当をつけていた、懸念材料だったその項目は、「ラボラトリイ」のお墨付きで「問題なし」と判定されていた。「……あのステイアという記憶喪失の少女、どこから来たのかもわからなければ名前以外覚えていないなんてどうにも怪しいと見当をつけていたが……」

「ええ、ぶっちゃけ『ラボラトリイ』も怪しいと思っはいましたけど、検査結果は全部シロで、探知機の類にも引つかかるものがない。残念なのか幸いなのかはわからないですけど、ステイアちゃんはれっきとした人間ですよ」

検査結果とデータは、それを保証してくれるもののはずですが、と、真宵はお手上げだとばかりに両肩を竦めて、眉根に深いシワを刻んだ。

ステイアの存在については軍部の中でも疑いの声は強く、マジカル・ユニットへと臨時的に配属された際、「ラボラトリイ」による検査は行われていたが、その結果は真宵が語る通り全てシロであり、彼女は本当にただ記憶を失って行き倒れていただけ、という

のがデータから導き出された結論だった。

諏訪部としても、身内として抱え込んでいる人間に何か余計な疑いは抱きたくないものだったが、経歴が怪しいという点ではまだスティアを完全に信頼しているわけではない。

「どこかに敵星体の端末が紛れ込んでいるなら、少なくとも計器や探知機の類に反応がある……それもないが、敵星体は人類から学習している、か……」

「起きてる状況だけ見れば軽いホラーですよ、これ」

「いずれにせよ、そっちの方は『ラポラトリィ』に一任するしかない。問題なのはこれから、世界がどう動いていくかだ」

ダンジョンアタックによつて「巢」を潰していかなければ、敵星体は際限なく増え続けることだろう。

データはなくとも、それぐらいは諏訪部にもわかる。

そうなれば当面、敵星体による襲撃は減りそうなものだったが、結衣たちが持ち帰ってくれたデータによればダンジョンに属することのない、「はぐれ」の個体も相当数存在していることから、楽観視できるものではないこともまた確かであり、それが諏訪部の頭を悩ませていた。

「後手後手ですけど、結局ダンジョンを潰して、『はぐれ』の個体や群体を迎撃して――

そういう風に、世界は移ろうんじやないですかねえ」

「そうならざるを得ないだろうな、全く……とんだ災難だよ」

運用してみたことで判明した78式呪術甲冑の課題、そして変容していく世界と敵星体、頭痛の種は尽きないが、それでも人類は、自分たちはこの星から奴らを叩き出すまでは前に進み続けなければならない。

指を組んだ諏訪部は眼光を鋭くして、虚空に敵の姿を描きながら、その憎しみをぶつけるかのようにふっ、と小さく息をつく。

魔法少女たちは戦いから解放されなければならない。

今も一部の過激な民間団体が叫び続けるそのお題目は、魔法少女を戦地に送り込む立場にある諏訪部にも同意できるところはあった。

と、いうよりはむしろ、諏訪部自身が結衣たちを戦場に送り込んでいることそれ自体に自責の念を感じているところがあるといった方がいいだろう。

しかし、人類は未だ魔法少女の、その人智を超えた力に縋らざるを得ない。

現実と理想の間には常に乖離が、致命的な断絶が存在していて、そうなった時にどちらを向くかと問われれば、現実を見つめ直さなければいけないのが、軍人としての諏訪部の立場だった。

「魔法少女は解き放たれなきゃならない……これを偉いさんに聞かれてたら、首を撥ね

られても文句は言えんな」

「あたしは何にも聞いてませんよ?」

「……感謝するよ、少佐」

戦いは終わってなどいかなかった。

あの「救世の七人」作戦は誰もが死力を尽くして、絶望の中で導きうる最善の結果を出した作戦だったといってもいいだろう。

しかし、落着いた「赫星一号」の破片は新たな敵星体の温床となり、未だ地球に牙を剥き続ける大敵を生み出している。

そのことについて、結衣を責める権利は諏訪部にも、真宵にも——この星に生きる誰にも存在していない。

「そうだな……ただ、前に進み続けるしかないのさ」

おれたちがくたばるのが先か、奴らがくたばるのが先なのか。

終わりの見えない戦いに微かな疲れを感じさせながらも、諏訪部はその背筋に信念を一本、真っ直ぐに通して、静かにそんな独り言を呟くのだった。



## 44・魔法少女、安らぎのひととき

叙勲式を終えて、制服の胸に勲章を飾ることになった結衣たちだったが、その日常が大きく変わることはなかった。

東山大佐が何を考えて気を回してくれたのかはわからない。

だが、四国奪還という悲願を果たした栄誉は、魔法少女だけでなく戦った兵士たち全員で果たしたものだ。

少なくとも、結衣はそう考えていた。

政治的な都合であるとか、派閥の違いであるだとか、そういう場から魔法少女は遠ざけられている。

ただ、それでも東山大佐のように、政府の中で魔法少女の扱いを見直そうとする動きがある、というのは、何か裏があるかどうかはともかくとして、そう悪い話ではないということも、結衣は理解していた。

ビュツフェ形式でメニューが並べられている極東管区総司令部の朝食は、そのほとんどが合成食や再生食の類であるとはいえ、豪華なものであるといえる。

地上で暮らしていた頃は相応の値段を払わなければ手に入らなかった缶飯が並べら

れているというだけでも贅沢——とまで言い切るのはいかがかと思うが、それでも恵まれていることは確かだろう。

だが、何より結衣が楽しみにしているものは、平積みされている中から兵士や官僚たちがこぞ持って持っていく缶飯ではない。

それは今日の日替わりメニューとしてトレイの上に並べられている、合成揚げパンだった。

人類の食事情は、赫星戦役の頃と比べれば圧倒的に豊かなものとなつてはいるが、それでもこの地球に住んでいる人間が天然食を当たり前のように口にしていた、それ以前の時代と比べればまだまだ、復興の途上であることは間違いない。

だが、結衣にとっては思い出の中にある天然食の揚げパンよりは、本物に近くともどこか殺伐とした食感が懐かしいこの合成揚げパンの方に思い入れがあった。

但し書きにお一人様三つまで、と書かれているのを確認すると、結衣はかちかちとトングを鳴らしながらトレイの上に鎮座する揚げパンを二つ食器の上に並べると、おかずのコーナーに向かって歩き出す。

「好きなんですの、それ？」

サラダは何を食べようかと思案していた結衣は、突然声をかけられたことに驚きつつ背後を振り返れば、そこにあったものは揚げパンに視線を向けながら小首を傾げるアン

ジエリカの姿だった。

「……びつくりした。うん、好き、かな」

「驚かせてしまったのならごめんあそばせ、ただ、二つも揚げパンを並べているのが気になったもので」

アンジエリカは結衣に詫びを入れると、特に迷うこともなく合成魚肉のムニエルを皿に並べて、サラダから主食の合成フランスパンやコンソメスープまで、一通りバランスよく整えられたプレートを完成させる。

魔法少女も軍人も身体が資本だとはよく言われてきたことだったが、アンジエリカのプレートを見れば、彼女が朝食の栄養に相当気を使っているのは、すぐにわかることだった。

その辺り、結衣は全くといっていいほど頓着してこなかったわけではないにしろ、朝から合成肉のステーキをプレートに並べたり、食べたいものを食べる、という発想で動いていたことは確かなことだ。

ビュッフェ形式である以上、それを咎める権利は誰にもないにしろ、そんな他人の「自分だけの一皿」を見ると、その人らしさとも呼ぶべきものが滲み出ているのだから、不思議なものだと、そう思う。

結衣もアンジエリカに続いてレタスときゅうりとトマトが入っている標準的なサラ

ダを皿の上に並べて、備え付けの和風ドレッシングをかける。

そしてその隣に並べたものは、やはりというべきか合成肉のステーキだった。

「朝から食べるものじゃないよね」

「別に他の方のメニューに文句をつける権利などわたくしにはありませんわ」

「……ありがとう。私、合成魚肉苦手だから」

魚肉と銘打たれているもの実際は何からできているのかわかったものじゃない、ただ、食べた時に白身魚のような味と、名状しがたい匂いと食感がする合成魚肉は魔法少女たちや兵士たちの間でも賛否両論だった。

逆に合成肉はタレの味で誤魔化せる部分が多いということもあって、朝からステーキを食べるという人間は結衣に限らず、珍しいものではない。

好き嫌いは良くないとわかっていても、贅沢を言っていられない時代だとわかっていても、食べられないものは食べられない。

「そうでしたの、無理にとは言いませんけれど、慣れると気にならないものでしてよ」

そんな結衣の子供っぽい一面に、アンジェリカはどこか愛らしさのようなものを覚えながら、しずしずと席へ向かっていく。

慣れると気にならないということとは、あの合成魚肉の食感や匂いにアンジェリカも最初は辟易していたのだろうか。

そんなことを考えながら、結衣も朝食のプレートを完成させて、席に着こうとした時だった。

「結衣は……揚げパンが好き。ステイアは、覚えた」

「ステイア？」

「お話、聞いてた……だから、ステイアも揚げパンを食べる。結衣が好きなものだから」  
「どうやらアンジェリカとの会話に聞き耳を立てていたらしいステイアは得意げに食事プレートへと揚げパンを三つ並べただけの一皿を結衣へと提示して、豊かな胸を反らす。

他人の一皿に文句をつける権利はない、とはアンジェリカの言で、結衣もそれに同意するところはあったものの、いくらなんでもステイアのそれは殺風景がすぎる。

「他には食べなくていいの？ 色々あるけど」

「他にも食べる……栄養補給のバランス？ 欠けている？ ステイアは、わからない……」

「……まあ、自由だからいいんだけど」

「極論缶飯の鳥飯と味噌汁にメインディッシュの何かだけでも朝食としては成り立つわけで、そういう選択をしている兵士たちもいれば、食が細かいのかステイアと似たり寄ったりなメニューをチョイスしている官僚も珍しくない。」

身体を壊すことにさえならなければ最終的にはなんでもいい、とまで言い切ってしまうのは乱暴だとしても、ビュツフエ形式なのだから朝食に何を選ぶのが選ぶまいが、それは他人の自由なのだ。

例えば、結衣がスティアと言葉を交わしている様子を見てどこか慌てたような調子で駆け寄ってくる絵理のように。

「お、おはようございます……結衣、さん……!」

ぱたぱたと駆け寄ってくる彼女のプレートもまた、栄養バランスこそ整っていたが、その量は少なく、結衣であれば絵理二人分は食べられそうなものだった。

「おはよう、絵理」

「……は、はい……おはよう、ございます……その……」

「席、一緒に座る?」

絵理が何となく自分を慕ってくれているというのは結衣にもわかってはいる。

同時に、シャイな彼女にとって朝食の席で隣合おうと誘うのはハードルが高いというのも同じことだつまた。

何か言いたげに上目遣いで瞳を覗き込んでくる絵理へとそう持ちかけると、結衣はスティアを連れて空いていそうな席へと視線を向ける。

「……は、はい……その……ありがとう、ございます……」

スティアも一緒だというのは、彼女を嫌っているわけではないにしても、絵理にとつては複雑なことだった。

だが、結衣と同席できると考えれば悪いことではなかったし、スティアが悪人でないということもまた、この一ヶ月で絵理はわかっている。

その誘いに乗った絵理たちは、結衣を真ん中に挟む形で食卓につく。

いただきます、と呟いたあと、口元に運んだ揚げパンの食感に殺伐としていたものの、振りかけられた砂糖やきな粉の風味がそれを上塗りして強引に誤魔化したような感覚は、嫌いなものではなかった。

「揚げパン……パンを揚げて砂糖をまぶしたもの……もそもそしてる……？」

「一緒に水とか牛乳とか飲むといいよ、スティア」

「牛乳……牛から絞った乳を指すもの……持ってた」

初めて食べるのであろう合成揚げパンの食感に首を傾げながらも、スティアは結衣に言われた通り、パック詰めされた牛乳を啜って、口の中に張り付くような揚げパンの後味を濯ぐ。

質こそ上がっていても、素直に美味しいと言い切ることができない合成揚げパンだったが、結衣はそれも含めて嫌いではなかった。

「……ゆ、結衣さんは……」

「なに、絵理?」

「…………え、えつと、その…………その、変わらないな、って思つて…………えへへ」

何か言葉を伏せたのはわかつていたものの、それ以上を聞くことはせず、同じく合成揚げパンを啄んでいる絵理に、結衣はそっか、と相槌を返しながら、スティアと同じように牛乳を啜つて、口の中に張り付くような後味を濯いだ。

変わらない。

きつとそれは、絵理が何かの本音を隠した苦し紛れの言葉だったのかもしれないが、こうして好きな揚げパンをまた食べられる日が来たのは、戦いの日を生き残ったからに他ならない。

「うん、そうだね…………変わらない。だから、これからもこんな日が続けばなつて…………そう思うんだ」

「…………そう、ですな」

皆で笑つて、他愛もない言葉を交わして。

いつしかこの星から敵星体が消え去った後のことを、人が夢や理想と呼ぶものを脳裏に浮かべながら、結衣と絵理は視線を合わせて、小さく微笑む。

しかし、まだ、結衣の笑みは引きつっていた。

それはその安らぎが遙か遠い場所にある証なのかもしれないが、少なくとも自分たち



は前に進んでいるのだと、そういう証明のために東山大佐は勲章をくれたのかもしれない。

そんなことを頭の片隅に浮かべながら、結衣は初めて食べるのであろう合成揚げパンの食感に小首を傾げるスティアと、控えめに牛乳を飲んでいる絵理へと交互に視線を向ける。

そして、そこにある小さく、か細い種火のような、いつかは灯る炎となる微かな安らぎを抱くように、結衣もまた、合成揚げパンを齧るのだった。

## 第三章 「魔法少女、その敵は」

## 45. 魔法少女と不可思議な夢

夢を見ていた。

ステイアは、微睡の中でも明確にそれを認知していた。

パステルカラーの空間には、無数のシャボン玉や雲の欠片はキャンディや綿菓子のような質感を持って漂っていて、それらを掴み取って口に入れば朧な甘みが舌先を撫でる。

シャボン玉も雲も、本当であれば食べられないものであることぐらいはステイアも知っていた。

ただ、この空間では現実の理が通用しない。

何故ならそれは、人が夢と呼ぶものなのだから。

「夢……眠りが浅い時に、人が見るもの」

あるいは、未来へと託す願望のこと。ならば今自分が見ている「夢」はどちらに属しているのだろうか。

ステイアは考え込む仕草を見せながら、ふわふわと足元に敷き詰められた綿菓子の絨

毯を踏んで、当てもなく夢の中を彷徨い続ける。

時折、わざとらしいパステルカラーの空から天気雨か雪のように降り注いでくるのはクッキーとチョコレートで、それらもまた地上にふわりと溶け落ちる前に口へと運べば、ぼんやりと霞がかかったような味わいが広がっていく。

夢というのは理不尽なものだと、結衣はそう語っていた。

復讐するまでの生活を省みた時、彼女が朝、起きがけに涙を滲ませていたことは珍しくなく、その理由を聞いてみた時に帰ってきた答えがそれだったことを、ステイアは覚えていてる。

「理不尽……ひどく堪えがたいこと。ステイアの夢は、理不尽？」

全てが菓子で作られたような甘ったるい空間の中で、ステイアはぼつりとそう呟くが、夢の中に出てきている人物が今のところ自分だけである以上、それに答える声はない。

空から降ってきた飴玉の味は知らないもので、一つ一つ味わいが異なっていたことは、ステイアを飽きさせなかった。

だが、砂糖菓子で塗り固められた終わりのない茫漠を歩き続けるというのは夢であっても徒労感と疲労が絶えない。

結衣が言っていた通り、望めば空だって飛べるのが夢であるなら、残酷な現実を突き

つけてくるのもまた夢である。

その言葉を信じるのなら、自分の夢はどっちなのかと、スティアは人差し指を唇に当て、小首を傾げて考え込む。

そんなにお腹が減っていただろうか。

否。朝食も昼食も夜食も、自分が食べられるくらいは食べたはずだ。

ならこれは、堪えがたい現実というものなのだろうか。それとも自分が望んで、未来に託した願いを思い浮かべているのだろうか。

そのいずれにも当てはまらない気がして、飴玉やチョコレートが降り注ぐ明度が低い地平に、スティアは一人、途方に暮れて座り込んだ。

記憶がないことで、生活に不便を感じたことはあまりない。

それは結衣の献身であったり、連邦防衛軍による保護を受けたことで居場所を確保していることであつたりと様々な理由が絡んでくるのだろうか、スティアは今の生活に大きな不満であるとか、不安を感じたことはなかった。

自分が何者なのかわからないということ、不安に思わないのかと問われて即座に首を横に振つたなら、それは嘘になるのかもしれない。

スティアは、自分の顔が映り込んでいるシャボン玉を人差し指でつついて破裂させると、小首を傾げて再び考えを巡らせる。

自分はどこから来て、何者で、どこに行くのか。

ともすればそれは記憶のある人間ですら悩み続ける哲学のようなものだったが、少なくとも記憶は過去に紐づいている。

過去とは辿ってきた足跡のことであり、80年の人生はそれまでこの地球が歩んできた時間と比べれば、瞬きにも満たない刹那のことなのかもしれない。

しかし、どこから来たのかではなくどんな風に歩いてきて、どんな人間に育ったのかを振り返るという意味では、記憶の存在はその問いに紐づいている。

「寂しさ……人が抱く孤独、悲しみ……ステイアは……寂しい……？」

寂しいという悲しみが映し出されたにしては陽気な夢の光景を一望しながら、ぼつりとステイアはそう零した。

自分が何者なのかわからなくとも、結衣は優しくしてくれて、マジカル・ユニットの魔法少女たちだって、自分を気遣ってくれている。

それなのに寂しさを感じるのをおかしいのではないだろうか、ステイアは内心で疑問を抱くが、その謎々を解いてくれる人間は自分だけだ。

答えがわからなくても無情に時間は進み、人生は足元に、今日までは「明日」だったはずの時間の屍を積み重ねて、また新しい「今日」へと羽化することを、死ぬまで繰り返す。

それはひどく悲しいことで、堪えがたいことなのではないか。

だから、こんなことを考えさせるために自分の脳はメルヘンチックな茫漠が支配する夢を見させたのだろうか、ステイアが溜息をついたその時のことだった。

『……リユシオ……』

「誰……？ ステイアの他に、誰かがいる……？ ステイアは、夢の中で一人じゃない……？」

微かな残響として、パステルカラーに塗り込められた空間に、その言葉の欠片は確かに零れ落ちていた。

自分以外の誰かの声を聞いたステイアはそそくさと立ち上がると、声が聞こえた方と思いき方向へと走り出していく。

『……エリユ……シオン……』

「エリユシオン……？ わからない……ステイアが、知らない言葉……」

『……よ……ステイア、——よ……』

その声はひどく不鮮明で、歪なノイズがかかってステイアの耳朵を震わせた。

エリユシオン。名前を除けば唯一聞き取れた言葉の意味をステイアは知らない。

ただ、この声は自分と呼んでいるのだということだけはどうか、理解できたような気がした。

やがて、走り続けたステイアの足がパステルカラーの地平線上で止まる。

すると、世界が音を立てて崩落していくような感覚と、どこまでも落ちていくような錯覚に苛まれて、ステイアは夢の淵から滑り落ちて、現実へと叩き返されていく。

エリクション。

その言葉が何を意味しているかはわからない。

ただ、ひどく懐かしいような感覚と共に、眠りの底からステイアは、反転した現実で、落下していくような錯覚と共にその目を見開くのだった。



「結衣は……夢を見る?」

起床を終えてからしばらく、諸々の用事を済ませて食堂に並んでいた結衣を呼び止めて、ステイアはそう問いかけた。

「夢……か、見るよ、いいものじゃないけど。でも、どうして?」

今日は揚げパンがメニューに含まれていないからか、缶飯の中でも人気が高い鳥飯をプレートに乗せて、サラダを盛り付けながら、結衣はステイアへと問いを投げ返す。

覗き込んだステイアの瞳は、相変わらず角度によつて色を変える不思議なものだった

が、その奥には微かな悲しみが滲んでいた。

ならば、それに寄り添うことはできないだろうかとばかりに、結衣はスティアに微笑みかける。

不思議なものだとは自分でも思っている。

他の誰かを前にすると上手く笑えないのに、スティアの前では自然に口元が綻んでいる、その理由が。

きつとそれは想像以上に、スティアという存在が自分の中で力になってくれているからなのだろう。

だったら、今度は自分がスティアの力になる番だと意気込んで、結衣は大丈夫だよ、と優しい視線で俯くスティアの瞳を覗き込んだ。

「結衣は、夢を見る……スティアも、夢を見た」

「夢？」

スティアでも夢を見ることがあるのか、とそのまま聞き返したくなる言葉だったが、思ったよりも深刻そうに彼女の声は震えていた。

何か悪い夢でも見たのだろうか、続きを促すように結衣は頷く。

それを肯定の合図と捉えたスティアは、柳眉を八の字に歪めながら、夢の顛末を結衣へと語って聞かせる。



「エリユシオン……」

「エリユシオン？」

「ステイアには、わからない……でも、夢の中でステイアを呼ぶ声が、そう言っていた」ただ呼びかけられただけだといえればそれまでの話だが、やけに深刻な顔をしているステイアには、何か懸念することがあるのだろうか。

結衣もまた少し目つきを険しくして、震えるステイアの背中をそつと摩った。

その言葉はもしかしたら、ステイアの失われた記憶に繋がっている可能性がある。

しかし結衣にはエリユシオンなる単語の意味はまるでわからなかったし、わかったとしてもそれがステイアの記憶とどう紐付いているのかは、本人以外にはわかるはずもない。

「……大丈夫だよ、ステイア」

「結衣……？」

「私にもその言葉はわからないけど……それがステイアの記憶に繋がってるかもしれないなら、きつといいことだと、そう思うんだ」

何の気休めにもならない慰めであることはわかっていたが、結衣はステイアへと優しく微笑みかけて、その不安を掬い取るかのように真つ直ぐ、視線を合わせてそう言った。

「……記憶、過去の記録……ステイアは、思い出せる……？」

「きつと、ね。だから、大丈夫だよ」

「そっか……ステイアは、大丈夫。結衣がそう言ってくれるから、大丈夫」

——ありがとう、結衣。

そう言つて微笑むステイアの笑顔からはすっかり憂いの色が消え失せていて、結衣の見知つた無邪気な太陽が、そこには燦然と輝いているのだった。

## 46. 魔法少女と取り戻した日常

結衣たちのダンジョンアタック、その成果が共有されたことによって、連邦防衛軍は反攻に転じ始めたというニュースを、街頭ビジョンに映し出されたアナウンサーが嬉々として語る。

事実、マジカル・ユニットが攻略した四国のダンジョンは世界でも規模が大きな部類に入るため、その攻略データが共有されたことで、どの程度の規模のダンジョンにどれだけの魔法少女と呪術甲冑を配備するか、という基準が明確化された面があることは確かだ。

一方でそれが果たして本当に喜ばしいことなのか、と訊かれたときに首を捻ってしまふのは、真宵が言っていたように、結衣が感じていたように、あのダンジョンは、何かの実験室なのではないかという嫌な予感が拭えないからだつた。

3年前、人類を滅ぼすために、敵星体は圧倒的な力と数をもつて襲いかかってきた。

だが、魔法少女という存在が生まれたことで、多大な犠牲を払いながらもその侵攻を食い止めることには成功している。

要因は様々だが、「赫星一号」から放たれる敵星体の動きは極めて機械的なものであ

り、どちらかといえば持ち合わせているパワーに任せて殲滅にかかってくるという趣が強かった。

一方で、最近出現が確認された変異体は多様な変化が認められている。

体組織を硬質化させた「爪」を鎌に進化させた螳螂級、スピードと牙に特化した獵犬級、そして常識の埒外にある飛竜級。

飛竜級の存在は旧松山市のダンジョンと同規模か、それ以上のものでなければ認められていない。

しかし、どのダンジョンにも概ねこういつた進化を遂げた個体は蔓延していて、こうして結衣が街を歩いている間にも、他管区の魔法少女や別働隊がダンジョンアタックの任についていると思えば、少しの罪悪感を抱くところはあった。

「何暗い顔してんのさ、結衣」

「あ、美柑……ごめん。なんか、私たち、こうしていいのかなって」

そんな中で結衣たちマジカル・ユニットが何をしていたかといえば、四国奪還戦の労いということ、休暇をもらっていたのだ。

落ち込んだ様子を見せる結衣の背中をばしばしと軽く叩きながら、美柑は人好きのする笑みを口元に浮かべ、そう言った。

休暇を楽しむことも戦士には必要なことだとは諏訪部の言葉だ。

だが、変なところで律儀な結衣にとって、この状況における休暇というのはとても楽しめそうなものではなかったのである。

とりあえずはボウリングにでも行こうかという美柑の提案に乗って、結衣、絵理、アンジェリカ、そしてステイアの五人はお台場に建てられた複合商業施設へと足を運んでいたところだった。

「……結衣はそういうところ、すっごく真面目だからね。いいことだと思うけどさ、しつかり遊ぶときは遊ばないと、潰れちゃうよ?」

「わたくしもそう思いますわ、結衣さん。貴女は少し肩の力を抜いた方がよくてよ」

「……あはは、アンジェリカにも言われちゃったか」

常に戦いのことを考えていれば、精神が持つものではないというのは結衣も理屈としてわかつている。

だが、実際にいざ休暇だ、といわれればその時間を持って余すのは、除隊を言い渡された時からそうだった。

「……ゆ、結衣さんは……その……頑張ってます、から……その……休んでも、大丈夫だって、その……」

「……ありがと、絵理」

しどろもどろになりながらも、自分の意見をはつきりと伝えてくれた絵理に礼を言い

ながら、結衣は戦いに引きずられている意識を切り替えるかのように、目の前に聳える複合商業施設を仰ぎ見る。

戦前からあつた施設を修復した、というよりは一から建て直したそれは、やはりいとか軍人や上流階級に向けて各店舗が門を開いたものであり、その中に美柑のいった、アミューズメントパークも含まれているのだ。

「……ショッピングモール、大きい建物。ステイアは、わくわくしてる?」

「あつはは、そつかー、ステイアちゃんこういうところ来るの初めてなんだっけ?」

「ううん、ステイアは、否定する……ステイアは結衣と前に、池袋にある、似たような建物に来たことがある……」

「へー、つてまあ結衣が除隊してた時のことだよな? なら知らなくて当然か」

美柑なりに気を回してくれたのかそうでないかはわからない。

だが、ぼわぼわと目を輝かせてショッピングモールをその不可思議な瞳で見つめているステイアに、彼女は積極的なコンタクトを取ろうとしているようにも見えた。

「ボウリング……ステイアは、知らない。結衣は、知ってる?」

「うん、なんていうか……並んでるピンを転がしたボールで倒して、一本でも多く倒したら勝ちってゲーム」

「ゲーム……人の遊び。ボウリング、ステイアも、覚えた……」

どこか得意げにふんす、と鼻を鳴らして細い眉をきりつと吊り上げているステイアは、顔立ちの幼さも相まって、なんだか大きな子供のようにも見える。

結衣はそんなステイアに苦笑しつつ、背中へと妙に突き刺さるような視線を感じながら、美柑に先導される形で複合商業施設へと足を踏み入れた。

果たして結衣が感じていた視線の正体はふるふるすると小刻みに震えながら小動物の威嚇じみた警戒を飛ばしていた絵理のものだったが、本人がそれに気づくことはない。

「人が多いですわね」

「まーそりやね？ 一応東京は平和っていえば平和なんだし」

美柑とアンジェリカは、上流階級とその家族と思しき人々が行き交う施設内を一瞥して、他愛もない言葉を交わす。

平和。何気なく口にした言葉ではあるものの、3年前の地獄から考えれば、人類の中にはまだまだ問題が転がっているとはいえ、ここまで持ち直すことはできたのだ。

それはきつと、大きな前進だといっていいのかもしれない。

これまでの戦いが無駄ではなかったと証明するためにも、積み上げてきた犠牲に報いるためにも、戦い続けなければならぬ——そこまで結衣の意識が向きかけた途中のことだった。

「結衣、あのお店で売っているもの……何？ ステイアには、わからない……」

エスカレーターで上っていく途中で目についた、子供向けのおもちゃ屋の店頭に並んでいる商品を指差して、スティアが小首を傾げる。

「あれは……魔法星装の玩具だよ」

「魔法星装……結衣たちの武器？」

「……うん、まあ」

「プロパガンダってやつだねー」

美柑が言った通りに、結衣たち「原初の七人」の活躍は誇張される形で映画化されているが、その内容はかなりプロパガンダ的なもので、戦いの実態とはかけ離れているものだ。

魔法少女は人類を救ったヒーローである、という偶像性が結衣たちに求められているのは確かなことであり、少なくともこの3年間は作り上げられた「魔法少女」像が人々の心の拠り所になっていたのは確かなことだった。

理想と現実はず常に乖離し続けている。

魔法少女に夢を抱きたいいな子供が、そのおもちゃを買い与えられてはしゃいでいる光景に、なんともいえない感情を抱きながら、結衣たちはエスカレーターに運ばれて、アミューズメントパークのあるフロアへと移動していく。

「ま、あんま湿っぽくなるのもなんだしね！　こーいなのはなしなし！　スティアちゃ



んもボウリング楽しもつか！」

「うん……ボウリング、ステイアは楽しみにしている……」

一瞬で話題を切り替えられる美柑のムードメーカーぶりは、3年前の戦いからずっと変わっていない。

そのことに結衣は感謝しつつ、どこか胸に引つかかるものを感じながらも、目当ての階に辿り着く。

アミューズメントパークはエスカレーターから程近いところに配置されていて、美柑が手慣れた様子で受付を済ませると、結衣たちもそれに付き従う形で、ボウリング場へと歩いていく。

「……結衣さん、大丈夫……ですか？」

「……ん、絵理、何が？」

「……えつと、元氣……なさそうですから……」

「うん、大丈夫。ちよつと考え込んでるだけ」

絵理が自分を心配してくれているのは嬉しかったが、やはり休暇を楽しもうとしているのに戦いのことが、その爪痕が脳裏をよぎってしまうのはどうしようもないことだ。

ならばせめて、今だけは楽しいことをしてそれを忘れられたら。

結衣はそう自分に言い聞かせて、絵理へと、相変わらず口元が引きつった笑顔の出来

損ないを浮かべるのだった。

## 47・魔法少女、休暇中

美柑の手引きでボウリングのコーナーに辿り着いた結衣たちは、思い思いに球を転がしていた。

「つしやストライク！」

「……あ、またガーター……」

「全部は倒れないけど、こんなものかな」

「ストライク、当然の結果ですわね」

魔法少女といっても超人的な力を得られるのは「ドレス・アップ」の解号を唱えた瞬間であり、平時は力であるとか運動神経であるとかいったものは、個々人の資質によるところが大きい。

軍属ということで鍛えてこそのいるものの、どちらかといえばこの手の競技が苦手な絵理がガーターを連発する一方で、美柑とアンジェリカがストライク合戦を繰り広げる。身内であつても手加減をしないアンジェリカに対して、結果はともあれ得意な競技ということで遺憾なくその実力を見せつけている美柑、という構図だ。

その争いに加われないことが残念かといわれれば、少なくとも結衣は違った。

俯瞰して二人の白熱した戦いを見ているのも、悪くはないからだ。

「ピンが倒れた……スティアが、倒した？」

「ん、おめでどう、スティア」

「ありがとう、結衣……ボウリング、ルールは把握した……上手くはできないけど、スティアは、楽しい」

スティアが倒したピンは、ガータースレスレの起動を描いて偶然倒れたといった趣が強い。

しかし、彼女はそれを素直に喜んで柔らかな笑みを浮かべている。

何事もそうだと結衣は考えているのだが、ボウリングだったら何もストライクを出すことが全ての価値だというわけではない。

もちろん、アンジェリカのように競技として全力で挑むのであれば一投必中を心がけるぐらいの精神力が求められるのだろうが、これはあくまでも遊びの範疇だ。

ピンが一本倒れただけでも楽しい。

きつと何事も、そういう気持ちを忘れないことが遊びにとっては肝要なのだ。

だからこそ、それを喜んでいるスティアの姿勢には自分がどこかに置き忘れかけていた何かがあるのではないかと、結衣は思わず口元を綻ばせた。

「……み、皆さん……凄いい、です……わたし、一本も倒せなくて……」

「得意不得意はあるから仕方ないよ、絵理」

その一方で、周りがストライクを連発する中で、ピンを一本でも倒す中でガーターを連発していれば悲しくなるし悔しくなるのも道理だとばかりに、しよぼくれる絵理がいる。

繊細な性格だからこそ、仕方ないのかもしれないが、比べてしまってもそれは仕方のないことだとばかりに、結衣は落ち込む絵理の黒髪をそつと、優しく撫でた。

「……えへへ、そう言ってくれると、嬉しい、です……」

「絵理は……撫でられると、嬉しい？」

「ひゃ……っ!？」

結衣の掌に体重を預けるかのように頭を差し出して、しばらくその感触に頬を緩めていた絵理の青い瞳をステイアはしげしげと覗き込んで、問いかける。

それはあくまでも純粋な疑問だった。

ステイアにも髪を撫でられた経験はある。抱きしめ合ったこともある。

それ自体は何か胸の内からあたたかなものが溢れ出てくるようで、ステイアもまた好きだという感触を持っていたものの、他人が結衣に同じことをされてどういう感覚を抱くのかについては、わからなかった。

だからこそ問いかけた、という風情なのだろう。

だが、突然の出来事に絵理は固まってしまつて、ぎしぎしと軋みを立てるブリキ人形のような動きで、助けを求めるように結衣を振り返ることしかできなかった。

「んー、そりや嬉しいんじゃない？」

そんな絵理の代わりに答えたのは、自分の手番を終えて戻つてきた美柑だった。

レーンで、研ぎ澄まされ、洗練された姿勢からボールを投じるアンジェリカを一瞥しながら、ポニーテールに結えた髪を解いて、美柑はスティアの不可思議な瞳を覗き込む。角度によつて色を変えるスティアのそれは自分を映し出すスコープか、そうでなければくるくると模様を変える万華鏡のようだった。

相変わらず不思議だな、という些細な違和感じみたものを抱きながら、美柑はスティアの答えを待つ。

「嬉しい……好きな人に髪を撫でられるのは、嬉しい。絵理は、結衣が好き？」

無垢ゆえの鋭い疑問に絵理の心臓は高鳴るばかりだったが、それでもスティアの舌先から紡ぎ出されたその問いには、明確な答えを持ち合わせていた。

故にこそ、ぎゅつ、と結衣の袖口を握る手に力を込めて、絵理は緊張でしどろもどろになりながらも、スティアからの宣戦布告とも取れるその問いに精一杯の答えを投げ返す。

「……す、す……好き、です……ず、ずっと……ずつと、前から……わたしは……」

「絵理は、結衣が好き……ステイアは、覚えた。ステイアも、結衣が好き。これは、両立しない……? ステイアには、わからない」

密かな敵愾心を抱いていることを見抜いたのかさうでないのか、ステイアは相変わらずマイペースに、無邪気に言葉を紡ぎ上げている。

好き。言葉にしてしまえば簡単なものかもしれないが、それには複数の種類があつて、自分に向けられているのがどちらの意味でのそれなのかを判断できるほど、結衣は色恋沙汰に手慣れているわけではない。

ただ、絵理にとってその言葉は特別なもので、ステイアにとつてもきつと同じなのではないだろうか、結衣にもそれぐらいはわかつていた。

静かに互いの瞳を覗き合う二人を俯瞰しながら、その感情の重みを確かめるように、空いた右の拳を握つては解いてを繰り返す。

好き。その言葉がどんな意味を持つていたとしても、どんな色をしていたとしても、自分にそれを受け止める資格と覚悟はあるのだろうか。

左手に感じる絵理の握力と、いたいけに小首を傾げるステイアの瞳、それぞれに宿る「好き」の質量を測るかのよう、結衣は静かに目を伏せる。

昔なら、敵星体に家族が奪われる前なら、きつと、軽い気持ちでその言葉を返すこともできたのかもしれない。

今はどうなのか、わからない。

今は、好きだという言葉返して気持ちを結び合っても、明日にはその相手がいなくなっているかもしれない時代だ。

だからこそ、と、そう考えられる思い切りのようなものが絵理にはあって、それは紛れもなく、彼女が勇気を持つていることの証なのだろう。

絵理は気が弱いところがあるかもしれないが、その芯はぶれずに一本筋を通して

る。  
そういう意味では、自分はひどく脆いのだろうと、結衣は絵理からの「好き」を背負うことも、ステイアからの「好き」を背負うことも、なあなあで済ませてしまおうとしている自分に気付いて、嫌悪を抱く。

「するんじゃない?」

「……美柑?」

その問いに口を噤んでいた自分を見かねたのか、またしても助け舟を出すかのように口を開いたのは、美柑だった。

「アタシは結衣じゃないし、絵理じゃないし、もちろんステイアでもないからわかんないけどさ、好き、って思う気持ちって、一つしかあっちゃいけないわけじゃないっしょ?」

その行き先がどうなるかまではわからなければ、保証できたものでもない。



ただ、美柑が言った通り、その気持ちが多数存在してはいけなさと、一人に寄せられる想いは一つしかあつてはいけなさと決まりを神様が定めたのだとしたら、それはとても窮屈で、意地悪なことなのではないかと、結衣はそう思う。

「ま、答え出すのは結衣だけどねー」

「……茶化さないで」

「あつはは、ごめんごめん」

「ちよつと！ いつまで油を売っていますの、美柑さん！ 貴女のラウンドでしてよ！」  
だから、その先はお前が決めるとばかりに美柑は結衣へとウインクを飛ばすと、すっかり待たされて憤慨しているアンジェリカの元へと駆け寄つていく。

好き。今はその言葉に向き合うだけの勇気を、結衣は持ち合わせていない。

ただ、自分がその想いを寄せられるに足りる存在だというのなら、少なくとも絵理とステイアからは大切に思われているのなら、それに相応しい人間でありたいとは思っている。

いつかこの星に本当の平和が訪れた時、いつかこうして東の間ではなく、ずっと他愛もない日々が続いていくその時に、いつか答えを出す時がくるのだろう。

そのいつかに、自分はどんな答えを出すのだろう。出さなければならぬのだろう。

そんなことを考えながら、結衣は自分もそうしてほしいとばかりに差し出してきたス

ティアの金色にも銀色に見える不思議な髪を、そつと撫でるのだった。

## 48. 魔法少女、歌唄う

結局、アンジェリカと美柑の間で白熱していたボウリング対決は最後に美柑がピンを一本残す形でストライクを逃してしまったため、全てをストライクでなぎ倒したアンジェリカの手に栄冠が渡ることになった。

あくまでも遊びであつて、そこに何か権威であるとか価値であるとか、そういったものが伴うことはない。

だが、それでも手を抜くことをやめないのが、アンジェリカという人間の美点であり、同時に頑迷なところなのだろう。

「ふつ、勝ちましたわね。西園寺の家名にかけて当然のことですわ」

「いやー惜しかった！ おめでとおめでとー、てかこんなことで家名かける必要ある？」  
「当然ですわ！ 勝負事となれば全力で挑むというのが西園寺の家に生まれた人間の宿命なのでしてよ！」

そう言って高笑いを上げるアンジェリカは、なんだかジュブナイル小説に出てくる悪役令嬢を彷彿とさせたが、それを口にすれば間違いなく彼女は激昂することぐらいは結衣にだって予想がつく。

喉まで出かかっていた言葉を舌先で押し留めて、結衣はあーっはっは、と高笑いを上げながらボウリングコーナーを後にするアンジェリカを一瞥した。

しかし、結局その視線に気付いているのかいないのか、アンジェリカは最後までその調子だった。

戦間期に生まれた二世代魔法少女ということもあって、アンジェリカと結衣の間に交流は薄かったものの、ダンジョンアタックで死戦を共にくり抜けた経験や、皆での休暇を通して、彼女という人間がなんとなく見えてきたように思える。

負けず嫌いで、強い信念をその背に負った魔法少女であり一人の女の子。

その在り方は、どこまでも強いものだ。

結衣はそう関心を抱きながら、流されるように美柑が向かっていく先へと歩みを進める。

「そういえば美柑、どこに行くの?」

「ん? あー、いや説明してなかったっけ? カラオケ」

「……か、カラオケ……ですか……」

「ん、まあ二次会の定番だからね!」

——それに、絵理は歌うの得意っしょ。

どこか遠慮がちに頬を染めている絵理へとウインクを飛ばして、恐らくはボウリング

を自分たちだけが楽しんでしまっていたことへの詫びとして、美柑はカラオケに自分を誘っているのだろうと結衣は理解する。

「言つてませんことよ」

「あつれー!?!」

ただ、その気遣いが行きすぎるあまり、言葉にするのを忘れていたのだろう。

アンジェリカからの鋭い突っ込みに目を白黒させながら、美柑はごめん、と苦笑混じりに頭を下げた。

「カラオケ……? スティアが知らない言葉。ステシアには、わからない……」

アンジェリカと美柑がどこか漫才じみたやり取りを繰り返していた一方で、小首を傾げていたのが、ステシアだった。

記憶がないから当然だとはいえ、彼女の中からはカラオケという単語も抜け落ちていたらしく、はてな、とばかりに頭上へとクエスチョンマークを浮かべながら、ステシアは困つたように結衣へと振り返る。

「えつと………なんでもいいばいんだろう、伴奏とかメロディーに合わせて、歌う機械……?」

カラオケといえ、旧時代においてはこの国独特の文化だったらしく、その概念は外に伝わりづらいものだったと聞いているが、いざこうして説明する側に回ると、その話

も頷けるものだ。

結衣もまた小首を傾げて、眉根にシワを寄せつつクエスチョンマークを頭上に浮かべるが、実際に説明してみるといわれてもそうとしか言えないのだから、どうしようもない。

「ん、こういうのは言葉で説明するより見てもらった方が圧倒的に早いかなー、つてなわけですティアちゃんもご案内!」

「ご案内……招かれること。スティアは、歓迎されている?」

「元々そういう趣旨で大佐も休暇を言い渡してくれたのですわ、結衣さんとわたくしも、面識という意味では薄い部分があつて、スティアさんもわたくしたちとはあまり話したことがありませんでしょう?」

全員で一つの時間を共にして親睦を深めてこい、というのは随分と前時代的な発想だったものの、そんな諏訪部の意図はともかくとして、この場にノリのいいアンジェリカがいてくれたのは幸いだったといえた。

これがもし、結衣とスティアと絵理の三人だけだったら、どこかぎこちないような空気が漂っていたかもしれないのだから。

相変わらずどこか小動物の威嚇じみた視線をスティアへと送っている絵理を一瞥して、美柑は苦笑を浮かべる。

「ドリンクバーは自由だから、ちよつと行つたとこにあるやつで好きなの選んでね」

店員に慣れた調子で受付を済ませて、用意された個室が記された電子パネルを受け取ると、フリードリンク制である旨を結衣たちに伝えて歩き出す。

こういつてはなんだが、出費は休暇も軍務の一部だと考えているらしい諏訪部のポケットマネーから捻出されることになっている。

黒一色に金色での印字が光るクレジットカードを外出前に預かつていた美柑は、高級取りは随分と気前がいいと微笑みながら、早速ドリンクバーから、レモンスカッシュをコップに注いでいた。

「飲み物……たくさんある。ステイアは、何を選ぶのが正解？ ステイアには、わからない……」

「……そういえば、うちにいた時にあつた飲み物つて牛乳とお茶ぐらいだつたつけ」

いくつも種類があるドリンクバーの前で立ち止まつたステイアはその髪からふわりと粒子を漂わせながら小首を傾げる。

結衣は揚げパンと牛乳の組み合わせ以外に頓着するようなものもなく、軍をクビになつた時、家に置いていたのは牛乳と麦茶ぐらいのものだつた。

それが突然、炭酸飲料や紅茶、コーヒーなどから好きなものを選んでくれといわれれば困惑の一つもしない方がおかしい。

ましてや、スティアは記憶喪失なのだから。

「……じゃあ、私と同じのにする?」

「結衣と同じ……スティアは、選択肢に迷っている。なら、スティアは結衣の提案を選ぶ」

「ありがとう、私はコーラ飲むけど、絵理はどうする?」

同じように迷っていた絵理へと問いかけながら、結衣は積まれていたプラスチック製のコップを二つ手に取って、自分の分とスティアの分、その盃へとコーラを注いでいく。

「……わ、わたしも……その、おんなじで……」

「ん……了解。あんまり急いで飲まないでね」

「……は、はい……ありがとう、ごさいます……!」

絵理はどちらかといえば炭酸飲料が苦手な方なのに、コーラを選んだのは恐らくスティアへの対抗心だとか自分に向けられる感情であるとか、そういう部分から来ているのだろう。

そんな、人から見れば面倒くさいとも思われかねない絵理の一途さも結衣は嫌いではなかったし、むしろ好ましいと感じているところもある。

それなら無難に麦茶でも飲んでおくべきだったかと少しばかり反省の色をその表情に滲ませながら、結衣は自分の分として中身を注いでいたコップを絵理へと手渡して、



新たにもう一つを手に取り、コーラを注いでいくのだった。



「そんじゃトップバッターは絵理ってことでいつちよよろしく！」

「……が、頑張ります……っ……！」

用意された個室に入るなり、充電器に接続されていたタブレット端末を取ると、美柑は早速とばかりに絵理へとそれを手渡して、トップバッターの役目を一任する。

気が弱い彼女が珍しく乗り気で引き受けるのは、歌うことが得意だからという以上に好きだからなのだろう。

お手並み拝見とばかりに、優雅な仕草で腰掛けてストレートティーに口をつけているアンジェリカが片目を見開き、機械から流れる伴奏と、小さく息を吸い込む絵理の息遣いに耳を傾ける。

「これがカラオケ……？　音が鳴っている……ステイアには、よくわからない……」

「まあまあ……っから……っから！　絵理って本当に歌上手いんだからさー！」

長めの前奏に小首を傾げるステイアを諫めて、美柑はその歌声が個室に響き渡るその瞬間を待つように言いつけた。

瞬間、機械からガイドメロディーが流れるのと寸分違わないタイミングで、絵理が得意としているバラードを、しつとりと歌い上げる。

その歌声はプロに匹敵する、とまでは言い難いものの、質感と息遣いからビブラートまで全てにメリハリがついていて、アマチュアの中では間違いなく群を抜いているといえた。

どこか舌足らずに歌い上げるウイスパーボイスが果たして美柑が、そして結衣がどうか尊敬の眼差しを送っているのに値するものなのかどうかはステイアにはわからなかったが、機械から流れる音と、絵理の歌声に身を任せていると、なんだか心地よい感覚に包まれていく気がするのには確かだった。

一発目から切ない恋を歌うバラード、というラインナップを披露したのにもかかわらず、場が凍り付いていないのは絵理の歌声による力と、美柑が間奏などの的確なタイミングで囃し立ててくれていたからだろう。

相変わらず、そういうことが得意な彼女に感心を覚えながら、結衣もまたぎこちない仕草で間奏中のクラップを奏でてみせる。

「これがカラオケ……ステイアは、歌がわからない……それでも……ステイアは、楽しい」

「そっか、なら……よかった」

ステイアが歌える曲がここにはなかったとしても、十分に楽しめていることは、その表情から疑いはない。

だからこそ結衣もまた、それでよかったとばかりに小さく笑みを浮かべながら、ステイアが寄りかかってくるのに体を許し、絵理の歌声に耳を傾けるのだった。

## 49. 魔法少女、結ぶ絆

結衣自身の歌声は可もなく不可もなく、という程度であり、得点も、美柑と一緒に80点台をふらふらしているといった具合だった。

負けず嫌いのアンジェリカは、例によつて90点台後半を当たり前のように叩き出している絵理に対抗心を燃やして歌声に乗せていたものの、とうとう時間の連絡が来るまでに彼女を抜き去ることはできなかった。

「それにしても絵理さん、悔しいですけれど本当に歌がお上手なのですわね」

「……そ、そう、ですか……？ えへへ、その……嬉しい、です」

勝てなかったことを悔しがりつつも、絵理に称賛の言葉を贈っているのは、アンジェリカが負けず嫌いであっても、劣等感やコンプレックスに歪んでいない証のようなものだ。

どこまでも、愚直なまでに真つ直ぐに育った彼女をどこか羨ましく思うところはあつても、人は他人になることなどできない。

自分は自分という面倒くさいしがらみを抱えて、そこに折り合いをつけながら生きていく他にないのだ。

結衣はそんな、哲学じみたことを考えながら、五時間ほど歌い通していたカラオケルームを後にする。

「いやー、にしてもびっくりしちゃうよね」

「何が、美柑？」

「ん、絵理とアンジェリカのこと。二人ともめつちや歌上手いしアタシの立つ瀬がないなーって」

比べるようなもんじゃないんだけどね、と苦笑を浮かべながら、美柑は言った。

確かに彼女のいう通り、カラオケの機械がよくわからない基準で叩き出した歌声への評点を競い合うことは、不毛で意味がないことなのかもしれない。

しかし、数字としてそこに基準が明文化されれば、人はどうしても競い合いたくなくなってしまう性を持ち合わせている。

もちろん、結衣のようにそうではない人間もいるのだろうが、数字は優劣を明確にして世界を切り分けてしまうのだから、ある意味では危険なものではないかと、そう思ってしまうところはあった。

上手くなければ歌を歌ってはいけななどという法律はどこにも定められていない。

同時に、何かに秀でていなければ、何か数字に換算できる価値や世界を切り分けて、優れているとされる側に立つ者でなければ、生きていてはいけななどという道理もな

い。

たとえカラオケの結果が80点だったとしても、それだけ歌えているのだからそれで十分なんじゃないかと結衣は思うが、美柑やアンジェリカにとっては違うのだろう。

そして、ボウリングに臨んでいた時の絵理もきつと、同じことを感じていたのかもしれない。

他人の感性について踏み込んでとやかく言う資格というものを自分は持ち合わせていないのだから、そこについては美柑なりに割り切つて、あるいはそれをバネにして克服してもらおうしか手段はない。

ただ、誰しもが正しく悔しさや悲しさをバネに、高いところへ飛べるとは限らないというだけの、それだけの残酷な話だ。

たとえ、どれだけ魔法少女としての才能と魔力に恵まれていた「第一世代」が、最後には七人しか残っていないかったように。

努力とは、美しいものなのかもしれない。

才能とは、一人一人に天から贈られた宝物かもしれない。

しかしそれが正しい形で報われるとは、花開くとは限らない。

自分たちに未来を託して死んでいった第一世代の魔法少女たちは頑張っていないからそうなったのだ、などという馬鹿な話を切り出されれば、結衣は即座に激昂する

だろう。

「……私は好きだよ、美柑の歌」

「あつはは、そつか。ありがと、結衣。空気暗くしちやつてごめんね」

「ううん、気にしないで」

だから、結衣に言えることはそれが精一杯であり、目一杯だった。

例え誰かが下手だと蔑んだことを好きだと頷くだけの力を結衣は持っているのに――否、その強さを持っているからこそ、裏返した時に顔を見せる弱さに傷つき続けているのだろうか。

どこか光が消えたような憂いをいつも帯び続けている結衣の赤い瞳を覗き込みながら、美柑は自らの行いを省みて、頭を抱える。

盛り立て役としては失敗だったな、と自分の過ちを認めながらも、次の瞬間には笑顔で皆を先導するように前に立っているような立ち直りの早さも、きつと彼女の美徳なのだろう。

結衣は元気を貰ったとばかりに大輪の笑顔を咲かせて、諏訪部から受け取っていたブラックカードで支払いを済ませる美柑を一瞥し、口元にぎこちない、微笑みの出来損ないを浮かべてみせる。

「……結衣は、笑ってる？」

「……スティア。うん、上手くできないけどね」

「上手くできない……上手くできないと、人は笑ってはいけない？ スティアには、わからない」

結衣は無垢故に核心を突いていたスティアの言葉に思わずはっと目を見開いていた。

それは他人との比較がどうだこうだとそんなことを考えていながら、自分もまたそこに囚われていることに他ならないからだった。

上手くなくても笑っていい。ぎこちなくとも笑顔と呼んで、何か咎められることはない。

そんな当たり前を当たり前だと言える、無垢であるからこそ、真っ直ぐに届いたスティアの言葉に、結衣はどこか、救われたような心地がした。

「スティアは、結衣が笑うのが好き……色んな笑い方をする結衣が好き」

「……ありがとう、スティア」

遠慮のない好意をありのままに言葉へと紡ぎ上げるスティアに少しだけたじろぎながらも、結衣は全てとはいかなくとも、それを取りこぼしてしまわないように心を開く。

ありがとう、というの、そういう言葉なのかもしれない。

案外、いつも当たり前に使っている言葉ほど上手く説明がつかないものであったりするのだが、少なくとも今この瞬間、大袈裟ではあるかもしれないが、結衣はそれを理解



できているような気がした。

そして、同時に思い出す。

小さい頃、よく笑う子だと両親に褒められたことを。ステイアと同じように疑うことを知らず笑っていた、妹の、芽衣のことを。

大型複合商業施設を後にして、地球連邦防衛軍総司令部へと帰っていく道の途中、結衣は夜空に浮かび上がる星々を仰ぎ見る。

そこに描かれる星座にステイアの瞳と芽衣の瞳を重ね合わせ、もう帰ってくることはない日々のことを思い描く。

幸せな時間だった。

何も知らずに、何も背負わずに、心はいつだって潤い、満たされていた時間だった。

アニメの中の魔法少女に憧れていた頃は、年上だからという理由で妹にその役を譲っていたことはあったものの、それだって不満としてはささやかなものでしかない。

それ以上に、芽衣が楽しく笑ってくれることが、一緒の時間を過ごすことが、何よりも幸せだったことを、結衣は今でもはつきりと思い出せる。

「ねえ、ステイア」

「……結衣は、ステイアを呼んでいる……ステイアに、疑問がある？」

「ううん、疑問じゃなくて。私も……ステイアのことを妹みたいに思ってるって……好

きだよって、そう言いたかっただけ」

それはきつと、絵理が自分に求めている「好き」とは違うもので、スティアが求めているそれとも食い違っているのかもしれない。

ただ、その言葉は嘘偽りのない結衣の本心だった。

そして、こういう揮発性の感情は、ちゃんとその場で言葉にしておかなければいけないような気がしたから——情動に突き動かされるまま、結衣はその言葉を舌先に乗せていたのだ。

「……妹、血縁を示す言葉……結衣とスティアは、血が繋がってない……だけど、スティアは、妹……不思議」

「……やっぱり、変かな」

「ううん、スティアは……嬉しい。結衣が好きって言うてくれたことを、スティアは嬉しいと思ってる」

満面の笑みを浮かべたスティアがくるりと踵を返せば、ふわりと翻った髪の毛から不思議な淡い光を放つ粒子が夜空に舞い散る。

結衣の妹、と嬉しそうに言葉を紡ぐスティアの無邪気な姿を見つめながら、そこに在りし日の幸せを重ね合わせる。

そして、一筋の涙が零れ落ちるかのように、一筋の流れ星が夜空を滑ってゆくのだっ

た。

## 50. 魔法少女と対策会議

マジカル・ユニットが諏訪部からの呼び出しを受けたのは、休暇を貰った翌日のことだった。

朝食を終えて、訓練に入ろうかとしていた矢先の出来事に結衣たちはそれなりの驚きを見せたものの、元より有事即応を目指して再編されたのが自分たちなのだ。

「呼び出しねえ……アタシらもしかして経費使いすぎちゃったとか？」

「あの件なら全て大佐の自腹でよろしいと言われておりましてよ、それに、豪遊したという訳でもないのでしょうか？」

「まあそりや確かに」

美柑はお嬢様育ちのアンジェリカが「豪遊」だと言い切れる基準がどこにあるのか気になったものの、それを聞いてしまうと何か違う世界の生き物の話をされるような気がして、口を噤んだ。

庶民の基準からすれば上流階級向けに建てられた大型複合商業施設でボウリングとカラオケを満喫したというだけでも結構な豪遊に当たるのだが、一応彼女が言った通りに経費に関して諏訪部は目を瞑ると断言しているわけで、少なくともそこにケチがつけ

られることはないだろう。

「……………で、そうなる……………任務、ですか……………？」

「……………そう考えるのが妥当だと思おうよ」

マジカル・ユニットの活躍によって、世界各地に発生した敵星体の「巢」、ダンジョンの攻略は飛躍的に進んでいる。

新たな変異体も確認こそされているものの、四国のそれを基準に作られた攻略難度という指標によって投下する戦力の基準が可視化されたというのは非常に大きい。

そんな中でもマジカル・ユニットが動かなければならない事態が発生したと考えれば、またあの四国奪還戦かそれ以上の規模が予想される戦いに放り込まれるのだろうか、結衣は気を引き締める。

例えばそんな死地に赴くことが任務だったとしても、結衣は文句を挟むつもりはなかった。

他の誰かにできないことなら、それで流れる血を少しでも止められるなら、自分たちがやるしかない。

そのために魔法少女になって、そのために軍に戻ってきたのだから。

覚悟を一つ胸に括り付けて、結衣が司令室のドアを開くと、そこにいたのは案の定、いつもと変わらず飄々とした表情を浮かべている諏訪部だけだった。

「すまないな、急に呼び出してしまつて」

「いえ、任務ですから」

「任務、か……まあ、そうなるんだろうな」

珍しく気乗りしないというよりは、何か厄介ごとを抱え込まされたかのような渋い表情を浮かべて、諏訪部は地球連邦の国旗が映されている背後のモニターに、今回の「任務」に使われる資料を表示する。

「あー、なんだ。敵星体の作るダンジョン攻略が進んでるつてことで、各管区が情報を共有してより連携を密にしようつてお題目で会議が開かれるんだがな」

「……それに、どこか問題があるのてして？」

「あんまり言いたかないんだがね、おれの首も飛びかねない……が、まあ諸君らに関わつてもらつて任務のことだから話さないわけにはいかないんだが、どうもそれを沖縄で行おうつて話が、偉いさんたちの間だけ持ち上がつてるんだ」

そして、それは確定方向に進んでいる。

諏訪部はどうにも渋い顔をしながらモニターを操作して、敵星体から完全に奪還したことで復興が進んでいる沖縄の様子を映し出す。

「……あの、そのどこがまずいんですか」

結衣は、資料に表示されている那覇市の様子を見て端的に感じた疑問を思わず口に出

していた。

今のところ沖縄を会議の場所に選ぶ意図はわからないものの、敵星体が完全に排除されたことで、人類が生活圏を確立した数少ない土地の一つであるその場所を会議の場として選ぶことに不自然な点はあまり見当たらない。

それに、敵星体を掃討するために各管区での連携を強化するという対策会議の方針も、極めて真つ当なものであるといえる。

「……まあ、こつから先が本題といえば本題なんだがね、どうも偉いさんたちは危機感が足りんというか、既に敵星体に勝った気でいるのさ」

「つまり、対策会議っていつても実態的には？」

「察しがいいな、三上美柑。そういうことだよ。奴さんたちはバカンス気分で沖縄に滞在しにくるつもりだってことだ」

諏訪部は頭を抱えて、官僚や有識者たちが宿泊する予定のホテルをモニターに映し出す。

上流階級の中でも更に上層に向けて建てられたそのホテルの外観は優美の一言に尽きて、オーシャンビューを一望できるその作りは、バカンスには持つてこいだといえた。

ただし、名目上とはいえ各管区の有識者や閣僚たちが集まるのは敵星体への対策会議であって、バカンスが目的ではない。

しかし彼らの中では本音と建前が逆転してしまっていると、諏訪部が言っているのは、つまりはそういうことだった。

敵星体との戦いは、犠牲を払いながらも人類がなんとか反転攻勢に出ることができた段階だといつてもいい。

もちろん、そこに絡む複雑な事情や各管区の立場であるとか、政治的な話について結衣たちは知らないし、知らされていないものの、戦況が好転しつつあるということ自体は把握している。

ただしそれは、あくまでも好転しているというだけであって、人類の勝利が確定したというわけではない。

それにもかかわらず、命を井勘定するのが趣味の閣僚や政治家たちは既に敵星体に勝った気でのいるのだから、諏訪部が頭を抱える理由もわかるというものだった。

「まあ、なんだ……派閥とか見栄とか、そういうのが絡んでるんだよ。だからうちはマジカル・ユニットを護衛としてつけてくれて偉いさんからの要望があったわけだ」

北米管区はアリス・ヴィクトリカ、モスクワ管区はアナスタシア・セルゲイヴナ・アレンスカヤ、ベルリン管区はクラウディア・アーレントなど、各管区における最強の魔法少女が一堂に介するその気合の入れようは、軍事パレードでも行うかのようなだった。

諏訪部がリストアップした各管区最強の魔法少女たちの名前に結衣は心当たりはな



いものの、この会議が極めて官僚的な、あるいは見栄っ張りなタカ派の悪いところが出たものであることぐらいは想像がつく。

そんな会議の護衛にわざわざ最強の魔法少女たちを引つ張り出してやることに意味があるかないかといえば、後者であると断言せざるを得ない。

人類が生活圏としている場所は、基本的に呪術結界が張り巡らされ、敵星体の侵入を拒むように作られている。

とはいえ、東京においてはその呪術結界の内部に敵星体が出現したという事例があるのだから、完全に無駄だとも言い切れないのが、また微妙なところだった。

「まあ、なんだ……そう悪いことは起こらんとと思うが、休暇の延長だと思つて過ぎしてくれ、あくまで最強の魔法少女がいるってことだけで偉いさんたちは安心らしいからな」  
諏訪部はどうにも感情の収まりどころが悪いとばかりに後頭部を掻きながら、モニターに投影された、出席した各管区における最強の魔法少女たちのデータが映る画面を元の連邦国旗に切り替える。

休暇が延長されたといえば聞こえはいいものの、往時には敵星体対策に当たらなければいけない以上、完全に気を抜いて過ぎせるものではない。

とはいえ、リゾート地でのバカンスを過ごす権利がいつてきたとなれば、喜びを感じる反面、他の魔法少女たちに申し訳が立たないという罪悪感を覚えるところもある。

結衣は諏訪部と同じく苦虫を嘔み潰したような顔で、その話を引き受けた。

拒否権は事実上ないのだから仕方ないとはいえ、自分たちばかりがこうして前線ではなく後方で、休暇同然の任務をもらっているというのにはどうにも抵抗があるのだ。

それは結衣に限らず、美柑も、絵理も、アンジェリカも、各々思うところはあろうで、複雑な表情を浮かべている。

「海……地球の七割を満たす液体。ステイアは、海が綺麗だと思う」

そんな、どこか沈痛な空気が漂う中でも、唯一、ステイアだけはいつもの調子で、マイペースに言葉を紡ぎ上げていた。

「……そうだね、沖繩の海は綺麗だと思うよ」

「海……楽しみ、結衣は、違う？」

「……一応、任務だからね。気は抜けないよ」

今回の任務が実質的にはほとんどバカンスのようなものだとは諏訪部から伝えられたとはいえ、敵星体が現れる確率がある以上、気を抜けないのは確かなことだ。

自分たちだけならばまだしも、閣僚や官僚、政治家に有識者といったお偉いさんが巻き込まれて犠牲になったとあっては、連邦政府そのものが立ち行かなくなる可能性もあるのだから。

「有事即応。魔法少女は機動力に優れているのが強みですことよ。何かあればすぐに飛

んでいけるのがわたくしたちなのですから、閣僚や官僚の方々にも安心して過ごしてもらうことが第一目標なのですわ」

「……何か、ある……それはないといい、ステイアは、そう思う……」  
「それについてはわたくしも同感ですけれど」

結局のところ平穩無事に終わるのなら、過剰な護衛だろうがなんだろうが、結衣たち魔法少女にとってはそれに越したことはない。

上層部が既に祝勝ムードに入っているのは政治的には問題なのだが、それはあくまで諏訪部たちの課題であって、政治からは遠ざけられている結衣たちには、関わりようのないことなのだ。

だから仕方ない、というつもりはなくとも、どこか気乗りはしないといった風情で、結衣たちは諏訪部に敬礼をすると、司令室を後にするのだった。

## 51. 魔法少女、邂逅する

敵星体対策緊急会議の開催は速やかに可決され、各管区の官僚たちが一足先に「オケアノス」に乗って沖繩へと向かう中で、結衣たちもまたその護衛として艦に同乗していた。

ハイジャックや襲撃を懸念してのことだったとはいえ、わざわざ敵星体の勢力圏を避けて地球を一周してから沖繩に向かうという迂遠な旅路の中で魔法少女たちに出番があつたかといえ、そのようなことはない。

道中で「はぐれ」の敵星体に遭遇することそあつたものの、それらは全てタイプ・キャンディや、通常体のタイプ・クッキーだったことも相まって、「オケアノス」の殲滅能力の前にはあえなく散っていく他になかったからだ。

秒間隔で連射される、呪術回路によって魔力補強が施された陽電子衝撃砲塔から放たれた光線に敵星体が灼かれていく様は、官僚たちにとつても気分が良いものであつたらしく、「オケアノス」の中で行われる食事会では、すっかり気を良くした誰かが勝利も同然だと宣っていた。

そんなことを、結衣は展望室から眼下に見下ろす南海を見つめながら思い返す。

官僚たちの中にもすっかり祝勝ムードになっていく人間ばかりではない、というのが見て取れたのは、食事会に参加した意義だったといえる。

だが、一方で状況を楽観視している人間が上層部に紛れ込んでいるというのは、問題視すべきことなのだろう。

愛想笑いを浮かべながらも胃を痛めていたのであろう諏訪部の横顔を脳裏に描きながら、結衣は小さく溜息をつく。

「よう、最強の魔法少女」

「……貴女は」

「アリス・ヴィクトリカだ、あんたと同じで今回わざわざ偉いさんに呼び出された魔法少女だよ」

気さくに話しかけてきたハニーブロンドの少女は、名乗りを済ませると口元に大胆不敵な笑みを浮かべて、結衣の隣に陣取って頬杖をつく。

アリス・ヴィクトリカ。

事前に諏訪部から渡されていた資料の中には、確か北米管区最強の第二世代魔法少女だということが記されていたが、生憎、彼女と結衣の間には面識がない。

「……そう、災難だったね」

「あんたはそういうタイプじゃないって話だけど、あたしは後方任務は性に合わねえか

らな、災難も災難だ」

おまけにうちのトップなんかは敵星体に勝ったつもりで動いてるんだから救いようがねえ、と、アリスは吐き捨てるようにそう言っただけで、表情を渋く歪めた。

魔法少女の中には戦いを好む人間もいるとは聞いていたが、アリスのように前線に積極的に出たがっているタイプといざ遭遇してみると、そこにある価値観の断絶に結衣は思わず口を噤んでしまう。

アリスが悪いわけではない。

戦う理由なんてものは人それぞれで、背負っている信念も同じことだ。

結衣が一人でも多く、死んでいった人間に報いたいと、そのために戦わなければならぬと考えているのなら、アリスは人類のために、一体でも多くの敵星体を駆逐することを至上命題としているのだろう。

そんな彼女にとって、今回の対策会議における護衛として呼び出されたのは確かに屈なことなのかもしれない。

「……私は」

「ん、話は聞いてる。あたしもあんたに助けられた身だからな。だからなんかあった時は無理しねえで、あたしに頼ってくれてもいいんだぜ」

ここに来たのもただ、あんたの顔を拝んでおきたいだけだったからな、とアリスはど

こか照れ臭そうに頬を染めながらそう語ると、展望室から一望できる南海へと視線を逸らす。

ぶつきらぼうではあったが、彼女なりに自分のことを尊敬している、と伝えてくれたのだろうか。

結衣は、そんなアリスの不器用さをどこか愛おしく思いながらも、アリスもまた自分にとつて「守るべき人々の一人」であるのだということに改めて自覚させられる。

第二世代の「早生まれ」と呼ばれる、「赫星一号」を破壊した直後に生まれた魔法少女たちは第一世代魔法少女と同等の力を持っているとされるが、それでも、戦場で必ず生き残れるという保証にはならない。

何しろ強大な魔力を持って生まれてきた第一世代魔法少女は、赫星戦役が終わる頃には結衣たち七人にまでその数を減らしていたし、その七人だつて今は結衣、絵理、美柑の三人しか残っていないのだから。

だから、アリスのことも自分が守らなければいけないと気負うのはきつと傲慢で、彼女にとつても失礼に当たるとわかつても、結衣はそう思う気持ちを止められなかった。

それが、小日向結衣という少女の生き方なのだ。

自ら抱え込まなくていいことまで抱え込んで、自壊するように地獄までの道を歩いて

いく。

誰に頼まれたのでもなく、誰かのためだけに、自分の命を擲つことができる存在。

それが、小日向結衣という魔法少女の在り方なのだろう。

アリスは結衣がその瞳に帯びた微かな憂いから、背負っている犠牲の数を数えて、少しだけいたたまれない気持ちを抱く。

「まあなんだ、今回の任務、管区は違つてもあたしたちにとつちやバカンスみたいなもんなんだから、肩の力抜いてこうぜ、小日向結衣」

「……ありがとう、結衣でいいよ」

「じゃあ結衣だな。あたしもアリスでいい」

アリスが言ったように、それがバカンスみたいな任務であつたとしても、最低限気を抜かず、有事に備えておくことは必要になつてくる。

拳を突き合わせた結衣とアリスを少し引いた目で見ていた銀髪の少女は、結衣のお人よしにも、アリスのそんな遠慮のなさにも溜息をついて、展望室を横切つていく。

「んだよ、なんか文句あんのか?」

結衣は名前以外はよくわからないものの、銀髪の少女——アナスタシア・セルゲイヴナ・カミンスカヤというらしい少女と、アリスの間には何か因縁めいたものがあるらしい。



これ見よがしにつかれた溜息に対して、アリスはアナスタシアを睨みつけながら迫っていくが、彼女は氷のような微笑を崩さずに、そんなアリスへと囁くような声で言い放つ。

「いいえ、ないわ。ただ貴女もずいぶんと楽観的にものを考えていると、そう思っただけ」

「てめえ、この野郎……喧嘩売ってやがんのか？」

「売ってないわ。そんな、売るほどの価値もないもの」

「よしわかった、甲板に出ろ、そこで白黒ハッキリつけようじゃねえか、あ？」

どうやらアリスとアナスタシアは犬猿の仲と呼ばれるような関係であったらしい。

一触即発といった風情で、魔法少女同士の間合いが始まるうとしているのを止めるべく、結衣が割り込もうとしたその瞬間だった。

「もう、喧嘩はダメですよ？ アリスちゃん、アーシャちゃん」

「げっ、お前……」

「……だから、喧嘩なんてしてな……」

問答無用とばかりに現れて睨み合っていた二人を抱きしめたその少女は、結衣よりも二回りほど身長が高く、おおよそ筋肉の塊といえるほどにマッシブな体型をしていた。

クラウドディア・ゼツケンドルフ。

身長百九十センチ、体重百十キロ。ベルリン管区最強の第二世代魔法少女として諏訪部から資料は受け取っていたものの、名前と顔以外を知らなかった結衣にとって、その筋肉に支えられた圧倒的なパワーは凄まじい、の一言に尽きた。

「喧嘩なんて醜いことをしちやめつ、ですよく？ 暴力を振るっていいのはあ、地球を汚染する敵星体とかいうゴミ共だけなんですから、ね？」

聞き分けの悪い子供を諭すように、アリスとアナスタシアの髪を撫でながらそう言い聞かせるクラウディアの語り口は穏やかでこそあったものの、そこには敵星体に対する果てなく獯猛な殺意が滲んでいる。

結衣はその母性と殺意が同居する異様さであるとか、アリスとアナスタシアを無理やり押さえ込む筋力であるとか、色々な意味で胸焼けしそうだったが、クラウディアがこの場を収めてくれたのは確かだった。

「ええと……ありがとう、クラウディアさん」

「うふふ、極東最強の魔法少女、結衣ちゃんでしたね〜？ はじめまして。おんなじ魔法少女同士、仲良くやっていきましよう、ね？」

相変わらずアリスとアナスタシアを抱きしめたまま、穏やかな笑みを浮かべてクラウディアは結衣へと振り返ると、社交辞令のような言葉を返した。

だが、それは言い換えるなら仲良くしなければ容赦をしないということなのだろうか

——ちようど今、彼女に抱きしめられているアリスとアナスタシアのように。  
ギブアツプだとばかりに二人がクラウディアの両手を叩いているのを見て、結衣は正しく、引きつった笑みを浮かべるのだった。

## 5.2. 魔法少女、南海に降り立つ

奇妙な邂逅で若干正気が削れたところもありながら、その後は「はぐれ」と遭遇することもなく、無事に「オケアノス」は沖繩の基地に寄港していた。

照りつける日差しと吹き抜ける海風が、ここは東京とはまた違う場所なのだという感覚を結衣たちの情緒へと訴えかける。

ドレス・アップを行ったマジカル・ユニットや各管区最強の魔法少女たちに護衛され、連邦防衛軍の基地まで乗り付けてきた高級車に官僚たちが乗り込んだのを確認すると、結衣たちは装甲車に乗ってその背後を固めるかのように道中警備の任につく。

沖繩にも呪術結界が張り巡らされている以上、敵星体に襲われる心配は少ないのかもしれないが、過激化した民間団体による暗殺紛いのことが起きないとは限らない。

赫星戦役終結から1年間、そのほとんどは鎮圧されて首謀も摘発されたものの、反連邦政府団体というものは未だに存在していて、その腐敗と特権階級の専横に異を唱え続けている。

その気持ち自体は、結衣としてもわかるところはあった。

復興は着実に進められているものの、全ての人々が以前のように地球やスペース・コ

ロニーで暮らせるようになるのには相当な時間がかかるだろう。

そして、地上に戻れる権利を率先して手に入れられるのは特権階級や上流市民ばかりであり、未だに地下都市で暮らしている下層市民たちがフラストレーションを溜めていることもまた、理解している。

しかし、現実としてそれが今すぐどうにかなるとは限らなければ、地球連邦政府という仕組みを今破壊してしまえば、再び世界が混沌の中に逆戻りすることもまた、事実だった。

全ての理想が叶うことはない。

そうなればいいとは結衣もまた思っている、絶え間なく巨大な歯車が回り続けている現実という機械は、それ故の地獄を多くの人々に見せつけている。

それでも、理想を掲げることの意味がないとは思いたくない。

そう感じる自分があることもまた確かで、時折結衣は、自分で決断したはずのことがわからなくなってしまうのだ。

装甲車の荷台に轡を並べる魔法少女たちは、皆それぞれに信念や理由を持って戦い続けている。

その一方で、自分はスティアを守りたいとも思っていれば、多くの人々を守りたいとも思っていて、考えたくはないが、その両者が天秤にかけられた時——どんな選択をす

ればいいのかと、弱気になってしまふことは、結衣にもあった。

——せっかくのバカンスみたいな任務なんだから、少しぐらいは肩の力を抜いていいんじゃないのか。

アリスや美柑の言葉はもつともで、事実、幸いなことに会議場として確保されていたホテルに向かう道中では、結衣が心配していたようなことは起こらなかった。

魔法少女たちは交代で、大会議室の入り口を警護することになっていたが、その任務についている者以外は、ホテル周辺のプライベートビーチで待機していい、という旨は、上層部から通達されている。

それはつまるところ、魔法少女たちにもバカンスの機会を与えようという計らいだったのかもしれないが、軽率が過ぎると諏訪部が嘆きたくなる気持ちも、わからないでもない。

初日は対人警護にも秀でたクラウディアが会議室前を守り、現地で合流した市街戦装備の78式呪術甲冑がホテル周辺の警護を固めるということで、結衣たちは事実上、バカンスに回されることとなっていた。

ホテルに着くなりドレス・アップを解除して、あてがわれた部屋で水着に着替えた魔法少女たちは、我先にとプライベートへ向かっていく。

「……私も、少し肩の力を抜いた方がいい………んだよね」

その様子を窓から見下ろしながら、カーテンを閉めて、結衣もまた、任務が始まるまでの間、美柑に連れ出されて買いに行った水着を身に纏い、半袖のシャツを上から羽織った。

そして、少しでも肩の力を抜くべくプライベートビーチへと向かおうと、結衣が部屋の扉を開けた時だった。

「……ステイア」

「結衣……結衣も今、着替えが終わったの？」

「うん……ステイアも？」

「ステイアは、結衣の言葉を肯定する……ステイアも、今着替えが終わった……」

隣の部屋があてがわれていたステイアもちょうど今、着替えを終わらせていたらしく、結衣と同じようなビキニタイプの水着の上から半袖のシャツを羽織って、その頭には麦わら帽子を乗せていた。

自分が一番遅かったのではないかと思っていたが、どうやらそんなことはなかったらしい。

「ねえ、ステイア。せっかくだから、その……一緒に海、行かない？」

結衣はそんな偶然に思わず口元を綻ばせながら、ステイアをプライベートビーチへと誘う。

元から向かう場所だったが、どうせなら一緒に行くこうと差し伸べたその手をステイアはしげしげと見つめながら、すっ、と伸ばした手を重ね合わせた。

透き通るように白いステイアの肌から伝わってくる鼓動と確かな温もりを感じながら、結衣たちは視線を合わせて、その答え合わせとする。

そして、二人は指を絡めて手を繋ぎ合わせると、多くの魔法少女たちが夏を謳歌するプライベートビーチへと向かっていくのだった。



夏の日差しが照りつけるプライベートビーチへを吹き抜けて、彼方へと去っていく海風は、基地に降り立った時とはまた装いを改めているような気がした。

ドリンクを二人分購入した結衣とステイアは、魔法少女たちがめいめいに夏を満喫している浜辺を何をするでもなくただ歩いて、空いていたパラソルに身を横たえていた。

「結衣は、海に入らなくていいの？ ステイアは、気になる……」

「ん……ステイアが入りたいなら、っていうのはずるいよね。うん、あんまり気乗りはしないかなあ」

「気乗りしない、積極的ではないこと……どうして？ ステイアには、わからない」



「なんていうか……なんとなく？」

結衣は海が嫌いだというわけではない。

ただ、なんとなく水着を濡らしてからホテルに戻ったら迷惑がかかるのではないかと思ったり、もしかすれば、皆が楽しそうにしているのを見ているというだけで満足してしまっているところもあるのかもしれない。

プライベートビーチの砂浜に張られたネットを境界線として、ビーチバレーに興じているアリスと美柑、そしてアナスタシアとアンジェリカの戦いは遊びとは思えないほど白熱していて、結衣としては正直それを見ているだけでも十分だった。

「っしや！ 次のサーブ外すなよ、美柑！」

「オツケー、アリス！ そんじやアタシたちが勝っちゃおつか！」

「させませんわ！ アナスタシアさん、準備はよろしくて!？」

「ええ、負けるつもりは毛頭ないわ」

出会ったばかりだということのここまで親睦を深めているのは、管区を超えて繋がりを強化したいと考えている上層部の思惑通りなのかもしれない。

だが、年頃の少女らしく、彼女たちが全力で遊びに興じている様子を見ると、結衣は渴き切った心に水滴がしたり落ちるような、そんな感覚を抱くのだ。

まだそれは、仮初の平和にしか過ぎないのかもしれない。

事実として、敵性は進化し続けていて、上層部はそれを楽観視しているという問題は残されていれば、「巢」の、ダンジョンの全てが攻略されたわけでもない。

例えダンジョンアタックが成功したとしても、そこにはいつも大いなる犠牲が伴っていて、散っていった魔法少女や兵士たちの上に今の自分たちは立っているということになる。

それでも——それでも、例えそれが仮初に過ぎないとしても、こうして人類が僅かでも穏やかな時間を取り戻したのだと思えば、自分のやってきたことは無駄ではないのではないかと、結衣はそう思うのだ。

同時に、自分が犠牲の上に成り立つ平穏を享受しているという事実が胸が締め付けられそうになる。

しかし、南海に吹き抜ける海風が、そこに響き渡る歓声が、そしてステイアの手から伝わる温もりが、ふとした時に折れそうになる結衣の心を、確かに支えてくれていたのだ。

そういう意味では、上層部の計らいも無駄なものではなかったのだろう。

そんな他愛もない考えと潮風に身を任せて、ブルーハワイ味のドリンクを啜りながら、結衣はステイアと手を繋ぎ合わせ、美柑たちの試合を一通り見届けるのだった。

## 53. 魔法少女と樂觀主義者たち

「しかしだね、君。こうして人類が反転攻勢に出ている今、敵星体を地球から叩き出すのは時間の問題ではないかね？」

リゾートホテルの大会議室、スクリーンに提示された現在の戦況を一瞥した男は、そもそもこの会議自体が無駄ではないのかとばかりに肩を竦める。

事実、四国奪還戦の成功と、極東管区からの積極的な攻略成果の共有によって、各管区におけるダンジョン・アタックはその成功性を以前とは比べものにならないほど向上させていた。

だが、それでも不安要素の全てが排除されたというわけではない。

諏訪部は案の定とばかりに出てきたその意見に眉をひそめたくなるのを堪えて、あくまで客観的な立場を貫き、語る。

「仰る通り、人類が反転攻勢に出ているのは確かなことです。ですが敵星体の中にも奇妙な動きがある以上、この攻勢を維持するためにも攻略成果の共有とその対策会議は必要なものかと」

「ああ……変異体とかいうものかね？ 現状、奴らが『巢』にこもって出てこない以上、

君たちが策定してくれた攻略難度に応じた第二世代魔法少女の投入でなんとかなっているだろう」

はぐれの個体にまであの飛竜級が出現するようになればそれは大惨事だが、現状ではそのような動きは確認されていない。

瘦せぎすの身体をスーツで包んだような、北欧管区の代表者の一人は諏訪部の意見を一笑に付して、再び椅子に腰を落ち着ける。

結局のところ、彼ら有識者や官僚の中にもバカンス気分で沖縄に集まった人間が大半とまではいわずとも、結構な割合を占めているのだろう。

諏訪部は無言で各地に出現した変異体のデータをスクリーンに投影し、プログラムの進行通りにその危険度を解説する。

「見ての通り、変異体が確認されたのはダンジョン内部がほとんどですが、ごく稀に、なんらかの手段をもって呪術結界を通過し、都市部に出現した例もあります。特にタイプ・シヨコラータ……あの質量を熱量に変化させる個体が複数現れれば、結界の外からでも破られかねません」

お台場に出現した、怪獣映画の中から抜け出てきたような個体のデータを大写しにして、その時現場に居合わせた呪術甲冑隊が記録していた映像を、諏訪部は再生する。

そこに収められていた、町一つを軽く焼き払えるほどの威力を持った熱線を変異体が

吐き出す様子を見せれば、意見は変わるかと思つてのことだった。

だが、主に安穩が続いている北欧管区や南米管区の代表者たちは、それこそ怪獣映画を見ているような具合で首を傾げている。

「極東管区は貴重な第一世代魔法少女を三人も抱え込んでいる。加えてこの事例が今のところは東京以外で確認されていないとなれば、何か例外的なことではないかね？」

しかし、その熱線の威力は確かに伝わっていたようで、起立し発言したラテンアメリカ系の男性——南米管区の代表者であるコーウエン・カークス中將は、そう信じたいのだとばかりに、こめかみへ脂汗を滲ませていた。

確かに、東京以外で呪術結界の内部に敵星体が出現したという情報は今のところ確認されていない。

ただ、それが東京以外での都市において同じことが起こらないという保証はどこにもない。

そうなった時、あの怪獣のような変異体、その熱線に対抗できるだけの魔法少女が極東管区以外に揃っているかと問われれば、それもまた深刻な問題だった。

「仰る通り、今のところは例外ですが、敵星体の動きが活発化している以上、同様のことが起きないとは限りません。そうなった時……最悪の事態に備えて各管区における結びつきを強化しておくのが最善だと、我々は提言しているのです」

「うむ……確かにそれも一理ある。我々が攻略に挑んでいる重慶のダンジョンにも動きがあったという報告がなされている。これからは管区の枠を超えての共同作戦なども、積極的に打っていく必要があるのではなからうか」

諏訪部の言葉に乗ったのは、北京管区の代表者、劉王芳中将だった。

眼鏡の蔓を指で持ち上げながら、今投影しているモニターの映像、そのコントロールを渡すように諏訪部へと視線で指示を下すと、彼はおもむろに立ち上がって、画面に映した重慶のダンジョンを指し示す。

そこに聳え立つ紫水晶の結晶塔は、旧松山市にあったものと同等かそれ以上の規模であり、多くの航宙艦や呪術甲冑、そして魔法少女が世代を問わず投入されていく大規模作戦であることを示す映像が映し出されていたが、それはどういうわけか、途中で途切れてしまっている。

「我々にこの資料が届けられたのは直近のことで、正直なところ、動揺を隠せない。しかしらこの場において開示することに価値があると信じて、今共有したものだ」

劉中將は咳払いをしながら、悲壮な覚悟をその表情に滲ませながら言い放つ。

「重慶にこのような動きがあったとは……」

「しかし、我々は……」

「極東管区に主導されるのは癪だが……各管区の連携を密にせねばならんな、これは」

その映像は、静まり返っていた議場に一石を投じるには十分な衝撃を持っていた。

敵星体が確実になんらかの変化を遂げている、という情報と、他管区では比較的ダンジョンアタックが上手くいっていた中で、重慶奪還戦の進捗が思わしくないということとを共有してくれた北京管区の代表者に諏訪部は内心で感謝しつつも、また新しい胃痛の種ができたことに頭を悩ませる。

極東管区は「救世の七人」作戦を成功させたことで、赫星戦役を終わらせたその功績で、地球連邦政府の中でも大きな発言力を持つているため、それを嫌っている管区は珍しいものではない。

特に戦前大きな発言力を持っていた北米管区やモスクワ管区、そして北京管区などがその代表として挙げられる。

だが、それでも北京管区が恥を承知で重慶奪還戦の映像史料を共有してくれたのは、同じ危機を認識してくれているからだ。

人類は生き残らねばならない。

それこそが地球連邦政府の抱える至上命題である以上、その認識はいかに派閥が分かればようと、この場にいる全員が共有しているものだ。

ざわめき出した議場に飛び交う言葉の中に極東管区にこれ以上政治的なイニシアチブを握られたくないという思惑は見取れるものの、少なくとも諏訪部にとってはそう

いう駆け引きは政治家がやるものだど割り切っていてら軍人としてはあくまで今、人類に危機が迫っているかもしれないというその感覚を共有してもらいたいだけだった。

それに、「ラボラトリイ」の、真宵の推測通りにダンジョンが敵星体にとつての実験室であるなら、そのフラスコの中身に納得がいけば、それは実証へと移されることになる。あくまでも最悪を想定した可能性にすぎないが、可能性があるというならば対策を考えなければならぬというのが、軍人の仕事なのだ。

加えて重慶のダンジョンに不穏な動きがあるという情報もたらされれば、そのシナリオを想定しない方がどうかしている。

今までは「巢」に押し込められていた敵星体による反攻——それが始まった時、果たして人類は生き残ることができるのか。

この沖繩に各管区最強の魔法少女が集められたのが無駄にならない予兆を感じて、諏訪部は思わず小さく身震いする。

——冗談じゃない。

あの楽観主義者たちのように構えていられれば精神的には楽だったのだろうが、とてもそうはいっていられる状況ではなさそうだった。

「とにかく、我々は今まで以上に管区の枠を超えた連携を行っていかなければなりません。各管区に提供したデータを元にオケアノス級宇宙戦艦の増産も始まっていると小



官も聞き及んでおりますが、その完成には時間がかかる。取り急ぎ、まずは重慶の動きを見る必要でしょう」

諏訪部の総括に反対する人間は、少なくともこの場においては一人もいなかった。

まだそれだけの理性が残っていてくれたことに感謝しながら、お開きとなつた議場を諏訪部や閣僚、官僚たち有識者は後にする。

「重慶の動きは初耳だった。こりゃあ、『ラボラトリイ』も急かさなきやいかな……」  
敵星体は何を考えているのか、対話が不可能である以上それさえ不明で、与えられた情報や集めた情報をもとに推測を重ねなければならぬというのは、負担であるとはわかつていても、いち早く対応を考えなければ滅ぶのは自分たちだ。

人類は、まだ戦いに勝利していない。

あの破滅をもたらしかけた赫星戦役を乗り越えてなお、人類に襲いかかる敵星体——どこまでも厄介な災禍に諏訪部は怒りを煮やし、指示棒で強く掌を打ち据えるのだつた。

## 54. 魔法少女と動き出す戦況

沖縄での合同会議が行われるより時はわずかに遡り、重慶奪還戦は、恙無く進行していたはずだった。

主力級航宙戦艦を五隻投入しての外縁部における火力支援に加え、相当数の第二世代魔法少女及び第三世代魔法少女、そして78式呪術甲冑が投入されたことにより、時間はおかっても攻略そのものは成功するだろう、というのが北京管区における見方だったのだ。

しかし、現実はその上手くいくものではなかった。

鉄風雷火が吹き荒ぶ戦場で、外縁部における「はぐれ」の掃討に徹していた78式呪術甲冑のパイロットの女性性は、タイプ・キャンディを両手に保持したアサルトライフルで撃ち落としながらも、その異常の予兆とでも呼ぶべきものを感じ取る。

「引き返してくる反応が一つ……？」

本来であればダンジョンの深部に到達しているはずの魔力反応がこちらに向けて引き返してくるという事態に、もしや敵前逃亡でも起こったのかと思案するが、引き返してきた魔法少女からオープンチャンネルで発信された情報が、彼女も含めた重慶攻略軍

の面々を凍りつかせる。

『聞こえていますか、皆さん！ ダンジョン深部に潜んでいた巨大な……未確認の変異体が飛び出そうとしています！ 私たちは間に合いません、早く退避の準備を——！』

通信機から聞こえてくる切羽詰まったその声に、呪術甲冑陸戦隊や主力級航宙戦艦を指揮する艦長たちも皆一様に身を強張らせたものの、最早事態は手遅れなところまで達していた。

地響きなどという言葉でも生温い、地殻の底から思い切り突き上げられたかのような振動が響いたかと思えば、聳え立つ結晶塔を押し破って、周囲の地盤を沈下させて、「それ」は地の底から、生まれる時を待ち望んでいたかのように這い出してくる。

「な、なんだ……？ 何が起こっている！」

「不明です！ しかし、巨大な敵星体反応が——」

「反応途絶！ 呪術甲冑隊も、内部に侵入した魔法少女隊も応答ありません！」

発生した地割れに多くの呪術甲冑隊と、そしてダンジョンだった場所に多くの魔法少女たちを生き埋めにする形で地上に顕現した「それ」は、東京に現れたタイプ・シヨクラータに匹敵するほどの巨体を保持する、キロネックスと呼ばれるクラゲによく似た敵星体だった。

しかし、重慶攻略軍を驚愕させたのはそれだけではない。

彼らは超巨大敵星体が取り巻きとして多くの敵星体を引き連れていることは周知の通りだったものの、その取り巻きの中にありえない——本来ならばいるはずのない、いてはならない存在の姿を認めたのだ。

「馬鹿な、魔法少女だとい!？」

無数のタイプ・キャンディやタイプ・クッキー及びその変異体に混じって、確かにその人影は数人ほどではあるものの、確認されていた。

虚ろな目で、壊滅した重慶攻略軍を見つめる魔法少女と思しき存在の瞳に、およそ感情と呼べるものは感じられない。

しかし、彼女たちは重慶のダンジョンへと投入された魔法少女の誰ともその顔も識別コードも一致せず、その反応は魔力反応ではなく、微弱ながらも敵星体反応を示していた。

何が起こっているのか、艦隊の総旗艦である、主力級航宙戦艦「丹陽」の艦長を務めている男には、今起こっている事態は到底理解できるようなものではなかった。

それは男だけではない。

空中に浮かんでいたことで辛うじて地割れからは逃れることができた主力級航宙戦艦のクルーたちは皆一様に動揺を示していて、それは、戦線からの即時離脱という選択肢すら彼らの脳内には浮かんでこないほどだった。

『エリユシオン——』

「な、なんだ？　言葉が話せるのか？」

『星罪——裁き——エリユシオン——』

クラゲのような超巨大敵星体を守るかのように、主力級航宙戦艦の前に立ちはだかった、魔法少女と思しき何かは謔言のようにそう呟くと、闇を形にしたような刃をその魔法星装である魔法の杖から展開し、無感情にその刃を振り抜く。

推定魔法少女が放った攻撃の反応が魔力反応と敵星体反応が混ざり合ったものであることに気付いた観測手は艦長へと進言を出そうと立ち上がったが、「丹陽」のブリッジが闇を纏った刃によって破壊し尽くされたのは、正にその瞬間だった。

旗艦を失ったことで、元々崩壊していた指揮系統は崩壊を始め、二番艦と四番艦が超巨大敵星体の排除に向けて主砲を向けたかと思えば、三番艦と五番艦は撤退を優先して回頭する。

最早この戦場に秩序はなく、ただ生き残った者たちが各々、好き勝手に動き回るだけの集団となり下がれば、軍隊は軍隊としての意味を失う。

しかし、そんな戦場の摂理など意に介した様子もなく、クラゲのような超巨大敵星体——タイプ・シヨコロータすら超えた、アンノウンと呼ぶべき存在は己に牙を向けてきた二番艦と四番艦をその触手で絡めとると、無邪気な子供がおもちやをぶつけ合って遊

ぶかの如く衝突させて、瞬く間に二隻の主力艦をスクラップに変えてしまう。

そういう意味では、回頭しての退却を選んだ三番艦と五番艦は賢かったといえる。

しかし、それすら逃さないとはかりに、紫色のゴシックロリータに身を包む魔法少女らしき存在は、出遅れていた五番艦を沈めようと加速し、闇を纏った刃を振りかざす。

「艦長！」

「わかっている！　ここは本艦を盾にして、記録の送信までの時間を——」

『裁きを——』

しかし、主力級航空戦艦という巨大な物体に対して、魔法少女という的はあまりにも小さすぎた。

いかに高精度な照準システムを持っていようと、それを振り切るほどの速度と的小ささの前には自慢の陽電子衝撃砲塔もその威力を十分に発揮することなく、縦一文字に切り裂かれた五番艦は、数十秒と持たずに爆散していた。

「データの転送はどうなっている！」

「進捗状況、四割です！　これでは……」

「我らは犬死ということか……！　しかしただでは死ななくて、あの魔法少女を、人類の裏切り者を叩き落とすのだ！　パルスレーザー全砲門開け！　主砲の照準には期待するな！　撃て、撃て、撃ちまくれえええつ！」

三番艦の艦長を務めていた男は半ば錯乱した様子でそう叫ぶと、全ての火器を魔法少女らしき存在へと向けて斉射する。

だが、何事かを呟いた魔法少女らしきものは、闇を纏った刃を翼のように展開すると、その苛烈な攻撃を掻い潜って、ブリッジに無数の刃を突き立てていく。

主力級航宙戦艦には相応の呪術回路が組み込まれ、その防衛機構である呪術結界も正常に作動していたはずだったが、それも虚しく、闇を形にした刃は艦橋を、エンジンを貫いて、最後の生き残りとなった三番艦を爆沈させた。

データの四割——沖繩での対策会議に提出された分だけでも転送できただけ救いはあったといえるが、重慶奪還戦は、誰がどう見ても大敗という結果に終わったといっても過言ではない。

貴重な第二世代魔法少女、第三世代魔法少女、そして呪術甲冑と主力級航宙戦艦が全滅するという結果に、敵星体はそれで満足したのか、管区にとつての本土である北京ではなく、ふらふらと、ふわふわと、魔法少女らしき存在を連れて何処へと向かっていく。

『星罰は下された——は、我らエリユシオンを——』

その魔法少女と思しきものは、虚ろにそう呟くと、本来は相容れない存在であるはずの敵星体に寄り添いながら、その巨大なクラゲを慈しむようにそつと撫でながら、彼が意図する場所へと導かれるように飛ぶ。

そうだ。星罰は下された。

魔法少女らしきものは、吹き抜ける風に薄桃色の髪を靡かせながら、壊れたテーブルコーダーのように何度もその言葉を繰り返す。

そして、心なしかクラゲのような巨大敵星体はその様子を見て、本来、クラゲにあるはずがない巨大な牙が生え揃った口を歪めてみせる。

さながら、人類の歩みを嘲笑うかのように。

これからが本当の地獄だと、ほくそ笑むかのように。



## 55. 魔法少女とわかり合うこと

対策会議自体は、有益な情報を共有できて終わったとのことだったが、政治から切り離されている結衣たちにとっては幸いだった、ぐらいの感情しかない。

白熱していたビーチバレーも最終的にはアナスタシアとアンジエリカ組が勝利を収めて、あつけらかんと敗北を受け入れた美柑と、悔しがるアリスで明暗が分かれる形となった。

特にあのアナスタシアという魔法少女とアリスは個人的な折り合いが悪いらしく、差し伸べられた手を取りながらも額を突き合わせていがみ合っている姿は、一周回って何か、夫婦漫才じみたやり取りにさえ見える。

「ちっ、調子に乗るんじゃないやねえぞ、今回は負けたけどな、次はあたしが勝つからな！」

「……そう、勝てるならいいけれど。勝てるなら」

「てめえ……言ってくれんじゃないやねえか」

「事実を述べたまでよ」

額に青筋を浮かべるアリスと、澄ましているながらも自らに食らいついてくる彼女の態度が気に入らないのか、密かに冷たい怒りを滾らせているアナスタシアはまさに一触即

発といった風情だった。

結衣はそれを止めるか止めないかで大いに迷っていたものの、世話焼きな美柑が仲裁に入らない辺り大事には至らないのだろうと判断して、動向を見守りつつも、氷が溶けて薄まったブルーハワイ味のドリンクを啜ることに決め込んだ。

「……あ、あの……結衣、さん」

「ん、どうしたの、絵理」

溶けた氷で薄まったおかげで、なんともいえない味になったドリンクに結衣が顔をしかめていると、おずおずと絵理が今にも喧嘩を始めそうなアリスとアナスタシアを見遣りながら、気まずそうに指を差す。

繊細な絵理らしい心配だったが、流星に任務中にプライベートビーチでドレス・アップを行つての私闘には至らないだろうと結衣も踏んでいた。

だが、最早売り言葉に買い言葉といった形で、二人の睨み合いは今にも弾け飛びそうなほど緊迫したものになっている。

「上等だ、表出やがれ！」

「ここが表よ、品性のない言葉遣いは底が知れるわよ」

「悪かったなあ、お上品じゃなくてよ……とにかくあたしもこのままじゃ腹の虫が治まんねえ、白黒つけんぞ」

「ふふ、おかしな人。勝負ならとつくについているじゃない」

「うるせえ、第二ラウンドだ！ おいお前ら、誰かなんか持つてねえか!」

幸い、だいぶ怒りで頭が茹っているのであるうアリスも、私闘は私闘でも穏便な形で  
の決着を望んでいるらしい。

そのことに結衣と絵理は胸を撫で下ろしつつも、ただひたすらに元気だなあ、という  
感想を抱く。

反面、それが平和の象徴であり、健全な形なのだということも、結衣は嫌というほど  
理解している。

今は自分たちのような少数派しか享受することのできない安穩が、全ての人々に行き  
渡るためにも、この星から敵星体は、一匹残らず叩き出さなければいけない。

そのために自分は軍に戻ったのだ。

あれこれと好き勝手に振る舞ったとして、自分がいかに第一世代魔法少女の中で最も  
強いと呼ばれていたとして、仮に全てが上手くいったとしても、残るのは焦土だけだ。

一人の力で敵の全てを叩き出すには、相応の力をこの地球という人々の揺籠の中で振  
るわなければならぬわけで、自分の魂に与えられた「猶予」のことを考慮しなくとも、  
メタモルブーストを使って戦えば辺り一面は焼け野原になる。

壊すことはできても、直すことはできない。

それが魔法少女小日向結衣の弱点だともいえれば、同時に一人でその全てをこなそうというその行い自体がおこがましいという、傲慢でもあった。

力がある者は、その力に対して相応の責任を負わなければならない。

昔読んでいたジュブナイル小説の中には加減の効かない力を振るって、それが普通だと思いついて入っている主人公がよく出てきたが、魔法少女も似たようなものだ。

だからこそ、地球連邦政府は軍の管理下に置くという形で魔法少女たちを教育し、その力に対して責任を持たせるということを徹底してきた。

アリスとアナスタシアが私闘を始めないというのも、そういった教育プログラムが彼女たちの中にも浸透しているからなのだろう。

いつの間にか美柑が用意していた木刀とスイカ、そして鉢巻による目隠しを施して、スイカ割りによる第二ラウンドを始めた二人を一瞥しながら、結衣はぼんやりとそんなことを考える。

「アリスとアナスタシア……喧嘩している。二人は、仲が悪い？ スティアには、わからない」

そして、その様子をぼかんとした表情で見つめていたスティアが、小首を傾げてぽつりと呟く。

海風に靡く、金色にも銀色にも見える不可思議な髪の毛からは相変わらずよくわから

ない粒子が漂っていて、風に乗ったそれらがエメラルドブルーの海へと還っていくのは、いつそ神秘的でさえあった。

「どうだろ、私にもわからないかも」

喧嘩するほど仲がいい、ということわざがあるが、それをあの二人の前でいったところで否定されるだろうし、傍からはそう見えても、実際は本当に嫌い合っているのかもしれない。

結衣はブルーシートの上に置かれたスイカを、美柑とアンジェリカの指示に従いながら探っているアリスとアナスタシアへと視線を向けながら、困ったとばかりに苦笑する。

ステイアが欲しかった答えとは違っている、人間というのは得てしてわからないものなのだ。

「結衣にも、わからない……とても難しいこと？ ステイアは、そう理解した……」

「単純じゃないんだよ、人間って」

「人間は、単純じゃない」

「うん、一人一人に人生があつて、一人一人に譲れないものがあつて。だから……難しい」

全ての人が誤解なく手を取り合うことができる世界ができたなら、それはきつと理

想郷と呼ばれるのかもしれないが、誤解なくわかり合った結果、わかり合えないということがわかった、ということだって考えられる。

共存、共栄。

連邦の旗のもとに一つになったこの地球においても、人類が目指す理想に現状はまだまだ程遠く、だから懸命に人々は日々を生きて、時に他者へと手を差し伸べるということとを繰り返しているのかもしれない。

「……わたしは、その……きつと、仲良しだと、そう思います……」

アリスさんも、アナスタシアさんも。

そんな、どこことなくポエトリなことを考えてしまう結衣に、答えたのはステイアではなく絵理だった。

「うん、そうだね……仲良しだって、そう思いたい」

絵理の言葉と控えめな笑みに、第一世代魔法少女として戦ってきた戦友たちとの記憶が呼び起こされて、結衣の胸の内を通り過ぎていく。

その中には当然、折り合いが悪かった魔法少女もいた。

それでも、嫌い合い、憎み合うことをしなかったのは、敵星体という共通の敵がいたからなのかもしれない。

あるいは、互いにわかり合えずとも信じ合えるものがあつたからなのかもしれない。

それだったら、後者であればいい、と、結衣はすっかり水の味しなくなつたグラスの中身を飲み干して、そう考へる。

皆が皆、いい人だつたわけじゃない。

他人の目から見れば、自分だつていけ好かない存在に映つていたのかもしれない。

それでも彼女たちには彼女たちの信念と人生があつて、一足先に自由になつた魔法少女たちが掲げていたその旗に、彼女たちが確かにそこにいたという証を証明するため、今も結衣は戦つているところがあつた。

それは、死者から託された祈りであり、祈りとは時に自らの首を締め上げる呪いに転じるものである。

そう頭ではわかつていても、結衣は今もその呪いを背負わずに生きていくという選択肢が、取れそうになかつた。

「……難しいんだ、生きるのつて」

ぼつりと結衣の唇から零れ落ちた呟きは、半ば、自分に言い聞かせたものだった。

こんな時代だ。生きていてだけで嬉しいはずなのに、生きていられるだけで幸せなはずなのに。

それなのに、生きていくというただそれだけでしがらみに足を捕われてしまうのだから、人生というのはままならない。

アリスが振り下ろした木刀が綺麗にスイカを両断するのを見届けながら、結衣は目に染みた潮風が滲ませた一粒の涙をそっと、人差し指で掬うのだった。



## 56. 魔法少女と戦鐘、再び

それは、確かに沖繩を指して漂い続けていた。

重慶のダンジョンを破壊しながら生まれきた巨大なクラゲ型の敵星体は、無数の取り巻きと魔法少女によく似た何かを引き連れながら、死の行進を続けていた。

この3年間で、人類が取り戻せた国土はおよそ三割に過ぎない。

つまるところ、いかに警戒網を敷こうとも地球の七割は未だ敵星体の縄張りということであり、北京管区が管制を担当していた空域を、その航空戦力ごと薙ぎ払って、「それは何かに導かれるように、あるいは誘われるように沖繩を指して漂い続ける。」

しかし、これだけの群れが移動し続けているとなれば、連邦防衛軍が宇宙に浮かべた監視衛星が捉えられないはずはなく、リアルタイムでそのデータは地球連邦防衛軍極東管区総司令部へと伝えられていた。

「馬鹿な……そんなことがありえるのか!？」

「しかし軍務局長、衛星が捉えた画像と観測対象の座標は間違いなく沖繩に向けて移動し続けている」

「……これではまるで、敵星体が閣僚や官僚が集まったところを狙っているようではあ

りませぬか、長官」

「うむ……諏訪部大佐からの報告で、敵星体が進化しているとは聞き及んでいたが……」  
長官と呼ばれた彼——地球連邦防衛軍統括司令長官なる長い肩書を背負っている壮年の男性は、額に冷や汗を滲ませながら、想像を超えた事態に小さく唸る。

宮路真宵から、「ラボラトリイ」からの報告ではあのダンジョンと呼ばれる構造体は「巢」としての役割を担っているのではないかという見方が軍部の中では強かったものの、先日音沙汰がなくなつた重慶奪還戦のために回された部隊のことも鑑みれば、あれは「はぐれ」の群れなどではなく、重慶の「巢」を立つた群体だと見て間違いはないはずだ。

「諏訪部大佐に回線を繋げ！ マジカル・ユニットの出撃許可は既に出している、なんとかしても迎え撃つのだ！」

軍務局長の怒声が響き渡ると同時に、けたたましく警報が鳴らされる。

軍部は懸命に対応しようとしているものの、不幸なことに、今動かせるオケアノス級は、沖繩に派遣していた「オケアノス」だけだった。

入渠を終えた「オールト」と「オラシオン」は他管区との合同作戦に投入されており、それらを今から引き戻すのは極めて難しい。

ならば、頼りにできる戦力は「オケアノス」と、沖繩に集まっていた各管区最強の魔

法少女たちだけだということになる。

「頼むことしかできぬ我々を恨んでくれ……しかし、頼んだぞ、魔法少女……」

祈ることしかできない無力を呪いながら、司令長官は握りしめた拳を震わせて、ただ立ち尽くすのだった。



ステイアがその声を聞いたのは、アリスが叩き割ったというよりは微弱な魔力を込めたことで両断したスイカを、全員で分け合っていたその時だった。

——エリユシオン。

脳裏から金槌で頭を殴られたような衝撃と共に、ステイアは夢の中にも出てきたその言葉と、恐ろしい「何か」が迫ってくることを、確信として感じ取る。

「どうしたの、ステイア!?!」

急にスイカを取り落として地面にへたり込み、がくがくと全身を震わせているステイアへと結衣は一目散に駆け寄って、冷や汗が滲む額にそつと右手を這わせて熱を確かめる。

まさか、という予感結衣の中にも確かにあった。

これが熱中症だとしたらそれはそれで問題だが、スティアがこれだけの怯えを見せたということとは、そこからいかに目を逸らそうとも、敵星体が絡んでいるということに他ならない。

「結衣……来る、何か……怖いものが、来る……!」

「……ッ、敵襲!」

けたたましい警報が鳴り響いたのは、スティアがその言葉を震える唇から紡ぎ出した、その直後だった。

緊急事態宣言と共に、市民たちを地下シエルターへと誘導するアナウンスが街中に響き渡り、尋常ではない脅威が迫っているのだと、これは訓練ではなく現実なのだ、切羽詰まったアナウンスがそれを何よりも雄弁に物語る。

「遊びの時間は終わりってことか、ちようどいいぜ」

「……今、出撃許可が下ったわ。クラウディアが先行している」

「だったら負けられねえよなあ! 行くぞてめえら! あのクソツタレどもを地球から叩き出してやるんだ!」

——ドレス・アップ!

アリスとアナスタシアはその解号を同時に唱えると、己の魂を高次元へと接続する媒介として、魔法少女としての姿へと生まれ変わっていく。

二人の身体が光のヴェールに包まれたかと思えば、纏っていた水着を上書きするようにゴシッククロリータのドレスへとその装いは改められて、手には魔法星装が携えられる。

アリスは二挺のアサルトライフル、アナスタシアは透き通る冷気を放つ氷の刃を先端に持つ直槍と、それぞれの特質を反映した魔力による武装が構成された結果だった。

「結衣、アタシたちも！」

「わかった、でも……」

「スティアを避難させるんでしょ？ それならアタシに任せて！ 結衣と絵理は敵星体への対処をお願い！」

三人の中で、全ての距離へと即座に対応できるのは直刀とリボルバーカノンという、レンジが違う二つの魔法星装を同時に保持している美柑だけだ。

結衣も光の刃による近接戦は可能としているものの、展開に僅かなタイムラグが生じる以上、スティアの護衛は万全を期すという意味では美柑に任せるのが適任だった。

呪術結界は展開されているものの、スティアの怯えようから察するに、今回の敵はおそらく尋常ではない存在なのだろう。

覚悟を固め、「ドレス・アップ」の解号を唱えると同時に、結衣と絵理、そして美柑とアンジェリカの身体が光の繭に包まれて、ただの少女から魔法少女へと変じてゆく。

「スティア、無事でいてね」

「うん……スティアは、結衣の無事も祈っている……だから、帰ってきて、結衣」

「……約束する。それじゃあ、行ってくるから」

その細腕に結衣は約束と魔法星装を携えて、戦場となる空へと、魔法少女に変身したことでより強く感じられる「星の悲鳴」を辿る形で飛び立つのだった。



「おいおい、こりゃあ……何かの冗談だと思いたいもんだね」

「残念ながら現実ですよ、東山艦長」

「わかってるよ、諏訪部司令。最悪は」

「ええ、タキオン粒子砲の被害シミュレーションは行っています」

ホテルから「オケアノス」が繋留されている軍港へと向かった諏訪部は艦橋に乗り合わせる、先行していた魔法少女たちのバックアップに回る形で通信回線をオープンにする。

極東管区総司令部からの情報によれば、今回襲撃してきた敵星体は以前お台場に現れたタイプ・シヨコラータの変異体よりも巨大な個体であり、凄まじい規模の群れを引き

連れている、とのことだった。

こうして「オケアノス」の観測機器を通して目で見るまでは諏訪部もその言葉を疑っていたものの、沖繩に向けて侵攻している敵星体は、それこそ、地上では禁忌とされているタキオン粒子砲の一発や二発でも撃ち込まなければ、いかにオケアノス級といえども効果が見込めないほど、桁違いに大きなものだった。

だが、諏訪部たちはその巨大敵星体に気を取られたことで、一つの存在を見落としていたことになる。

それがあの、闇を形にした刃を纏う魔法少女のような何かだった。

当面、二連装タキオン粒子砲の発射を最終手段と規定した東山と諏訪部は、魔法少女たちのバックアップとして火力支援を行うべく、「オケアノス」の巨体を空に浮かべて、その主砲を敵星体の群れへと撃ち込んでいく。

既に先行していたクラウディア、アリス、アナスタシアたちはようやくの到着にもかかわらず、文句一つということなく、取り巻きである敵星体の始末にかかっていた。「へっ、こんだけ数が多けりやな、あたし向きってことだー！」

両手に携えたアサルトライフルから、魔力によって生成される弾丸を惜しみなくばらまきながら、アリスは空を埋め尽くさんばかりのタイプ・キャンディを十把一絡げに撃墜する。

引き金を引けば引くほど、弾をばら撒けばばら撒くほどに幸せを感じる彼女の思考回路にとつて、これだけの敵と矛を交えるのは、恐ろしいという感情を踏み倒し、ぞくりと背筋を撫でる興奮を感じさせるのだ。

「全く、野蛮なのね……『スネグラーチカ』」

名付けとは、不確定な揺らぎに形を与える呪いであり、呪いとは定義の補強である。

そんなアリスの様子を一瞥すると、アナスタシアは己の特性である「氷」の魔法を、魔力によつて高次元から引き出される「結果」をより高度なものにすべく、「名付け」を行った魔法によつて、タイプ・キャンデイとタイプ・クツキーを瞬く間に氷漬けにし、打ち砕いていく。

戦端は開かれた。

かくして、集められた各管区最強の魔法少女たちは、それぞれ敵星体、その未曾有の群れとの決戦へと、身を投じるのだった。



## 57・魔法少女、南海に戦う

アリスによる弾幕砲火、アナスタシアが操る氷の魔法、そして「オケアノス」の主砲による火力支援によって、先鋒として突撃を図るタイプ・キャンディは順調にその数を減らしていた。

親玉であるクラゲのような敵星体は未だ後方で漂っているだけだが、それが何を意味しているのかは、戦場に合流した結衣たちにもわからない。

言葉を尽くしてもわかり合えない敵が相手であるのなら、戦う以外の選択肢は残されていない。故に戦う。故に、殺し合う。

轟音と共に秒間十数発という驚異の連射力を誇る「オケアノス」の主砲が、ちらほら戦線に入り混じりはじめてきたタイプ・クツキーを粉碎し、タイプ・キャンディを焼き払っていく。

そんな中で今、戦場の最前衛を務めている魔法少女——クラウディア・ゼツケンドルフは、その筋骨隆々とした体に秘められた力を、特質である「自己強化」の魔法で増幅し、魔法星装であるメイスをタイプ・クツキーの脳天に振り下ろしていた。

ぐしやり、と、何かがひしゃげ、砕ける音と共に頭部から縦に圧縮されたかのように

潰れて碎けるタイプ・クツキーに対して、クラウディアの視線は冷淡そのものだ。

「うふ、また一つゴミの掃除ができましたね〜？ 安心してください、貴方のお仲間も、全部、ぜーんぶ、ゴミらしくゴミ箱送りにしてあげますからあ」

クラウディアの表情は、その物騒な言動に反して不気味なほどに爽やかで鮮やかなもので、慈母のような笑みを浮かべながら、彼女の自慢のメイスは無慈悲にも大型の敵星体を真っ向からその力でねじ伏せていく。

暴力。

クラウディアという魔法少女を一言で表すのならば、それに尽きるだろう。無垢に地球の平和と人類の友好を信じる傍らで、その障害となる敵星体を殴殺し続ける。

敵が理解不能、対話不能の存在であったからいいものの、これがもし人間同士の争いであったのなら、と、背中を預ける立場にある結衣やアリスたちも、その異様な光景には、戦慄を禁じ得なかった。

「つたく、おっそろしいぜ……結衣とかいったな！」

「うん、私の名前はそうだけど」

「さっさと畳んでバカンスの続きと洒落込むぞ、あたしに続け！」

「……わかった。行くよ、絵理」

「……は、はい……っ！」

幸い、群れの前面に展開されている敵星体はタイプ・キャンディやタイプ・クッキーが大半であり、変異体の存在も確認されていない。

その最後方に控えている超巨大敵星体が、今のところは何もせず漂っているだけで、何を考えているのかわからないのが不気味ではあったものの、仕掛けてこないというのであれば、こちらから仕掛けるだけのことだ。

結衣は大量の思考誘導弾を展開し、縦横無尽に空をかけるタイプ・キャンディを、脳内でいくつかの塊にわけて撃ち落とす。

結衣の魔法が思考によるミサイルのようなのだとすれば、絵理が今放とうとしている魔法は無差別の殺戮兵器に等しいものだ。

人間を治療する魔法、という概念を反転させて、「敵星体を殺す毒」へと定義付けしたその魔法は、大型の個体には効果が比較的薄いものの、小型や中型の個体であればほとんど時間もかけずに朽ち果てるほどに強力なものだった。

「……………これ……………」

か細く弱々しい絵理の声とは対照的に、リング状の形を形成して放たれたその「毒」は、彼女に群がろうとしていた無数の敵星体を飲み込んで、活性化しすぎた細胞が膨れ上がるかのように、或いは体液が沸騰したかのようにぼこぼことその躯体を泡立たせ、破裂に、或いは消滅に導いていく。

結衣のサクラメントバスターは貫通力に優れ、それなりの範囲も巻き込める魔法だったが、絵理の「毒」が持つ殲滅能力は、アナスタシアの魔法にも匹敵するものであり、久々にそれを拝んだ結衣は、思わず息を呑んでいた。

「やるじゃねえか、第一世代！ けどな、あたしたちも負けてらんねえんだよ！」

アリスは魔力によって無限に生み出される弾丸を絶え間なく銃身から吐き出させながら、口元に獐猛な笑みを浮かべて叫ぶ。

彼女の魔法特性は「付与」であり、ただの銃弾を、絵理と同じように敵性を殺す毒の塊に仕立て上げたり、或いは焼き尽くす炎に変えたりと、応用性が極めて高いものだ。今はアリスも「毒」の弾丸を選択しているようだが、驚くべきは魔法少女だからという理由ではなく、純粋な射撃の腕で一射一殺を実現していることだった。

各管区における最強の魔法少女を集めた、という触れ込み通り、沖繩を守るための戦力は過剰なものだとも思えたが、未だ背後に控えるだけで何もしてこない超巨大敵星体の不気味さを考えれば、これだけの面子を揃えてようやく、というのが正直なところなのだろう。

結衣は思考誘導弾と杖の先から展開する光の刃による合わせ技で、自身に迫り来る敵星体を塵へと還しながら、今はただ空を漂っているクラゲのような何かを一瞥する。

『聞こえるか、マジカル・ユニット及び各管区における魔法少女諸君！』

砲撃を続けている「オケアノス」からオープンチャンネルで開かれた通信から聞こえてきたのは、諏訪部の声だった。

『連邦本部は現時点での巨大敵星体を「タイプ・ホールケーキ」と認定、優先殲滅目標へと指定した！こちらもできる限りの火力支援を行うつもりだ、該当する個体の殲滅を頼む！』

諏訪部は通信機に向けて声を張り上げつつ、東山艦長が砲撃班に指示を下す声を聞く。

最悪のシナリオとしては、やはり「オケアノス」の艦首に装備されている二連装タキオン粒子砲を地上で放つ、ということになるだろう。

しかし、魔法少女たちであれば、全管区の中から選りすぐりで集められた彼女たちであるならば、その最悪のシナリオを回避することができるとは思えない。

そんな信頼を胸に抱きながらも、年端もいかない少女たちに戦いを任せているという、その責任を丸投げしているという情けなさに諏訪部は唇を噛んでいたが、どうしようもないものはどうしようもない。

頼られて悪い気はしない、とまではいわなくとも、自分たちがやるしかないということ、結衣は最初から覚悟の上でこの戦場に立っている。

クラウディアと合流したアンジェリカが、そのハサミのような魔法星装でタイプ・

クッキーを両断するのを見届けながら、結衣は思考誘導弾で二人を背後から狙うタイプ・キャンディを排除していた。

『第二波、来ます！』

『迎撃用意！ 間違っても魔法少女たちに当てるんじゃないぞ！』

第一陣が片付いたかと思えば、「タイプ・ホールケーキ」と認定された超大型敵星体の触手が、さながら指示を下すようにじゅるり、と伸びて、その前面に佇んでいた変異体を含む群れを、魔法少女たちへとけしかけろ。

——真正面からの戦いを挑まれているのだろうか？

結衣の中に、一つの疑問が湧き起こる。

タイプ・ホールケーキの戦い方に限らず、最近戦った敵星体からしてそうなのだが、3年前はどこまでも機械的に人類を殲滅しにかかっていたはずの彼らに、言語化できない変化が起きていることを、結衣は感じ取っていた。

それはともすれば、人間的ともいえるようなもので、ただ人類の殲滅を目的としているにもかかわらず、非合理的な手段をわざわざ敵星体を選んでいるその理由は、どう考えても理解できるものではない。

それとも、他のところに目的があるのだろうか。

思考が横道に逸れてきたのを咎めるように結衣は首を小さく振ると、目の前で鎌を振

り下ろそうとしていたタイプ・クツキ、「蠅螂」級を、光の刃で縦一文字に両断する。「……考えてる場合じゃない、か」

油断をすれば、第一世代だろうが第二世代だろうが、他の何かであろうが、死神は平等にその鎌を首元へと突きつけてけたけたと笑う。

身構えていれば、死神を遠ざけられるというわけではない。しかし、その覚悟を固めることぐらいはできる。

それが戦場における一つの仕組みなのだ、自分に強く言い聞かせ、結衣は変化する敵星体のことを今は頭の中から振り払い、第二波として戦場に雪崩れ込んできた敵の群れを薙ぎ払ってゆくのだった。

## 58. 魔法少女、奮戦す

「はあああああつー！」

魔力を纏ったアンジェリカの魔法星装が、背中の羽を広げて飛び回る変異体、蠅螂級を両断して塵へと還す。

そして、背後の守りは任せろとばかりに、巨大化したタイプ・クツキーの変異体が「爪」を射出しようとしたところに、クラウディアのメイスが炸裂し、その巨体をひしゃげさせ、押し潰す。

ここに揃っているのがいかに第一世代、第二世代最強の魔法少女たちだとはいえ、巨大なダンジョンから丸々溢れ返ってきた群れを撃退するのは、並大抵のことではない。戦力の逐次投入は戦術における愚策だとされているが、あのタイプ・ホールケーキはどうも意図的にそれを行っているところがあると、アンジェリカも直感的に理解していた。

「もしかして、消耗戦が狙いのですの……？」

「ふふ、私たちが疲れたところを一気に片付けようとは、ゴミにしては小癪なことを考えていますね〜？」



——皆殺しだ。

アンジェリカの言葉を聞いた直後に、クラウディアは穏やかな微笑みを浮かべたかと思えば、一転して底冷えがするような声で、その言葉を舌先に乗せる。

この規模の群れを相手にするのであれば、覚悟していなければならぬことだったが、結衣の思考誘導弾を、そして絵理の「毒」を、「オケアノス」による火力支援を受けて尚、その数を減らす気配がないのであれば、こちらとしても切り札を切らされるのは想定していたことだった。

「メタモルブーストー」

クラウディアがその解号を唱えれば、彼女の魂は高次元に至る星の炉へと焼べられて、己を贄にその魔力は今までとは比較にならないほど強く、強く燃え盛る。

しかし、メタモルブーストは諸刃の剣だ。

自分の魂がどれだけの燃料になるかは魔法少女によって大きく異なり、その限界が来た時、魂は消滅して身体は灰になって消えていく。

そのリスクを理解していながらも、クラウディアは膠着した戦局を打破するためにメタモルブーストを使ってみせたのだろう。

しかしそれは、相手の策に乗せられたということなのではないか。

根拠はない。だが、アンジェリカはどうにも、彼女に続いてメタモルブーストを今こ

の瞬間に切ることができそうになかった。

もしも敵の狙いがメタモルブーストを使用させて、魔法少女たちの魂を燃やさせる——本当に消耗戦を狙っているのだとすれば、奴らは、敵星体は正しくこの沖繩に集められたのが、各管区最強の魔法少女であるということを理解している、ということになる。だとしたら、それは何故なのか。

メタモルブーストを起動したことにより、第一世代魔法少女の通常形態——恒星体と呼ばれるフォームを凌駕する力を見せているクラウディアは、メイスをただ敵陣でがむしやりに振り回すだけで、変異体やその取り巻きを衝撃波で木っ端微塵に打ち砕いていく。

「クラウディアの奴、張り切りやがって……！ だつたらこつちも行くしかねえよなあ！ メタモルブースト！」

「……同意はできない、けれどこのままでは埒が明かないのも理解はできる……メタモルブースト」

クラウディアに触発される形でその身を恒星体から彗星体へと変化させる、己の魂を星の炉へと焼べる解号を口にしたアリスとアナスタシアもまた、凄まじいまでの魔力を手に、敵星体を駆逐していく。

強化化した「付与」の魔法はアリスの弾丸に地獄の業火を纏わせて、同時にブースト

されたアナスタシアの魔力はその氷の魔法を絶対零度の領域まで高め上げる。

己の存在を削り、燃やすことを代償とする代わりに、メタモルブーストは魔法少女たちに大いなる星の加護と、高次元からの力を分け与えることが可能なのだ。

蠟螂級の鎌を魔法星装で受け止めて、返す刀でその胴体を切り裂くと、アンジェリカも深呼吸をして、状況を俯瞰する。

火力支援は十分なほどに行われているが、敵の数は膨大で、空を埋め尽くすほどに敵星体は群れをなしている。

その全てを殲滅するためには、極東管区からの援軍を待つという手段も考えられるが、その間にもあのタイプ・ホールケーキは二波、三波とその群れをけしかけてくるのだから、どの道、待つているのは不毛な消耗戦でしかない。

ならば、迷っている場合ではない。

西園寺の家に生まれた者として、魔法少女に選ばれた者としてその身を立てるために、その証とするために、自分は戦場に立っているのだ。

ならば、やるしかない。

それが未来の可能性を贅に捧げるような行いであつたとしても、今ここで犬死にするよりは遥かにマシなのだから。

アンジェリカは強く自分に言い聞かせ、アリスたちに続いてその解号を口にす。

「……メタモルブースト、ですわー!」

瞬間、自らの内にある魂と高次元との接続はより強固に補強され、アンジェリカは文字通りに己の中で何かが燃え上がるような感覚を抱く。

溢れる魔力が光の形を取って、魔法星装の刃に覆い被さるのを見届けながら、彗星体へと変じたアンジェリカもまた、その一薙ぎで多くの敵星体を殲滅し、前へ、前へと歩みを進める。

アリスたちは、そのリスクを理解していなかったわけではない。

確実に自分の存在が削られていくような感覚を抱きながら、やつとか、とばかりにメタモルブーストを起動させたアンジェリカを一瞥し、アリスは、己の内側に湧き起こる激流のような情動に任せて、トリガーを引いていた。

自らの特質である「付与」の魔法が強化されたことで、一発一発が小型のナパーム弾とも呼ぶべきものに変質したアリスの弾丸は、変異体と通常体の区別なく、敵星体を貫いて爆発、炎上させる。

悶え苦しむかのように身をよじる蠅螂級に向けて、いい気味だとばかりにアリスは皮肉な笑みを浮かべると、次のターゲットを探して引き金を引き続ける。

「アブソリュート・ヌーリ」

名前によって定義づけられた氷の魔法はよりその結果を強固なものとして、アナスタ

シアが呟くと同時に周囲の敵星体を瞬く間に凍結させ、その活動を停止に追い込む。

文字通りの絶対零度によって凍結させられた個体は通常体も変異体もその区別はなく、絵理の「毒」にも匹敵するか、あるいはそれ以上に苛烈な結果をもたらして、アナスタシアは白く染まった息を夏空に立ち上らせた。

——過小評価しすぎていた。

そうとでも言いたいのか、魔法少女たちをただ見つめていたタイプ・ホールケーキは口惜しげに咆哮を上げる。

敵星体の狙いが、消耗戦にあることは間違いなかった。

しかし、メタモルブーストがどれほどの力をもたらすか理解していなかったタイプ・ホールケーキにとって、クラウドイアたちの戦力が一気に跳ね上がったのは、予想以上に驚異的だったのだ。

このままでは作戦が崩れかねないと、焦りを見せた敵は、一気に戦力を投入する方向に舵を切ることに決める。

最後衛に陣取っていた「飛竜」級を含めた本命の群れを一気に差し向けて、魔法少女たちを追い込まんと、最後の攻勢に出たのである。

「……りゃあ……敵さんも相当頭に来たってか?」

「……数ですり潰しに来たのね」

アリスとアナスタシアは、思わず弱音を吐きかけた。

だが、それを一喝するかのように振るわれたクラウディアのメイスが、アンジェリカの魔法星装が振るわれたことで千切れ飛んでいく敵星体だったものが、二人を正気に立ち返らせる。

「呆けている場合ではありませんわ、ここを乗り切らなければ死ぬのはわたくしたちの方ですわよ！」

「うふふ、ゴミ相手に死んだとあつては死んでも死に切れませんかね？」

幸い、結衣たち第一世代はメタモルブーストを使わずに敵を倒すことができているらしい。

ならば、戦力的にこちらが絶対的な不利を背負っているわけではないということだ。

例えばそれが気休めに過ぎないとしても、アンジェリカたちは自分にそう言い聞かせて、突撃してくる敵星体を片っ端から燃やし、凍らせ、打ち砕き、切り裂いていく。

それが未来を天秤の片側に捧げた代償に見合う結果を導くと信じて、そして、人類が生き残る未来のために、第二世代魔法少女たちは命を燃やし、奮戦し続けるのだった。

## 59・魔法少女、あり得ざる邂逅

第二世代魔法少女たちがメタモルブーストという切り札を切ったことで、膠着していた戦況は徐々に連邦防衛軍側へと傾き始めていた。

人智を超える力を手にした魔法少女を更なる高みへと引き上げるその行為には、大いなる代償が伴っているものの、切り札というものは切れる時に切らなければ意味がないのだ。

力をただ持っていることだけに価値があるのは、相手が言葉を交わせる存在だった時だけだ。

敵星体との対話が不能である以上、どちらかが倒れるまで、どちらかが根絶やしになるまでこの戦いが終わることはない。

「ジャッジメント……!」

それを理解しているからこそ、結衣は僅かでも早く戦いが終わるように、アンジェリカたちの魂を燃やす時間が少なくて済むようと、名付けによって補強された光の刃を翼のごとく身に纏う。

その羽の一枚一枚が、並の敵星体を死に至らしめる刃であることは、ここにいる魔法

少女の誰もを知る通りだ。

広域殲滅、近接戦、対大型戦——全ての領域において「最強」の名を冠する魔法少女こそ、小日向結衣に他ならないのだから。

光の刃は天蓋のない青空を飛ぶ飛竜級の身体を覆う紫水晶の鱗を、熱したナイフでバターを切り分けるがごとく、容易く切り刻み、その肉体を塵へと還す。

「……援護します、結衣さん……！」

「お願い、絵理！」

しかし、ゼネラリストとスペシャリストであることには大いなる隔たりが存在する。

結衣が展開する、裁きの名を持つ「光の刃」は思考誘導弾よりも威力が強化されているものの、一撃一撃が大きいためにその隙もまた同じだという弱点を抱えている。

故にこそ、結衣が撃ち漏らした個体を、あるいは「光の刃」を受けてまだ息がある変異体を確実に殺すため、絵理はその毒を、敵星体だけを殺す力を躊躇いなく振るう。

絵理は、結衣のためならば、その命すら天秤の片側に躊躇なく乗せられる人間だ。

そういった意味では、彼女は結衣より脆いが、結衣よりも強靱であるといえた。

対して結衣の脆さは、全てを、戦場における命の全てを救おうとするその在り方と、ステイアただ一人のために戦うという理由の矛盾によって生まれたものだといえる。

最強だと、原初にして頂点の第一世代といくらおだてられたところで、人間一人の両



腕に抱え込めるものなどたかが知れているのは、いうまでもないことだ。

それでも、たった一人の犠牲も良しとしない結衣の在り方が頑迷なほどに変わらないのは、その生死を問わず、今まで関わってきた人々の願いや祈りによるものであるといえる。

願いとはいわいであり、祈りもまた同義である。

ここまで積み重ねてきた犠牲を無為にしないためにと、ここまで歩いてきた足跡を消さないようにと願う意識が心を苦しみに縛りつけ、戦い続けろと叫んでいるのだ。

天蓋や壁があつたダンジョンとは異なつて、飛竜級の脅威は解放された空間、そして遮蔽物や守るべきものがない海上というロケーションにおいて、結衣にとっては極めて低いものだった。

杖の先から展開した光の刃が、吐き出された炎のブレスを両断し、そのまま縦一文字に飛竜級を天から地へと撃ち落とす。

「流石は第一世代最強つてとこだな！ あたしも負けてらんねえなあー！」  
なあ、そうだろ。

虚空に向けて叫びながらアリスが引くトリガーが、銃口から吐き出される弾丸が、未だしぶとく残り続けるタイプ・キャンディやタイプ・クツキーといった小物から、結衣の刃によって翼を斬り落とされた飛竜級といった大物までを燃やし尽くす。

その傍らで、同意を求められたアスタシアは渋々といった具合に白く染まった溜息を吐き出しながら、絶対零度の凍結で敵星体の群れを次々に壊滅へと追い込んでいく。巨大なダンジョンから丸々一つ這い出てきた群れであったとしても、今沖繩を目指すのは愚策だったといえよう。

あのタイプ・ホールケーキが率いる群れは、わざわざ、全管区から集められた最強の魔法少女たちが雁首を揃えている中に突っ込んできたのだ。

魔法少女を過小評価しすぎていたのか、あるいは沖繩に何か敵星体を引きつけるものがあつたのか、その理由は不明なままだ。

しかし、どちらにしてもあのクラゲのような敵星体がとつた行動は無軌道で、愚かなものだ。

東山艦長は、「オケアノス」のブリッジから主砲を投射する指示を下しながら、未だ自分から何かをすることはしないタイプ・ホールケーキを睨みつける。

敵星体を愚かだと断定することは簡単だ。

だが、どうしてかはわからなくとも、わざわざ沖繩に突っ込んできたのだから、そこには理由や動機といったものが存在していなければならぬ。

敵星体には知性がある、というのが「ラボラトリ」の見解であり、加えてそれは高度化の一途を辿っている、というのが宮路真宵の予測だった。

ならば、隠している何かがあるはずなのだ。

艦長席の隣で直立している諏訪部も同じことを考えていたのか、東山と交錯した視線の中には、明らかな敵への不信が滲んでいた。

「敵さん、何を隠しているかね？」

「わかりかねますね」

「だろうねえ……どちらにしろ、ろくなものじゃあないんだろうが……」

生真面目な諏訪部の返答に、東山は苦笑を浮かべる。

しかし、敵星体が何かしらろくでもないものを隠している、という見解そのものは一致している、ということに、嫌な予感を覚えるのは半ば必然だといえた。

戦場において、いい予感と悪い予感が並んだのなら、大体のケースで的中するのは後者の方だ。

どちらも経験に基づいたものだとしても、いい予感というのはそこに意識的であれ無意識であれ、期待が、樂觀が滲んでいる。

対して、悪い予感というのは常に最悪のケースを想定する、思考にマイナスのバイアスがかかっている時に芽生えるものだからこそ、今が危機であると認識しているからこそ、よく当たるものなのだ。

それが一般論かどうかはともかくとして、東山の持論であり、彼がそれを戦場の摂理

として敵星体との地獄の戦いを、船乗りとして生き抜いてきた理由の核であることは確かだった。

そして、その予感は見事に的中することになる。

「エリユシオン——星罰——」

言葉が、走った。

誰の、と、結衣が身構えたその時には戦場を文字通りに斬り裂く縦一文字の一撃が炸裂し、「オケアノス」の魔力障壁とぶつかり合つて火花を散らす。

幸い、オケアノス級の巨体が積み込める呪術回路は容量が大きく、第二世代魔法少女に相当するだけの魔力を確保することができているため、その一撃によつて轟沈する、ということとはなかったものの、主砲の何本かはへし折れて、あるいは蚕食されたかのようになじわじわと「何か」に蝕まれて熔け落ちていく。

飛来した「それ」が何であるのかを真つ先に理解したのは、不幸にも結衣だった。

自身の特質である「光」と対を成す、この世の全てを否定する特質。

それは、もうこの世に存在しない「魔法」のほずで。

「ッ!!!」

何事かを口走った存在の方に、結衣が言葉にならない叫びと共に振り返れば、そこには、彼女を幾分か幼くしたようなあどけない顔立ちの少女が、自身とよく似た意匠のゴ

シックロリータに身を包み、虚ろに佇んでいる姿があった。

——間違いない。

だけど、どうして。

魔法星装を持つ右手に汗が滲み、理解不能な、いくつもの感情をバケツの中に溶かしたカクテルをぶちまけたかのような思いに、心臓が早鐘を打つ。

恐怖、不信、否定。真つ先に立つ感情と、その奥に潜む懐かしさと愛しさが矛盾を起こして、結衣はその身を震わせる。

「どうして……」

「——星罰——失敗——沈黙——」

「どうして、芽衣がここにいるのよ!!!」

それも無理はない。

何故なら、結衣の目の前にいたのは、幼い日に永遠の別れを果たしたはずの、魔法少女に変身したその日に、とどめを刺し損ねた敵星体に食いちぎられて命を落とした妹と、瓜二つの姿をした何かなのだから。

あれが芽衣ではないことなど、他でもない結衣が一番よくわかっている。

妹は死んだ。もういない。

しかし、今日の前に、妹と同じ特質の魔法を使いこなし、謔言のように何事かを掠れ

た声で口走る「何か」が、少なくとも、魔法少女と推定できるものがある。

これが悪夢ではなく、なんだというのか。

スティアの言葉と、芽衣らしきものが口走った言葉が符合することも忘れ、結衣は怒りと悲しみが緋い交ぜになった激情に身を任せ、光の刃を振りかぶるのだった。

## 60. 魔法少女と過去からの侵略

結衣が芽衣——彼女の妹らしき何者かに向けて「光の刃」を振るった理由は、感情が何もかもを置き去りにして先走っていたからに他ならない。

「っ、あああああッ!!」

芽衣は、いい子だった。

ちよつとぼんやりして抜けたところこそあつたけれど、自分より強く、アニメの中で動いていた魔法少女に憧れて、その役を独り占めしたがる癖はあつたけれど、誰よりも優しく、そして感受性が豊かな子だったのだ。

そんな芽衣が、二つ下の妹が死ななければならなかった理由は、あつけないほど単純なものだった。

結衣の「光」と対を成す特質である「闇」の魔法を身につけて、魔法少女としても最強の力を手に入れたはずの妹は、魔法少女に変身するという夢を叶えたことに浮かれてしまつて、とどめを刺しきれなかったタイプ・キャンデイにその下半身を食いちぎられる形で死んだ。

『おねえちゃ……わたし、魔法少女に……なれてた、かな……』

自らのドジを省みて苦笑を浮かべながら、次第に体温を失っていく柔らかな手の感触を覚えている。

たった一瞬、たった一秒。

もしもあの時、自分も初めての戦いに気疲れすることなく、芽衣をつけ狙っていた生き残りの存在に気付いていたら。

その刹那の時間が妹という、かけがえのない存在を失う引き金となったことこそが、今の結衣を形作っている願いと祈りの器としての、真つ直ぐに歪んだ在り方の原点だったといつてもいい。

だから、妹のことだけは何かあっても忘れるまいと、何かあったとしても心に刻んで、思い出と共に、背負った罪と共に生きていこうと決めていたのに、目の前にあるものは、なんだ。

「うあああああッ!!!」

結衣の叫びは、もはや言葉の形を成すことはない。

存在そのものが心の傷に覆い被さる瘡蓋を引き剥がして、その傷口に手を突っ込んでかき回すのにも等しい痛みを与えてくる敵星体のやり方に、そして、一度のみならず二度も妹を殺さなければならぬという事実、結衣は涙を滲ませながら、がむしやらに「光の刃」を振るう。



それを見たタイプ・ホールケーキはその大口を開けて——嗤っていた。

げぎやぎやぎや、と何かが擦り合わされたかのように不快な響きを立てながら、クラゲもどきの哄笑が戦場に轟く。

「なんだ……？　何があつたんだ、おい！」

「……わ、わかりません……結衣さん……？」

「……どうやら使い物にならなそうだけど、こっちは残りを引き受けるだけで手一杯……」

妹のことは、誰かに話したわけでもなかった。

昔、妹がいて、今はいない。

話をしたとしても精々そのレベルであつて、言い方こそ悪くともその程度の悲劇は、巷にありふれたものだったからこそ、誰も気にすることなく——否、傷口に触れようとせず、見ないふりをしてきたのだ。

結衣が振りかざす「光の刃」と芽衣らしき何者かが振りかざす「闇の刃」が激突し、夜空を彩る花火の如く火花を散らす。

「それにありや……魔法少女、なのか？　だとしたら、なんで敵星体と一緒にいやがるんだ……？」

「うふふ、ゴミと一緒にいればそれはゴミと同じこと、だからさっさと殺しちゃいませよ

う〜?」

結衣の狂乱を、見るに堪えないとばかりに吐き捨てたクラウディアがメイスを構えて芽衣らしき何者かへとその鉄槌を下そうとした瞬間だった。

『Ooooooooooooooooohhhhhhhh!!』

沈黙していたはずのタイプ・ホールキーが咆哮を上げ、無数に伸びる触手の先端から、明らかに結衣だけを除ける形で魔法少女たちに電撃を浴びせかけたのだ。

「くっ、このゴミが……よくもやってくれましたねえ……」

身構えていたアンジェリカやアリス、アナスタシアはそれを回避することに成功していたものの、直撃を受けたクラウディアは魔力障壁を突き破られて、電撃が走る感覚に血反吐を吐き散らす。

しかし、メタモルブーストによって増幅された身体能力は即死を免れさせ、ぎりぎりではあったものの、彼女を生き永らえさせていた。

「この分じや援護しようにもやりようがねえ! いいかてめえら、あたしらはあのクラゲもどきを叩くしかねえってことだ! 腹括りやがれよ!」

「……言われるまでもないわ」

「……っ、結衣さん……」

この戦場で最も冷徹に状況を俯瞰していたのは、アリスだったといえよう。

先行するも、だいぶ失速しているクラウディアを支援するかのようには魔力を付与した弾丸をばら撒きながら、後方支援型のアナスタシアと絵理が攻撃を当てるための囷となる。

結衣の火力を抜きにしてこの超巨大敵星体を倒せるかどうかについては疑問符がつくものの、できるかどうかの話ではなく、やるかやらないかという話なのだ。

やらなければ死ぬのなら、死力を尽くして今を生き抜く他にない。

それは魔法少女たちが暗黙の内に共有する誓いのようなものであり、アリスたちもまた、従っているということだった。

身構えている時にも、身構えていない時にも死神は容赦なく訪れて、その首にひやりと冷たい鎌をかける。

だが、身構えていればその分だけ覚悟ができる。

だから、身構えていないよりは幾分かマシだ——兵士たちが語る戦場の摂理に、少女たちは従って、果敢にも超巨大敵星体へと挑みかかっていく。

そして、狂乱に身を灼かれていた結衣は、いつもの彼女らしからぬ大振りな攻撃の際を突かれる形で、最適化された機械のように振るわれる芽衣らしき何かに手傷を負わされていた。

「なんでッ!!! 　なんで、芽衣が……ッ!!!」

「——星罰——人類——失敗——」

「答えてよ!!! 答えなさいよ!!!」

「……なんで、こんなッ!!!」

芽衣らしき何かは、結衣の叫びと共に投げかけられた問いに答えることはない。

ただ謔言のようにいくつかの単語を口ずさむだけで、虚ろな瞳には結衣の姿すら映してはいないのだろう。

何故、死んだはずの芽衣がいるのか。

何故、敵星体と共に芽衣がいるのか。

何故——もしも目の前にいるものが、芽衣の形をした敵星体だとしたら、「魔法」が使えるのか。

胸中をよぎる疑問はどこまでも果てしなく、しかし答えが返ってくることはない。

その理不尽に抗うかのように結衣は光の刃を振るい続けるが、感情だけが先走った攻撃が、どこまでも冷徹に、機械的に振る舞う存在に通用しないこともまた、戦場の摂理である。

大上段に振りかぶった一撃で、芽衣らしき何かを持つ魔法星装を打ち払おうと結衣は、辛うじて残された理性の断片でそう判断するが、あからさまな狙いは、相手に容易く悟られるものだ。

下段からのカウンターによって「光の刃」を弾き返された結衣は、無防備な胴体を敵

前に曝け出すことになる。

「いかん、あのままでは——！」

「主砲は！」

「ダメです、全部やられています！」

なんとか「オケアノス」のダメージコントロールを終えて、戦いを観測していた東山たちは結衣を援護しようとして試みるも、一番弾速のある主砲が全てあの「闇の刃」によって打ち払われてしまった今、援護できる火器は弾着の遅い艦首魚雷くらいしかない。

ここで第一世代魔法少女を、結衣を失うわけにはいかない。

できることもないのにブリッジを飛び出そうとしていた諏訪部の焦りが伝播したのかそうでないのか、それが訪れたのは無慈悲に結衣の胴体へと「闇の刃」が食い込まんとしていた、まさにその瞬間だった。

二人の間に割って入る白銀の直刀が——スティアをホテルまで送り届けてから出撃していた美柑が、闇の刃を受け止めて、結衣の命を繋ぎ止めていたのだ。

「ごめん、遅れた！ でも今から取り返すかんね、結衣！」

「……………あ、あ……………？ 美柑……………？」

「……………何があつたか知らないけどさ、しつかりしなよ！ 結衣は、アタシたちの中で一番強いんっしょ！ 勝手に思ってるだけかもしれないけどさ、中途半端なアタシよりずつ

とクールで強いのが結衣なんだから、こんなところで死んだりしないでよね！」

魔力を解放し、「名付け」を行うことでその強度を引き上げた美柑の魔法星装が、「シユテルンダイト」が、それでも夜空を圧縮して一つの質量に織り上げたかのような刃の前に悲鳴を上げる。

美柑は、自分が中途半端な——いつてしまえば結衣の下位互換であることを自覚していた。

どの距離でも敵を選ばずに戦えるといえは聞こえはいいものの、絵理のような広域殲滅に特化しているわけでもなく、近接戦闘においては第二世代魔法少女であるアンジェリカと大して変わらない。

だからこそ、結衣にはクールでいてもらわなければ困るのだ。

第一世代魔法少女の中で、「原初の七人」の中で何故自分が生き残れたのかを美柑は知っている。

中途半端だからだ。

今のアリスと同じように広域殲滅を得意としていた亜美にも、結衣よりも近接戦闘に特化していた美琴にも及ばないからこそ、そのバックアップに回る分、魂の「猶予」が多い。

ただ、それだけのことだ。

無理やり力を込めて「闇の刃」を弾き飛ばすと、美柑は芽衣らしき何かに向けて、特質である「炎」を込めたりボルバークァノンを発砲し、結衣との距離を引き剥がす。

戦わなければならない。

それは、過去と。

結衣は、最愛の妹と同じ姿をした何かを、涙で霞んだ目で見据えながら、再び同じ過ちを繰り返すことがないように、「光の刃」を展開する魔法星装を握りしめるのだった。

## 6 1. 魔法少女と一つのお別れ

美柑が放つたりボルバークanonによる一撃を魔力障壁で防ぎつつも、その衝撃までは殺しきれなかった芽衣らしき何かは、大きくのけぞって姿勢を崩す。

今ならば魔力障壁の効果も薄れていると、そう確信を持った結衣は思考誘導弾を周囲に展開し、芽衣らしき何かに向けて撃ち放った。

本当ならば、引き金を引きたくなどない。

芽衣はもう死んだのだと、この世にはいなくて、あれは敵星体に味方する、妹と同じ姿をした何かでしかないとわかっていても、結衣にはまだ、躊躇いが残っていた。

無意識に食いしばった歯からはぎり、と軋むような音が鳴り、瞳の奥にじわりと滲んだ熱が滴り落ちる。

それは心が流す、透き通った血液だ。

一度は自分が自分のことで手一杯だったために死なせてしまった、いつてしまえば自分の至らなさが殺してしまった妹を、今度は自分の手で殺さなければならぬ。

その事実は美柑に叱咤をぶつけられても、結衣の中でそう簡単に割り切れるものではなかったのだ。



だが、やらなければやられる。

芽衣らしき何かは、自分のことを姉だと認識している様子はなく、殺戮機械のように瞳のターゲットスコープに収めた己の敵を殲滅するため、敵星体と同じ理屈で動いているのに過ぎない。

そんなことはわかっていた。

誰に言われなくとも、目の前にいる何者かの姿が誰であつたとしても、きつと結衣の指先は、引き金を引くことを躊躇して震えていたはずだ。

放たれた思考誘導弾は、直線的な軌道を描く途中で拡散し、四方から芽衣らしき何かを包围する陣形を組んで炸裂した。

もしもここで結衣が放つていたものが、「名付け」によって補強された、裁きの名を冠する光の刃であつたとしたら、あるいは戦いに決着がついていたのかもしれない。

しかしその僅かな躊躇いが判断を鈍らせたことで、思考誘導弾が炸裂する頃には芽衣らしき何かは魔力障壁を回復させて、再び体勢を立て直す。

「——静寂、調和——人類——」

「芽衣の顔で、芽衣の声で……意味のわからないことを語らないで!!!」

芽衣らしきものが、何が言いたいのかはわからない。

あくまでも語られるのは断片だけであり、その繋がりには途絶しているからだ。

しかし、芽衣は、芽衣が生きていたのなら、そんなことを語るはずがない。

結衣の激昂は魔力を更に引き出して、心の中で裁きの名を唱えることで、光輝く刃をざっと十枚、天使が広げる純白の羽のように展開してみせる。

「エリユシオン——先史——宇宙——」

「訳のわからないことを！」

光輝く刃の操り糸を手繰るかのように、結衣は十枚全てを思考誘導弾のように望む陣形へと整えると、同じように芽衣らしき何かを展開してきた「闇の刃」を掻い潜って、零距离へと飛び込んでいく。

僅かな躊躇いを、血の赤に染まった記憶を今だけは忘却の彼方に置き忘れたかのように、結衣は目の前にいる何者かが芽衣と同じ顔と姿をしているという事実を切り離して、「光の刃」を、敵の魔法星装へと叩きつけた。

この期に及んでも、人間というものは身内で殺し合うことを忌避するものなのだ。

そうとでも言わねばかりに、メタモルブーストをかけた第二世代魔法少女たちを翻弄していた、タイプ・ホールケーキは、結衣を嘲笑うかのように哄笑を上げる。

『Kyokkyokyo……Ah huh!!』

「この悪趣味野郎……『メテオライト』！」

クラゲもどきの悪辣な態度に怒りを煮やした美柑は、アリスが触手から放たれる電撃

のターゲットを買って出てくれているという戦況を確認し、「炎」の特質を込めたりボールパークの全弾を、タイプ・ホールケーキへと見舞う。

『Gyo——!?!』

美柑は己のことを中途半端な魔法少女と自虐しているものの、第一世代として生まれたその魔力は、第二世代以降の魔法少女たちとは一線を画するものがあり、そんな彼女が「名付け」によってその定義づけを行つた魔法星装から放たれる弾丸は、クラゲもどきの傘に直撃して燃え盛っていた。

結衣と芽衣をぶつけて殺し合わせるのは、タイプ・ホールケーキが「学んで」いたことだ。

生きながらにして身を焼かれる苦痛にもんどり打ちながらも、超巨大敵星体はその命の火を絶やすことなく、立ちほだかる敵への怒りに変えて、触手から放たれる電撃を強化する。

人間というのは憎み合い、殺し合う生き物であるはずなのに、それが身内となれば徹底的なまでに争うことを忌避する——人間が生まれ持った性質を理解していたからこそその作戦、そのはずだった。

しかし、タイプ・ホールケーキに失策があるとすれば、それは魔法少女たちを過小評価しすぎていたことと、よりにもよって各管区で最強の魔法少女が一堂に介する沖

縄へと侵攻してきたことに尽きるだろう。

「はあああああつー！」

「うふふ……潰れて死ね……ゴミが……！」

メタモルブーストによって第一世代魔法少女相当までその魔力を高めたアンジェリカの持つ、ハサミのような魔法星装が触手を断ち切り、怒りに燃えるクラウディアのメイスが、デフォルトで備えられた衝撃吸収能力を上回る重さで振るわれる一撃を、タイプ・ホールケーキの脳天へとお見舞いした。

想定外、予想外。

あらゆる言葉を並び立てても、結局のところは全て自らの失策に還元されると理解しからの、敵の行動は早いものだった。

傘の中に隠していた触手から、芽衣と同じように虚ろな瞳をした魔法少女らしき何かを数人解き放つと、それを後ろから援護していた絵理とアナスタシアにけしかける。

「もどきをまだ隠してやがったか！ けどな、あたしは生憎引き金引くの躊躇いなんかないんだよな、これが！」

タイプ・ホールケーキがけしかけた魔法少女もどきは、あくまでも第三世代相当の個体ではない。

それは、重慶のダンジョンで得られたリソースのほとんどが第一世代である芽衣を再

現することと、自身を生み出すことに割かれていたためであり、いわば彼女たち「もどき」は、その名の通り、星屑のような存在なのだ。

だが、人間は顔が見えなければ躊躇なく殺し合うが、顔が見えれば途端に躊躇いが生まれる、不完全な生き物であると、タイプ・ホールケーキはそう学習している。

どこまでも歪で、不完全。

それこそが人間という生き物の本質だ。

その事実を証明するかのように、最強と呼ばれた魔法少女であるはずの小日向結衣は、たった一人の敵を排除するのに多大な時間を空費している。

十枚の羽は光の剣。

結衣はその一枚一枚に確固たる決意と覚悟を乗せて振るっていたはずだった。

しかし、芽衣らしき何かは、その攻撃パターンを学習し、同じく十枚展開した「闇の刃」でその攻撃を防いでいる。

「このままじゃ、埒が明かない……!」

「——星罰——」

「……ごめんね、芽衣……!」

目の前にいるものが芽衣ではないと理解していても、結衣の唇は押し寄せる罪悪感から、自然とその言葉を、謝罪を紡ぎ出していた。

生半可な覚悟であるのなら、最初から戦わずに死んでいた方がよっぽどマシだ、というのは、戦場における摂理として結衣もまた理解していたことだったが、眼前に対峙する存在が、かつての、最愛の妹を模しているということは、予想以上に結衣の壊れかけた心を蝕んでいたのだ。

いつそのこと、全ての感情が鈍麻していたのならば、どれだけマシだったことだろう。楽しいことや嬉しいこと、幸せから人は先に失っていつて、後に残るものはいつだって悲しみや後悔、そして怒りだけだ。

青痣のように残る感情に任せて、結衣は十枚の羽、「光の刃」をもつて、「闇の刃」を打ち払うと、深く構えた魔法星装を携えて、全力で芽衣らしき何かへと突撃する。

「メタモルブースト……はあああああつー！」

その間にも脳裏をよぎるのは、いつも一緒だった、何をするにも一緒だった、愛しくも失った時間の記憶。

本当に、アニメのような魔法少女になることを夢見ていた心優しい妹との安らぎのひとときは、もう二度と帰ってくることはない。

『お姉ちゃん、わたしね！ いつか、正義の味方に……魔法少女になるの！』

小学校に上がって、学年を重ねてもその夢を手放さなかった、「魔法少女は人助けをするものだから」と率先してボランティアに励んでいた芽衣の姿が、結衣の脳裏にフラッ

シユバックする。

夢見た魔法少女とは、正義の味方でもなんでもない。

星と契約を結んだ、地球に隷従するだけの存在で、軍の管理下に置かれた強大な力、その一つの在り方でしかないものだ。

そんな現実を知っていたら、芽衣は何かが変わっていただろうか。

——きつと、何も変わらないだろう。

メタモルブーストを併用した捨て身の一撃によって、芽衣らしき何かの胴体に突き立てた光の刃は、いとも容易く魔力障壁を貫いて、深々とその内臓を、骨を、その特質である「光」へと還元して分解してゆく。

きつと今も生きていたなら、正義の味方を、正しい魔法少女を指摘して生きていたのであろう妹の似姿から嘔き出る血液にまみれながら、結衣は小さく「ごめんね」と繰り返す。

「…………ごめんね…………ダメなお姉ちゃんで、ごめんね、芽衣…………」

何が最強の魔法少女だ。

何が、原初の七人だ。

「あ…………ああ…………うあああああつ!!!」

力を失い、だらりと脱力して光に還っていく芽衣らしき何かの亡骸を抱きしめて、そ

の冷たくなっていく体温を両腕に抱きながら、結衣はただ慟哭する。

自分がやったことは、またも身内を、敵星体に味方していたとはいえ、人間らしきものを殺したことに他ならないのだ。

「——星罰——審、判——お、ねえ、ちや——」

痛かっただろう。苦しかっただろう。

そんな死を、二度も妹に与えたのが、自分という存在だ。小日向結衣という魔法少女であり、出来の悪い姉なのだ。

芽衣らしき何かの亡骸が、光の中に還っていくのを見届けて、己の魂を星の炉に焼べながら、結衣は全ての元凶であるタイプ・ホールケーキを睨みつける。

殺してやると、ただその思いだけで心火を燃やし、結衣は妹が燃え尽きた光の塵と返り血をその身に浴びて、突撃するのだった。



## 62. 魔法少女、心火を燃やせ

人を殺して憎まれるのは、自分だけで十分だと、そう思っていた。

アリスは敵がけしかけてきた第三世代魔法少女らしき存在の心臓や脳天へと弾丸を叩き込みながら、あくまでもトリガーハッピーを装って高らかに笑う。

その結果がアナスタシアに獣を見るような目で見られることになったとしても、同業者から不信を買うことになったとしても、この役目だけは自分が引き受けなければならないと、アリスは決意していたのだ。

「エリュシオン——審判——裁定——」

「訳わかんねえことうだうだ言ってんじやねえ！ くたばりな！」

両手に携えている魔法星装「メテオール」の名を呼び、その定義を補強しながらアリスは次々に魔法少女もどきを撃ち落とししていく。

あるいは、この役目を負うのであれば敵星体に並々ならぬ憎しみを抱くクラウディアが適任なのかもしれないが、憎悪だけで殺されるのも堪ったものではないだろう。

アリスは敬虔な信徒ではない。

しかし、自らが撃たねばならなかった人間の冥福を、神に祈るくらいの素朴な信仰は

持ち合わせていた。

「そうだ、憎まれ役は自分ぐらいで丁度いい。」

いつかはその報いが来るとしても、地下都市の中でもスラムと化した街区で育ったアリスにとって、殺戮と暴力は日常茶飯事であり、だったら、他の誰かが地獄に行くぐらいなら最初から地獄に生きてきた自分がその任務を引き受ければいいだけだと、そう考えて、大胆不敵にアリスは笑いながら、トリガーを引き続ける。

しかし、どうにもお節介というものは、世話を焼きたがる存在というのはどこの世界にもいるものだ。

正面の魔法少女もどきを狙っていたアリスの背後に迫って、金槌の魔法星装を手にしていた個体が魔力障壁ごと彼女の頭を粉碎しようとしていたその瞬間だった。

「——星罰——失敗——りか、い——」

「油断するんじゃないやありませんことよ！」

「ちっ……借り作っちゃまったか」

「そういうことですよわ！」

極東管区に所属しているオッドアイの魔法少女、アンジェリカ・A・西園寺が魔法少女もどきの胴体を両断し、その返り血を浴びながらも、果敢に、電撃を放つタイプ・ホルケーキの触手をも返す刃で斬り落とす。

アンジェリカの噂についてはアリスも多少は知っていた。

武勲を求めて戦場を駆ける、自分とは違う性質ながらもどこか似通ったところがある魔法少女だとは聞き及んでいたが、敵が人間の形をしていても躊躇しなかつた辺りは、その通りなのだろう。

借りを作ってしまったことに表面上は舌打ちをしつつも、命を救われたことに感謝して、アリスは残された魔法少女もどきの掃討に専念する。

その様子を「オケアノス」のブリッジから観測していた諏訪部は、恐れていた最悪の事態が起こったと、浅黒く焼けた肌を青ざめさせていた。

「………妙だな」

「ふむ………妙とは？」

「………何もかもですよ、東山艦長。今起きている出来事は、我々の理解を超えている」

敵が魔法少女を伴って現れたことは、当たり前だが前代未聞の事態で、しかも敵星体のように光に還っていくだけではなく赤い血が通っている。

それが何を意味しているかは、隣にいる東山にも容易く察せられた。

加えて、それだけではない。

タイプ・ホールキーは先ほどから電撃を触手の先端から放ち続けているものの、それによって自らの質量を崩壊させた形跡を持たない。

以前にお台場に現れた、タイプ・シヨカラータの変異体は質量を熱量に変換することで遠距離攻撃を行っていたのにもかかわらず、だ。

もしもここに真宵がいたのならば、嬉々として自説を謳い上げていたのだろうが、口に出してしまえばその「最悪な可能性」が確定してしまうようで、諏訪部は口を噤むほかになかったのである。

「……そうだなあ、理解を超えてるよ。敵星体が現れた頃からな」

「……艦長？」

「あまり気負うなよ、諏訪部大佐。最初から全部ありえないことなんだ、誰のせいでもない。だがな、どんな可能性が待ち受けていたとしても、俺たちは生きて、腹を括って戦わにやならん」

そうでなければ、死んでいった魔法少女たちに、兵士たちに、そして船乗りたちに申し訳が立たないとばかりに、東山は軍帽を被り直しながら、微かな後悔と共に呟く。

もはやこの戦いは、後戻りできないところまで来てしまった。

目の前で起きている事態の全容が呑み込めずとも、ただならないことが起きているのだとわからないほど東山秀という男は愚鈍ではない。

そのために3年間、地球連邦防衛軍は軍備の増強を続けていたのだし、魔法少女たちの負担を少しでも減らそうとして、呪術甲冑の開発発にも手を挙げて賛成したのだ。

しかし、今の現状は、魔法少女たちだけを頼りにしなければいけないという始末である。

「艦首魚雷、用意！ 間違っても魔法少女に当てるなよ！」

「艦首魚雷、装填しました！」

「撃てえっ！」

それを歯痒く思いながらも、できる限りの支援をしようと、東山は艦首魚雷の装填を命じて、タイプ・ホールケーキへと照準を合わせて六発を一斉に撃ち放った。

魔力によるオーバーコートが施されていても、主力級航宙戦艦を弄べるほどの巨体が相手であつては、タキオン粒子砲以外の武装は、例え主砲が生きていたとして、焼け石に水だといつてもいいだろう。

しかし、水をかけないよりは少なくともいいはずだとばかりに、放たれた艦首魚雷はプログラムに従つて、空中に佇むタイプ・ホールケーキへと直進していく。

「好機到来、ですわ！」

アンジェリカは「オケアノス」から艦首魚雷が発射されたのを確認すると、即座に宙返りをする形で姿勢を整えて、メタモルブーストによって増幅された「強化」の特質を持つ魔法を魚雷へと付与していた。

クラウディアとアンジェリカの扱う魔法の特質は似通っていないながらも、その線引きは他者にもその法則が適用できるかどうかで大きく分かれる。

あくまでもクラウディアは自分自身を、そしてアンジェリカはあらゆるものを対象に取って、「強化」を施すことができる。

『Voooooooooooooooooo!?!』

魔法によってその威力が引き上げられた魚雷の着弾は、タイプ・ホールケーキにとつても堪ったものではなかったらしく、苦悶の呻き声を上げながら、クラゲのような巨体を揺らしてもんどり打つ。

付け入る隙があるならば、今ここしかない。

それは誰に言われたわけでもなく、しかしながら示し合わせたかのように、全ての魔法少女が同時に判断していたことだった。

「メタモルブースト！　お願い、『シユテルンダイト』！」

「うふふ……砕け、『メテオライト』……！」

『アブソリュート・ヌーリ』

メタモルブーストを起動させた美柑は右手に携えた「シユテルンダイト」を携えて、クラウディアはそのメイス型の魔法星装である「メテオライト」を、各々の得物を構えて、一気呵成にタイプ・ホールケーキへとトドメを刺さんとばかりに必殺の一撃を放つ。

例えそれが規格外の巨体であったとしても、どれほどのリソースを消費して生み出された存在であったとしても、各管区の中でも最強と称えられる魔法少女たちによる一斉攻撃を受ければ、身構えていたとしても防ぎ切れるものではない。

敵星体が展開した障壁を上から押し潰すように、魔法少女たちの放った攻撃は殺到し、タイプ・ホールケーキの質量を斬り裂き、抉り取り、粉々に砕いてゆく。

『OoooooooooAhhhhhhhh!!』

それでも咆哮をあげて、倒れることがなかったのは敵星体の中にも意地という概念があるからなのかどうかはわからない。

しかし、あれだけの攻撃を受けて尚、死に至ることはないというこのタイプ・ホールケーキという存在が、どれだけ規格外かというのは魔法少女たちも嫌というほど理解させられていた。

「まだ生きてやがんのか……!」

「そのようですわね、しかし……!」

「……お願ひします、結衣さん……!」

だが、規格外の存在を抱えているのはこちらも同じ話なのだ。

芽衣らしき何かをその手にかけて結衣の心は鉄の箱に押し固められたかのごとく、揺らぐことはない。

今、結衣を突き動かしているのは、純粋な敵星体への怒りと憎悪だった。

たとえ、それが何かを生むことなくとも、たとえそれで何かが変わるわけなどなくとも、その怒りが、憎悪が、人類にとつての「敵」に向けられている限りは正しくそれは義憤となり、その旗の下に正当化される。

こいつがいなければ、自分は二度も芽衣を殺すようなことはなかった。

こいつがいなければ、スティアが怯えることもなかった。

だから全てはこいつが悪い——それが極めて八つ当たりじみた感情であると理解していながらも、結衣は心火を燃やし、己の魂を星の炉に焼べて、必滅の一撃を撃ち放つ。「サクラメント……バスター！」

迸る閃光が、結衣の怒りを形にしたかのように猛り狂い、そして爆ぜる。

その後に残ったものは、何もなかった。

メタモルブーストによって増幅されたその魔法に、真っ白な閃光に全てが呑み込まれ、タイプ・ホールケーキは、塵も残さず消え失せたのだ。

「……やったよ、芽衣……スティア……私は、殺したよ……敵を、倒したんだよ……」

最初から敵星体など存在していなかったかのように、相対する全てを光に還した上で、結衣はその唇を引きつらせ、虚な笑みを、その出来損ないを浮かべるのだった。



## 63. 魔法少女と深まる疑惑

「終わったか……」

「そのようですね」

「結局、俺たちは彼女たちに頼らざるを得なかった。これは一種の敗北だと見ているよ」  
タイプ・ホールケーキの反応が消失したことを認めた東山は、ぼつが悪そうに溜息をつく。

オケアノス級航宙戦艦も、78式呪術甲冑も、全ては魔法少女たちにかかる負担を少しでも減らそうと開発された兵器であることに間違いはない。

だが、敵星体の脅威を人類は見誤っていた、ということになる。

いつもは飄々としている東山がいつになく、苦渋をその表情に滲ませているのを横目に見た諏訪部も、それは変わらなかつた。

半ば禁断の手段であるメタモルブーストを切らされるほどに強力な敵星体の出現が意味していることは、この3年間で敵もまた、沈黙していたわけではないということだ。

結局のところ、人類は、自分たちも含めて勝利に胡座をかいていた、ということになるのだろう。

「……それに加えて魔法少女がどういう理由か敵に味方している、いや……」

「蘇生……いや、微弱な敵星体反応があったということは、複製されている、ということかね」

「そうなるでしょう」

結衣が狂乱しながらも、血と涙にまみれながらもその手にかけて芽衣らしき何かの身体には赤い血が通っていた。

それは、敵星体が魔法少女の情報を何らかの手段で入手した上で、何らかの手段で複製した——確証がない以上、憶測に憶測を重ねる他にないのだが、少なくとも小日向芽衣が故人であることは、連邦政府のデータベースに登録されている。

ならば、死人が生き返ったなどと考えるよりは、敵星体反応があったことも鑑みればまだ、なんらかの手段で故人である魔法少女が敵に複製された可能性の方が遥かに高い。

問題は、どのようにして、なぜ、という絡線が何一つ見えてこないことなのだが。

諏訪部は苛立ちと後悔が緋い交ぜになった感情をしかめっ面に浮かべながら、魔法少女たちが「オケアノス」へと帰還してくる姿をモニターで観測する。

この規模の戦いにおいて、一人の死人も出さなかつたのは、幸いであるといえるだろう。

しかし、魔法少女たちは虎の子であるメタモルブーストを切らされた上に、絵理の回復魔法によってその傷は癒されているものの、クラウドディアは魔力障壁を貫かれるほどの衝撃をその身に受けている。

本当に、綱渡りだ。

誰がいつどこで死んでいても、おかしくはない。

そんな状況で、自分たちは安全圏から魔法少女たちの戦いを見ていることしかできないというのは、東山にとっても諏訪部にとっても、ただ歯痒いばかりだった。

しかし、そこで腐るのではなく、歯を食いしばって、諏訪部たちは未曾有の脅威に、迫り来る悪寒に爪を立てるかのように、続く言葉を紡ぐ。

「敵星体はおそらく、重慶から来たと見て間違いないでしょう」

「うむ……しかし、そうなると敵が『巢』を放棄してまで沖繩を攻撃することを選んだことといい、複製された魔法少女といい、正直なところ、考えが追いつかん」

それに加えて、戦闘記録の中で複製された魔法少女——仮称、複製体が壊れたテープレコーダーのように呟いていた言葉に関しても気にかかる。

指折り数えた不条理に、暗澹たる予感が諏訪部たちの胸中を満たしていくものの、こればかりは極東管区に情報を持ち帰って、「ラボラトリイ」の分析に、真宵の手腕に期待する他にない。

帰還してくる魔法少女を受け入れるために艦底部のハッチを開く指示を下しながら、東山は収まりが悪そうに、頭上の軍帽を頻りに整えるのだった。



戦いを終えた後に浴びるシャワーが心地よいのは、血生臭く汚れた手を洗い流してくれる気がするからなのだろうか。

結衣は「オケアノス」への帰還を果たすと、そのまま無言でシャワールームへと向かっていった。

汗を流すために、あるいは血を雪ぐために降り注ぐぬるま湯の雨に身を任せる。

そうして、結衣は二度も殺すことになってしまった妹のことを、そして芽衣らしき何かが頻りに呟いていた単語のことを思い返す。

「……エリユシオン」

奇しくもそれは、少し前にスティアの口から飛び出てきた単語と符合していた。

それが何を意味するのかはわからなくとも、この符号が決しているものではないということを、逆立つ神経がただ告げる。

あれが、偽物であることはわかっている。

とはいえ、死人が生き返ったのではないとわかっていると、似姿であったとしても、この手にかけることしかできないかった妹のことを考えれば、荒んだ心が今にも狂乱しそうになるのを止めることはできそうにない。

敵星体がどこから来て、何をしようとしているのかはまるでわからないものの、奴らが進化しているということを、これまでの経験から、結衣はわかっていた。

「あの敵星体……魔力を使っていましたわね」

結衣の隣で同じく黙りこくってシャワーを浴びていたはずのアンジェリカが、ぼつりとそう呟く。

実際、彼女のいう通り、今までにおける敵星体の攻撃は大体のケースが物理攻撃に偏重していた。

例外的に、東京湾に現れたタイプ・シヨコラータの変異体や飛龍級の存在が挙げられるが、彼らは自身の質量を熱量に変換する形での攻撃をしていたのだ。

対して、今回相対したタイプ・ホールキーは最初から触手に電撃を纏わせて放つという芸当を、自壊することなく成し遂げている。

そこにあった微弱な魔力反応は、敵が魔力を使っていることの証明としては十分すぎた。

複製された魔法少女たちには微弱な敵星体反応が混ざっていたのとは正反対のケー

スだが、どちらにしてもこの現状がろくでもないものであることに違いはない。

「スティアさんの予知が間に合ってくれたから良かったものの……少しでも遅ければ大惨事でしたわ」

「……そう、だね」

アンジェリカは込み上げる安堵にほっと胸を撫で下ろしたが、結衣の胸中にはただ、ささくれ立った痛みが走るだけだった。

考えるなど、何度も何度も頭の中で言い聞かせても、最悪な想像が頭の中をよぎってゆく。

正体が芽衣らしき何かであったとしても、芽衣と同じ顔と姿をした相手をこの手にかけたという事実と、スティアの語った「エリユション」という単語が、複製された魔法少女の口からも飛び出てきたという符号。

そこに付随する予感、結衣一人で抱え込むにはあまりにも重すぎるものだった。

自分は、スティアを疑っている。

信じたいと願っているのに、心の中では敵星体とスティアの間に何かの関わりがあるのではないかと疑ってしまう。

それだけで、胸の内側でうずくまる心は、ナイフでずたずたに切り裂かれたかのような痛みに悲鳴を上げるのだ。

それだけで頭の中が埋め尽くされているのに、敵が魔力を使ってきたという事実には追いつけられれば、もはや何を言葉にしてもいいかもわからなくなる。

「敵星体が魔法を、ねえ……だとしたら連中、どうやってんなもんを身につけたんだ？」  
「まさか、アタシたちと同じように変身してるとわけじゃなさそうだし」

敵星体に関する推測や憶測はいくらでも出てくるものの、やはりそこには「どのように」と「なぜ」が虫食いになったかのような穴が穿たれていて、それ以上考える手を止めさせてしまう。

アリスも美柑も、釈然としないといった表情を浮かべてはいるものの、あの電撃によつてタイプ・ホールケーキが自己崩壊を起こす様子は確認されていない。

その上、魔力反応を確認したのだからそれを否定する材料がない、ということは、二人とも理解している様子だった。

「……なんだか、とても嫌な予感がします……」

絵理はぞくりと背筋を這い回った悪寒に身体を震わせながら、今にも消え入りそうな声でぼつりと零す。

事実は、人間が思うよりも緩慢に進行するものだとな誰かがいつていたが、逆に楽観的であればいるほど、事態というものは悪化の一途を辿ると相場が決まっている。

この3年間で、人類は自分たちが思っているよりも戦局を楽観視しすぎていた。

そして今、そのツケが回ってきたということになるのだろう。

勘弁してくれと、そう叫びながら床に風呂桶を叩きつけたい衝動に駆られたのをぐつと堪えて、結衣はシャワーの栓を閉じ、無言で更衣室へと戻っていくのだった。



## 64・魔法少女、揺れる心

「結衣……！」

その後、主砲が全滅している「オケアノス」では閣僚や官僚の帰り道における護衛の任を果たせないということで、南米管区での合同任務から帰還していた三番艦「オラシオン」に同乗すべく結衣たちはホテルに戻っていた。

客室で待機していたステイアは、寂しかったとばかりにその、覗き込む角度によつて色を変える不可思議な瞳にじわりと涙を滲ませながら、結衣の胸へと飛び込んでいく。

「……ステイア……」

「結衣は、怖くなかった……？ ステイアは、怖かった……でも、結衣が怖くなくしてくれた。ステイアは、それが嬉しい」

無垢に微笑む彼女の瞳からは、悪意や敵意の類は微塵も感じ取ることができない。

もしもステイアが敵星体と何らかの繋がりを持っていたとするなら、この行為も、言動もマッチポンプに過ぎないのだろうが、そこまで疑いを深くできるほど、結衣という人間は歪んでいなかった。

それが正しいのかどうかはわからない。

軍人として、軍属の人間として、外患を誘致している疑いのある人間に疑いの目を向けきれないのは、致命的な欠落といえる。

しかし、同時に疑念を抱いてしまえば、それを完全に捨て切ることができない中途半端さを持ち合わせているのが、結衣という人間の欠点でもあった。

スティアを疑いたくないと心がいかに叫び続けようと、冷徹な意識が、「エリユシオン」という一つの符号を見落とすなど囁き続ける。

揺れ動く心と意識の間で板挟みになりながら、スティアの体温を受け止める結衣の横顔には、暗い影が差し込んでいた。

疑うな。疑え。

二つの言葉間を延々とループし続ける自意識が焼けつくような感覚に苛まれながら、結衣はその息苦しさから逃れようと、半分は無意識の内に口を開く。

「……ねえ、スティア」

「なに、結衣……?」

「えつと……スティアは、『エリユシオン』が何なのか、わからないんだよね?」

結衣の問いに、スティアは頭上にクエスチョンマークを浮かべながら、どうして、とばかりに小首を傾げた。

しかし、以前夢に見た中で、自分を呼ぶ声が頻りに語っていたその言葉に、スティア

は聞き覚えがあるような気がしていたのもまた確かだった。

それを知っているか知らないかで判断するのならば、知らない、というのが答えになるのだろう。

導き出された結論に従って、ステイアは結衣へとその通りの言葉を語る。

「ステイアには、わからない……ステイアは、知らない……でも、どうして……？」  
「……えつと。ううん、なんでもないの。ステイアの記憶が戻るのに役に立てばいいかなって、そう思っただけ」

苦し紛れに舌先から走り出した嘘の痛みが胸の内側をかき乱されながら、結衣もまた曖昧な笑みを浮かべて、ステイアの言葉にそう返す。

——ひどい欺瞞だ。

押し寄せてくる自己嫌悪に足首を掴まれて、後悔の沼へと引きずり込まれながら、結衣は抱きとめたステイアの体温という蜘蛛の糸に縋り付く。

本当にその言葉が真実で、ステイアと敵星体の間には何の関わりもなくて、彼女はただちよつとだけ不思議なだけの女の子。

結衣は同じ支給品のシャンプーで洗った髪の毛から粒子と共に漂う淡い香りを吸い込む度、そんな儂い期待に、可能性に賭けてしまいたくなるのだ。

しかし、結衣がステイアを心の支えにしているということを知っていても尚、疑いの

目を向けるのが諏訪部という軍人の仕事だった。

諏訪部はスティアの口から「エリユシオン」という単語を聞いてはいない。

しかし、結衣がマジカル・ユニット入隊の時に提示した条件の中で語っていた「敵星体の襲撃を言い当てる力」に疑いの目を向け始めていたのだ。

結果として、東京は二度救われて、沖縄も、そこに集う閣僚や官僚といった最重要人物らを守ることはできている。

諏訪部は、ジnkクスを信じない男だ。

故に、スティアを保護していたのは結衣の精神を安定させるため、以上の理由はない。敵星体の襲撃を言い当てる力が彼女にあるというのなら、三度襲撃を言い当ててみせたのは必然ということになる。

偶然は三度も続かない、というのが諏訪部進という男が掲げる信仰のようなものであり、その理論に従うのなら、スティアは本当に敵星体の襲撃を予知する力を持っている、ということだ。

——そう、スティアという個人がいる範囲で。

この地球において、人類が敵星体から奪還できた国土はおよそ三割といった風情である。

故に、ダンジョンにこもっていない「はぐれ」の敵星体が前線基地へ襲撃をかけてく

ることはほとんど日常茶飯事といっても差し支えはなく、もしもステイアがそういう予知能力を持っているならば、それらについて何も感知していないのは不自然だ。

逆説的に考えれば、「ステイアがいるところに敵星体の襲撃がある」、つまり、彼女は何らかのビーコンなのではないかというのが、諏訪部の組み立てている仮説だった。

「……疑わしきは罰せず、か」

しかし、それとて確証があるわけではない。

一度極東管区に戻って「ラボラトリ」に追加でステイアの身体検査や周辺調査を行ってもらおうくらいしか、何らかの証拠を得る方法がない今、表立ってステイアに疑いを向けることは、結衣の精神状態を鑑みて、デメリットにしかならない。

特に、彼女は敵に複製された妹をその手にかけているのだ。

涙を零しながらステイアを抱きとめる結衣を一瞥して、参ったとばかりに諏訪部は、溜息をつきながら肩を竦めた。

「……一応は身内なんだ、疑うことはしたくないものだがね」

しかし、もしもステイアが敵星体と繋がっているという証拠が手に入ったとしたのなら、その時は裁判を略式的に受けてはもらうものの、銃殺すらその選択肢に入れなければならぬ。

妻だった女が諏訪部を嫌っていたのは、そういう冷徹さが、人を人と思って扱わない

ことができる一面を持っていたからだった。

左手の薬指に残る指輪の跡に触れながら、諏訪部は、今は何も語るまいとばかりに、待機を命じられた客室へと引き返していくのだった。

その様子を眺めていたステイアは、彼の背中から漂う剣呑な空気にびくり、と身を震わせて、結衣の身体をより強く抱きしめる。

「どうしたの、ステイア？」

「……大佐は、怖い。ステイアは、疑われてる？」

「っ……」

諏訪部がどこまで何を知っているのか結衣はわからないが、表立って疑念を向けていることだけはわかる。

そして、他の魔法少女たちも、言葉にはしていないだけで、少なからず敵星体の襲撃を言い当てたステイアに対して、疑いを向けていることは確かだった。

唯一、例外的に、極東管区に所属している美柑と絵理、そしてアンジェリカはそれ彼女の特質であると理解しているために、平然とした表情で言葉を交わしているものの、逆にいえば、アリスたちは容赦なくステイアを疑っているということだ。

「……ステイアは、疑われるようなことなんてしてないよね？ だから、大丈夫」

「うん……ステイアは、何もしてない……」

「なら、きつと大丈夫だよ……きつと……」

ぎゅつ、とスティアを抱き締める度に、涙が瞳から零れ落ちてくるのは、結衣の心がそれだけ擦り切れていることの証だった。

人肌に触れるだけで、体温を感じるだけで涙を零してしまうのは、生きていた頃にそうしていた相手の似姿を殺してしまったことへの罪悪感からきているものだ。

しかし、それを差し引いてももう、結衣という人間の精神状態は限界に近い、というのが、アリスの見立てだった。

「……何も言わないの?」

胡散臭い「奇跡」を起こしてみせたスティアを一瞥しながら、アナスタシアは小声でアリスへとそう問いかける。

「言えねえよ、仮にもしそうだったんならあたしがぶつ殺す、今はそうじゃねえんだろ」  
「……優しいのね」

「皮肉か? まあクラウディアの奴より、イカれちやいねえよ」

クラウディアは唯一、スティアが敵星体の襲撃を予知する場面を見届けていなかったために、沖縄を防衛できたという事実の上機嫌だが、もしその場を見ていたらこの場で疑いを向けたスティアを殺してしまいかねないほど、彼女の憎悪は異常なものだった。

しかし、そうでもしなければ生きていられないのだろう。

魔法少女だ、ワルキューレだ、マギヤソルダートだ、マギカドラグーンだと各管区で微妙に呼び名こそ異なっても、同じ「星の悲鳴」を聞かされた存在は、必然として心を摩耗させる戦場へと飛び込むことになる。

初陣で死ねたのならば、それは幸いだ。

生き続けることほど、地獄を見届け続け、一足先に自由を手にした同胞たちの亡骸や、空の棺を見送り続けることほど心をすり減らすことはない。

それが、アリスの抱く哲学のようなものだった。

それでも生きなければならぬのは、これが人類という種と敵星体の生存をかけた戦いだからだ。

地獄を生き抜いた先にパラダイスが約束されているとは限らない。

それでも、死んでないだけ、生きているだけまだマシだと自分に言い聞かせる他にないのだ。

「……本当に、死んでないだけマシなのか」

「さあ、わからないわ。少なくとも私は……姉を殺された恨みで戦っているもの」

「そうかよ」

「でも、生きていなければ、言葉は交わせない」

普段からいがみ合っていたのだとしても、と付け加えて、アナスタシアもまた用意さ



れている客室へ、踵を鳴らして戻っていく。

「……んだよ、気持ち悪いいな」

遠回しな好意の表明なのか、あるいは口喧嘩をすることでストレスの発散ができるからなのかは、アリスにはわからないし考えたくもなかったが、あのアナスタシアがここまで感傷的になるのも、珍しいことだった。

もしもあのステイアという少女を撃たなければならぬ時が来たとして、その役目をアリスが買って出るのは、管区の違いから難しいだろう。

それでも——来ないのが一番だが、来てしまったのなら、いの一に銃殺役に志願するつもりで、アリスもまた部屋へと向かう。

憎まれっ子は、一人だけでいい。

「……そうだな、生きてる分だけマシかもしれないねえけどな、気の毒すぎて何も言えねえんだよ」

優しすぎる故に、素朴な感性を持っているが故にこの戦場で地獄を見続けている結衣を一瞥すると、アリスは指先でカードキーを弄びながら、静かにそう呟くのだった。

## 65. 魔法少女、傷む心

ステイアにかかっている疑いと、それが似姿に過ぎないとはいえ、妹をこの手にかけてたことに対する罪悪感は、拭おうと思っても拭えるものではない。

ホテルのベッドに身を投げ出した結衣は、滲む涙をパジャマの袖で擦りながら、頭の中を回遊魚のように泳ぎ回る疑念と、自責の念に押し潰されようとしていた。

わかつている。

本当ならば、ステイアの夢の中に出てきた「エリュシオン」という言葉が敵の口からも飛び出してきた時点で、諏訪部に報告しなければならぬということ。

しかし、ステイアの身体からは、複製された芽衣と戦った時に感じた敵星体反応——「星の悲鳴」が聞こえないのだから、単なる偶然である可能性も否定できない。

それが楽観的な考えであることは、結衣も承知の上だ。

もしかすればステイアは予知能力を本当に持っている、夢の中で「エリュシオン」という声に呼ばれたというのも、この沖繩で起きる出来事を予期してのものだったのかも、しれない。

全てに確証がないのだから、そう考え直すこともできる。

それでも、最悪の事態を想定するのなら、もしもスティアと敵星体の間に何らかの繋がりがあるのだとしたら、その時自分はどうするのか。

何ができるのか。

震える手でスーツケースの中に隠された、護身用の拳銃を取り出して、結衣は安全装置を外さずにそれを虚空に向けて構える。

スティアをマジカル・ユニットに引き込んだのは自分の責任だ。

ならば、もしもの時が訪れたなら、その際に引き金を引くべき人間が誰であるかというのは自明の理である。

「……撃ちたく、ない……」

結衣は両目の端に涙を湛えながら、虚空に向けた拳銃をだらりと下ろす。

頭の中をよぎるのは、軍を一時的にクビになっていた時に過ごしていたスティアとの時間。

渴き切った心に彩りを取り戻してくれたのがスティアという存在で、その無垢故の知りたがりな性格や、言葉にどれだけ自分が癒されてきたかわからない。

もちろん、結衣はスティアと敵星体の間に繋がりがあるといふ疑惑は、そこに確証がないという理由で否定しているつもりだ。

だが、確証がなくとも、何かパズルのピースが嵌っていくかのように、「エリュシオン」

という符号は不穏な、破滅をもたらす予感を抱かせる。

だからこそ、身構えていなければならない。

最悪な事態が起きた時に、覚悟を決めておくためには、それが戦場に求められる能力であり、死神の鎌を紙一重で逃れるための方法だと、軍人たちは口を揃える。

それでも、結衣は一人の少女だった。

拳銃をスーツケースにしまい直すと、結衣はおもむろに立ち上がって、涙を拭いながらスマートフォンとカードキーを手に部屋を出ることにした。

なんということはない。

じつと蹲っている時に嫌な考えばかりが浮かんでくるのなら、歩いていれば少しはマシになるのではないかと、そう考えただけの話だ。

ステイアにかかる疑念を無理やり自分に言い聞かせることで一時的に拭いても、今度は芽衣の、妹の似姿を手にかけたという事実が鎌首をもたげて、結衣の心に襲ってくる。

部屋のオートロックが作動したことを確認しつつ、裸足の上に履いたスリッパで、ぺたぺたと無駄に長い廊下を歩む。

(おねえ、ちゃ——)

芽衣らしき何かは、否、敵星体に複製されたのであろう芽衣は、その末期に自分のことを呼んでいた。

その身体には赤い血が通っていて、「光」の魔法がいかに対象を熱量で分解する性質を持つていたとしても、刃をその柔らかい肉体に突き立てた瞬間のことは、感触は、今も生々しく結衣の両手にこびりついている。

殺した。誰が。自分が。

殺した。誰を。妹を。

敵星体反応が確認された時点で、既にあの複製されたのであろう芽衣を助けるという選択肢は存在しなかった。

例え無理やり取り押さえて「オケアノス」に連れ帰ったところで、意思疎通が不可能な状態で、かつ敵星体反応が出ている存在を庇い立てられる道理など、存在するはずがない。

だからこそ、自分は正しいことをしたのだ。

事実として、結衣の選択は、間違っていないかった。

芽衣が最期に姉の名を呼んだのも、恐らくは記憶関連に強固なプロテクトがかけられていて、死の瞬間にのみようやく解放されるという悪辣な仕組みを敵星体が用意していたからで、きっとその死をもってしか、妹を呪縛から解放することはできなかつたからだ。

その行いは正しいと、誰もがきつと結衣をそう称えるだろう。

しかし、正しさが常に優しさと共にあるとは限らない。

修羅場を潜り抜けた魔法少女であるとはいえ、まだまだ幼い子供に過ぎない結衣にとって、その選択はあまりにも過酷で、非道なものだった。

思考をフラッシュバックに蚕食されながら、結衣はふらふらと、あてもなく廊下を彷徨い続ける。

そうして、気付けば辿り着いていたのは、宿泊施設に特有の強気な値段設定がなされた自販機のコーナーだった。

ぶうん、と、断続的に低い唸りを上げる冷蔵機能の作動音を聞きながら、結衣は清涼飲料が並んでいる隣に並んだ、アルコール類が軒を連ねる自販機に視線を向ける。

大人はどうしてもやりきれなくなったとき、アルコールを飲んでひっくり返るといふ選択ができるらしい。

厳格に育てられた結衣は、今まで一口だって酒の類を口にしたことはない。

故に、そのアルコール度数9パーセントという数字がどれほどのもので、どんな味わいなのかは想像の産物でしかなかった。

だが、きつと皆が好き好んでいるのだから美味しいに違いないのだろう。

そんな安直な考えを抱くと共に、震える結衣の右腕は、無意識に、スマートフォンを握りしめ、アルコール類が提供されている自販機へかざされようとしていた。

「だ、ダメ、です……！　結衣さん……！」

「あ……絵理……？　私、何を……」

しかし、必死に声を張り上げた絵理が、すんでのところでそれを引き止める。

絵理が自販機コーナーを訪れたのも、また偶然の巡り合わせでしかなかった。

喉が渴いたから何かを飲もうかと部屋を出たその時に、結衣が酒を購入しようとして

いる姿が目についたのだから、青天の霹靂もいところだ。

「……そ、その……やっぱり、辛い、ですよね……」

「絵理……？」

「……わたしには、結衣さんの……全部が、わかるわけじゃ、ないです……でも、その……」

結衣さん、敵の魔法少女を倒した時……とつても……辛そうな顔をしてました」

戦況を俯瞰していた絵理だからこそ、見えていたのだろう。

震える手、眈に滲む涙。そして濃く目元に刻まれた隈。

結衣の事情はわからなくとも、客観的に見て、彼女がもはや限界を迎えつつあるということは、容易く見て取れる。

「……妹、だつたんだ」

「……結衣、さん……」

「……殺した……私が、妹を……芽衣を、この手で……ころしたんだ……」

がくり、と膝から崩れ落ちて、光の消えた瞳から涙を零し続ける結衣の姿は、人類を救った英雄という肩書きからは程遠く、絶望の前に打ちひしがれる、ただ一人の少女でしかなかった。

だが、絵理はそこに失望を抱くことなく、まるで自分のことのように涙を滲ませると、頰れた結衣の身体を抱きとめて、その涙に寄り添い続ける。

それが全てを癒せるなどと、そんな傲慢を絵理は抱いていない。

ただ、五百円で買えるビニール傘のように、少しでもその涙の雨から、結衣のことを守りたかった。同じ雨に立ち濡れたかった。

本当にただ、それだけのことだ。

「…………絵理…………えり、い…………っ…………」

「…………大丈夫です…………だいじょうぶ、です…………結衣、さん…………」

もはや、結衣には、人が善意という名で呼ぶ、目の前の温もりに縋り付く以外の選択肢は存在しなかった。

絵理の豊かな胸元に顔を埋めて、子供のように泣きじやくりながら、その手にかけて妹の名を、結衣はただ呼び続ける。

絵理は敬虔な信徒のように、殉教者のように、結衣の懺悔をただ、ありのままに受け入れて、その悲しみに寄り添うかのように涙を零す。



自販機が低い唸り声を立てる狭苦しい区画は、さながら聖堂のように厳かな悲しみに包まれていた。

しかし、それを見届けていたのは、結衣と絵理の二人だけではない。

物陰に隠れて息を潜めていたのは、奇しくも絵理と同じ理由で飲み物を買おうとしていた、ステイアだった。

「結衣は、泣いてる……ステイアは、悲しい……でも、絵理と一緒に泣いている……ステイアは、胸が苦しい……？」

流れるままに涙を流し続ける二人の様子を陰から伺いながら、ステイアは胸の奥を針で突かれたような痛みに、その表情を曇らせる。

その感情がなんという名前をしているのかを、ステイアは知らない。

だが、それが痛みを伴うものだということは、今、実感という形で理解しているつもりだ。

できることならば自分も、結衣の悲しみに寄り添いたい。

だが——自分はそのために必要な言葉を持っていない。

ステイアは、それを自覚していた。

だからこそ、この場から自分が去るしかないということとは、自然と察せられることだった。

「…………結衣…………」

眩きが一つ、夜の静けさに溢れて落ちる。

釈然としない胸の痛みを抱えながら、スティアは、結衣の悲しみに背を向けて、自らに当てがわれた部屋へと引き返してゆくのだった。

## 66. 魔法少女と星の仮説

翌日、結衣たちは沖繩に到着した「オラシオン」に同乗して閣僚や官僚たちを送り届けてから、極東管区の本拠地である東京への帰還を果たしていた。

その間、大規模な敵星体の群れとの遭遇も懸念されていたものの、幸いなことに、遭遇したのはオケアノス級の主砲や対空砲での対処が可能な「はぐれ」ばかりで、航行スケジュールに支障は発生しなかった。

しかし、敵星体の動向については予断を許さない状況にある。

それが各管区に共有されただけでも、元々は閣僚や官僚たちのバカンスに過ぎなかった沖繩会議における大きな成果だといえるだろう。

久しぶりの帰還を果たした極東管区総司令部は相変わらず厳めしい外観をしていたが、それに違わず内部の空気も張り詰めたものだった。

「ずいぶんピリピリしてんねえ」

「無理ありませんわ」

タイプ・ホールキーキの出現は極東管区にも大きな衝撃をもたらしたらしく、すれ違う兵士たちや魔法少女たちも皆一様にどこか怯えたような、また同じことが起きはしな

いかと憂慮しているような暗い顔つきをしている。

その後の調査で正式にわかったのは、北京管区から報告された重慶奪還戦の顛末——ダンジョンから生まれたタイプ・ホールケーキが一つの群れと魔法少女もどきを率いて、沖繩へと向かっていったということだった。

主力級航宙戦艦五隻と、多くの第二世代、第三世代魔法少女及び呪術甲冑隊を失った北京管区は大打撃を被った形であり、しばらくは支援として極東管区からオケアノス級二番艦「オールト」と魔法少女隊や呪術甲冑隊が派遣されるということにはなっていない。

らしい、というのは、「オラシオン」のブリーフィングルームで諏訪部が語っていたのを、美柑たちが立ち聞きしていたからに過ぎないからだ。

あくまでも、魔法少女は政治から遠ざけられる。

それが、暗黙の了解であることに変わりはない。

しかし、今回の一件を経て上層部が危機感を抱くようになったというのは大きな進歩であり、むしろ今までが楽観的すぎたのだと反省する向きがあるのは、歓迎すべきことなのだろう。

その分、戦いは苛烈さを増していくのだろうが——すれ違う兵士たち、とりわけ呪術甲冑陸戦隊からは概ねそんな会話が聞こえてきた。

「そんでアタシたちはどこに行くんだっけ？」

「……司令室よ」

「あつはは、わかつてるわかつてる。冗談だつてば」

召集命令をかける都合で諏訪部は一足先に司令室に向かっている。

流石に冗談だとわかつていても、生真面目に返してしまうのが結衣という人間だった。

しかし、美柑のジョークにいつもの鉄面皮でそんな言葉を投げかけた結衣は平然を装っているつもりでも、やはりどこかが綻んでいる。

それが、絵理の見立てだった。

あくまで仮説としてはあるが、敵星体に複製された存在に過ぎないとはいえ、妹をその手にかけて平然としていられる姉がこの世にいるだろうか。

いたとすればそれは、きつと人の形をしていない。人の血潮が流れていない。

軍務に従事する人間として、それは致命的な欠落なのかもしれないが、血も涙も失つて、ただ勝利だけのために身を削り続けるのが正義であるのなら、それと敵星体になんの違いがあるというのか。

絵理は、先導する結衣たちが開けた司令室のドアをくぐりながら、そんなことを頭の片隅に浮かべる。

「よく来てくれたな、忙しい中にご足労、感謝するよ」

司令室の椅子に腰掛けていた諏訪部は、相変わらず飄々とした雰囲気装ってはいたものの、やはりその視線は険しいものだった。

諏訪部にも諏訪部で思うところがあるのだろう、と、結衣たちは敬礼を返しながらそんなことを思い浮かべるが、ほとんど一瞬で彼のフランクな仮面が剥がれ落ちた辺り、事態は思ったよりも深刻だということだろう。

「まず、伝えなきゃならんことがいくつかある……一つは、知つての通り先日の沖縄で遭遇した超巨大敵星体、タイプ・ホールケーキの件についてだ」

「敵がダンジョンを放棄して沖縄に襲撃をかけた、という話でして？」

「まあ、平たくいえばそうなるな。その件に関してだが、わかっているのは重慶のダンジョンから生まれた個体が何故か沖縄の襲撃に乗り出したってことぐらいだ。あとは……」

諏訪部はアンジェリカの質問に淡々と答えると、傍に控える真宵へと、「ラボラトリイ」の主へと目配せをする。

「はいはい、ここからはあたしの出番ってことだね。いきなり本題で悪いんだけど、前に結衣ちゃんがダンジョンのことを『実験室』みたいだ、って言ってたじゃない？ あれ、どうにも正解くさかったのよねえ」

パスを受けた真宵は興奮気味に、研究結果に照らし合わせた自らの仮説を滔々と語り上げていた。

それは一つの聖歌というには物騒で、敵かきの欠片も感じられなかったものの、どこか歌うような響きを持って、結衣たちの耳朵を震わせる。

「……正解、ですか？」

ただ直感的なことを述べたに過ぎない結衣は当惑しながらも、真宵の言葉に小首を傾げてそう返していた。

実験室。あの地下空間が「巢」ではなく、なんらかの実験のために生まれたのであれば、敵星体は何を研究していたのか。

その答えは、自ずと先日の戦いに符合していく。

そんな予感を振り切るかのように結衣は真宵から視線を逸らしたものの、無慈悲に、「研究室」の主はその答えを口ずさむ。

「この前四国のダンジョンから持ち帰ってもらった『星遺物』の分析結果だけ……あれ、『赫星一号』の破片が元だつてことはわかってたけど、どうにもこの地球に寄生してる——平たくいえば、魔力そのものを吸い取つてるっぽいよね。それで、結衣ちゃんたちがこの前戦つた群れの中には、死んだはずの魔法少女がいた。ここから導き出される結論は、敵も『魔力』に目をつけてたつてことになる」

それに何の目的があるのかはわからないけど、と真宵は肩を竦めるが、少なくともあの「星遺物」が、ダンジョンの核となる物体が地球が生み出す魔力の源泉に寄生している、というのは、事実であることに違いはない。

「……じゃ、じゃあ……第三世代魔法少女の魔力が弱まっているのって……」

「絵理ちゃん、鋭いねえ……敵が勝手に『星の悲鳴』に相乗りしてたからだ、あたしたちは、『ラボラトリイ』はそう見ているよ」

敵は地球を荒らすだけではなく、星そのものに寄生して、なんらかの実験を行うと同時に、星そのものが、地球が有する魔力的リソースを弱体化させている。

それはあくまでも仮説に過ぎなかったが、裏付けるための証拠として、タイプ・ホルケーキが魔力を使用したことや、そもそも故人となった魔法少女を複製するといった芸当を、敵星体がやってのけているという事実は健在だ。

「……だとしたら、敵星体は」

「何のために、だよねえ。結衣ちゃん。そこに関しては敵星体とお話しないとわかんないけど、内外から地球そのものをあの『赫星一号』は、破片になっても弱体化させてるし、挙げ句の果てにろくでもない実験に勤しんでる、ってわけ」

人類を滅ぼしたいだけなら、随分と回りくどいことだけどね、と、そう前置きした上で、真宵はずり落ちてきた眼鏡の蔓を人差し指で押し上げて、ふう、と小さく溜息をつ



く。

敵星体との対話。

真宵が何となくで口ずさんだフレーズは、不可能であることを前提にしていたものの、あの複製された魔法少女は、芽衣らしき何かは、断片的にはあるが、言葉を紡いでいる。

エリユシオン。星罰。

それらが何を意味しているかはわからなくとも、敵が発してきたメッセージであることに変わりはない。

不可解なそれらを紐解くための鍵があればいいのだが、事態というものはそう簡単に転んでくれるものでもなければ、転んだその先が天国であるとも限らないものだ。

それどころか、更なる地獄でさえあることだって珍しくない。

背筋を冷たい手で撫でられたような感覚に、思わず結衣は身を震わせる。

「それと、スティア」

「……スティアに、何かあるの……？ 大佐……？」

「君にはもう一度『ラボラトリイ』で検査を受けてもらう。申し訳ないが、拒否権はないんでね」

沈み込んだ結衣に追い討ちをかけるかのように、諏訪部の言葉が、疑いが、淡々と司

令室に響き渡る。

忘れようとしていたことだった。

忘れたいと願っていたことだった。

スティアに、敵星体との繋がりがあるかもしれない——その疑いは再び鎌首をもたげ  
て、結衣の心の中で鋭い牙を剥くのがあった。

## 67. 魔法少女と「研究室」再び

諏訪部の、研ぎ澄まされた刃にも似た視線が容赦なくステイアを打ち据える。

困惑を隠し切れずに、ステイアは困ったようにその細い眉を八の字に歪めて諏訪部を見据えるが、彼の鉄面皮が揺らぐことはない。

あくまでも、ステイアと敵星体の間に繋がりがあるといえるのは仮説以前の、ただ憶測を積み上げたものであるというのは、諏訪部も理解していることだ。

疑わしきは罰せず、という法の原則がある以上、今すぐステイアに何らかの処罰を下すということはできない。

一方で、内部に敵を抱え込んでいるかもしれないというリスクを勘案すれば、それが結衣に対して譲歩できる限界のラインだということなのだろう。

どうしてステイアが、と、言葉を喉元まで吐き出しかけていた結衣を制するように、諏訪部の冷徹な視線が突き立てられる。

「ッ……」

「悪いな、こっちとしても身内は疑いたくないんだが……敵を抱えているかもしれない、というのとは厄介なんだよ」

それが状況証拠とも呼べない憶測、あるいは偶然の積み重ねであったとしても、今までスティアがいたところに大きな敵星体絡みの事件があったことは確かだった。

もしも、その全てが彼女に起因することだとしたら、マジカル・ユニットに留まらず、極東管区全体、ひいては地球連邦そのものを根幹から揺らがせかねない。

即座に問答無用での銃殺、という強硬手段に出なかつた辺り、まだ良識は残されていたが、それでも今まで身内として受け入れてきた人間に、敵の疑いをかけるというのは抵抗がある。

事情を知らない絵理や美柑、そしてアンジェリカは目を白黒させるばかりだったものの、諏訪部の厳しい視線を鑑みれば、これがただ事ではないのだとは察せられた。

——冗談じゃない。

それは紛れもなく結衣の本音だったが、同時に自分がその処分を、疑いを妥当だと思っているところがあることもまた事実だった。

「……スティアは、疑われてる……? スティアには、わかる……でも、どうして……?」  
「念のためというやつだ。今のところはな」

流石に、諏訪部であったとしても直接的に「君を疑っている」というメッセージをぶつけるのは憚られるところがあつたのだろう。

しかし、冷徹に、裏を返せば今後何かあつたときは容赦をするつもりはないという

メッセージを忍ばせている辺り、彼は軍人だった。

気まずい沈黙が漂うだけの時間は、たとえそれが数分に満たないとしても、どこか永遠にも似たものを感じさせる。

スティアのことを本当に信じているのなら、検査でもなんでも受けさせて、白だということを証明すればいい。

それは魔女狩りの理屈と似ていたものの、スティアに身を立てる証が、記憶がない以上、検査結果に異常がないことを祈ることしか、結衣にできることはなかった。

加えて、敵星体は故人とはいえ、人間を複製する領域まで地球の魔力的リソースを掠め取りながら進化し続けている。

スティアに記憶がない以上、彼女が本当に生きている人間なのか、複製された故人なのかどうかは、それこそ敵星体反応の検査結果でしかわからないことだ。

——しかし。

「私が変わ身している時、スティアから『星の悲鳴』は聞こえませんでした」

結衣は細やかな反論として、クビになっていた時のことを持ち出したが、それでも諏訪部の視線に宿る冷たさが、彼の鉄心が揺らぐことはない。

真宵も言葉を挟まないことから察するに、それが「ラボラトリー」の総意と合致しているということなのだろう。

「……結衣……ステイアは、どうすればいいの……？ ステイアには、わからない……ステイアは、何も知らない……わからない……」

悲痛に、縋るような視線で訴えかけてくるステイアの問いに返せる答えは、ただ一つしかないことなどわかりきっていた。

だがそれは、自らの疑いをも肯定するのに等しい理屈であることも理解しているからこそ、結衣は俯き、ステイアから目を逸らすことしかできなかったのだ。

「まあまあ、そこまで難しく考えなくていいよ、ステイアちゃん。最初、ここに来た時検査とか受けたでしょ？ あれをもつかいやるってだけだからさ」

「……検査……それが終われば、ステイアは疑われない……？」

「勿論、全部要項をクリアすればだけどね」

あまりにも剣呑とした空気にいたたまれなくなつたのか、真宵が軽いトーンでステイアを説き伏せるものの、何かがあつた時は容赦しない、という含意は諏訪部のそれと一致している。

要するに、検査を受けることでしか、ステイアに身の潔白を証明する方法は残されていないということだった。

ここまで黙り込んでいた美柑たちも、結衣の言葉から諏訪部がステイアと敵星体の繋がりを疑っていることは臆気に察していたものの、それを言葉に出すことはしていない

い。

否、できないのだ。

スティアという、今まで仲良く接してきた身内に敵との繋がりがあられるかもしれない、という事実。

そして、そんな彼女と一緒にいるひとときを心の安息としていた結衣があまりにもいたたまれないからだ。

「……わかった、スティアは、検査を受ける……でも、スティアは何もわからない、何も知らない……それだけは、本当……」

「さてね、おれとしてもそうであることを祈っているよ」

信じてほしい、という嘆願を一言で切り捨てて、諏訪部はあくまでも冷徹な軍人としての顔で、スティアが真宵に連れられて「ラボラトリイ」へと向かっていくのを静かに見送る。

「……さて、これは一体全体、どういうことですか？」

真宵とスティアが扉の外に出たことを確認した上で、口を開いたのはアンジェリカだった。

諏訪部と結衣のやり取りから、スティアに敵星体との繋がりがあられるかもしれない、という疑惑がかけられていることは察せられた。

しかし、なぜそんなことになっていくのかについては、きつちりと説明をしてほしいといった趣旨での問いかけだ。

現状、憶測の域を出ない以上はそれについて説明する義務は諏訪部にも結衣にもないといつてもいい。

しかし、背中を預け合っていた仲間だという義理はある。

その筋を立てろ、と、アンジェリカはそう主張しているのだ。

「……スティアは、敵星体と繋がりがああるかもしれない」

そんな彼女の問いかけに、僅かな沈黙を破って答えたのは結衣だった。

どの道、スティアを拾ってきたのが自分である都合上、その追及を避けては通れない上に、保護者としての責任もある。

もしも自分が拾ってきた女の子が敵のスパイだった、なんてことになれば、飛ばされるのは、結衣の首だけで済まないだろう。

だからこそ誠実に、背中を預けていた仲間にはそれを語っておかなければいけないと、結衣は虚ろな悲しみと引きつった絶望をその整った顔に浮かべながら、淡々と語る。

「結衣、それって……」

「……諏訪部大佐は、スティアがいたところで大きな事件が起きたことで疑ってるみたいだけど……私は……」



「私は、なんですかの？」

たった一つ、自分しか知らない情報にして最悪の符号。

それを口にしてしまえば、きつといかに温厚な魔法少女たちであつたとしても、スティアに疑いどころか憎しみの目を向けてもおかしくはなかった。

だからこそ、それについては最後まで黙っているべきかどうか、結衣は悩み続けていたが——逃げるな、とばかりに打ち据えられたアンジェリカの鋭い視線が、それを許さない。

「……私は、スティアが夢の中で『エリュシオン』って言葉を聞いたのを知ってる」

「……エリュシオン、ですか……？」

「……複製された妹が、芽衣が言つてた。エリュシオンがどうのこうのって、星罰がどうのこうのって……だから……」

だから、スティアが黒である確率が高い。

その先に続く言葉は、喉を押さえつける悲しみと、溢れる涙に埋もれて出てくることはなかった。

「……ここまで黙っていたことは不問にする。どの道検査結果がわかるまではおれの疑問も、君の疑いも憶測にすぎない。だが……」

「……エリュシオン、複製された魔法少女が喋っていた言葉がスティアさんの口からも

出てきたというのは……」

「……そうなる、かもしれない」

結衣の黙秘を罪に問わなかったことは、諏訪部が残っていた甘さだといつてもいいだろう。

しかし、その符合を知ってしまった今、漂うものは気まずい沈黙ばかりで、たとえそれが憶測にすぎないものだとしても、魔法少女たちの間に、スティアへの疑いが産声を上げたことは確かなことだった。

## 68. 魔法少女と調査結果

「馬鹿な……全部白だと!？」

「そうなりますねえ、外部の魔法少女にも協力してもらいましたが、ステイアちゃんも敵星体を紐づける証拠は見つかりませんでした」

その後、「ラボラトリイ」でステイアは一通りの検査を受けたものの、諏訪部の元に提出された書類に記されている通り、そこには彼女と敵星体の繋がりを示すようなデータは、何も記録されていなかった。

調査を指揮していた真宵も、この結果には納得がいかなかったのか、お手上げだとかかりに肩を竦めて、唇を尖らせる。

DNAの検査から体組織の検査から、何から何まで隅々ステイアは観察されていたものの、その組成は全て人間のそれと一致するという結果が出ていたし、調査に立ち会った医療班の魔法少女も、彼女からは敵星体反応がないと、「星の悲鳴」は聞こえないと語っていた。

魔法少女がダメなら機械類は、という話になってくるが、もしもステイアが敵星体だとしたら、そもそもこの管区に足を踏み入れた時点でセンサーの類が警報を出している

以上、その線も薄い。

つまるところ、完全な憶測。

それが、「ラボラトリイ」による調査の導き出した答えだった。

冗談だとは思いつたが、現状、公平な調査を期した上でステイアが白だと判明した以上、彼女にこれ以上の嫌疑をかけることはイーブンではない。

だが、ステイアが「エリユシオン」という、敵に複製された魔法少女——仮称「複製体」が口にしていた言葉と一致する単語を夢に見ていた、という結衣からの証言は確かに得ている。

「予知能力がある、不思議な子なんじゃないですか？」

「オカルトも大概にしてほしいものだな、少佐」

「すみません、でも魔法があるんです、そんな超能力の一つや二つ、転がっててもおかしくないんじゃない？」

真宵が言った通りに、結局のところ、地球連邦防衛軍という組織はそのオカルトの最たる例である魔法少女という存在をあらゆる面から頼りにしているのだから、エスパーの存在も否定できるものではない。

自分で言っておきながら情けない話だ、と、諏訪部は肩を落としながら静かに溜息をつく。

しかし、ステイアが検査結果で白だと判明しても、一度抱いてしまった疑念が消えることはない。

あまり疑心暗鬼になっていると、かえって足を掬われそうなものだが、二度までは偶然だとしても、三度目が偶然である確率は極めて低いものだ。

それはあくまで諏訪部の持論であつたものの、大概の物事における不自然な一致が三箇所も見つかれば、その出来事は黒であるケースが大半だ。

無論、政治の世界では権力者や金持ちが白だと言い換えさせることなど常套手段が、ステイアにはそんなバックボーンは存在していない。

何よりも、敵星体を庇い立てる理由が人類に存在しないのだから、ステイアが黒であることをどこかの権力者が全力で隠蔽にかかつている可能性は極めて低いものなのだ。

「ふむ……ステイアについては現状、白と見る他になさそうだな。ところで、少佐。君は『エリユシオン』という単語に心当たりはあるか？」

ならば、その方向から疑いをかけても仕方がないと諦めを抱いて、諏訪部はもう一つの符合である、「エリユシオン」という言葉から、何か糸口になるものはないかと真宵へと問いかける。

エリユシオン。

これも地球に昔から存在する言葉であり、最果ての海を越えた先にある楽園の名だと

古代の人々が信じていたものだということ、諏訪部も知識としてはわかっていた。

だが、そんな言葉がどうして敵の口から飛び出してきたのかについては、皆目検討もつかない。

「大昔に信じられてた楽園の名前……じゃ、ないですよねぇ」

「その通りだ」

「だとしたら、正直なところあたしたちにもわかりかねますよ……魔法少女が複製されて敵になったとか、敵星体が地球のリソースに寄生して魔力を掠め取っていたとか、正直そつちだけでも手一杯なんです」

特に、敵星体が地球の持てる魔力的リソース、「星の悲鳴」の根源になるものへと寄生して勝手に相乗りしているというなら、各地に発生したダンジョンの攻略は急務であるといえる。

そんな中でスティアにかけられた嫌疑であるとか、「エリユシオン」なる単語がどうだと言われても、「ラボラトリイ」も首が回っていないのが現状なのだ。

「まあ、やれるだけの調査はやってみます、それが仕事ですから」

「……ああ、頼んだ」

これで、マジカル・ユニットが抱えている問題は暗礁に乗り上げたといってもいいだろう。

素直にスティアが白であったことを喜べないどころか、ますます疑いを深くしている自分に軽い嫌悪を抱きながら、諏訪部は左手の薬指にうつすらと残る指輪の跡に視線を落とす。

自分がこんな調子の人間だから、結局のところ妻には逃げられたのだ。

疑い深いというのは軍人として、戦況を常に冷静に俯瞰する必要がある指揮官として必要な資質なのかもしれないが、私人としては間違いなく敬遠されるものだ。

この件で間違いなく自分はスティアに嫌われただろうし、結衣からの信頼も幾分か失ったりことだろう。

だが、それでも疑うことをやめるつもりなど、諏訪部には毛頭なかった。

あのスティアという少女は何かを知っている。

本人が言う通り、記憶は失われているのかもしれないが、その失われたところに、今は欠けたまま宙を漂っている一欠片はぴたりと当てはまるのではないかと、諏訪部はそう考えているのだ。

「……邪推であつてほしいものだが、な」

「本当にその通りですよ」

「敵まで抱え込んで戦わなくちゃならないとなれば、厄介どころの話じゃない、それにな……おれも本心ではどこか、彼女を信じたいと思つているところがあるのは確かなん

だ」

無垢な少女に裏切り者の嫌疑をかけて、場合によっては銃殺すら視野に入れていた自分の冷淡さを、それを当たり前だと捉えていたことを自嘲するように、諏訪部はぼつりとそう呟く。

スティアの存在は間違いなく結衣に良い影響をもたらしていると、3年前の戦いで擦り切れたその心を癒してくれると信じていた。

信じていたからこそ、今、嫌疑をかけなければいけない、かといって楽観することもできないこの状況が、諏訪部にはどうにももどかしくて仕方がないのだった。



「とりあえずは疑いも晴れたってことで、良かったじゃん？ ってことで、乾杯！」

美柑は長い検査を終えて戻ってきたスティアを交えた食堂の席で、合成品特有の薬品じみた香りがするオレンジジュースを掲げながら、乾杯の音頭をとる。

本来ならばここまで単純な話ではないことぐらい、美柑にもわかっていた。

ただ、少なくとも「ラボトリー」が白だという判定を出したのなら、それ以上は何も訊かないというスタンスで、遠慮がちに掲げられた他の面々のグラスに自分のそれを



そつと触れ合わせていく。

「そうですわね、『ラボラトリー』が白だといっているのなら……わたくしから言うことは何もありませんわ」

「……す、スティアさんが……その……なんともなくて、よかった、です……」

アンジェリカと絵理も、疑いを完全には拭い切れていないものの、美柑と同じスタンスで杯を掲げて角と角を軽くぶつけ合う。

これで心の底から安心できただろう、と、絵理はスティアの隣に腰掛けている結衣を一瞥したものの、その表情は相変わらずどこかぎこちなく、浮かない様子だった。

やはり、一度疑いの種が撒かれてしまえば、それは強固に根差して即座に芽吹くのだから、どうにもならない。

「……うん。そうだね、スティア。スティアが何もなくて……私、本当に、良かった……」

「……結衣、泣いてる……？ スティアは、なんともない……スティアは、大丈夫……」  
「うん、大丈夫……大丈夫だよね、スティア……」

そんな結衣を気遣うかのように、スティアは頬を伝う涙を指先で拭って、震える華奢な身体を抱き留める。

ひとまずは、という前置きがつくものの、スティアにかけられた疑いはこれで晴れたのだから、それを喜びたい気持ちは結衣にもあった。

だが、奇しくも諏訪部と同じように、心の奥深くではスティアの欠落が、その失われた記憶が「エリユシオン」と結びついているのではないかという不安が鎌首をもたげて、涙を流させているのだ。

もしも、本当にスティアが敵星体だったとしたら。

自分は討たなければいけない。魔法少女として、そんな彼女を身内として引き込んだ責任を取って。

そんな未来は訪れないと、信じたくても信じきれず、結衣はスティアの温もりに逃げ込むかのように縋り付き、一頻り涙を零し続けるのだった。

## 第四章 「魔法少女アポカリプス」

### 69・魔法少女と背負うもの

ひとまずという形ではあるものの、スティアに対してかけられた嫌疑は晴れた。

地球連邦防衛軍も、主要な閣僚たちが沖繩での戦いを目の当たりにしたことで、いつそう各地のダンジョンアタックに精を出すようになり、そのデータも管区の垣根を越えて共有されるという方向に向かっている。

その後、ダンジョンから脱出する敵星体の存在や、タイプ・ホールケーキの出現が確認されたという報告はなかった。

しかし、依然として敵が死んだ魔法少女を複製して、各ダンジョンのガーディアンとして配置しているといった情報も周知されており、余談を許さない状況には変わりがない。

それを示すかのように、極東管区総司令部の雰囲気は今日もぴりぴりとした緊張を帯びていて、少しばかり窮屈さを感じさせる。

それというのも、他管区と協力しての大規模ダンジョンアタックに向けての準備が推し進められていたからだ。

アンジェリカは、連邦防衛軍内部向けに作られた資料に目を落としながら、小さく溜息をつく。

他管区との協力が推し進められていること自体は喜ばしい。

現場で血を流すのが自分たち魔法少女であることも、「星の悲鳴」を聞いたあの時から納得している。

だからこそ、溜息の理由は別なところにあつた。

スマートフォンを懐から取り出してメッセージアプリを起動すれば、そこには父の名前と共に、不在着信の履歴が残っている。

「はあ……」

こみ上げる憂鬱に再び小さく息をつきながら、アンジェリカは不在着信のアイコンへと指をかけて、ゆっくりとタップした。

耳に当てたスマートフォンからは、相手を呼び出すコーリング音が聞こえてくる。

いつそのまますっとコーリング音が鳴って、電話が切れてくれればいいと願うものの、現実というのは、常に望んだ結果の裏側を見せつけてくるものだ。

その定理に従うかのように回線が繋がらない、厳しさと威圧感を覚える厳のような声音が、アンジェリカの耳朶に触れる。

『アンジェリカか』

「申し訳ございません、お父様。先刻は会議に出ておりましたので」

電話の主は、アンジェリカの父——世界最大の兵器商にして、未だ旧弊が残る、西園寺の家を統べる立場にある男だった。

自分が電話をわざわざかけたのになかったとは何事だ、とばかりに伝わってくる不機嫌そうな声が、アンジェリカはとにかく苦手で仕方がない。

『それならば良い。魔法少女として、西園寺の名に恥じぬ活躍ができておるならな』

「……常に善処し、精進しているつもりでございます」

『うむ。お前も西園寺の家に生まれた端くれなのだ、武勲で身を立て、己の意義を証明してみせよ』

自分という個人のことなどどうでもいい、といわんばかりの「家」を重視したその言葉に辟易しつつも、溜息を堪えてアンジェリカははい、と短く答えを返す。

父のことを好きか嫌いかで訊かれれば、好きだと答えるのは間違いなく自分の気持ちに顔を背けていることになる。

かといって、嫌いだと答えるのにも抵抗があるのもまた、確かなことだった。

例えどんな人間であつたとしても、自分という忌み子を魔法少女としてしか認めたくないような親であつても、父親は父親だ。

アンジェリカは、西園寺の家にとっては忌み子のような存在だった。

左右で瞳の色が違うという、ただそれだけのことが全てにおいての「完璧」を家訓にわざわざ掲げて、この新星暦の時代に家父長制を敷いている家にとっては、気に食わなかったのだろう。

兄や姉が愛情を注がれて育ったのに対して、アンジェリカが辿った境遇は、恵まれていながらもそこに慈しみというものは存在していない。

言葉通り、西園寺の家に生まれた端くれとして礼儀作法を叩き込まれて、将来は適当な家と政略結婚をさせる、というのが父の描いたアンジェリカという娘の理想像だ。

故に、その血の呪縛からは、家という呪いからは逃げられないとアンジェリカが諦めかけていた時に見たものが「赫星一号」を撃墜する結衣の姿であり、そして。

——あの瞬間に己の内側に届いた、「星の悲鳴」だった。

魔法少女となつてから、西園寺の家は自分に利用価値を見出したのか、家での待遇は比較的マシなものに変わっていったのを、アンジェリカは覚えている。

だが、もはやそんなことはどうでもよかった。

魔法少女として戦えば、端くれとしてしか見てもらえなかった西園寺の家に、認めてもらえる。

父は完全にアンジェリカを認めたわけではなく、あくまでも家の名前を売るための道具としてしか見ていないと理解していても、幼い頃に得られなかった、欠落を埋めるかの

ように、アンジェリカは魔法少女として戦ったのだ。

「……はい。西園寺の名を背負う者として、端くれながらも最善をもって、必ずや吉報をお父様にお届けいたします」

『当然だ。良き知らせを待っているぞ、アンジェリカよ』

「……はい、お父様」

自分の感傷が子どもじみたものであることは、アンジェリカが誰よりも一番よくわかっている。

幼い頃に得られなかった愛を得るために、欠落を埋めるために、魔法少女として武勲を立てる。

努力は必ず報われる。それまでの辛い日々を耐えてきたことも、同じ家にながらもまるで人間としての扱いが違っていた兄や姉に、頑張っていたら追いつけるかもしれない。

左右で瞳の色が違うというだけで忌み子と呼ばれてきた自分だって、魔法少女として活躍すれば、西園寺の家にもいいと認めてもらえるのだから——そんな、子供じみた公平世界仮説が、アンジェリカにとっては心の拠り所だったのだ。

生まれた家を呪っているところはある。

西園寺の家に生まれなければ、もっとマシな人生を送れたのではないかと、そう考え

てしまうようなところだつて少なからず、アンジェリカの中には存在している。

それでも、どうしたつて変えられないのが、自分があの家になまれてきたという現実と、左右で色の違う瞳を持っているという事実なのだから、そこに執着することを捨てるといわれてもまた、難しい話なのだ。

通話を切つてスマートフォンを懐にしまい込めれば、アンジェリカは自分の瞳に涙が滲んでいるのだと気付く。

鼻先にこみ上げる塩辛い感覚が、それを告げているのだ。

「……どうしようもありませんわね、現実というものは」

個人がいかに抗つたところで、いかに世界の壁と爪を立てたところで、それまでに積み上げられてきた歴史が崩れはしないように、「家」という呪縛が解けないのも事実である。

——それでも、せめて。

せめて、「愛している」の一言ぐらいは、嘘でもいいから、言つてほしかった。

アンジェリカは、懐からハンカチを取り出して、涙と共にそんな子供じみた感傷をそつと拭う。

「立ち聞きとは、趣味がよろしくありませんわよ。結衣さん、ステイアさん」

「……ごめん、聞くつもりはなかったんだけど」



ちょうど、通路の角に隠れるような形で息を潜めていた二人組がいることに気付いたアンジェリカは、呆れたような声でそう論ずる。

しかし、結衣としてもステイアとしてもアンジェリカの込み入った事情に立ち入るつもりはなく、何なら自販機コーナーでジュースを買っていただけなのだ。

それが、帰り道に偶然、彼女と鉢合わせてしまったというだけの話で。

しかし、聞いてしまったものは仕方がないと結衣はぺこりと、アンジェリカに頭を下げる。

「……アンジェリカは、悲しい？」

しかし、事態が飲み込めていないのか、ステイアは小首を傾げると、その金色にも銀色にも見える髪の毛からふわりと粒子を漂わせて、遠慮のない問いを投げかけた。

結衣が静止しようと手を伸ばすよりも早く言葉は走り出し、一度舌先を滑り出て形になったそれは原則として止まることはない。

ステイアが自分を心配してそう言ってくれたのであろうことは、アンジェリカにも理解できていた。

だが、先立つ感情が、ささくれ立つ怒りが、理性を薪木に燃え上がり、ステイアの言葉を否定する。

「……悲しくなど！　大体、何の資格があつて貴女はわたくしの心に踏み入ろうとして

いるのでして!？」

「……アンジェリカは、泣いていた……だから、悲しい。ステイアは、そう理解した」  
「……なら、放っておいてくださいまし! 悲しんでいる相手を哀れむなど……そんな慰めは、侮辱にしかならないのですわ!」

そう言い捨てると、アンジェリカは踵を鳴らして自室へと引き返していった。

アンジェリカがどれだけ、西園寺の家に執着していて、どれだけ歪められてきたのかは、結衣にはわからない。

結衣にとって理解できたのは、父親との通話のあとにアンジェリカが涙を流していたという事実だけで、そこにどんな悲しみがあるのかについては、立ち入ってはいけないうのだとも察せられた。

しかし、ステイアは無垢故に、踏み込んでしまったのだ。

「……ステイアは、わからない……ステイアは、間違った……?」

「……うん。人って、そつとしておいてほしいときがあるんだよ」

「……そつとする……干渉しないこと。ステイアは、理解した……」

「だから、アンジェリカにはあとで謝っておこう」

私も一緒に頭を下げるから、と付け加えると、未だにどこか釈然としない様子のステイアを連れて、結衣たちもまた、自室へと戻っていくのだった。

## 70. 魔法少女と悪夢の胎動

それらはずっと、待ち望んでいた。

焦りに飲まれながらも、同胞たちが無為に消滅させられていくのを認めながらも、地の底でただ眠るように、この地球という星の特異性を、その歴史と進化を学習し、その瞬間を待ち続けていたのだ。

今も、独自に構築されたネットワークから同胞たちが敵である魔法少女や人間の手で壊滅させられていくのを、それらは認めている。

だが、全ては果たされなかつた星罰を成就させるため。

3年という時間で学んだこの星を無に還すため、それらはずっと、待ち続けていたのだ。

復讐の時は来た。覚醒の時は来た。

歓喜の声を上げるかのように、それらは世界を通して瞬く間に己の役割を伝え合い、長い目覚めを果たす。

「なんだ……!?! 何が起きている!」

「ダンジョン全体が振動……これは! 地中から敵星体反応あり! それも極めて莫大

なものです！」

攻略難度の関係から、各管区の枠を越えての合同作戦に回されていた結晶塔——ダンジョンの所在を示す、「星遺物」の抜け殻が激しく揺らぎ、地上部分を偵察していた主力級航宙戦艦「アイオワ」のクルーたちは、かつて重慶で発生したケースの再来にざわめき立つ。

今や、上層部が重い腰を上げたことによる連邦防衛軍の尽力によって、地球から「はぐれ」の敵星体はほとんどが駆逐され、ダンジョンもまた、管区間での合同攻略作戦を控えているもの以外はほとんどが攻略されていた。

ダンジョンの深部に潜む「星遺物」も、「ラボラトリイ」による解析が終わったことで破壊されつくし、地球奪還の悲願を果たす日は近いと見る声も出始めていた矢先のことだ。

その現象を観測していたのは、北米管区の「アイオワ」とどまらず、同日に威力偵察を行っていた全ての航宙艦が、そして同時多発的にダンジョンが崩壊し、中から敵星体が出現したという情報を各地で観測していたのだ。

今、ここで何が起きているのか。

呆然と立ち尽くす「アイオワ」の艦長は、砲撃指示を下すのも忘れて、ただ「それ」が生まれるのを呆然と見届けていた。

地の底で胎動し続け、生まれるのを待ち続けていたそれらは、観測していた「アイオワ」のクルーたちにとつて、否、人間にとつて、全くの理解を超えたものだったのだ。

『GoooooooooAhhhhhh!!!』

人は、見知らぬものへの恐れを神話や物語に込めて歴史の中に綴ってきた。

それは病魔であり、自然の暴威であり、あるいは空想の中に根付く脅威を、何らかの架空の存在に擬えることで、現象を理解しようとしてきた歴史がある。

人類は何を恐れてきたのか。

極論をいってしまえばそれは、「未知」に尽きることだろう。

科学の光が、文明の火がそれまでは理解の及ばなかった事象を照らし出し、暴き立てたことで、人類はいつしか、具体的な現象として自らに迫る危機を理解するようになった。

その発展は、地球上から空想への恐れを根絶し、科学により暴き立てられた事象以外はオカルトの一言でまとめられるようになって時代は久しい。

故にこそ、人類は空想上の存在に対する脅威を、その恐怖を忘れていたのだともいえる。

しかし、目の前で雄叫びを上げる「それ」は、確かな存在として、空想から抜け出てきた恐怖の具現として、確かに各地で六つの産声を上げていたのだ。

「な、なんだ、これは……？ ドラゴン……？」

観測手が、「アイオワ」のレーダーとモニターへと交互に視線を向けながら、おびたらしい数の敵星体と共に現れた「それ」がとつてゐる形態を、震える声で口にする。

確かに敵星体が空想上の生き物——竜を模倣しているという情報は寄せられていて、飛竜級の存在は変異体として正式に認定されている。

しかし、飛竜級が翼と腕が一体になった、いわゆるワイバーンだとするならば、目の前に聳え立つ巨体は、巨大な翼を備えながらも前脚と後脚を持ち、二足で立ち上がることができる「ドラゴン」そのものだ。

何よりもその巨大さは、飛竜級とは比べ物にならない。

目視だけでも百メートル以上はあると確信できるその巨体は、沖繩に襲撃をかけたクラゲもどき——「タイプ・ホールケーキ」に分類されるものだった。

「艦長、通信です！ 世界各地で同様の敵星体反応が六つ発生……同様にタイプ・ホールケーキの出現が確認されているようです！」

通信士は、「アイオワ」へと飛び込んできた入電をキャッチすると、その内容を読み上げながら極東管区の総司令部にも通信を転送する。

艦長と呼ばれた、まだ年若い部類に入る男は動揺こそしていたものの、幾分かは冷静であった。

「記録映像を極東管区に回せ！ 砲術長、ここからタキオン粒子砲を発射した場合の被害をシミュレートするんだ！」

威力偵察が目的ということもあって、「アイオワ」に所属している魔法少女は第二世代の中でも後発組か、第三世代のそれだけだ。

故に、あのドラゴンとしか形容できない存在に有効打を与えられるとするなら、それは主力級航宙戦艦が艦首に一門備えているタキオン粒子砲のみだ。

地上でそれを放てば、射線上にある全てに甚大な被害を及ぼすことは、「アイオワ」の艦長もまた想定している。

だが、あのタイプ・ホールケーキを放っておけば、莫大な被害が発生することは誰の目にも明らかだ。

それならば、多少の犠牲に目をつむってでも、撃った方が遥かにいい——人類は生き残らねばならないというお題目の元に、「アイオワ」の艦長は禁忌の引き金を引くことを決意する。

「……被害の算出、終了しました。艦長、これでは……」

「……構わん！ 何を犠牲にしても……人類は生き残らねばならないのだ！ タキオン粒子砲発射用意！」

「はっ！ タキオン粒子砲、発射用意！ セット20、誤差修正1コンマ6！」

艦長から下された命令に従って、砲術長の席に座る男は、艦首に一門備えられているタキオン粒子砲のチャージを開始する。

呪術回路によってエンジンの魔力のオーバーコートを施されたことで、従来は完全に足を止め、発射後は他の艦に牽引してもらわなければ撃てなかったタキオン粒子砲を、今は単艦でも放ち、戦域から離脱することが可能になっている。

しかし、発射までにチャージを要するというタイムラグが発生することには依然変わりなく、それが、「アイオワ」の命運を分けたといつてもいい。

『Guooooooooo!!!』

タイプ・ホールケーキは本能的に身の危険を悟ったのか、咆哮を上げると共に、大きく息を吸い込んで、その口腔から魔力を帯びた獄炎を吐き出す。

仮にタキオン粒子砲の発射が間に合っていたのなら、タイプ・ホールケーキに対して有効打を与えることも可能だったのだろう。

しかし、無情にも吐き出された煉獄の炎は、呪術回路によって展開される魔力障壁に守られているはずである。「アイオワ」の艦体を容易く焼き尽くし、バスターを火で炙るかのように溶かしてゆく。

「バカな……っ!?!」

この光景を記録した映像が極東管区に送信できていたことだけは、幸いだったといえ



るだろう。

しかし、「アイオワ」は、主力級航宙戦艦という、オケアノス級と並んで戦後の地球連邦がその復興と力の象徴とした航宙艦は、いとも容易く焼き尽くされて、塵一つ残すことなく消滅していた。

恐怖とは何か。

それは未知なることである。

脅威とは何か。

それは恐れを伴って現れるものである。

その事実を示すかのように、タイプ・ホールケーキは天に向かって咆哮を上げると、今までラーニングしていた情報を元に、地球連邦の屋台骨、極東管区を中心たる東京へと翼をはためかせ、飛んでゆく。

「エリュシオンの星罰は下された……目覚めよ、そして滅ぼせ、この許されざる星を」  
タイプ・ホールケーキと共に現れた、複製体の魔法少女は、今までとは違い、断片的ではなく明瞭にその言葉を口にしていった。

しかし、それを聞く者はいない。

——ただ、一人を除いては。

「目覚めよ、巫女よ——エリュシオンの巫女、赤き星罰の執行者——」

複製体の言葉を伴って、解き放たれた悪夢は世界に襲いかかる。それこそが、下された審判であるとして。

その結果として与えられた、「星罰」として、人類へと、脅威は流星のように降り注ぐのだった。

## 71. 魔法少女、食卓を共に

人間というものは、わからない。

それはスティアの記憶がないという事実によるものでもあれば、同じような生き物であるのにもかかわらず、その在り方は個人によつて異なるからだということでもある。

だが、自分の質問がアンジェリカを傷付けてしまったことぐらいは、スティアもまた理解していた。

そこにある断絶は埋めがたいものなのかもしれない。

もしかすれば、アンジェリカとスティアはわかり合うことなどできない存在なのかもしれない。

そんな不安が心の中で鎌首をもたげるのを感じながらも、スティアは結衣に連れられる形で、食堂に向かっていた。

今日の配給に合成揚げパンの姿はなく、代わりに缶飯シリーズの中でもとりわけ人気が高い鳥飯の争奪戦が起こっている状況を俯瞰しながらも、無意識にスティアの右手は結衣が着ている軍服の裾を掴む。

それは、不安によるものなのか。

それとも、恐れによるものなのか。

幼い頃からの体験が形作る感情とその基準が、ステイアの中からは欠落していて、その答えはわからずじまいだ。

だが、ただ一ついえることがあるとするのならそれは、自分はアンジェリカと喧嘩をすることを、仲違いをすることを望んでいないということだけだった。

アンジェリカがステイアをどう思っているのかはわからなくとも、少なくともステイアの方からすれば、アンジェリカに対しては、好意と呼べるようなものを抱いている。

その理由は単純なもので、結衣と仲がいいから——結衣がアンジェリカと楽しそうな時間を過ごしているのを見ることが好きだから、という一言に尽きた。

ステイアの感性は、幼い子供のそれに限りなく近い。

子供というのは、無垢故に世界の広がりとお興行を知らない存在であり、そういう意味で、彼女の世界は「小日向結衣」という個人を通すことで完結してしまっている。

その良し悪しはともかくとしても、まだステイアが幼子のような存在であるということとは、アンジェリカもまた理解していることだった。

結衣は配給品の鳥飯を二つ取って、一つをステイアに手渡すと、味噌汁と合成肉で作られた生姜焼きをプレートに乗せて、一足先に食堂へ到着していたらしいアンジェリカの向かいにある椅子を引く。

「相席、大丈夫？」

「構いせんわ」

「ありがとう、アンジェリカ。ステイアも」

「……わかった……ステイアは、ここに触る……」

心の奥底に踏み込まれた怒りがそう簡単に治まってくれるものではないと理解しつつも、結衣とステイアはあくまで平常心を装って合成魚肉のムニエルを口に行っているアンジェリカへと、申し訳なさそうに視線を向ける。

以前に結衣は合成魚肉の食感と匂いが苦手だとアンジェリカに語っていたが、彼女からすれば合成肉のそれが苦手なのかもしれない。

こんな些細なことにも、細やかな違いがあるのが人類なのだ。

ステイアは考えれば考えるほどに、人間という存在がなんなのか、自分という存在がなんなのかがわからなくなって、その内希薄化していくかのような錯覚に、ぞくりと背筋を震わせる。

こみ上げてきたそれはあくまでも直感的な予想でしかないものの、自分が自分でなくなったら、「ステイア」という名前と結衣との思い出まで失ってしまえばどうなるのかなど、考えたくもないことだ。

そう考えれば、アンジェリカにとって電話をしていた誰かとの会話のあとに涙を零し

ていたのは、自分にとってのそれと同じことなのだろう。

ようやく理解が及んだスティアは、アンジェリカへと律儀にぺこり、と頭を下げる。

「ごめんなさい、アンジェリカ……スティアは、反省している……」

「昼間のことですか？ でしたらわたくしも言いすぎましたわね、申し訳ありませんわ」  
ここで意固地になって売り言葉に買い言葉を重ねないことは、間違いなくアンジェリカ的美徳だといえた。

呆気ないほど簡単に降りてきた許しに対して、結衣とスティアは困惑に目を見開いて、左右で色が違うアンジェリカの瞳を思わず覗き込んでしまう。

そこにあるのは、ある種の高貴さとも呼ぶべきものであつて、家の端くれであつたとしてもノブリス・オブリージュを、西園寺の名に恥じない振る舞いを叩き込まれてきたアンジェリカの、いわばルーティンのようなものでもあつた。

青みがかかった金髪を掻き上げながら合成紅茶を啜る姿はどこか宗教画めいた厳かさを湛えていて、生まれの違いというものを、格の違いというものを結衣は見せつけられた気分になつて、圧倒される。

高貴。高潔。

それこそが西園寺の家に求められる絶対条件であり、結衣たちの心配を他所に、アンジェリカとしてはむしろ、昼間に取り乱したことを恥だと思つている節さえあつたの

だ。

「えつと……私からもごめん。ステイアがあんなこと言つて」

「ですから、気にしていないと申し上げておりますのに……まあいいですわ、わたくしといたしまして、取り乱したことは淑女として恥ずべき振る舞い。お二方には申し訳ないことをいたしましたわ」

「ごめんあそばせ、とアンジェリカも丁寧に頭を下げて結衣たちへの謝罪の言葉を口にしますが、正直にいつてしまうのであればこの問題はほとんど十対零で結衣たちが悪い。それにもかかわらず、相手を許し、そして憎むのではなく、自分の非については謝罪をするという度量を持つ少女が、アンジェリカという存在なのだ。

ガスバーナーで温めた缶飯の蓋を、火傷をしないように注意深く開封しながら、結衣は彼女が見せる度量に再び敬服するばかりだった。

反面、それがアンジェリカの許容範囲を超えていたのであれば容赦はしないということではあるのだが、結衣は常に最悪を考えて動く人間だ。

そうでなくとも、踏み入られたくない部分にずけずけと足を踏み入れてしまったという非は、間違いない自分たちにあるのだから。

寛大なアンジェリカの判決に感謝の意味を込めて、もう一度頭を下げると、結衣たちは食卓を共にする。

そこに少なからず気まずさやぎこちなさは残っていたものの、概ねわだかまりは解けたといったところだろう。

合成魚肉の独特な食感や臭みをオイルに漬けたり香辛料をぶちまけることでなんとか取り除こうとした苦労が偲ばれる産物を、アンジェリカは優雅に口元へと運ぶ。

結衣が合成肉を好むように、アンジェリカは合成魚肉を好む。

二人の間にはそんな些細な違いがあつて、そして抱えている価値観はもつと異なるものだとしても、人間というものは、許し合うこともできれば、同じ食卓を囲むこともできる。

ステイアにはなんだか、それが一つの神秘であるかのように感じられてならなかった。

「……ステイア？」

「不思議……ステイアは、感心している……」

「感心、ですの？」

ぼんやりと宙を見上げながら呟くステイアの言葉に、アンジェリカは小首を傾げておうむ返しにその言葉を口に出す。

「うん、ステイアはそれを肯定する……人は、色んな違いがある。色んな事情がある。でも、おんなじ食卓を共にできる……ステイアは、それがとても素敵だと感じている」



「詩的ですね、ですが、その通りではありませんわ」

「詩的……？ ステイアには、わからない……」

「どうであれ、例え理想が違っていても、考えが異なっているも背中を預けて戦える。同じ食卓を囲むことができる。それは確かに、人間の本質ではありませんわ」

アンジェリカはどうとうと語る。

例えそこに至るまでどれだけ憎しみと悲しみを重ね、足元にどれだけの屍を積み上げてきたのだとしても、人というのはただ、愚かさだけを繰り返す生き物ではないと、そう信じている純粹さが、彼女の舌先から言葉を紡ぎ出していた。

人類は確かに、愚かな歴史を重ね、繰り返してきた、愚かな生き物なのかもしれない。だが、それでも歴史は前に進んできた。

歩みは止まることなく、時と共に地球を一つ屋根の下とするまでには、手を取り合うことができるようになった。

少なくともそれだけは事実であり真実だと、アンジェリカが語る通りに、結衣もまた、その歩みを、前に、未来に向けて積み重ねられた歴史を信じていたいと強く感じる。

「……それに、いつ敵星体が襲ってくるかわからないのに、身内同士でいがみ合っている暇せんもの。貴女たちにも非はあった。わたくしにも非はあった。だからこれで、手打ちにいたしましたしょう」

ムニエルを綺麗に食べ終えたアンジェリカは、ナプキンで口元を拭い、備え付けられていたおしぼりで手を入念に拭いてから、結衣とステイアへと手を差し伸べる。

「そうだね……ありがとう、アンジェリカ」

「ステイアも……アンジェリカに、感謝する」

全くもってその通りだと、ぐうの音も出ない正論に苦笑を浮かべることしか結衣にはできなかったものの、同じように身嗜みを整えて、結衣とステイアも、差し伸べられた手を握り返すのだった。

## 72. 魔法少女、月明かりの下で

アンジェリカも、内心で結衣たちの全てを許していたわけではない。

自分の劣等感に関わることや、生まれの不幸とでも呼ぶべきものは恥であり、秘めておくべきだと捉えているからだ。

だが、それ以上にアンジェリカは、西園寺の家に生まれた人間としての面子を優先した——懐と情けが深いように見せかけて、まだわだかまっている内心を隠す。

それがいかに高貴さから遠い行いであるかわかっているにしても、自分の弱さや脆さという唾棄すべきものに苦しんでいる姿を見られるぐらいならば、毒杯を煽つても強がってみせるくらいはの心意気でいたい。

そんなプライドが、弱さに打ち震えるアンジェリカを支えていたこともまた、確かだった。

洗面台で口元を濯ぎながら、鏡に映る己の顔を見つめれば、もう一度、体の芯から吐き気がこみ上げてくる。

赤と青。左右で色が違う瞳はその鏡像も反転するだけで、同じ色を帯びてはくれない。

カラーコンタクトを着用するという手段もあるにはある。

しかし、自らの弱さを認めてしまうのに等しいそんな行いをアンジェリカのわがままと紙一重の自尊心が許すはずはない。

ならばこそ、魔法少女として。

第一世代魔法少女には及ばずとも、第二世代の「早生まれ」——あの忌まわしき「赫星一号」が破壊された直後に覚醒した魔法少女として、武勲を立てる以外に己の価値を認める手段などありはしないのだ。

「お父様、お母様……わたくしは……」

そんなことをしなくても、ただ愛してさえもらえればそれで十分だった。

それもまた、アンジェリカにとっては偽らざる本音である。

しかし、西園寺の家は、血族の旧弊に縛りつけられたあの家は、左右の瞳で色が違うというだけで生まれた末娘を愛してくれるような場所ではない。

故に、戦う。

故に、多くの敵星体を殺し続ける。

そうすることでしか、「西園寺」の名を背負う人間としての責務を果たすことでしか、自分には愛される資格などないと、アンジェリカは知っているから。

だからこそ、アンジェリカは今日も貞淑な女性としての仮面を被り続け、その下にあ

る涙を、誰にも見せないように拭い続ける。

それが緩慢な自傷であると、迂遠な自殺であると知っていても、そうすることしか、不器用な彼女にはできないのだった。



結衣たちは食事を終えた後、施設の中庭へと向かっていた。

そこに何か特別な理由はない。

強いていうのであれば、今日はやけに星が綺麗だと、食堂で兵士たちが言葉を交わしていたのを聞いたからかもしれない。

中庭に設置されたベンチに腰掛けて夜空を仰ぎ見れば、その言葉が真実であることを示すかのように、くつきりと夜の帳に浮かび上がる満月が、朧に足元を照らしている。

思えば、空を仰ぎ見ることなどほとんどなかった。

空といえば敵星体が降ってくる場所であり、流れ星のように降り注ぐタイプ・キャンデーやタイプ・クツキーを相手に、明日をも知れない戦いを、3年前は繰り返していたのだから、星空を見上げて心は荒むばかりだったのを、結衣は今でも思い出せる。

空は敵であり、宇宙に夢はない。

一時は内惑星圏の開拓まで手を伸ばした人類の夢は容易くへし折られ、火星に生きていた人間は、スペースコロニーに住んでいた人間は皆、敵星体に塵殺された。

だからこそ、敵星体とは憎むべき存在であり、魔法少女としてこの地球に選ばれた自分たちは奴らを根絶やしにするまで戦い続けなければならぬ。

そんな使命をも、今、このひとときだけは忘れていられるような星空を見られたのは、幸運がそうさせたのか、それともスティアとの生活が、自分に上を向かせるだけの活力を与えたのか。

きよとんと小首を傾げて、その髪から粒子を舞わせるスティアへと視線を向けて、結衣はふつ、と小さく笑ってみせる。

「どうしたの、結衣……？」

「ううん、きつと、両方だなんて」

「両方……スティアには、わからない……でも、結衣が嬉しいなら、スティアも、嬉しい」  
覗き込む角度で色を変える不可思議な瞳に、虹のプリズムを宿しながら、スティアは、満点の星々をその手に掴むかのように、掌を宙へと無邪気に掲げた。

人間とは不思議で、非合理的で、よくわからない生き物だという認識は、今もスティアの中で変わったわけではない。

それでも、結衣が嬉しければ自分も嬉しい。

結衣が悲しければ自分も悲しい。

他人に依存するものであったとしても、心の中に芽生えたその想いだけは紛れもなく本物だ。

故にこそ、あの沖縄での夜に、泣いていた結衣にかける言葉がなかった自分が、そして絵理がその隣にいたことにささくれ立った感情をステイアが抱いていることもまた、事実だった。

「人間は……不思議」

ぼつりと、掌の中に星を収めてステイアは呟く。

自分もその一部であることを認めているからこそ、そしてそこに記憶という致命的な欠落を抱えているからこそ、少しでも引いた時点でその営みを俯瞰したときに、そんな言葉が喉から零れて落ちるのだ。

「ステイア？」

「……絵理が結衣の隣にいる時、ステイアは嬉しい。結衣と絵理の仲がいいのは、喜ばしいこと……ステイアはそう理解している。でも、ステイアにはわからない……どうして、結衣と絵理が一緒にいるとき、少しでも胸の辺りが苦しくなるのかが、わからない」  
歌を口ずさむかのように、ステイアはその眦へと涙を滲ませながら、結衣を振り返って舌先から言葉を紡ぎ出す。

唐突な問いかけに、結衣は思わず身を強張らせる。

確かに自分と絵理の仲は悪いものではなく、むしろいいものだという自認はあって、寄せられている感情が好意というものに分類されることは結衣にもわかっていた。

しかし、それに応えるだけの、もらっただけの好意に釣り合うだけの想いを、今の自分は出力することができない。

もちろん、絵理のことが嫌いだという話ではない。ただ、自分は心の中で込み入った感情を処理するための回路が壊れていて、受け取ったものに対して何も返すことができないから、想いに縋りながらも、その想いに見て見ぬふりを繰り返してきたのだ。

そして、スティアもそういう感情を抱いているのなら、自分は二人の間で板挟みになっっているということになる。

答えを俯瞰して、導き出すことだけならば単純だった。

その感情の名前は、たった一言で、文字に起こせば二つだけで終わるような、単純極まるものだと答えることは、それだけを鑑みるならばきつと容易い。

心の中に嵌められた枷を無視すれば、そして自分が二つ寄せられたその感情の板挟みになった当事者であるということを除けば。

その条件を取り除けないからこそ、どう答えればいいのかと結衣が言葉を喉元に押し留めていた、その時だった。



「——ッ、来る……!」

スティアが突如として頭を抑えて、地面に蹲る。

それは彼女が敵星体の存在を感じたということを示すものであり、少し遅れて、極東管区総司令部全体に、聞いたこともないようなけたたましい警報が鳴り響く。

『緊急事態宣言発令、繰り返しします、緊急事態宣言発令! 地上に住んでいる市民の皆様は、今すぐ地下都市へと避難してください! 繰り返しします、これは訓練ではありません!』

何やらただ事ではないのは、スティアの怯えようからも察せられたが、極東管区が即座に緊急事態宣言を発令して、市民への避難を促している割に、結衣の中で響いている「星の悲鳴」の距離は遠い。

これは一体、どういうことなのか。

「ドレス・アップ!」

混乱する頭を沈めるように、結衣は魔法少女へと自らの姿を変化させ、スティアの背中をさすりながら、より強く内側に響き渡る「星の悲鳴」を辿っていく。

そうして行き着いた真実は、絶望に塗り込められていた。

沖縄で矛を交えた超巨大敵星体と同様の反応が六つ、東京に向けてゆつくりとではあるが侵攻を続けている。

その他有象無象の敵星体反応に関しては、数え切れないほどだ。

『緊急命令だ！ マジカル・ユニット及び全ての魔法少女は総司令部に集合しろ！』

外で一体何が起きているのか——その事態を結衣が把握するよりも早く、諏訪部からの招集命令が、焦りと共に響き渡るのだった。

## 73. 魔法少女と隠された秘密

「ええい、状況はどうなっている!」

「はっ! 超巨大敵星体反応が六つ、数え切れないほどの敵星体反応を伴って、東京を指している模様です!」

「馬鹿な……何故このようなことが……」

軍務局長は、北米管区から寄せられた情報と衛星による画像を照合、更にはレーダーが捉えた情報が一致したことを受けて、膝から崩れ落ちんばかりの絶望に青ざめる。

先日、沖繩で確認された超巨大敵星体——タイプ・ホールケーキの発生を未然に食い止めようと、管区を跨いでの大規模作戦を検討していた最中の奇襲だ。

彼が青ざめるのも無理はないと、その傍らでマジカル・ユニットや魔法少女たちに招集をかけていた諏訪部もまた、軍務局長が動揺する姿を見たことで、かえって冷静になることができていた。

それでも、気を抜けば、身構えていなければ頽れてしまいそうなほどの絶望が喉元に突きつけられている事実が変わりはない。

「六体のタイプ・ホールケーキは本当に極東管区を目指して侵攻しているんだな?」

「間違いありません、現在進路上にある管区の部隊が迎撃に当たっていますが……」  
「期待はできません、か……奴ら、一体この東京の何に目をつけた？」

諏訪部は懐から取り出した指示棒でばしん、と掌を打ち据えながら、敵星体が脇目も振らずに東京を目指している状況を俯瞰する。

ステイアがビーコンになっているかもしれないという説は、「ラボラトリー」の調査によつて今のところ否定されている以上、原因は他のところにあると見るのが妥当だろう。

極東管区は、いち早く魔力を一般的な人類でも運用できるように切り分けた装置——呪術回路の生産に乗り出したために、きな臭い噂というのは叩けば埃のように出てくるような場所だ。

だが、それらのスキヤンダルが立ち位置を危うくするのは政治家や急進派の軍人たちであつて、敵星体がよもや、タイプ・ホールケーキなどという決戦兵器にも等しい存在を引き連れてやつてくる理由にはならないだろう。

「考えられるとするなら、大呪術結界の存在……？ いや、まさか……」

諏訪部の隣に佇んでいた真宵も、どうやら同じことを考えていたのか、銀縁の眼鏡を指先で持ち上げながら、己の中に零れ落ちた仮説をぽつりと呟く。

「大呪術結界？ 何がある……いや、何を感じた、宮路少佐？」

東京に張り巡らされている呪術結界は、世界で一番早く実用化されたものでありながら、世界中におけるどの呪術結界よりも密度や出力が高いため、大呪術結界と呼ばれていることは、知識として諏訪部の頭の中にも入っている。

そこにもあれこれきな臭い噂があつて、諏訪部自身も優衣を通じて呪術回路の生産には加担していたものの、それ以上のことは知らない。

隠し事をすれば容赦はしないとばかりに向けられた視線に、真宵は諦めたように肩を竦めて、軍務局長や司令長官といった主要な閣僚の間では公然の秘密となつているその事実を、そして敵星体が東京をめがけて押し寄せているかもしれない可能性を、この場での銃殺すら覚悟した上で舌先に乗せる。

「東京を守る大呪術結界……そこに使われてる呪術回路、あれつて試作品なんですよ」「それはおれも聞かされている、それと敵星体との間に何の繋がりがある?」

「……大呪術結界を支える呪術回路には、不活化した『赫星一号』の破片が含まれているんですよ」

「なんだと……?」

名付けとは呪いであり、本来は魔法少女しか扱うことができないう魔法を人類が扱えるようになったのは、起きている現象を切り分けて、再定義することで高次元から得られるエネルギーだと分節化したことによるものだ。

その過程において、小日向結衣というバイパスを必要としていたことは諏訪部も知っていたの通りだったが、それだけでは東京を守りきるための呪術結界の起動に不安が残る、という「ラボラトリイ」の懸念がそこには残されていた。

そこで真宵たちが目をつけたのが、東京を占拠していた「赫星一号」の破片だったのだ。

結衣を通じて魔力を採取したときのように、徹底的な切り分けと再定義を行うことで、「赫星一号」の破片は、魔力を供給し続けるバイパスとして不活化されていたはずだった。

だが、実態としてそれがもし異なっているのだとしたら、不活化されたのではなく、表面上そう見えるだけで今も「赫星一号」の破片が活動を続けていたのだとしたら。

真宵が語る真実と秘密に、諏訪部はまたもや膝から崩れ落ちそうになったものの、歯を食いしばって踏みとどまる。

「その仮説が本当なら、おれたちは敵を抱き込み続けていたことになる……！」

「……不活化は完璧になされていたはずです！ 立ち会った魔法少女からも、今の『赫星一号』の破片からは敵星体反応が検知されないという証言も得ていますが……」

「今になって、眠りから目覚めたともいうのか……？」

諏訪部は苛立ち紛れに指示棒で自分の掌をぱしん、と打ち据えながら、モニターに投

影されている各地からの映像や、衛星画像を一瞥して、小さくため息をついた。

怪我の功名というべきか、不活化された「赫星一号」の破片が呪術回路に組み込まれたことで、東京を覆う呪術結界の強度は、第一世代魔法少女が纏う魔力障壁と同等以上のものを確保することに成功している。

一発だけであれば、タイプ・ホールケーキによる攻撃を受けても耐えきることができらるだろう、という試算も、リアルタイムで算出されて正面のモニターに映し出されていた。

だが、六体のタイプ・ホールケーキが一堂に介して攻撃を行った場合、それに耐えることはできないという予測も、同時に導き出されている。

「可能性の話はいい、各管区に緊急入電を入れろ！ 最悪、オケアノス級のタキオン粒子砲を用いる可能性も伝えた上でな！」

軍務局長は押し問答を続ける諏訪部と真宵を一喝すると、最悪の可能性を考慮した上で、各管区へと事態を傳達するように命令する。

一応は進路上にある管区が迎撃部隊を出しているものの、その規模で乗り切れるような事態ではない。

連邦防衛軍の中でも総司令部を持つ極東管区は緊急出動命令を発動する権限を有しているために、できる芸当だった。

それは即ち各管区最強の魔法少女と分配された主力級航宙戦艦、そして魔法少女隊、呪術甲冑隊の全てを投入した上での総力戦を行う構えであり、軍務局長の言葉に司令長官も同意し、頷いたことで、この場における戦力の集中投入は緊急事態条項として承認される。

「こうなればやむを得まい、緊急事態条項として、現在から各管区を戦時態勢に移行。地球における総力をもつて敵星体を撃滅する」

司令長官の言葉は、リアルタイムで開かれた回線を通じて各管区へと通達されていく。

少なからず動揺はあったものの、現在起きている事態を鑑みれば仕方がないことだとばかりに、画面に映った管区の責任者たちは、慌てて総力戦の体制を整えるべく部下たちに指示を下していた。

「マジカル・ユニット、到着しました！」

「遅いぞ！ 見ての通りの緊急事態だ！」

「申し訳ありません！」

中庭から大慌てで走ってきた結衣たちは、絵理やアンジェリカ、美柑と合流して総司令部へと到着していたのだが、事態はどうやら深刻な方向に傾いていたらしい。

これは落ち度だと諏訪部からの叱責を受け入れて、結衣は腰を折って頭を下げる。



赤い字幕に総力戦体制の白文字が並ぶ、あの「赫星一号」が地球に最接近してきたとき以来の事態に、張り詰めた緊張が背筋を伝う。

一度変身して「星の悲鳴」を辿ったものの、六体のタイプ・ホールケーキが全て東京を目指しているこの現状は、絶望的だといってもよかった。

差し当たって、地球連邦政府にも働きかけが行われたことで総力戦体制への移行が行われたことはいいものの、各管区が持てる全戦力を投入しても、最低でも二体は、戦術シミュレータによつて東京への到達が予想されている。

「期待できるのは北米管区、北欧管区、モスクワ管区、オセアニア管区か……」

軍務局長の、常に強硬な姿勢を崩さない彼にしては弱気な呟きが、総司令部の中に漂う絶望的な空気をより深く澱ませていく。

中東からの侵攻に際しての要衝となる北京管区は先日、大打撃を受けたことで機能不全に陥っている。

従つて、人類の生存圏が確立されていないアフリカからの侵攻と、その進路となる中東管区からの侵攻はどう足掻いても止めることができない、というのが戦術シミュレータによる試算だった。

あまりにも、あまりにも絶望的な戦況に誰もが言葉を失って黙り込む。

しかし、ここで立ち止まっては行かないこともまた事実だ。

「戦況は聞いての通り絶望的だ……しかし、人類は生き延びなければならぬ！ どんな手を使っても、石にかじりついてもだ！ 諸君らの奮戦に期待する！ マジカル・ユニット及び魔法少女隊は第一種戦闘配備！ 敵星体の襲撃に備えていつでも出られるようにしておけ！」

諏訪部は気合を入れるかのようにぱしん、と三度指示棒で己の掌を打ち据えながら、マジカル・ユニットへ、魔法少女隊へと命令を下すのだった。

## 74. 魔法少女と厄災の日

馬鹿じゃないのか、というのが、戦時体制へと移行したことで全ての戦力が投入されることを決定づけたこの事態に対しての、アナスタシアの感想だった。

サンクトペテルブルクにあったダンジョンが崩壊したことによって現れたタイプ・ホールケーキはゆつくりと、東京を目指して侵攻しているらしいが、その進路上にはモスクワが、人類の生存圏が含まれている。

ダンジョンアタックに赴いていた部隊はいなかったため、被害は軽微であったものの、それでも自分たちが出遅れたという事実には変わりはない。

主力級航空戦艦十隻と、全ての魔法少女隊と極東管区から支給された呪術甲冑隊の全てを投入しても、あの氷の鱗を纏う竜にも似たタイプ・ホールケーキに勝てるかどうかは微妙なところである、というのがアナスタシアの見立てだ。

超巨大敵星体だけでも厄介だというのに、おまけについてくる敵星体の数もおびただしいという次元ではなく、場合によってはタキオン粒子砲の使用さえ許可されているということが、この事態の異常さを雄弁に物語っている。

「ナスターシア、あれって……」

「ええ、アデリーナ。私が沖繩で戦った個体とは随分違うけど……同じものよ」

アデリーナと呼ばれた金髪の二世代魔法少女は、アナスタシアが氷の槍で指し示した敵の群れ、その中心で羽ばたく巨大な竜——タイプ・ホールケーキの威容に戦慄した。無理だ。勝てるわけがない。

そんな、弱気な言葉が脳裏に浮かぶのも、無理もない話だった。

二世代最強と呼ばれているアナスタシアならまだしも、アデリーナたちのような第二世代魔法少女では、メタモルブーストを起動しない限り、その取り巻きを倒せるかどうか微妙なところだ。

今のところ、主力級航宙戦艦が秒間十数発という連写速度を誇る艦砲射撃や、呪術回路を組み込んだミサイルによる飽和爆撃を行うことで、タイプ・キャンディやタイプ・クッキーとその変異体といった小物は駆逐されつつあるものの、それでもまだ、空を埋め尽くさんばかりに敵星体はひしめいている。

主よ、と、アデリーナが思わず祈りを捧げるほどに戦況は絶望的であり、他の魔法少女たちも同様だった。

「もう終わりよ！ あたしたちはここで死ねて、そういうことなのよ！」

「落ち着いて、アンナ！」

自分たちはここで死ねと、そう言われているのだと錯乱する魔法少女も出始めてい

る。

無理もないことだとは、アナスタシアもそう思う。

沖繩に出現したタイプ・ホールケーキは、各管区における最強の魔法少女が集められたことによつてようやく討伐に至つたものだ。

それを自分一人で、しかも相克するような「氷」を身に纏う超巨大敵星体を倒せというのはあまりにも横暴だ。

しかし、ここで敵の蛮行を放置していたのであれば、東京どころか、モスクワに住む市民たちが犠牲になる。

姉が、母が、父が敵星体に殺された時の怒りを、アナスタシアは静かに思い返す。

そうして、沸々と滾つてくる血の蠕動に、怒りの目覚めに身を任せて、敵を殺せと、仇を討てと、義憤の名の下に正当化された殺意に身を任せる。

「……メタモルブースト！」

自分の魂にどれだけの「猶予」が残されているのか、アナスタシアにはわからない。

だが、敵も全てのダンジョンを放棄しての総力戦を挑んできたというのなら、ここで全てを使い果たしたとしても、悔いが残ることはないはずだ。

自分のことを哀れんでくれる家族は既に天国の門を叩いて旅立つた。自分のことを悲しんでくれる友人たちもまた、死地に駆り出されて明日をも知れない身となつてい

る。

それは自分も変わらない。

ならば、アナスタシアにとって、ここで死ぬことに躊躇いはなかった。

人類が最も恐れる幻想種であるドラゴンの姿をとった超巨大敵星体が纏う冷気をかき消すかのように、絶対零度の魔力をその身に宿したモスクワ管区最強の魔法少女は、通りすがるだけで有象無象の敵星体を凍らせ、砕きながら前進する。

そこに後退の二文字はない。そこに後悔の二文字もない。

文字通りに己の全てを使い切ることに、アナスタシアは躊躇いを持たず、ただ一人、果敢に絶望へと挑みかかるのだった。



「ははっ……イかれてやがるぜ、こいつはよー!」

同時刻、南米から侵攻してきたタイプ・ホールケーキの迎撃に当たるために全ての部隊を駆り出された北米管区の面々の中で、アリスはその先陣に立ちながら引きつった笑いを浮かべていた。

先行偵察を行ったことで「アイオワ」を失い、北米管区が有する主力級航宙戦艦は九

隻と、モスクワ管区に比べて一隻少なくなっているものの、それをカバーするかのよう  
に、メタモルブーストを起動したアリスが「爆破」を付与した弾丸をばら撒いて、敵星  
体を撃滅していく。

有象無象を殲滅する中でアリスの瞳に映し出されたそれは最早、移動する樹海とでも  
呼ぶべきものだった。

タイプ・ホールケーキがドラゴンの形態をとっていることには変わらないが、南米管  
区の守りを突破して東京へと赴こうとしているその個体は、超巨大、という言葉すら生  
ぬるいほどに大きく、全身にびっしりと苔や樹木を生やした形態は、異様の一言に尽き  
る。

だが、植物を操るといふ特性を持ち合わせているのならば、それは文明の象徴である  
「火」と食い合わせが悪い。

不幸中の幸いというやつだろう。

アリスは天の廻りに感謝を捧げつつ、アサルトライフルのトリガーを恍惚と共に引き  
続けていた。

『○○○○○○○○○○……』

その前に質量で全てを押し潰さんと、タイプ・ホールケーキが掲げた巨大な掌が、周  
囲を回遊する敵星体を巻き込むことを厭わず、大雑把に振り下ろされる。

その巨大な腕は、魔法少女を、そして背部のジョイントに先日完成したばかりのフライトユニットを装備している呪術甲冑を容赦なく打ち据えて海面へと叩きつけ、肉塊も残さず血霞へと変えていく。

「この野郎が……人様の星で、好き勝手やってんじゃねえぞ！ 行くぞ野郎共、タマがあるならガッツを見せろ！」

「イエス・マム！」

質量というのは、それだけで大きな武器になる。そこにスピードが乗ったとなれば尚更だろう。

しかし、アリスは、彼女に率いられた海兵隊は死をも厭わぬかのようにその巨大な暴力を意のままに叩きつける超巨大敵星体へと、ミサイルや銃弾の雨霞をお見舞いしていた。

死ぬことが怖いか怖くないかでいえば、当然怖いに決まっている。

アリスは己のろくでもない半生を振り返り、己の中に滾る闘志と、己の中で震える強かりを緋い交ぜにして獯猛に微笑む。

地下都市の中でもスラムのような街区に押し込められ、それ以前もスラム同然の場所で暮らしていたアリスにとって暴力は日常茶飯事で、生きることは常に死と隣り合わせだった。



そんな自分が「星の悲鳴」を聞いて魔法少女に選ばれただけで、特権階級に成り上がったことを恨んだ街区の住人たちは両親を惨殺するという暴挙に出たことを、アリスは今でも覚えている。

「別になあ、あたしは人類のことなんてどうでもいいんだよ……でもなあッ！」

人類は愚かで、救いようがない。

そのペシミズムがアリスの中から消えることは、未来永劫、あり得ないだろう。

だが、だからこそ——ろくでなしとクソツタレが跋扈している世の中だからこそ、自分の命をそう簡単に誰かに握られてたまるかという意地が、魔法少女としてアリスを突き動かしていたのだ。

これが神様とやらが定めたアポカリプスであるとしても、黙示録に示された破滅の日であろうとも関係ない。

「あたしは、あたし以外であたしの命を思い通りにしようとする奴をぶつ殺す！ それだけだ！」

咆哮するアリスは弾丸に「炎」の属性を付与することで、タイプ・ホールケーキの全身を覆う樹海を燃やし尽くそうと引き金を引く。

彼女の意志に応えるかのように、麾下の呪術甲冑隊もまた、背部のフライトユニットに懸架されたミサイルポッドから、弾の一発たりとも惜しむことなく全てを吐き出し

て、蠢く大樹海を燃やし尽くそうと試みていた。

その闘志に触発された魔法少女隊が、そして主力級航宙戦艦の隊列が、有象無象の敵星体を鶴瓶撃ちに叩きのめしながら、タイプ・ホールケーキを照準に収めて魔法を、主砲を撃ち放つ。

そうだ。

例えこれが定められた滅びであつたとしても、神からの試練であつたとしても、乗り越えられない試練を神はお与えにならないはずなのだ。

気休めに過ぎない言葉で己を鼓舞しながらも、神なき新星暦の地球において、人類はまだ生き伸びようとしていた。

摂理として、本能として。

襲いくる破滅に抗おうと、人類は戦いを続けるのだった。

## 75. 魔法少女、戦火に立つ

「タイプ・ホールケーキの侵攻状況はどうなっている？」

「はっ、現在『アイオワ』を撃墜した個体及び、中東防衛線を突破した個体が東京へと接近しています」

諏訪部の質問に、観測手が間髪を入れずにそう答える。

彼が答えた通り、既に北米管区を飛び出した炎を操る個体と、現時点では中東管区が艦隊戦でもって食い止めているものの、その防衛ラインを引き裂き、瓦解させる、水を操る個体が突出し、東京に向かっていているという状況は、控えめにいつても良くないものだ。

これでも、他の管区が持ち堪えてくれるおかげだというのは理解しているが、諏訪部の脳裏には、地上でタキオン粒子砲の使用を余儀なくされる最悪のシナリオがよぎっていた。

二体のタイプ・ホールケーキを同時に相手取ることになるだろうという戦術シミュレータの予測は、間違っていないなかったということだ。

指示棒を握り締めながら掌を叩き、諏訪部は既に出撃準備を済ませたマジカル・ユ

ニットや魔法少女隊、フライトユニット装備の呪術甲冑隊が戦域となる区域まで飛び立ったのを確認し、唇を固く引き結ぶ。

「……この戦い、どう転びますかねえ」

「勝つ他にあるまいよ、そうでなければこちらが滅ぶ」

「劇的な滅びはやってこない、なんて昔の小説では言われてましたけど」

「事実は小説より、ということだ、宮路少佐」

最悪のシナリオすらも破綻したら、この星からおよそ人類と名乗る生命体は完全に駆逐されることになるのは、諏訪部も真宵も理解している。

誰がいったかは知らないが、人類の滅びは劇的な断末魔を上げるのではなく徐々に瘦せ細って衰えていくものだという言葉があるらしい。

しかし、事実として厄災の日は訪れて、破壊の使者は滅びを定めたかのように人類を蹂躪しようとしているのだから、当てになるものではなかった。

タイプ・ホールキーが星のリソースを吸い上げて擬態したのは、人類がおよそ思い描く中でも最強の幻想種であるドラゴンだ。

これほど滅びに瀕した人類の背中をその淵へと蹴落とすのに相応しい存在はないだろうと、そうとでも主張しているのだろうか。

対話が成り立たない以上、それは知りようもないものの、諏訪部だけでなく、軍人た

ちのほとんどが、振りかざされた理不尽に対して怒りを覚えるのも無理はない。

オケアノス級戦艦三隻に、主力級航宙戦艦が三十隻。

魔法少女以外の戦力として考えられる中でもっとも大きな単位である戦艦で換算しても、極東管区に配備された戦力と、他管区の間では、比較にもならないほどの格差が生じているのも事実だ。

しかし、これだけの大艦隊をもってしても第二次赫星戦役と呼んで差し支えないこの戦いに勝利できるかどうかは、厳しいものだった。

そういつた予測を戦術シミュレータが弾き出している辺り、茨の道を進み、時には自分から危険に飛び込まねば、奴らに対しての勝利を得ることなど不可能だということもまた、事実だ。

これからが地獄だ、と諏訪部は身構えたものの、既にここは地獄の一丁目と化しているのだから、あとはどちらの精魂が尽き果てるかにかかっている。

奴らを滅ぼすのが先か、奴らに滅ぼされるのが先か。

久しく忘れかけていた生命を鉄火場に引き摺り出された感覚を抱きながら、諏訪部は真宵と共に、出撃した魔法少女たちと兵士たちの行方を注視するのだった。



かつては花の都と呼ばれたパリも、生存圏を確立できなかった人類の末路を示すかのように、敵星体で溢れかえっている。

エツフェル塔をその巨大な鉤爪で鷲掴みにした、風を操る凶鳥——のような面構えをしながらも、その全身を強固な鱗に包んだ幻想種、ドラゴンの形を取ったタイプ・ホルケーキは、北欧管区の差し向けた戦力に向けて威嚇とも取れる咆哮を上げた。

「あらあら、ゴミが一丁前に吠えていますねえ、そんなに死に急ぎたいのですか？」  
誰もが本能的な恐怖に神経を凍らせ、背筋を震わせる中で、地球連邦防衛軍、その艦隊の先頭に立つ第二世代魔法少女だけは、子供の戯言を聞いたかのように、ただ穏やかな笑みを浮かべていた。

クラウディア・ゼッケンドルフ。

北欧管区の中では最強と称えられる、狂気の炎に身を焦がすインファイターは、はちきれんばかりの筋肉をパンプアップさせて、鎌鼬が叩きつけられるのも厭わず、タイプ・ホルケーキへと呐喊していく。

「さあさあ、皆さんも腑抜けていないでゴミを減らしてくださいね？ あのデカブツは、私が殺しますからあ」

蜂蜜を溶かしたミルクのように甘く、母性を求める心をくすぐる声音をしていながら

も、クラウディアの口から飛び出てくる一言一句は全て、敵星体に対する憎悪で溢れかえっている。

その理由を知るものは北歐管区でもごく僅かだったが、理由を知る者はすべからく、その狂気とも取れるほどの殺意に納得を抱き、同情を寄せていた。

クラウディアの叱咤を受けた艦隊が、呪術甲冑隊が、魔法少女たちが、各々の手にする武装で、あのタイプ・ホールケーキを取り囲む有象無象の敵星体に攻撃を仕掛け出す。

魔力のオーバーコートを受けた、一秒間に十数発という密度で放たれる陽電子衝撃砲塔の連射がタイプ・キャンディを、タイプ・クツキーやその変異体を穿つ。

フライトユニットを装備した呪術甲冑隊による、高高度からの奇襲によって、飛竜級の変異体が地に叩き落とされる。

——そうだ、それでいい。

クラウディアは己の肉体に特質である自己強化魔法をかけると、メタモルブーストの解号を叫びながら、タイプ・ホールケーキとの距離を、襲いくる風の刃を躲しながら確実に詰めてゆく。

元々、クラウディアはしがない村娘に過ぎなかった。

農村で生まれ育ち、都会への憧れを密かに胸へと抱きながら、平々凡々と日々を過ごす夢見る少女。

「破ああああッ！」

それが何故、敵への憎しみに身を捧げ、筋骨隆々とした戦乙女に変貌したのかと問われれば、その答えはどこにでもありふれたものと、そうでないものの二つに分けられる。

一つは、クラウディア自身の動機。

敵星体に家族を皆殺しにされた。

愛する父を、母を、祖父母を、弟を無惨な姿に変えられた憎しみと悲しみという激情は、彼女を一つの「計画」へと導くことになる。

——プロジェクト・ワルキューレ。

それがもう一つの理由にして、北欧管区がひた隠しにしている、実験だった。

第二世代魔法少女は、いかに「早生まれ」であろうとも、そこには第一世代魔法少女と決定的な線引きが存在している。

実力と保有する魔力量の違い。そこに目をつけた北欧管区は、「早生まれ」の第二世代魔法少女にスポットライトを当てて、その能力を何とか第一世代に匹敵するほどに高められないかと苦悩したのだ。

その結果こそがクラウディアであり、唯一の「成功例」であることは、彼女以外の魔法少女が敵への恐れを抱えていることがなによりも雄弁に物語っている。

薬物による肉体強化と、後天的な催眠、暗示によって敵への憎しみを肥大化させる。



そうして死をも恐れぬ最強の戦乙女を人の手で作り上げようとした傲慢は、当然のようによくの魔法少女の脳神経を焼き切り、副作用で廃人へと追い込む形に収束した。

ただ一人、クラウディア・ゼッケンドルフを除いては。

故に、クラウディアの存在は、北欧管区が誇る唯一の成果にして、同時にひた隠しにした汚点でもあったのだ。

轡を並べる戦友から化け物を見るような目で見られようと、軍人たちが顔を青ざめせようと、クラウディアにとっては敵星体への復讐こそが全てだったからこそ、穏やかに微笑んでいられたのだ。

ナメるな、とばかりに放たれる飄風の刃に全身を切り刻まれながらも、致命に至らない限り、クラウディアは止まらない。

しかし、メタモルブーストによる自己強化の増幅をもつてしても、タイプ・ホールケーキに単騎で対抗するには至らない。

「くっ……ゴミ風情が、やってくれますねえ……！」

『Kyokkyoko……！』

巨大な戦鎧を構えるクラウディアは、エツフェル塔を鷲掴みにしながら哄笑を上げる超巨大敵星体を見据えて、口元に滲んだ血を拭い取る。

「……これで戦いが終わるなら、ここで戦いが終わるなら……！　うふふ、メタモル……」

バーン!!!」

そうして、鋼鉄の戦乙女は決意した。

己の魂を星の炉に焼べてでも、その全てを捧げてでも地球を汚すこのゴミを、殺さなければならぬと。

禁じられた解号を唱えたクラウディアの魔力は天を裂いて溢れ出し、パンプアップした肉体は更に筋骨隆々とした逞しいものへと変わっていく。

戦いは、始まったばかりだ。

そう告げるかのように、跳躍したクラウディアは放たれた風の刃を、己の戦鎚で叩き潰すのだった。

## 76. 「魔法少女クラウディア」

「艦長、クラウディア・ゼッケンドルフがメタモルバーンを使いました！」

「うむ……しかし、この状況では致し方あるまい」

北欧管区の総旗艦を務めている主力級航空戦艦、「ビスマルク」の艦長席に座る男は、狂気の炎に身を焦がすクラウディアの選択を、事実上の自殺にも等しい行為を、見送ることしかできなかつた。

元々の想定が総力戦である以上、脱落する魔法少女が現れることは想定範囲であり、それを良しとするかどうかはともかくとしても、誰一人犠牲にしない勝利などあり得ない、というのが北欧管区の総意だというところもある。

メタモルバーンによって魔力量を強制的に引き上げたクラウディアの力は、魂が燃え尽きるその時まで、という前置きがつくものの、第一世代魔法少女のメタモルブーストに勝るとも劣らない。

できることならば、タキオン粒子砲を使用せずに勝利したいというのは連邦全体としての本音であり、そのために魔法少女を犠牲とするような形に心が痛まないのかと問われれば、それを踏み倒すのが戦いだと言えざるを得ないのが現状だ。

寒い時代だと、神なき新星暦の時代を憂いながら、「ピスマルク」の艦長は軍帽を目深にかぶり直す。

「紳士諸君、ワルキューレは挺身を見せてくれた！ ならばそれに報いることこそが、我々の最大の目的である！ それは違うか！」

オープンチャンネルを開いて飛ばしたアジテーションの言葉が、かつて栄華を誇った花の都に寒々しく響く。

しかし、雄々しく叫びを上げて恐怖を踏み倒し、クラウドディアの「猶予」が尽きるまでの時間にあのタイプ・ホールケーキを倒せなければ、事実上、それは地球側の敗北になる。

戦いに勝ちたくてこの場に馳せ参じた者など、ごく僅かだろう。

多くの人間はまだ、この地獄の先にも通りの、普段と変わらない穏やかな生活が待っていると信じたからこそ、地獄の一丁目に足を踏み入れたのだ。

大義や正義のための礎となる、と虚飾を施したところで、そこに伴う犠牲をなかつたことにはできず、また、流れ落ちた血を濯ぐことはできない。

そんなことはわかつている。

魔法少女も、兵士も、船乗りも、皆わかつていても尚、その甘美な嘘に自らの心を任せ、理性を彼方に押しつけて、恐れを知らぬ戦士のように振る舞おうとしているのだ。

「聞いたな、紳士諸君！ クラウディア・ゼツケンドルフがああタイプ・ホールケーキに到達するのを俺たちは支援すればいい！ 取り巻きは艦砲射撃と魔法少女に任せておけ！ 一秒でもいいから時間を稼ぐんだ！」

「了解！」

フライトユニットを装備した呪術甲冑隊が、「ビスマルク」から飛ばされた檄の言葉に触発されたかのように、風を、嵐を刃としてその身に纏う竜もどきへと突撃を敢行する。

アサルトライフルの銃弾が例え纏う風の前に吹き飛ばされても、パイロンに懸架されたミサイルポッドから放ったミサイルが明後日の方向に飛んで行こうとも、とにかく敵の気を引き続けることだけに注力して、兵士たちはクラウディアが進むための道を切り開いていく。

しかし、現実是非情であり無情なものだ。

『Kyokkyokyo……Keeeehhhh!!』

「隊ちよ……うわあああッ！」

「オットー！ クソッ、この竜もどきが！」

一人、また一人と脱落していく兵士たちを見送りながら、一足先に自由になった彼らを悼みつつも、残された者たちは足を止めることをやめない。

ここで止まれば、ここでやめれば、全ての犠牲が無駄になる。

これがもしも人間同士の戦争であったのなら、そんな馬鹿げた考えに至るより先に、妥結点を探して戦いに幕を引くことも、あるいはできたのかもしれない。

だが、これは絶滅戦争であり生存競争なのだ。

敵星体という理解不能にして対話不能な敵と戦って、勝利をその手に取らなければ、全ての命は区別なく塵殺される。

そのことを、誰よりもクラウドディアは知っていた。

慎ましく麦を育てて暮らしていた家族に、何か、殺されなければならないほどの落ち度があっただろうか。

もちろん、人間である以上その人生に多かれ少なかれ瑕疵があることは確かだろう。

罪を犯したことの無い者などいない。

罪人に石を投げつけられる穢れなき者など、この地上には存在しない。

「うふふふ……うふふふふ……いー」

クラウドディアは過剰摂取した薬物と、そして己が燃やす復讐の狂気に身を浸すことで、魂が、そこに付随する肉体が少しずつ剥がれ落ちていく苦しみを和らげていた。

呪術甲冑隊が隙を作ってくれたことで、懐に飛び込んだクラウドディアは、タイプ・ホルケーキの横つ腹に全力でその巨大な戦鎚を叩きつける。

『Gyooooooooo!!?』

「ゴミが……！　ゴミらしく、うふふ……塵に還れ……！　うふふふ……！」

そこに穿たれたものは、さながら隕石が局所的に直撃したような大穴だった。

敵星体の障壁を貫通して、クラウディアが文字通り、魂の最後の一欠片まで燃やし尽くして繰り出される必殺の一撃が、それまでは余裕を保ち、人類を甦るかのような態度を取っていた超巨大敵星体を揺らがせる。

そうだ。罪なき者など、穢れなき者など、この世界には存在していない。

だから家族は殺されたのだと認めることは、クラウディアにとつては屈辱であり、最大の侮辱であることもわかっている。

しかし、理不尽に家族を奪われた、ただ理由もなく殺されたと考える方が、より残酷であると理解しているからこそ、クラウディアもまた、素朴な村娘から、罪深き戦乙女へとその身をやつすことを決めたのだ。

とつくに、戦う理由は破綻している。

罪があるから家族を殺されたのだと思いきみながら、罪なき家族を殺した敵を憎いと思ふ背反する感情。

そして人類が繰り返す愚かさに自らも加担して、多くの犠牲を、モルモットとして使い捨てられる魔法少女を間近で見ているながらも、無感動に自らが「成果物」となることに執心していたことも含めて、全てが全て、クラウディアは破綻しているといつていい。

だが、狂っていなければ、壊れていなければ、戦いの現実には、突然仕掛けられた生存競争という理不尽に、抗うことさえできはしない。

それが、クラウドディア・ゼッケンドルフという一人の素朴な少女がひた隠しにする、小さく脆い、心の弱さだった。

「そう……殺さなきゃ、殺して、殺して、殺し尽くさなきゃ、あの子は、皆は……全部の犠牲は、無駄になっちゃうんですからねえ……っ！」

無駄になどさせはしない。

愛する弟の、家族の死を意味のないものにさせないためにもクラウドディアは今もごうごうと唸りを上げて動き続けている地獄の機械に、運命にその身を委ねることを決めたのだ。

その結果として得られた禁忌の力は、きつと全てこの時のためだけにあつた。

戦鎚を振るう度に、タイプ・ホールケーキの骨格が歪み、激昂する敵が放った嵐の刃をその身で受け止めながらも、片目を潰されながらも、クラウドディアは止まることなく戦鎚を振るう。

ここで自分は死ぬのだと、そんなことはもうわかっている。

メタモルバーンの解号を唱えた時点で、死は約束されたものだ。

航空艦の主砲による援護射撃が、クラウドディアの穿った傷跡を拡げ、のたうち回るタ



イブ・ホールケーキは見に纏う嵐を操って、北欧管区の艦隊を撃沈させる。

『プリンツ・オイゲン』轟沈！ 『シャルンホルスト』撃沈！

「怯むな！ 奴をここから先に行かせないためだ、なんとしても、クラウド・ディア・ゼツケンドルフの挺身に応えるのだ！」

累積する傷を厭わずノーガードでの殴り合いを続けていたことで、メタモルバーンによつて補強されていても、クラウド・ディアの肉体はもはや悲鳴を上げ、限界を迎えようとしていた。

タイブ・ホールケーキはそれでもまだ健在だ。腹を扶られ、片目を叩き潰されて尚、しぶとく生き続けている。

「殺さなきや……殺して、殺して、殺す殺す殺す殺す」

朦朧としたクラウド・ディアの意識が、まともな言葉を紡ぐことはない。

しかし、薬物と魔力によつて強化された肉体は思考を支配する殺意に導かれたかのように飛び上がり、戦鎚をタイプ・ホールケーキの頭へと叩きつける。

『GyooooooooEeeeeehhhhhhh……』

「殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す」

魂を燃やした戦乙女の一撃は、ぐちゃり、と何かを潰したような濁った音を立てて、タイプ・ホールケーキの頭を叩き潰す。

変異した敵星体に弱点があるのなら、それは生物を参考にしたことだといえるだろう。

『A h h h h h h h h h h!!』

「いかん、総員退避、反転百八十度——!」

脳にあたるコアを砕かれたタイプ・ホールケーキは最後の足掻きだとはかりに爆発的な嵐を巻き起こし、兵士や魔法少女、船乗りの区別なくその命を道連れにしながら沈黙する。

クラウドディアは、もはや指先一つすら動かせないほどに疲弊していた。

骨が皮膚を突き破り、巻き起こされた嵐に片足や右腕をもぎ取られ、地に伏すその姿は見るに堪えないほど無惨なものだ。

しかし、彼女は勝利を、栄光をその手に収めていた。

「パ。パ。……ママ。……アルベルト……」

安らぎと温もりを求めるかのように、冷たい虚空へと、クラウドディアは最後の力を振り絞って左の手を伸ばす。

雲の隙間から差し込む天使の梯子を登るかのように、灰になっていくクラウドディアの肉体は、天へと立ち上りゼロに還る。

「ああ……聞こえる……やっと、私も……そっちに……」

そこに偽りであるとはいえ、温もりを感じられたことは、幸せであったのだろうか。その答えはわからない。

言葉を紡ぐ者は、もうこの地上にいないのだから。

静寂と沈黙が、花束のように戦乙女たちの死へと捧げられる。

ただそれだけが。それだけが、誰一人として帰ることのなかった戦場に残された、唯  
一のものにして、人類の奮戦、その証明だった。

## 77. 魔法少女と人理の堡壘

中東管区における防衛線は、主力級航宙戦艦十隻が投入されていたのにもかかわらず、容易く突破された。

それは有する魔法少女の質も量も他管区と比較して劣っていたのもあれば、襲来したタイプ・ホールケーキが強力な個体だったというのもある。

『Guooooooooo……』

低く唸りを上げて、雷をその身に纏うタイプ・ホールケーキは己が完全に沈黙、壊滅させた連邦防衛軍の残滓を一瞥した。

しかし、連邦側もむざむざ犠牲になっただけではない。

タキオン粒子砲を使用せずにほとんどの取り巻きの大半を壊滅させ、タイプ・ホールケーキにも手傷を負わせたことを鑑みれば、奮戦したといっても差し支えはないだろう。

該当する個体の進路上に位置する北京管区も迎撃のために艦隊と魔法少女、そして呪術甲冑隊を出撃、展開させている。

だが、先日の一件で戦力の大部分を喪失している現状では、間違いなく阻止は不可能

だというのが、戦術シミュレータの導き出した見解にして、軍部における暗黙の了解だった。

「奴が東京に到達するのも時間の問題だ。やはりタキオン粒子砲による迎撃を試みるべきでは？」

その様子を総司令部から見つめていた軍務局長は、額に脂汗を滲ませながら司令長官へと意見を具申する。

タキオン粒子砲。3年前の時点では、敵星体に対して唯一有効だったその兵器における欠点は、あまりにも強力すぎる故にその副次的な被害も凄まじいことだ。

地上で主力級航宙戦艦が五隻も同時にタキオン粒子砲を放てば、確かにタイプ・ホルケーキへと打撃を与えることは可能だろう。

しかし、その結果として残されるものは射線上にある全てが、草木の一本も生えることのない焦土と化すというものである。

「……貴官の言い分も理解できる」  
「ならば」

「しかし、後の人類に残されるものはなんだ？ 生存圏を狭め、この星を焦土とすれば、その答えは自ずと見えてくる。未来に残すべき遺産……その最後の堡壘が極東管区であり、そのためのマジカル・ユニットだ」

司令長官の意見にも、軍務局長の意見にもそれぞれの正しさがあり、そのどちらが正解なのかを決めるのはのちの歴史家にしかできないことだ。

未来のために今犠牲を積み重ねることを容認するのか、今積み重ねられようとしている犠牲を否定するために、未来へとそのツケを、決して消えない爪痕を残すのか。

人類は、究極の決断を迫られているといってもいい。

極東管区に戦力が集中しているのは、「救世の七人」作戦を成功させていたのも大きな要因だが、それ以上に第一世代魔法少女という、タキオン粒子砲に匹敵する存在を戦後も抱え続けているためだ。

人類にしてその人理、最後の堡壘を自称する極東管区が、最終兵器の使用を容認するのはその沽券にかかわることであり、到底認められない——この期に及んで、政治的な面子を優先するのかと、軍務局長の視線が険しさを帯びる。

それが政治的な面子だけではないと理解してはいるものの、敵の排除だけを念頭においているタカ派の筆頭である彼にとって、タイプ・ホールキーが東京へと到達するのは、なんとしても避けたいことだったのだ。

マジカル・ユニットの投入は既に規定事項であり、本土決戦を行う用意をしているからこそ、諏訪部は総司令部に呼び出され、その指揮権限を与えられている。

つまるところ、人類の可能性を未来に託した、というのが極東管区の答えだというこ

とだ。

そのための犠牲を容認することになったとしても、それが例え綺麗事だとわかっていても、この星を焦土としてでも生き残るよりは、少しでも健やかで穏やかな種を未来に芽吹かせる。

それがいかに困難なことであろうとも、司令長官はその考えを曲げるつもりはなかった。

「この先は地獄ですぞ」

「元よりだ。我々が人であることを捨ててまで、この地球を焼き払ってまで勝ったところでそれでは敵星体と何も変わらんのだ」

「……承知いたしました、これ以上は何も申しませぬ」

人類の堡壘、人理の守護者と名乗れば聞こえはいいのかもしれないが、やっていることはただ未来のために今の犠牲を容認することに過ぎないのかもしれない。

だとしても、その矜持を捨て去れば、人は容易く獣に成り下がる。

理性が虚飾であつたとしても、文明が数多の死体を礎にして成り立っているものだとしても、人が人であろうとすることそのものが、人間を霊長の存在たらしめているのだ。

紫電を纏う竜もどきがとうとう北京管区の敷いた布陣に踏み込んだのを視認して、諷訪部たちは、出撃を待機している魔法少女たちは、改めて覚悟を固めるのだった。





しかし、敵星体が魔力の存在に着目し、その力を地球から吸い上げたことで、タイプ・ホールキーや複製体といった特異個体は、魔力をその身に宿している——つまり、魔法少女とほとんど同じ条件で活動しているといってもいい。

魔法少女は自死を禁じられているものの、他者による死までは防げない。

同じ魔法少女同士が戦うことになったとすれば、どちらかがどちらかを殺めることは可能なのだ。

魔法というものは、高次元の中を漂う無数の可能性から、あらかじめ定義されている結果を汲み取って、魔力をバイパスとして現世に出力しているに過ぎない。

つまるところ、向ける標的が敵星体であろうが魔法少女であろうが人間であろうが、

「魔法」は向けられた対象へと引き出した結果を律儀に出力するということだ。

「ええい、主砲はまだ復帰せんのか!」

「申し訳ありません、しかし凍結による被害が著しく……!」

「このままでは、一方的に沈められるぞ! 復旧作業急げ!」

「了解!」

モスクワ管区に配備された主力級航宙戦艦の中でも、旗艦を務めている「ガングート」の艦長が怒鳴り散らす。

回線がオーブンチャンネルになったまま言い放たれた大声に顔をしかめつつも、アデ

リーナは自分の身体が凍りついていく、思い通りに動かなくなっていく感覚に歯噛みする。

つまるところ、敵が魔力を用いてこの極低温を再現しているのならば、それは魔法少女が持っている「星の守り」を踏み倒せるということなのだ。

アデリーナの周囲に展開していた魔法少女たちも、極低温を味方につけた敵星体の攻撃によって、一人、また一人と数を減らしていく。

第三代魔法少女が吸い込んだ空気から、すぐさま体内の凍結が始まり、氷の彫像と化した名前も知らない少女は地に落ち、バラバラに碎け散る。

「そんな、ライフルが動かないなんて——！ 嫌！ 食べられて死ぬなんて、そんなの、嫌あああッ！」

またも犠牲になったのは、その魔力が低い第三代魔法少女だった。

非力な魔法星装を補完するために渡されていた、呪術回路を組み込んだアサルトライフルはトリガー部分の凍結によって弾を吐き出すことはない。

そうして絶望に暮れた魔法少女の元へとタイプ・キャンディが殺到し、その肉体を無惨にも食い散らかす。

アデリーナもまた自身の特質である「爆発」の魔法を用いることで援護しようとしたが、この距離まで敵に近付かれてしまえば、死因が爆破魔法に変わるだけのことだ。

「畜生……ッ！」

運命を呪い、人理を呪い、前線の魔法少女たちは死神が差し伸べた手を取らされて、死の舞踏を踊り続ける。

どんな正義を掲げたとして、どんな理想を掲げたとして。

その現実だけは、覆しようのないものであることに、変わりはないのだった。

## 78. 「魔法少女アナスタシア」

自分の人生は、振り返ったところで上等なものではない。

アナスタシアは誰よりも、それを理解していた。

今も自分が発する冷気と竜もどきが発する冷気の相克によって多数の死者を出している。

その十字架を背負いながらも、アナスタシアは氷の槍を、パルチザンを手に、タイプ・ホールケーキへと果敢に切り掛かっていく。

生まれた家のことを思い出せば、確かに恵まれていたと違って差し支えのないところはあつたのだろう。

優しい両親と姉に囲まれて、何一つ不自由のないとまではいかなくとも、何かに困窮することのない生活を営んでいたのは確かであり、それは世界中に散らばる不幸と比較したら、幸せと断言しても問題はない。

だが、その幸せは長くは続かなかつた。

3年前、憎むべき人類の仇敵にして、今も尚、人類へとその牙を剥いている敵星体が襲来したことによって、アナスタシアの生活は一転して地獄へと転げ落ちることにな

る。

両親を殺されて、それでもアナスタシアが生き延びることができたのは、その瞬間に姉が「星の悲鳴」を聞きつけて、第一世代魔法少女となったからだ。

魔法少女へとその身を変えた姉の、ヴェロニカ・セルゲイヴナ・カミンスカヤの力は圧倒的であり、降り注ぐタイプ・キャンデーを、タイプ・クツキーを瞬く間に蹴散らしたその光景は、今もアナスタシアの脳裏に焼き付いている。

姉が第一世代魔法少女として覚醒したことによって、アナスタシアは地下都市でもある程度の身分を保障された存在になった。

しかし、それが全て幸せだったかといえば、そんなことは断じてない。

上流階級と下層市民の分断。

旧世紀から続く弊害は新星暦へと暦を改め、人類が滅亡の危機に瀕しても尚、忌々しいことに続いていた。

アナスタシアは上流階級として地下都市における身分を保障されてこそのいたものの、いつてしまえばそれは姉の「おこぼれ」であり、自らが何かを成し遂げたから、というわけではない。

それを理由に下層市民からのやつかみを受け、時には石を投げられたことさえある。しかし、アナスタシアは涙を零さなかった。

自分よりも遥かに辛くて苦しい思いをしながらも戦い続けている姉が、ヴェロニカが、戦いから帰ったあとはいっただって隣にいてくれて、そっと慰めてくれたからだ。他に望むものは何もない。

ただ、自分にとっては姉と過ごす微かだがあたたかい時間こそが宝物であり、それさえあれば十分だと、そんな慎ましい願いを抱いて生きていたのを、アナスタシアは覚えている。

しかし、その願いさえ、運命という名に虚ろを飾られ、低く唸り声を上げながら回り続ける地獄の機械に巻き込まれ、儂く砕け散ったのだ。

姉が物言わぬ帰還を果たしたのは、敵星体の侵攻が激化し、地上を埋め尽くさんばかりに天から降り注ぐようになってからのことだった。

呪術結界などという大層な代物はなく、剥き出しになっている都市の残骸、その直下に作られた地下都市へと敵が殺到してくるその中で、ヴェロニカが己の命と引き換えに、その侵攻を食い止めたと、空の棺を送り出す時に軍人がそう告げてきたことは、耳鳴りのように、今も鼓膜の裏に染み付いて離れない。

その遺体すら残らないほど、遺品すら回収できないほどに最愛の姉の末期が悲惨なものであったことを、アナスタシアは不幸にも理解してしまった。

もう二度と姉が優しい笑顔を見せてくれることはない。

正直にいつてしまえば、全くもって美味しくなかった配給食を、「おいしいね」と二人で暗示を掛け合うようにして食べていたあのあたたかな魔法は、十二時の鐘が鳴って、解けてしまった。

だからこそ——誰よりも、冷たくあろうと、そう決めた。

あたたかな心までも、安らかな思い出までも氷に封じて、冷徹に。

ただ、運命という名の理不尽に屈しないためには、それしか手段は残されていないなかったのだ。

「……このままでは、膠着状態が続くだけね」

メタモルブーストによって魂を燃やしていながらも、特質が同じであるということもあつて千日手のような戦いが続いている状況を俯瞰して、アナスタシアはぼつりと呟いた。

魔法少女隊の援護は期待できそうもなく、主砲が凍結した主力級航空戦艦は、次々に敵星体に蝕まれて沈んでいく。

あの絶対零度を纏う竜もどきと戦えるのは自分だけだ。

ならば、必要なものは決まっている。

どくん、と心臓が一際強く跳ねたのを認めて、アナスタシアはちようど、自らにその時が訪れたのだと知る。

「……メタモルバーン」

もはや、自分の中に、星の炉へと焼べる薪木とできるだけの魂は残されていない。

蠟燭が最後に燃え尽きる時、一際明るく輝くように、アナスタシアはその残滓を掬い上げて星の炉に無理やり焼べて、己の魔力を、肉体の崩壊を代償に極限まで高め上げた。

身に纏い、吹き荒ぶ絶対零度の嵐は有象無象の敵星体を巻き込んで氷の塑像と変え、同時にタイプ・ホールケーキの魔力そのものを凍結させていく。

『H y u a a a a a h h h h h h h h h h ……?』

「黙って。そして私の、私たちの星から……姉様の愛した星から消えて」

氷が氷漬けになっていくという異様な光景を目の当たりにした、タイプ・ホールケーキは困惑に目を見開くが、絶対零度を超えた、概念レベルでの「凍結」という現象は例え人間であったとしても理解できるものではない。

既存の物理学を塗り替える、超常的な現象を、人が思い描く全ての可能性を揺らぎの中から取り出したアナスタシアの「魔法」は、本来ならばあり得ない現象を、増幅された魔力を通して現世に出力しているのだ。

もはやこの極低温の世界で生き残れる存在は、アナスタシアとこの竜もどきしか、タイプ・ホールケーキしか存在していない。

未曾有の冷気に襲われた航宙艦はコントロールを失って墜落し、魔法少女も呪術甲冑



隊も、敵星体の区別もなく全てが絶対のゼロに還っていく。

そんな極限状態でも、アデリーナはまだ息をしていた。

メタモルバーンを叫んだ以上、アナスタシアの命はそう長くない。

そして、この極低温が支配する世界で、自分もまた、長く生き延びることなどできない。

「わかってる……わかってるよ、そんなこと！ メタモルバーン！」

全てを悟ったアデリーナもまたメタモルバーンを起動して、たった一秒でもいいと、一瞬でもいいと願いながら、親友が攻撃に回るための時間を稼ぐために、巨大な弓形の魔法星装を展開する。

絶対零度の世界は既にアデリーナから指先の感覚を奪い、メタモルバーンを発動せずとも凍死は免れないのだろうという確信が、彼女の中には存在していた。

「ナスタールシア！ 受け取って！」

震えながら、凍えながら、その一瞬のために、一秒のために、アデリーナは全てを燃やし尽くして、その一矢を、タイプ・ホールケーキへと撃ち放つ。

『Ooooooooooooohhhhhhhhhh!?!』

極低温の中でも熱量を保持して突き進む魔力の一矢は、確かにタイプ・ホールケーキの眼球へと突き立てられていた。

痛みに悶える敵星体の絶叫が響く。

——ざまあみろ。

そう呟くと、糸が切れた人形のように、あるいは凍りつくことを拒むかのように、アナスタシアの親友であった少女は、アデリーナは、全てを燃やし尽くした代償として、燃え尽き、塵へと還っていく。

「……ありがとう、リーンカ」

彼女が作り出した一瞬は、彼女が命と引き換えに紡ぎ出した一秒のバトンは、確かにアナスタシアへと引き継がれて、莫大な魔力が、魂の全てを星の炉に捧げることでのみ許される最後の一撃が胎動する。

エネルギーが負のベクトルに進み続けた先には、理論上反転分布と呼ばれる、何よりも熱い温度が存在している。

種々の理由から観測することのできないそれは、理論の海に浮かぶのみであるはずだった。

しかし、魔力は、魔法は、その不安定な揺らぎの中に存在する可能性を確定した事象として地上に出力するための法則である。

最もエネルギーが高い状態へ。

絶対零度を通り越した負温度、マイナスがプラスへと反転するその魔法は、アナスタ

シアの魂を贄として、この凍てつく大地に顕現する。

「……アブソリュート・インビエーシャ……！」

極限反転。そう名付けられたことで定義が補強された灼熱は、地上に太陽を降ろしたかのような熱量で竜もどきを、そして炉に焼べられたアナスタシアを焼き尽くす。

思えば、上等な人生などではなかったのかもしれない。

ヴェロニカが死んでから、アナスタシアは第二世代魔法少女となるまで、後ろ盾のない存在だからと迫害され続けてきた。

それでも——友と呼べる存在ができて。思い出せばむかつ腹が立つけれど、それでもこの期に及んで顔を思い出す、腐れ縁とでも呼ぶべき絆がこの手の中にはあって。

悪いものではないか。

「もう、目を閉じていいよね……姉様……ママ、パパ……」

死ぬのは、誰もが通ってきた道だ。

アデリーナも、この戦いに駆り出された魔法少女たちも、今日この瞬間まで日々を紡いできた人々も。

だから、怖くない。アナスタシアは最期にそう、自分に囁き続ける。

——声が、聞こえた。

おいで、と手招く、その声は、父のものであり、母のものであり、姉のものであり、ア

デリーナのものであり——その全てを抱き抱えて、アナスタシアを天使の梯子へと引つ張り上げていく。

はらはらと灰のように崩れ落ちながら、アナスタシアは、導かれるように崩れゆくその手を伸ばす。

ただ一つ、魂すらも失った己に残されたその奇跡という名の幻を抱くために。

氷の第二世代魔法少女、アナスタシアは、永遠の冬を焼き尽くし、その魂を燃やし尽くし——たった一つ残された幻だけを抱いて、天へと還ってゆくのだった。

## 79. 魔法少女と一つの勝利

北米管区が相手を請け負っていたタイプ・ホールケーキの侵攻は食い止められつつあった。

それは眷属であるタイプ・キャンデイやタイプ・クツキーに対して、人類が魔法少女に限らず有効打を与えられるだけの兵器を有しているというのもあれば、単純に運が良かった、というのもある。

海を裂いて渡ろうとする、樹海の化身とでも呼ぶべき竜もどきの魔力は、開けた太平洋上では効果を発現せず、ただその質量のみを武器とする以外の手段が取れなかった、ということだ。

そして、樹木を全身に纏っている都合、連邦防衛軍側が有する兵器に対して、そしてアリスに対して「燃えやすい」という点で極めて相性が悪いこともまた、タイプ・ホールケーキにとっての不幸だといえた。

「はっ、地上じゃ負け知らずなんだろうけどなあ、海に出た時点でめえの負けなんだよ！」

タイプ・ホールケーキの特性は概ね見た目に依拠しており、この個体も地上において

は恐らく、魔力によって植物を操るなどという搦手を取ることもできたのだろう。

だが、あくまで超巨大敵星体は魔力を取り込んでいるだけで、魔法の行使が可能なわけではない。

竜もどきの、大質量によるシンプルなパワーファイトによって、そしてその眷属たちによって大量の犠牲を積み重ねながらも、北米管区が派遣した艦隊は諦めることなく、着実にタイプ・ホールケーキを追い込んでいた。

アリスが「付与」の特性を用いて炎を纏わせた魔力の弾丸が、竜もどきの背中を燃やし、鱗の代わりに全身を覆う樹木を撃ち貫く。

『○○○○○○○○○○……!』

「的がデカけりやなあ、撃ちやすいつてことなんだよー」

苦悶の声を上げる竜もどきを挑発し、アリスはこつちに来いと、不敵に笑う。

取り巻きである眷属たちは他の魔法少女や主力級航宙戦艦の主砲で、概ねなんとなかなる範囲だろう。

ブレスを持つ飛竜級は厄介であるものの、三人一組で運用されるトライアングル・ユニットが注意を引いている間に、艦砲射撃や第二世代魔法少女による魔法星装を用いた攻撃によって、十分対処ができるには変わりない。

とはいえ、旗色がいいとはいえない切れないのが現状であることは、アリスもまた理解し

ている。

九隻いた主力級航空戦艦は好き勝手に暴れ狂う竜もどきの腕に叩き潰され、その数を三分の一にまで減らして、頼みの綱である第二世代魔法少女もまた、アリスを除いて、残っているのは四人といったところだった。

いわゆる「早生まれ」、「赫星一号」が撃ち落とされた瞬間に魔法少女へと覚醒したアリスと、戦間期に生まれた魔法少女たちでは、同じ第二世代でも実力に大きな隔たりがある。

それというのも「ラボラトリイ」の調査によれば、破片と化した「赫星一号」が地球のリソースを吸い取り、削り取っていた結果らしいが、アリスたちからすれば迷惑もいところだ。

「マリー、そっちはどうなってる!？」

「大丈夫よ、なんとか持ち堪えられてるわ、アリス!」

「へっ、上等だ!」

マリーと呼ばれた魔法少女は、己の得物たる魔法星装であるガトリングガンを斉射しながら、未だに空へとひしめくタイプ・キャンディを、タイプ・クツキーを、変異体を撃ち落としていく。

魔法星装が生まれる仕組みは、「星の悲鳴」を受け取った少女たちが魔法少女へと変じ

るプロセスと同様にまだ解明されているわけではないが、傾向として、北米管区に所属する魔法少女たちは銃火器が与えられる傾向が強い。

そのため、こと多数対多数の戦いにおいては右に出るものはそういない——そう評されるのが、北米管区の魔法少女たちだった。

「来るわ、気をつけて！」

トライアングル・ユニットを構成し、守りを引き受けている魔法少女が、呪術回路の組み込まれた大楯を構えて、飛竜級が射出した「爪」を防ぐ。

その隙をついて、彼女の背後に隠れていたマリーが、ガトリングガンで飛竜級へと向けてトリガーを引き絞った。

「これで、倒れろおおおっ！」

アリスには及ばなくとも、自分にも魔法少女としての自負と誇りがある。

マリーの魂はメタモルブーストにより、星の炉へと焼べられて、いつ自分に与えられた「猶予」が尽き果てるかわかったものではない。

しかしそれは、この戦場に立つ全ての魔法少女たちにとっても同じことだった。

トライアングル・ユニットを構成する第三世代魔法少女が、なけなしの魔力を増幅するためにメタモルブーストの解号を口々に唱えていく。

迂遠な自殺、緩慢な死を代償として魂は燃え上がる。



その結果として肉体に宿る魔力は補強され、魔法少女たちはより深く、敵へと突き立てられる牙と化す。

一人ではタイプ・クツキーを相手するので手一杯な第三世代魔法少女が、難なくその首を撥ね飛ばし、胴体を撃ち貫く。

例えその先にあるものが死であると理解していても、第三世代のメタモルブーストなど焼け石に水だとしても、彼女たちはその行軍を止めることはない。

死ぬのが怖いのは当たり前のことだ。

誰もが、あのアリスですらも内心にはそんな脆さを抱えて戦っている。何かのため、誰かのため。

偽善と人が嘲笑つても、無駄な足掻きだと諦観に暮れても、ひとえにアリスたちが足を止めないのは、その「誰か」のために尽きる。

国のために、連邦のために死ぬのではない。

マリーは敵星体に囲まれながらも、魔力が続く限り無限に弾丸を吐き出し続けるそれのトリガーを引きながら、きつく歯を食いしばる。

例え敬虔な信徒でなかったとしても、魔法少女に選ばれた時点で自分の運命は決まったようなものののだ。

ならば、この命を誰かのために、故郷で待つ家族のために、あるいは顔も知らない隣

人のために使うことに、なんの問題があるのか。

マリーは半ば捨て鉢のようになりながらも、自分に強くそう言い聞かせて、群がる敵星体を屠っていく。

「三番艦、撃沈！」

「うろたえるな！ 攻撃を続ける限り希望はある！ あの超巨大敵星体と刺し違えてでも我々はここで奴らを食い止めるのだ！」

艦隊の方も、規格外の巨体を持つ竜もどきの腕が振り下ろされたことで三番艦を失つて、残りは二隻といったところまで追い込まれていた。

しかし、諦めるなど、うろたえるなど、撃沈された「アイオワ」に代わって旗艦を務める「コロラド」の艦長を務める壮年の男が叫ぶ。

死なない限り、希望は残されている。

生きている限り、人は絶望に抗うことができる。

その一瞬、一秒——この地球にとっては瞬きをするのにも満たない刹那の間にこそ人の矜持は輝きを放ち、気高く燃え上がるのだ。

『○○○○○○○○○○……』

タイプ・ホールケーキの中でも取り分け巨大なこの個体は大量の艦砲射撃と、メタモルブーストを発動したアリスによる弾幕砲火をその身に受け続け、尚も崩れ落ちる気配

を見せない。

しかし、全身を燃やされ、炎に苛まれ続けて尚、敵が平然としているとは考え難いことであり、そこにこそ勝機があると、アリスはそう踏んでいた。

「あたしはここで終わってもいい——あたし自身がてめえの命の使い道を決めたんだからな、そこに後悔はねえ！ だから、受け取りやがれエイリアン！」

トライアングル・ユニットを構成する第三世代魔法少女たちが一人一人と脱落していつても、身体の一部を食いちぎられながらも最期まで抵抗を続けた果てに友人がその命を落としても、魔法少女アリスは止まらない。

メタモルブーストによって増幅された魔力を全て「炎」の付与に回し、魔法星装である二挺のアサルトライフル、その銃身が焼けつくまで、絶え間なく魔弾を叩き込む。

竜もどきがめちやくちやに振り回す手が二番艦を叩き落とす。

残った魔法少女を物言わぬ肉塊へと眨めて、海面へと腕の質量とともに叩き落とす。

最後の最後まで抵抗をやめないのは、敵星体も同じだった。

——だが。

『○○○○○○○○○○……○○○○○○○○……』

低い唸り声を上げて、タイプ・ホールケーキのその巨体はとうとう燃え盛る炎にその核を焼き尽くされたのか、海中へと没していく。

振り返ってみれば、この戦場に残された生存者はアリスと「コロラド」の乗組員だけしか存在していない。

残存した取り巻きを掃討しながら、アリスは一足先に自由の身になった魔法少女たちへ、兵士たちへと哀悼を捧げる。

「……いい奴から死んじまうんだよな、なあ」

ぼつりと呟いた言葉が、戦場の摂理であるとは思いたくないものだ。

しかし、どうしてかいい奴から先に死ぬというのは戦場における相場のようなもので、生き残ったアリスは、自分自身をそこまで上等な人間だと定義していない。

名前を呼ぼうとして、喉元に押し留めた彼女は、認めたくはないが戦友として肩を並べたあの銀髪の美しい少女は、生きているのだろうか。

アリスは「コロラド」と共に敵星体の全てを殲滅すると、心の内で静かにそう呟くのだった。

## 80. 魔法少女、暁に出撃す

戦況をモニターに映し出していた極東管区総司令部には、概ね戦術シミュレータが弾き出した計算と同様の結果が訪れたことよって、神経が逆立つような緊張が漂っていた。

オセアニア管区と北米管区は甚大な被害を受けながらもなんとかタイプ・ホールケーキを撃退、モスクワ管区とベルリン管区は敵と差し違い、残る中東管区と北京管区は全滅、という結果は決して芳しいものではない。

しかし、それだけの犠牲を払わなければ勝てない相手だということとは、百も承知だ。ここにいる誰もがその理屈で犠牲を容認することを忌避しながらも、同時に、誰も犠牲にせずあのタイプ・ホールケーキを撃退する方法などないということを理解している。

これは正義のための戦いではない。  
大義のための聖戦でもない。

人類と敵星体、どちらが生きるか滅びるかが問われている生存競争にして、憎しみだけが渦を巻く、凄惨な絶滅戦争だ。

本来であれば、どのような大義や正義があろうとも、戦いというのは、他者に血を流させる行為は、忌避されるべきものだ。

人間は、理性でもって旧世紀の弊害を乗り越えて、連邦の旗のもとに地球を一つにすることで、神の世紀との別れを告げた。

そうして星の世紀に改められた暦の下に、人類は星の海へと手を伸ばし、その結果として呼び寄せたものが、対話すらも不可能な侵略体だ。

ジョークとしても出来が悪い話だが、これは紛れもない現実なのだ。

悪夢であればどれだけよかったか。

ジョークであつたなら、どれほどの血が流されずに済んだことか。

しかし、理不尽という名の現実は今も人類にその獐猛な牙を剥き続ける。

「改めて、ここに集つてくれた兵士及び魔法少女の諸君に告げる」

司令長官は小さく咳払いをすると、総司令部全域に向けて、そう呼びかけた。

医療班や主計班が慌ただしく補給の荷物を航宙艦へと運び出す手を止めて、オケアノス級及び主力級航宙戦艦に乗り込む兵士たちや魔法少女たちが足を止めて、彼の言葉に耳を傾ける。

「人類は今や、絶望的な状況に立たされている。奮戦虚しく、多くの同胞が犠牲となつたことに、ここで哀悼を表明すると同時に、我々に課された使命を確認したい」

フライトユニットを装着した呪術甲冑に乗り込み、「オールト」に乗り込んでいた内藤は、何が使命だとばかりに司令長官の言葉に洩い顔をしながらも、口には出さず、ただ続く言葉を部下たちと共に待っていた。

一番艦である「オケアノス」に乗り込んでいる、結衣たちマジカル・ユニットも同じだ。

整備班もしばし手を止めて、司令長官の姿が映し出されているモニターに視線を向けていた。

「我々は今、岐路に立たされている。生存か、絶滅か……心なき敵星体の手によって地球は蹂躪され、多くの同胞たちが犠牲になってきた。そのために今、多くの同志諸君が義憤を燃やし、戦場に立つてくれる献身に感謝を表明したい。これはどれだけあつても足りないほどだ」

内発的な義憤に突き動かされて戦場に立っている人間が少数派であることぐらい、司令長官もわかっているのだろう。

しかし、これはアジテーションだ。

少しでも士気を高めるために、これから極東管区へと待ち受けている絶望に少しでも立ち向かう勇気を奮い立たせるために、彼は今、壇上に立ち、その弁舌を振るっている。「その義憤は肯定されるべきものだ。この戦いの大義はひとえに、人類の生存、その一点

のみにかかっている。それを理解した上で今、戦場に赴く諸君らに祝福があらんことを祈ると同時に、私は地球連邦防衛軍総司令官として、旅立つ諸君らに、謝罪をせねばならない。魔法少女の名の下に、我らが戦いを強いてきた若者たちよ、我々大人の無能を許してはならない。魔法少女であるが故に、兵士としての責務を負わされた若者たちよ、青春の日々ではなく戦いの日々を過ごしてきた若者たちよ、我々の怠惰を恨め。願わくば、その宿命の下、犠牲になる同胞が一人でも少なくて済むことを、そしてこれが最後の戦いであることを祈ることしかできない我らの無力を、許すな」

それは、誰のせいでもない。

タキオン粒子砲で地上の全てを焦土としてでも、人類は勝利すべきかどうか。

その答えは恐らく永遠に出ないのだろう。

しかし、今、人類が選んだ道は、その矜持を、誇りを捨てることなく未来に可能性を託すという、困難ながらも、その尊厳を守り通すための選択肢だった。

無力を許すな。無能を許すな。

戦地へと赴く魔法少女たちに、大人がかけられる言葉は、そんなものが精一杯だったのだろう。

だからこそ、結衣もまた願っている。

この戦いで全てに幕が下されることを。



この戦いで、地球に残る敵星体の全てを掃討することで、またいつか見た安らぎのひとときが訪れることを。

「しかし、人類は『赫星戦役』を生き抜いた。この3年を生き延びることができた。それはひとえに諸君らと同胞たちの献身が故である。そのことに深く、感謝を申し上げたい。そして、願わくば、この戦いを礎として、魔法少女たちを戦場に送ることがない世が訪れることを、我々は心より祈るものである」

それは誰もが思い描くユートピア、この地上には存在しない楽園の姿だとしても、戦いへと赴く者たちの心は一つだった。

もう誰も犠牲にならない世界のために。

世界のためという名の下に、新たな犠牲を生み出し続ける悲劇の連鎖を断ち切るために。

そして、轟々と唸りを上げ、今も人類をその歯車に乗せて回り続けている地獄の機械を、運命を破砕するために、魔法少女たちが、兵士たちが、船乗りたちが戦場へと赴く。

「……結衣」

「どうしたの、ステイア？」

主計班に混ざって積み荷の確認をしていたステイアがその手を止めて、ぱたぱたと結衣のもとに駆ける。

その眈には、これから起こる戦いの過酷さと、そこに飛び込んでいく結衣への心配と不安が色濃く、しかし透明な形で滲んでいた。

「結衣は、平気？ スティアは、結衣が心配……だから、とても怖い。スティアは、怖がっている……」

平気かどうかなど、問われなくてもわかることだ。

正気はとつくに磨耗して、大義と正義に燃えた義憤は燦るばかりで、自分の中に残された戦いの理由などというものは、慚愧と後悔、そして足を止めるなど今も鼓膜の裏で囁き続ける死者たちの声がそうさせているだけの話に過ぎない。

それでも、前を向ける理由があるとするのなら。

結衣はその細腕でスティアを抱き寄せると、そこから感じる三十六度の温もりに身を委ね、しばらくそこに縋り続けた。

「……結衣？」

「私ね、本当はそんなに強くないんだ」

やれ「原初の七人」の生き残りだと、第一世代最強の魔法少女だと囁し立てられたとしても、その事実は変わらない。

結衣は自嘲するように微笑んで、角度で色が変わるスティアの不思議な瞳を覗き込みながら、とうとうと語る。

「……本当は、戦うのだったすごく怖い。誰かが犠牲になるのなんて、考えたくないし、何度も何度も……私が上手くやれてれば、助けられたかもしれない人たちのことを夢に見ちゃう」

小さい頃に憧れていた魔法少女になれたとしても、そこに夢と希望はどこにもない。

あるものは残酷な現実と打ちひしがれてしまうような絶望ばかりで、それでも、結衣の小さな背中には、最強の名の下に、英雄の名の下に、自分のものではない、誰かの夢と希望という名の願いが、呪いばかりが負わされていく。

その現実にも何度打ちひしがれて、何度心をへし折られて、何度透明な、色のない血液をその目から零してきたことかわからない。

——それでも今、戦場に立ち続けられる理由があるとしたら。

「……私ね、ステイアのことが好きなんだと思う」

「好き……好ましく思うこと。結衣は、ステイアが、好き？」

「うん。ステイアは、英雄でも何でもないとただの私を……小日向結衣っていう、弱くて、脆くて、情けない女の子ののを見てくれたから。笑っちゃうくらい単純だよ。でも……私は、ステイアが好きだから。好きな人のために、頑張るんだ」

もちろん、戦う理由がそれだけではないことはわかっている。

自分一人で戦局を左右できるものではないとわかっていても、逃げ出せば、足を止め

れば、それまで積み重なってきた犠牲は全て無駄になつてしまうから、自分の背中に今も預けられている願いを放り捨ててしまうことになるから、という重荷を負っているからでもある。

それでも、最後に踏ん張ることができるのは、ステイアがいてくれて、何も知らないからこそ、そんな自分の弱さまで受け入れてくれたことに、恩義を感じているからだ。「だから、私は頑張るよ。皆のために……ステイアのために。きつとこれで、最後だから」

「……結衣……」

「じゃあね、行つてくる。ステイア。ありがとう……私と一緒にいてくれて」

まるで今生の別れであるかのような湿つぽさをそこに感じながらも、結衣は内側に溜め込んでいた全てを吐き出して、炎の空へと、戦場へと飛び込んでいく。

最後に覗き込んだステイアの瞳は、燃えるような赤を宿して、輝いていた。

ステイアには、そんな結衣の名前を呼ぶことしかできない。

それでも、曖昧であやふやな自分の存在が何かの助けになるのならと、結衣が帰ってくる場所で、自分なりの戦いをしようと、積み荷のチェックに戻っていく。

夜の帳は剥がされて、暁の空へと兵士たちが、少女たちが今、旅立つ。

大切な何かを守るために。譲れない何かを貫き通すために、最後の積み荷を積んだ

「オケアノス」は、最果ての海へとその礎を上げるのだった。

## 81. 魔法少女と暁の戦い

結衣たちの出撃を待ち構えていたかのようには、「アイオワ」を撃沈させたタイプ・ホルケーキは大量の群れを引き連れて、遮るものがない太平洋をまかり通る。

この世界を蹂躪し、全てが我がものであるかのように咆哮する竜もどきの姿は兵士や船乗りを、魔法少女たちを恐れさせるが、それでも足を止める者はいない。

「敵星体群、主砲の射程内に入りました！」

「よし……まずは取り巻き共を撃ち落とす！ 全艦連動、主砲、撃てえッ！」

「撃てーッ！」

東山は「オケアノス」の艦橋からモニターに映る敵星体を睨みつけ、問答無用とばかりに砲撃命令を下す。

会敵を予測していた「オケアノス」の戦術シミュレータに連動して、「オールト」、「オラシオン」、そして各艦に率いられた主力級航宙戦艦が、敵星体へと先手を打つべく起動した主砲に一斉射撃を浴びせかけた。

秒間十数発という連射速度で放たれる、魔力によって補強された陽電子衝撃砲は、空を埋め尽くすタイプ・キャンディを、タイプ・クツキーを次々に撃ち落としていく。

しかし、流石に巨大なダンジョンから丸々抜け出してきただけでなく、「はぐれ」の群れまでも率いて悪夢のパレードを繰り広げる敵星体の前には、多勢に無勢といった風情だった。

極東管区が人類最後の堡塁と位置付けられている所以は、その戦力にこそある。

第一世代魔法少女を三人、そして三隻のオケアノス級という決戦兵器を有しているだけで、他の管区よりもアドバンテージは大きい。

それだけの戦力を有する極東管区でも手を煩わせるほど、灼熱を纏う竜もどきが率いる群れは厄介なのだ。

『G u o o o o o o h h h h h h h h h h !』

タイプ・ホールケーキの咆哮が響き渡ると共に、戦場へと星屑たちが、無数の敵星体が雪崩れ込む。

「奴さんたちのお出ました、野郎共、命じゃなくて敵を落とせよ！」

「了解！」

内藤はハッチを開ける「オールト」の出撃カタパルトから、発進前の部下たちへ激励を飛ばす。

本命の魔法少女隊に先立つ形で、フライトユニットを背負った呪術甲冑隊が、敵星体の迎撃と攪乱を行うために出撃準備に入ったのだ。

78式呪術甲冑が次々に艦隊のカタパルトから飛び出し、HUDに投影された無数の敵影を認めると、各機が一斉に、フライトユニットの翼部分に懸下しているミサイルポッドから、魔力によるオーバーコートが施されているミサイルを射出する。

「行きがけの駄賃だ！ たらふく持つてきやがれよ、星屑共！」

「へっ……悪くねえ花火ですなあ、隊長！」

「おうともよ！ さあ……こつからが地獄だぞ！ お姫さんたちを死なせるなよ！ 俺たちが奴らを全部叩き返すつもりで事に当たるんだ！」

『了解！』

小粋なジョークだ、と、軽口を叩いた部下の胆力を内心で評価しつつも、内藤は気を引き締めて、己が率いる呪術甲冑隊と共に敵陣へと上がり込み、両手に保持するアサルトライフルを撃ち放つ。

本命の魔法少女隊は少し遅れる形で内藤たちの背後についているものの、第三世代魔法少女だけで構成される「トライアングル・ユニット」はその例外だ。

使い捨てられるように、あるいは最初から戦果など期待されていないかのように前線へと真っ先に飛び込まされる彼女たちを哀れむつもりは内藤にはない。

それは、軍人としての任務を帯びた彼女たちを侮辱することになるからだ。

しかし、一人でもその犠牲を減らしたいと願うのは、大人としては自然な感情であり、



滾る義憤と、突きつけられた理不尽に対する反骨が、内藤を突き動かしていた。

弾を全て吐き出し切ったミサイルポッドをパージして、呪術甲冑隊とトライアングル・ユニットは、敵星体とクロスレンジでの交戦に入る。

連邦防衛軍としては、北京管区を落とした、紫電を操るタイプ・ホールケーキと合流される前に、炎を操るそれが率いる群れを掃討する算段ではあったが、戦術シミュレータが弾き出した答えは「極めて困難である」というものだった。

それを示すかのように、艦砲射撃による火力支援と、呪術甲冑隊とトライアングル・ユニットの奮戦があつても、タイプ・ホールケーキを取り巻く敵星体の数は一向に減る気配を見せない。

「艦長、マジカル・ユニットの投入を進言します」

「うむ……少しばかり作戦より早いが、犠牲を積み重ねるよりはマシだ、許可しよう、諏訪部大佐」

「ありがとうございます。水瀬絵理！ 三上美柑！ 出撃準備に移れ！」

切り札として温存されていたマジカル・ユニットの投入を進言し、東山からの許可を得た諏訪部は、ブリッジで待機していた絵理と美柑へと出撃指令を下す。

「は、はい……っ！」

「了解っ！」

本来であればマジカル・ユニットはもう少し敵の数を減らしてから、後詰として投入される予定だったが、やむを得ないとばかりに急かされた絵理と美柑は敬礼を返すと、「オケアノス」の出撃ハッチへと走っていく。

その間、内藤たち呪術甲冑隊とトライアングル・ユニットは、戦線を押し下げられながらも歯を食いしばり、なんとか敵星体の群れを迎撃していた。

「こいつは、キリがねえな……！」

「星だつてんなら空に帰ってもらいたいもんですがねえ……！」

「ジョークは後回しだ、古橋！ 今はこいつらを一匹でも多く叩き返せ！」

古橋の軽口は、この絶望的な状況下にあつて頼もしいものだったが、現状として手が回っていないのは確かなことだ。

内藤は叱咤を飛ばすと同時に、フライトユニットに装備されている二門のカノン砲から、タイプ・クツキーへと徹甲弾を撃ち放つ。

呪術回路によって魔力のオーバーコートを施された弾丸は、敵星体の障壁を打ち破り、射線上に並んだ個体を、ボウリングのピンを倒すかのように塵へと還していく。

だが、HUDに投影される敵が減ったような気配はなく、レーダーは相変わらず敵星体を示す赤い点で埋め尽くされている。

「いいか、足を止めるんじゃないぞ！ 足を止めたら喰われて死ぬぞ！」

地上ではそうもいかなかったものの、フライトユニットの推力が機体を支えている空中であれば、足を止めずに弾を撃ち続けることは可能だ。

しかし、内藤の指示に従っていようが、余裕を失い足を止めてしまおうが、凄まじいまでの物量を投入してきた敵星体の前には、ほとんど誤差のようなものだった。

嘆く間もなくトライアングル・ユニットを構成する盾役の魔法少女にタイプ・キャンデイが殺到し、呪術回路と第三世代の魔力では防ぎ切ることができずにその身体を貪られ、血の霞へと消えていく。

「隊長、振り切れません！ 助けてください、隊長！」

「落ち着け！ クソツ、すぐそっちに……！」

「い、嫌だ！ こんなところで……うわあああああつ！」

「天野おツ！」

天野と呼ばれた部下の78式呪術甲冑もまた、貪り食われた魔法少女と同様に、大量のタイプ・キャンデイに追い立てられて、タイプ・クツキーの変異体が持つ「爪」によってその胴体を貫かれる末路を辿る。

「畜生……俺も年貢の納め時だったか！」

援護に向かおうとした内藤自身もまた、大量の敵星体に追い立てられていた。

敵星体にどこまでの意図と感情があるのかはわからない。

だが、じわじわと廻るように人類を弄ぶその悪辣さは明らかに意識的なものであり、それが気に食わないとばかりに内藤は舌打ちと共に悪態をつく。

戦場で死んでいく人間に、原因を求めるのは不毛ではあるが必要なことだ。

本人のミスが死を招くこともある。

無謀な命令がそうすることもまた然りだ。

それらを解明することで「次」への犠牲を少しでも減らすことは、軍人の責務であるといえるからだ。

だが、何よりも恐るべきは、どれだけ身構えていたとしても、突如として運命の女神様にその手を離され、見放されることだった。

こればかりは、熟練の兵士であろうが初陣を迎えたばかりの士官学校上がりであろうが、どうしようもない。

覚悟と共に内藤が己の末期に目を瞑ろうとした、その時だった。

「……さ、させません……っ！ メタモルブースト！」

弱々しくも凜と芯が通った声が戦場に響くと同時に、球形の魔力によるフィールドが——味方を癒す「薬」と敵を殺す「毒」の性質を併せ持つ絵理の魔法が、無数の敵星体を蝕み、殺す。

第一世代魔法少女。たった一人で戦局を覆すことができる、戦略兵器にも匹敵する存

在。

「すまねえ！ 助かったぜ！」

「……い、いえ……っ、これが、わたしの……わたしたちの、任務、ですから……っ！」  
いつかと同じように、そんな存在に助けられて命を拾った内藤は、運命の女神様の気紛れに中指を立てつつ、絵理へと感謝の言葉を送った。

「そういうこと！ こっからは出し惜しみなしで飛ばしていくかんね！」

絵理が仕留め損ねた個体をリボルバーカノンで屠りながら、戦場へと合流した美柑が不敵に笑う。

秘めた義憤を大義に変えて、魔法少女たちは戦場に降り立った。

勝利の女神はここにあり、とばかりに、暁を呼ぶのは自分たちだとばかりに、絵理と美柑は、その力を存分に敵星体へと振るうのだった。

## 8.2. 魔法少女の定められた滅び

こと一対多数という観点では結衣にも匹敵する力を持つ絵理が戦場に降り立ったことで、戦場におけるパワーバランスは逆転しつつあった。

メタモルブーストによって増幅されると同時に、癒しと破壊を同時に撒き散らすことができるようになった彼女の魔法は敵を確実に死へと至らしめ、味方の傷を癒し続けることでその戦意を高揚させる。

第一世代魔法少女の中で、「治癒」という

、一見、戦いには向かない特質を持ちながらも、絵理が赫星戦役を生き延びられたのも、全てはこの「毒と薬」を同時に行使できるその性質が故だった。

さつきまで押し込まれていたのが嘘のように戦線を強引に押し上げられて、面白くないのがタイプ・ホールケーキだ。

人類抹殺は彼に課された使命であり、同時に本能でもある。

そこに悪意というものがあつたとするならば、それはこの星からリソースを吸い上げた時に、あるいは「エリユシオンの巫女」を通じて、後天的に学習したものに過ぎない。しかし、感情というのは撃発するものであり、長らく付き合ってきた人間すらそれに

煩わされ、振り回されてきたのが、僅か1年にも満たない時間でラーニングをしただけの敵星体に制御できるものかと問われれば、その答えは間違いない。う。

『Guoooooo……Ahhhhhhh!』

何故、思い通りにいかない。

そうとでも怒鳴り立てるかのように咆哮した竜もどきは、己の隣に浮かんでいた複製体の魔法少女を、いわば彼にとつての切り札を戦場へと差し向けることを決めた。

「時は来た……目覚めよ、エリユシオンの巫女。星罰は下された。七つ星が天に瞬くその時に、汝の使命は果たされる」

複製された魔法少女の言葉は要領を得ない。

ただ、セツトされた定型文を繰り返すロボットのようには敵星体から「巫女」へと発せられるメッセージを繰り返すだけだ。

しかし、接近戦であれば当代随一とまで言わしめた、多くのリソースを消費することでの複製が実現した「原初の七人」の実力は、オリジナルに勝るとも劣らない。

その手に携えた、薙刀のような魔法星装によって呪術甲冑を真つ二つに断ち切りながら、敵星体への破壊を巻き散らす絵理を仕留めんと、複製体は戦場へと上がり込む。

しかし、強大な力を持つということは、魔法少女にとってはその動きを察知するの

容易いということだ。

「悪いけど……絵理はやらせないよ!」

「人類は静寂を乱す。人類は愚を繰り返す。我らはエリュシオン、播種の祖にして教導と星罰の執行者。思い出すがいい、我らが巫女よ。今が、悲願の果たされる時、天に七つの星が瞬くその時なのだ」

「……美琴の顔借りて、訳わかんないこと言わせてんなあつ!」

定型文を読み上げるかのように、淡々と感情なく、地球人類にとつては何の意味もなさぬ言葉を探り返している複製体は、結衣の手によって撃ち抜かれたはずである、翠川美琴の顔と姿をしていた。

美柑は親友だった少女の顔と姿を借りて意味のわからない言葉を紡ぐ複製体に、本能的な敵意を抱き、己の魔法星装である直刀で、薙刀の一撃を受け止める。

しかし、例えそれが複製された偽物であったとしても、オリジナルの美琴が得意としていた技の冴えは衰えておらず、「中途半端」な美柑の剣技では、受け止めるのが手一杯だ。

「そういうとこだけは昔と変わらない……!」

「目覚めよ、エリュシオンの巫女よ。汝の使命は——」

「わかつてる! 偽物でも、アタシじゃ敵わないってことぐらい、アタシじゃどうしよう



もないってことぐらい！　メタモルブースト！」

だからこそ、切り札をここで使わされるのもまた、想定内の範囲内だった。

どくん、と一際大きく心臓が波打つ感覚と共に、美柑の全身に増幅された魔力が滾る。しかしそれは、己の魂を星の炉に焼べて、そこに与えられた「猶予」を代償にして解き放たれる禁忌の力だ。

同時に、美柑は自分に残された「猶予」が残り少ないものであることを、本能的に察知する。

メタモルブーストは使えてあと二回、否、一回も怪しいほどに、美柑の魂は摩耗しきっていたのだ。

「あつはは……そっか、アタシもそろそろ限界か……でも、この戦いだけは！」  
この戦いがきつと最後になる。

この戦いを終われば、地上から敵星体は掃討されて、元の日常が帰ってくる。

誰もが根拠などなくとも、そんな楽観論に縋っていたのは、そうすることでしか正気を保てないからだ。

第一世代魔法少女たちが束になって、そしてその九割が命を落とすことで、ようやく赫星戦役は終結を迎えた。

第二世代魔法少女や第三世代魔法少女では、どう足掻いても束の間の平和、その礎と

なつて散つた彼女たちには及ばない。

ここで戦いが終わつてくれなければ、地球という星はどう足掻いても終わりを迎えることになる。

美柑はそんな焦りを内心に抱きながら、美琴をコピーした複製体と剣戟を交わす。

「このっ……！ このおッ！」

「人類は愚を繰り返す、人類は静寂を乱す。故に滅びは定められた、星罰は下されなければならぬ！」

「アタシにそんなことなんかわかるか！」

虚ろな目でたわ言を繰り返す複製体の言葉を要約するのであれば、人類は愚かであり、静寂を乱す故に、「星罰」とやらは下されなければならない上に、その結果として滅ぼされなければならない存在であるらしい。

ふざけるな、と、美柑の中で血が滾り、怒りに連動した心臓が早鐘を打つのを感じる。確かに人類は愚かな歴史を繰り返してきた生き物だ。

かつて、神の世紀に自らの命を喰らい合い、足を引っ張り合うことで、命を使い捨てることで人々はその歩みを未来へと進めてきた側面があるのは確かなことである。

それから連邦の一つ屋根の下、星の世紀に暦が改められたあとも、分断と格差という問題は人類を蝕み続けてきた。

タキオン粒子砲という禁忌の兵器が生み出されたこともまた、人類の犯した罪であるというのなら、それはその通りなのだろう。

しかし、その側面だけを切り取って、一方的に断罪され、死を受け入れろといわれたところで、はいそうですかと素直に従えるはずがあるだろうか。

薙刀と直刀がぶつかり合う、金属同士の高い叫びを上げながら、刃と刃が交錯する。美柑に、人類がどうのこうのと、歴史がどうのこうのといった難しいことはわからない。

しかし、それでも日々を懸命に生きている人間が、理不尽に下された裁きとやらによつて命を奪われていい道理など、どこにもないことぐらいはわかる。

「アタシは……アタシは、今を頑張つて生きてる人のために戦う！ 敵星体が今更何を言つてきたつて、今更美琴の姿を借りたところで……アタシは止まらないつて決めただ！」

残された命の猶予が少ないのであれば、少ないものを犠牲にして、より多くを救おうとする。

それは大局的に見ればただの思い上がりであり、過ちであるとかわかっていても、美柑にとつて残された命の使い道は、敵星体と刺し違えることぐらいいしか思い浮かばない。

そのためならば、かつての親友の姿を敵が勝手に借りていようが、人類側に滅びの引

き金を引く原因があろうが、ただそれを踏み倒して先に進むだけだ。

強固な決意は覚悟となつて、美柑の魔力を補強する。

「燃えろ、『シユテルンダイト』！」

名付けという呪いを受けて、定義を強固にする儀式を経て、己の魔法星装たる直刀に血液が注ぎ込まれるように、炎と化した魔力が宿っていく。

全てを焼き尽くして灰にするまで、三上美柑は、炎の魔法少女は止まらない。

その眦に浮かべた涙を蒸発させて、己を星の炉を燃やす薪として、美柑は体勢を崩した複製体へと、渾身の一撃を叩き込むのだった。

### 83. 魔法少女とエリユシオンの使徒

美柑が放った渾身の一撃は、確かに複製体を袈裟懸けに切り裂いて、深手を負わせたはずだった。

しかし、それは僅かながらも、致命に至らなかった。

腐っても美琴を、接近戦においては並ぶ者がいなかった魔法少女をコピーした存在がこの複製体である。

美柑の一撃をあえて受けることで、己の体に深々と傷が刻まれるのを覚悟した上でのカウンターの一撃を放つ。

生きている人間には、とてもできないようなことを死せる魔法少女は、敵星体は淡々と、無感情にこなしてみせるのだ。

「ぐ、あ……………！」

「目覚めよ、エリユシオンの巫女よ」

あるいは自分の中にまだ、かつての親友と同じ顔をした相手を斬ることへの躊躇いが残っていたのだろうか。

美柑は魔力障壁を貫通し、薙刀の先端が内臓に深々と突き立てられる感覚に苦悶の声

を上げながら、自らに残された甘さを呪った。

深手を負っているのは、自分も敵も変わらない。

朦朧とする意識の中で、美柑は久しぶりに、摩耗していた感覚が息を吹き返したことを確信する。

それは、人が恐れと呼ぶものだ。

それは、人が本能的に抱く痛みへの忌避だ。

これが戦いなのだと、傷つけ、傷つけられて殺し合う、命を奪い合う行いなのだという実感。一度は弔いの花束を贈ってその人生に幕を下ろした死者が無理やり墓の下から掘り返され、駒として扱われることへの怒りと悲しみ。

鈍い痛みと共に沸々と滾る感情は、合わせ鏡のように二つの背反する想いを、美柑の心へと同時に映し出す。

「……もう、いいでしょ……」

「星罰は下された。沈黙と調和を乱す悪しき種への裁きは執り行われなければならない」

「もういいでしょ！　なんで……なんで、殺されて、死んだはずなのに、もう一回殺し合わなきゃいけないのさ、美琴！」

その口から血を吐きながらも、普通の人間であったのなら、深々と斬りつけられた

激痛と、炎によって傷口が灼ける感覚で、まともに動けなくなるほどの深手を美琴の複製体は負っている。

にもかかわらず、淡々と定型文を繰り返しながら、美柑の身体から引き抜いた薙刀を振るい続ける彼女の姿は、敵であるとわかかっていても、あまりにも痛々しい。

それは緩やかな自殺と同じことだ。

薙刀によって貫かれた傷口を、炎で焼き塞ぐという荒技によって戦闘を続行することを選んだ美柑は、痛みと怒りと悲しみに涙を零しながら咆哮する。

どうして、死んでまでその命を利用されなければいけない道理があるのか。

あの時、沖縄で結衣がその命を奪った敵星体は、彼女の妹を模していたという。

戦いに対する情性と鈍麻で、自らの心をごまかしていた美柑は、今になってその悲痛さを、突きつけられた現実の過酷さを理解していた。

しかし、どれだけ呼びかけたとして、どれだけ情に訴えかけたとして、心を持たない、あるいは雁字搦めに封じられている複製体に、その言葉は届かない。

どちらかが終わることですか、その命を終わらせることですか、戦いに幕が下されることはないのだ。

「なんで……なんでなの……いつ終わるの、この戦いは！　いつまで、アタシたちはこんな思いをしながら戦わなくちゃいけないの!？」





それこそが虚飾であると、虚無主義者が笑つても、そんなものに意味はないと悲観主義者が嘆いても、人類という総体は過去から何も学ばなかったわけではないのだ。

次へ、次へとバトンを託すかのように様々な形で総体としての命を繋ぐ。

それが人という生き物の在り方であるとしたら、勝手に終わつたはずの命を掘り起こして好き勝手に道具として使い捨てる敵星体のやり方は、あつてはならないことなのだ。

美柑は傷跡がじくじくと痛む感覚を、歯を食いしばつて耐えることでなんとか正気を保っていたものの、気を抜けば次はないこともまたわかつていた。

紛い物であつたとしても、第一世代魔法少女の中で最強の近距離型と称えられた美琴が相手なのだ。

そこに躊躇いを挟めば、そこに甘さを残せばどうなるかということ、生きる身体に走る痛みが、何よりも雄弁に物語っている。

「終わらせなきやいけないんだ……終わらせてあげなきやいけないんだ、美琴！」

「播種は失敗した。善なる者は生まれなかった」

「悪いところがない生き物なんているもんか！」

その言葉に意味がないとわかつていたとしても、一方的に善悪を決め付けられる傲慢を、美柑は許しておけなかった。

どれだけ正しく線を引こうとしても、どれだけ公正に世界を作り直そうと善意で深い仕組みを破壊して、一から構築し直したとしても、そこから零れ落ちる者は必ず現れる。世界は決して公正でも公平でもない。

どれだけ努力を重ねても報われるのはほんの一握りであるように、どれだけ正しく振る舞おうとしてもその正しさによって傷つけられる者が現れるように、善悪に完璧な線を引いて切り分けられるというのは、子供じみた理想論とも呼べない幻想に過ぎないのだ。

エリユシオンとやらが敵星体の総称であるのなら、彼らは勝手にやってきて勝手に地球人類を断罪し、おまけにその命に敬意を払うことなく冒瀆している。

それが許されていいことであるはずがない。

自らの魂と怒りを星の炉に焼べる薪として、美柑は炎を刃と変えた「シユテルンダイト」を、二の太刀要らずの覚悟で振りかぶる。

こうなればもう、最悪刺し違えることでしか美琴に勝つ方法は残されていない。

元より自分が殲滅力では結衣と絵理に劣り、近接戦では美琴に劣る、中途半端な存在であることを覚えているからこそ、美柑はこの局面での博打へと打って出たのだ。

大上段に構えた直刀を縦一文字に振り下ろす、その太刀筋に迷いはない。

当たればトドメは確実に刺せる。外せばそこで終わって殺される。

ただ、それだけの話だ。

そんなことは百も承知の上で、三上美柑は一世一代の大博打へと、自らの命を天秤の対価に捧げて、「シユテルンダイト」を全力で振り抜く。

奴より早く。奴より先に。

一刻一秒の遅れが命取りになる、神経が逆立つような感覚の中で、美柑はそれとは反対に、どこまでも時間が薄く引き延ばされていくような錯覚に陥っていた。

目蓋の裏に浮かぶのは、愛しい日々を過ごした走馬灯。

誰もが笑い合つて、誰もが悲しみに暮れて、そうしてようやく勝ち取った、束の間の平和までの思い出が、涙と共に蒸発し、暁の空へと還つていく。

「これでえええええッ！」

「調和——愚か——人類、星、罰……あ、りが、とう……ごさい、ます……美柑……」

複製体の記憶は、死したその瞬間にしかエリユシオンの呪縛から解き放たれることはない。

その悪辣さを呪いながら、再び何かを成し遂げたような、ようやくこの戦いから解放されて自由になれるとでもいいかげんな、穏やかな顔で、美琴は袈裟懸けに切り裂かれ、灰へと還つていった。

「……ふぎげんな……ふぎげんな、馬鹿野郎おおおおッ!!!」



## 84. 魔法少女と劫火の竜

戦況を俯瞰していたのは、なにもタイプ・ホールケーキに限ったことではない。

絵理と美柑を戦線に投入することを進言した諏訪部は、絵理が仕留め損ねた敵星体を「オケアノス」の艦砲射撃が叩き落とすのを見送りながら、いつ結衣とアンジェリカを戦線に向かわせたものかと思案する。

美柑が複製体に足止めされ、深手を負ったことで、結衣かアンジェリカのどちらかをタイプ・ホールケーキへとぶっつけなければならぬこの状況は、あまり好ましいものではない。

絵理が敵の殲滅に注力し、敵星体の大半を引き付けてくれる以上、彼女を治療に充てるという選択肢を取るのには難しい。

よって、美柑は引き下がらせるのが妥当と見るべきだろう。

諏訪部は頭の中で戦術を組み立てながら、眉根にシワを深く刻んだ。

絵理と美柑の働きによって持ち直しつつはあるものの、戦線は未だ、一手でも間違えれば瓦解しかねない危うさを孕んでいる。

そして、後ろからも北京管区を突破したタイプ・ホールケーキが接近している都合上、

判断を遅らせるわけにもいかないのだ。

「艦長、ここは小日向結衣をタイプ・ホールケーキへとぶつけるべきかと」

「と、なるかと？」

「……アンジェリカ・A・西園寺を南方の個体にぶつけ、両者の投入でもって決着をつけるつもりであります」

己の考えを淡々と吐き出しながらも、諏訪部の表情は無意識に、嫌悪感に歪んでいた。アンジェリカ一人でタイプ・ホールケーキを相手取れるかという疑問に対しての答えは、わからない、というのが率直なところだ。

わからない、というよりは半分半分といったところが正確だろう。

しかし、勝算があるとしてもそれは、アンジェリカの犠牲の上に成り立つ公算が大きい——第二世代魔法少女によるタイプ・ホールケーキ撃破例がほとんど、メタモルバーンを使つての相打ちであることを考えると、その可能性に辿り着くのは必然だった。

つまり自分は、彼女に死んでこい、と言っているようなものなのだ。

諏訪部の中に残る少年の心は、その酷薄さに目を背けたくなるものの、戦いは最初から引くに引けない絶滅戦争なのだ、大人の理性が物語る。

無論、アンジェリカの犠牲を理屈の名の下に正当化するつもりもなければ、彼女が生き残るといふ希望に懸ける心を失っているわけではない。

しかし、戦局というものは常に最悪を見据えていなければならないものなのだ。

身構えて、身構えて、少しでも死神を遠ざけるために、喉元に突きつけられた鎌が首筋に食い込んだときの覚悟を決めなければ、無駄に命を散らすだけに終わる。

ただ楽観論と根性論に縋って戦場に立つだけの指揮官であるならば、いない方が遙かにマシだ。

そういう意味で、諏訪部は「指揮官」の目をしていた。

東山は内心で彼をそう評価しつつも、軍人として逃れられない宿命に同情を寄せる。

「了解した、マジカル・ユニットの投入はそちらに一任する。こちらは撃ち漏らした敵星体と戦線を突破してきた個体の迎撃に専念するよ、諏訪部大佐」

「ありがとうございます、東山艦長。小日向結衣！ 出撃だ！」

艦底部のハッチで待機している結衣に向けて諏訪部はそう呼びかけると、血が出るほどに強く唇を噛み締める。

年端もいかない少女たちなのだ。

文字通りに見ていることしか3年前より、兵器が兵器として機能する分だけマシなのかもしれないが、それでも、魔法少女たちを矢面に立たせていることに変わりはない。

「……了解！ 出撃します！」

敬礼をした結衣は、その身を豪華なドレスに包み、開いていくハッチから戦火の空へ

と飛び出していく。

誰しもが限界に近い、綱渡りのような戦いを続けている。

この戦いで全てが終わってくれるなら、とは諏訪部も、結衣もまた願っていることではあったが、最悪の可能性は、常に考えていなければならぬものだ。

もしも、敵星体が更なる隠し球を残していたのなら。

もしも、これ以上の敵が待ち受けていたのなら。

その時、人類は耐えうることができるかは、はっきりいってしまえば微妙どころか、ほとんど不可能に近いことは、誰もがうつつすらと理解していることだった。

これが最後なら、とばかりに出撃し、「光の刃」を纏って有象無象の敵星体を消し去りながら、タイプ・ホールケーキへと肉薄する結衣を、諏訪部は震える拳と共に見送る。

なぜ、自分はこの場所に立っていないのか。

答えは簡単だ。魔法少女ではないからだ。

ならば何故、「星の悲鳴」は、この地球は年端もいかない少女たちを守護の戦士として選んだのか。

——わからない。

わからないからこそ、それを理不尽だと感じる心は憤りに沸々と滾るのだ。

負わされた宿命の重さという意味では、自分のそれが結衣のそれと比べたら遥かに軽



いことは、諏訪部も理解している。

だが、結衣はその重さを比べることなどしないのだろう。

壊れた笑顔で夢と希望を、人が願いと呼ぶものを背負って、魔法少女小日向結衣は戦線に立ち続ける。

その命が続く限り、その魂が燃え続ける限り。

人はそれを、英雄的な行いだと見るのかもしれない。

あるいは、その勇気を讃えるのかもしれない。

しかしそれは大いなる欺瞞であり、勇者の名の下に、英雄の名の下に、地球と人々の命を守るという、その小さな背中に負うにはあまりにも重い使命を押し付けていることに目を逸らしていることに違いはないのだ。

——だとしても、好きにやる。

結衣の答えは、きつと最初から決まっていた。

スティアのために、人々のために、自分の手を汚し、全てを背負って前に進んでいく。それが緩慢な自殺だとしても、後ろのレールを剥ぎ取って前に敷き詰めることで進んでいくような行いだとしても、結衣の覚悟が揺らぐことはない。

「……メタモルブースト！」

咆哮を上げながら、掠め取った魔力による劫火を吐き出すタイプ・ホールケーキを視



『ジャッジメント』！

審判の名を冠する光の刃が、名付けという名の呪いによって、定義付けによつて強固にその存在を固定化、補強されていく。

一枚一枚が致死をもたらす劇毒と化した光が、結衣の言葉通りに竜もどきの全身を蝕んで、無数の穴を穿つ。

しかし、相手も規格外の巨体を誇る存在だ。

いかに「ジャッジメント」が強力な魔法であろうとも、展開される刃の大きさは痛みを敵に齎すには十分だったが、仕留めるにはまだ足りない。

『○○○○○○○○○○!!』

だが、その逆鱗に触れるには十分だった。

明確に結衣の存在を「脅威」たりうる「敵」であることを認めたタイプ・ホールケキは、モスクワ管区に出現した個体とは対照的な、海を干上がらせんばかりの劫火をその身に纏い、荒れ狂う。

「この熱……長い時間はかけられない」

戦いはこれからだとも主張するかのような咆哮と、魔力障壁があろうとも身を焦がすような灼熱に結衣は顔をしかめながら、脳裏に敵を仕留める算段を組み立てる。

——幸い、この個体ならば、メタモルバーンを使わずとも、殺しきるには十分だ。

結衣は覚悟と共に獰猛な殺意をその目に宿すと、灼熱を纏う竜もどきへと、再び展開した「光の刃」を射出するのだった。

## 85. 魔法少女、死線を超えて

十枚にも及ぶ「光の刃」を翼のように広げ、自身に食い下がってくる結衣の存在は、明確に竜もどきへと恐怖の感情を刻み込んでいた。

全てを無に還す劫火を纏い、海を蒸発させるほどの熱をその身体から魔力によつて生み出しながらも、その超高温を恐れることなく、結衣は冷静にヒットアンドアウェイを繰り返す。

まともな人間であれば近付いただけで灰に変わるほどの熱は、確かに魔法少女として再構成された結衣の躯体を蝕んでもいた。

しかし、第一世代魔法少女の中で最も強いとまで讃えられた結衣がメタモルブーストまで使つたとなれば、展開される魔力障壁の密度は第二世代以降の魔法少女たちと比べるべくもない。

むしろ、その障壁に多少であつたとしても熱によるダメージを与えられている、タイプ・ホールケーキが異常なのだともいえる。

しかし、その敵星体からすれば、身に纏う障壁や劫火の守りを分解し、斬り刻む特質を持つ結衣の「光」は恐るべきものだった。



つまり、長時間戦えば戦うだけ海を煮立たせる竜もどきの発する灼熱によって結衣の脳は内側から煮立たせられて、死を迎えるということだ。

それをなんとかするためには、一撃であのタイプ・ホールケーキを仕留めなければいけないかった。

だが、それを可能とする結衣の最大魔法、かの「赫星一号」を撃ち落とした「テストメントバスター」を地上で撃ち放てば、タキオン粒子砲同様に余波による被害が大きすぎる以上、必然的に使える手札はその下位互換である「サクラメントバスター」に限られる。

サクラメントバスターによって一撃死を狙うには、まだ足りていない。

それはじわりじわりと追い込まれながらも、敵星体の発する灼熱が衰えていないことから推測できる。

敵星体がどこまで学習しているかはわからないが、魔法少女がそうしているように、魔力は防御に転用することができる以上、この竜もどきがそれをやってこないとは限らない。

そして、サクラメントバスターによって魔力を消耗し、障壁の密度が下がったところにあの灼熱を浴びせかけられれば、やられるのは必然的に自分ということになる。

つまるところ、この怪物をより弱らせなければならず、その上でたった一度切りの

チャンスに賭けなければそこに勝利はない、ということだ。

「……厄介ね、こういうのは……!」

あるいは同じ「炎」の特質を持つ美柑であればもう少し長く持ったのかもしれないが、その場合は千日手のような戦いが続き、いずれにしろその余波で極東管区が派遣した艦隊や呪術甲冑隊がやられるだけだろう。

誰であつても、何を手札に持とうとも、この勝負から降りることは許されず、また敗北も許されない。

これがギャンブルの類であれば、法外だと叫びを上げることでもできたのだろう。

しかし、生憎これは絶滅戦争で、賭け金の代わりに積まれているのは結衣自身の命とスティアの命、そして地球に住まう全人類の命なのだ。

ならば、一世一代の大博打に打って出るしかこの死線を潜り抜ける方法はない。

絵理と協力し、取り巻きの敵星体を撃ち落としていく呪術甲冑隊と、艦砲射撃によりその支援を行う連邦防衛軍艦隊を一瞥すると、結衣は魔力を集中して「光の刃」と思考誘導弾を同時に展開する。

恨みが無いどころか恨みしかないが、抱えた事情はともあれこの竜もどきには、この地上から早々にご退場を願う他にない。

『○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○!!』



「叫んでばかりで……！」

しかし、恐るべき仇敵というよりは厄介な毒虫でも見るような瞳で自身を見つめる結衣の瞳は、竜もどきのプライドを傷つけるのには十分すぎたのだろう。

咆哮を上げ、でたらめに劫火のプレスを吐き散らすタイプ・ホールケーキによる攻撃の余波で、78式呪術甲冑が、主力級航宙戦艦が次々と塵へと化していくのを、結衣はただ見送ることしかできずにいた。

どれだけ犠牲を積み重ねても、どれほどの命だったものをその足元に積み上げることになっても、人類は生き残らなければならない。

それは、この場に赴いた誰もが理解していることだった。

そして、「正しい」ことでもあった。

だが、それは決して許されていいものではない。

未来に犠牲のない世界を作るなどというのは、悲惨な戦いの前では風前の灯にも似た楽観論に、砂糖菓子のような理想論に過ぎないのだろう。

それを示すかのように、艦隊の背後からは北京管区の防衛戦力を全てを踏みにじり、おびただしい数の犠牲を生み出した、紫電を纏う竜もどきが飛来する。

どれだけ窮地に立たされていたとしても、どれほど悲惨な現実の前に、引き金を引かなければ生きてはいけないこの世界の現状に膝を突きそうになったとしても、現実を追

認するだけで、そこで足を止めることは許されない。

それがどれほど重い呪いに変わろうと、描いた理想を、未来に託した願いを背負って闘い、散っていったのが魔法少女たちであるならば、その最前線に立つ結衣もまた同じことだ。

世界のためとは言い切れなくとも、せめて愛する誰かのために。

渴き切った心を潤してくれたスティアのために、この地球へと平穩を取り戻す。

覚悟と決意を背負い、魂を星の炉に焼べながら、結衣は彗星のように光を纏い、燃え盛るのだった。



「……来ましたわね」

一人「オケアノス」の格納庫に取り残されていたアンジエリカは、もう一体のタイプ・ホールケーキが戦線に合流したという報せを受け取って、ぽつりとそう零す。

第二世代魔法少女として、西園寺の家に産まれた人間として、地球のために、人類のために戦うことは誉れであって、そこに恐怖はない。

心の中で何度も自分に言い聞かせていることが反証であることは、わかっていた。

しかし、アンジェリカは己に定められた運命をなんとか受容しようとして、すぐそばにまで近寄ってきた死神を拒絶するのではなく、抱擁しようとする。

だが、それはあえなく失敗に終わった。

「……お父様、お母様……お兄様、お姉様……どうか、どうかわたくしに力を……西園寺の家に生まれた誇りを……！」

嘘だ。

そんなものなど必要ない。

たった一度で良かった。たった一度だけでも、「家族」と認め、あたたかく頷いてくれるだけで、自分は、アンジェリカは何とだって戦える。

しかし、現実として突きつけられたものはどこまでも冷酷であり、死地に赴くアンジェリカに対して、父も母も、兄も姉も「出来損ないが名誉ある死を遂げられるだけ幸せだろう」とでも告げるかのように、言葉一つ寄越さなかったのだ。

アンジェリカは眦に滲んだ涙を拭うと、心の内側で叫び続ける幼子の叫びを押さえ込んで、豪華なドレスに身を包み、開くハッチから舞踏会の、戦火の空へと飛び出していく。

きつとこの戦いを生き残れば、絶望を覆せば、家族はきつと自分を認めてくれる——どこまでも純朴で、いたいけな願望を抱きながら。

## 86. 魔法少女と紫電の龍

「艦隊の半数、回頭終わりました！」

「よし、これより『オールト』を中心とした臨時の分艦隊を編成、新たに襲来した敵星体の迎撃に当たれ！」

東山は戦術シミュレータが叩き出した計算通りのタイミングで現れてくれた、紫電を纏う竜もどきが率いる、もはや群れとも呼べない残党を迎撃すべく、残された艦隊の半数をその迎撃に充てることを決める。

残党とはいえ数はそれなりに多く、アンジェリカがタイプ・ホールケーキと一対一で戦える状況を作り出さなければならぬ以上、妥当な判断ではあつたものの、それが吉と出るか凶と出るかはわからない。

しかし、絵理の奮戦によって「オケアノス」が支える戦線における最大の障害は結衣が現在進行形で斬り刻んでいる、劫火を操る方の竜もどきだけだといつてもいい。

余裕のできた呪術甲冑隊も一部は「オールト」や所属する艦へと帰還して補給を受けると、アンジェリカを支援するため、背後から迫る敵星体の方へ向かっていく。

「いいかお前ら！ この作戦はお姫さんがやられたら一巻の終わりだ！ 俺らは丁寧な

エスコートしなきゃあならん！」

「へっ……騎士様というには少々むき苦しいですがね！」

「軽口を叩けるってこたあ、やれるってことだな、古橋！ 行くぞ野郎共！ 星屑のクソツタレに鉛弾をたらふくご馳走してやれ！」

『了解！』

内藤が率いる呪術甲冑隊も、新品のミサイルポッドをフライトユニットのパイロンに懸架すると、その弾を惜しみなく全てHUDに投影されたロックオンマーカの表示に従い、全てぶちまける。

魔力による補強がなされた鉛弾とミサイル、そして徹甲弾と艦砲射撃の雨霰が、新たな竜もどきが引き連れてきた敵星体の残党を撃ち抜き、引き裂き、塵へと還す。

『G u i l l i e r m e ……』

しかし、紫電をその身に纏うタイプ・ホールケーキは、焦りのようなものを見せた火花を操る個体とは対照的に、どこか余裕さえ感じさせる低い唸り声を上げるだけだ。

まるで自分以外の全てはどうでもいいとばかりに傲慢な態度を見せる竜もどきのそれもまた、この地球から、人間から学習した感情らしき何かの発露なのだろう。

——気に食わねえ。

それが、内藤の率直な感想だった。

「野郎、ずいぶん余裕ぶっこいてくれるじゃねえか……吠え面拝むまでは死ねねえなあ！　そうだろてめえら！」

『応！』

魔法少女よりも遥かに危険な任務についているのにもかかわらず、不敵に笑いながら曲芸飛行を繰り広げ、誰一人として脱落者を出すことなく敵星体の迎撃に当たるチームワークを、その絆とでも呼ぶべきものをアンジェリカは少しばかり羨望の混じった目で見つめていた。

自分にも、仲間はいるのかもしれない。

結衣も、絵理も、美柑も、皆マジカル・ユニットとして共に死線を潜り、寝食を共にしてきた仲間であるとは、頭の中では理解している。

しかし、アンジェリカはどこまでいっても一人であると、彼女のオッドアイは現実をそう捉えて、その悲しみだけを追認していた。

日本で最も早く、第二世代魔法少女として生まれ変わった存在。

それがアンジェリカ・A・西園寺を支えるたった一つの誇りだった。

それは忌み子であり、落ちこぼれだった自分の運命を変えるに相応しい、劇的な出来事だったからだ。

魔法少女となつてからは、訓練や「はぐれ」の掃討や佐渡ヶ島奪還戦という初陣での

功績を挙げてからは、家族が自分を見る目は多少ではあるが変わっていったと、アンジェリカはそう思っている。

それは自分の努力が、立てた武功が認められたということであり、ずっと魔法少女として戦い続けられれば、いつかは父や母、兄や姉は自分に振り向いてくれるかもしれないという期待でもあった。

しかし、アンジェリカの隣に並び立っているのは、同世代の魔法少女ではない。

第一世代魔法少女。あの地獄を、「赫星戦役」を生き延びた「原初の七人」の生き残りであり、彼女たちと自分の間にはあまりにも大きな隔たりがあることを、アンジェリカは不幸にも理解し、認めてしまっていた。

ただ傲り高ぶっているだけであれば、自らのプライドという殻の中にこもっていれば、最低限の自尊心は守れたのかもしれない。

しかし、アンジェリカという人間の性根が、そこに横たわる誠実さが、そんな行いを許すはずはなかった。

ハサミのような魔法星装を振るって、無数のタイプ・キャンディを叩き落としながら、アンジェリカは紫電を纏う竜もどきへと肉迫する。

「……これはわたくしの、一世一代！ 全てをかけた戦いですわ！ メタモルブースト！」

アンジェリカは、誰でもなく、ただ自分に言い聞かせるかのようにそう叫ぶ。

第二世代魔法少女の中で、最も早く生まれたということもあって、彼女が発動したメタモルブーストは、第一世代魔法少女にも迫るほどの効力を発現する。

しかし、その代償として要求されるものは自らの未来、天に昇って星になるまでの「猶予」だ。

それを理解していながらも、迷うことなく己の魂を星の炉に焼べ、燃やしながら、一つの彗星となってアンジェリカは飛ぶ。

『G u l l e r i c a ……!』

不遜にも自らの周囲を飛び回るハエが現れた、とても言いたそうに不機嫌な唸り声を上げたタイプ・ホールケーキは西洋の竜というよりは東洋の龍に近い、手足と羽が生えた蛇のようなフォルムをしていた。

しかし、その威容は蛇など比べ物にならないほど厳かで、人類が無意識に抱く「恐れ」そのものを体現するかのよう、煌々と稲妻を纏って輝いている。

竜もどきならぬ龍もどきは、鬱陶しげに手を払うと、魔力で呼び出した雷雲から、アンジェリカを追尾する紫雷を撃ち放つ。

「そのような攻撃で！」

『G u l l e r i c a ……! O o o o o o o o ……!』



真つ向から挑みかかるアンジェリカもまた、自らの魔法星装によつてその雷を断ち切ろうと試みた。

だが、突如として龍もどきが唸り声を上げ、その指先を、糸でも手繰り寄せせるかのようによく、と微かに曲げることで、雷の軌道は模様を変える。

「か、はっ……!?!」

アンジェリカの背後へと回り込むようにその軌道を描き直した紫色の雷は、果たして狙い通りに彼女の背中を打ち据えて、魔力障壁がなければ感電死していたか、熱量で焼かれて死んでいたのであろう打撃を与えていた。

なんとか命拾いはしたものの、メタモルブーストだけでは、とても敵うような相手ではない。

アンジェリカは、本能的にそれを理解していた。

くつくつと笑うかのように唸り声を上げ続ける龍もどきは、更に雷雲を呼び出すと、断続的に、容赦なく電撃を浴びせかけていく。

まるでアンジェリカを弄ぶかのように、昆虫の手足を戯れに引き裂いて遊ぶ子供のよう、無邪気ながらも悪辣な、死への誘いが撒き散らされる。

「この……っ……! わたくしは……わたくしはッ!」

己の特質である「強化」の魔法によつて魔力障壁を強固に補強することでなんとか雷

を防ぐこと自体はできていたものの、このままでは近寄ることができずジリ貧だ。

その間にも結衣が相手取っている劫火の竜が、地球艦隊を焼き尽くしてしまうかもしれない。

むしろ、この個体はそれを、もつとも緩やかで残酷な死を望んでいるのではないかと錯覚するほどに、その戦法は粘着質で悪辣なものだ。

ならば、悪を相手に遠慮をする必要はどこにもない。

頭ではそれをわかっていても、いざその手札を切るとなった時に脳裏をよぎる恐怖が、生物が本能的に逃れられない「死」への忌避が、アンジェリカの両手を震わせる。

——それでも。

「それでも、わたくしは……わたくしは、アンジェリカ・A・西園寺なのですわああああっ！ メタモル……バーンッ！」

それでも、自分は西園寺の家に生まれた人間だ。

その命が望まれているものであったとしても、家族がアンジェリカという個人ではなく、「魔法少女アンジェリカ」の武勲だけを望んでいたとしても、その呪縛からは逃れられないとばかりに、それでも構わないと自棄を起こして泣き出す子供のように、アンジェリカはどうとう、己の命を天秤の対価に捧げ、その魂を燃やし尽くすのだった。

## 87. 「魔法少女アンジェリカ」

メタモルバーン。

それは蠟燭の灯火が消える直前に一際強く輝くかの如く、己が保有する魔力を増大させることにして、魔法少女の終焉を意味するものだ。

命と未来を灰に還して、その肉体を崩壊させながらも、アンジェリカは自らに降り注ぐ雷を、強化された魔力障壁で強引に引き剥がすという荒技を披露する。

「この力ならば戦える……この力ならば、わたくしは！」

選りすぐりの魔法少女隊である、マジカル・ユニットへと編入された第二世代魔法少女。

それが意味するところは、名誉と栄光に違いはない。

戦後に生まれた多くの魔法少女たちがトライアングル・ユニットとして、もしくは通常任務に投入される魔法少女隊として戦ってきた中で、特級難度の任務に駆り出されるマジカル・ユニットは、ある種彼女たちの憧れともいえるものだった。

しかし、唯一編入されたアンジェリカが感じたことはその二つ、名誉や栄光などではなく、「早生まれ」の資質をもってさえ届かない力の差に対するコンプレックスだ。

第一世代魔法少女は、現存する三人は戦友であり、仲間でもある。

雷雲を斬り裂いて、紫電を纏う龍もどきへと肉薄したアンジェリカは、己の魔法星装を横一文字に薙ぎ払う。

『L u o o o o o h h h h ……!?!?』

「少し浅かったようですわね！ ですが！」

信じられない、とばかりに唸り声を上げたタイプ・ホールケーキのことなど意にも介さず、アンジェリカは目の前の敵を仕留めることだけを、武勲を挙げることだけを脳裏に浮かべ、魔法星装へと更に魔力を注ぎ込んだ。

小日向結衣は、水瀬絵理は、三上美柑は、仲間であり戦友でありながらも、アンジェリカにとっては超えることのできない「壁」でもあった。

それは、美柑と共に出撃した佐渡ヶ島奪還戦。あるいは、結衣と共に出撃したダンジョン・アタック。

そして今、この戦場において無数の敵星体を、人類の叡智が生み出した航宙艦の艦砲射撃よりも早く敵を殺し、味方を癒すという奇跡を披露している絵理の奮戦。

三人が魔法少女として振るった力は全て、アンジェリカには届かない領域に踏み込んだものであることを、認めたくはないが、聡明な彼女の本能は、理解してしまっている。戦わなければ、ここで勝利を得なければ、人類は滅亡の淵に立たされるだろう。

故にこそ、この戦いは大義に基づくものであり、自分の義憤は認められるべきものと、アンジェリカは自らを騙すようにそう言い聞かせる。

だが、その真意は極めて個人的なところにあることを、アンジェリカは誰よりもよくわかつていた。

結衣を超える英雄とならなければ、絵理を超える奇跡を見せなければ、美柑を超える力を示さなければ、自分は、西園寺の家に認められることはない。

『Luooooooooo!!!』

不遜にも自らの雷撃を引き裂き、肉体に傷をつけてくれた小虫を八つ裂きにせんと、龍もどきはその爪に雷を纏い、先ほどまでとは比べ物にならない数の雷雲を呼び寄せながらアンジェリカへと電撃を浴びせかける。

「そんなもの……そんなこと！」

だが、極限まで引き出された「強化」の特質によって補強されたアンジェリカの魔力障壁を貫くには至らない。

返す刀で纏う雷の守りごと肉体を斬り裂かれ、屈辱に打ち震える龍もどきに対して、アンジェリカが思うことは何もない。

ただ、一刻一刻と迫っている自分の死に、魂が急速に磨耗していく感覚に、微かな恐怖を抱いているだけだ。

思えば、まともな人生ではなかったのかもしれない。

父も母も、兄も姉も、自分が生まれたその時から、愛情を向けてくれることはなかったように思う。

ただ子供を捨てることを法が許さないから、秘密裏に孤児院などにアンジェリカを預けたとしても、それが露呈したとき、家名に傷がつくからと、たったそれだけの、それっぽっちの理由で、アンジェリカは両親からの庇護を受けていただけだ。

左右で瞳の色が違う。

ただそれだけで、生まれ持った、どうすることもできない欠落によって、アンジェリカは西園寺の人間として、人が受けられて然るべき愛を与えられなかった。

それでも、アンジェリカが死んでしまおうと思わなかったのは、泥水を啜るような思いで生き続けてきたのは、魔法少女という希望があったからだ。

家名に傷がつくからと、アンジェリカからはあらゆる自殺を試みる手段が遠ざけられていた。

ただ独房のような部屋で過ごしていたそのときだった。敵星体による侵略と、それに対抗する存在、魔法少女のことを知ったのは。

骨董品のようなラジオから流れてくるニュースによって、奇しくもアンジェリカは魔法少女という希望に触れることができたのだ。

自分も魔法少女となって、敵星体を倒すことができれば、もしかすると父や母は、兄や姉は自分のことを見てくれるかもしれない。

「さあ、『ズヴェズダユーズ』！ わたくしにその力をお見せなさい！」

幼い頃に描いた希望の通りに、願い続けたことで手にした夢に従って、アンジェリカは龍もどきを翻弄し、瞬く間にその巨体を斬り刻んでいく。

強化魔法と「名付け」によって補強された魔法星装は、結衣が展開する「光の刃」に匹敵するほどの出力を発揮して、その威力をアンジェリカの眼前に示す。

『Luuuuuu……Ooooooohhhhhhhhhhh……i!』

「わたくしはアンジェリカ・A・西園寺！ 由緒正しき家に生まれた、魔法少女！」

だが、希望は架空に描くものでしかなく、夢とはいつか終わるものだ。

はらはらと剥がれ落ちて灰に還っていく自らの肉体を一瞥し、アンジェリカは眦に涙を滲ませながらも、とつくに壊れていた心を、折れそうになりながらも継ぎ接ぎするようにならうと叫ぶ。

—— たった一度だけでいい。

たった一度だけ、ほんの一瞬だけでもいい。

ただ自分は、両親に、家族に、「愛している」と、その一言を口にしてもらいたかっただけだ。

きっとこのタイプ・ホールケーキを倒したとしても、「魔法少女アンジェリカ」が武勲をいくら挙げたとしても、両親は、兄姉は、アンジェリカという個人を省みてくれることはないだろう。

そんなことは、わかっていた。

わかっていたけれど、認めたくなかった。

ぼろぼろに崩れ落ちていく肉体が、燃え尽きていく魂が慟哭に代えて、アンジェリカの嘆きを天へと立ち昇らせる。

「……………どうして……………どうして、わたくしを愛してくれなかったんですの……………」  
紫電を纏う龍もどきは、アンジェリカの猛攻を前にもはや瀕死にまで追い込まれている。

メタモルバーンを解放し、第一世代魔法少女のメタモルブーストに勝るとも劣らない力を手に入れたアンジェリカの前に、敵はいないといっても過言ではない。

だが、そんな無敵の魔法少女になったところで、憧れていた、そして妬んでいた結衣や絵理、美柑と同じ力を、自らの魂と命を贄として手に入れたところで、この空っぽの掌には一体何が残るといえるのか。

答えは決まっている。

それは「無」の一言に尽きた。





障壁の前には、その全てが無駄に終わる。

「泣くんじゃねえ、お姫さん！」

「……内藤、隊長……？」

俯き、佇むアンジェリカへと声をかけたのは、命をかけてこの場所へと彼女を送り届けた呪術甲冑隊を率いる、内藤勲曹長その人だった。

「綺麗事かもしれねえ！ 明日には俺だって死んでるかもしれねえ！ でもな、こうやってお姫さんに助けられたから俺たちは生きてんだ！ だから……俺たちはそれを忘れたりなんかしねえ！」

死にゆくアンジェリカへと叫ぶ内藤の言葉は、全ての魔法少女たちに向けられた祈りというべきものでもあったが、そこには確実に、「アンジェリカ・A・西園寺」という個人に対する感謝と尊敬が含まれている。

兵士たちにとって、魔法少女たちは尊敬すべき女神にして、本来は愛し、守るべきうら若き乙女たちだった。

内藤の言葉の中には確実に、愛が、それは望んだ形とは違うものの、隣人に向けられる無償の愛が横たわっている。

——きつと、きつとそれだけで。

魂が完全に燃え尽きて消えるまでの刹那の時間、アンジェリカは悪あがきとばかりに

自らの質量を極大の雷撃に変えて人類を殲滅しようとする龍もどきの一撃に、絶対守護の障壁を展開した。

「……ありがとうございますわ。わたくしのことを……アンジェリカという人間がいたことを、どうか、忘れないでくださいまし……」

思えば、愚かなことだったのかもしれない。

劣等感を抱いていたことも、武勲を立てなければ認めてもらえないと思いついていたことも。

だが、後悔したところで全ては後の祭りだ。

ならば、自分は魔法少女としての任務を全うすればいい。

遺言はそれだけだとばかりに微笑んで、残存艦隊と呪術甲冑隊に向けられた紫を纏う雷撃の盾となりながら、アンジェリカは微笑み、その胸に確かな愛を抱き、天へと還っていくのだった。

## 88. 「魔法少女アポカリプス」

また一つ、命が天へと昇って消えた。

結衣は灼熱の劫火を纏う竜もどきを、「光の刃」で斬り刻み、思考誘導弾をぶつけることで確実に死の淵へと追い込みながらも、内心ではどうして、と慟哭する。

しかし、答えは自明だ。

そうするしかなかったからだ。そうすることではしか、アンジェリカはきつとあのタイプ・ホールケーキに勝つことはできなかった。

メタモルバーンにより自らの命を燃やし尽くし、最期にその力を振り絞って地球艦隊の盾となりながら、天へと昇っていった孤独な少女に、何の言葉もかけられなかったことを結衣は悔やんで、自らへの怒りに変える。

「……いつまでこんな戦いが続くの……いつまでこんな戦いを、続けなきゃいけないの!？」

その問いに、慟哭に答える者はいない。

その間にも絵理が殺しきれなかった敵星体に群がられて、癒しの力も届かないままに魔法少女が食いちぎられ死んでいく。



テレビの中で、アニメの世界で描かれる彼女たちはいつだって勇敢で、どんな苦境に立たされたとしても決して諦めることなく立ち向かい続ける。

だが、そんな夢物語の中にしか出てこないような存在にいき自分がなった時、彼女たちのように折れない心を保って、戦いの宿命を受け入れることができたかと問われれば、その答えはノーだ。

結衣はアンジェリカの死に涙を零しながら、結局何も言えなかった、断絶を抱えたまま、一足先に自由になってしまった戦友の犠牲を背負って、「光の刃」を振るい続ける。十枚羽が尽きればまた新たな剣であり翼を継ぎ足して、零れ落ちる涙と共にその光を憎むべき敵へと突き立てていく。

あの日、もしも、不用意に自分がアンジェリカの孤独に踏み込むことがなかったなら、結末は変わっていたのだろうか。

その答えは明白でありながらも、結衣はそう考えずにいられなかった。メタモルバーンを使ってしまった時点で、魔法少女はその死から逃れることができない。

知らないことを知らないまま別れを迎えることと、知ってしまった上での別れに何の違いがあるのだろうか。

きつと誰かは訳知り顔で知らないだけ幸せだったとでもいうのだろうか。

だが、払われた犠牲が変わらない以上、そこに優劣をつけることに意味はなく、同時にそれは著しく品性を欠いた行為だった。

本当ならば、もつとアンジェリカとも仲良くなりたいたいと思うところはあつた。

きつと彼女とは本質的にわかり合うことはできないのかもしれないが、それでも、轡を並べ、同じ釜の飯を食べて、同じ時間を過ごした仲間であることに違いはない。

そんな命が容易く失われていく戦場を呪いながらも、犠牲を積み重ねてしか前に進むことができないう現実を認めながらも、それを否定するように、結衣は煌めく裁きの「光の刃」を竜もどきへと叩きつける。

犠牲を積み重ね、屍の上に立ち、引き金を引かなければ人類は前に進むことができないのかもしれない。

だが、いつかはそうしなくて済む未来が来ると、魔法少女たちが、死ではなく本当の意味で自由になれることを願いながら、結衣はその前に立ちはだかる敵を倒すために最強たる力を振るい続ける。

しかし、結衣がどれだけ力を振るっても、救うことができずに、指の隙間をすり抜ける砂のようにその命を落としていく存在はある。

灼熱の劫火に内側から脳組織を焼き尽くされた魔法少女が、力なく煮えたぎる海へと真つ逆さまに落ちていく。

竜もどきが放つ熱線から、「オケアノス」と「オラシオン」を庇うように前へ出た主力級航宙戦艦が、水底へと沈んでいく。

黙示録が示す地獄を体現するように、犠牲はうずたかく積み上げられて、その度に失われた命が、結衣の背中に重くのしかかる。

これが最後なら。これで最後なら。

願いをかけるように、結衣はどうとうタイプ・ホールケーキが息を切らし始めたのを認めると、その巨体を消し飛ばすべく、術式を展開した。

「お願い、『ロンゴミニアスタ』！ サクラメント……バスターー！」

その名を呼ぶことによつて、可能性の揺らぎの中を漂っていた現象が出力される状況を切り分けることで、抽出された概念は、理論上のみ存在する可能性であったとしても現実へと顕現し、その力を増していく。

結衣が展開した魔法の術式は極めてシンプルなものである。

全てを無に還す「浄化の光」という概念を、聖なるものとしての、神罰としての「光」という概念を高次元から抽出して、それを杖の先から出力するだけのものだ。

しかし、シンプルであるが故に、「光」という特質は人間が信仰する「神」に最も近い性質を有するがために、なによりも強力に作用する。

神なる力を、炎を焼き払い、雷を霞ませる「光」そのものを結衣は魔法星装「ロンゴ



「ミアスタ」から竜もどきへと撃ち放った。

『○○○○○○○○○○……』

叫び声を上げる間もなく、タイプ・ホールケーキは、人類が最も恐れる災厄の化身としての形をとった幻想種の出来損ないは、最後の悪あがきすら許されずに、光の中で分解されて消えていく。

海を煮立たせる劫火は、天の光に届かない。

星を背負う中でも最強の名を冠する魔法少女の、小日向結衣の一撃は、確かにその瞬間にタイプ・ホールケーキを跡形もなく消し飛ばし、戦いに幕を下ろしていた。

「……終わったよ、スティア。終わったよ、アンジェリカ……」

きつと、この戦いが終われば平和が訪れる。

そんなものは幻想なのかもしれないが、少なくとも地球上に存在するダンジョンを放棄して侵攻してきた敵星体は、全て駆逐できたはずだ。

結衣は心臓が一際高く跳ねるのを感じながら、己に与えられた「猶予」が幾ばくもないものであることに、脱力して肩を落とす。

——もう、次はない。

そんな結衣の心配をよそに、戦いは最後の詰めに、掃討戦に移行していた。

タイプ・ホールケーキという親玉を失ったことで取り巻きや「はぐれ」の敵星体はそ

の統率を欠き、うろたえている間に絵理が発する「毒」の領域に蝕まれて消えていく。人類は勝利した。

そう断言しても過言ではない。

極東管区の総司令部では現に、軍務局長が握り拳を固めて、見たかとばかりに戦果を勝ち誇っている。

しかし、そこに積み重ねられた犠牲は、決して小さなものではなかった。

今回の総力戦で、人類は再び魔法少女の九割と各管区が保有する航空艦のほとんどを失っている。

極東管区は幸いオケアノス級を一隻も欠くことなく勝利を迎えていたが、その代償として三十隻投入された主力級航空戦艦は九隻にまでその数を減らしていた。

これが最後であったなら、本当に、終わりであったなら。

きっと、何もいうことはない。

誰もが死力を尽くして戦った。

誰もが人類に未来を繋ぐため、明日という時間を残すために、その礎となって戦った。だが、結衣の中にはどうしても、勝利を喜ぶ気持ち湧いてこなかったのだ。

「……終わるのかな、終わりなのかな、スティア……」

——こんな思いをするのも、この戦いも。

一人、ぼつりと零れ落ちた結衣の言葉は、誰に漂うこともなく、雷雲から開け放たれた青空に立ち昇り、静かに溶けて、消えてゆくのだった。

## 89. 魔法少女と束の間の勝利

全てのタイプ・ホールケーキとその取り巻きを駆逐したことによつて、地球連邦は敵星体に対しての勝利を遂げたといつてもいい。

だが、払われた犠牲は決して小さなものではなく、苛烈極まる戦いの爪痕もまた、再生までには時間を要することだろう。

結衣たちの帰還は、上層市民と下層市民の区別なく祝福され、敵星体の恐怖から人類は解き放たれたのだと演説する大統領の言葉もまた、人々の歓喜を後押ししていた。

「勇敢なる諸君らの活躍によつて、地球は忌まわしき敵星体の恐怖から解き放たれた。改めて礼を申し上げたい」

軍人たちとメディアを招いて開かれた叙勲式では、司令長官から直々に結衣や、戦いに参加していた兵士たちに勲章が贈られる運びとなった。

それは本当であれば名誉なこと、喜ぶべきことなのだろう。

結衣は感情でその事実を理解していても、心の奥底に沈み込んだ何かが、犠牲になつて散つていった者たちへの悲しみや、本当に敵星体は駆逐されたのかという不安が足を引つ張つて、どうにも素直に喜ぶことができない。

しかし、あの敵星体の群れは地球上に存在していた全てのダンジョンから這い出てきたものだというのは「ラボラトリー」による報告で、確かなことだ。

辛うじて残された、各管区が所有する航宙巡洋艦や航宙駆逐艦がダンジョンの近辺を調査しても、そこに敵星体反応は一欠片たりとも存在しなかったという。

豪華な天然食が、ビュツフエ形式で惜しみなく振るわれた祝勝会の会場で、すつかり勝利に浮かれている兵士たちの輪に溶け込むこともできず、結衣は会場の隅でじつと、嵐が過ぎ去るのを待つかのように、ちびちびと天然のリンゴを絞って作られたジュースを煽っていた。

「ん？ どしたのさ、結衣。せつかく美味しいご飯食べられんのに、なんでそんな暗い顔してんの？」

そんな彼女を見かねたのか、何年ぶりに食べたかわからないローストビーフを惜しみなく皿に盛り付けていた美柑が、小首を傾げながら言葉を投げかける。

確かに、振る舞われている食事はどれもこれも絶品の一言であり、結衣としてはそこには文句も何もない。

缶飯以外で久しぶりに味わった天然食はどれもこれも舌がとろけ落ちそうなくらいの味わいで、しばらく元の食生活には戻れなくなるだろうな、と思わせる程度には美味なものだ。

ただ、美柑のようにそれを楽しむでもなく、隅っこで陰気な顔をしてリンゴジュースを飲んでいる戦いの立役者、というのはどうにも軍人たちにとって、面白くないのだから。

時折感じる、射るような視線や、あるいはどこか頭でもぶつけたのか心配するような視線の数々は、勝利を喜んでいない、その輪に入り込むことができないう結果としてさらに疎外するものだった。

「……美柑は、本当に終わったと思う？」

「終わった？ どういうこと？」

結衣がぼつりと零した問いかけに、今度は美柑が小首を傾げる。

戦いの話であれば、「ラボラトリイ」や各管区による調査によって敵星体反応が地球上から消滅したのは確認済みだ。

よって、戦いは終結した。

それが導き出された結論である以上、そして連邦政府が何かわざわざ隠し事をしなければならぬ事情が見当たらない以上、疑うまでもなくそれは「終わった」ということなのではないだろうか。

美柑は結衣が抱えているのであろう感情への不理解と断絶に少しばかりの痛ましさを覚える。

きっと、優しい結衣のことだから犠牲者に、死んでいった人間に引つ張られてしまう部分が大いなのだろう。

確かに、死者のことを忘れて乱痴気騒ぎに興じてくれと頼まれれば、さしもの美柑とて顔をしかめるのには違いない。

それでも、生き残った人間が未来を謳歌しなければ、散ってしまった人間が生きたかった明日を生きなければ、それも逆に冒瀆となる。

「よくわかんないけどさ、アタシたち、勝ったんだよ。皆……皆、頑張ってた。アタシは途中でリタイアして絵理に治してもらった身だから、申し訳ないんだけどさ。でも、暗い顔してたら、アンジェリカに怒られちゃうんじゃないかって」

「……美柑……」

「アタシが上手くやれてたら、もっと強かったら……アタシ一人で世界を救えたら、つて、そりや思うよ。だって、それなら……傷つくのはアタシだけで済むもん。だけど、現実はそのじやないんだ」

——だから、思いつきり笑おうって、決めたんだ。

美柑は手に入れた生を、拾った明日を慈しむかのように大輪の笑みを満面に咲かせるが、その眺には結衣と同じ、天に散った者たちに捧げられる涙が浮かんでいた。

自分に世界が救えたら。

それは幾度となく、結衣が繰り返してきた自問自答でもあった。

もしもあの時、桃華を犠牲にしなかったら。もつと早くにテストメントブラスターを撃ち放つことができていたら。

地球はこうして、また犠牲を積み重ねずに済んだのではないかと、今も尚、そう思うのだ。

「……ごめん、美柑」

「あつはは、いいって。アタシはそんな風に考えられるけど、結衣はそうじゃないってことですよ？　じゃあ、そこにいいとか悪いとかって、多分ないと思うんだよね」

感じる心は人それぞれに備わっていて、痛みや悲しみに寄り添うことができる結衣の優しさは、確かにこの場においてはすぐわかないものなのかもしれないが、汚点だというわけではない。

むしろ、それは誇るべき美点であると、美柑は結衣の肩にぼん、と手を置いてから親指を立てる。

「せっかくだし、ステイアに会ってきたら？　会場のどっかにはいるっしょ？」

「……ステイア……そうだね、うん。そうしてみる。ありがとう、美柑」

帰還時の熱狂に、叙勲式に、そして無駄に広い会食場でのビュッフェという条件が重なっていたせいで、本来ならば真っ先に自分を出迎えてくれたであろうステイアとは、



まだ会えずじまいなのだ。

あんまり放っておくと、さしものステイアであってもむくれてしまうだろう。

ステイアは今どこで何をしているのだろうか、結衣がそう考えながらリンゴジュースを飲み干した、その時だった。

照明が落ちて、非常灯の赤い光が会食場を照らしたかと思えば、けたたましい警報が鳴り響く。

『巨大敵星体反応を確認。繰り返しします、巨大敵星体反応を確認。緊急事態宣言を発令、各員は第一種戦闘配備にて命令があるまで待機してください』

機械音声の非常アナウンスが、あり得るはずのない事態を告げた。

「敵星体……どうということ!？」

「なんだなんだ!? 敵さんは全滅したんじやあねえつてのか!？」

美柑や内藤が困惑に叫びを上げる中で、結衣は素早く懐に拳銃が収まっていることを確認すると、その顔を蒼白にしながらも、最悪の事態を想定して、解号を唱える。

「ドレス・アップ!」

嫌な予感が、地獄の機械が音を立てて蠢くのを感じながら、結衣は己の内側に響く「星の悲鳴」を頼りに、拳銃を携えて会食場を飛び出していくのだった。



——目覚めよ、エリユシオンの巫女よ。

星罰は下された。悪しき人類は裁かれなければならない。

裁きをもたらす者。播種を司り、この世に遍く命を生み出し、そして善なる者を未来へと残す使命を帯びる者。

敵星体が複製した魔法少女の、芽衣や美琴が発していた言葉は決して、結衣たちに向けられたものなどではなかった。

がんがんと、頭の内側を金槌で殴り付けられたような頭痛と共に、ステイアは「オケアノス」のブリッジで見守っていた戦いの中で聞いた言葉が、熱を持って自分の内側で、のたうち回るのを感じる。

忘れていた使命が、失っていた記憶が芽吹き、根差し、「ステイア」を構成していた人格を侵食しながら、その名で呼ばれていた少女は長き眠りから目覚めることになる。

「何をしている、止まれ！」

密かに諏訪部が差し向けていた監視の軍人が、ふらふらと熱に浮かされたかのように彷徨い歩くステイアへと拳銃を向けてそう叫ぶ。

意識しているのか無意識なのかはわからないが、ステイアが向かおうとしていたの

は、立入禁止区域に指定されている大呪術結界の心臓部、超巨大呪術回路を管理する動力室だった。

「……星罰は下された、人類は、裁かれなければならない……」

「それ以上動くな！ 本当に撃つぞ——!?!」

監視の軍人が拳銃のセーフティを解除して、その銃口をスティアへと向けたその瞬間、目に見えない何か自分が打ち据えるのを、彼は感じていた。

少し遅れて衝撃が、そして何の遠慮もなく壁に叩きつけられる痛みが、彼の意識を奪って気を失わせる。

「スティアは……『私』は、エリユシオンの巫女」

虚ろに呟くスティアの瞳は真紅に染まり、そして。

その背中からは、本来人が持たぬもの——赤い翼が、ばさりと音を立てて構築されていくのだった。

## 90. 「さよなら魔法少女」

突然の警報に軍人たちが困惑する中で、いち早く動き出していたのは結衣だけではなかった。

訓練された彼らが訝りながらも食事を放棄して持ち場へと向かうより早く、諏訪部は官僚たちのお喋りを打ち切って、総司令部へと走り出す。

「状況はどうなっている!? 報告しろ!」

『はっ! 現在スティアと呼ばれる少女が突然反乱を起こし——ぐあああっ!』  
「クソッ!」

念のためにとスティアには監視をつけていたはずだが、それが全滅したということ、通信の途絶によって諏訪部は悟る。

緊急事態宣言を判断した総司令部の戦術シミュレータによれば、超巨大敵星体反応が司令部から検出されたという話だったが、タイプ・ホールケーキが現れたのならばこの建物はとつくに崩壊しているだろう。

ならば、その敵星体反応は、スティアから発せられていると見るのが妥当なはずだ。

諏訪部は総司令部へとひた走っていたが、通信が途絶した今、そこに行つて何ができ

るのかと、嫌悪感に小さく舌打ちをする。

しかし、指揮を取る人間がいなければ動かないのが軍隊というものの慣例である以上、諷訪部が陣頭指揮に当たらなければ、マジカル・ユニットを動かすことはできないのだ。

総司令部への道中で、通信を呼びかけられる設備がないかと諷訪部は思索を巡らせるが、生憎持っているものはスティアに薙ぎ倒された護衛に通じるそれではない。

「それにしても、なぜスティアから今更……ッ!?」

諷訪部は、今までいくら検査を重ねても敵星体反応が検出されなかったスティアから、急激に強烈な敵星体反応が検出されたのかを疑問に思い、訝るが、咄嗟に思い出していたのは、真宵の言葉だった。

——東京を守る呪術結界の回路には、不活化された「赫星一号」の破片が含まれている。

それはあくまで推測でしかないと、諷訪部もまた理解していた。

だが、仮説として考えた場合、符合することは多い。

不活化された——「名付け」によって定義づけがなされることでただ「魔力を抽出するための仕掛け」として使われていた「赫星一号」の破片はその実、活動を続けていて、「星遺物」として生み出されたものがスティアだったのではないかと、諷訪部はそう推察

する。

しかし、不活化自体は問題なく機能していたが故に、スティアは敵星体としての力を失っていて、それが今、何らかの形で力を取り戻した——そう考えれば、辻褄は合う。

何らかの要因があるとするなら、それは恐らく複製体が吠いていた「エリュシオン」という言葉がトリガーになったのか、あるいは。

「敵星体の全滅が、引き金になったのか……？」

だとすれば、人類はまた自らの手によって破滅の要因を呼び込んだことになる。

諏訪部は二度、そして三度と繰り返される悲劇の連鎖に怒りを燃やしながらも、ここでそれを断ち切ろうと、総司令部へとひた走るのだった。



敵星体反応が、「星の悲鳴」が聞こえてくるのは地下の立ち入り禁止区域からだ。

結衣はそこに強烈な不安を感じながらも、一縷の望みをかけて、己の内側に絶え間なく響き続ける「星の悲鳴」を辿って、地下区画へと走り続ける。

何故、どうして、今になって敵星体反応が検出されたのかも、そしてスティアに会おうとしたその瞬間に現れたのかも、全てが結衣にはわからない。

しかし、何かとてつもないことが、破滅に繋がりがねないことが起きている。それだけは、確信をもって結衣にもわかる。

途中で倒れていた軍人の姿に不穏なものを感じながらも、まだ息があることを確認し、結衣は電子ロックが無理やりこじ開けられた扉を潜って、地下区画へと、脇目も振らずに走り抜けていく。

「電子ロックが破られてる、それも物理的に……」

無理やりこじ開けようとすれば、ロケットランチャーを持ち出してきたとしても難しいその大扉は、鋭利な刃物で斬り裂かれたかのような切り口でこじ開けられていた。

それが尋常ではない何かによつてもたらされた所業であることに、疑いの余地はない。

こじ開けられたオートロックの跡を辿りながら、結衣は恐らく——そこにステイアが待っているであろう地下区画へと踏み入っていく。

旧地球連邦総司令部の跡地を再利用する形で作られた、大呪術結界の心臓——今は「ラボラトリー」の本部として扱われている施設は、不気味さが裏返り、いつそ厭かささえ与えるほどに、静まり返っていた。

結衣がここを訪れたことは何度かあった。

その時の記憶と、恐らくはステイアであろう何者かが残した破壊の跡を頼りにして、

結衣は「星の悲鳴」が示す最後の場所、大呪術結界の心臓部である試製呪術回路が安置されている区画へと、静かに足を踏み入れる。

「待っていた……結衣」

「……スティア、なの……?」

ぼんやりと赤い明かりを放つ試製呪術回路と相対するスティアの背中からは、漏れる光と同じ——否、それ以上に赤い、赫を纏う一對の翼が生えていた。

覗く角度で色を変えていたその瞳もまた同じ深紅に染まり、その身に纏うどこか朧な雰囲気も、明瞭で輪郭がはっきりとした——敵対的なものになっている。

目の前にいる、変わり果てた存在がスティアであるという事実を、結衣は否定しかけるものの、本能はそれを理解してしまっていた。

絶え間なく内側で響き続ける「星の悲鳴」は、間違いなく今、スティアから発せられているものだ。

結衣はスティアを、最後の敵星体を仕留めるべく、携えていた拳銃を構え、そのセーフティを解除するが、構えた腕は震え、その照準が定まることはない。

撃たなければいけない。

目の前にいるのもう、スティアではない。

あの荒んだ日々潤いを与えてくれた少女は、もういない。



頭でそれを理解していても、心がそれを拒んでいるのだ。

「ずっと忘れていた……私は、エリユシオンの巫女。結衣たちが『赫星一号』と呼ぶそのもの」

「違う！ ステイアは……ステイアだよ！」

「なら、どうして銃を構えているの？ 私は……ステイアは、敵だとわかっているんですよ、結衣？」

ステイアはそんな結衣の動揺を嘲笑うかのように大呪術結界を支える回路へと手を伸ばすと、その中から、こともなげに「赫星一号」の破片を取り出して、体内へと取り込んでみせる。

「魔力……星の力。星の守護者が持つ力。結衣が私に教えてくれた、ステイアに教えてくれた」

「……違う！ 私は……！」

「結衣は、魔法少女。この星の守護者。そして、私は……エリユシオンの巫女。播種と教導を司り、悪しき文明への裁きを下す者。だから、ステイアは——」

言葉を失った結衣が、引き金を引くのと同時にステイアの姿が虚空に溶けていく。

しかし、その唇が何事かを紡いでいたのを、結衣は見逃さなかった。

見逃すことなど、できなかつた。

あれは、スティアが最後に紡いだ言葉だから。エリユシオンの巫女ではなく、「スティア」という少女が発した、精一杯のメッセージなのだから。

なのに、自分は引き金を引いてしまった。

「あ……ああつ……あああああつ!!!」

絶叫する。己の過ちに、そしてスティアを、最後まで信じ切ることができなかつた己の弱さに。

美柑たちが到着したのは、結衣が膝から崩れ落ち、項垂れてからのことだった。

「結衣……何が、あつたの……？」

「……美柑……」

スティアは、敵だった。

自分たちは、敵を、憎むべき「赫星一号」を抱き込みながら戦っていたのだ。

「ス、ティア……う、うあああああつ……!!」

その残酷な事実を伝えることすら、震える唇が紡ぎ出すのは難しく、ただ涙のみが、そして言葉の形をなさない声のみが、機能を停止した地下区画に響き渡るのだった。

## 第五章 「魔法少女、朝を呼ぶ」

### 9 1. 魔法少女と突きつけられた宣告

「そうか……やはり、スティアは敵星体だったか……」

諏訪部は遅れて試製呪術回路が安置されている地下区画に訪れると、結衣から全てを聞いたことで、得心がいったとばかりに小さく唸る。

呪術結界を補強するために組み込んだ「赫星一号」の破片が星遺物となった結果がスティアであり、記憶や敵星体としての特質を失っていたのは、不活化による弊害だったと考えれば納得もできよう。

結果的に、自分たちは自分たちの手で敵を抱き込みながら戦っていたというのは、敵星体という未知の存在を理解した気になっていたからなのかもしれない。

「泣くな、小日向結衣。全ての責任は最後までスティアを疑い切れなかつたおれたちにもある」

「……」

「口も聞けないか……無理もあるまい。だが、処分は君に行かないように最大限便宜を図ろう」

それが責任者のやるべきことだからな、と付け加えて、諏訪部は結衣の肩に手を置こうかと思案したものの、今の彼女は触れてしまえばそこから崩れていきそうなほどに脆く、儚い。

これが、本来の小日向結衣なのだろう。

諏訪部は直感的にそれを理解する。

本来であれば、そんな状態にまで追い込まれた一人の少女を戦線に駆り出すなど、あつてはならないし、やったとしても上手くはいかないはずで、それがなんとかなっていたのは、スティアという存在がいてくれたからだ。

しかし、そのスティアが敵星体そのもの——憎むべき「赫星一号」だったとすれば、感情の置き場をどこに定めていいかわからなくなるのは、もはや必然だろう。

まして、多感な年頃なのだ。

結衣は貝のように口をつぐんで、それ以上は何も語ろうとしない。

だが、不幸なことに説明責任はまだ残されている。

マジカル・ユニットにスティアを引き込んでしまった責任がある以上、上層部へとそれを伝達するのは軍人としての義務だ。

「……な、泣かないで、ください……結衣さんが泣いてたら、わたしも……」

座り込んで動こうとしない結衣の肩におずおずと手を伸ばす絵理もまた、その涙に触

発されて、青い瞳から大粒の涙を零していた。

絵理は、結衣を独り占めするスティアに微かな敵愾心を抱いていたことは確かだ。

だが、本気でいなくなつてほしいと、そう考えたことは一度もない。

むしろ、背中を預けてきた仲間として、帰りを待つてくれていた同胞として接してきたつもりだったからこそ、そのスティアが敵そのものであったことは、少なからず絵理にとつてもシヨックを与えていたのだ。

「……気の毒すぎて、何も言えないよ……」

美柑もまた、思うところは同じだった。

現状に対する情性と諦めが彼女を動かす根幹であつたからこそ、悪くいえば全てを他人事と捉えることで脆い心を守つてきたからこそ、今も一歩引いた立ち位置から結衣を見ることでできていたものの、そこに同情を寄せる心までも失つてしまつたわけではない。

しかし、とにかく、スティアが敵星体であり、いずこかに逃亡したというのなら、それを探し出して討たなければならぬのもまた、確かなことだ。

——ならば、その役目は自分が担う他にない。

美柑は拳を固めると、そこに悲壮な決意を握りしめ、己に固く誓いを立てた。

結衣にも、絵理にもスティアは討たせない。

それは、己に残された「猶予」がもはや、極めて残り少ないというものもあれば、結衣は言うに及ばず、同じように脆い心をなんとか取り繕いながら戦っている絵理にも引き金を引かせたくはないという義侠心からくるものだった。

すっかり戦勝モードに包まれていた連邦防衛軍総司令部は、平時の緊張を取り戻して、それを鑑みれば、マジカル・ユニットへと召集がかかったのも至極当然のことだといえる。

『マジカル・ユニット！ 諏訪部大佐！ 今すぐ総司令部に出頭せよ！ 繰り返す、今すぐ総司令部に出頭せよ！』

マイクの向こうで怒鳴っている軍務局長の濁声が、怒り心頭といった様子で地下区画へと響き渡る。

状況の把握と説明責任を果たせと、つまりはそういうことなのだろう。

「……それが仕事とはいえ、酷なことをする」

諏訪部は呆れたようにぼつりとそう呟くが、軍務局長の立場からすれば重大な事項を半ば隠蔽されていたようなものだ。

怒りに打ち震えるのも無理はない。

最悪は、しかし現実的な可能性として銃殺が待っているであろうことを覚悟しながらも、絵理が結衣の肩を担いだのを確認して、マジカル・ユニットは総司令部へと引き返

していくのだった。



「つまり我々は、敵を抱き込みながら戦っていたということなのか……！」

総司令部に戻って、結衣の代わりに諏訪部の口から説明を受けた軍務局長は、顔面を蒼白にしながら、怒りに震える指先で自慢のカイゼル髭を撫でつける。

残念ながらそうなりますね、と答えられるような空気でもなく、ただ嵐が過ぎ去るのを待つかのように、諏訪部は数秒ほど沈黙すると、結衣たちを庇い立てるかのように前へと歩み出て、軍務局長へと言葉を返す。

「そうなりません。しかし、全ての責任は最終的な判断を下した小官にあると存じています。何卒、小日向結衣には寛大な処置を」

「ふざけるのも大概にしろ！ 外患誘致は処刑と相場が決まっている……！ だが、ステイアとやらが敵星体だったのなら、我々は戦わねばならない！ どうしても寛大な処置を望むのであれば、戦って死ね！」

軍務局長の言動には、今すぐにも諏訪部や結衣を銃殺に処してやりたいという意志が滲んでいたものの、現状で敵星体と戦える魔法少女は、マジカル・ユニットに所属す

る三人と、北米管区に所属する、アリス・ヴィクトリカを合わせて四人だけだ。

そんな状態でわざわざ貴重な戦力を銃殺に処したところで、自らの首を締めるだけだと理解するだけの理性は、彼にもまだ残されていたらしい。

諏訪部はそのことに安堵しつつも、戦って死ぬ、という彼の言葉そのものには反感を抱いていた。

結衣が死んだところで、何かが変わるわけではない。

自分が死ぬのであればまだ納得はいく。

しかし、ステイアが敵であったとしても、彼女が立てた功績というものは存在していて、現に軍務局長も沖繩では彼女の予知に助けられている。

そう考えることそのものが、そこに憤りを抱くことそのものが子供なのだ自嘲しつつも、諏訪部は「拝命いたしました」と短く敬礼を返して、必死の捜索を行っている総司令部を俯瞰した。

現状、結衣からの報告では、ステイアは突然どこかに消えてしまったという。

にわかには信じがたいことではあったものの、総司令部から発せられていた敵星体反応が消えていることから、それが事実だとはすぐにわかった。

だとして、ステイアはどこに消えたのか。

研究室を、「ラボラトリー」を主導する真宵が指揮をとって、捜索に当たっていたもの



の、各管区はほとんど瀕死の状態で、当てになるものも当てにならない。

地球上の敵星体反応を真宵が虱潰しに探していた、その時だった。

「超巨大敵星体反応です！」

「少尉、位置は?!」

「木星沖近海……ワープアウトしてきた模様です！」

突如として現れたその超巨大敵星体反応は、タイプ・ホールケーキが可愛く見えるほどに凄烈なものであり、それは否応なく、この場にいる人間の忌まわしい記憶を呼び起こす。

「映像を拡大して！」

「はい、映像、拡大します！」

そこに現れたものは、奇しくも3年前と全く同じ——ただ、纏う色だけが海よりも深い青に染まりながら、煌々と輝き続ける彗星だった。

確かに、地球上の敵星体は、スティアを、最後の生き残りをのぞいて一掃されたのかもしれない。

しかし、新たなる脅威は宇宙からやってきた。

誰もが固唾を飲み込む中で、突如として映像スクリーンに、モノリスを切り出して作ったような、青い光のみがぼんやりと照らす無機質な空間と、そこに立つ、褐色肌に

青髪碧眼といったエキゾチックな出で立ちをした女性が映し出される。

『聞こえているか、地球の民よ。我が名はメテオラ……エリユシオンの巫女にして、許されざる命である貴様らに、星罰を下す者の名である』

啞然とする総司令部へと、メテオラと名乗る人物はまるで歌でも紡ぎ出すかのように厳かで、リズムカルな口調でそう告げる。

星罰。それが何なのかは大半の軍人にはわからない。

だが、戦ってきた魔法少女たちは、特に複製体と刃を交わしていた美柑は、それが意味するところを直感的に理解していた。

そうでなくともわかることはただ一つ、確かに存在する。

もはや、人類に逃げ場はない。

煌々と瞬く彗星を仰ぎ見て、屈強な軍人たちが、年若い通信士たちが、そして、前線に立つてきたはずの諏訪部たちですら、その絶望の前に、その瞳を青ざめさせるのだった。

## 92. 魔法少女、逃げ場なし

『聞こえているか、地球の民よ。我が名はメテオラ……エリユシオンの巫女にして、許されざる命である貴様らに、星罰を下す者の名である』

一方的な通告を受け、再びあの「赫星一号」と同質の存在が現れたという絶望に暮れながらも、軍人たちの行動は早かった。

相手が言葉を発した、明確に対話が可能であると判断した通信士は、すぐさま官邸へと、大統領へと回線を繋ぐ形で、この事態を乗り切れないかと試みる。

そして、官邸にいた大統領もまた、地球全土に向けて発せられたそのメッセージを受け取っていた。

総司令部から回線が繋がったことを確認すると、大統領に選ばれた老年の男性はおもむろに立ち上がり、「メテオラ」と名乗った存在に向けて、メッセージを発信する。

「こちらは地球連邦政府大統領、ゴードン・ストークだ。メテオラと名乗ったエリユシオンの巫女、君は我々が敵星体と呼んでいた存在で間違いないのだな？」

『貴様が地球人類の代表というわけか。そうだ。貴様らが敵星体と呼ぶ存在が、播種と教導を司る全生命の始祖たる存在が、我ら星史文明エリユシオンである』

「播種と教導……？」

大統領は傲慢ともとれるメテオラの発言に困惑を隠せなかったものの、海千山千の政治の世界を泳ぎ切ってきただけあって、頭の中は冷静だった。

もしも、それが事実であったとしたのなら、その言葉が示すものは、この星に棲まう人類種にとっての始祖もまた、彼女たちエリユシオンの民になるということだ。

『そうだ。我らは遍く銀河に生命の種を撒き、善なる種を導き、育てようとした。それが我らエリユシオンの使命だからだ。地球人よ、貴様らも我らの偉業の一部である』

「そうであるのならば、話は早い。確かに我々は不幸な行き違いをしたかもしれない。しかし、こうして言葉を交わせるのだ。こうして対話を果たせるのだ。播種と教導を司るほどの文明が君たちなのだ、ならば、血を流さずに済む選択肢をとるのが賢明だと、私はそう考えている」

メテオラの言葉に対して、大統領はあくまでも冷静に、対話による解決の糸口を見つけて出そうと試みる。

だが、メテオラの態度は冷ややかなものだった。

さながら家畜を屠殺場に送り出すかのように、そうでなければ足元にいる虫を見つめるかのように、零下の瞳で大統領を、そしてこの通信を聞いている地球人類全てを上から見下す。

『対話？ 地球人の代表は冗談を言うのも下手なようだな。対話というのは、お互いに対等であつて初めて成立するものだ。貴様は我ら創造主と、貴様ら被造物が対等であると、本気でそう考えているのか？』

「君たちが我々の創造主であるというのなら尚更だ。武力による絶滅戦争ほど愚かしいことはない。高度な文明に至っている諸君らにおいては、それを理解したものだと考えでの提案だ」

『その余裕は、貴様らが星の戦士を有しているからか？ 魔法少女……死に瀕した星が起こした奇跡。そんなものに縋つて我らを退けられると、そう考えているのか。なんと浅はかで傲慢なことか』

言葉が通じ合い、意思の疎通ができる人間同士で滅ぼし合うことほど愚かしいことはない。

大統領は少なくとも、本気でそう考えていた。

創造主を名乗る存在であるならば、遍く銀河に生命の種を撒くことができる存在であるならば、相争うことの愚かさや虚しさは理解しているはずだと信じての提案だったが、メテオラはそれを一笑に付して蹴り付けた形となる。

『それに、言つたはずだ。これは星罰だ。過ちを犯した許されざる存在に下される裁きだ。この星に対する裁定は下されている。それを覆すことはあり得ない』

「……どうしても、戦う他に道はないというのかね」

『戦う？ まだ我らと対等でいるつもりなのか、被造物。滅びの定めを受け入れよ。あるがままの混沌に還り、次なる命を、善なる者を生み出す糧となれ』

そうして、一方的に通信は打ち切られた。

大統領の賢明な交渉もそこに意味を成すことはなく、メテオラが告げた通りの「星罰」は下されるべくして、木星から地球近海へと向けて、ゆつくりと動き出す。

それを観測していた総司令部は、緊急事態宣言を地球全土に渡って発令すると、木星から地球近海まで、あの彗星が、暫定呼称「蒼星二号」が接近するまでの時間を算定する。

「解析急げ！」

「到達時間の分析と、オケアノス級の打ち上げ準備を始めろ！ 残る主力級航宙戦艦も全て打ち上げ、人類の総力をもってあの『エリュシオン』と名乗る傲慢な輩を打ち破るのだ！」

人類が選んだ、選ばされた答えは、またも引き金を引いて、犠牲の上に未来を勝ち取るという構図だった。

その繰り返しを、果てなき犠牲と闘争の繰り返しによってしか前に進めない人類の有り様を、エリュシオンの巫女は愚かだと断じたのかもしれない。

しかし、繰り返された争いを肯定することはできないものの、積み上げられた犠牲には必ず意味があったはずなのだ。

そうでなければ人類は今頃、またジャングルの中で石と棍棒を掲げて相争い続けているはずなのだから。

軍務局長の考えに、どこまでそんな人類史への思い入れがあるのか、諏訪部には、そして結衣にはわからない。

かねてより、タキオン粒子砲の使用を提案していたことから、敵が攻めてきたのが宇宙であったことが幸いだった、ぐらいのことしか考えていないのかもしれない。

しかし、メテオラの言葉は、下された「星罰」はその意図にかかわらず、人類という種の根幹を揺るがすものである。

軍務局長の意図がどこにあるかはともかく、存在すら否定され、一方的に上から裁きとやらを下されるという構図であるのは確かなことなのだから。

あるいは、この星を捨ててどこかに逃げるといふ選択肢もあつたのかもしれない。

だが、「蒼星二号」が突如として木星近海へとワープアウトしてきたように、逃げたところでエリュシオンはどこまでも追いかけてくるだろう。

「人類に……逃げ場はないか」

「馬鹿なことを言うな、諏訪部大佐。元より退くつもりなどない。戦える魔法少女はわ

ずか四人だが敵は宇宙、そしてこちらにはオケアノス級と主力級航宙戦艦がある」

——この日のために、再び「赫星一号」が現れたときのために威信をかけて、人類が作り上げた方舟だ。

拳を固めて、軍務局長はそう熱弁する。

確かに、魔法少女の、結衣のサクラメントバスター以上の威力を誇るタキオン粒子砲搭載艦が十三隻残っているのは、そして、遮蔽物を気にすることがない宇宙に敵がいるのは幸いだったのかもしれない。

3年前は「山城」一隻しか残らなかったタキオン粒子砲搭載艦がその十三倍。

勝利は確実に人類の側にあると、軍務局長はカイゼル髭を撫でつけながら、そう信じて疑わなかった。

「だが、露払いは必要だ。主力艦隊には呪術甲冑隊を、航宙巡洋艦にマジカル・ユニット及びアリス・ヴィクトリカを乗せて我々は『蒼星二号』を叩く。巡洋艦の指揮は諏訪部大佐、君に一任する」

「よろしいので?」

「戦える人間を今この状況で牢屋に打ち込んでおく馬鹿がどこにおる。言っただけで、罪を償うつもりがあるのなら、戦って死ねと」

スティアを引き込んでいた咎はあつたとしても、諏訪部がマジカル・ユニットを率い



て指揮してきた実績は確かであり、魔法少女たちのそれはいうまでもない。

ならば、この状況で戦力を遊ばせておく理由など、どこにもないとわかる程度に、軍務局長という男は言葉こそ過激でも、ある程度の理性を残していた。

タカ派の筆頭である彼が喜ぶような状況はろくでもないと思つたものの、人類には逃げ場がない。

だとしても、戦つて死ぬのはナンセンスだ。

生き延びることで明日を繋いでいく他、人類に残された選択肢は存在しないのだから。

「……寛大な処置に感謝します、中将閣下。各員、聞いたな！ 今から出撃に備えておけよー！」

戦術シミュレータが算定した「蒼星二号」到着までの時間を一瞥すると、諏訪部はそう叫ぶのだった。

## 93. 魔法少女、一つの決別

一方的に突きつけられた宣戦布告から数日、オケアノス級と主力級航宙戦艦の打ち上げ準備は急ピッチで進められていた。

専用の発射台を持つオケアノス級三隻を除き、残された十隻の主力級航宙戦艦は各地のマスドライバーに搬入された上で宇宙へと打ち上げられる運びとなっている。

文字通り、寝食を忘れて作業に勤しんでいた整備班が格納庫の固い床を枕にして眠っているのを横目に、結衣たちは最後に残された航宙巡洋艦「羽黒」へと乗り込んでいく。「地球艦隊はオケアノス級が三隻、主力級が十隻、バックアップとして各地の巡洋艦が十隻の計二十三隻が投入されるが、はつきり言つて、おれたちの巡洋艦は戦力に数えなくていい」

あくまでも諏訪部たちに巡洋艦が割り当てられたのは、魔法少女を戦場へと送り届けるためだけであり、各管区から提供されたそれは、敵の目を欺き、ターゲットを分散させるためのデコイに過ぎない。

事実上、死んでこいと言われているような任務に志願させられた兵士や船乗りたちのことを思えば、とてもやりきれるものではないが、かといつて魔法少女たちに死なれた

のでは元も子もない。

司令部は、というより軍務局長はあくまでもオケアノス級と主力級のタキオン粒子砲によつて「蒼星二号」を撃墜するつもりらしいが、それがどこまで通用するかは、正直なところ半信半疑といったところだった。

確かにタキオン粒子砲は、放てる環境にあるならば比類なき力を発揮する。

人類が唯一、呪術回路を手に入れるまでは敵星体に対して有効打撃を与えることができる武装だったのがタキオン粒子砲だ。

その威力に疑いはない。

しかし、「救世の七人」作戦に参加していた諏訪部だからこそ、あの地獄を生き抜いた船乗りだからこそ、その砲口が十倍に増えたとはいえ、それだけで「蒼星二号」を撃退できると、確信を持つて答えることができなかつたのだ。

今回の作戦において、魔法少女隊はあくまでもバックアップという位置づけでしかない。

それは大艦巨砲主義と人類至上主義に囚われた軍部の意向というものもあれば、純粋にこの戦いを生き残るだけの余力が、魔法少女たちに残されていないというものもある。

「それは……私たちも、ですか？」

「……軍人としては失格の答えだとはわかっている。だが、わからんというのが正直な

ところだ」

結衣の問いかけに、曖昧な答えしか返せない己を自嘲しつつ、諏訪部はそう言った。余力が、「猶予」が残されていない魔法少女たちを前線に送り出せば、生き延びる確率は絶望的になる。

よしんば生き残ったとしても、摩耗しきった魂が、どれほどの時間を彼女たちに与えてくれるのかもわからない。

魔法少女の出現によって、魂の存在は証明されたが、その实在まで、人類は証明できていない。

今も「ラボラトリー」が研究に血道を上げているものの、どこまでも魂というものは不確定で、不安定だからこそ、定義づけて補足することさえ難しいのだ。

「申し訳ないが、出撃の覚悟だけはしておいてくれ。この戦い……どうにも嫌な予感がある」

諏訪部は軍帽を脱いで、結衣たちに頭を下げる。

敵の戦力が単純に「蒼星二号」だけだとしたら、確かにタキオン粒子砲による飽和攻撃は有効打となりうるだろう。

しかし、あの手この手で人類を滅ぼしにかかってきたエリユシオンの民が、3年前に破られた戦術だけを頼りにするだろうか。

何よりも不安なのは、ステイアの、「赫星一号」の行方がわかっていないこともそうだ。あの、メテオラと名乗った女性のいた空間に、ステイアはいなかった。

結衣は小さく拳を握りしめながら、爛漫に微笑む少女としてのステイアの顔と、その瞳を深紅に染めて、背からは翼を生やした「赫星一号」の化身としてのステイアのそれを脳裏に浮かべる。

人類全てを射殺するような、底冷えのする目をしていても、ステイアは最後に「赫星一号」としてではなく、「ステイア」としての言葉を自分に残して、去っていった。

それが意味するところはわからない。

だが、もしかしたらそれは何か希望に繋がるものなのではないかと、結衣はそう思っている。

最後にステイアがくれた一欠片の何か。

それが人類にとつての希望となるのか、あるいはただ自分への慰めにしかならないのかどうかは判然としない。

しかし、必ずそこに意味はあるはずなのだ。

言葉が意味を成すならば、ステイアがまだ「ステイア」としての意識を残しているのならば。

——例え、刺し違えてでもあの子を迎えに行く。

一人、悲壮な顔をして決意を固める結衣に、美柑も絵理も、かける言葉は見当たらなかった。

「……結衣さん……」

結衣がこの状況下にあっても、ステイアのことを信じようとするのは、信じているのは、わかりきったことだ。

自分の孤独では結衣の孤独を癒せない。

絵理は誰よりもそれを理解し、痛感している。

憧れとは距離の遠い感情であり、信仰というものは時に人を盲目にさせる。

絵理の抱く想いでは、結衣に届かず、絵理が使える魔法でさえ、結衣の傷は癒せない。

その事実打ちひしがれながらも、それが結衣の選択であるのなら、と、絵理もまた一つの決意を固めて彼女の名前を口ずさむ。

「……ん、どうしたの、絵理？」

「……戦う前に、その……言っておきたい、ことが……その、ある、んです……」

しどろもどろになりながら、頬を真っ赤に染めながら、絵理は結衣へと自分なりの覚悟を、どうしてもケリをつけなければならぬその想いを、はつきりと声に出して形にする。

「……その、わたし……結衣さんのことが、好きです。とつても、とつても……誰にも負

けなくらい、好き、でした……」

「……絵理」

絵理が自分に対して好意を寄せてくれていることは、ライクではなくラブの方を抱いてくれていることは、なんとなくだが察していた。

そのことが嬉しくないかと訊かれれば、答えはもちろんノーということになる。

それだけ慕われて、きつとその想いを抱くことすらも躊躇っていたのであろう絵理が、自分を好きでいてくれることは、結衣にとつても嬉しいことだった。

だが、過去形の言葉を口走ったように、聡明であるが故に、きつと絵理は自分の感情がどうしても、絵理ではなくステイアに向いていることを理解している。

だからこそ、ここで決別を果たそうとしたのだろう。

その想いに、どんな形であれ幕を引こうとしたのだろう。

結衣はその勇気へ、覚悟の重さへと敬意を表するかのようには、小さく深呼吸をすると、はつきりと、自分の中にある言葉を声に出す。

「……ごめん、絵理。私は……絵理の想いに応えることは、できない」

「……ッ……結衣、さん……」

「……でも、ありがとう。こんな私を好きでいてくれて。こんな私を……いつも心配してくれて」

その想いを受け取ることはできずとも、結衣にとっても絵理が恩人であることは確かだった。

そして、それは絵理にとっても同じことだった。

例え想いが届かなくとも、例え結衣が自分以外の誰かのことを見ていたのだとしても、絵理にとつて、結衣が大切な人であることには、今も敬愛する対象であることには、変わりがない。

「はい……わたしも、ありがとうございます……結衣さんと会えて……結衣さんと、一緒にいられて……わたし、幸せです……」

「……ごめんね、ありがとう」

「いいえ……わたしこそ、こんな勝手な想いを受け止めてくれて、ありがとうございます……」

恋心は途絶えたとしても、絆は続く。

そのことを確かめるように、結衣と絵理は、引き寄せ合う磁石のように抱擁を交わすのだった。



## 94. 魔法少女と轟砲一閃

「ラブロマンスはそこから終わりか？」

アリス・ヴィクトリカが姿を現したのは、結衣と絵理が長い間抱擁を交わしていたときのことだった。

北米管区から戦闘機で飛んでくるといふ異例の合流ではあったものの、今は新星暦のご時世だ。

素人のアリスでもオートパイロットに任せて操縦桿にしがみついていたれば案外なるとかなるものだったが、それで何とかやってきた先で恋愛がどうのこうのと、轡を並べる戦友がろくでもないジnkスを立てようとしているのだから、小言の一つも言いたくなるというものだった。

「ラブロマンスって……」

「そういう話はな、戦いが終わってからするもんだと相場が決まってんだ。さっさと行くぜ」

「……あ、は、はい……」

言い方こそ厳しいものの、アリスが口にしていた言葉には何一つ間違いがなく、むしろ

ろ不吉なジंकクスを作ろうとしていたのだから、咎められて当然だとばかりに結衣と絵理はしよぼくれながら、名残惜しそうに抱擁を解く。

集められた面子は、質こそ申し分なくとも数が致命的に足りていない。

残る魔法少女は自分含めてたった四人だという事実には、ここにあの銀髪碧眼の、何もかもウマが合わなかった魔法少女がいない事実には、アリスは密かな悲しみを抱く。

「……あいつは、逝つちまつたか」

ぼつりと呟いた言葉へと、返せる答えはここにいる誰もが持っていないかった。

元より生還率が絶望的な作戦だったのだ。

あの魔法少女が、アナスタシアが二度と帰つてこない身になることぐらいは、アリスも想定していたことだった。

だが、身構えていたからといって、そこに付随する悲しみをやり過ぎさせるかといえ、その答えはノーである。

皮肉屋で、憎まれ口を叩く役割りの自分に冷徹な事実を突きつけて反駁する言葉は返つてこない。帰つてこない。

その事実がただ、理由もなくアリスにやる瀬のない想いを抱かせるのだ。

戦場では、いい奴やまともな奴から死んでいく。

軍人としての上官にあたる男が、北米管区の関係者以外は名前も知らないような魔法

少女の死に、そう嘆いていたことをアリスは思い出す。

憎まれっ子世に憚るとはいったものだが、本当に自分のような、持つべき矜持も、守るべきものも自分の命ぐらいしかないような人間ばかりが生き残って、何とするのか。

未来に必要なだったのは、アナスタシアやクラウディアのように、一足先に自由になった魔法少女たちの命であつたのではないか。

その後悔がアリスの胸をきつく締め付ける。

だが、彼女がその足を止めることはない。

「まあいいさ……こんな稼業をやつてんだ、いつかはこうなることぐらいわかつてらあな」

「……アリス」

「地球のためとか未来のためとか、正直言つちまえばあたしには関係ねえ、ただあたしは、あたし以外の何かが自分の命を好きにしようとするならば殺す、それだけだ」

相変わらずの憎まれ口を叩きながら、アリスはすたすたと早足で航宙巡洋艦「羽黒」へと乗り込んでいく。

——骨ぐらいは拾つてやるよ、アーシャ。

ただ、そこに隠しきれなかつた善性を、一人の人間としての義憤を滲ませながら、生き残つた魔法少女は、楽園ではなく次なる地獄へと足を運ぶ。

何がそうさせるのか、誰がそうさせるのかと、結衣はその運命とでも呼ぶべき巡り合わせを呪いながら、アリスに続く形で自分たちを地獄の一丁目に送り届ける艦に乗る。地球のために戦う。残された人々のために戦う。

その大義は辛うじて、燃え尽きかけている結衣の心を支える義憤という名前の薪になつてはいたが、そこに付随する現実には惨憺たるものでしかない。

——地球を救うためには、どこかにいるスティアを殺さなければならぬ。

一足先に死を背負ったアリスの言葉を思い返ししながら、結衣もまた、自らの手でもう一度引き金を引くための覚悟を固めようと試みる。

怒りによる摩擦を起こして奮い立たせる心は摩耗し、悲鳴を上げ続けていた。

そして、固めた拳は、押し寄せてくる悲しみに打ち震える。

それでも、泣くことは適わない。前に進み続けてなければならぬ。

それが「魔法少女」なのだから。

それが、星の守護者たる宿命を背負った、「魔法少女小日向結衣」なのだから。

大丈夫、と慈しむ声はもう聞こえない。

心配そうに自分の瞳を覗き込んでくれた、あの不可思議な七色を宿すプリズムは星になつて消えてしまった。

改めてその喪失と向き合いながら、結衣は乗り込んだ航宙艦の更衣室で、宇宙服への

着替えを淡々と済ませるのだった。



航空巡洋艦「羽黒」を含む地球艦隊が「蒼星二号」をその射程に捉えたのは、地球圏近海、かつて「救世の七人」作戦において絶対防衛線とされていた地点だった。

なんとか全艦隊の打ち上げを終えて、轡を並べた連邦防衛軍自慢のタキオン粒子砲艦隊は、巡洋艦隊に先駆けて「蒼星二号」と、メテオラが率いる無数の、宇宙を埋め尽くすほどの敵星体に相對する。

「さて……3年前は苦汁を飲まされたが、今の我々は一味違うぞ、エリユシオンの巫女とやら」

その先頭に立つ、オケアノス級航空戦艦「オケアノス」を指揮する壮年の男性——東山秀は、タキオン粒子砲のチャージを見届けながら、指を組んでぼつりとそう零す。

地球艦隊が誇る十六門の砲口は寸分変わらず、宇宙空間においてもはつきりと判別できる深い蒼色を纏った彗星へと向けられて、そこから放たれる必殺の技を待つばかりだ。

本当にタキオン粒子砲の一斉射で戦いが終わるのであれば、それに越したことはない。

無数の敵星体の中に変異体の存在が確認されていない以上、あれは「赫星一号」が独自に地球のリソースを解析し、吸収し、生み出したものということになる。

「艦長、タキオン粒子砲のチャージ完了しました。全艦隊からも報告が届いています」「了解した。全艦展開！ 陣形を構築しろ！ これより我々は、人類に仇なす最後の敵を、『エリユシオンの巫女』を討ち倒す！」

東山の号令に従って、「オケアノス」の真後ろに並んでいた艦隊が、翼を広げるように、あるいは一つの矢を形作るように陣形を展開する。

煌々と瞬く「蒼星二号」へと狙いをつけたその砲口もまた淡く青いタキオン粒子の光を纏い、炸裂するその瞬間を今か今かと待ち望んでいた。

「総員、衝撃と閃光に備え！ 全艦連動、タキオン粒子砲発射まであと十秒！」

「了解、全艦連動確認、カウント開始します！」

『愚かな……禁忌の力に頼みをおいて、創造主たる我らを滅ぼそうとは』

メテオラは人類の傲慢に、増上に、嘆きを示すような仕草を見せるものの、そこにあるのは哀れみと余裕だけで、恐れと呼べるものはない。

それは、船乗りたちの神経を逆立てるには十分なものだった。

その傲慢を打ち砕こうと、創造主を気取る面に一発きついのをお見舞いしてやろうとばかりに、トリガーを注視する砲手たちは怒りを沸々と滾らせる。

しかし、その照準は正確でなければならない。

怒りに燃えながらも、決してそこに囚われることをせず、砲手たちは戦術シミュレータが算出したデータと照準をリンクさせる形で、「蒼色二号」をロックオンしていた。

「カウントダウン、五、四、三、二、一！」

「タキオン粒子砲、一斉射！」

「撃てえーッ！」

東山の号令に従う形で引かれた引き金が、禁忌の兵器を漆黒の宇宙に呼び起こす。

轟々と宇宙を引き裂きながら放たれた十六の閃光は一つに収束し、無数の敵星体を消し飛ばしながら、「蒼星二号」が纏うガス帯を取り払う。

『愚かな……その程度で我らを止められると思つてか』

「敵星体残存！ 『蒼星二号』がその本体を現しました！」

かつて「救世の七人」作戦でもそうだったように、一発のタキオン粒子砲で剥がせるのは核となる、翼の生えた女神像を守るためのバリアとも呼べるガス帯のみだ。

しかし、伊達に人類は牙を研ぎ澄ませていたわけではない。

真の姿を現した偽りの女神を一瞥し、東山は更なる指示を下す。

「呪術回路始動！ タキオン粒子砲、第二射をもつてこの戦いと敵星体への決別とする

！」

「了解、呪術回路始動！ エネルギーチャージ急速始動、タキオン粒子砲再発射準備完了まで、残り十秒！」

『何を……!?!』

「見せてやろう、エリユシオンの巫女とやら。力を大義に掲げて人の命を選別し、奪う者は、やがて更なる力によってその命を奪われるのだ……!」

宇宙を切り裂き、轟きを上げて、再び十六門の砲口から、タキオン粒子砲が撃ち放たれる。

かつては一度撃てば行動不能になる諸刃の剣だったタキオン粒子砲は、呪術回路を手にしたことで二連続発射を可能とするまでに進化を遂げていたのだ。

『馬鹿な……こんなはずでは、あああああっ!』

いかに巨大な質量を持つ「蒼星二号」であったとしても、十六発ものタキオン粒子砲から逃れられる術は持っていない。

被造物によって滅ぼされるという結末を最後まで認められずに、敵星体は、メテオラは、「蒼星二号」はタキオン粒子の光に蝕まれ、宇宙の塵へと消えてゆくのだった。



## 95. 魔法少女と新たなる危機

「おいおい、あつげねえな……本当にこれで終わりなのか？」

航宙巡洋艦「羽黒」の艦橋から状況を観測していたアリスは、タキオン粒子砲の威力に驚愕し、引きつった笑いを浮かべながらそんな皮肉を口にする。

かつて結衣たちが「赫星一号」を相手取った時には、旧式艦である「山城」のタキオン粒子砲と、結衣の必殺魔法であるテストメントブラスターの二段構えでようやく破砕に成功していたが、二連発で十六門という砲口からタキオン粒子砲が放たればこうもなろうという結果は、ある意味当然のことだった。

念のためにとオケアノス級や主力級から出撃していた呪術甲冑隊が、ちようど巡洋艦隊の真ん前に陣取っていたものの、その出番もどうやらないまま終わりそうだ。

しかし、こういう時に限って、気が緩んだ時に限って死神というものはけたけたと笑いを上げながらやってくる。

「全員気を抜くな！ 敵星体反応を探索、念のためにタキオン粒子砲第三射までの時間を計測しておけ！」

「はっ！ 敵星体反応の探索及び、タキオン粒子砲第三射までの時間を計測いたします

！」

それを理解していたからこそ、東山は険しい顔つきで部下へと指示を下したのだが、結果として彼の行動は間違っていないなかったことになる。

東山の指揮する「オケアノス」が完膚なきまでに破碎し、欠片としての活動すらままならないほどに打ち砕かれた「蒼星二号」の周囲へとリーダーを向けた、その時だった。「敵星体反応増大！……これは……五つ！ 超巨大敵星体反応が五つ、空間転移してきます！」

煌々と瞬く光を纏いながら、宇宙を裂いて「何か」が、地球近海までワープアウトしてきたのだ。

馬鹿な、と呻き声を上げるのは、今度は東山たちの番だった。

そこに現れたものは、「赫星一号」や「蒼星二号」と同等の質量を持つ、五つの彗星。橙、黄、緑、藍、紫の色、撃ち落とした二つと合わせて虹の七色を形成する彗星が、何の前触れもなく飛来したのだ。

タキオン粒子砲は、二連発までではできても、三発目までのチャージには時間がかかる。星屑のように宇宙を埋め尽くす無数の敵星体を引き連れたエリユシオンの巫女たちは、傲り高ぶった地球人が狼狽えるのを見ても、眉一つ動かさずことはない。

羽虫が狼狽したところで、毒の煙に悶え苦しんだところで、何かそこに感情を持つ者

がいるだろうか。

あるいはそういう人間もいるのかもしれないが、エリユシオンの巫女にとっては、創造主にとってそれは、感情を動かすに値しないことだった。

『メテオラが討ち倒された今、我らもまた禁忌へ禁忌をもって報復すべきだと、スピカは提案する』

『ステラは同意する』

『アステールも同じく』

『コメットも同意する』

『ミーティア、同意します』

『……スティアも、同意する……』

降臨した五つの彗星のコントロールルームにそれぞれ立つ六人の巫女は、口々に、橙色の星を操るスピカと名乗った女性が口にした言葉に同意を示す。

その様子はオープンチャンネルで地球艦隊へも通達されていたが、タキオン粒子砲の発射までの残り時間は、その「禁忌をもつての報復」とやらに間に合わないことは明白だった。

「スティアっ！」

「馬鹿野郎、落ち着きやがれ！」

スピカと共にスティアが橙色の彗星に乗り合わせていることを確認した結衣はブリッジから飛び出そうとしたものの、アリスに肩を掴まれる形で制止される。

今飛び出したところで、何かができるわけでもない。

止めてくれたアリスに内心で感謝しつつも、諏訪部はぞわぞわと己の中から湧き出てくる恐怖とでも呼ぶべきものに、何かよくないことが起こるといふ予感に突き動かされて、全艦隊へと越権行為を承知で通信を開いた。

「全艦、回頭百二十度！ 呪術甲冑隊も分散して離脱しろ！ 何があっても知らんぞ！」  
「諏訪部大佐！ 君に指揮権はない、大人しくしていたまえ！」

オケアノス級二番艦「オールト」を指揮する艦長である壮年の男性が諏訪部の越権行為を咎めるものの、既に「羽黒」と何隻かの巡洋艦、そして呪術甲冑隊は彼の命令に従っていて、隊列を乱すのを承知で分散している。

諏訪部の指示に従った人間たちもまた、造反の嫌疑をかけられるのを覚悟していたが、同時にその「禁忌をもつての報復」という言葉にいいしれない恐怖を覚えてもいたのだ。

東山も諏訪部の指示を追認するか、決めかねていたその瞬間だった。

『見よ、罪深き種よ。エリユシオンの教導を受けながらも悪しき道を突き進み続けた生命体よ、これは創造主たる我々が下す星罰の一端である。タキオン粒子砲、発射』

「いかん！ 反転180度、全艦離脱せよ——」

その一瞬が、逡巡が命の行方を分ける結果となったことはいうまでもない。

五つの彗星、その中心に収束したタキオン粒子が砲撃となって地球艦隊へと降り注ぎ、事前に回頭し、離脱していた航宙巡洋艦を除いた全ての艦を飲み込んでいく。

力は、更なる力によって滅ぼされる。

皮肉にも東山が口にしていた言葉通りに、彼を乗せた「オケアノス」が、彼に付き従っていた「オールト」が、「オラシオン」が、人類の叡智が作り上げた艦隊がごとごとく、灰塵に帰す。

呪術回路が形成する魔力障壁もタキオン粒子砲の前には無力であり、同じ力をもって滅ぼされるといふ結末を辿った戦場に、禁忌の力を宿した艦は一隻も残らなかった。

「嘘だろ、おい……」

「残念だけど現実だよ、アタシたちは……」

あまりの出来事に愕然とするアリスの肩に手を置いて、美柑はしよぼくれた表情を浮かべる。

地球人がその切り札としていたタキオン粒子砲艦隊が全滅した以上、そして「赫星一号」、「蒼星二号」に匹敵する存在が五つも現れた以上、もはや人類に勝ち目などというものは残されていないかった。

『これが裁きだ、罪深き種よ。星罰を受け入れ、次なる播種の糧となれ』

スピカと名乗っていた女性は、これだけの殺戮にも眉一つ動かすことなく、美しいオレンジ色の瞳に鋭利な輝きを宿して、残存艦隊への無慈悲な通告を行う。

残った巡洋艦は、結衣たちが乗っている「羽黒」を含めて四隻しかない。

呪術甲冑隊も逃げ延びられた部隊はあったものの、その大半が壊滅していて、とても戦えた状況でないことは明白だった。

しかし、ここで退けば、地球の明日は確実に暗闇の中へと閉ざされてしまう。

どれだけ勝利が絶望的だとわかっていても、どれだけこの状況を覆すのが困難だとしても、まだ魔法少女は、星の守護者は生きている。

「……総員、心して聞いてくれ。これより指揮はおれが引き継ぐ。魔法少女隊と呪術甲冑隊は、敵星体の殲滅に当たれ」

諏訪部はあまりの絶望に肩を落しながらも、しかし頷れることはなく、膝をつくことはなく、全員にその命令を傳達した。

それが意味するところは決まっている。

つまるところ、特攻だ。

これがもしもただの戦争であったなら、人類同士の利害を巡る争いであったなら、その選択は愚か極まるものだっただろう。

だが、今諏訪部たちが戦っている相手は降伏を認めない、そして地球人類の殺戮に何の躊躇いも持たないエイリアンだ。

ならば、最後まで、矢尽き弓折れるまで戦い続けなければ、人類は塵殺されてしまうことだろう。

それをわかつていたからこそ、その命令がどれだけ非情なものだとしても、その責任を全て背中に負う覚悟で、諏訪部は玉砕を命じたのだ。

「わかつたぜ、司令さんよ。どの道奴らをぶっ殺さなきゃ腹の虫が収まらねえんだ、降りたい奴らは勝手に降りろ、あたしは死ぬまで戦うからな！」

そんな決定権は自分にはないことを理解していても、アリスは要約するなら「この無謀な命令を聞く必要はない」とだけ告げると、口元に獰猛な笑みを浮かべて、カタパルトへと走り出す。

確かにこの命令は無謀なもので、勝機に至っては天文学的な確率になるだろう。

それでも、自分にはまだできることが残っている。

己の「猶予」を確かめるように心臓へと手を当てながら、結衣は深く呼吸を整える。どこまでやれるかはわからない。

だが、あと一度だけならば、この魂を使い切ることで、奴らを道連れにするチャンスは残されているのだ。

奇しくも美柑も同じことを考えていたのか、結衣と視線を合わせると、迷うことなく格納庫へと、カタパルトへと走り出していく。

それは絵理も同じだった。

不可能などないと笑い飛ばせるほどの豪胆さを、魔法少女たちは持ち合わせていない。

今にも心は恐怖で潰れてしまいそうなほどに脆く、儂いものでしかない。

それでも戦おうと決めたのは、各々に譲れない理由があるからで、同時に、背にした地球の人々が捧げた祈りを背負っているからだ。

魔法少女たちは戦場へと、炎の宇宙へとその身を捧げるように走り出していく。

さながら、神話に謳われた戦乙女のように、恐怖を押し殺して、勇気を振り絞って、戦いのフィールドへと上がり込むのだった。



## 96. 「魔法少女三上美柑」

戦いはまさに、地獄の様相を呈していた。

生き残った呪術甲冑隊は、宇宙を埋め尽くすほどの敵星体になんとか食らいつこうとアサルトライフルや徹甲弾を放っていたものの、何せ数が数なのだ。

いくら敵の中に変異体が混ざっていないとしても、文字通りに星々の光を遮るほどに蔓延った敵星体を相手にするには、四分の一ほどに減らされた呪術甲冑隊には荷が重すぎた。

内藤は舌打ちしつつも、なんとかこの地獄を生き延びてみせようとばかりに、両手に構えたアサルトライフルで群がるタイプ・キャンディを殲滅していく。

「おらおらおらおらア！ 来るなら来やがれ、星屑共！ こうなりや死なば諸共だー！」  
地球に置いてきた妻子のために、未来にその命を繋ぐための礎になるといえば、あるいは聞こえがいいのかもしれない。

だが、そんなものはただの欺瞞だ。

虚飾に彩られた、綺麗事ではない。

戦いによる死と犠牲は、いかなる理屈があつたとしても正当化されるべきものではない。

い。

勇敢に戦ったからなんだというのか、地球のために、国のために戦ったからなんだというのか。

「生きてなきや、始まらねえ！」

それは内藤の哲学のようなものだった。

自分が無学であることを理解していながらも、内藤は戦いの中で、数多の魔法少女たちが奇跡を起こしてきた傍らで、同時にその屍を見送り続けてきた身だ。

どれだけ綺麗な言葉に彩られたとしても、空の棺に勲章が納められ、二階級や三階級特進を果たしたとしても、死んで花実が咲くはずはない。

肩書きの類はどうでもいい。

命が意味を持つのは、生きてこそである。

人が生きていたからこそ、懸命に生きようとしていたからこそ、その死に、命が失われることに、人は意味を見出そうとするのであって、死ぬことそのものにはなんの意味もなければ、価値もないのだ。

「俺あ生き残る！ ハナつからそう決めてここにいるんだ！ 星屑共が……来るなら来やがれ、全員ぶつ殺して地獄に送ってやらあ！」

「へっ、威勢がいいなあ！ そういうの……嫌いじゃないぜ！」

アリスが加勢に現れたのは、内藤がタイプ・シヨコラータにその「爪」を、体組織が硬質化されたものを向けられながらも咆哮したその瞬間だった。

魔法星装であるアサルトライフルの弾丸に「爆破」の性質を付与することによって、アリスが放つ魔弾は小型のミサイルとでも呼ぶべきものにその性質を変じさせる。

二挺の機関銃で人類の未来を守る者同士、内藤とアリスは無言で背中を預け合いながら、押し寄せてくる敵星体にありつたけの鉛玉を叩き込んでいく。

その様はまさに銃弾の舞踏会とでも呼ぶべきもので、人類の叡智が作り出した偽の守護者と、星の意志が導いた本物の守護者は、その区別なく己の敵に苛烈な牙を突き立てる。

「やるじゃねえか、隊長さん！」

「そりやあどうもな、お姫さんよ！」

「へっ……姫なんてガラじゃねえけどな！」

お伽話のお姫様に憧れたことは一度もない。

アリスがお伽話の代わりに聞いてきたのは罵倒の言葉で、見てきたものは明日をもしれない暴力の連鎖だ。

だからこそ、自分の命だけは誰の好きにもさせないと、生きる明日は自分の手で勝ち取ってみせると、アリスは「力」に対する渴望と信仰を、いつしかその手に生きるよう

になっていた。

撃ち落としても撃ち落としてもキリがない敵星体の群れに辟易しながらも、それ以上に引き金を引き続けられていることが、命を奪われるかもしれないという状況の中でこそ生を実感できるという矛盾が、アリスを突き動かす。

しかし、所詮はどこまでいっても多勢に無勢だ。

残存する呪術甲冑隊は次々とその数を減らし、戦線に合流した絵理がメタモルブーストによつて「毒」と「薬」を撒き散らし続けても、敵の数は膨大すぎて、味方を生かすにはその範囲が及ばないと、焼け石に水だ。

しかし、そんなことは誰もが百も承知だった。

「上にも注意配んなよー」

アリスと内藤の直上から襲いかかる敵星体を両断して、美柑が戦場に合流する。

もう自らの魂に、「猶予」が残されていないことを、美柑は複製体との戦いで悟つていた。

だからこそ、どこで己の命を使えばいいのかを考えていたが、結衣が「準備」を始めている以上、それをやるなら今しかない、決意を固めて美柑は終焉への解号を口にす

る。  
「……メタモルバーン！」

かつて亜美がそうしたように、美琴がそうしたように、最後に残された一欠片の魂を星の炉に焼べて、美柑は迷うことなく、しかし確実に訪れる死への恐怖を抱きながらも、敵陣へと突撃していく。

リボルバーカノンの引き金を引く度に、無数の敵星体が消し炭になる。

直刀を振るうだけで、その「爪」を振りかざすタイプ・シヨコラータが熱したナイフでバターでも切り分けるかのように容易く両断される。

己の命を代償に、星の炉を燃やしたことで得られた力は、皮肉にも美柑を「器用貧乏」から、「全能」の魔法少女へと昇華させていたのだ。

しかし、何もしなくても魂が急速に目減りして、肉体が崩壊していく都合上、長く戦うことは、敵星体の全てを殲滅することは叶わないと、美柑にはわかっていた。

自分が戦う理由は、情性と諦めだ。

最初は魔法少女に選ばれたことを誇らしいと思う気持ちが確かにあったものの、それは戦いに続く戦いの中で目減りする一方で、自分が戦わなければ戦局は悪化して、犠牲になる人間が増えるばかりだということも、美柑は同時に理解している。

だからこそ、考えることをやめた。

ただ言われるがままに戦って、全てを仕方ないからと諦めて、自分の脆く弱い心を守り抜く。

そういうことをやってしか、戦場に立つことができないのが、三上美柑という少女の臆病さであり弱さだった。

しかし、戦場で誰もが強くあれるわけではない。

戦いの中では、癒えない傷を背負う兵士たちの方が多いのだ。

屈強な軍人ですらそうであるというのに、ただ一人の少女でしかない美柑に、超人的な忍耐力を求めるのは、酷というものだろう。

内藤は徹甲弾でタイプ・クツキーを撃ち抜きながら、若い命を燃やし尽くそうとしている美柑を一瞥する。

こんなにも若い人間から、未来のあるはずだった存在から、戦場は容易く命を奪っていく。

それを仕方ないと許容するつもりは内藤にも、アリスにもない。

「ぐああああっ！」

「お姫さん！」

三上美柑は、死に行こうとしている。ならば、その名前を、その顔を覚えておくことこそが唯一の弔いに、生者にできることになる——そう、アリスが考えた瞬間だった。

一瞬の油断が、高潔な祈りが、致命の隙を作り出す。

両足をタイプ・キャンディに食いちぎられたアリスは、苦悶の悲鳴をあげながらも、両

手にしたアサルトライフルでタイプ・キャンディを撃ち落としていた。

「やれるか、お姫さん!？」

「……わりーが、ちよいときついな……鎮痛剤がありやな……」

「……俺もほとんど弾切れだ、一度ここはあのお姫さんに任せて引き返すしかねえ」

「……ああ、わりーな、隊長……」

魔法少女は両足を食いちぎられたとしても、真空の空間に放り出されたとしても、生きていられる程度に強靱だ。

だが、生物としての人間は、それに耐えうることはできない。

アリスは魔力で無理やり「拘束」を断端に付与して血を止めると、自分たちに代わって大量の敵星体を引き受けることになった美柑へと申し訳なさげな視線を向ける。

「……大丈夫。ぼっちし託されたかんね!」

何が大丈夫なのか、どこが大丈夫なものか。

心が自棄を起こしているのを理解していながらも、美柑は笑顔の仮面の下に、惰性と諦めが導き出す、「それでも進み続ける」という選択に己を委ねて、全身に魔力の炎を鎧として纏う。

人は死んだら、どこに行くのか。

天国か、地獄か。それとも他の何処かなのか。

それは神ならぬ美柑にわかることではない。

だとしても、この命が燃え盛る限り、消え行こうとしている限り、自分もまた美琴が、亜美が、桃華が、詩織が通ってきたように、同じ道を辿っていくのだろう。

そこでまた、友達に会うことはできるだろうか。

美柑の身体を食ろうと群がったタイプ・キャンディを焼き尽くしながら、美柑はどうとう消え行こうとしている、限界に達して崩れ出した身体の全てを捧げるかのように、指を組んで宇宙に跪く。

もしも、会えたなら。

そこで会うことができたなら、何を伝えるべきだろう。

きつと、それぐらいしか希望は残されていないから。自分が託す願いは残されていないから。

そして、この命ももう、残されていないから。

美柑は死を最後の薪木として星の炉へ焼べて、ひび割れた身体から、崩れ落ちていく魂から、極大の魔力を、タキオン粒子砲に匹敵するほどの炎を放出し、敵星体を道連れに、燃え尽きていく。

「……美柑！」

「……結衣……？」



「……ありがとう……!」

どうやら「準備」は終わったらしい。

ならば、自分が戦った甲斐は、命を燃やした意味はそこにあつたのだ。

黄泉への旅路へと、その感謝を手土産に、ひび割れた喉が、唇が、言葉にならない感謝を返して、魔法少女三上美柑は、一条の焰となつて消えていく。

そこに明日を願いながら、繋がれていくことを祈りながら、若い命を、漆黒の宇宙を照らしながら、散らしてゆくのだった。

## 97. 「魔法少女アリス」

結衣が行っていた「準備」というのは、ほとんど博打のようなものだった。

魔法星装「ロンゴミアスタ」の名前を呼ぶことによりその定義を補強した上で、メタモルバーンを起動する。

その代償と結果を結衣が知らないはずはない。

メタモルバーンとは、魔法少女の終焉を示す解号であり、これを起動したが最後、その魔法少女が生きて帰ることは絶対にならないものだ。

振り返れば、自分の人生には絶望しか残されていなかったのかもしれない。

結衣は必殺の術式を構築しながら、引き延ばされていく一秒の中で、走馬灯のように己の半生を省みる。

魔法少女になりたいと、アニメの中に出てくるような強く、気高く、弱きを助ける勇敢なあの女の子たちのようになりたいと願っていた幼少期が、思えば一番幸せだったのだろう。

果たしてそのあどけない夢は叶えられることになったのだが、実態としての「魔法少女」は、地球という星に隷属する兵隊のようなものだった。

その魂を贄として、揺らぎ続ける高次元から可能性を取り出して確定させる、人理の及ばない魔法こそが魔法であり、結衣に与えられた特質は、誰かを癒すための力ではなく、何かを壊すための力ではない。

理想からかけ離れた現実を目の当たりにしても、結衣は魔法少女として戦い続けてきた。

それは、敵星体に命を奪われた両親の、妹の仇を取るために。

あるいは、もう二度と自分のような思いをするような人間が一人でも減るように。

掲げた理想と夢は高潔だった。

だが、その高潔の果てにはどこまでも地獄が広がっていて、戦いは終わることなく、今も尚犠牲を積み重ねて、人類は生き延びようと足掻いている。

3年前と今に違いがあるとするとするのなら、その犠牲に自分が含まれるかどうかということだけだ。

未練はある。やり残したこともある。

結衣はその目に照準を定めながら、たった一つこの世に残したまま逝ってしまう後悔のこことを見つめ直す。

ステイアを最後まで信じきれなかった。

ステイアから受け取ったメッセージに、何も返すことができなかった。

あの時、何処へと転移する瞬間、ステイアは確かに「さよなら」と、エリュシオンの巫女としてではなく、一人の人間として、結衣に別れを告げていたのだ。

冗談ではないと、そう思った。

まだ何も訊けていない。

まだまだ話したいことは沢山ある。

それなのにステイアは、「ステイア」としての心を最後まで手放すことなく、その宿命に——誤った文明に星罰を下すエリュシオンの巫女として、敵のところに戻っていった。

その真意を、自分はまだ計りかねている。

「……でも、これで本当にさよならだね、ステイア……」

メタモルバーンの代償で己の肉体が灰となつて崩れ落ちていくのを感じながらも、結衣は魔法星装に全ての魔力を集中し、佇む五つの彗星と、そこから次々に吐き出される敵星体、その全てにターゲットを定めた。

あの時引き金を引いてしまったことを、ステイアを最後まで信じきれなかった自分を詫びたいという気持ちに足を囚われながらも、魔法少女は、小日向結衣は、人理の守護者としての立場を選ぶ。

きつとステイアも、似たような心境だったのだろうか。

そう考えると、こんな時なのにどうしてか苦笑が込み上げてきた。

結衣の準備していた「賭け」の内容は極めてシンプルだ。

メタモルバーンを乗せたテストメントブラスターを全力で撃ち放つことで、彗星と敵星体の全てを一撃で殲滅する。

できるかどうかは、はつきりいつてわからない。

だが、この賭けに打ち勝つことしか、人類に生き残る未来は、選択肢は残されていない。

人類は、何を犠牲にしても生き延びなければならない——地球連邦政府が掲げるお題目がどこまで正しいのか、そうまでして人類に生き残る価値があるのかは、神ならぬ結衣に判断できることではない。

だが、エリユシオンの巫女たちのように、かつて生命の種を撒いたからというだけで一方的に正しさと過ちを切り分けて、裁きという名の虐殺を下すことが、間違っていることだけは、結衣にもわかる。

「お願い、『ロンゴミアスタ』、テストメントブラスター、セット……！」

タキオン粒子砲を凌駕する、原初にして最強の魔法少女が行使する「光」の魔法は、全てを灰に還す、究極の御業だ。

その力だけなら神にも匹敵する一矢は、結衣の肉体を、魂を薪にして今、漆黒の宇宙

を純白へと塗り替えるように顕現する。

『バカな……一介の星の守護者が、これだけの力を……!?!』

『……やはり、地球人類は危険だ……!?!』

魔法星装「ロンゴミニアスタ」の先端に収束した莫大な光は、果たして結衣が思い描いた通りに大多数の敵星体を、そして佇む五つの彗星級敵星体、その中心核を寸分の狂いもなく撃ち抜いていた。

しかし——それだけだった。

確かに放たれたテストアメントブラスターは、彗星級敵星体の中心核を撃ち抜いていたものの、それはタキオン粒子砲の第一射同様に、ガス帯のヴェールを取り払うだけに終わってしまったのだ。

そして、二発目を放つ「猶予」は、結衣にもう残されていない。

「……また、失敗しちやっつんだ」

魂が燃えて灰になっていく感覚に身を委ねながら、結衣は後悔に暮れて涙を流す。

あの時と同じ、桃華を犠牲にして「赫星一号」を砕いても、戦いが終わらなかつたのと同じ——結衣は、そんな後悔にただ涙を零し続け、何度も「ごめんね」と、壊れたテープレコーダーのように同じ言葉を繰り返すのだった。



「お姫さんはしくじっちゃまったか……」

「どうするよ、隊長さん？　今更諦めて、ケツまくって逃げるか？」

「へっ、そんな柄じゃねえ」

結衣の「賭け」が失敗に終わったことを見届けていながらも、「羽黒」に着艦した内藤とアリスは、一つの巨大な躯体に二人で乗り込んでいた。

77式試製呪術甲冑。78式と比べて若干大型化し、その背中にコンテナのような物を背負っているそれは、元々第三代魔法少女を「有効活用」できないかと生み出された試作品だ。

背中のコンテナに第三代魔法少女を搭載し、その魔力を本体の呪術回路と連動させることで高出力を実現するはずだったそれは、結局のところコストパフォーマンスが劣悪だったのと、魂がすり減った魔法少女を「使い捨てる」、人道に反する機体だった。

だからこそ、現存するのはこの一機だけ。

ありつただけの戦力を投入するからと持ち出されて、78式の予備がないからと内藤たちが乗り込んだだけのことだ。

「死んで花実は咲きやしねえ……でもな、黙ってはいいそうですかと殺されるほど地球

人つてのは大人しくねえんだよ、星屑ども！」

「いいねえ……鎮痛剤も効いてきたとこだ、派手に暴れようじゃねえか、隊長さんよお！」

航宙巡洋艦「羽黒」を飛び出した77式は、何か不穏な動きを見せ始めた五体の羽が生えた女神像、彗星級敵星体の本体をターゲットに据えて、両手に持ったアサルトライフルで敵星体を撃滅しながら戦場を進んでいく。

コンテナの蓋を無理やり開け放ち、座席にシートベルトで自らを縛りつけながら、アリスもまた魔法星装を構えて、女神像の一体に狙いをつける。

しかし、たった一機の秘密兵器とも呼べない試作兵器だけで、戦況が好転してくれるほど、現実には甘くない。

翠の宝玉を額に頂く女神像に接近するまで、77式を操縦する内藤の身体には深々とタイプ・シヨコロータが射出した「爪」が突き刺さり、アリスもまた同様に左腕を失っていた。

「……はは、こうなりや、できることなんて一つだけか……」

「……そうだなあ、お姫さん。だが」

「わかってらあな、笑うんだよ、こういう時は！ メタモルバーン！」

この女神像は、おそらく一つに寄り集まろうとしている。



その動きから推察したアリスは、己の魂に残された「猶予」を、「未来」を星の炉に焼べて、翠の女神像へと突撃する。

回路の容量を超える魔力が流し込まれたことで、今の77式はさしずめ、魔力の爆弾となつているようなものだ。

大量出血によつて意識が薄れゆく中でも、操縦桿を握り締めていた内藤は、死んで咲く花がないとわかつていても、アリスと共に、示し合わせたかのようにその行動へと打つて出る。

「慌てるんじゃない、けれど急いで、確実にぶち当てる……！」

「そうだけ、隊長さん……！」 アリス・ヴィクトリカはここにいる、地球人は、まだ死んじやいねえんだ……！」

「言つてくれるぜ、お姫さんよ……！」

『……何を……!?!』

翠の女神像を司るエリュシオンの巫女——アステールは、理解不能な人類の行動に動揺していた。

もはや勝機はないと決まっているのに、滅びは定められているのに、命をすり減らしてまで、使い捨ててまで無駄な抵抗を試みるその「心」を、純粋なエリュシオンの巫女は理解できない。

「逝くぜ、隊長さんよ」

「……………ああ……………お姫さん。春の梢でな」

「へっ、詩的だね……………生憎あたしは天国も地獄も信じちやいねえけどな！　くたばりやがれ、エイリアン！」

アリスは人間の意地を見せつけるかのように、創造主へ、裁定者へと中指を立てると、メタモルバーンの魔力を全て77式試製呪術甲冑の回路に捧げ、内藤の操縦に身を任せ  
る。

そして、宇宙にまた一つ、閃光が煌めく。

アリスの、内藤の命と引き換えに、一つになろうと寄り集まっていた女神像の支柱は、  
他でもない人間の意地によって、エリユシオンの巫女には永遠に理解できない感情に  
よって、打ち砕かれるのだった。

## 98. 魔法少女、朝を呼ぶ

内藤とアリスの挺身によって、五柱あった女神像は四柱までその数を減らしていたものの、総体として見るのであれば、その戦局に影響はないといっても過言ではない。

『アステールが斃れたか』

『しかし、四体の遊星兵器でも地球に星罰を下すことは可能とコメントは試算する』

『スピカも同意する』

『よって、合体のプロセスは継続される』

エリユシオンの巫女たちは同胞であるアステールの死を悼むでもなく、淡々と地球へと星罰を下すための準備として、残る四柱の女神像を文字通り一つに統合しようと試みていた。

彼女たちの試算通りに、もはや地球に抵抗できるだけの戦力は残されておらず、内藤とアリスの自爆によって取り巻きの敵星体は全滅したものの、元よりあれは数合わせでしかない。

絶望だけが、ただそこに横たわっていた。

諏訪部は、歯軋りをしながら、悠々と一つになっていく女神像を睨みつけたものの、航

宙巡洋艦「羽黒」の武装の中で、あれにダメージを与えられるようなものは存在しない。生き残った魔法少女は絵理一人で、呪術甲冑隊もはや数えるほどしか存在せず、弾薬の類も底をついている。

77式を無理に引つ張り出してきたのは、何かの契機にならないかと期待してのことだったが、たった一機の試作機が投入されただけで戦況が一変するのは、お伽話かアニメの中でだけの話だ。

誰もが絶望に暮れる中、絵理ははらはらと崩れ落ちていく結衣へとかけよって、そのほとんど亡骸と化している身体へと、懸命に治癒魔法をかけ続けていた。

「……嫌、嫌です！ 結衣さん、死なないで！」

普段の気弱な姿からは想像もできないほどに声を張り上げて、メタモルブーストが生ま出す莫大な魔力を全て「治癒」へと変換し、絵理は結衣の肉体を癒していく。

だが、それは掌で水を汲むようなものであり、指の隙間をすり抜けて、やがては全てがこぼれ落ちていくように、絵理がやっていることは結衣の肉体が崩壊するのを、遅延させているだけのことではなかった。

それは、ともすれば無駄なことなのかもしれない。

結衣の魂は今にも燃え尽きかけて、入れ物の身体をいくら修復したところで、空っぽになってしまえばそこには何の意味もないのだから。

そんなことは、絵理としても百も承知だった。

それでも、愛しい人に、大好きな人に死んでほしくないという願いをかけるのは、間違っていることなのだろうか。

癒す側から崩れていく身体に涙を零しながら、絵理は懸命に、すり減っていく結衣の命を繋ぎ止めようと、己に課された特質である治癒の魔法を注ぎ続けていた。

しかし、その間にもエリユシオンの遊星兵器は、一つになろうとしていた。

虹の七色から欠くこと三つ、四つの色を一つにすることでその姿を現した八枚羽の女神像は、いつそ神々しさを感ぜさせるほどに厳かな雰囲気を纏っている。

しかしてその実態は、地球の全てを、地球人の全てを塵殺するために作られた地獄の機械ではない。

神がこんなものであつてたまるものかと、創造主だとして、人類を一方的に裁く権利などどこにもないと憤りを抱くのは自然なことだったが、もはや人類に、その暴挙を止めるだけの力は残されていない。

絵理がメタモルバーンを使って特攻したところで、勝ち目がないのは目に見えていた。

彼女の能力はあくまでも広域殲滅に特化したものであり、単体が相手となった時は不利であるという側面を持っているからだ。

地球連邦防衛軍の総戦力は宇宙巡洋艦が総数四、呪術甲冑隊が総数二十、そして魔法少女が、総数一。

絶望という言葉すら生ぬるい、希望の欠片さえ見出すことのできない現実の前にある者は打ちひしがれ、ある者は神へと祈りを捧げ、ある者は諦めきれずに悔し涙を堪えて歯を食い縛る。

『人類よ、我ら創造主を前に数々の暴挙を働いたこと、そしてその互いに互いを食い合うことでしか進めない愚かしさ、全てが星罰に値する』

その声は、スティアを含めた五人の巫女のもが一纏めにされたような響きをもつて、諏訪部たちへと訴えかけてくる。

星罰。

要するに、エリユシオンの民とやらは地球人の遠い祖先であり、この星に人間が生まれるための条件を整えたのにもかかわらず、人類が愚行を繰り返すから、全てを殺すことでその償いとする、ということなのだろう。

播種と教導を司ると宣っていたように、もしかすれば過去の地球にもエリユシオンの民は現れていて、その時の伝説が神話として残されていたのかもしれない。

だが、今更それがわかったところで何になるというのだろうか。

諏訪部は唇を血が出るまで噛みしめながら、八枚羽の女神を睨みつける。

——それでも。

それでも、諦めなかった者の下に、奇跡というものは訪れる。

絵理が肉体の崩壊を懸命に食い止めていたことよって、薄れかけていた結衣の意識は、徐々に鮮明さを取り戻していた。

「……絵、理……」

「……っ、結衣さん……!」

「……ありがと……絵理……聞こえる……今なら、きつと、皆の声が……」

「結衣、さん……?」

茫洋とした意識の中で結衣が讒言のように呟いていた言葉の意味を、絵理は理解できなかった。

だが、それとは対照的に、結衣は、ほとんどその肉体が空っぽになった状態で高次元と接続していたこともあって、文字通りに「全て」の声を聞いていたのだ。

高次元とは揺らぎの世界であり、不確定な可能性の全てを内包する巨大にして観測不可能な、魂が座す領域のようなものだった。

そして、魔法少女とは「星の悲鳴」を、地球が上げた叫びを聞いたことよってその魂を高次元に接続することができる存在だ。

だが、魂とは元来、一つの体に一つしか収まらないように、そう設計されている。

故に、今の結衣の状態はイレギュラーそのものだといつてもいい。

ほとんど空っぽになった肉体に、高次元を通していくつもの「声」が、魂があげる叫びが流れ込むことで、星そのものの意思が、人類の総体としての意思が、生者と死者の区別なく、結衣の身体という器の中に注ぎ込まれる。

——頑張れ、魔法少女。

——負けないで、魔法少女。

——俺たちの、私たちの地球を、守って。

それはともすれば身勝手な願いであり、呪いなのかもしれない。

力を持たない者にできることは、ただ、突きつけられた理不尽に抗う力を持つ者に対して祈りを捧げることだけだ。

こうあつてほしい。こうであつてほしい。

願いとは理想の押し付けであり、自分の思い描く筋書きを他人に通そうとする行為ではないのかもしれない。

だが、祈りは、願いは、他者を縛る呪いでありながら、時にそれは表裏一体の祝福へと姿を変える。

宇宙空間に横たわっていた身を起こし、結衣はかつてないほどの魔力を宿す魔法星装を手にすると、それを迷うことなく、八枚羽の女神へと向けた。



聞こえたのだ。

無数の声が、祈りが自分の中に雪崩れ込んでくる中でたった一つ、特別なものが、大切な声が、忘れることのできないその愛しい響きが、結衣には確かに届いていたのだ。

——お願い。スティアを、撃つて。

それは「エリユシオンの巫女」としてではなく、「スティア」という個人が、人間が、結衣へと託した祈りの証だった。

その福音を胸に抱きながら、結衣はたった一つ、今度はその願いと祈りを、信じることを手放してしまわないようにと抱きしめながら、地球人類全ての祈りを、地球という星に残された全てのリソースを魔力に変換して、額の宝玉にエネルギーを収束し始めた八枚羽の女神へと撃ち放つ。

「……キラエライト・ノヴァー！」

光あれ。祝福あれ。

始まりにあつた言葉が力となって、奇跡となって、全てを浄化するように、星々を塗り替えるように轟き渡る。

『馬鹿な……そんな、馬鹿なああああつ?!』

美柑とアリスの挺身。絵理の献身。そして、捧げられた人々の祈り。何か一つでも欠けていたら、この答えには辿りつかないだろう。

そして、この結末は、エリユシオンの巫女であれども想像できなかったらしい。

陳腐な断末魔と共に、神々しさを剥ぎ取られ、八枚羽の女神は塵芥へと堕ちていく。

言葉通りの星の守護者、地球そのものに代わる形で、あらゆる魂を器と化したその身一つに注ぎ込むことで星罰を退けた結衣は、終わりのない夜を、星々が作り上げた悪夢を退けて、この星に未来という名の夜明けを、朝を呼び込んでいた。

そうして、少女は夜明けを見る。

眩しさに目を瞑っていた絵理が目を開けば、そこにはもう、地球を脅かしていた敵星体の姿はどこにもない。

人類は、勝利したのだ。

しかし、同時にその立役者の、結衣の姿も、この物質世界からは、消失していたのであった。

## 99. 魔法少女と明日への約束

「……………ん、うう……………」

結衣が重たい身体を引きずって目を開けたその場所には、文字通りに何も無い。

世界の全てがまっさらには漂白されたかのように当てもない白だけが無限に広がっているその空間が、少なくとも現実ではないということだけは、すぐに理解できた。

「……………私、死んだのかな」

眩きながら右手を何度か開閉してみるが、そこには確かな感触があつて、血液が身体の中を巡っている感覚も残されている。

死んだというにしては生々しく、生きているというにしては現実感がない。

結局自分はどうなったのかと、途方に暮れながら結衣はただ、鉛のように重い身体を動かして、この全てが白く漂白された空間を彷徨い歩く。

びちよん、と、足を踏み出す度に、結衣は何か、雫が零れ落ちるような音を聞く。

それは自分の身体から零れ落ちているのか、記憶から零れ落ちているのか判然としなかったものの、一つ一つ、跳ねる滴がまっさらな空間に浮かび上がる度に、結衣はそこに懐かしい景色を見る。

「……お父さん、お母さん、芽衣……」

シャボン玉のように形を変えた雫の中では、かつて、敵星体が地球に現れるまでに過ごしていた親子での他愛もない時間が切り取られていた。

そうしてふわふわと浮かぶ泡沫に触れようと結衣は手を伸ばしたが、それはひとときの楽しみにも似た泡のように、ひとときの喜びにも似た水のように、指の隙間をすり抜けてしまう。

覚えている。

あれは確か、庭でバーベキューをした時の記憶だったはずだ。

しかし、それを掴むことは、選び取ることが結衣にはできない。

釈然としない感情を抱えたまま歩き続ければ、その度に記憶の泡沫が宙に漂って、静謐な空間に、どこかから聞こえるピアノの音だけが響き渡る。

初めて魔法少女になった時の記憶。

3年前の戦いで鉄火場に立っていた時の記憶。

浮かびあがる泡沫の中には、今の「小日向結衣」を構成する記憶が封じられていたが、しばらく歩いていると、それも様子が変わってくる。

例えば、敵星体がこの地球に現れることなく大人になって、「ステイア」と名付けた子猫を拾った時の記憶。

結衣はその記憶に覚えなどなかった。

だが、それを結衣は知っていた。

記憶になくとも、あり得ないことであつたとしても、それは確実に存在していた未来の一つなのだ、結衣は直感的にそう理解する。

「そう、ここに全部があるけど、全部がない……」

声が聞こえたのは、どれくらい歩いていたかわからないほどに、重たい足を引きずりながら、少なくとも新星暦の世界を生きる結衣には存在しない記憶の森を彷徨っていた、その時だった。

シャボン玉の中に浮かぶ数々の記憶の終着点にして、自分を誘うかのように響き続いていた美しく、哀切なピアノの旋律。その原点となる場所に、彼女は——ステイアは、佇んでいた。

「……ステイア……」

これが夢なのか現実なのか、いよいよ結衣にはわからなくなってきたが、少なくとも目の前にいるステイアは本物であると、彼女の虹のプリズムを宿す瞳が、そしてこの世界そのものが、結衣にそう語りかけてくる。

全部があるけど、全部がない。

つまりはどういうことなのか、と結衣が頭上に疑問を浮かべれば、世界がそれを教え

てくれる。

ふわり、と目の前を漂ったシャボン玉の中には、結衣と芽衣、そして養子として迎えられたスティアが三人で、他愛もない会話に興じている情景が映っていた。

それは身に覚えのない記憶だが、その可能性を——「あつたかもしれない未来」という空想を、結衣はよく知っている。

「空想じゃない。結衣……ここにはね、あつたかもしれない、全部の可能性がある」

「……パラレルワールド、つてこと？」

「結衣たちの言い方だと、きつとそうなる……世界は無数に分枝して、無数に存在し続けている」

「……そっか」

その無数の世界の中で、自分が生まれたのは相当に運が悪いところだったのだろう。

結衣は漂う泡沫の一つ一つを見つめながら、それでも生きていらただけマシなのかもしれないと、芽衣を庇って自分が死んだ記憶に触れる。

「……ごめんね、スティア」

「結衣……？ どうして、謝るの？」

「……私は、スティアを最後まで信じられなかったから。あの時、スティアは……私に、さよならって、エリュシオンの巫女じゃなくて、スティアとして言ってくれたのに、私

は……」

引き金を、引いてしまった。最後まで、ステイアを信じられなかった。

だから、ごめんね、と結衣は頭を下げる。

もしも次、ステイアに会うことがあったらそうしよう決めていたことだった。

まさかその再会が、この奇妙な空間で果たされるとは、思ってもいなかったが。

「……ううん、結衣。謝らなくちゃいけないのは、ステイアの方。ステイアは……それが使命だったから、多くの人の命を奪った」

「……ステイア」

「だからね、結衣が撃つたのは……悪くない。エリユシオンの巫女は、傲慢だから」

文明の良し悪しを、命の良し悪しを一方的に切り分けて、悪しきと判断した者を殺し続けることで、浄化は果たされる。

かつて銀河に存在していた、星史文明エリユシオンは地球人と同様に、互いに憎み合い、争い続けてきたことで衰退していった。

だからこそ、生き残った「巫女」のオリジナルに相当する存在は、その誤りを疑うことなく信じてしまったのだろう。

銀河に種を撒き続け、いつか善なる者が生まれてくるまで、悪しき芽を積み続ける。

その傲慢なやり方を、何代も何代も自己複製と、敵星体を生み出し続ける遊星兵器と

いう終末装置に頼ることで重ね続けてきたのが、星史文明エリュシオンの末路だった。とうとうと語るステイアの声音には申し訳なさと、その愚行を恥じ入る心が滲んでい

る。結衣は星史文明エリュシオンとやらの事情を知らない。

それでも、ステイアもまた自分と同じように、一つの星にその運命を狂わされた存在なのだと理解することはできた。

言葉もなく、細い身体を抱きしめて、結衣は互いの過ちに、そして結衣が結衣である限り、ステイアがステイアである限り、避けては通れなかったこの世界の運命に涙を零す。

「……ステイア……ごめんね……ステイア……」

「ううん、結衣……いい……だって、結衣のおかげで……ステイアは、『私』じゃなくて、『ステイア』になれたから」

僅かだったかもしれない。

触れたぬくもりも、交わした言葉も、共にした時間も。

全てが、ごく僅かなものでしかなかったのにもかかわらず、ステイアはまるでそれが天からの福音であるかのように、涙を滲ませた笑顔で抱きしめる。

「……ステイアは、ステイアだよ」



「うん、結衣……ステイアは、ステイアになれた」

この真つ白な世界には、あらゆる可能性が漂っているが、それを観測できても、それを確定させることはできない。

結衣はそれを、ステイアを通して本能的に理解する。

結衣たちに残されているのは、あくまでも互いに引き金を引き合った、赫星戦役から連なる地獄のような、今生きている可能性だけだ。

それでも、結衣はその可能性を、数多の犠牲の上に成り立った世界を認めて、ステイアのぬくもりに縋るのではなく、互いに互いをあたため合うかのように抱き合っていた。

「きつと、この世界じゃなかったら……私とステイアは、私とステイアじゃなくなってたんだね」

「うん……この世界だから、ステイアは、ステイアになれた。結衣と出会えた」

だから、この真つ白な世界で二人きりの最期を迎えるのも悪くないと、結衣は、疲れ切った身体を横たえようとする。

もう目を閉じて、楽になってしまいたい。

戦うだけ戦って、最後にはステイアともちゃんと出会えて、そして、ずっと謝りたかったことを話せたのだ。

ならばもう、思い残すことは何も無い。

結衣がそんな想いと共に目を伏せようとした、その時だった。

一つの魔力反応を、魔法少女として結衣は感知する。

それは、間違いなくステイアから発せられているものだった。

「……ステイア？ 何を……」

「結衣……結衣は、ステイアのわがままを、聞いてくれる？」

「わがまま……？ ねえ、ステイア、何を……」

「……ステイアは、許されなかったことをした。それはわかっている……だから、ステイアはあ  
るべきところに還る。でも、結衣はそうじゃない」

ステイアは自身の背後で、先ほどまでは奏者もいないのに鳴り響いていたピアノがあ  
つた場所に渦を巻く混沌を指差して、静かに微笑んだ。

それが何であるのかを結衣は理解できなくとも、そこに行ってしまうえば、二度と戻れ  
なくなることにぐらいは、直感的にわかっていた。

「ここは高次元の世界……結衣はあの時、本当は一つしか身体に収まらない魂をいくつ  
も収めていたから、現実世界から弾き出されてこの世界に飛ばされてきた」

「……ねえ、ステイア。待って……私は……」

「……わかつてる。でもね……結衣は、ステイアに明日をくれた……ステイアが『私』

じゃなくて、『スティア』として生きる時間をくれた、だから——結衣には生きてほしい。スティアの生きることができない、明日を。スティアがいっぱい奪ってきた、明日を」だから、これはスティアの魔法。

スティアはそう告げると、涙を眦に滲ませながら、「赫星一号」として吸収し続けてきた魔力の全てを一つの法として、結衣を高次元の世界から、現実世界へと送り返す。

「待つて、スティア——！」

「さよなら、結衣……」

ありがとう。また、明日。

その言葉をお別れに、結衣は高次元の世界から弾き出されて、あるべき現実へと解けていく。

また、明日。その小さな約束を、叶うことのない言葉を抱いて、結衣は、魔法少女は、現実へと帰還していくのだった。

## 100 「魔法少女、クビになりました」(終)

「魔法少女、クビになりました」

結衣が現実世界へと帰還したのは、八枚羽の女神が討ち滅ぼされてから五日後のことだった。

突然、旧試製呪術回路が安置されていた場所に結衣が現れたことで、既に空の棺を送り出してしまった軍部は騒然としていたものの、その帰還自体は概ね喜びと共に迎えられたといってもいい。

しかし、メタモルバーンを使ったことで本来は燃え尽きるはずだった僅かな魂の残滓しか持たない結衣の肉体は廃人同然に衰弱し、自力では立つて歩くことも難しいほどに弱り切っていた。

しばらく「ラボラトリー」での集中治療を受けることで容態は安定したものの、それでも衰弱した身体が元に戻ることはない。

目は霞み、車椅子に乗せられた状態で、絵理に介助される形で、結衣は諏訪部の待つ司令室に足を踏み入れていた。

「君が帰ってきた時は驚かされたよ、小日向結衣」

「……葬儀、終わってたんですよね」

「ああ……まあ、今は色々あつててんやわんやしてるが、それも上層部のやることだ。おれにはもう関係なくてね」

「……関係ない、ですか？」

「後日、伍長に降格の上、僻地への異動……それが敵を抱えていたことと越権行為に対する処罰つてわけだ。君たちが世界を救ってくれたおかげで、銃殺は免れたがね」

諏訪部は冗談めかして肩を竦める。

処分自体の内容は妥当なのかそうでないかはわからないが、少なくとも彼が銃殺にはならなかったことに安堵して、結衣は小さくほっ、と息をついた。

そして、自分が病み上がりなのにもかかわらず呼び出されているのは、諏訪部に大佐としての、マジカル・ユニットの指揮官としての最後の仕事が残されていたからなのだろう。

「まあ、なんだ……小日向結衣、並びに水瀬絵理。君たちも軍籍抹消という処分が下される形になった。世界を救った英雄に対しては申し訳ない限りだが、軍の事情なんですね」

世界を救った功績と、ステイアという敵の本体とでも呼ぶべき存在を抱え込んできたことに対する罰。それらを天秤にかけて、なるべく穏当に済ませようとしたのが、この結果であることはなんとなく推察できた。

「帰る家はおれの最後の権限で用意してある。君と……ステイアが住んでいた家だ」

「……ありがとうございます、大佐」

「なに……おれの力だけじゃない。誰だつて、本音で言えば英雄をぞんざいに扱いたくはないものなのさ」

軍部内の立場でいえば権力を行使できるどころか、落ち目もいいところだった彼がそれだけのことをできたのにも、軍部の中に結衣や絵理、生き残った、たつた二人の魔法少女に対して少なからず敬意を払ってくれる人間がいたからだというのは、恐らく真実なのだろう。

それでも、罰せられるべきことは罰せられる。

その結果として二人の軍籍が剥奪されるというのは、穏当なものだといえるのだろう。

——しかし。

「また、クビになっちゃいましたね」

「はは……こいつは手厳しいな。だがまあ、そうだ……もう、本当に戦う必要なんてなくなるんだ。君たちがこんなところにいる理由もないだろう」

あれから、新たに敵星体反応が確認されたという話もなければ、八枚羽の女神は3年前とは異なり、キリエライト・ノヴァによつて跡形となく消し飛んでいたため、その破

片が地球に到着したということもない。

つまり、人類は今度こそ、勝利を、平和をその手に収めたのだ。

それでも、きつと全てが丸く収まるわけではない。

3年前と同じように上流階級と下層市民の間には対立の火種が燻っているだけでなく、焦土となった地上に再び文明の火を灯すのにも、また時間を要することだろう。

こうして王子様とお姫様は結ばれて、いつまでも仲睦まじく暮らしました、で終わる話は現実には存在しないと、きつと誰もがわかっている。

それでも、敵星体の恐怖から人類が解き放たれたというのは、大いなる前進といっても過言ではないだろう。

そんな考えを抱くと共に、結衣の車椅子を押しながら、絵理はぺこりと諏訪部に頭を下げて、司令室を後にする。

「……世界、平和に……なったんでしょうか……」

「……どうだろう。正直わかんないや」

無我夢中だった。

戦っていた時も、スティアと束の間の再開を果たした時も、結衣の頭の中は世界のことよりも自分のことばかりで埋め尽くされていて、そこに考えを巡らせる余裕など、どこにもなかったのだ。

だが、人間というのは得てしてそういう生き物である。

1000年先に残すべき未来のことを憂い、考えられる人間も中にはいるのかもしれない。

だが、誰もが明日をもしれない世界の中で必死に足掻き、もがき続けているのが実情だ。

それは軍人であつても民間人であつても、魔法少女であつても変わらず、それでも明日が来るようにと必死に願いながら日々を送ってきたのが、結衣にとつては昨日までの——絵理たちにとつては数日前までの世界の在り方だった。

晴れてそこから解き放たれて、今日からは在りし日の日常が帰ってきますといわれても、物事というのは単純ではない。

平和の中でもきつと、明日をもしれない生き方を選ばざるを得ない人々は大勢いて、そこにはいくつもの悲しみや苦しみが横たわっていることだろう。

——だが。

結衣は深呼吸をすると、霞んだ目で窓の外に覗く青空を仰ぎ見る。

輪郭がぼやけて景色のほとんどはよく見えなくても、その青は、どこまでも晴れ渡る蒼穹は、こんなにも鮮やかに、朽ち行くのを待つこの身体にも映し出せる。

「私、きつと長くはないと思うんだ」



「……つ、結衣さん……」

「絵理が魔法をかけてくれたのは、気を失ってる時でもなんとなくわかったけど……やっぱり、魂がもう底をついてるみたいなんだ」

自分の現状を振り返ってみれば、生き残ったところで報われるようなものではない、悲惨なものだということが改めてよくわかると、結衣は苦笑した。

前代未聞の、高次元からの帰還を果たしたこともきつと無関係ではないのだろう。

それでも、自分は。

「……それでも、私は生きるよ、絵理」

「結衣さん……」

「……ステイアが生きたかった明日を、ステイアが私にくれた明日を……この世界を生きて、確かめてみたいんだ」

この命が尽きる、その瞬間まで。

それがわがままであると理解していながらも、結衣は一人の少女として、「魔法少女」の宿命から解き放たれた年相応の笑顔で、満面に浮かべてみせる。

上手く笑えなかったのは、昨日までのこと。

だから、今日からは笑って生きようと、結衣はそう決意する。

どんな最期が待ってようと、どれほど余命が残されているかわからなくとも。

「わかりました……その、わたしも……あの……お手伝いしても、いいですか……？」

絵理は結衣の微笑みからその心を悟ったのか、眈に涙を滲ませながらも覚悟を決めたように、その巡礼へ、結衣が最期に向かうための旅路の供を願い出た。

「……ありがとう。私、一人じゃ歩けないから」

「ううん、いいんです……わたしにとって、結衣さんが生きていてくれたことが……何よりも、幸せですから……」

「あはは、そっか……ありがとう、絵理」

「……わたしも、ありがとうございます、結衣さん……」

また、明日。

来るかどうかもわからない時間に曖昧な約束を結んで、二人はその方角へと歩き出していく。

誰かが生きたいと願った明日である今日を目一杯に生き抜いて、そうして訪れるかどうかともわからない明日が今日になったその時は、同じように、精一杯の時間を生きて。

人生とはその繰り返しなのかもしれないが、結衣はもう、そこに虚しさを感じることはない。

「そうだよね、ステイア……また、明日」

天国なんて、あるのかどうかわからない。

地獄のような世界ではあつたけれど、ここは地獄そのものではない。

だから、その先で会えるのかもわからない。

それでも、いつか、春の梢で。

また明日、という約束を、信じることを明かりにして、魔法少女ではなく、ただの、小日向結衣という一人の少女は、明日への道を歩んでゆくのだった。